

IS学園で非日常

和希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どんな学校の学年でも一人はいるような、変人と言われるそんな人間を送る物語。原作準拠で進みますが、途中で逸脱するかも。ハーレムは無しですがメインヒロインの一人ぐらいとくつつく予定。最初は原作のセリフもそこそこのせてますが、途中から原作のセリフ長いのかはカットしていくので、原作読んでね。

目次

OP	二人だけ男	1
一話	お嬢様、襲来	10
二話	協力者	21
三話	決闘	34
四話	大和	46
五話	決着	58
六話	転校生、襲来	66
七話	約束	77
八話	希と鈴	89
九話	敵機襲来	100
九・五話	おしとやかに行こう	113
十話	転校生、またもや襲来	121
十一話	転校生との交流	132
十二話	昼の昼食会	141
十三話	転校生の秘密	153
十三・五話	小話	164
十四話	希とラウラ	170
十五話	一夏とラウラ	183
十六話	決勝戦	194
十七話	シャルロットとラウラ	205
十八話	真相	220
十九話	日常	232
二十話	平穏な日々	242
二十一話	ショッピングモール	254

二十二話	ショッピングの続き	265
主人公スベックとその他		278
二十三話	海	281
二十四話	嵐の前触れ	292
二十五話	夜の密会。そして	302
二十六話	決別	313
二十七話	悪夢の国の福音	327
二十八話	敗退と再挑戦	340
二十九話	福音の波紋と傷跡	349
三十話	ストーキング	366
三十一話	重圧	379
三十二話	希と鈴の微妙な関係	392
三十三話	夏休みの始まり	406
三十四話	それぞれの決着	415
三十五話	遠くても、近い	423
三十六話	二人の帰還	434
三十七話	少しずつだけど、成長する	443
三十八話	プライベートな質問	453
三十九話	息抜き	461
四十話	誤解	471
四十一話	ある日の休日	479
四十二話	閑話	490
四十三話	家庭	501
四十四話	希の家族	510
四十五話	一夏の成長	520

4
6
話
一
夏
の
家

opp 二人だけ男

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

目の前で上から読んでも下から読んでも山田麻耶先生が記念すべき高校生活初めてのSHRの始まりをつける。ちなみに山田麻耶先生は背は低い胸は大きいといえる。でも基本どうでもいい。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

返事は一人だけの拍手。ちなみに出してるのは俺。このいたたまれない空気をどうかしたくて、勇気と音を出した。でも変わらない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ところで、君たちの高校、中学は男女混合の名簿順だろうか？ それとも別々？ 最近を生きている自分は小学校、中学校共に男女別々だった。男1から15、女16から30といった感じに。むしろ混合の方が今やまれと聞く。ちなみに、この高校はその稀にあてはまる。

なぜなら男が俺ともう一人しかないからさ！

ちなみにつらくは無い。珍しさから視線が集中するんじゃないか？ それはもう一人のことを軽く見ている。俺の親友にしてフラグ建築士一級、フラグハンター、歩くフラグメイカーなど、級友から恐れられ、畏怖され、妬まれ、憧れられた織斑一夏の事を舐めている。彼にかかればクラスの女子の視線を全て集めることなど朝飯前だ。……俺？ 中学時代からの親友として最初は年頃の男として軽く妬んだけど、過ぎたるは猶及ばざるが如し。一ヶ月無く、妬みは哀れみになった。あの猛獣の群れの中に放り込まれている感はなんというか。いつからか軽めの女性恐怖症になってしまっているのかと思ってしまうほど。ビクッと反応したりする。一夏の周りは肉食獣よりタチ悪いのが多すぎ。

「織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

隣で一夏が間の抜けた声を出す。何の因果か、一番前、最前列に二人で並んだ。このクラスはなんでか知らないけど席が名前順で並ん

でいない。一夏は“お”で始まって俺は“し”で始まるのにその左だし。まっ、制服も改造が許されてるし、ある部分以外は緩いのだろうか。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？あの――」

山田先生がわあわあ言い出す。このご時世に珍しく引つ込み思案な人。ましてこの学園の教師なら、威張り腐ってもおかしくないと思うけど。そこらの幼女ですら威張り腐ってる事もあるのに。珍しい。あつ、嘘。威張り散らすのは実際にはそこまで多くないな。

「いや、あの、そんなに謝らなくても――」

いつもならさわやかスマイルできるのにさすがにこのクラスの状況に戸惑い気味である。仕方ないよね。この状況。周りで俺以外全員女子。一時的なものならまだしも、後続の男たちが続かなければ三年間これだ。俺たちが慣れるために一緒のクラスと配慮してくれたんだろうが、一年後二年後、この学園に慣れだしたらクラスバラバラの可能性もある。

一夏は必死に目を窓際に向ける。何があるかという、立派なポーターの大和撫子を凝視していた。だが彼女はぷいっと顔を向ける。小学校時代の知り合いか何かか？ 中学までの交友関係は大体把握している。次に一夏は俺に目配せする。すかさず俺は用意しておいたプリントを渡す。

「サンキュ」

小さく、俺だけに聞こえるように言った。

「えー。自分の名前は織斑一夏です。好きな食べ物は家庭的な料理、特技は家事全般。趣味は友達の影響でアニメとか小説とかを少し。それと女子高生の下着観察、一年間よろ……おかしいだろ!! これ!!」

「よっ！ ナイスのり突っ込み！」

ヨツと両手をパラパラお殿様に向かってのごとく動かす。クラスの皆も今ので冗談と分かってくれたようで雰囲気は和らいだようだ。良かった良かった。コイツなら変態発言しても許されるとは思うが。

俺？ 警察にお世話。

「ああもう！お前つて奴は！」

「アフターケアはあるから全部読め」

すっかり 女子高生について以外は大體あつてます！一年間よろしくお願いします。好みの女性ははしっかりした人です と付け加えてある。

「……女子高生について以外は大體あつてます！一年間よろしくお願いします。好みの女性は……だから違う！」

笑い声が漏れながらパチパチと拍手が鳴った。場の空気がかなり和んだため、次からは皆ほどほど、前よりノリ良く自己紹介を進めた。なんとというか個人的な名前が多い気がしないでもない。そしてどうとう俺の番になった。

「では次に」

椅子の音をなるべく立てずに立ち、音を立てずにしまい、振り向いた。コホンと咳をならし、眼を真っ直ぐ向けて

「清水希^{しみずのぞみ}。中学のときの一夏の同級生。趣味は読書やアニメ、特化型機体には憧れるけど使うならバランスタイプ、話の合いそうな人はぜひ声を。一年間よろしく」

最後に少しだけ眼を笑わせて言う。皆からぱちぱちとそれなりの拍手が巻き起こった。

さて、楽しい学園生活が始まる。

ああ、そうだ。どうしてこうなったか説明してなかった。

ちようど数ヶ月前、二月の真っ只中で中学三年生するとき。

「何で一番近い高校の、その試験のために四駅乗らなきゃいけないんだ。しかも今日、超寒いじゃねえーか……」

「俺のコート貸そうか？」

自慢のコート（ベンチコート）を見せびらかす。使い続けて五年。ただし耐寒性能は十分。フードをかぶって、上からネックウオーマー

をかぶせれば露出は眼と手だけ。ただし学生以外がこの格好をしてたら通報される確率が高まるのでお勧めしない。子の装備だと学生と証明するのは学生鞄だけだけど。

「本当に貸してくれるのか？」

「冗談……といたいけど、別にかまわんよ？」

「……やめとく」

だよね。お前はいい奴だし。第一、男同士で上着の貸し借りなんて、薄い本を厚くすることにしかない。

「まっ、そろそろ試験会場に……あれか」

「だな」

受ける学園は私立藍越学園。俺は公立の滑り止め。でも一夏は家庭の事情でこれが本命一本だった。勉強自体は俺のほうが出る……と言つても仕方ない。一夏は家事をほぼ全般こなさないといけなかったからだ。記憶力とかテストの出来だけでいえば互角だろうか。悪知恵とかなら負ける気はしないが。

「いつまでも千冬姉の世話になつてるわけにもいかないしなあ……」

俺は何だかんだで家事を手伝う方だと思うが（皿洗いや風呂掃除、ごみ捨てぐらいはね）、コイツにはかなわない。料理洗濯掃除etc、家事全てを行つていと言つていい。だがそれでも生活を姉に養ってもらつていふというのは、かなりの重い目があるようだ。今のセリフ通り。そりゃ親にですら養ってもらうのは頭が上がらないのに、姉ならなおさら。

「やっぱ中は温かいな。さて、どっち」

地図はあるけど迷路みたいだ。二人でさまよいながら……

「しようがない。こうなったら人に頼むしかない」

「中三になつて!?!」

マジかいというような顔を向ける。

「お前は人生賭けてるのにそんな事言つてられるのか？ 少しでも早めに会場に着けばそれだけ勉強できて、合格率をさらに上げれるんだぞ？」

この世界に100%なんてものはない。100%の保障をしてく

れるものがあるなら崇拜してやる。あ、 $1+1$ は 2 とかは 100% だ、とかの突っ込みやめてね。哲学者に言わせれば違ってくるかもしれないけど。

「……だな。でも、誰も居ないな」

「なら適当にドア開けて聞くまでだ」

ばたんとドアを開けてちようど適当そうな人……じゃないな。

「あー、君、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押しているから急いでね」

かなり忙しそうだったので返事もせずこっちもさっさと動く。

……？ 着替え？ 着替えて何だ？ 専門？ 特殊資格？ 受験には関係ないと思うが。

「つておい、場所聞き忘れてるじゃないか！」

一夏が思い出したように叫んだ。

「まあね。でも今の人は無理だろ？ 聞いてくれそうに無い。もうちよつと忙しくなさそうな人は居ないか」

進んでみるとカーテンがあつた。開けると鎧のようなものが鎮座してあつた。人によつては鎧とは思わないだろうけど。でも、どちらにしる鎧なんてちやちなもんじやない。俺はこれを知ってる。誰だつて知ってる。

—— I S ——

正式名称インフィニット・ストラトス。宇宙空間での使用が可能なマルチフォーム・スーツ。製作者の意図とは違い、宇宙進出は一向に進んでいなく、もっぱら軍事利用されてるけどね。表面上はスポーツと取り繕つてるけど。一回の試合で数億つて金を使うこともある世界で最も贅沢なスポーツだ。それでいて各国の代理戦争の様相を呈している。

ただし、競技者は全員女。なぜかって？ それは簡単。このスーツの一番致命的な点。それは

男は使えない

「男は使えないんだよな、確か」

この欠点どうにかしてくれてレベルだ。とは言え、世界に数限ら

れた個数しかないので男が乗れるとしても俺が乗れるとは中々に思えないが。確率として、日本の国会議員は720人ほどいるが、日本で乗れるのは100人いるだろうか。ニミッツ級空母の艦長のが人数少ないって突っ込みは無し。将来的には艦長は増えてくし。でもIS学園の生徒とかも含めればもつと確率上がるか……？

「その通り。説明されてないけどね。でもモノホン？ ……そういやここで受験やってるって言ってたな。ラッキー」

俺は無学じゃないので、美術品とかならさわる馬鹿じゃない。だが、スポーツという名の兵器なのだ。ふれるぐらいしても問題ない。あつたら欠陥過ぎる。人が見ているのならやろうと思わないけど。せつかくだしばれないうちに。そう思ってた触ってしまった。

「!?」

キンツと金属音が頭に響く。そしてISの情報が一瞬で流れ込んできた。ありとあらゆるパラメータが数値と化し、伝わった。そして分かった。こいつは動かせる。でも

「つくー」

すぐに離れる。どうするか悩む。もしもこれで本当に乗れたら？

モルモット？ IS学園に転入？ IS学園でハーレムひやつほいとほならない俺の性格じゃ。というか優秀なIS搭乗者の近縁の人間が誘拐されたとかぼちぼち聞いたことがある。確かに乗れば珍しい生活になるが、一家離散の危機もある。と言うかそれになる。

ここで進めば波乱の人生がまず間違いなく俺を待ってる。世界で女しか動かせないはずのISを男が動かす。世界で肩身の狭い思いをしている男たちのために、多くの科学者がどうやれば動かせるようになるのか研究しようと俺を研究するだろうし。

だがここで引けばそれなりに穏やかな日々が俺を迎える。変化こそ無いものの、休日は散歩したり木陰の木漏れ日でゆつたり。家族と他愛の無い会話をしながら過ごすという日常が。ここで突き進めば両親にはもちろん、ばあちゃんやじいちゃんにも迷惑がかかる。

……でも、それでも俺は。それでも俺は!!

こんな非日常を待っていた。普段と違わない日常を過ごすのもい

い、でもそれを実感するなら非日常を経験するともつといい。日常はいつまでも過ごしてたら飽きるけど、非日常を挟めば実感がわくだろう。だから、行こう。

後から後悔するのかもしれない。でも、こんなチャンス逃す奴は男じゃない。だから、もう一度手を伸ばそうとして

「!?」

ISに触れた一夏が突然震えた。そしてそれで分かった。こいつも動かせるんだって。

ああ、これから楽しい事になりそうだ。

「あ、一夏の好みは知ってるよ。情報高くつくけど」

「おい！言ったこと無いぞ!？」

今までに無い黄色い歓声が上がった瞬間

「バアンツ！バアンツ！と、一瞬で二度音がなった。

『いっ!?!』

この威力、なんとまあ。くるつと後ろを振り返ると、鬼が居た。

「げえっ、関羽!?!」

もう一発となりにあたつく。無駄口叩くからだよ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「そうだぞ！ 例えあのお方でもこの人には釣り合わない！ もっと

化け物みたいな『バアンツ』ヘーい、モンゴルジョークです」

しゃべってる最中に叩くのは舌を挟んで危ないかと普通は思うか

もしれないが、この人に限ってはそんなことない。俺が舌を噛まない

0. 何秒の瞬間を正確に貫くのはわけないからだ。

一夏の実の姉（多分）。世界最強と名高い織斑千冬さんにとって。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえっ。副担任ですから」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を――」

俺は驚いた。ここで働いていることではない。なんとなく予想は付いてた。世界最強のIS乗りが一夏が心配するような職業に就く

わけがない。インターネットいじくっていれば、それなりに情報はあった。IS学園にいたりとか色々スレあったから。ともあれ、担任つてのは予想外だけど。

何がおどいたかと言うと家では結構だらしない(さらにその上にブラコン)この人が教師やつてるってこと。

バアンツ！ いたいなあもう、はい、すいませんでした。尊敬しますよ。

「きやーーーーー！千冬様、本物よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

おお、相変わらずの人気。

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

本当にここまで言うやつがいるってのが人気をあらわしている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それともなにか？私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

アメリカの大統領の名前を知らないのはいるかもしれないけど、千冬さんを知らないのは多分いないよね。

「きやあああああ!! お姉様！ もっと叱って！ 罵って!!」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡けて〜」

出来る変態が多いようだ。このクラス。それとも平均的なのだろうか。平均だとしたら千冬さんの苦勞は絶えないことだ。いつも一夏のせいで絶えることはないけど。

「で、貴様らは満足に挨拶できんのか？」

「千冬さ……織斑先生。自分はしっかり出来ましたか？」

言い終わりそうになったとき目がピクツとしたから言い直した。公私混同はしっかり避けるようだ。意外と教師やれている。仮にも世界最強、侮っちゃいけないな。

「聞かれても知らん。織斑は？」

「千冬姉、俺は――」

バアンツ！ お前俺が言い直したのに気づこうよ。

「つく！ 一夏、お前の犠牲は……ジョークです」

「で、どうだ？ ……お前でもいいぞ？」

「破廉恥なことに女子高生の下着観察が趣味と――」

「お前がだましたんだろ！」

「へいへい、すっかりやれましたよ。記念すべき一回目の自己紹介だったんでカメラで撮ってありますよ。いります？」

にやつと、目を合わせる。ちなみにISを使ってる。

「いらんが、絶対に消すな」

この人って、ほんとブラコン。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「じゃあ、世界でたった二人。男で『IS』を使えるって言うのも、それが関係して？ ……それだと清水くんはどうして？」

「その隣の人も。千冬様の異母兄な……ないよね」

さりげなくデイスられています。

「ああつ、いいなあ、代わって欲しいなあ」

美人なお姉さんは憧れるよね。でも家事全般は引き受けないといけないよ？ ……養ってもらってるから当然といえば当然か。

で、そのときちょうどチャイムがなる。IS学園―日本の日本による世界のための教育機関、決して日本の日本による日本の為の教育機関ではない―でもチャイムの音は基本同じようだった。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「イエス、ユア、ハイネス」

バシンツ！ 終わりの音が流れた。ちなみに意味は知らない。

さあ、ここからが俺の非日常にして、学園の日常が始まる。

いつかこれが日常になるだろうが。

一話 お嬢様、襲来

ふー、一時間目のIS基礎理論の授業が終わった。元々雑学、軍事方面はかなり覚えこんでISもそれなりに覚えてた上に、さらに電話帳みたいな教科書をそれなりに予習したため（させられたとも言っ）あまり問題なく付いていける。確かに分厚いけど、ポケモン150種類を一日で覚えれる奴が居るように、ゲーム感覚で覚えればそれなりに覚えれる。なにせ、カスタム無限大、動き無限大の自分だけのロボットのための知識だ。夢溢れる男なら全てをかなぐり捨てて覚えようとするだろう。IS起動して次の日には話がまとまってその次の日には引越す。とある企業で戦闘訓練したり、IS動かししたりして卒業式のみ参加。でまた企業で戦闘訓練とか。一応それなりに乗ってる。

「……ちよつといいか」

「えっ？」

突然、一夏が話しかけられた。女子同士で牽制しあっている中どうやら思い切って行動してきたらしい。空気が読めないのか胆力があるのか、一夏の犠牲者なのか。ちなみに最後まで睨んだ。正統派美少女の襲来に一夏がどう反応するのか。

「……箒？」

極めて普通の反応。それにしても名前珍しいよね！ ポニテも箒みたい！ ……さすがにジョーク。綺麗な黒髪だと素直に思う。

「廊下でいいか？」

「ああ、分かった」

一夏が立ち上がって外に出て行く。俺？ もちろん女子に混ざって付いてった。

「ねえねえ、あの二人のこと何か知ってる？」

名前の知らない人―自己紹介後だろうが知るか―に声をかけられた。た。

「さあ、中学生からの付き合いだから。小学校時代の友達と睨んだ。六割ぐらい」

「つく！ そのアドバンテージ妬ましい！ 残りの四割は？」

ノリで言っただけで君とくに妬ましいと思ってるよ、多分。

「もしくは登校中にパンをくわえた彼女にぶつかってパンツ覗いた。四割ぐらい」

今の所俺たちは自宅通い（俺は社宅だけど）、しかし女子生徒は寮生活なのでこの学校内の短い距離でやった事になる。不可能に思えるかもしれないけどあいつは出来る。

「そんな馬鹿な」

「一夏を知らないからそんな事いえるんだ。あいつはガッツポーズしただけで八本フラグを立てれる奴だ」

一緒に登校したら食パンくわえた女の子に出会って一夏と衝突したときの衝撃ときたら……。しかもご丁寧にパンツ覗いてたっぽい、俺は覗けてないよ？

「……まさかレーザー生身で出さないよね？」

外野手じゃあるまいし。流星にそれはない。姉はどうだろ。一応人間だからあの人でも出せはしないと思うけど。レーザー出せなくても人類最強なのは間違いないだろうが。

「イケメンレーザーは常時放出してるけど」

さすがにガッツポーズだけで八本フラグは嘘だけど、一本は立つんじゃないかな。と、周りとなじみながら阿呆な会話をしているともうすぐ鐘がなりそうな時間。顔を出して周りを見ると織斑先生が接近。小声で

「つく！ コンディションレッド発令！ 席に着け！」

ばばばつと一気に動き、皆が着席した瞬間鐘がなる。廊下から篠ノ乃さんが入って（珍しい、そして同時にとつても有名な苗字だから覚えてる）数秒後にバアッとまた音が響いた。

「で、あるからして。ISの基本的な運用は、現時点で国家の認証が必要であり。枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑法によって罰せられ……」

男なら無限のカスタムのために何でも覚えようとするだろうけど、法律方面はかんべんだ。俺もこつちの方はかなり大雑把。簡単に言えば「命令なしで使うな！」だ。当たり前だ。その気になれば数千人虐殺できる兵器なんだから。というか山田先生ちゃんと教師やれるなあ。

ちなみに、隣を見ると一夏がきよろきよろ辺りを見渡している。予想では予習をあまりやれてなかったな、コイツ。予想外に多かったのか。甘い奴め。俺もこんなにする必要はないじゃん、とか思いながらやらされてたが、おかげで助かった。難しい上に多いから地獄だ。

「な、なに？」

見つめられた女子が反応してる。それにごめんごめんと一夏が返す。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

山田先生が聞く。

「あ、えつと……ほとんど全部分かりません！」

俺の行動は早かった。教科書を閉じ、表紙でパンツ！ と音を響かせた。

「予習が甘い奴と思ってたら予想の上を行きやがって！ 事前に参考書渡されただろ!! あの分厚いの!!」

「え？お前分かってるの？これ」

えつ、すごいみたな顔されても。

「当たり前だ！ 考える役は俺だけどき！ いくらなんでもそれぐらいやつてくれていると思つたよ！ 分厚い塊渡されただろ？」

「古い電話帳と間違えて捨てたぞ」

俺は叩かなかった。だって代わりに千冬さんが叩くからね。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「えつと、それと他の皆さんは問題ないですよね？」

もちろん問題ない人ばかり。コイツも頭は十分巡る方なので要点まとめて覚えさせるしかないか。とか考えていると千冬さんはため息をついて

「あとで再発行してやるから一週間で覚えろ。いいな」

「いえ、一週間であの分厚さはちよつと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

教師というより教官とか師匠だよね、ほんと。一夏はゆっくりこつち向いて

「希、教えてくれるか?」

「はあ、しようがないよな。忠告しなかった俺もだし」

まっ、人に教えるのも勉強だ。ちなみに軽く黄色い声が上がったが無視する。仲のいい奴らならこれぐらいは普通だ、断じて普通だ。

なぜか山田先生はがつくりしてた。まさか勉強教えるつもりだったのだろうか。悪いことした。

「ちよつと、よろしくて?」

「へ?」

二時間目の休み時間、一夏と授業の要点をまとめて色々説明してたら、一夏に声をかける胆力ある人二人目。地毛で金髪のくるくるロール、口調はですわ、実家は貴族でおほほと笑うに違いない。もしそうじゃなかったら詐欺だ。あれ、でもイギリスにまだ貴族っているのだろうか。彼女が貴族と決まったわけじゃないが。

今の世の中ISが登場で男尊女卑から女尊男卑に移り気味だ。もちろん九割九分以上の人は変わらない生活だが、一部はすごい過激だ。すれ違った見知らぬ男に荷物持ちさせるとかね。この子はさて、後者と見るが。

「訊いてます? お返事は?」

「あ、ああ。聞いているけど……どういう用件だ?」

「まあ! なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられただけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

俺はこの完璧なお嬢様に軽く笑い出しそうになった。あと気の毒に。経験上、性格に棘がある人間の九割ぐらひは一夏に惚れることになる。多分この人もそうなるんじゃないかなあ。その後、俺にアドバイスもらいにくるのが通過儀礼。結構面倒だ。何せ誰かが一夏にアタックするとお前何してんだと周りからいつせいに敵意を向けられる。でも、楽しいんだもん！ 心労かさむけど、軽く女性恐怖症にもなるけど、隣で恋愛事に火を焚きつけて特等席で見られるんだからあ、でも変なアドバイスはしない。向こうだって本気なんだから、こつちも本気で考えてアドバイスしないととても失礼だ。あと真面目じゃないと死ぬ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

どこまでもクール！ それにしてもこの人どこかで……えつと、そうだ！

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!？」

「知ってるよ。イギリス製第三世代IS、ブルー・ティアーズの搭乗者だったよね」

「あら、あなたは話せるようですね」

鼻が高い様子。胸も高いねほどほど。篠ノ之さん以下だけど日本人女性の平均以上は十分じゃないかな。さて、ちようどいいネタか。

「うん。他にも色々ね」

「この無礼な人に教えてあげなさい」

ほんと尊大。一夏は俺に向いて

「なんなんだ？ というかどうして知ってるんだ？」

「ネットでファンネル登場！ って騒がれてた機体の搭乗者でね。えつと、上からスリーサイズが――」

「何を言いますの!?! あなたは!!」

顔を真っ赤にしながらパンツと机を叩く。ちなみにスリーサイズは覚えていない。おちよくるために言っただけ。とは言え、ほぼ競泳水着みたいな操縦服なので有志がIS搭乗者のスリーサイズを数値化してるのは日本のネットでは常識。海外でも頑張ってるけど。女

性と男性が戦争したら真っ先に始末される奴らだろう。

「ジョーク、からかう為に言っただけで君は知らない。機体ならそれなりに覚えているけど」

ファンネル（ブルー・ティアーズ）やBトレイザー（稼働率最大時はレーザーが曲がるらしい）とかそんなだったはず。

「信じられない。信じられませんか。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。しかもこんなに下品な男がいるなんて!」

「その極東で作られたISのために勉強して、恥ずかしくないの? 過去の栄光にしがみ付いてばかりいるから今落ちぶれてるんだよ。面積も日本より小さいし、GDPも人口も。森林面積も。どこか日本に勝ってる?」

お嬢様真っ赤、顔が真っ赤で口をパクパクさせてる。あ、でもイギリスは教育とかは日本より上だっけな。第一GDPも所詮指標だ。国民の幸福が第一だと言える。企業の労働状態とかもどうだろうって感じだし。それに一応昔世界の覇者になったこともある……今の方が大事か。と、この時鐘がなった。

「覚えていなさい!」

「決め台詞似合ってる!」

グツと親指を立てて見送った。ハンカチを取り出しそうなくらい顔を真っ赤にした。俺と一夏が話している途中から会話参加してきてくれて助かった。そうじゃなかったらまだ会話が続けてて面倒なことになってそうだった。

「希って、相変わらず煽るのが天才的だよな」

「相手の気持ちを想像すると簡単」

あの子は極東の島国とか言ってたし、国に誇りを持っているタイプ。で、あの助長のしかたから男と話した事は殆どないし、馬鹿にされる事もないから煽りに耐性が無いタイプ。根はいい子だろうけど、どこかでひん曲がったって感じもする。

「いやな相手の気持ちの思い方もあるもんだ……」

「そんな褒めるな」

「褒めてねえ」

ちょうど先生が入ってきた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

一年間変更ないとか色々説明が終わった。とにかく、やることは一つ。世界中の誰よりも早く、一夏を――

「はいっ！ 一夏を推薦します！」

売り飛ばす!!

「俺!？」

立ち上がる一夏。安心しろ、一応真面目な理由もある。

「多数決！ 一夏でいい人！」

はいはいはい！ 一気に上がる手。俺ってそんな人望ない？ 一夏が上すぎるだけだと信じたい。

「織斑席に着け。他に居ないのか？ このまま無投票当選だ」
断定してるよこの人。

「ちよっ！ ちよっと待った！ 俺は――」

「待ってください！ 納得がいきませんわ！ 代表とは実力ある人間がなるものです。この入試で唯一教官を倒したエリートである私が――」

へー、すごいね。でも

「教官って、あの入試の？ 俺も倒したけど」

「ちなみに俺も倒したよ？」

一夏が先に戦って、勝ってしまったって混乱してるところにさも当然に一夏と交代してヒヤッハーだったけどね。えっ、二人目の男？ えっ？ って所にフルボッコ。

「わ、私だけと聞きましたか？」

「女子唯一って話じゃないのか？」

「大丈夫大丈夫、僕とおじいさんは何度その……関係ねえや」

一夏がとどめをさす。しかし納得いかないよう

「だとしても、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！この私が
いい恥さらすって不思議な日本語だよね。いい恥をさらすのだと
してもいい恥とは何なのか。」

「実力から行けば――」

それにしてもよう口が回ることで。人のこと言えないけど。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれは
わたくしですわ！」

すごい自信でござる。二割……いや、一割おすそ分けしてほしいぐ
らい。二割はちよつと多いな。それにしても、ここまで男嫌いか……
こういった場合は一番身近な男、父親がどうだったってケースが多い
と聞くけど。さて。ひとまず、

「大体、後進的な国で――」

「ごちやごちやうるさいぞ、さっきの俺の話聞いてたか?」

「それに世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ!?」

日本人が約半分を占めているこの学園で、ここまで言う胆力は認め
てやるが、これ以上言わすつもりはない。俺も一応日本人としての誇
りはある。爺さん婆さんたちが必死に作り上げてきてくれた国なん
だ。もちろん国のために命を張れとかは言わないが。でも国が倒れ
たときに困るのは自分たちだと思うけど。その点、国を守る事が一番
家族や友人を守る方法だと思っけど……どうだろうか。

「あ、あなたたち！ わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

やつぱり国に誇りを持つてる人間か。しかもかなり。海外じゃ多
いって聞くけどね。むしろ日本の愛国心の無さが異常らしいが。

「まず、お前が先に始めたのを覚えとけよ?」

自分のことを省みない奴ほど面倒なのはない。俺も人のことあま
り言えない感じだけどさ。

「け、決闘ですわー!」

さすがイギリスか。手袋は叩き付けないようだが。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「だねえ」

一夏はさすが分かってらっしゃる。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で——」

とんとん拍子で進む決闘約束。で、

「いや、俺がどれくらいハンデつけたらいいのかなーと」

スパンと殴る。同時に大爆笑の渦。

「あのな。別に殴り合いだったり剣士の戦いじゃない。このお嬢様が言ってるのはISで勝負って意味だ。むしろ俺たちがつけてもらう側。もちろん、真剣勝負なんだからいらないが」

いまや男と女が戦争したら三時間で決着が付くと言われてるけど……正直、これは俗説だろうな。大手マスコミの。詳しくはずっと後で、多分。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、ハンデをつけてもらうのはあなたたちですね」

「ねーねー、二人ともー。今からでも遅くはないよー？ ハンデつけてもらったらー？」

やけにのびのびした子がほわほわ勧めてくる。それに俺はため息をついた。

「あのね。俺もお嬢様も共通してる事がある。祖国を侮辱されて決闘になったこと。その真剣勝負なのに、ハンデをつけるなんてとんでもない。それともう一つ、何より大事だけどな」

ニヤツと笑って

「初めての男と女のIS対決だぜ？ ハンデ付けて勝って、世界中の男に誇れるかよ」

お嬢様は顔が真っ赤になった。クラスは少しシーンとなったあと、笑いに包まれた。もちろん俺を馬鹿にして、だろうけど。でもね、これぐらいでちょうどいい。いくらエリートでも、初回、これに限ってなら俺には勝機がある。

「今の所俺の機体は改装中で届いてない」

「えっ！ あなたも専用機を持つてますの!？」

「一応世界で二人しか居ないIS搭乗者だからな。データ取りのためとかにね。それが届いたらすぐバトルでいいか？」

「いいでしょう。首を洗って待つてなさい」

「ここまで綺麗に決め文句を言うとは、さすが英国貴族。」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は――」

バトルするのは一夏は一週間後、俺は機体が届いたらという事になった。

「うう……」

放課後一夏はぐったりしてた。

「さっさと覚えるぞ。五日間で基礎叩き込んで、残りの二日でブルー・ティアーズ対策だ」

超圧縮になるが、コイツは体に覚えるタイプだ。さっさとIS乗せて叩き込む方が早い。一夏は中学校の残り期間を千冬さんの権限か何か知らんがある程度無事に過ごせたが、俺はいろいろあつてIS搭乗もしている。六十時間は越えている。受験の日から毎日大体二時間程度は乗っていた。専用機も持っている。……試作型ISだったので、今は完成させるために最終仕上げ中で持つてないけど。

そんなもつて、あのお嬢様は三百時間は超えているはずだ。

「えっと、お二人とも」

「へ?」

「ん?」

「お二人の部屋が決まりました」

「あれ?しばらく俺たち自宅通いでは?」

家は政府に監視下に置かれてるが自分と家族は出入り可能だ。一応警察などが二十四時間監視してくれている。家の中にある俺の遺伝子情報とかが取られないようにね。そこで過ごすのは嫌だから社宅借りてるけど。近いし。

「いえ、ちようど開いていた部屋……物置なんですけど、そこを一時的に改造しまして」

「なるほど。分かりました。さっさと行くぞ。荷物も準備しない」と

「あ、いえ、荷物なら――」

「私を手配をしておいてやった。ありがたく思え」

「さすがですね、織斑先生」

「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう。漫画は自分で取ってこい」

次の休みに帰って漫画とか運ばないと。でも大量に持ってくるのだからいいな。専用機戻ってきてから格納して持ってくるのがいいか。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時で、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります」

「使えないですよねそれ？」

当然だけどね。

「は、はい。すいません……」

しょんぼりと言われるがこれは先生にどうこう出来る問題じゃない。お気になさらずと伝えた。そんでもって安定の一夏、

「え、なんでですか？」

「お前が十歳……九歳なら許されてただろうな」

「あー、そっか。そうだな」

「おっ、織斑くんっ、女子と入りたいんですか!?!」

これの数秒後、山田先生と誤解を増やすような会話をして

「中学時代の交友関係を洗って！　すぐにね！　明後日までに！」

「清水君との関係も！」

超スピードだとかそんなもん（ry

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで」

二話 協力者

「ふう、やっと一息つけたな」

一夏が心の底から安心したように言う。

「シャワーがないのはどうにかなったな」

部活が終わった後の場所を借りて、そこで着替えた。一夏のツテをたどって剣道部。飯もシャワーも終わってちようど八時ごろ。男子高校生ならまだまらここから！かもしれないが、俺でもメンタルに耐久力はある。正直今日はもう眠りたかった。だがしかし

「さっさと頭に基本を叩き込まないと、お前の」

「はーっ、しょうがないよな。千冬姉の顔に泥を塗るわけにはいかないし。迷惑かける」

「別に。考えるのは俺で、動くのはお前。解決するのは三人で……弾がないか。さくつとやろう」

「ああ、だな。でも正直疲れた。十一時ぐらいには寝たいぞ」

自分もだ。最近良い生活習慣を続けてたから遅くまでおきれない。……というか、毎日ひたすら体力作りできつかったから早く寝ないときつかったってだけか。

「だな」

和やかに会話を続けながらボタンとドアを開けた。ボタンと倒れこんでくるトーテムポール。一番下はパジャマの子、二番目は篠ノ之さんで浴衣が似合ってる、三番目の薄着の子は誰？ともかく、外を見るとまだまだいるようだがこれ以上入ってきても困る。三人にどいてもらって

「ではおやすみなさい」

笑顔で挨拶してドアを閉める。直後にやられた！とか色々聞こえてきたが無視。そして

「こんばんは、皆、服似合ってるね。一夏もそう思うだろ？」

そう言って右肘で一夏をつんつん付く。

「ああ、うん。似合ってるな」

その言葉に篠ノ乃さんが顔を赤らめる。二人は普通。大体把握。

となると……

「余韻ぶち壊して悪いけど、あのお嬢様に一夏を勝たせたいんだ。協力してくれる?」

「そうすると篠ノ之さんは急に真面目な顔になった。」

「ああ、もちろんだ」

とても頼りがいがある。背はそこまで飛び抜けてるわけでもないのに、気迫が普通よりずっと高身長に思わせる。武人みたいだ。

「あいよ。それと一っだけ質問、IS開発者の妹さん?」

真面目な顔から苦々しい顔に一気になった。

「……ああ、そうだ」

「ISについて教えられる?」

「無理だ」

断言する姿がかっこいい。でもそれはそれで構わない。

「了解。でも、さつき盗み聞きしたけどさ。剣道強いんだよね?謙遜はいらない。全国優勝なんだから。一夏は中学時代バイトや受験で忙しかった。鍛え直してくれる?ちなみに貸し一ね」

「貸しってなんだ?」

一夏は首をひねらすが篠ノ之さんは

「べ、別に二人になれて嬉しいとかじゃないぞ!だが、話の分かる奴だな。希と呼んでいいか?」

顔を赤らめながら嬉しそうに。だがちよつと待ってほしい、俺も同席する予定だから二人じゃないぞ?まあいつか。

「あいよ。なら箒と呼ばせてもらうよ」

「だがいいのか? ISとはあまり関係ないのではないか?」

一夏と一緒にされるのはうれしいが、負けるのも癪なんだろう。たしかに好きな人はカッコいいほうがいいよね。ダメ男を守りたい女は少数派のはずだ。

「いや、あのお嬢様の機体は中距離、遠距離機体。今さら一夏が射撃戦やってもどうせ無駄。隙を見て突っ込んで切り刻む以外は正直ない。射撃は弾幕ばらまくだけぐらいだろうから。だから、少しでも感覚を磨かせたい」

「分かった」

箒は右手を伸ばしてきた。こちらも右手を出して握手をした。

「で、おいてけぼりにして悪かったけど、そこのお二人さんは？」

「となりのお部屋だよー」

のほほんとしている子だ。ずっと年下に見える。でもスタイルは意外とよさそうだ。

「私はこの子のルームメイトの如月弥生よ。よろしく」

個性的な名前だ。如月は二月で弥生は三月。現代だと二月三月という名前だが昔の言葉ならかつこよく聞こえる不思議。

「しばらく隣だけよろしく」

「よろしく」

俺と一夏が挨拶する。さて、これで近距離はどうかになるか。あとは回避訓練を……アレしかないか。あまりエアガン人に向けて撃つのはいけないけど、しゃあない。ぶかぶかパジャマのほと……あれ？　そういえば名乗ってもらってないな。まあいつか。

「えつと……のほほんさん、如月さんは何か一夏に教えられる？」

「私は無理よ」

きっぱり断言。つく、頼れるお姉さんって感じが少ししたんだけど、やはり同年代、無理か。

「私できるよー」

意外だったのはのほほんさん。まさかこの子出来る子？

「じゃあ一夏に教えるの手伝ってくれない？　俺だけじゃ無理なとき」

「いいよー」

いや、本当に大丈夫か？　この子。……能ある鷹は爪隠すとも言ふし。信じるしかないか。それによくよく考えればこの学校の倍率は一万を超える。スポーツ推薦とかじゃない限り知力とかは俺よりよっぽど上の連中がそろってるんだ。……というか今更だけど如月さん微妙にエロいです。箒（きつちり浴衣）とのほほんさん（ぶかぶかパジャマ可愛い）はびつちりガードだけ。

「さて、一夏。仲間も出来たし、頑張るか」

「相変わらずすごいよな、お前」

運がいいと言うべきかな。隣の人が親切で助かった。

箒の目が微妙に俺を睨んでた。これぐらいは許すべきだよな？寛容にならないと！これぐらいで嫉妬してるんじゃないから先ついていけないぞ？幼なじみなら知ってるだろう？

「まあまあ、それより親善の証として。お菓子持ってるけど、食べる？」

お菓子袋から取り出して駄菓子などを差し出す。

「歯は磨いたから遠慮しよう」

「私も」

「私は欲しいなく」

「おー、それそれ」

ミニドーナツを一つ開け、半分こした。夜なのであまりカロリーは摂取すべきではない。なら食うなって話だけど食べないことはしたくない。お腹がすいてると力が出ないし。

「一夏もくつとけ。糖分はこれから必要だ」

「それにしてもー、おりむーとしみずーの部屋殺風景だねー」

それなりに時間が経つてもうすぐ終わろうかと言うとき。のほほんさんのびのび言う。

「今日引っ越したばかりだからねえ」

仕方がない。実家は一軒家で政府監視の元管理されている。が、俺は入れるようになってるので一度戻って取ってくる必要がある。警察の人がしっかりと管理してくれてるので盗難の心配はないだろう。盗難しようとして入り込んだら、最悪射殺される可能性があるレベルでの厳重態勢だし。

「仕方ないよな」

一夏も同様。

「だが、そこにある石は何だ？」

箒が机の上にある石を指して言う。

「俺のお守り」

こつちに来るときに持って来た物だ。あまり占いとかは信じないけど、なぜかね。

「珍しい感じの石ね」

「えっと、小学一年生のころだっけな。山の何とかって神社に行ったんだよ。その付近で拾った石でさ。珍しい石だと思って帰って、次の日ある嫌なことがあったんだ。それで石に馬鹿みたいに祈ったんだ。あいつ怪我しろと思ってさ。誰だか忘れたけど。で、その誰かは怪我したんだ。それから俺の守り石なんだ！と、小学校五、六年生ぐらいまですごい大事にした。風呂に持ち込んだこともある。かなり磨り減ったなあ」

昔は300gぐらい（全くの推測）と大きかったが、今では100gぐらいだ。

「今じゃ風呂に持ち込むなんて流石にしないけど、何でか気になって集中したりするとき掴んだりしてる」

癖がある人いるよね、集中するときに。目を閉じたり指をトントン叩いたり。そういうったのと同じこと。机の上に置いては眺めてたりしてた。

「へー、石集めの趣味でもあるのか？」

ちなみにこの事は一夏すら知らなかったようだ。まあさすがに中学校にもなると持ってこなかったしね。家に遊びに来たりしたこともよくあるけど、飾りとかでも思ってたのか。

「いや、無いけど、それなりに鉱物には詳しくなったよ」

「私も石集め良くやったなー。川原とか行ってね。水切りとかもよく

」

「それで、女だらけの学園に来た感想はどうだ？」

お休みしようと思ったら、千冬さんがやってきて連れ出されたでござる。

「正直、一夏関連で心労がかさむなど。楽しそうですが」

「……これでも、努力はしたのだ」

女心を分からせる？それとも人の好意に気付けるように？一夏にそれは馬に念仏、ドラじゃなくて猫に小判。俺の中じゃ一夏に恋心が分かりやすいけど。

「相変わらずです。あ、そう言えばこれ、今朝の自己紹介の動画です。相変わらず騙されやすい奴です。こうやってちよくちよく見ないと何を起こすかわからないでしょ？」

「ああ、一夏は目を離すとすぐに問題を起こすからな。こうして何度も確認しなければいけないのだ。全く」

この人はブラコンなのにそれを押し出すのは恥ずかしいと思ってるので、こう言っただけあげたほうが素直に受け取ってくれる。話術大事。それでいて

「それで、お前は本当に大丈夫なのか？」

ちゃんと真面目にこつちも心配してくれる。

「もちろんです」

「一ヶ月ほど前にいきなりこんなことに巻き込まれ、両親と離れ離れになり、軍隊のような生活をする。これで大丈夫なわけないだろう」

確かにそれもそうだ、一般論なら。でも

「楽しんでるんですよ、この状況。だから、大丈夫です」

実際には、心の奥底で疲労しているのかもしれない。でも、問題ない。楽しいとは思ってるのだから、このまま突っ走るだけだ。もし倒れそうな時には、誰かに頼らせてもらおうつもりだ。まっ、そんなこと無いとは思っけど。……だって、一夏か千冬さんしかないレベルだし。

「……まだお前たちは子供だ。大人は十分に頼れよ」

「もちろんです」

「いやー、恐れ入った。のほほんさんは頭いいな」

「えへへー、もっと褒めて褒めて」

おーよしよしと頭を撫でそうになるのに気付き、驚愕した。ちなみに、ただいま入学式翌日の午前八時。一夏と箒と隣の部屋ののほほん

さんと如月さんと一緒に食べている。

「如月も教えるの上手いな」

のほほんさんとカバーしあいながら教えるのは上手かった。さすが才女ばかり集まる学園。誰に対しても侮っちゃいけないと確認できた。スポーツ推薦の人だっけかなり出来るのが多い。ちなみに、それなりに交流が進んだのでさん付け無しになっている。

「それなりに勉強したのよ」

ちよつと胸を張ってえらそうな様子。あ、ちなみに俺のメニューは一夏と同じ和食セット。納豆は抜いてあるけど、代わりに餃子が入ってる。え？和食じゃないだっけ？好物なんだからほつとけ。箒ものほほんさんも如月も似たような感じ。中学時代はトースト派だったんだけどね、炊いてある飯があるならそれがいい。ただし俺だけふりかけ付いてるけどね。白米が嫌とかじゃなくて、飽きない工夫。

「なあ箒、場所はどこで？」

「剣道場が使えるからそこでやるぞ」

「あ、そうそう。なるべく突き多めでいいかな？」

「なぜだ？」

「レーザー武器ってのは簡単に言えば槍、剣道の突きだから。一直線に射程が馬鹿みたいにある槍みたいなものだから。やらないよりマシ程度だけど」

切るより突きの方が少しは対策になるかな、といった考えだ。やらないよりマシ程度だが少しずつ積み重ねれば大きなことになる、そう信じてる。

「なるほど。良く考えているのだな」

むしろお前たち（一夏と箒）は考えなさすぎではないだろうか。一夏はかなり脳筋だが箒もだろうか。頭悪いわけじゃないけど。

「ひとまず一夏、授業は真面目に聞いとけ。分からないところがあつたらすぐ聞きに来い。どうにかする」

「分かった。頼りにしてる」

「PICってつまりどういふことばってよっ」

「ISの加速減速を行う総称。変な力を押し出してその反作用で進むと覚えとけ。詳しい原理は今覚えなくていい。と言うか理解はあんなの難しすぎるわぼけ！バトル乗り切るまでなんとなくで行くぞ！」

「分かった。何となくだな」

コイツは体で分かるタイプだからさっさとラファールでも打鉄でも乗せたほうが早いのに。弓道だって基本を教えたら一日百本、千本撃たせた方がいいに決まってる。勝ちたいなら。

学園でせいぜい二十台程度しかないのに全校で三百人以上はいる。だからそうは回ってこない。せめて一回は乗せたいのに。

ちようどそのとき鐘が鳴った。慌てて席に着く。そして山田先生が登場。

授業が進んでいく中ブラジャーとか色々出てきて何となく気まずい感じになったけど乗り切った。それにしても、ここまで授業に集中すると疲れる。二時間目なのに軽くグロッキー。ただし横はもつとグロッキーになるだろう。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはい！質問！」

といった感じで。さっすが一夏、女を誘うこと誘蛾灯のごとく。

「ねえねえ、清水君本当に勝てると思ってるの？」

「専用機ってどんなの？」

あれ俺も？一夏が俺たち親友だね！って顔をした。嫌味だよね？

「さあ、どうだろうね？その時のお楽しみ」

そうやってはぐらかしながら答えていると

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの!？」

「え。案外だらしな」

もう遅いなって分かった。直後にバアンツ！といい音が響いた。

「一夏……お前は どうして修羅の道を進みたがるんだ？」

蜘蛛の子のごとく散っていくなか問いかけた。一夏は「つい」とだけ返した。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「お……自分にですか？」

専用機ぐらい分かせてある。全世界のISコア467個。さらに三百個以上が軍用。全世界十数力国ほどに分散して一国の民間に約十数個。その専用機。人類六十億の内、精々三十人と居ないエリートと言える。

「ああ、世界で二人しか居ない男性IS操縦者だからな。本来国家か企業に所属していなければ与えられないが、特別にな。教科書六ページ、音読しろ」

一夏がぺらぺら音読する。条約とかいろいろ面倒だよな。

「と言うわけだ」

「ちなみに俺は企業に所属してるよ？」

一夏がえっ!?!というような顔をしながら

「い、いつの間に!?!」

「色々あってね。所属した方が有利かなと思つて」

それと、あの人たちの志に賛成したから……てのは置いておくべきだな。企業の重鎮たちなんていくらでも演技できそうだし。重要なのは俺にとってプラスかマイナスか。今の所不満はないからいいとする。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんですか？」

女子の一人がおずおず尋ねる。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

……あいつ呼ばわり? あ、そうか。一夏が言ってたな。篠ノ之博士と何度か会ったこともあるしって、姉とは腐れ縁なのだろうか。良く分からない仲って言った。つまり小さいころ家族ぐるみの付き合いだったわけか。……両親は居ないから、二人ぐるみ? 家族ぐるみでいいか。

で、最後にクラスが沸き出す。でも、昨日の反応を見る限り、箒は多分

「あの人は関係ない！」

あまり好いているわけじゃないよね。可能性としてはなんだろうか……いや、こういったのを興味だけで考えるのは止めたほうがいいか。自分に関係があるならまだしもだけどさ。周りの女子がぱちくりと瞬き、

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

クラスの女子は不快感などを出していた。一瞬フォローしようかと思ったが、止めた。

「さて、授業を――」

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

早速俺たちのところにやってくる。腰に手を当てるポーズは写真にとって飾りたいぐらい様になってる。ちなみに、専用機持ちはなぜか美女が多いのかというかほぼ全員美女なのでアイドル活動とかもやってる。もはやIS搭乗適正はISのわがままにしか思えない。意思があるらしいし。

「どうでもいいけど、その腰に手を当てるポーズ様になってるね」

「お褒めに預かりありが……今はその話ではありませんわ！」

どうでもいいと言ったの聞き流した？

「へいへい。それで、続けて」

「まあ、一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんせんものね」

「なんで？」

「この人代表候補生だから。専用機持つてる。多分、三百……四百時間超えてるんじゃないかな？」

「ええ、その通りですわ！IS適正もA+なのです！」

「確かに高いねえ」

練習してれば上がっていくらしいので、300時間以上乗っててA+ってのは高いといえるのか否か、個人の感想次第か。

「なのでクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

去ろうとしたとき、一夏が声を出した。

「違うね」

「?何がです?」

「IS適正だとかそんなものじゃない。クラス代表に必要なのは、強さ、だろ?」

おお、なんとまあ。

「お前も言うようになったね。えらいえらい」

「子供見る目で褒めるな!……お前とも長い付き合いだからな」

女子、黄色い悲鳴あげるんじゃねえ。腐った要素はねえよ。で、肝心のお嬢様は

「だとしても、それは私ですわ」

優雅に去っていった。平和な状態になってやっと今から飯だと思いき出した。

「箒、飯食いに行こうぜ」

「他の人も。今ならもれなく一夏が付いてくるよ?」

「付いてくるけどさ、わざわざ言わなくていいよな?」

行く!ちよつと待ってー、とか色々聞こえてぞろぞろ引き連れて食堂へ。箒は一夏が誘ったのが嬉しかったのか微妙に上機嫌だった。

つく、予想よりこみまくり。こりや精々数人ずつしか無理かな?

ちようど隅っこに四人開いている場所があったのでそこにもぐりこむ。前に一夏、その隣に箒、俺の隣にのほほんさん。意外とちやつかりしてるね。この人。ちなみに昼ごはんは中華だ。一夏は固定化気味傾向だが、俺はなるべく色々食べる主義。

「一夏はいつも固定化気味だよな」

「希はなるべくばらけさせてるのはなんか理由あるのか?」

三年間の付き合いでも知らない事はある。中学は給食だし、相手の食事情は知らない事の方が多い。おホモダチじゃないし。

「変化を付けて飽きにくいようにしてるだけ」

とても単純な理由だ。

「餃子はいつもついてるけど？」

「飽きないぐらい大好きってだけ」

これとつても重要、飽きないぐらい大好きな物が欲しいな。

なるほどと言いながら進む。ちよくちよくのほほんさんに俺から質問したり、一夏と箒が不器用ながらコミュニケーションをとって進む。で、その時

「ねえ。君って噂のコでしょ？」

一夏のとなりから三年生が登場。雰囲気落ち着いて大人びてますねえ、これは評価が高い、はず。この学園に評価高くない女子いないけどね。

「はあ、たぶん」

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」

「はい。そっちの男もですけど」

「ですねー」

まだまだ先になるだろうけど。

「でも君たち、素人だよな？IS稼働時間いくつくらい？」

「いくつって……、二十分くらい？」

「俺は六十時間くらいですかね。企業で一気に叩き込まれましたから」

男の悲願を達成するためにひたすら組み込まれた。教えてくれた師匠には時間を取らせて申し訳なかったと思う。でもあの人はそれでも俺を指導してくれたので、すごく尊敬している。師匠のためにもお嬢様に勝って報告したいものだ。

「えっ!?!結構乗ってるんだね、君は」

「ええ、お陰で一カ月半ぐらいでずいぶん肉体改造しましたよ」

朝六時前に叩き起こされ10km走り、終わったら朝食(栄養士が考えたバランスがいいもの)、筋トレや格闘訓練(合気道やらetc)、剣術もやって。午後はIS講座をやったり、実施訓練だったり。終わりに5kmぐらい走ったり。とは言え一番最初からこうではなかった。だんだんと慣らされて、卒業式ちよつと前にはこれぐらいだっ

たつてぐらいだ。劇的ビフォーアフターを果たして高校デビューをしてる。

ちなみに今はやってない。まだ高校生活に慣れてないし、シャワーの目処も剣道部という人がいっぱいいる場所。ハプニングがあるかもしれないから夜だけだ。シャワーの目処をつけなきゃ走った後の汗が問題だ。今の所の候補は箒のところ、毎日鍛錬してるからそこまで迷惑かけないだろう。でも好き（異性的な意味で）でも無い男にシャワーを使わせるのも遠慮させちゃうよなあ、どうしよう。

「でも君は素人だよ。でき、私が教えてあげよつか？ISについて」
「すいずい一夏に身を寄せる先輩。でも

「すいません。申し出は嬉しいのですが、理論はこいつに教えてもらってますし」

「でも、理論だけじゃ分からないことあるじゃない？これでも結構乗ってるから」

「結構です。私たちが、教えていますので」

箒がきつぱりと言った。目付きが怖いですよ。

「あなたは一年でしょ？私のほうがうまく教えられると思うなあ」

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」

知らない人から見たら効果絶大だけど、実際には俺より知らないよね？君。まず間違いなく。

「篠ノ之つて——ええ!？」

ほら効果絶大。普通はすごい詳しいみたいに見えるよね。野球選手の弟は野球に強いみたいに見えるみたいに。

「ですので、結構です」

先輩はおとなしく引き下がっていった。その後箒は一夏を見つめて

「今日の放課後、剣道場でだ。どのくらいの腕か、見せてみる」
「分かった」

三話 決闘

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……」

ギャラリー満載の中、一夏は箒に怒られていた。手合わせ開始してから十分、ようやくたと思うけどね。俺なら五分どころか三分持つか怪しいもんだ。全く、最近の女子高生は化け物か。

「どうしてここまで弱くなっている!?!」

「受験勉強してたから、かな?」

学生の本分だから仕方ない。

「中学では何部に所属していた?」

「帰宅部・三年連続皆勤賞だ」

「家計のためバイトしてたからしゃあないね」

一応フオローした。でも箒は激昂して鍛え直す鍛え直すと騒ぐ。放課後三時間だつて。今はいいけど、後からもう少し分けて欲しいね。三十分でいいけど。それと剣道で男が女に負けるなど、とか言つたのは意外だ。女でも男でも関係ない!強いのがいい!なんて思つてそうだったのに。それとも自分の惚れた奴が自分より弱いのが我慢ならないだけだろうか?と言う事はざっくり言うとか好きに人に守ってもらいたいお姫様気分もあるのだろうか?意外と乙女チック。人は見かけによらないものだ。

で、話はいつの間にか進んでた。

「楽しいわけあるか!珍動物扱いじゃねえか!何が悲しくてこんな」

『パンパン』

手のひらを叩く音が響く。出したのは俺。こういつたときは手を叩けばいい。幸せなときもね。辛い時も叩けばいいよ、多分。

「はいはい、落ち着こうね二人とも。まず箒」

「なんだ?」

一夏に対して説教をしたのに邪魔されて怒っている。あれ、怖いよ?目付きが肉食獣のようだ。今時の肉食女子って比喻じゃないよ

うだ。

「一夏は千冬さんに負担をかけないためバイトをしてたんだ。俺はそれを良く知ってる。自分を育ててくれてる人だぞ？その気持ちもまぶ分かって欲しい」

「む……確かにそうだが」

一応理屈が分からない奴ではないようだ。徹底的に理詰めで押せばいける。ノリと勢いと語りで押せば多少の無理も理みに思わせる。

「小さいころから母親代わりみたいなもので、それでいて憧れの姉だ。負担をかけさせまいとするのは当然だろ？それでいてIS学園に入るなんて思ってたから、実用性の高い勉強をしてたんだ。仕方ないんだよ」

「むう、そうだな。確かに」

納得してくれたようでよかった。

「そして一夏。楽しいわけあるか？この状況お前が理不尽だと思ってるのは何となく分かるけど、しょうがない。だから、楽しめるようにするんだ」

「どうやって?」

とても楽しそうに言ってやる。

「まず珍動物扱いから出来る奴扱いになること。つまりさっさとあのお嬢様を叩き斬ること。そのためには箒の協力が必要。OK?だから、仲良くな」

「ごめん。教えてくれるのに怒って」

「いや、私の方こそ。すまなかった」

二人ともしっかりと腰を曲げて、綺麗な礼をした。俺も見習いたい。

うん、よし。

「さてと、俺も稽古頑張らないと」

「え?お前もやるの?」

一夏が意外な顔して聞いてくる。もちろん。

「俺だってバトル控えてるんだから。IS持っていればそっちやるけど

ね。今は無いから出来る指導者がいるならそれについて教えてもらう方がいい。頼めるか？」

「ああ、お前なら構わない。借りもある」

一夏との関係を邪魔されて怒るかと思っただが、セーフのようだ。

数日後

「なあ、希」

「なんだ？」

「さつきさ、箒に呼ばれて部屋に行ったんだよ」

「知ってる。誘ってくれたもんな」

もちろん断った。俺は空気を読むべき時読める男だから。空気読みながらぶち壊す事も多々あるけど、一夏関連は正直地雷を踏むと危ないので。致命傷になる。よって知り合った女子やお隣さんと大富豪（革命、八切り、イレブンバックのそれなりにシンプルルール、カード受け渡し無し）と対戦してた。六人ぐらいで対戦してたね。ちなみに俺の一位率は五割ぐらいで終わった。密かな特技で、大富豪は俺強い。強いところでどうしたってことだが。

「そこでさ……えっと、怒らせたいなんだ」

「へえ、何てこと言ったの？」

どうせ無自覚に持ち上げて無自覚に落としたぐらいだろう。

「いや、ブラジャーしてるんだなって言ったんだ」

俺は含んでた水を噴き出した。洗面所でよかった。人生で十本指に入る衝撃。ちなみに七、八本ぐらいは一夏関連である。ひとまず俺は一夏を殴った。

「いてっ!？」

「いてっ!?!で、すむかボケ!!年頃の女子に向かってその発言、お前じゃなくて俺とかだったら通報されて今頃牢屋だ!このボケナスビ!!」

頭をかきむしって、しょうがないため息をついた。コイツは、正直言って感性が子供とあまり変わらないと言っただけ。ちゃんとした性には興味あるけど。ともかく、だから熱いときには熱くなれて、悪

いいことは悪いことと言える。だからいい奴で、こうやって付き合ってるわけだが……異性関連は最悪だな。異性に興味あるのに鈍感で、姉みたいな硬派になりたくて何でもなくように表情を取り繕うのでさらに加速する。なので相変わらずひどい。しかも無自覚にフラグを量産してくんだからもうひどいなんてレベルじゃない。最悪ですら生ぬるい状態になるわけだ。こいつが死ぬときは痴情のもつれで刺されて死ぬときだ。間違いない。例え世界の秘密結社が襲ってきて問題ないが、刺されて死ぬ。

「確かにまずいと思ったんだ。で、どうしたらいい？」

そして、コイツは困つたらまず俺に相談してくる。理由は簡単で、中学で出会ったとき、とある幼馴染をまたちよつと怒らせてしまい、困つてるところを俺が隣で聞いていて恩を売ろうと思つて口に出し、それで無事解決したのだ。だって、こいつに元々惚れてる奴が大体なので、かなり簡単だ。しかもすぐわかりやすいから。

毎回一夏の所に迷わず話に来てたからね、分かりやすいってレベルじゃない。

ということ、相手を買った物に誘えとか小物を褒めるとかそうしたのを教えれば大体問題なく解決する。俺じゃなくても誰でも考え付くようなのばかりだった。だけど、俺の信用はうなぎのぼりになったようで、それから腐れ縁が続くようになった。

「はあ……えっと、ブラジャーつけてるんだなって言っただけ？」

これだけでも十分すごいが。

「いや、下着を見て触った」

もう一発殴った。仕方ないと思うんだ？これぐらいされてもさ。

「あのさ、お前が千冬さんと過ごして、下着ぐらいにはあまりどうじないのは分かる。でもな、相手は思春期の女の子、その子のブラジャーを見て、ブラジャーを手にとつて、ブラジャーつけてるんだな？お前大丈夫か？はたから見ると変態以外の何者でもないぞ？」

しかもレベルの高い変態だ（犯罪者とも可）。

「えっと……すいません。確かにそうです」

萎縮して小さくなる。まあ、こいつなりの反省だ。反省しても中々

次に生かされないのが一番の難点だが。異性関連は。

「あのな、久しぶりに会った女の子の幼馴染には三つ言えば問題ない。

お前、背が伸びたか？

会えなくて寂しかったぞ。

前より綺麗になったんじゃないか？

だ。分かったな！覚えとけ」

あいつが帰ってきたときに言っただけでやれば猿が木に登る調子でテンションが上がるだろう。……あ、でも修羅場になりそうだな。まあいつか。アイツは多分、いつか会いに来るだろうが、そのときまでコイツが覚えているとはとてもじゃないが思えないし。

「りよ、了解」

さてと、サクツと解決するか。簡単すぎてイージーだ。俺じゃなくても同級生ぐらいの男なら八割の人間は解決できるとっても簡単なお仕事だ。ラノベレベルの選択でどうにかなる。でも、俺並にこなせるような奴は少ないだろうけど。俺は踏んでる場数（対一夏限定）が違うから。

「じゃあどうやって解決するかだけ。明日は土曜日だな。ちようどいい、午後に完全自由時間だから籌をショッピングに誘え。ただ、誘い方は『昨日は悪かった。つい、二人きりつてのが緊張して変なこと言っただけ。埋め合わせに買い物に行かないか？ちようど希が息抜きもしておけて言っただけから』だ」

「分かった。……いや、嘘をつくのはい」

「嘘つくな。一応お前でも緊張しただろう？表に出してないだけで」

一応、本当に異性に興味はあるのだ。千冬さんみたいな硬派みたいになりたくて無関係なツラしてるだけで。それならせめて俺並みに表情の操作術を覚えるべきだけど。それはそれで危ないか、一夏は。女子たちが報われなさすぎになる。

「……分かった。で、リストは？」

「これ」

紙に書いて渡す。とても簡単

・数百円の安物エアガン四丁

・BB弾五百発ぐらい

・ゴーグル（目の保護）

「了解。ありがとな」

「仲直り出来てから言ってくれ」

ちなみに、無事に仲直り出来たようだ。内容は機会があればかな。

翌週、月曜日。お嬢様と対決の日。

「なあ、希」

「なんだ？」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうだといいな」

「IS殆ど動かしてないんだけど」

「しゃあないな。ぶつつけ本番だな。」

それでも私は言おう。勝利の栄光を、君にー！

目をしっかりと合わせて言い切った。振り付けもつけてあげた。一夏は頭をくしゃくしゃクシャトリアして

「一回ぐらい乗れるんじゃないのか!？」

「二年生より二、三年生が優先される。だとしても運が悪いな。ブルー・ティアーズ対策が俺の特別特訓だけしかやれてないってのは痛い」

実際にはIS訓練機まだ動かしてないのに申請は駄目だと言われたんだ。決闘だからと頼み込んでも無理だった。だが俺の中の秘密。いつかバレるときは来るだろうか。来たとしてもこの試合に勝っておけば問題ない。第一はぐらかすことにかけては俺は一流だ。自慢にならねえ。

「あれ今考えるとひどくないか？」

内容？俺やのほほんさんとかに一個数百円のちやちいエアガンを持たせて、一夏を攻撃。もちろんゴーグルをしてる。あたってもしイタツ！で済む程度。それで一夏に

「俺の指先と銃口を意識して、かわせるようになれ」

「どこの漫画だ!？」

お前何言ってるんだ?みたいな目で見てきた。

「これぐらい漫画ならいっぱいあるさ。……これでも、友を撃たねばならないと思うと気が滅入る」

「お前なあー」

でもししぶ彼はやった。最終的に三人ぐらいで撃ちまくったね。土曜日の夜にちよつと、日曜日に一時間ぐらい。この経験が少しでも役立つといいけど。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ!」

慌ててやってきた山田先生に深呼吸コントを一夏がやって、千冬さんに殴られた。

「来ました!織斑くんの専用IS!」

おお、やつと来たか。おらワクワクするぞ。千冬さんに急かされて動くが、一夏は俺を見て

「で、作戦を教えてください」

さつきまでとは違い、とつても真面目な顔。

「簡単だ。ファースト・シフトまでひたすらかわせ。攻撃する意識を見せながら。でもビットは落とせるなら落とせ。まず無理だと思うが。弱点は叩き込んであるな?ファースト・シフトが来たら弱点を突いてビットを落とす。全部じゃなくても三つならすっげえ上出来。出来るなら全部。銃弾はばら撒いて嫌がらせだけだ。その時に反動制御は切ったりつけたりするんだ。反動でかわすこともできる」

「分かった。ありがとう」

「ふん、この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」
おつ、織斑呼びじゃない。心配してるな。この人も相変わらず分かり

「無駄な事を考えるな、希」

「あいさー」

ひとまず、世界最強になるにはテレパシーを覚えなさいといけなさそうだ。

「さ、お前の機体だ」

ビット搬入口が開いて、白がいた。別にもふもふの犬じゃない。白い機体が、そこにある。

「これが……」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』です！」

「体を動かさせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。分かっただな？」

一夏は白式に触れた。すこし緊張して、すぐに緊張が消えた。そして背中を預けるように座った。

そして中睦まじい姉弟愛を見せてくれた後、

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝って来い」

そして俺に顔を向け……俺、先回しにしろよ。お前なんで乙女心読めないのさ。仕方ない奴だよな、全く。でも……それでもコイツといるのは楽しいんだ。

「希」

「ん？」

「勝ってくる」

「果報は寝て待て。気楽に待ってるよ」

一夏は笑って、飛び上がった。アイツはやってくれる、そういう奴だと俺は信じてる。

そう信じてたときが三十分ぐらい前です。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

一夏は正座をしていた。当然である。正座じゃなければ土下座しかないぐらい反省を見せる必要があるからだ。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもつてわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

いや、すごかったよ？初めて動かす機体なのに、お嬢様に「二十七分、持った方ですわ」と言われて。その時シールド残り141、ダメーシ小。その時にお嬢様のビットを二個撃破。相手はかなり油断していた時に一発ぎやふんと言わせ、その瞬間に慌てたところをスパスパして合計二個切り裂いたんだ。そしてデータのファースト・シフト間近の時間。でもアイツは単純なミスをする癖を出して、事実ミサイルにどかん。でもちようどファースト・シフトをした。で、雪片（千冬さんの昔使ってたISの装備）に似た刀を持ってかつこよく

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「練習に付き合ってくれた友達や幼馴染、親友のために勝つ」

「そして、千冬姉の名前を守るさー！」

これは来たと思つたね。俺が女なら惚れてる。ホモだったら惚れてる。ノーマルだけど。他の奴ら出し抜いてコイツをゲットする。こいつ以上の有料物件まず無いだろうしね。ともかく、直後に一機のビットを落として、お嬢様に突撃。ライフル二回狙撃されてもなんとそれを刀を光らせてかつこよく防いで弾き飛ばして、とどめのとときにブザーが鳴った。それが結末。

「で、一夏」

「な、なんでしよう」

冷や汗が流れ出ていた。

「練習に付き合ってくれたの下り、後悔してる?」

「やめてえええええええ!」

ぐるぐる転がる一夏。そして馬鹿にしたように

「あのね、レーザー斬らなくてもかわせたよね?かつこつけたかったんだよね?もっと相手の手前であのエネルギー攻撃発動させればさ、勝ったよね?もっと考えようね?高校生になったんだからね?あの状況で負けー、なんて無様だよ。あんなセリフ言った後にね?」

一夏は物言わぬ骸と成り果てていた。俺はため息をつきながら

「ま、精進するしかないな」

ぬるめのスポーツドリンクとタオルを投げ渡した。

「お疲れ」

これだけ言えば十分だ。むしろいいすぎか。トラウマにならな
きやいいけど。ともかく、こいつはもつと強くなるだろうし。俺より
もずっと先の場所に。

箒は

「帰るぞ」

それだけで――

「負け犬」

無かったようだ。追い討ちかけたよこの人。すごい。で、一夏は

「任せんよ！」

「世界の命運を？」

しゅんとうなだれる。コイツはよく発想が阿呆な方向に飛んでい
く癖がある。そんなもって時々それを口に出す癖がある。俺だつて
そこまで飛躍しないレベルで。

俺たち三人はしばらく無言で歩いていった。で、渡り廊下に出た辺
りで、箒が

「一夏」

「ん、なんだ？」

「その、なんだ……負けて悔しいか？」

「そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そ、そうか。それなら、いい……」

「悔しさがあるから精進出来るって言いたいわけだからね？一夏？」

「ああ、そういうことか。……これからも稽古をつけてくれないか？
箒」

「あつ、ああ、無論だ！」

良くやったお前！と目で俺に訴えかけてきてくれる。まあね、惚れ
た一夏にだけじゃなく、俺に対しても真面目に指導してくれたから、
これぐらいの恩は返さないと、ね。で、その時にだ。

「ところで箒」

「うむ、なんだ？」

「さつきからトイレに行きたいのか？」

俺は竹刀を防がなかった。自業自得とはまさにこのこと。

「清水くん！」

あ、この抜けた声。一夏が箒に連行されたので、一人どうしようかと部屋で悩んでいたとき

「山田先生、どうしました？」

「良いお知らせです！とうとう清水くんのISが届きました！」

よっしゃー！そう思ったときには駆け出していた。走って走って……

「どいっ！」

「はあ、はあ。待って、ください……」

後ろから先生が追いかけてきた。

「すいません。つつい興奮してしまいました。で、どこに？」

「さつきのISアリーナの格納庫です」

すぐさま駆け出した。とても心が躍る気分だ。人を避け、物を飛び越えて、そして

「あら、久しぶりね。元気にしてた？」

「し、師匠!?なぜここに!?!」

うちの企業の最強テストパイロット、一森羅香苗(しんらかなえ)さんが居た。身長は168cm、スタイル抜群でモデルと言われたら信じる。ただ、体力はそこらの男性軍人に軽く勝てるレベルの化け物。元日本代表のうちの一人。かなり出来る人で、ISだけじゃなく体力面でもしごかれた。格闘訓練は本業の人だったけどね、もちろん男。もちろん、この人に恨みは無い。あるのは感謝だ。とつても充実してたし。

「ちようどここに用事があったのよ。それでこれを一緒に届けに来たわけ」

「改造内容は？」

「各種スラスターの機能向上、展開速度の向上、内蔵武器の追加、特別後付武装。パックの調整とか。他にも色々。でも、前より間違いなく強くなったわ。第二・五世代が第三世代になった、って所ね。もう後一回、それなりの改造をする予定らしいけどね」

「了解しました。持ってきてくれて、ありがとうございます」
頭を軽く下げる。30度くらいの礼だ。

「それで、聞いたんだけど、イギリスの第三世代とやりあうんだって？」

「はい。男の子には色々あります」

「負けたら、承知しないわよ？」

相手のほうが遥かに長い時間乗ってるのに。とても厳しいなあ、師匠。でも

「もちろんです」

「よろしい」

につこりと笑ってくれた。それに俺はにつこりと返した。

さて、期待に応えないとな

四話 大和

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでない感じですね!」

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか?」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ!」

がたんとお嬢様が腰に手を当てるポーズをしてくれた。……犠牲者でました。一夏の。

「まあ、勝負は貴方の負けでしたが、それは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方の無いことですよ」

「へい、質問」

「邪魔しないで下さる!」

「えっとさ。一夏がクラス代表でいいんだけど」

「いや、よくないぞ?」

一夏の悲鳴は無視する。一夏の悲鳴で致命的なのは女性関係だけ。それ以外は大体問題ない。ちなみに前に言った真面目な理由つてのは、試合つてのは人を成長させやすいから一夏に場数を踏ませたかったってことだ。こいつは叩けば叩くほど伸びるので試合をさせたかった。

「俺の機体、昨日届いたんだ。一週間前、あんな言葉吐いちやったんだ。しかも師匠と約束しちまつてるし。だから、決闘自体は受けてくれるつもり?今日の午後ぐらい」

「勿論ですわ。このわたくしは勝負から逃げませんわ」

「ならいいや」

すつと腰を下ろす。で、お嬢様は

「ともかく、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして。一夏

さんにクラス代表を譲ることにしましたわ」

「いやあ、セシリア分かってるね!」

「そうだよねー。せっかく世界で二人だけの男子がいるんだから、同じクラスになったら持ち上げないとね」

中には商売の話をする人も居た。この学園の女子の逞しさは特筆に価する。さすが倍率一百万倍の高校。全員化け物レベルのタフネスがあるのか。

「そ、それでですわね」

コホンと彼女は咳払いをして

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに生長を遂げ――」

バンツ!

「あいにくだが、一夏の教育は足りている。私が、直接頼まれたからな」

おお、これは久しぶりの本格的にな修羅場。もう慣れたけどね。しかも、この人たち本気度がかなり高い。

「えっ!?俺、ISは希に教えてもらうつもりなんだけど。って言うか箒は剣道についてのはずじゃ?」

人は記憶を作り変えられる生き物だ。恋をしている乙女ならなおさらでしょう。ともかく、こうやって巻き込まれるところまではもう慣れた。コイツは男友達と楽しくやってる方が好きなので、修羅場を作っては俺や弾を巻き込んでくれていた。もはやコイツは動く人間災害と同様。まっ、楽しいことも多いけどさ。

「なっ、私の方が清水さんより上手く教えますわ!」

「それは分からないなー」

俺は棒読み風に答えた。

「なら、私が勝って私の方が上手く教えられると証明しますわ!」

名選手、名監督にあらずって言葉知らないのかなあ。この人、なんとなく教えるの下手そうだし。箒と同じ感じがする。強いけど、かなり感覚で教えるから、箒は。でも俺のレベル自体がかなり低いので、

動きを真似たり、覚えたり、試合したりするだけでかなり改善されたんだけど。あと真摯さも伝わったし。

「じゃ、俺は男vs女に初白星を飾らせてもらおうか。一回目は逃したけど、二回目やるほど男は終わっちゃいないよ」

「そう簡単に勝たせはしなくてよー!」

その日の昼食はイギリス料理を食べた。

「なあ、希。勝てると思うのか?」

「そう信じてる」

ISスーツを着たままそう答えた。ISアリーナの待機場所で、一夏と千冬さん、箒がやって来てくれている。

「信じるだけで勝てるほど世界は甘くない」

「ですが、信じることから始めてみようかと。信じる事から始めないで何を始めればいいのかってところですよ」

いかにもです千冬さん。世界最強の貴方が言うと言説力が違います。

「一週間稽古を付けてやったのだ。負けたら承知せんで」

「なんとまあ、負けられない理由が増えちゃった」

箒がムスツと腕を組みながら言ってくれる。でも、いつも思うけどその胸を強調してんの?一夏の気を引こうと頑張ってるのなら、すごい健気です。こっちも眼福ですが。

「男と女の二回戦目だ。初白星、頼む」

「もちろん。応援の声頼むぞ」

「もちろん」

グツと親指を立てた。それに同じように返してくれた。それが、何となく心地よい。

右手のブレスレットを掲げてISを展開する。俺の専用機にして、企業にいた様々な人の夢、ロマン、希望が詰まったIS。

胸を張って歩いて移動し、カタパルトに乗る。このカタパルトはISからで指示が可能だ。そして

「清水希、『大和』発進する」

大空に飛び立つ。

「あら、見かけない機体ですわね」

お嬢様が腰に手を当てたポーズで出迎えてくれた。いつもこの格好だけど飽きないのだろうか。

「勿論、俺の専用機にして第三世代I S、『大和』。まだ完成じゃないが第三世代機だ。スペックは十分同じだろう」

外見はかなりゴツイ。カラーリングは青と白の二色。腕も下半身も覆われ、上半身も覆われている。出ているのは顔ぐらいなものだ。だが、間接は問題なく動かせる。背中にティアーズと違い、非固定浮遊部位でなく、アームでロックした、1mぐらいは移動させれる半固定浮遊部位を二つつけている。さらに肩の横にアーマーをつけていて、さらに肩の後ろに武装アームを取り付けてある。中型スラスタは四基。腿の付け根や肩の後ろ下側、大型スラスタを二基、背中に間接各種に小型スラスタを内蔵し、機動力は高め。ブースターいっぱいあるしね。それなりに重いのでこれで上の中程度ぐらいの機動性。第三世代の中では平均ぐらいだろうけど。燃費は微妙に悪いよ？とは言え、カーボンナノチューブなど改良された最新装甲材を使っているのです、内蔵武装や装甲の割にはかなり軽いと言える。カーボンナノチューブなどの中にタンクステンやらの原子を詰め込んだ最新装甲のお値段は、とてもお高い。それなりに速度を出せるのに防御力は打鉄以上と科学技術の恩恵は凄まじい。

それでもって拡張領域はかなり高めの十八。他の第三世代が必死こいて特殊武装を積んでいるのに比べたら多めだが、それには理由がある。簡単だ。特殊武装、今はまだ無い。あと、効果が微妙なのが多い。

ともかく、お嬢様は少し驚いた顔をする。だがすぐに調子を戻して「乗ってる人間の錬度はどうかしら？……それにしても、目付きが普段よりずっと険しいですね」

「ほっとけ」

ISを展開……というか、バトルになると柔道の試合でも、マジになるゲームでもこの癖があった。普段がニヤニヤと言うか軽く細いだけで、試合中に目を開いているだけと思ってるけどね。

「それより、俺の機体の情報何も知らないのはフェアじゃないよな。何か三つぐらい教えようか?」

「馬鹿にしないでくださる?これは真剣勝負です。それに、搭乗時間はこちらの方がはるかに上。ちょうどいいぐらいですわ」

なるほど。確かにそうかな?ではお言葉に甘えて。

「それにしても、あなた武装はないのです?何も持っていませんが」

「開始直後に展開するから問題ない」

「舐めているのかしら?」

少し目付きが険しくなった。そりゃ舐められてると思われたらいらつくよね。真剣勝負しましょうとお互いに言ってるのに。

「いや、舐めていないから展開しないんだ」

「……まあ、いいでしょう」

「あ、そうだ。一つ忘れてた。俺の武装一つ置いてきてあるんだ。ちようどカタパルトの外に」

バリアーでカットされるが、カタパルトの最遠部はギリギリ確認できる。お嬢様を見ると、目視で確認したようだ。

「……それがどうかしましたの?」

「試合中に取れるなら取っていいか?」

「……取れると思いますの?」

ちようど、カウントダウンが始まった。五、四

『三』

箒を見る。真剣にこちらを見つめていた。

『二』

千冬さんを見る。箒同様、こちらを見つめていた。

『一』

一夏を見る。ガンバレ、口の動きは分かった。

『零』

お嬢様……セシリアを見る。銃口をこちらに構えた。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティ
アーズの奏でる円舞曲で！」

「展開！」

攻撃されるのと同時に希は同時に防具を展開。空中に、対角線4m
程度の回転する奇妙な物体が現れた。正十二角形の形で、隅には鋼の
ような長い棒が枠の役割を果たし、中央にシールドを張っていた。浮
かせるためにか、それぞれの角にスラスタのようなものがついてい
た。

「何ですのそれは！」

セシリアが見慣れぬものについて口を出した。

「白盾、エネルギー防御重視の盾さ！」

同時に彼は巨大な筒を肩に展開した。長さ四メートルほど、直径十
何cmという大型の砲。彼が射撃すると同時に白盾のエネルギーが
解除され、まっすぐセシリアに向かって発射される。

「馬鹿みたいな砲で」

展開された直後から馬鹿みたいなど言っ、ビットのことも忘れて
回避をしようとしたがそれは叶わなかった。それはセシリアと希の
中間地点で爆発し、煙幕を撒き散らした。

（つく、どちらが先に相手を見つけるかですわね！）

必死にハイパーセンサーなどを駆使するが、IS専用煙幕の為中々
に見見できない。希も同じようで、攻撃は来ない。時間にして五秒ほ
ど、短いようで、とても長い時間。そして

（見つけましたわ！）

ライフルを構え……おかしいことに気付く。輪郭が、先ほどより明
らかに大きくなっている。

（まさか、あれを展開するのに時間を稼ぐ為!?）

そのため煙幕を放ったのだと気付いた。

その直後にオープンチャンネルが届いた。

「奏でてやろう、俺と大和の奏でる鎮魂歌を！」

何真似してますの、そう思うのと同時に一体何の武装を展開したのかと推理しようとしてすぐ気付いた。直後にISが危険を知らせた。(全方位からミサイル!?)

それもアホみたいな数であった。合計四十八発。セシリア、必死にライフルとピットとミサイルで撃墜した。合計十六発を落としたがそこで限界であった。むしろそこまで落とせるのが彼女の狙撃の才能の凄まじさを見せていた。だが接近してくるミサイルはまだ三十二発。まだ三分の二も残っている。必死に後退しながらライフルで狙撃するが、所詮銃口は一つ。ミサイルもあるが装填速度は早くない。BT兵器の為の機体だから、実弾兵器は軽視されているからだ。

「お前の弱点は、移動中はピットを操作できないこと。本体の攻撃はミサイルとライフルだけ」

そこでセシリアをさらに絶望が襲った。煙が晴れて改めて希を見た。そこには、さらに大量のミサイルを装填した姿があった。

「ファイエル!!」

先ほどのミサイルより幅、長さは半分程度、数は八倍という凶悪な数のミサイルが発射された。だがセシリアはすさまじい射撃精度を見せた。密集している部分に射撃をし、誘爆を連鎖させた。大型ミサイルは頑丈のようだが、小型ミサイルは弱めのように、簡単に誘爆が起こった。爆煙で希の姿が消えた。

(今!!)

ミサイルの誘導性能は高い。だがそれを逆手に取る作戦。格闘が得意ではない自分が高速度で一気に突っ込み、相手の機体のわきを通ってそこでピットとの一斉射撃で誘爆。そして後は相手にミサイルを撃たせないだけ。

「武器だけでは勝てませんわよ!」

爆煙を蹴散らし、突っ込んだ。だが、そこにあったのは絶望だった。いつの間にかミサイルコンテナは全て外れていた。代わりに、半固定浮遊部位二箇所、肩アーマーには二箇所、レーザーが開いていて、両肩アーム二箇所のショットガンが展開、両腰二箇所に隠れてい

た粒子加速砲が現れ、両腕二箇所ライフルが狙っていた。合計十の砲門が彼女を歓迎していた。

(防具じゃなくて、武器――)

「かかったな!」

初見では驚くだろう。十八の収納領域のうち、両手ライフルで二。両肩アームのショットガンで二。ライフルと肩アーム武器、半固定砲の弾で三。最初のグレネードと盾で一。残りのがミサイルと射出ポッドだった。残り四は他色々。ちなみに、この収納領域の代償は燃料消費だ。ISコアにはそれぞれ特徴があるがこれは容量が高い。でも燃料消費効率ที่เขาより低めである。第三世代のISコアの多くは燃焼効率高めのを選ぶんだけど。

ともかく、重装甲重火力も出来る。追加装甲やらなんやらで。とは言え、初見だからこそ出来るけど、対策を採られるとそれなりに簡単に突破される。例えば展開に時間がかかるミサイルをバンバン撃ってきたり、ミサイルの発射直後に射撃とか。だが、今回は初見。セシリアは絶望の表情をしていた。

それぞれの砲口からそれぞれの弾薬が発射された。

砲が飛散弾を空にばら撒き、レーザーが装甲をえぐり、粒子加速砲が装甲を破碎させ、マシンガンとショットガンが弾幕を張り、ライフルが空を真っ直ぐ穿つ。

凄まじい濃密弾幕。必死に回避をするが、それでもかわしきれなかなりのダメージを負った。ただ、回避をする方向を工夫して流れ弾をミサイルにかなり当てたのは賞賛に値する。

「的当てと同じ要領だ!」

「ひどいですわねその機体!!」

が、十秒も経つとミサイルの燃料切れ。全て自爆した。だが、残っているのは傷ついて中破ぐらいしているブルー・ティアーズとエネルギーをあまり消費していない上に無傷の大和。旗色はかなり優勢。ただ、ミサイル弾幕もなくなったので武装は両手の武装は格納した。

「アレで決まったと思ったんだけどな」

「そう簡単には負けませんわ。それより、武器をしまつていいのですの?」

不利なのに自信満々な姿は正直すごいと思うね。その自信はどこから来るのか。

「いいんだよ。むしろ今は不利だ」

相手がミサイルに手を追われてる状態だからいいものの、これで撃ち合うと正直重すぎる。お嬢様のライフル技術ならすべて撃ち抜かれる心配もある。

「さて、ここからが問題だ」

次に武装を取り出す。六十七口径36mmマシンキャノン^{たいざん}大山。全長3m15cmの両手で使うマシンガン。他のマシンガンが口径20mmということを考えればいかに大きいか分かる。

「行くぞ!」

「来なさい!」

「希、勝ってるな。……あ!肩アーマー落とされた!」

「勝負は最後まで分らん。あの状況でもオルコットはビットも四基保持し、スラスターも全部使える状態だ」

「となると、まだ分からないということですね」

三人が二人の戦いを見守っていた。セシリアは高速機動を行いながらも正確な射撃を行っていた。ビットの攻撃を囨にしながら、回避した瞬間をライフルで狙撃するという方法や、その逆で。一方で希はシンプルだった。ベルトマガジン式で糾弾されるマシンカノンと肩アーマーのレーザー、半固定式浮遊部位のキャノンでひたすら濃密な弾幕を張る。特に36mmマシンカノンは近接信管も付いているので凶悪だった。射撃の際に反動制御の機能を切り、反動に身を任せる方法でレーザーを避けて互角に戦っていた。

「どうして反動を切ってるんだ?」

一夏が疑問を口に出した。それを千冬が

「奴には砲門が五……四つある。命中率は悪くても、数で補って攻撃

出来るからだろう。それでいて相手の攻撃はかわしやすくなる。相手の攻撃を避けることを重視しつつ、じわじわ確実に削ろうとしている」

「なるほど。さすが希、考えてるな」

「つまり、このまま行けば希が勝つということでしょうか？」

箒が千冬に質問をした。

「いや、いつまでも射撃ができるかどうかだ。無理に濃密な弾幕を張っているのだ。弾薬の消費はかなりのものだろう。それに今ちようど、固定浮遊部位が落とされ砲門が三つになったところだ」

ちようど言い終わった時だった。六分程度続いていた射撃戦は終わりを告げた。

「あら、どうしましたの？」

「いけね、弾が切れた」

レーザーは無理に動かし続けてオーバーヒート。半固定キャノン は弾切れ。マシンガンも同様。エネルギーはまだ410はある。最初590と白式より多めだったが、試合時間十分ということを考えればそれなりに消費してる。射撃戦のする前は565だったということとを考えるとセシリアの射撃力がすさまじいとよく分かる。ただ、セシリアのエネルギーは推測するに150を下回っているところだろう。こっちは武装を二つ落とされたけど、外装なので深刻なダメージにはならなかった。

「では、ここから私の反撃が始まりですわ」

「ビット残り三基なの？」

濃密弾幕とフェイントなどで何とか一基落とした。最初から侮らず攻撃してきてくれたおかげで落とすにいくいたらありやしない。

「ええ、なぜなら」

相手のスカートから砲口が二つ覗いた。

「ミサイルはまだまだいっぱいあってよ!!」

ミサイルを撃つと同時に、弱めのビットレーザーが放たれる。回避をするがレーザーが撃たれる。ミサイルもやってきていてさあ大変。

こっちの弾幕が張れないからセシリアの射撃精度がぐつと増す。一夏は高速機動型機体とはいえ、初めて乗った機体でこれより濃密な砲撃を回避してたかと思うと改めてあいつのすごさが分かる。

「今度はあなたが追い立てられる番ですわ!」

事実、スラスターを吹かしながら俺は追い立てられた。だがただ追われるだけは気に食わない。相手の攻撃を回避しながら先ほどよりずっと小さい、それでも重火機関銃に値する武装を取り出す。申し訳程度に弾幕を張りながら、少しずつセシリアの上空に移動する。何発か直撃しながら上空に移動をした。

「太陽を背にしても無駄ですわ!」

「違うね!」

同時にパージをする。パージするのは半固定キャノンと肩アーマーレーザー、大型多方向スラスターもパージ。更に被弾して使い物にならなくなった装甲各種。外見がスマートな機体になり、体も露出が多くなる。男の露出が増えて喜ぶ奴がいるかは疑問だが。あ、でも一夏の露出は喜ぶ奴多いかな。

「何を――」

爆音が響いた。俺のマシガンがセシリア付近まで行った武装を全て撃ちぬいて壊したからだ。装甲もいい作用にはたらいって爆風で破片となった。

「今だ、来い!」

カタパルトの方角からロケットブースターで接近してくる武装があった。

「本当に使うなんて!させませんわ!」

セシリアは意識をこれに向けさせて気をそらすだけの何かと思っていたようだ。そうでなくても英国貴族なら紳士的に射出までまっけてくれただろうけど。ヒーローの変身を待つ悪役みたいな優しさで。

ロケットブースターに向かって攻撃をするが、それなりに頑丈な装甲を張ってある。無事に上昇しつつ、俺も合流地点に向かって加速。

三、二、一

「これが噂の合体ですよ!?!」

セシリアからはもはやブースターは隠れた。俺が体で隠し、同時に白楯を展開する。

「これで!」

背中ジョイント部分が武装に伸び――

「かかりましたわね!!」

ビットのレーザーが背中を直撃した。

五話 決着

「くそー！希はどうなった!？」

セシリアは後ろから突如現れた武装に対して攻撃をした。ちょうどロケットブースターを撃つような形で。燃料に引火し、かなりの爆発を引き起こしていた。

「……運が良いやつめ」

千冬が呟いた瞬間、爆風が晴れた。そこにはしっかりと空を飛ぶ希の姿があった。

「運がいいですわね、でもそれなりに削れたのではなくて？」

「いや、なんとかロケットブースターを分離できてね。ダメージはそこそこだ。六十ぐらいか」

「ところで、その武装は何のですの？」

奇妙な形としか言いようがなかった。ただの四角の箱に見えるが九本のアームの先にカメラのようなものを取り付けてある。ただ、それだけの箱。

「第三世代……をさらに意欲的に、みんなに使えるようにといったコンセプトで作られた機体だ」

「まさか、背中のパックでそれぞれ特殊武器を使えるとも？」

「さっすが、察しがいいね」

パチパチとISの腕でごつい拍手を行う。が、彼はため息をついて「でも欲張りすぎだね。それぞれにひどい欠点があるけど……使いたるところを間違えなければ十分使える。さて、行くよ。何度も言ったけど……いったつけ？まあいいや、ともかく男の希望のために!!」

一瞬で掻き消えた。今までの比ではないスピード。セシリアはあまりにもその速度の違いに反応が遅れた。それが出来た原因は単純に装甲や武装を取っ払ったことによる重量低下、さらにこの試合で初めて瞬間^{イグニッションブースト}加速を使ったこと。

「ですがっー！」

ライフルを構え、ビットの位置も調整。真つ直ぐ突っ込んでくる希に向け、射撃。狙いは完璧だった。タイミングは完璧に捉えられ、四本のレーザーが彼を通過した。百五十近くエネルギーが削られていても……

(え、何で)

おかしいことに気づいた。希を、大和を、ISをレーザーが通過した。普通なら表面で爆ぜるはず。なのに

(そんなことが！)

そう思った瞬間、下から直撃を受けた。衝撃で上に吹き飛ぶ。その上に希が回りこんできて、片手に構えている近接戦闘武器……全長140cmほどの刀を振り下ろす。またもやライフルとビットで応戦が、またもや通過した。そうして

ガンツと大きな音が響いた。上からでなく、横からの攻撃。セシリアの目にはにやついた希の目が写った。

『試合終了。勝者、清水希』

彼は上空に飛び上がって右手を掲げて言った。

「この機体は企業の男の人たちが作ってくれた、最高の機体だ！夢もロマンも希望も詰まってる！まだまだ男は終わっちゃいない!!」

「やったな！希!!」

一夏がハイタッチをしてくる。それに俺は笑顔で同じように返す。「うむ、良くやった。……何と言うか、袋叩きにしたという感じだった」

箒が険しい顔をしながらも褒めてくれた。……褒めてくれた？

「まだまだだ、精進しろ。……が、良くやった」

この人に良くやったと言われるのはよっほどじゃないと無理。地味に、かなりうれしい。

「まっ、あのセリフを顔を赤くしないで言えたら――」

黙って一夏をぶん殴った。

翌日

朝食はまたイギリス料理。隣で怪訝な顔をした二人を共にいつもより少し早めに食べた。そして、少し早めにいつものメンバー（俺、一夏、箒。たまにのほほんさんとか）で教室に移動した。そこでセシリアと目が合う。すたすたこちらからも、向こうからも近づいてくる。そしてセシリアはスカートをつまみながら優雅に礼をして

「清水さん、昨日はどうもありがとうございます」

「こちらこそ。それと……先日はかなりの無礼を言った。GDPや面積などの指標は所詮数字。国は国民の幸福をどれだけ高めているかが重要なのに。正直GDPなど数字だけだ。すいませんでした」

体を30度くらい下げる。顔を上げるとセシリアの驚いた顔が見えた。とても意外だったのだろうか、俺の人物像はどうなってるんだろう。

「いえ……こちらこそ、極東の文化遅れの国などと言ってしまい、申し訳ありませんでした。それより、負けてしまいましたね。これでは一夏さんに教えるなんて無理ですわね」

かなりしよぼくれ気味。そりゃ訓練始めて二ヶ月経ってない素人に負けりやね。箒はよっしやと思っっているようだが……しやあない。「いや、所詮は初見殺しの武器ばかりだったから仕方ない。射撃精度、機体操作、どれをとっても俺より上だ。格闘戦は無理でも、対狙撃戦の役をするのはセシリアの方がいいだろう。第一、固定したメンバーより様々な人と対戦したほうが腕を磨きやすいし。一緒に一夏に色々教えてくれ」

「希、お前何を!？」

箒が怒る。殺気が怖いです。良く考えると一夏に絡みだしてからだなあ、殺気が分かるようになったのは。でも逆に、セシリアはパアツと笑顔を輝かせ、俺の腕を持ち上げて

「そ、そうですね!様々な人と対戦したほうが腕を磨きやすいですわね!だから私が一夏さんと放課後腕を磨きあうのも当然のことですわ!ですよ、一夏さん!」

いきなり一夏にふられ、一夏はどうしたものかと思ったようだが
「あ、ああ。希が言うならそうだと思う」

ここで俺の名前出すの失敗だよ君。まあいつか。さて、最後に
「そう言えば、昨日の昼食と今日の朝食、イギリス料理を食べたんだ。
美味しかったよ」

「ええ、もちろんですわ!」

不味いと言ってしまった一夏は申し訳なさそう。でもそれでいい。
「でも紅茶の時間は午後がいらいらしくてさ。なあ、一夏も一緒に本場
の紅茶を体験させてもらおうぜ。俺たちセシリアと喧嘩してたし、仲
直りとして改めてさ。一夏もイギリスの飯不味いかいつて後悔し
てるだろ?」

「まあ、そりゃつい言ったんだし……俺も飲んでみたいな」

そう言うと、セシリアは俺の腕をブンブン回して

「あなたは素晴らしい人ですわね!勲章を与えないのが残念ですわ
!あなたのこと、希さんと呼んでもよろしくて?」

「俺はセシリアって呼んでるしね。構わないさ。それと一度手を下ろ
して、改めて」

右手を差し出す。セシリアも右手を差し出し、握手をする。

「よろしく、セシリア」

「はい、希さん」

おお、これが英国貴族の女性の微笑み、すさまじいダメージ。これ
を一夏にぶつけてけば、どうなるかね。が、その笑顔が突然真面目な
顔になる。

「ところで、昨日の戦いの最後、あれは一体?」

「ああ、『大和』の武装の一つ、幻想機動。簡単に言うと自分のエネル
ギーを大気中に散布してそれをレーザーとかで着色できる。数秒間
の固定化も可能。将来的には動かすのも考えてるらしい」

「……最初から使えばよかったのでは?」

ところがどっこい、そうはいきません。それが現実ですツ……!

「欠点。エネルギーを使って回避するってこと。違う視点から見ると
こっちの移動は丸分かりなんだ。しかも、自分の機体の正面だけに発

動すると発動した瞬間自分も動いて分身状態になる。それを避ける為に正面だけじゃなくて自分の移動方向にもエネルギー散布するんだ。イメージ的には自分の前面に長くて厚めの板を展開する感じ。弱点は……もうわかるよね？」

「つまり、エネルギー消費が激しいと？」

「その通り。遠距離でレーザー撃たれるたびに回避するんじや割に合わなさ過ぎる。しかも幅1.5m、長さ5m程度までしか展開できないから。しかも薄く張ろうとするとセンサーに一瞬でばれちゃうからそれなりに厚さも必要だね」

相手の視点外に出しても、ISのセンサーを反応させるにはある程度のエネルギーが必要だ。そこに振り向いて像を見せ、そこで攻撃する必要がある。

「近距離で、短い距離じゃないと幻想を使って攻撃まで繋げれないんだ。ちなみに、あの時セシリアを攻撃して、二回でエネルギー50ぐらい喰った。使い勝手が悪い兵器さ」

ちなみにライフルを直撃して絶対防御発動で75ぐらい削れる。つまり三回発動したら絶対防御の直撃に匹敵するぐらい使うという超絶欠陥兵器。燃費さえよくなれば恐ろしく使い勝手がいいんだけど。近距離で一撃叩けば100以上上げられるのがざらだし。

「なるほど……でも、あなたは使いこなせましたわ」

「二発ネタには困らなくてね」

ちなみに、午後のティータイム箒もやって来ました。二人の睨み合いがすごかったです。セシリアのこの人どうにか出来ませんか？という視線と箒の貴様分かってるな？という視線の中、一夏の紅茶うめえと言う声が一際苛立った。確かに美味いけどね、紅茶苦手だけどこれは飲める。

「少しいいか」

「一夏……じゃなくて、多分俺？」

「察しがいいな、めでたいことに」

ドナドナ気分で一人連行される。一夏は俺も行こうかとか言っただけど手でいらないと示す。箒に連行され、今日も相変わらずガードが薄いパジャマを着ている同級生たちに奇妙な目で見られながら箒の部屋に入る。同居人は外に出かけているようでないようだった。で、ダンと足踏みしながら

「なんであの女の肩を持つ!？」

怖いね。専用IS持っていなかったら多分来る勇氣なかった。美少女に木刀で叩かれて喜ぶ変態はこの世界に多く存在するらしいが俺はあいにくその趣味は無い。むしろ叩いて躡りたい側です。つといけない。

「あのね、俺は身にしみて経験をしてる。一人の肩を持つことの恐ろしさを」

「……どういうことだ？」

俺はため息をつきながら

「一夏はさ、女性関係とかで困ると俺に頼ってくるんだ。中一の時から。買い物に誘えだの髪型を褒めるだの。それでさ、いつからか俺が重要視され始めたんだ。一夏は俺に相談したとか言わないように言っておいたから、学校で盗み聞きされたんだろうな。それからある女子が『私を一夏とデートさせて』無理って答えたけど『じゃあどうしてあの子には買い物と一緒にいかせたの!？』それからさ。あちらを立てればこちらが立たず。しょうがないから自分の利用価値を大きく見せて、自分に手を出させないようにするしかなかった!だって酷いときにはヤンデレ少女に刺されそうだったんだ!!しょうがないだろ!!!あの時はもう楽しむ余裕はなかった!!!」

ダンツとつい机をたたいた。いかんいかんと自制するが、箒はかなりびっくりしたようで引いていた。自分で言うのもあれだけど、取り乱すことめったに無いしね。ちなみにヤンデレ少女は一夏がどうにかしてくれて普通の少女になっている。

「……すまなかった。幼馴染が迷惑かける」

「ほんとだよ。誰かが仕留めてくれればいいのに、アイツは鈍感・難聴・朴念仁の三拍子がそろった人間だし。でも誰かが仕留めるのをサポートしたら他から恨まれる」

「……さつきは悪かった」

猛省してするように頭を深く下げる。さつきするとき服が乱れたようだ。胸見えちゃうよ君。とは言え下げようとした瞬間に横にずらしたから全く見えてないけど。さすがに誰か好きな相手がいる人の体をじろじろ見るのはマナー違反だよ。しかもそれが親友となればなおさら。

「なぜ顔をずらす？失礼ではないか」

まじ無防備だな。一夏はよくこういった人たちをスルーできるもんだ。

「むしろ俺の紳士力を褒めてくれ」

「何のことだ？」

「一夏以外にするな」

そう言われて気づいたのか、着物が少しはだけていて頭を下げた瞬間俺の角度からなら見えたであろう事に。箒は顔を真っ赤にして

「す、すまない。……お前は一夏と真逆みたいな奴だな」

「一夏なら見て顔真っ赤にしてばれて木刀コンボだよ。……ともかくさ、だから誰かに肩入れ出来ない。むしろ箒にはかなり肩入れしたと思うんだけど。自覚ない？」

「……いや、ある」

だよ。そりゃ、あるよね。俺でもやりすぎかなって思ったんだから。ちなみに肩入れして無くてもこうやって自覚ない？とか言えば相手はあるって言うのが多数。雰囲気で押し通すのがコツ。

「お前が仕留めてくれれば良かったのに」

心のそこから……ではないかもしれないが、それなりにそう思う。実際には、いつも悲劇を目の当たりにしてたアイツの方に勝って欲しいけどね。

「無茶を言うな！アイツはネジがいかれているとしか思えない!!」

想い人のことすさまじく悪く言うね君。今度は俺が勢いに驚いて

腰が引けた。

「ともかく、そういうことで」

腰を上げて部屋を出る準備をする。が、その前に言って置くことがあった。

「一応他の理由もあるよ?」

「なんだ?」

「一夏には俺がサポートどころかどうした奴じゃなくて、自分の意思で好きにさせた奴と幸せになってもらいたいってこと。ま、これでもダチなんだ。アイツの幸せぐらい願うさ」

「……お前は、とてもいい奴だと私は思う。だが、恋人とかそういうたのにはどうしてかなかなか考えられない。なぜだろうか?」

そりゃあもう、昔から分かりきってる。

「胡散臭い性格ゆえさ」

「治す気はなさそうだな」

呆れたように言われた。

「意外と気に入ってるからね」

六話 転校生、襲来

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、清水、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬、ヤマザクラなどの遅く咲く種も花を散らしたころ（多分）、今日も授業を受けていた。千冬さんの授業はむしろ特訓と言わべきか。

「はい」

いたって普通に返事をしながら展開。セシリアに遅れて俺も展開するが、一夏はまだ出来ていない。こればかりは経験だから仕方ない。専用機をくれたとき、内緒で部屋内部でひたすら早く展開する練習とかしたし。……変身ポーズを作ろうとしたのは秘密だ。頭の中に浮かべながら展開するのも秘密だ。というか空中に魔法陣描きながら剣を取り出したり出来ないかな。すっげえカッコイイと思うんだけど。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ。それと清水、くだらない事は考えるな」

「すみません」

こんな事も当てられるのだからそりゃ敵の先読みは簡単にできるわ。

「集中しろ」

一夏はガントレットを左手で掴んで展開した。んー、これは内緒で部屋で展開練習させた方がいいかな。やっぱり。全員の前だと緊張感で違ってくるけどさ。

「よし、飛べ」

セシリアより遅めの上昇速度。やはりセシリアは出来る奴である。一夏は千冬さん……教官から叱られている。ちなみに、急上昇急降下は一夏に教えた。イメージが重要だが、セシリアは

『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』らしい。天才とは天才たる由縁があるようだ。しかし、この説明下手？のおかげで一夏は俺に駆け込むようになってしまい嫉妬の視線で焼き殺されそうです。ちなみに俺は背中から何か噴出するイメージとかどうだとか言った。

他にも数種類。アニメなどを参考にしたのもある。今の所背中……というより進みたい方向とは反対から力を噴出する感じで俺も一夏も落ち着いている。やっぱり物体は反作用で動くつてのが一番納得しやすいということだろう。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときはふたりきりでどうでしょう?」

「いや、今日は希と練習する約束があるんだ」

「いやーあつはつはと笑う一夏。こいつは本当になんで俺を修羅の道に巻き込ませようとするかな。傍観者してるだけで楽しいのに。巻き込まれたら命を危険を感じるんだけど。」

「お前は何で俺を巻き込みたいんだ?」

「ため息をつきながらこう言う。独白しないで言うのは、こういえばセシリアから敵対度が下がるから。ま、それなりに仲はいいけど一夏関連は色々面倒な配慮が必要だ。」

「一夏っーいつまでそんなところにいる!早く降りて来い!」

「箒さん本当にアグレッシブ。これをもう少しねえ。笑顔とかもつと見せればいいと思うけど、昔からの性格からか、難しいようだ。武道っ子はこうなのか?誰でも。」

「織斑、清水、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です」

「あいさー」

「ヒュンと急降下。1Sなら上空200メートルでも二秒程度だ。残り七メートルで急停止をかける。試合なら燃料効率を考えてやらないような噴射。体に凄まじい負担がかかるが、一応これでも身体能力は一年生で総合ではかなり高い位置にいるのだ。世界選手権で女子は男子より少し劣っている程度の種目が多いが、ここは学校だ。男子より身体能力が全部秀でているような女子は殆どいない。」

「ちなみに俺が一夏をこえてるのは自分で意外に思ったが、小学生は真面目に部活をやってるし、中学も同様。一夏は中学全くやれてなく自主練程度。で、最後の追い込みに一ヶ月半程度軍隊生活を行ったの」

だ。よくよく考えれば一夏を超えているのは当然だ。……一緒にトレーニングしていると凄まじい伸びもみせるし、剣道やればそれなりにボロクソなんだけどね。勝ってるのは身体能力だけ。ともかく、何が言いたいかという女子に比べて頑丈なので、無茶な機動も出来る。セシリアは確かに技術では完璧に上だが、体に無理を利かせて地上14cmで停止。

「まだ甘いな。それと、体に負担をかける動きはやめろ」

「見栄張りしましたすいません」

で、上を向いて一夏を見る。ギューン、ズツド……ならないか。教えてたかがある。なんと俺よりセシリアより高記録3cm。

「……運が良かったな、織斑」

「はい、その通りです」

実際にはギリギリであったようだ。だが、こういった土壇場でもやるってのは相変わらずすごい奴だ。いくらISの保護機能があるとは言えジェットコースター以上の速度で垂直に落ちていくのに。正直慣れていても、試合じゃないこういったときはかなりの恐怖だ。試合の最中は興奮して気にならない。

「衝突するかと思っただ。だがおめでと」

「いや、本当に運が良かった。指導のお陰だ」

すぐさまプライベート通信を発動。プライベート通信は言葉でなく思念みたいなもんだから、しゃべるのよりずっと多く情報を伝えれる。会話で10秒かかるのを1秒ぐらいで伝えれるレベルだ。

『二人のなと付け加えろ』

「二人のな」

その言葉に筈とセシリアが顔を赤らめる。乙女の頭は夢の世界並に都合がよさそうだ。どちらも自分かと思ってる。そしてもう一人は俺という考えだろう。

『なあ、どうして二人は顔が赤いんだ。というか、主にお前に教えてもらったような……』

ちなみに、プライベート通信のやり方はセシリアいわく『頭の右後ろ側で通話をするイメージ』らしい。一夏はなるほど、分からんと

いった感じだったが、適当に右後ろの脳部分が言語で重要な割合を占めているからそれに関係してるとかなんたら説明したら出来たよ。うだ。あ、脳部分がどうかのくだりは嘘。いや、調べてないから本当かもしれないけど。ともかく本人が納得することが重要だ。たとえ嘘かどうか分からなくても。

『あの二人の言葉を噛み砕いて、俺の考えも教えただから』
『そっか。……アレ？なら三人じゃ』

今更遅い。俺もしまったと思った。いつも正しい選択を出来るわけじゃないんだ。二人と言ったから後からいざこざ起こしちゃうかなあ、三人なら三人でまあ納得しただろうし。ちよつと面白い方に転がそうとしただけ、たまに失敗して自分に飛び火するけど。

「……あら、篠ノ之さん、二人とは私と希さんのことですよ？」

「何を言ってる。私と希のことだ」

『失敗しちゃったぜ』

『どうすれば』

『どうしようもない。教官待ちだ』

ギツとにらみ合う二人を教官が押しつける。この人は授業中馬鹿やってるのを見逃すほど甘くは無い。

「端っこでやっていろ馬鹿者ども。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになったらどう？」

有無を言わせない態度、この人の旦那さんはいったいどんな人になるのか、もしくは出来ないか。とか思ってたらすさまじく睨まれた。距離が離れてて良かった。

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめろ」

無事に出現する。だが教官は厳しいようでお叱りを受けた。

「セシリア、武装を展開しろ」

ん？オルコットから変わった？……意外と気分屋だからしかたないか。ちなみに、ライフルを展開するのは恐ろしく速かったが、ポ―

ズと格闘武器でお叱りを受けた。

「次、清水だ。納得できなかつたら、分かるな？」

さっきのことを根に持つてる様子。というか相変わらずエスパーだなあ。

「はい。何を？」

「連続で何個かやって見せろ」

「了解しました」

まず右手に六十口径ショットキャノンを展開。同時に左に170cm大型ソードを展開。次に両手にマシンガン、次に左に槍、右に拳銃。皆驚きの表情。教官すら驚きの表情。

「両手展開とはやるじゃないか」

本当に驚いたように言う。でも残念なことに、

「技術の進歩つてすばらしいですね。実は反則でシステムのサポートを受けてました」

皆がガクンとなる。教官は一発俺を殴っただけだ。防御が働くはずなのにかなり痛い。打つタイミングで防御を貫通する方法でもあるのだろうか？達人にしか出来ないみたいだ。ちなみに、このシステムは高速切り替え戦闘をロマンとする人たちが組んでくれたもの。とは言え、無い方が最終的には早くなる。一個出すだけならセシリアの方が早いしね。両手一気に出せるから1.5倍ぐらい早いけど。ともかく、練習として使ってるわけだけど、そろそろ限界速度に近づいたので調整しないといけない。ぱつと一回変えるだけならいいんだけどね。

「では真面目に」

ライフルばかり使うわけではないので、色々とそれなりの速度で出せる。これでもIS適正はB+だ。一夏がBで俺がB+なのはおかしい気がする。ま、最初の基準みたいなもんだし生長速度は違ってくるだろうけど。あ、これでも展開速度の上達は早い方だと師匠は褒めてくれた。昔から器用貧乏な性格だし。

「まあ、そんなものか」

特にお叱りなく終了。だが意味無く殴られた。阿呆な事は考えな

いようにしようと思った。

「とうわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

「ありがたや〜」

「お前は何だ!？」

少しボケただけだ。たまにはボケたい時もある。つつがなく女子たちのトークが進んでく。人気者だなと一夏を箒がやつかんだりする。そこに

「はいはい、新聞部です。話題の新入生二人に特別インタビュー！あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。これ名刺」

二枚渡される。

「ではずばり織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

一夏は困ったことがあれば俺に頼ってくる奴だが、こうったときにはしっかりと自分で答える奴だ。

「えーと……なんというか、頑張ります」

不満の声が鳴る。それに対して一夏が前時代的な返しをすると、まだ不満なように適当に捏造しておくらしい。おい、ちよい待ち。

「では、もう一人の清水希君！織斑君がクラス代表になつてどう？」

「ま、中学のときからの腐れ縁ですし。勝てるように訓練の相手もするつもりですし、作戦も練りますよ」

ちなみに一夏の場合作戦を組むのは簡単だ。だって斬るしか攻撃手段ないしね!!作戦もくそも、相手の弱点を伝えるだけだ。

「えっ、まさかこれ」

「女だけの学園に禁断の……?」

「これが噂の腐れ縁……?」

「テメーラの頭のが腐ってるわ!!」

つつい後ろに向けて絶叫した。一夏は何も分かってない様子。全く、この手のやつかみがなんとも多いことか。一夏がホイホイ俺に付いてくるのが原因だけどね!

次にセシリアが求められてそこからキャーキャーワーワーの事態になった。一夏とセシリアとツーショットかと思つたらクラスの子が割り込んだり、皆で牽制しまくりだった。連携能力が相変わらず高い。さすが千冬さんのクラスは一味違う。

「じゃ、最後に男二人で仲良くお願いね」

「あいさー」

近寄つて隣に並ぶ。肩に腕を乗せ……乗せてきてる？確かにいつも乗せてるけどね。

「この状況で肩に腕を乗せるのか？」

「俺とお前の仲だろ？いつものことだろ」

お前のイケメンっぷりは分かったから。腐海を広げる真似はやめてくれる？このときぐらい乗せるのやめてもよくないか？腐つてやる、遅すぎたんだになるんだけど。

「はい、チーズ」

見せてもらった写真にはセシリアと箒が写っている。加工すれば二人だけの写真にはなるだろうが。それより、二人を手招きしてとても大事な事を確認する必要がある。

「ねえ、疑ってるの？君たち、ねえ？」

「いや、その」

「一瞬頭をよぎってしまいました」

何をだテメーラ。ぶっ飛ばすぞ。最大火力で。絶対防御ぶち抜くぞ？

「だとしたらいけないと思つたら」

「いつの間にかこうやってしまいました」

二人とも息ぴったり言い訳をしてくれた。

「あのね、俺ノーマルだし。一夏もノーマルだからね。ライバルは今の所二人だけだからね？」

「何の話してるんだ。さあ帰ろうぜ」

これが原因なんだと思うと悲しくなった。

「しみずー。ねえ、転校生の噂聞いたー？」

一応、一夏はモテモテハーレム野郎だが、クラス全員が惚れているわけじゃない。倍率高いから諦めている女子や、あまり興味ない人。腐海の住民も。そしてこうしたのほほんさんとか。セシリアと模擬戦をして勝つてから、一夏を通じない交流もそれなりに増えている。のほほんさんはその前から交流があるけどね。当たり前だけど、普通の男女の友達感覚。……ですが、誰構わず抱きついてくるのやめてくれませんか？あなた意外とスタイルいいんですから。腕取られないように気をつけてるんだけど、この子武術でもやってるのだろうか。踏み込みといい、相手の間合いの取り方といい……俺が無意識に腕を取られようとしてるって可能性も否定できないが。むしろこっちのが高く思えてきた。男は皆スケベ。

「へえ、珍しい。今の時期にか」

「そう、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

中国か、思い出すな。アイツを。

「あそこはどんな武器だっけ？」

「衝撃砲とかじゃなかった？でも第三世代の機体を持つてくるかはわからないよ？」

そうだそうだ、それだ。でも確かにそうだよな。でも途中転校だし可能性高いと思うけどな。実戦レベルで投入可能になって乗り遅れる形でやってきた、ってところじゃないだろうか。

「そうだった。もし第三世代だったらぜひ見てみたいな。どこのクラスか分かる？」

「そこまではまだ分からないみたい」

「ま、そのうち分かるか」

その後数人と他愛の無い雑談を繰り広げていた。一夏も隣で同じような話をしており、箒に転校生が気になるとかいつて怒らせていたが。……いや、さすがに一夏は悪くないな。血気はやすぎるだけだ。彼氏彼女の関係になってたら気持ちとしては分かるけどね。が、そこにセシリアも乱入。俺ものほほんさんも一夏の会話に加わりながら話は進み、

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだか

ら、余裕だよ」

油断すると落ちるのがこの世界だけどなあ。とくに一夏の機体は欠陥機体だし。攻撃特化とかロマンあるとは思う。特化機体とかゲームでは良く使うけど、現実となったらやはりバランス型が最もベターといわざるをえない。場合によつちや特化機体も強いけど、その状況に持ち込むには技術が必要だからだ。そして技術を磨くのは難しい。千冬さんがいい例だ。

「——その情報、古いよ」

耳を疑った。一年前ぐらいまで良く聞いていたその声。またいつか聞く事になるだろうとは思っていながら、まだまだ先のことと思っていた。だが、今、その声が聞こえた。声の方を振り返る。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは

「まさかこんな所でねえ、久しぶりだな。鈴」

「鈴……？お前、鈴か」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好つ……じゃなかった」

なぜか一夏は俺の方を見て頷いてから、また鈴に向かった。

「いやあ、背伸びたんじゃないか？」

「そ、そう？……一年も経つものね」

まんざらじゃない様子。気になる男子から背伸びた？といわれて喜ばない奴はいないだろう。

「会えなくて寂しかったぞ」

「さっ！寂しい!?!」

すごく慌てふためいて顔が赤くなり出す。乙女の思考回路ではもっと飛躍してるのではないだろうか。それにしても、あれまさかコイツ

「一年前より綺麗になったんじゃないか」

「あ、ありが……ありがと。あ、アンタもかつこよく、なったじゃない。

その、希もね」

顔を真つ赤にしながら鈴が大人しくなる。そしてモジモジしながら一夏と俺を褒める。この状況でも俺を褒めれるとは。昔より精神力上がったな。一夏だけにかまけてないで俺もダチとして思ってくれてることに心が温まる。

さて、現実見ようか……あのさ、この状況で言えるってすごいよね、一夏。俺が前言ったことこんなときばかり実践しなくても……。箒が俺を睨んでる。目が『余計なこと言ったな』の断定系。そりゃ一夏がこんな気の利いたこと言わないよね。男に対しては言えるんだけど。同姓に対しては察しがいいことに定評のある一夏。ともかく、箒から目をそらした……先にセシリア。目が『余計なこと言いましたわね』の断定系。目をそらして大人しくなって可愛い鈴に顔を向ける。和むわあ、猫みたい。頭撫でたら怒られるだろうけど。

「そつ、それじゃあまた後で！逃げちゃ駄目なんだから!!」

恥ずかしさに耐え切れなくなっただっだどと逃げていった。悲鳴を上げたのは苦手な千冬さんに遭遇したからだろう。それにしても

「アイツ、IS操縦者になったんだなあ、驚きだよ」

本当に驚きだ。本当に。感覚で言えば一年前の女友達が何らかのスポーツ世界選手権に出場候補となっってやってきた感じだ。しかも突然始めたスポーツで。

「だよな、あの鈴がだなんて」

一夏は感慨深そうに腕を組んでいた。これからの地獄の前にはその余裕は続くのだろうか。女三人集まれば姦しいと言うが、同じ男を好きになった女が三人集まればもはやそこは修羅場以上の何かだ。傍から見ててうらやましいと思うのは、最初の一時だけの、修羅場だ。

「……一夏、今のは誰だ？それと希、話がある」

「い、一夏さん!?あの子はどういう関係で？それと希さん、話がありますわ」

予想外、俺の方は地獄のようだ。修羅場よりマシと言えるか否か。この時間は千冬さんが残り数秒で来る、SHRの間に全力で対策を立

てないと……。

七話 約束

S H R が終わった瞬間外に逃げ出す。それが俺の選択だった。千冬さんが号令をかけた直後に、千冬さんより早く出る。そうすれば I S も展開不可能。俺を暴行しようにも教師の前では不可。よって残った一夏が標的になる。目論見を果たし無事外に出る。後ろから追いかけてくる気配は無い。ゆつくりと戻って、不思議な光景を目にする。あの二人が、動いていない。他の女子と一夏が話し合いをしている。……かなり考え込んでるんだな。まっ、なら問題ない。大人しく机に戻って次の授業の準備をしながら色々な人とおしゃべりに興じる。

「お前のせいだー！」

「あなたのせいですわー！」

昼休み開口一番に一夏に対して言った言葉。流石に理不尽かと。山田先生に注意五回、千冬さんに三回叩かれている。学習するべきだろう。とりあえず学食行こうと提案する。多分早めに行かないと、アイツが待ってるだろうから。数名のクラスメイトも付いてくる。前はもつとひどかったけどね！一応、トップクラスの美少女が二人付いてるので諦めてるのが多い。二人がいるのって結構助かってるんだよね。

券売機で醤油ラーメンと餃子を注文。他はいつもと同じようになどんや洋食ランチなど。

「待ってたわよ、一夏！希ー！」

立ちふさがるのはかなり嬉しそうな鈴。今朝のが効いてるんだろ。うな。ただし立ち塞がれるほど大きくは無い。とは言え代表候補生、十ヶ月から訓練したとして、俺は訓練一ヶ月半と柔二年。体格差を考えると肉弾戦では何とか勝てるレベルだろうか。正直怪しいと思うが。柔道なら流石に負けはしれないと思うけど。単純な筋力勝負も。

「とりあえずそこどうな？ 通行の邪魔だ」

ちなみに俺は地味にこういうのが大嫌いだ。目の前に広がって通行の邪魔をする連中は。

「あ、ごめんごめん」

言われてすぐどく鈴。よろしいよろしい。

「ありがとね、すぐ連れてきてくれて」

「よー分かっとなるな。それにしても、今朝はすっごい慌てふためいたな」

ニヤツと笑う。そうすると顔を赤くして

「し、仕方な……じゃなくて！べつつに！嬉しくて慌てたわけじゃないわよ！」

はいはい、機嫌がいい時、お前は見てるだけでこっちも和みそうになるんだよ。感覚で分かる。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

一夏が見本みたいな言葉を投げかける。

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ。希は元気じゃないのが想像できないけど」

「どういう希望だ」

傍から聞いたらお前大嫌いといってるのと同じだぞ、鈴。あと俺はいつだって元気だけど、その評価はどうだろうか？それより、

「あのな、幾らなんでも看病には来れないだろう……」

あんた風邪なの!?看病行くわ！と言って飛び出したとして、到着したら治ってるだろう。しかもそれに対して鈴が怒って殴るという才チも付くかも。

「あんたはうるさいわ！」

おお怖い。目の前にやってきた注文の品を受け取って席を確保。

一夏は俺の正面に来るようになっている。一夏はいつも隣の席で食おうぜ！と言ってくるがそこで座っちゃうらまれること必須。常に俺は正面を取り、隣は女子に譲る。俺は将来交渉役として大成できると思うんだ。

「対一夏限定でしょ」

「思考読めるのはやっぱりお前と一夏だけか。一夏は箒にもセシリアにも読まれてるけど」

千冬さんにも読まれるけど。ちなみにあの二人は距離を計りかねているようで、一夏の隣はのほほんさんと鈴がゲットした。

「まあね。あんたとも長い付き合いじゃない」

だよ。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。でもお母さんは元気よ。それにしても、アంతたちこそ、なにIS使ってるのよ。ニュース見たときびっくりしたじゃない」

一夏は納得できる面はかなりある。あの千冬さんの弟だから。でも俺は一般人みたいなもんだ。どうしても不思議だが。お陰で女性人権団体からの注目は全部俺だよ。ちょうどその時、二人が突撃を決めたようで一夏と鈴の関係を聞いてくる。付き合ってるのかといわれてツンデレ返しをしようとして、全く意に返さない一夏の返答でご機嫌斜めになる。それでもって一夏によるお互いの説明が終わる。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

火花が見えるのはISの無駄効果か、一夏専門係がとうとう極まってきたのか。どっちも嬉しくないことには無いは無い。さつきも言ったけどISの効果なら武器を取り出すとき魔法陣でも出してくれよ。……幻想機動を使ってみるか。

「シンンッ！私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

だが知らないと返してあたしが勝つよと宣言する。おお、かっこいい。相変わらず自信満々だな。

「俺、鈴とバトルしたいな」

「やめとくわ、全力で」

「お？負けると思った？」

「一回目は正直勝てる気がしないわよ。でも、二回目以降は全部私が

勝つわよ」

「俺もそう思った」

セシリアが驚いている。あんなに正々堂々代表候補生に私が勝つと言いきったのに、俺に対しては一回目だけは負けると言ったのだからだろう。

「だって、アンタの小細工ときたら……第一、私と戦って情報収集するつもりじゃないの?」

「良く分かったね。代表候補生ともなると、色々黒い部分でも見てきたの?」

「その通りよ。あんたが自分は大したことが無いって言ったのが良く分かったわ。……いや、どうかしら……。あんたもやっぱ恐ろしいわ」

俺はだから飛びぬけた知恵の持ち主じゃないって。ともかく、もうそう簡単には騙せそうに無いな。昔はあんな騙しやすかったのに……。

「騙しやすくて悪かったわね!」

「むしろ良かった」

餃子が美味しい餃子美味しい、睨んでくる目を必死に避ける。

「鳳と希の関係は何だ?」

箒がうどんをぐくんとして聞いてくる。確かに微妙には気になるよね。

「んー、どうだかね。俺は友達だと思ってる」

「あんたにおちよくられた数々、覚えてるわよ……」

恨みがましい目で見られる。

「協力した数も覚えてくれてるんじゃないの?」

「他の女に対してもでしょうが!」

「刺されたくないからな!第一鼻痕はしてやったはずだ、お前が悪い。

「一番鼻痕してやった自信がある!」

「一夏のネジが飛んでるのが悪いのよ!」

「何で俺!」

その言い訳、二人目だよ。長年の付き合いがある奴はどうも同じ結

論に達するようだ。俺も同じ気持ちだしね。と、そこで大声を出しすぎたのに気付いたのか、ちよつと体を縮めて

「ところで、アンタクラス代表なんだって？」

「お、おう。希のせいだな」
いつの間にか俺のせいになつてると？そんな馬鹿な。俺じゃない俺じゃない、いつか過ちを……じゃなくて。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

中々攻めるじゃないか！わが子の生長を見ている気分――

「アンタは私の保護者じゃないわ」

失礼。むしろ妹っぽい。で、期待の一夏は

「いや、大丈夫。希が格闘戦も射撃についても教えてくれてるし」

予想通りだね！実際には女の子にみつともないところ見せたくないって考えてるし。俺も同感だ。でもここでその選択はやめてほしいね。鈴は俺を見る。ただし、敵意を向けてではない。コイツは俺を理解しているから。

「前も言っただろ？練習相手は多いほうがいいって。お前、第三世代だろ？」

「ええ、もちろん」

周りがガバツと顔を向けるが気にしない。二人が敵意を向けてくるけど気にしない。

「あと俺より長い時間訓練をやってるんだぜ？俺より上手く教えれるかもしれないし」

とは言うものの、正直怪しい。鈴は考えるより当たって砕けての感覚主義だから。二人と同レベルのような気がする。

「二人もそれでいいか？」

俺はにっこりと確認を取る。

「……仕方ないな」

「……仕方ありませんわね」

「それと、勘違いしていないでよね。もちろん、希も公平に面倒見るわよ。だって、友達でしょ？一夏との関係を抜いてよ」

「ありがたいお言葉で。じゃあ頼むよ」

「もちろん」

それからは三人の探りあいをしてしながら食事が表面上は穏やかに進んだ。俺はそこまで干渉せず、一夏とISについて会話しながらで、その時一夏がよく食事をぐい馳走してもらったという話になり、中華料理屋だったからね!というオチをつけた。鈴のドヤ顔から一転したの笑える。で

「親父さん、元気にしてるか?まあ、あの人こそ病気と無縁だよな」

「あ……。うん、元気——だと思う」

……元気、だと思う。つまり邪推するとしばらく会っていないということになる。だがさつきおぼさんについてのときは何も無かった。と言うか、さつきお母さんは元気、って言ってたよな……邪推、したくは無い。その後、鈴が急激に話題を転換したからさらに邪推を進めそうになったがとどまった。

「無駄な動きが多すぎる。だから疲れるのだ。もつと自然体で制御できるようになれ」

厳しいお言葉を一夏を直撃する。ちなみに、箒がISを借りれた為に近接訓練をしようとしたら、セシリアと嫉妬でバトルになり、一夏がどつちつかずの反応をしたため二対一でぼころうとした。で、俺は初めて二対二で戦うチャンスだと思ってドンチャン騒ぎに参加。一夏と組んでコンビが磨けていない二人を叩き落した。だが主に一夏と箒で戦った為、このお言葉を受けることになった。

「お前たちは仲が悪いとは言え、いい所見せるんだつたらもう少し協調を覚えような?」

「うるさいー!」

怖い怖い。ま、俺は人を本当に好きになった気持ちから分からないからどうしようもない。俺が経験したのはちよつとした、淡い恋心だったから。すぐ諦めることになってしまった。

本当に好きになったら計算とかは全く出来なくなるのだろうか。そんな不思議な感じがするのだろうか。常に打算とかを巡らせてる

自分でも。想像が付かないな、あいつらみたいに慌てふためくようになるなんて。

「一夏っ！希っ！」

その時ちようど鈴登場。今日はちよつと用事があるようので訓練参加は無理のようだった。が、ここで欠かさずポイント稼ぎに馳せ参じたようだ。タイミングは俺が教えた。携帯とかISを展開していても使うことは出来る。ISってマジ便利。一人一台……あつたら、バトルが渋るな。空を舞いながら両陣営の機体が一斉放火、その隙を近接機体が何百と突っ込んで……マジ楽しそう。空に数万の機体が飛び交って、あー、めっちゃ楽しそうだなー。

「トリップすんな。はい、おつかれ。タオルとスポーツドリンク」

ちちゃんと二組渡してくれる。もちろん一夏と箒じゃなくて、俺と一夏に分だろう。徹底的にお前は敵だと言いたいようだ。

「ありがとう」

「サンキュ。あー、生き返る」

ちなみに、冷やしたスポーツドリンクは美味いが体を傷つける。一夏が教えてくれた。が、その教えは千冬さんからだろうと思ってる。

「あんたたち、あいかわらず健康志向よね」

「そりゃ、健康に長生きした方が人生楽しめるからねえ」

人生は長く生きれたほうがいい。それも、健康に健全に。でも国家的に見ると老人はさっさと死んでくれた方がいんだだろうけど、自分たちのじいさんたちになるといやだってなるよね。他の人たちもそうだから、老人は増え続けるわけだ。

「後で泣くのは自分と自分の家族だ」

「二人とも良かったね。未永く居れるようだ」

「うるさい！」

「うつさい！」

一夏は何のことだ？と疑問符を浮かべている。本当にコイツは……直球告白以外どうしても落とせる気がしないな。しかも好きだ！でも誤解される可能性が高い。どうせ言うなら、将来結婚したいという意味で、好きだ！愛してる！ぐらい言わないと無理だろう。同姓

に対しては本当に察しがいいのになぜだろうか。

が、そこで箒が仕掛けた。

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っていいぞ」

「おお、そりやありがたい」

「では、また後でな。一夏」

攻勢を仕掛けようとしているが、俺がいるのをわすれていないか。どうかこの子本当に脳筋だな。戦略もくそもありはしない。……いや、一応優位に立ってると思わせれるのか？同棲でないにしても、同じ部屋のシャワーを許す仲だつて見せ付けるための。

「……希、どういうこと？」

俺に聞いた方が早いと判断したか。確かにそうだけどき。……しやあない。箒が睨んできてるが、しやあない。

「別に。俺と一夏は箒とルームメイトの人に頼んでシャワー使わせてもらってるんだ。前までは剣道場だったんだけど、そっちの方がいいだろうって」

ちなみに、移動するのが面倒になった俺が吹き込んだだけ。俺にも使わせることを条件に。早朝トレーニングは朝起こすの迷惑かなと思っただが、箒のが早起きで使ってるし、まあいいかなって。

「なーんだ。……ねえ、私の部屋のシャワーを使つていいわよ？」

「いらん。私の部屋のシャワーがあるからな」

お前たちルームメイト考えてあげようね？頼んだ俺が言うのもアレだけど。二人が火花散らしているのを引き気味に一夏と眺めていた。

「だーかーらー！二人に私の部屋のシャワーを使わせなさい」

「一夏が決めることで、一夏は私の部屋を使いたがっている。そうだろう？」

いや眺めてる分にはとても楽しい。実際にこの状況になったら胃がマツハで穴あいて病院だね。しかも他に+αするのだから尚更のこと。一夏はもしかして鈍感にならないと生きれないから鈍感になったのではないだろうか。生物の環境適応能力のなせる業か。ち

なみに現在地廊下（俺たちの部屋の前）である。見物客が多い。それより気になるのがコイツのポストンバックだ。

「それよりさ。あんたたちと一緒暮らしていい？」

すつごい攻めるね。これで一夏の事を好きじゃないというんだからあきれて物も言えない。他にライバルいる事がかなりプレッシャーになっていいるのだろうか。顔がかなり赤くなりながら言う。本当に何も考えず突っ走ってるレベルか。まあ、肉体だけで見れば自分には全く勝ち目が無い、と思ってるだろうし。

というか千冬さんが許すわけ無いだろ。それすらも考えれないほど切羽詰まってるのか？……身近な人が不安定な状態になると、不安になるよな。両親とかが不安定だと、な。それも追いつちかけてるのか？

「あのさ、一夏だけならまだしも、俺もいるんだが？」

「安心しなさい。あんたの事はとても認めてるわよ」

「ありがたいお言葉で。だがしかし」

箒に目を向ける。

「認めんぞー！」

怒るよねそりや。それにしても一夏の置いていかれっぷりがひどい。台風の目は穏やかである。ただ、いつの間にかひどい場所に飛び出ている可能性は否定できない。もつと加わらないとお前、いつの間にかひどい状況になってる事もあるかもしれないぞ？ 現在進行形かもしれないが。あ、過去にもたくさんあったな。

「ねえ、一夏。いいでしょ？」

「俺に振るなよ……」

「俺には優しきで出来てる錠剤は持ってないんだ。すまない」

俺に優しきを求めても無駄だ。世界ですら持ち合わせているのは厳しさなのに。少しはあると思うけど、この状況じゃ焼け石に水。

「とにかくならん！ シャワーはこれからも私の部屋を使う！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「無視するな！」

「へい、どーどー」

箒の前に移動して落ち着けのポーズ。少し冷えたのか木刀に伸ばした手を引つ込めてくれた。

「えっと、約束って小学生のアレか？」

へー、そんなのしてたのか。どんな内容なのか。聞いた事ないな。かなり重要そうな事だけど。

「う、うん。覚えてる……よね？」

この鈴を見ていると。

「えーと。鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

その時から鈴はラブだったのか。すごいな一夏。小学生ですら誑かす男一夏。

「そ、そうっ。それ！」

「――おごつてくれるって奴か？」

バシンと頭をはたいた。確かにこいつは鈍いから分からなくても仕方ない。直球じゃないと分からないのだろう。でも一発軽く叩くくらいは許されてもいいはずだ。世界中のもてない男たちのために。俺のために。

「……………はい？」

気の抜けた顔をしている。

「何で叩くんなんだ！……ともかく。鈴が料理できるようになったら、俺にメシをこちそうしてくれるって約束だろ？」

「へい、どーどー」

さつきと同じように鈴に冷静になるように仕向ける。が、難しいだろうなあ。一夏から見れば小学生の頃の友達との約束でも、鈴にとつては好きな男の子との将来の約束で、なおかつその思いをずっと抱えてきて、今日一年ぶりに再会したというんだから。しかも、憶測が当たってれば鈴は不安定な状況にある。なおさら継り付きたくもなるだろう。目で俺をキツと睨む。

「折るなよ」

しょうがなく退いた。俺が身代わりになっちゃたまらない。

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心――」

バアンツ！いい音が響く。自分では鳴されたくないけどね。

「……へ？」

間抜け面の一夏。箒に目をむけ、その後肩を小刻みに震わせ、目にくっつき涙を浮かべている鈴の姿を見た。本人からしたら訳分らないだろうけど、女の子が泣いているってだけでかなり負い目感じるよね、一夏なら特に。それなりに善人ではないと思ってる自分でもヤバイと思う。

「あ、あの、だな、鈴……」

すごい子ども。何が何だか分からないけどどうにかしないと、と思ってる感じだ。

「最っつ低！女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ぬ！」

鈴はバツクをひたたくって出て行った。まあ、鈴とは数少ない友達だと思ってる。クラスで良く話す女子？知り合いだよ。のほほんさんとか如月レベルで友達といえるかな。ともかく、後からフォロイれないとな。

「……まずい。怒らせちゃった」

「一夏」

「お、おう、なんだ箒」

「馬に蹴られて死ぬ」

今日の一夏は散々である。ま、こいつは女性関係では殴られても仕方が無い。しょうがない。刺されて初めて文句を言っているレベルだ。

「なあ、希。助けてくれ」

「しゃーないね。でも、その約束って本当にそうだった？」

「いや、細かいところは微妙に違うと思う……って今になって頬が痛い！」

「緊急箱に何かあったけな。もしくは氷か」

しよぼくれた一夏を引きつれ、部屋に入る。ちなみに、周りで野次馬していた女子は馬鹿とか言って部屋に引き籠ったのも一夏に追い討ちをかけていた。明日は授業集中できないだろうな。

翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。クラス対
抗戦日程表

一回戦の相手は二組、鈴

八話 希と鈴

午前中だけで注意七回、打撃五回を受けた一夏、多分昨日約束の言葉を思い出せ、と俺が言ったから。鈴は俺に対しては問題ないようだが、一夏に対しては猫のように髪を逆立てる。今朝遭遇して判明した。何というか、猫みたいだった。でもいつまでもそうしちやいられない。ひとまず今日でやっておくことは何だろうか。一夏のフォローか。ごめんなさいと仲直りさせるのはまだ無理かなあ。強攻策もあるけど、んー。

「おい、ラーメン伸びるぞ」

今日のラーメンはタンタンメン。美味しい美味しい。辛い辛い。夜食べるラーメンもまた格別。暑くなる前に熱いものを食べておきたい。夏はざる蕎麦とか食いたいね。

「それより鈴のことどうしたらいい？」

心のそこから困った顔。仲のいい友達と喧嘩したらこんな顔になるだろう。そんなでもって原因が良く分からないのに（昔の約束はしっかり覚えてると思ってる）相手がすごく悲しそうに泣いた、という状況。そりやとまどうわ。

「それなりにフォローしとく。多分お前の前では強がつてるけど」

まだショックじゃないかなあ。どうだろ。箒たちはフォローなことしなくていい、とはさすがに言っただけ。そんなひどい奴らじゃない。いくら恋敵とはいえアレをフォローしなくていい、なんてこと言うのとつるむきはしない。アドバイスも絶対にしない。俺は善い人とかあまり仲良くしたくない。怖いし、臆病だから。彼女らは暴力振るいまくりだけど、善い人だ。

「ところで、お前たち三人はどうした仲なのだ？」

「ぜひお聞かせ願いませんか？」

「そうだなあ。どうしたもんか。」

「んつとね。一夏と鈴とは中学時代に出会ったんだ。で、その時ちようど一夏が鈴を怒らせたようで。困ったところを俺がアドバイスしたんだ」

「最初はアドバイスしてくれる友達だったんだ。でも掃除も真面目にやってるし、意外と気が合うなと思っただんだ」

なつかしいなあと思いながら続ける。

「で、途中である人が軽い嫌がらせを受けていたんだけど」

「それを俺と希でどうにかしたんだ。えっと、希が携帯電話で動画とかで証拠とって」

「嫌がらせしてた犯人たちに対峙して。奪い返そうとした所をさらに証拠にして」

「俺が体張って倒して終了。あ、でも希も体張ってたぞ。ちなみにその光景を嫌がらせされていた奴も見えていて」

「それから長い付き合いの始まりってわけ」

ふーん、へー、ほーと二人……だけでなく周りもうなずいた。で、のほほんさんが手を上げて

「そのー、嫌がらせされた相手ってー、鳳ちゃんじゃないー?」

「なんで分かった!?!」

一夏が間抜けにも自白。だまつときやいいんだよ!それにしても勘が鋭いね、のほほんさん。

「んー、何となくー?でもねー、鳳ちゃんがしみずーを信頼してたからー」

「実際そうだけだな。希はいつも捻くれてそうだけど、言うときは言うぜ?あの時」

女子たちが一斉に耳を傾ける。でも残念だったな一夏。テメエは詰めがあまり。

「えー今から一夏の秘密話暴露大会ー!いえー!!」

「今はいい」

「後からお聞かせください」

「今はしみずーの気になるなー」

あれ?俺の作戦が失敗しただと?泣いて一夏を斬るの計が。

「俺をいつも斬ってるのに泣くもあるか!」

だよね、いつもとかげの尻尾切り並に切ってるし。後から回収する優しさぐらいは持ち合わせてるけど。そうしないと再利用出来ない

し。

「ともかく、その男たちに向かって『大の男が可愛い女の子によってたかって嫌がらせして恥ずかしくないのか？俺はお前たちみないなのをどうしても許せない。ぶっ潰してやる』ってね」

つく、予想外に恥ずかしい。女子たちがキヤーと沸いた。俺の株上がったと思うけど、恥ずかしさで＋－0以下だ。だって、俺の株上がっても一夏が全員フラグ搔っ攫うからね！もって彼女出来るとかなら十ぐらいにはなったけど。

「それと千冬姉が出っ張らないですむように色々やってくれて。それであそこから四人でつるむ様になったんだ」

一夏はそういった関連の話は弱かった。もう一人、弾がそういったのを伝えてくれて動けた。あいつは情報を集めて、俺が考えて、一夏が体を張る。そんな役割があった。弾は控えて俺たちの様子を撮っていた。

「だがその一人と関係最悪だな」

箒がバサツと切り捨てた。その言葉に一夏がガクツと崩れ落ちた。「ところで、次は一夏さんの秘密話をお話してくれませんか？」

セシリアがわくわくしながら聞いてくる。

「残念。目的は果たせなかったからまた今度。情報は重要だから」
そこを何とか頼んでくる彼女らを必死に回避した。

珍しく誰も居ない……というか皆にお引取り願ったんだが。緑茶を自分の分だけでなく、一夏にも出す。そして

「なあ、鈴の事どう思ってる？」

「今は鈴とのかをどうにかする知恵がほしいんだが……」

「そのために必要なの。正直に答えてっつてね」

有無を言わさない。

「……そりゃあ、仲のいい友達……親友と思ってる」

「ただの？親友？……異性として見たりしないの？」

ブツとお茶を嘔き出しそうになったが、一夏は飲み込んだようだ。

「それ関係あるか!？」

「あるね。ツインテールを猫の毛のごとく逆立てられ続けたいならかまわんが。どのくらいのコース? 週? 月? お望みでどうぞ」

「……分かったよ、そりや意識しないわけないだろ」

「当たり前だよね。年頃の男女なら。意識しない奴は頭か体が腐ってるだろう。」

「一年前によく肩車してたとき、お前最初びっくりしたり顔赤くしたもんな」

「そりや色々当たったからな!!」

ヤケクソ気味に一夏が答える。とんだ羞恥プレイ気分だろうが、男同士で喜ぶのは腐った猛者達だけだ。この学院にも結構いるのはかなり、本当に問題だが。

「将来鈴を嫁に迎える奴をどう思う?」

「鈴は料理美味かっただろ? それがさらに上達してるだろうし。自室だってしっかり片付けられててさ、金銭感覚もしっかりしてる。しかも代表候補生……てのは俺としちやあまり関係ないけど、幸せ間違いないだろうと思う」

「お前は鈴と結婚したいかと思うの?」

次は耐え切れなかったようで、軽く嘔き出した。ゲホゲホゲホと咽るのをとんとん叩いてやる。そして決め台詞。

「一体誰がこんなひどい事を!？」

「お前だ馬鹿野郎!!」

「ごめんね、たまにはボケたくて。で、どうなの?」

「……まだ、俺は正直良く分からない。そうした将来の結婚の事とかさ。誰かを好きになるなんて、どうしたことか分からないんだ。お前はどうかなんだよ?」

「俺もさ。分からない。人を好きになるってどうなのか、ね。今はI S 乗り回して楽しんで、休日はたまにボーツと過ごしたりする方がずっと性に合ってるから」

そんな非日常と日常が混ざり合った過ごし方が楽しい。日常が風化しないように非日常というスパイスを加えながらの日々が。淡い

恋心と好きは違う。

「俺もだ。でも、鈴と結婚したとして、不幸には絶対ならぬだろうなあ。お前もそう思うだろう？」

まあ、確かにね。表情もころころ動いて猫みたいで。見ていて幸せになる。料理も美味いししっかりしているとすればそりゃ文句はないだろう。飽きないで生活も出来るだろう。すつごく可愛くて、凛々しくて。でもこの馬鹿がいたから無理だった。

でもね、それでもね。

「だろうね。でも、親密であれば親密であるほど、中々想像できないだろう？」

中々に難しい。もつと近づきたいと思っても難しい。

「ああ、その通り。でも、お前とはいままで何だかんだで楽しくやっていけるってのは分かるよ」

ああ、一夏となかよくやっていけるってのは同感だ。……俺がつりあうように努力しないと。それにしても、これは大収穫。さて、今のはしっかりと録音完了。

「じゃ、ちよつと行って来る」

「ちよつと待った、俺がやらないと意味無いんじゃない？」

こいつはモテる。なぜならアドバイスを求めたら、後は自分で全部行動するから。しかもアドバイスの内容が何か違うと思えばしっかり否定する。芯がしっかりしてる奴だから。

「いや、別に。簡単なお仕事だから」

まだ八時半。問題ないだろう。ドアを開けて

「じゃ、行って来るわ」

「鈴、いるかー？」

返事は無い、屍……見えてないからこの表現は不適當。もう一度ノック。すると鈴……ではなく、同室の人が現れた。コマンドはどうする？

「どうもこんばんは、夜遅くすいませんお嬢さん」

ひとまずセシリアのように金髪だったので問題無さそうなセリフ

をチヨイス。

「いえ、それより凰さんは……ベッドに」

困ったような表情で。

「失礼」

上がらせてもらい、ベッド付近に移動。そしてベッドでこんもりしている場所の布団にトントン叩く。

「俺だ」

「知ってるわよ」

かなり不機嫌な声。まあ、それなりに落ち着いてきたようだ。

「話し合おうぜ」

「……茶を入れなさい」

大体予想通りだ。無理に布団を剥ぎ取らず、ポット付近に移動する。

「すみませんが、ポットとかを借りてよろしいでしょうか？ コップはいやなら自分の部屋から持ってきてきますが？」

「いえ、どうぞおきになさらず。それと、私の名前はティナ・ハミルトンと言います。……て言うか、もつとくだけていい？ 金髪が全員お嬢様ってわけじゃないのよ」

「もちろんOK。それと偏見ごめんねー。あ、緑茶いる？ 俺の名前は知ってるだろうけど……知ってる？ 一夏に食われてる？」

「流石に知ってるわ。むしろ一部では織斑君より有名人よ。それとお茶私にもいいかしら？」

「あいさー。で、噂はいつたいなんて？」

お湯の準備をしながら尋ねる。嫌な予感しかしないが。

「織斑君とのホモ仲間」

「死にたいぜアハハ」

すさまじいレベルで腐海が進行しているようだ。頭いいのに限って集まるのか、頭がいいからそうなるのか。

「冗談よ。オルコットさんと戦って奇抜な戦い方で勝利した清水希。

あのときのセリフ録画されててキヤーキヤー言ってる子もいるわよ？」

「俺にモテ期がやってきた!」

「変人扱いね。あと教祖?」

「だと思ったよ!いつも一夏に人気が集中してるぜ!……ともかく、鈴の事よろしく」

「もちろん」

そして軽めに話し合いを続けながら、緑茶を淹れ終わる。今までに何度もやっていることだ。小学生ぐらいからずっと。

「おい、鈴。出来たぞ」

もそもそ布団が動いて表に出てくる。着席して、ずびずび飲みだす。そして一気に怒りが噴き出したようで。

「一夏のバーカ!!何で覚えていないのよ!ばかばかばーか!乙女心を踏みにじる奴なんて馬に蹴られて死んじやえ!」

かなりお怒り気味だな。ハミルトンさんは引き気味。

「確かにアイツが鈍感なのは知ってるわよ。でもね、約束したのは小学六年生のときよ。今なら理解してくれてるかもって望みを持ってもいいじゃない!アイツは何であーなのよ!」

「うんうん、あいつは馬鹿だ」

望みだけに希を……くそどうでもいいな。鈴の愚痴がひたすら零れ落ちる。三分ほど罵声の爆撃を浴びせた後

「うー、頭撫でてー」

あれこの子すごく可愛い。知ってるけど。可愛さならあの二人より数段上だ。

「一夏に頼め」

「今はアンタでいいのよ」

「ありがたいお言葉で」

ゆっくり撫でる。髪が滑らかだなーとか思いながら、三十秒撫でると体調が戻ったようだ。グツと体を起こし、覇気が軽く戻る。

「ありがと」

「別にかまわんさ。それより、これやるよ」

MP3プレイヤー。録音したのをISを使って移し変えてる。ちなみに、どんな機能でもISの機能を使うのは校則違反だが、見つか

らない違反は違反じゃない、これは俺の信条だ。俺はバリバリ使ってる。ネットでニュースとかまとめサイトとか見たりするのも使いまくり。ひどいときは部屋で武装展開の練習すらやってることもある。見つからないように外に隠しカメラを設置しながら。ISマジ便利。

ただし、人に本当に迷惑かけるような違反はもちろんしてない。

「何それ？」

「こんな感じ」

持ってきたスピーカーに接続。

そして五分後

「もー、一夏ったらー！えへへへへ！アタシを嫁にした人は絶対不幸にならないだつて一夏が！一夏以外の嫁になるつもりなんてないのに！！ばっかみたいばっかみたい！」

これでも一夏のこと好きでもなんでもないんだからね！と外に対しては言うから驚きである。心の中じゃ好きだと認めてるのに周りには知られたくない感じだろう。でも今は喜びのあまり周りを全く意識していない。鈴は枕を抱きかかえてピョンピョン飛び跳ねいやもううるさい。防音がある程度してない部屋だったら隣から即刻苦情が来て金剛力士像もとい千冬さんが登場すること間違いない。

「もう一夏ったら！！」

しばらくハミルトンさんと可哀想な子もとい可愛い子を見る目で観察していた。録画したらぶっ殺されるかな、そう思っさすがにやめといた。

「あの、二人とも……さっきのは忘れて欲しいな、なんて」

すつごくシユンと、顔を真っ赤にしながら。

「いいわよ。でも、そのかわり鈴って呼んでいい？そして鈴も私をティナって呼ぶこと」

「……ありがとう、ティナ」

「もちろん、俺も忘れるに決まってるよ」

「本当？」

「数年後にね……へい、ジョーク。IS展開はやめようね」

改めて席に座り直す。あのときから十分ほど自分の世界に浸っていたが正気に戻り、こうなった。いや、本当にすごい。ここまでお花畑だと。

「ぶっ飛ばすわよ？」

「ごめんごめん。で、改めて。一夏のこと許せるかどうかって、どう？」

「……意地張っちゃったとも違うけど、約束の事は本当に支えだったのよ。でも今は落ち着いてるわ。だから、大丈夫。私も殴って悪かったと思ってる」

支えだった、か。もうこれ以上邪推の種増やさないでくれないか？それでも悟らせてはいけない。いつもと同じように気楽な表情で。

「あいつはストライクゾーンがめっちゃ狭いんだ。直球以外全部外れると思っつけ。中二のころには学習してただろ？鈍感な一夏も悪いが、お前もその事を理解しておくべきだったとは思う」

「……はい、そうです」

しゅんとうなだれる鈴。一夏に惚れたのは全員一夏が絡んでると(その場にいると)面倒だが、それ以外では比較的大人しい(もしくはまとも)。一夏のモテビームに浴びせられ、一夏付近では思考が狂うって学説が俺の中では確立されつつある。これは確定的な論である。

そんなことはおいといて、しゅんとした鈴の頭をポンポン叩いて「そんなでもって、一夏はお前の約束の事はしっかり覚えていた。そういうこと。一夏の中にお前はしっかりいる、自信を持ってって」

「……ありがと。元気出てきたわ」

「そうそう、お前はいつも笑ってこそ鈴って感じた。それでドンドン押せ。そうすりゃあいつも落ちるさ」

「うん、すっごく元気出てきた。希、いつもありがとうね」

そう言っつて、久しぶりにとびきりの笑顔を見せてくれた。ああ、これだ、微笑ましい気分になる。でも、後ろめいたのもある。こうして

やったのは、鈴の為を思っただけじゃなくて、自分は善い人だと思ひ込みたいためでもあるから。

「良かった良かった、それじゃ。落ち着いたら謝るんだな。下手にもたましてると、誰かに抜かされちゃうぞ?」

「そんなこと無いわよ! アタシが誰より速く駆け抜けるわ!!」

笑顔で俺に言う。良かった、調子はほぼ完璧に戻したな。

「さて、洗い物は頼んでいいか?」

「これぐらい簡単よ。何せ料理が上手なんだもの!」

「このテンションで今日寝れるのか?」

「そうかそうか。じゃ、ハミルトンさん、お騒がせしました。またね」

「うん、じゃあまた」

「あつ」

「あつ」

次の日の朝、食堂でばたりと一夏と鈴が出くわした。周りの人間が一斉に静かになる。ちなみに今日は珍しく箒やセシリアはいない。

「一昨日のことがことだけに二人とも気まずげに目を逸らす。だが二人は同時に向き合った。」

「ごめん!」

「すまん!」

そして同時に謝った。一夏がガバツと体を起こして

「約束しつかり覚えてなかったのはごめん。絶対にしつかり思い出してみせる」

「私もビンタしてごめん。その……確かにそういった事言ったけど、微妙に違ってたのが悲しくて。でも、叩いてゴメン。ちよつと違うだけで、しつかり覚えてくれたのに」

「女の子との約束を間違えて覚えただから仕方ない。絶対に埋め合わせをする」

「なら、駅前のパフェ奢りなさいよ」

そう言うと二人は少しだけ、でも確かに笑って握手をした。

「うん、よかったよかった」

軽くパチパチ拍手しながら近づく。

「希もありがとね」

「希、ありがとうな」

「別に。早朝ランニングのが疲れるぐらい簡単だったから」

うんうん、仲がいいのはいいことだ。見渡すと箒とセシリアがいたが複雑そうな顔をしながらも、よかったと思ってくれているようだった。うん、やっぱり善い人だ。

「それで、合同練習どうするんだ？参加するのか？」

「まあね。敵は多いからゆっくりしてられないし」

「だよな、他の奴らに負けてられないし」

コイツはもう相変わらずばかみたいだな。鈴もため息をついていた。

「ん？なんだ？」

一番お花畑なのはコイツではないだろうか。

九話 敵機襲来

「ちよつ、やめなさいよおお!!」

「うひゃひゃひゃひゃ!!」

ただいまIS訓練中。ミサイルぶつ放したり大砲ぶつ放したりして鈴を追いかけている。正直、一番最初こそ衝撃砲に面食らったが、所詮直進しかしないしIS本体からしか発射しない。砲弾が出てから測定しても遅いが、空気中の塵とかをレーザー測定機を用いれば大砲の向きを大雑把には割り出せる。後はその直線状付近に入らなければいいだけだ。そもそもって一夏との付き合いやらなんやら、他色々のおかげで先読みにかけてはそれなりにできる。特に鈴とは昔からの付き合いだ。それなりにゲームもやった(テレビゲームは弱かった)。それが全部とは言わないが、とにかく砲門も多いし読みが強いこつちのが砲撃戦は有利だった。

「アハハハハ! 大火力による殲滅戦! それこそ至高!」

「調子乗ってんじゃ無いわよ!」

鈴は一気に反転してこつちに突っ込んできた。上手い具合に砲撃をかわしながら接近してくる。見えない砲弾も見えないからどうしても実弾とかより反応が遅れる。砲門の向きの測定もどうしても誤差が出るし。徐々に距離が詰まって

「吹っ飛びなさい!」

「いやだね!」

青竜刀を振り下ろしてくるが当たる趣味はない。横に回避して後ろ回し蹴り。ついでに足に装着されたプラズマサーベルを叩きつける。セシリア戦では使わなかったが、基本装備の一つ。プラズマブレード足と手に四本と、他にワイヤー前方四つ、後方二つが付いている。ただし、固定装備というわけではない。

「あたるか!」

鈴は横からの攻撃に上体をそらして回避。そのまま下から青竜刀を叩きつけてくるが肘に装着した実体盾でガード。それから出力を上げ接近し、

「食らえー！」

パイルバンカーを射出。しかもただのパイルバンカーでなく、射出するパイルバンカー。もはやパイルバンカーと言えるか怪しい。ともかく長さ50cm近い鉄杭が射出され

「なっ!?」

直撃してひるんだ瞬間に――

「卑怯よ！アンタの機体と武装！ガツチガチに固めてるじゃない！」

「偉大な傭兵は言った。戦場では試作型とかより信頼性ある武器の方が大切だと」

とは言う物のトリツキーな武器がかなり多いけど。射出するパイルバンカーだったり火力だけ追及したIS用手榴弾だったりランスだと思ったらショットガンが飛び出すとか。ちなみに個人的に好きなのでそうした武器は結構入れている。

「ま、どこもかしこも第三世代は試作をやっと投入って感じだし。甲龍は安定性はいいようだけどやっぱり基本を抑えてるこっちの機体のが有利だよな」

下手な特化機体よりよっぽど凡庸機のが強い。まあ、鈴はまだあまり慣れてないようだし。仕方ないと言えば仕方ない。一年前に中国に帰って、二ヶ月ぐらいでIS乗れるようになったって所だろうか。となるとこれに乗り出したのは数ヶ月前って読みだが。

「手持ち武器だけで勝負しなさい！」

「いやだよ、勝ち目ないじゃん。基礎で劣ってるんだし」

普通の練習は手持ち武器だけで基礎を上げる練習をしてる。鈴に中距離武器で挑んだり、セシリアに狙撃戦を挑んだり、一夏や箒に近接戦を挑んだり。結果？一回も勝ったことはない。ただ、いつもの面子でドベが何か奢る模擬戦は別。今まで賭けの模擬戦をやってるが、鈴に対する勝率は最初の頃は何と六割を超えた。が、次の週には三割前半を切ってる。やはりさつきと基礎部分を上げないといけな

いな。皆それぞれ上手くなってきたとは言ってくれるけど。

ちなみに、俺は賭けが好きじゃないが、今は給料たんまり入ってくるのでいいかなと思いつながらやってる。

「おーい、タオルとスポドリ」

一夏がぼんぼんと渡してくれる。皆でサンキュと言ってからゴクゴク飲む。俺や鈴だけでなく、練習機を持ってきた筈、セシリアとかもだ。

「ですが、このごろ狙撃も上手くなってますわよ、希さん」

「ああ、近接戦闘も確実に上昇している」

「指導者がいい人ばかりだからね。助かってる」

「でも皆ざつくばらん過ぎる気がするが……」

一夏の言いたい事も分かる。ともかく感覚主義だったり完璧理論主義だったりの人たちだが、何とか理解しながらやれてる。

「あなたの理解力が不足してるんでしようが。希は問題ないでしょう？」

「それは希の理解力が高いだけだろ」

地味に自慢だが、理解力はかなり高い方だ。向き不向きはあるけど、ISは理解しやすいことのように。で、ちょうどそのときだ。

「ん？ スポドリ少なすぎだな。新しいの買ってくる」

ここの自販機はぬるめ、というスポドリがある。一夏が自販機に移動しようとしたとき、

「わ、私のを飲んでもいいのだぞ？」

「私のを飲みなさいよ」

「私のを飲みませんか？」

こいつは本当にまあ。たまにはギャグ入れるか。

「俺の飲むか？」

ちなみに、ここで同姓から受け取る奴は殆どいないだろう。まわり全員美少女なんだから、そっちの方を取りたい諸君が九割五分を占めるはずだ。残りの五分？ ホモ。人類の一割が同性愛者らしいから。男と女二で割れば五分だ。

あー、でも男の方を取った方が無難かな。女子一人からならともか

く、三人の誰かからもらおうとなるとその人に対して好意を持つてると解釈が普通されちゃうだろうし。となると俺も男選ぶかな。」

「ああ、サン——」

こんな風に。

「見損なつたぞ！お前たち！」

「見損ないましたわ！お二人とも！」

「ずっと昔から怪しいと思つてたのよ！」

「へい、ジヨーク。あと鈴、お前そんなこと思つてたの？」

「べ、別にあんたたちが付き合つてるとか思つてないわよ！」

すっげえ目を逸らしてる。

「ん？昔から俺たち付き合つてるだろ？中一ぐらいのときからだな」

「告白してくれるツンデレありがと。ちよつと部屋の隅で丸くなつてくる。あと一夏、お前は……」

一夏を生贄にささげて俺は逃げ出した。そして心の中で泣いた。

P. S 誤解は解けたようです

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。噂の新生入生同士の試合のためか、人は満員。通路にいたりモニターで観戦してる人もいるとか。

「じゃあもう一度確認するぞ。チャンスは一回と思え」

「分かつてる。瞬間^{イグニッションブースト}加速で突撃だよな」

何度も対戦しているが、これだけは隠し通していた。これに期待の半分をかけているレベルだ。

「残念なことにそれぐらいしかかない。でも何度か対戦してるから、見えない砲弾もそれなりにかわせるだろ？」

「ああ、大丈夫だ」

「分かった。……織斑一夏、白式、発進！」

カタパルトで加速して飛び出していった。後ろを見ると心配そうな二人がいた。

「そのだな……一夏は勝てるのか？」

「あのな、お前たちが信じないでどうするんだ？勝つって信じてやれよ」

「……そうですわね」

ここからじや見にくい。ちょうどよくリアルタイムモニターがあるのでそつちのほうに移動する。かなりのサイズだ。見ると二人は規定の位置……互い五メートルの位置に移動していた。さて、それより鈴にアドバイスしたが、本当に切り出せるのかね。まあ昔から負けたら奢りとかやってたからそれなりにやれるかな。

鈴はすさまじい精神力で心を落ち着ける。別に大勢の前で試合するのが緊張するわけではない。問題は、今から言う言葉だった。

「ねえ、一夏」

「なんだ？」

「どどどどうせなら、賭けをしない!？」

「大丈夫か？」

当然の心配である。目の前で顔を真っ赤にしながらどどどと言葉が不安定な人間を見たらまず誰でも心配する。

「うっさいわね！するのしないの!？」

「いいぜ。真剣勝負だしな。それで何を？」

「えっと……その……勝った方が相手に何でも言うことを聞かせるのって、どう？」

「ああ、いいぜ」

(駅前のパフェは高いから負ける気はない！)

ちなみに、なぜ一夏がパフェに直通で考えたかと言うと、希がわざとらしく鈴が駅前のパフェ食べたがってたなーと前日わざとらしくこぼしたからだ。一夏が賭けを受けやすくするためにだ。彼にかかれば多少の思考誘導は簡単だ。一夏が単純なものもあるが。

「今変更はなしよ！」

「もちろんだ」

『それでは両者、試合を開始してください』
試合が始まった。

「うん。いい調子だな」

一夏はいい戦いをしていた。相手の砲撃をかわす一方で隙があれば斬りかかる。一度つめたら離されないように必死に食らいつく。鈴も青竜刀を振り回して接戦したり、距離を離せば衝撃砲で攻撃したり。両者ともレベルが高い試合で会場も盛り上がっている。そんな試合を十分ほど続け、鈴が一瞬だけ気を緩めたように見えた。その瞬間、一夏が仕掛けた。瞬時加速、鈴が驚いて、一夏の雪片式型が輝いた直後

『ズドオオオオンッ!!』

アリーナから轟音が響いた。直後には俺は駆け出していた。よくもまあと自分でも思う。こんな非常事態なのに体は勝手に動く。普通は反対方向に逃げるはずなのに、何がなんだか分からなくて動けなくなるはずなのに、ISを展開してピットのカタパルトの場所から飛び立った。もちろん、カタパルトなんて使ってる時間はない。自分でも、自分は周りよりちよつと変わってるとは思ってた。別に優れた人間、というわけじゃない。俺の能力は大体の人が努力すれば十分手に届くレベルだ……IS乗れることを除けば。でも、こんな非常事態なのに一瞬で駆け出すとは。

結構変わってるね、俺って。

「！来るぞー！」

そう警告した瞬間だった。

「ファイエルッ!!」

突然反対側から大量の火力が投射される。ミサイルや砲弾が。無人機は難なく回避するが、ダメージをそこそこ負ったようだ。

「やつほー、遊びに来たよ」

それはコイツなら何とかしてくれると思わせる声を漂わせる希

だった。

「よく来れたな。助かる」

だが鈴は

「ちよつとー！これは遊びじゃないのよー！さっさと逃げなさい！」

「おい、鈴。いくら国家で訓練受けたとか言ってもな、俺たちは仲間だと思ってる。それとも、二人きりの良かったか？」

「さ、さすがにそこまでお花畑じゃないわ。……はあ、しやあないわね。作戦は任せたわよ」

「お前、一瞬二人の――」

「うるさいわね！さっさと考えなさい!!」

『織斑くん！凰《ファン》さん！それと何でいるんですか清水くん!?今すぐアリーナから脱出してください!』

だが希が首を振って

「無駄ですよ。シールドを張り直されています。なーに、三対一です。生徒たちが避難する時間は稼げますよ。第一、もうやるしかないんですよ」

『何でそんなに楽しそうなんですか清水くん!?!』

「火遊びするのは危険だから面白いんですよ。したことないけど。一夏、お前は接近戦を挑め。鈴は衝撃砲で援護。二人とも試合でエネルギー削れてるから主に俺が前に出る、残量に注意しろよ。倒そうとはあまり考えるな。石橋を叩くつもりでいくぞ。仲間が怪我するのは嫌だからな」

「了解!」

「せいっー!」

俺の薙刀を振り回すが回避。その上から一夏が斬りかかるが回避。そこに衝撃砲が来てやつとヒットした。

「くそっ！相手の動き人間じゃねえな」

考える考える、考えている間に二人がいちやついた会話をしているが……

「おい、アイツさつきからパターン化してないか？」

何と言うか、機械じみている。機体の動きも、何かおかしい。

「ん？まあそうね」

「やっぱりお前も気付いてたか」

「一夏もか。アレ……機械じみてるよな」

「ああ」

「は？人が乗らなきゃISは動かな……そういえばアレ、さつきからあたしたちが会話してるとき……」

「うん、攻撃してきていない」

「でも、ISが無人で動くなんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かないでしょ？」

「男が乗っても動かないはずなのにISは動いてる。ありえないことは今確実におきてるんだ。アレもありえない事を起こしてるのかもしれない」

ちなみに、他の可能性として、人の脳味噌だけクローン栽培してあの頭脳に乗っけるとか。もしくは人体実験で脳味噌だけ取り出してとか。漫画や小説の見すぎか。

「じゃあ、無人機だったとしてどうするの？」

「一夏、当てるよ」

一夏にパース。

「カバー頼むな」

「肝心なところで人頼みよね、希」

「うっせ。人が繁栄して来た理由は知恵と道具と協力の三つだ。俺はその全てを生かしているだけだ」

「物は言い様ね」

さてと、では。

「最大武装展開」

二秒で展開した合計八門。さらに空中発射ミサイル十六発を二秒で展開。

「鈴。合図したら俺に向かって衝撃砲を撃つてくれ。最大威力で」

「何言ってるの……ってああ、そうゆうことね」

その時突然だ。

「一夏あつ！男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

モノアイが箒を見た。……いかなかな。

「行くぞー！」

一斉発射。周りから詰めるようにミサイルが一斉に発射。こっちに注意をそらした。無人機は大きな動きはあまりしない。小さく、最小限の動きで動く。弾幕を張ってもあまり動かずに回避をした。でもそれが油断。

「終わって」

小さくつぶやいた瞬間。ミサイルからネットが射出された。無人機の眼が驚いたようだった。回避しようとしても、もう遅い。複雑に絡まった。レーザーで焼き切るにも時間がかかる。

「凶悪ね、相変わらず」

同時に最大威力の衝撃砲が一夏の背中にヒット……する瞬間に、イグニッションブースト。エネルギーを吐き出したあとそれを吸収し、また吐き出すのがイグニッションブーストの原理。外部から取り入れてもそれは可能。

「オオオッ!!」

剣閃が閃いた。その瞬間に、相手の胴体を……いや、無人機じゃないかもしれないという思いがあったのか、右手を切り落とした。だが人で無いと判断した瞬間、一瞬でまた斬り返し左腕も切断。イグニッションブースト（強）で加速している最中に二回切り裂くとか、化け物である。

「とどめもらうねー」

俺が取り出している武器は全長4.5m、口径55mmになる超大型粒子加速砲。最大威力で放てばラファールは下手したら一撃で沈む威力がある。

「ファイエル」

胴体に直撃し、敵機体は爆発した。……いやっ！

「一夏あつー！」

その中から一筋の光線が飛び出た。敵の断末魔のかわりだろうか。それが一夏に直撃した。

「正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』だっけ。で、どうよ?・上達したか?」

「え、あ、う……」

お見舞いに訪れたら一夏が衝撃的なことを言っていた。何を言っているか（ry

「なあ、ふと思っただが、その約束って違う意味なのか?俺は」
えっと、小学生時代の話かな。俺に会う前のはずだし。となると気付かないのも無理は無い……今なら思い返して気付いて上げれるんじゃないの?普通なら。あ、一夏は普通じゃねえ。まあいっか、しっかり思い出したんだし。鈴も照れ隠ししてこれで手打ちって所だろう。

「深読みすぎじゃない!?あは、あはははは!!」

「勝負は決めれるときに決めれない奴は弱いんだ。大富豪の札だつて出すときに出さないのは弱い奴。どんなことだつてね」

「簡単に言ってくれるわね……」

「よっ、希。大丈夫か?」

「間違っても怪我人に言われる言葉じゃないな。……すまんかった、とは言っておく。もっと精進する」

「別にいいさ。こうやって笑えあえてるんだから」
「だな」

懐かしいあの頃。まだ日常を過ごしていたころみたいだ。今はもはや日常とはいえないだろう。日常と感じるようになってしまっているけれど。でも、日々変わらずに過ごしているのが日常だ。今日は、完璧に非日常だったな。

「あ、そう言えば鈴。こつちに戻ってきたってことは、またお店や」
「」

「一夏!調子は大丈夫か!」

「あ、ああ、大丈夫だけど……いきなりどうしたんだ」
間に合うか、このタイミング。

「希……あんたは察しが良すぎる奴よね。いつから?」

……遅かったようだ。

「最初あったとき。親父さんについて一夏が聞いたとき、元気にして
るはずとかいったら。お婆さんは元気だって答えたのに。そこで
怪しくて、今一夏がしゃべってるときにお前の表情が……」

「え?え?どういうことだ?」

「あたしの両親、離婚しちゃったの……」

「今思えばお前が国に帰るときも……」

あのとときから表情が暗かった。だから何となくで分かってしまっ
た。

「その通りよ」

「そうだったのか……」

「二応、母さんの方が親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の方が立場
が上だし、待遇もいいしね。だから……父さんとは一年会ってない
の。たぶん、元気だとは思うけど」

一夏が悩んだあと、俺に眼を向けた。首を振ってクイクイ一夏を示
す。ええつ、という表情をするがお前じゃないとこれはきつい。い
や、俺でもフォロー出来るだろうけど、一夏のほうが上だと言わざる
をえない。

「家族って、難しいよね」

「なあ鈴」

「ん、なに?」

「今度どっか遊びに行くか」

ISから器具を取り出す。すばやく『二人きりで。俺はいいから』
と掲げる。

「え!?それって、そのデート!?!」

「デートかは知らんけど、二人きりで」

「えっ!?いいところで落とす一夏が!?!……まさか」

パツと鈴が振り向いた。ちよつと反応が遅れて仕舞うのが遅れた。
一夏がパツの悪そうな顔をする。俺?いつもと同じ表情。

「……私は、希のことを大事な友達と思ってるわよ。まあそりゃ、一夏
と二人きりつてもアレだけど……希なら大丈夫よ。一緒にいたい

と思うのよ。」

「ホント、友達甲斐があるよ。弾も誘おうぜ」

「久しぶりだな、四人で揃うのは」

そう言うのと鈴はにっこりと微笑んだ。ああ、これだ。戦場での戦いも楽しい。でも、この日常も、確かに楽しいんだ。

「そうね、楽しくなるわね」

その時、バーンツと扉が開け放たれる。

「一夏さん、具合はいかがですか？」

「あのね、バーンツが開けるのは駄目だよ？ね？響くよね？」

「あ、はい、すいません……ともかく！どうしてあなたがここに？一夏さんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはなくなつてよ」
「大きな怪我を負った友達を見舞わない奴がいたらおれは縁を切るね」

「あんだこそただの他人じゃん」

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！それに、今は一夏さんの特別コーチでしてよ！」

「大声は響くからな？出てつてもらうよ？第一鈴もコーチみたいなものだ」

「あ、はい、すいません……というか、今日はやけに厳しくはないですか？希さん」

「今は状況効果が働いていてね。今日は100%鈴の味方だ、すまん」
「つまり、アタシの勝ち是不動つてことよ」

俺に対しての信頼が嬉しいです。セシリアはうつと身を引いた。だがそれぐらいで下がるなら一夏争奪戦に参加することはない。

「まっ、どちらでもあれ、一夏は微妙に怪我人だ。騒ぐなよ」

「そうですね。ささ、それでは早速今日の戦闘の分析をはじめましょう」

「俺たち三人でやってるよ。戦ったの俺達だし」

「本当にひどいですわ！」

「まあまあ、ほら。リングを持ってきたんだ。剥いてくれ」

袋の中からリングを取り出す。

「分かりましたわ」

「ところでリング剥いたことあるか？」

「いえ、正直やったことはありません」

「なら仕方ない。鈴、頼む。むさい男がやるより美少女の手で剥かれた方が一夏も喜ぶだろうし」

「び、美少女なんて！……ちよつと待ってなさいよ」

さつと消えた鈴を尻目に、セシリアが俺に近づく。ワナワナ震えながら、二十秒ぐらいして。

「あの、本当に今日は凰さんの味方ですか？」

「うん、全力で」

グツと親指も立てた。

「……ここで私の底力を見せ付けてあげますわ！」

「頑張つてね。……お、鈴さすが早い。いいお嫁さんになりそうだ」

「ま、まあね！」

「所で一夏、いくら大方大丈夫と言われてても、あまり動くのはよろしくない。鈴、食べさせてあげろ」

「えつ、ちよつ、それはレベル高いんじゃ!？」

「さすがに自分で食べれるって」

「そうですわ！」

「まあまあ、今日の共闘の証つてことでいいだろ」

「まあ、鈴がいいなら」

この日、セシリアは完全敗北を喫した。それから女子力を上げようと努力している最中である。

九・五話 おしとやかに行く

「なあ、お前っていつも休日何してるんだ？」

五月も終わりの日の日曜日。いつものメンツで食事の最中に質問をされた。

「俺？会社に出向いてる」

「えっ!?お前就職……ああ、そうだった」

「武器の報告やら……つてのは月に一回ぐらい、というかメール送信とかでいいんだけど。実際のメインは違って師匠に特訓を手伝ってもらってるんだ」

「師匠って誰よ」

「あれ？鈴知らなかったっけ？……そうか、知らないよな」

「どんなお人ですよ」

うーん、そうだな。

「名前は森羅香苗。年齢は秘密。身長は168cm、スタイル抜群でモデルと言われた方がしつくり来る。そんなもって戦闘スタイルは俺と同じくバランス型の変則攻撃を使う。ただ、その多彩さは俺の比じゃないよ」

「どれぐらいなのだ？」

「えっと、近距離なら……ナイフ、二刀ナイフ、刀、直剣、二刀流、鞭、格闘、パイルバンカー、槍、薙刀、矛とか他にも。遠距離なら二丁拳銃からスナイパーライフルまで。俺が教えて欲しいと言ったら全て教えてくれた」

「すごいな。でも、そんなに種類あるっけ？ISって」

世界中で普及している人型兵器ならあるかもしれない。けど、ISは全世界で467しかない。どうしても優秀なのが全体に広まる傾向がある。採算を考えたらそうなるのだ。ただし、例外はある。

「ウチの企業……大和重工は大企業がいい所を出し合った複合連合体なんだ。それぞれの長所を出して作ってる。ほら、ISの強い会社は成績が上がるって言うだろ。それが日本ならなお顕著に現れるから」

日本はロボット大国である。昔から戦隊物を見て、それが終われば

ロボット物に移り変わる。マニアならアニメを見るだけでなくフィギュアなど保持しているし、一般人ですらロボットを嫌っているのはいない。むしろみたら興奮する人間ばかり。だからロボットが強い。その会社がいいというのが無意識ですりこまれていいらしい。

「それでもってその企業の人たちもちよūd運良く？ロボット好きだったらすくてき。大企業が集まって日本こそ最強のIS大国にしようと思つたらしい。数々のロマンを滾らせた人がやってきて、それなりに実績も出している。オーダーメイドも結構安く作れる生産体制もあるから。俺の剣に見えたら銃だったみたいなのはあの会社ぐらいしか作ってないし」

IS発祥の国と言う自負もあるようだし。ISコアも一応一番多い。

「あんなのを作る会社がたくさんあつても困るわよ」

「だよ。ともかく、そこで多種多様な武器を操るのが上手い師匠がスカウトされて、さらに磨きがかかったらしい。師匠の意見とか上層部の昔からの夢や社会に広告効果を出す為にひつきりなしにたくさん武器を製造してる。もちろん正統な武器の売り上げも大きいよ？IS開発は違うけど、IS武器の売り上げは世界三位。装甲とかの基本素材は一位だったけな。輸出用ダウングレード版でさえ」

「へー、あんたの武器の出所はそれか。そう言えばあんなの大和重工しか作ってないわよね。そりゃああんたはあの企業所属か。どれも上げつないのが多いから気になってたけど、作ってるのはそこしかないわね」

「うん。師匠は正統派な武器だけでも恐ろしく強いけど、俺が使ってるインチキ武器使うと手に負えない。ウチの会社にやって来てから世界大会に出場したら総合部門で3位、だったらしいから」

「へー、なら千冬姉とも面識あるかもな」

「あるかもね。前一度来たとき親しそうだったし」

「それで、一体どんな特訓をしてるんだ？」

「それは言えないな。いつか見せれるときが来たら見せるよ」

「希さんの新戦法……上げつない予感しかしませんわ」

「ああ、だな」

あいかわらず俺の評価は高いのか低いのか。俺的には高いね！

「一夏は戦法考えないでいいもんな」

「回避して突っ込んで斬るだけだし」

「そんなことないわよ。ほら、コンビネーションとか考えないと。

やっぱり中近距離のバランスタイプの私とか」

「いえいえ、中遠距離タイプの私と組むのがよろしくてよ。私が撃つ

て牽制し、一夏さんがすかさず斬りかかる、これこそ王道ですわ」

「いや、二人で斬りかかって叩きのめすのが一番だ。なあ、一夏？」

一夏は突然話をふられ困惑する。が食べ物を飲み込んだ後

「え？全部をこなす希と組めば問題ないんじゃないか？」

「ここで巻き込むのがお前だよ」

ギロツと三人に睨まれるが、思い悩んだようにしながら

「確かに色々とこなすから否定しづらいわ」

「相手の弱点を突けると言うのがいいですわね」

「一夏は完璧近接特化な分、全体を幅広くカバー出来るのは利点か」

この三人は俺とはある程度友好的な関係なので俺に対しては冷静

に見るようになっているようだ。他の三人に対しては長所を無視して

短所ばかりあげまくるが。

「器用貧乏にならないように気をつけてるんだけどね。その点優秀な

教師人が揃ってるから助かってる」

「お互いよ」

「こつちも助かる」

「お互い様ですわ」

俺たちの関係はギブアンドテイク、まさにそれ。普段は俺がギブし

てばっかかりだけだね。美人とお近づきしてるだけでテイクと思って

おごうか。お弁当のおこぼれもらえたりするし。

「それで最初の話だけど、お前今日も行くのか？」

「そのつもり。お前が伸びてきてるし。追いつかれないように気をつ

けないと」

白鳥が優雅に泳いでいるのは足を高速で動かしてるから。これで

も冷静変人キャラ維持する為努力している。ここまで努力しやすい環境が整ってるのも滅多にないし。だって、周り美女ばっか、親友は素晴らしい、男代表の一人、将来安泰?、男のロマンパワードスーツ(専用)、これで頑張らないならどこで頑張るかって話。

「いつか追い越す……じゃなくて、俺も行けるか?」

「なら私も」

「私もだ」

「私もいいですか?」

一夏のあとを金魚の糞のごとくついてきて……軽くストーカーだよ? 君たち。男なら研究対象の一環としてどうかだけど女は無理とか言えば問題ないかな。

「ストーカーじゃあるまいし」

いけね、たまにあるよね。心の中に思ったのと別な事を言う時つてあるよね。三人は一瞬ぼかんとした後、にっこり最上級の笑顔を見せてくれた。あはは、一夏に笑顔を向けたほうがいいよ。こんな笑顔向けられても逃げられるだけだと思うけど。笑顔つて獲物を狩る前触れとかなんとか。

「予定変更ね」

「ああ、そうだな。師匠とやらに連絡をするんだ」

「私たち三人が相手ですわ」

いかん、これは死んじやう。どうにか回避しないと俺の命日になる。死に目ぐらいは家族に看取られたいから却下である。異世界に転移したわけじゃないから頼みこめば多分会えるし。どうにか切り抜けないと……そうだ!

「ここら、お前たち、ちよつとこっち来い」

「言い訳はいらないわよ」

「命乞いもですわ」

「そうじゃない。大事な話だ」

訝しげになりながらも三人は俺に近づいてくる。俺は小声で

「あのな、すぐに暴力はよくない。例えばの話だ、一夏が簡単に暴力を振るうよう奴なら、嫌いになるだろ?」

「当然ですわ」

「それは逆からも言える。もちろん、男女の力の強さとかで女のが暴力を振るっても問題ないという風潮はあるが、それでも暴力を振るうのはおしとやかではない。敬遠されやすい」

な、なんとっ!? みたいな顔で驚く三人。いや、常識だよな? なんてそんなに驚いているの。物を投げたら地面に落ちるぐらい常識だよな? この子達は常識が無いの? お兄さん不安。

「その点一夏はすばらしい。理不尽な目にあっても文句を言わず、暴力も振るわない。家事も出来るイケメンだ。だがお前たちは? 確かに方向性が違う美少女とは認めよう。だがしかし! 暴力を振るやすい! 怒りやすい! これは問題だ。千冬さんを考えろ。授業中暴力を振るやすい面はあるが、それは教師だから仕方ない。」

だが一般生活ではほとんど暴力を振るわない。いざというとき誰かを想い暴力……否、力を振るう。一夏の好みとはまさにそれ!」

知らないけどね。千冬さんが好みなのは分かるけど。あと千冬さんは暴力振るやすいっけ? 俺にはあまり振るわないけど……あれ? どうだっけ? 叩かれてる? まあいいか。一夏に対してはどうだろ。まっ、適当に誤魔化せたようで三人はそうだったのかッ! みたいな顔をしている。

「なるほどね!」

「その通りですわ!」

「そうだ!」

後一押し。論理より勢いで、テンポ良くリズムに乗せて! 馬鹿を乗せるにはその場の雰囲気と、語ってる本人がそう信じてると思いつませる事!!

「だからおしとやかになる第一条! 力に有無を言わせない。第二条! 暴力関係の言葉は控えよう。第三条! 相手が何か悪いことをしても笑顔で許す寛大さ!」

三人が目をキツと交錯させた。さて、これでどうなることやら……。

「一夏、終わった。それでさっきの話だけど、多分無茶かな。俺の会社

の人は問題ないだろうけど、一応お前別会社所属扱いだろうし。その会社の人があまりやって欲しくないと思う。何だかんだでき、俺たちの機体には数百億、いや男だから千億、もしかしたら一兆を超える情報価値があるかもしれないんだ。そう軽率には使わないがいい。金が飛ぶだけならまだしも、それで職にあぶれて生活に困る人が出てくるのは駄目だろ?」

「なるほど、たしかにそうだよな。分かった、じゃあ気をつけてな」

残念そうにした後、さわやかな笑顔を向ける一夏。建前でもあるけど、本音でもある。この機体は本当に大事な物だ。一夏の機体もそうだろう。

「ありがと。ごちそうさま」

じゃあなと声をかけた後、席を後にした。

「おー、お帰り。疲れたか?」

「あいかわらなすぎつつい。エネルギーが切れたらエネルギー装置から供給受けてすぐ再稼働。それを何度も。あまりに高い頻度でやると危ないから時間をおいたりしたけど、一時間ぐらいで一試合やったかな。エネルギー補給中は反省とか、格闘訓練とか」

「大変そうだな。あつ、そうだ。今日三人が変だったんだ」

おつ、どのようになだ。

「いやさ、昼に屋上で食べる事になったんだけど、のほほんさんがやってきて背中から抱きつかれたんだよ」

それは天国地獄だな。スタイルの良さでは意外とかなりの上位に来るし。無駄に発育のいい女子が多いくせに、なぜ太ってる子がいないのか、本当に。

「それ欲しい〜とか言ったから箸で肉団子をあげただけだよ。箸が「わ、わわ……私もしてやろう」とか怖い笑顔で言っさ。殺気がすごかった。鈴もセシリアも似たような事言っただけだよ、怖い笑顔で。いつもなら色々まくし立ててくるのに。いやあ、怖かった」

おお、笑顔で対応できるようになったか。逆に引かれ気味だが。当

たり前だ。引きつりながらじゃ二流以下。

「他にも剣道場で練習してたとき、他の女子から練習を頼まれたら箒の竹刀が折れたんだ」

おい、おい。ＩＳ学園の女子は化け物か。

「鈴はＩＳで他の女子に教えてもらってたら顔がちよつと引きつってた」

なんとまあそこまで無自覚に。

「セシリアはおほほ、おほほほ、とか笑顔で不気味だった」

あいつら駄目だ、はやくなんとかしないと。知ってたけど。

「まっ、明日ぐらいには治ってるよな！女心は変わりやすいって言うし！変な物食べたとか、調子が悪かったとかだろ？」

あははと快活に笑う様子を見て、明日の訓練の的が決まったんだなと思いました。

「こつち、こつち」

三人に手をちよいちよいやられて固まっている場所に。

「それで、一夏はどうだったのだ？」

「効果がありました？」

わくわくどきどきというような顔をしていて正直ためらわれるが、正直に言った方がいいよな。一夏はご愁傷様だけど。

「えっと、三人とも笑顔が怖かっただっ」

ぴくっ、と三人が震えた。追い討ちで

「あと女心は変わりやすい、変な物食べたとか、調子が悪かったとか。明日には治ってるよな、とかあんまり気にして無かった。」

プチッ、そんな音がした。幻聴だろうけど、幻聴だろうけど、でもしたんだ。聞きたくないけど、聞こえたくないかつたけど、聞こえてしまった。俺も段々嫌な方向に進んでってる。でも面白い！

「へえ」

「明日には」

「治ってる、ですか」

ゆらりと二人が立ち上がって一夏に向かってく。一夏は

「よっ、おはよう」

「おはよう、一夏」

「今日の放課後訓練をしよう」

「一生懸命教えてさしあげますわね」

なにやら凄い気配を出しているのに生存本能が働いたのか、一夏は「あ、ありがたいけど、俺は今日希に付きっ切りで練習を……」

ギロツ×3、必死に目を逸らして

「あー、そんな約束なかったなー」

「そこは合わせてくれよ!」

「大丈夫」

「時間は」

「たっぷり」

過ぎたるは猶及ばざるが如し。美女は怒ると怖い。一夏の様子を見て、正直天国と地獄って紙一重なのではないかと思った。俺はゆっくり慎重に行こう、心からそう思った。

P. S 一夏の悲鳴と助けの叫び声が大きかったです

十話 転校生、またもや襲来

六月頭の日曜日

「女の園の話だよ」

「すごいよ。え？あんたたちモデルじゃないの？つて人しかない。何枚か写真あるけどあとから見る？」

「マジか！さすが希！」

「でも正直いい思いはしてねえぞ」

「嘘をつくな嘘を。お前たちのメール見ただけでも樂園じゃねえか。招待券ねえの？」

「いつか文化祭があるからそのときの招待券やるよ」

「ひやつふうっ!!お前とダチでよかつたぜ！」

「あ、それと俺からも言うけど樂園と地獄両合わせて感じ」

「お前までもか……なんかよっほどの理由でもあんのか？」

「まず皆がモデル並に美人ばかり。写真集作れば売り上げが聖書を追い越すぐらい。だから練習中はあるな競泳水着で動かれたらどうしても視線動いちやうよね。このごろなれて大丈夫……じゃないけど。しかも俺たちのISスーツも水着みたいなものだ。一夏ならきやあえつちで済むけど、俺はおまわりさんコイツですに下手したらなるし」

「いやいや、どうしてそうなるんだよ。俺がきやあえつちつでお前は おまわりさんなんだ？」

「あとコイツがフラグを集めるから。俺に出会いが無い」

「つまりコイツが原因だな」

「しかも、コイツが視線を女子から逸らそうとして俺に眼をあてまくるから、一部の腐海はますます加速する。俺も危なくなったら一夏に眼を逸らすけどな」

「つまり全部コイツが悪いわけだ」

「その通り！食らえ!!」

「うわっ!?!二人がかりはするいだろ!?!」

「あ、あと授業内容は楽しい」

「へえ、どんなことやるんだ？」

「爆弾解体技術ははらはらしたね。効率的な爆薬の仕掛け方とか戦術論とか。仮にも兵器を扱わせる学校だからね」

「……楽しいのか？」

「うん、ぶつちやけ女子がどうかより正直そつちのが今は楽しい。だってき、空を縦横無尽に飛び回って撃ち合いやるんだぜ。一斉射撃の爽快さや、近接戦闘のときに冴え渡っていく頭。とにかく最高」

「お前はそういう奴だったな、そうだよな」

「あ。どっちにしろ俺一人だったとしてもモテないのは同じだったろうけど。一人ぐらいいは出会いがあったかなあ」

「お前はいい奴なんだけどな、付き合ってみればかなりいい奴だけど、近寄りがたいしなあ」

「うっせ。ああ、そーいや鈴が来たって言っただろ？それで四人でどっか行こうぜでメールで連絡したろ？予定どっかあいてる？」

「本当に鈴が来てくれて助かった。話し相手が少なかつたし」

「もげろ」

「なんでだよ!？」

その後、弾の妹の蘭が現れ、IS学園に、入学する!とか言ったりしてた。あとエアホッケーで弾が惨敗した。

蘭を基準にするならそりゃ眼が肥えるわな。

弾の家から帰ってきた日の夕食時、ゲームとかやってたときの癖+IS乗れると分かってから起こったある出来事の癖で周りに全力で気を配る癖があるが、不穏な言葉が溢れかえっていた。

「織斑君の話よ」

「いい話?悪い話?」

「最上級にいい話!」

ちよつと被害が出そうなので、一瞬ISの機能を発動。五秒後、全てを把握した。

素早く小声で一夏に

「このごろ、何か一人で呼び出されて言われた事は？」
「んー、そうだな……箒に買い物に付き合っつて言われたけど、それがどうかしたか」

小声である。周りには聞こえていない。さて、どうしようか。今すぐ噂好きの女子に回して誤解とするか、このままほっとくか……まあいつか、そこまで気を回さないでも。箒に対しては正直同情するが、いい加減それじゃあ気付かないと理解するべきだね。ともかく、眼と耳を瞑ってれば俺に被害は無い。一夏にも致命的な被害は無い。せいぜいISや真剣で襲われるだけだ。よって無視。

注意すべきは眼と耳を瞑っては流れ弾をかわせないということだけだ。俺を狙ってきた弾もかわせなくなる。チラ見ぐらいはしないと。

「希、あんたは色々考えてるわね。悪い事と良い事と」

「ん？まあ大体そんな感じ。んー、茶、持ってくるか」

「私が持ってくるわよ。一夏は？」

「俺も頼む」

鈴はお茶を取りに離れていった。そのときだ、

「あー！ーっ！織斑君だー！」

色々巻き込まれたが、巻き込まれただけだった。女子が台風のごとくやってきて消えていって

「なに？またなんかやらかしたの？」

「何で俺が問題児扱いなんだよ。希だっているだろ」

「仮に間違っつても希のが問題児つてことはないわ」

一夏に対しての認識は散々である。

「いつも変だけど」

俺への認識は素晴らしい。

「ああ、お茶がうまい」

「逃げたわね」

「あ、ちなみに、一夏と箒がやらかしたっぽい」

「どういうこと」

ズツと迫力よく詰めてくる。まあまあとやりながら

「別に。すぐ分かると思うよ」

「……まあいいわ」

それから蘭についての話題を出し、鈴が対抗心を燃やす事になって、責任も取れないのに約束するな馬鹿とかののしられている。

「いや、その、だな？すまん」

「謝るくらいなら約束を――」

「あ」

「い」

「う……情けない、希につられてしまうとは……不覚」

お茶目でしょ俺。でもそこまで言う事無いよね。そこで現れた箒は一夏に対して気まずそうに。

「よ、よお、箒」

「な、なんだ一夏か」

様子を見て鈴は俺に

「何があったの？」

「さつき言った事。一夏が乙女の純情を踏みにじっただけ」

「……相変わらずね」

「あれ？詳しく聞いてこないの？」

にやにやと聞く。鈴は肩をすくめて

「詳しく聞いたら一夏をぶん殴っちゃうかもしれないから」

それこそが鈴が詳しく聞いてこない理由。それと、やはり俺を信用しているってことだろうとは思う。何だかんだで公平の立場をとっちゃいるが、正直鈴50%、残り二人に25%ぐらいで肩入れしている気分だ。そりゃ、付き合い長いダチのがどうしても優先させちゃうよね。俺は一夏みたいな聖人ではないから、ダチでも順位付けみたいなのが出来ちゃう。

「じゃ、私は部屋に戻るわ」

「あいよー、じゃあ、俺も」

何か良く分からない二人を尻目に部屋に帰っていった。

「あつ、待っていたんですよ！織斑くん、清水くん」

「あつ、珍しいですね。面倒ごとでもあるんですか」

そう言うと山田先生はアハハと顔を逸らして笑った。無人機が襲撃してきたとかより面倒な事は無いだろうから安心だ。

「それがですね、お二人には特別にお伝えしますが、転校生が来る事になったんです」

一夏とは部屋に帰る途中友達と雑談していたときに合流した。それで今ちようど部屋の前にいる山田先生と合流したわけだ。で、それより聞き捨てなら無い。

「そりゃ、転校生が来たら部屋割を考えないといけないのは分かりますけど、一人消したら一人は女子と同居する事になるんですよ？もしかして二人？レディーファーストで？」

前のシャワーが無い部屋からもう移って、普通の部屋になってる。となるとまた改装した物置小屋に戻る事になるのだろうか。

「いえ、それがですね……男の子なんです」

「二な、なんだってー!?!」

いやいや、ニュースとか2chとかまとめちゃんねるとかISを使って大量に見てるけど、そんな記事全く無かったんだが。もしかして見つけてた男性IS保有者を自国だけで秘匿していたのだろうか。可能性としてはありえなくない、むしろ十分ありえる。俺みたいなのが動かせるんだ。他にもいる可能性は十分ある。でもいきなり男がISを動かしたら、その事を秘匿できるならしようとするはずだ。でも、こいつも時期良く現れてくるとももしかしたらISの進化で男が乗れるようになってきてるのか？だとしたら男の後輩が現れてくる事もありえなくはない。男の未来が開けてくるな。

「あ、女の子もいるんですけどね」

「そつちはあまり興味ないです」

既に美少女のバーゲンセールだぜ。これ以上美少女が増えてもどうしろってんだ。スーパーサイヤ人が十人から十一人になってインパクトは薄い。あー、またかで終わりだ。

「で、部屋割でどちらかが出て行け、それを二人で決めろってことです

か？」

「それなら俺が出てくよ。世話になつてるしな」

当然である、言っちゃ悪いが迷惑かけられた度では俺のほうが高い。とはいえ、一夏のことをとても尊敬できる奴だと思つてることにかわりは無いが。むちやくちやイラツと来る事（女性関連）もあるけど。女性関連さえ抜けばここまですごくいい奴もいないのに。

「いえ、それがですね……また新しく部屋を用意できるまで、織斑先生と織斑くんが同室です」

「えーっ!？」

一夏が驚いているけど正直喜んでる感が強い。えー、でもとか否定しながら強くでは無い。そりやそうだ、憧れのお姉さんとまた同居できるなら喜ばしい事だろう。千冬さんも一生懸命使い慣れない頭を使つて大義名分を主張したに違いない。

「というわけで、今日は荷物を持って織斑先生の所へ行つてください。すいません」

「いえ、しようがないですし」

「楽しそうだな」

「べ、べつにー!」

んー、同姓とは言え同居か、色々面倒が出てくるかもな。色々考えないといけないかも。互いの習慣とかルールとか決めた方がいいかな。相手の性格が穏やかだったらいいな、やっぱり。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

こいつは一体何を言っているんだ……じゃなくて……え？本当に男？あきらかにおかしいと思えますが……。さつと腰をかがめて相手ののどを見る。よくのど仏が男女でどうか言うが、やはり素人では判別が難しい。が、どう考えてもおかしいと思うが……千冬さんに眼をあわす。じつと見つめるとなんと眼を逸らした。あの千冬さんが。

「べ、べつになにもないぞ」

とか言い出した。この人、気付いてるんじゃないか……?と云うか
気付いているよな。弟と同居する為にここまでするか?……するな、
ブラコンだし。

「お、男……?」

いや、まだ俺が先走ってるだけに過ぎないかもしれない。いや、そ
のはずだ、うん。千冬さんはほかの事で勘違いしているだけだ。これ
から同居するわけだし、見極める機会はいくらでもある、うん。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
」

そこから女子の声がかましいと思ったらありやしない。これだから
女子は……じゃなくて

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

さすがである。三国風に例えるなら統率力、武力は共に125はあ
る。道具を持たせなくてだ。最強の武将として大人気。武力最強の
ゴキブリ兜も瞬殺だ。って言うか、あのデザイン天才的だね(ある
意味)、分かる人は分かると思うけど。

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜!」

隣の女子も個性的。輝くような銀髪が腰辺りまで、左目に眼帯、し
かも黒。右目は赤目、体はちっこい。とにかくちっこい。ただ雰囲気
がずっと体を大きく見せてる。ちなみに、シャルルは男としては小柄
……女としては大柄?いや、だから女か決まってない、はずだ。

「……」

いや、まだ自己紹介しないの?

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

素直だね、千冬さんに対しては。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一
般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そうして直立不動の姿勢をとる。……軍関係者か、ちっこいからつ
てなめてかかったら俺なら瞬殺されるな、こりや。千冬さんを教官と

呼んだから、ドイツか。一年間教官として行って来てたらしいし。でもその時この子は十二ぐらいになるのか？恐ろしいな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その後、クラスメイトの沈黙。続く言葉は、出てこない。

「あ、あの、以上ですか？」

「以上だ」

「好きな食べ物は何ですか？」

ひとまず空気を和らげる為に定番ネタを言う。高校生になっても痛々しいと言ったら泣いちゃうよ。だが普通に無視された。しかもそのまま歩いて一夏の所に。

「貴様が」

『バシンッ！』

一夏は放心状態。そりゃいきなり殴られたらそうなるか。

「……」

「うっ」

無駄の無い平手打ちとか思ってるんだろう。だが俺はそんなことかまわず立ち上がったって、一夏に向かって

「一夏！お前は どうしてトラブルの種をまくんだ!? こんないたいけな銀髪美少女をたぶらかしたのか!?! いい加減にしろよ！ 眼を放した隙にどンドン雪達磨式に増やしやがって!!」

殴りはしてない。一応。

「えっ？えっ？えっ？」

こいつは自覚が無いから、何で俺がいきなり切れたか驚いているのだろう。だが、いい加減にこいつは自覚が無くても許されるレベルではない。

「いや、そのだな……希、お前の思っているようなことじゃない、だろう」

千冬さんにちよつと弱弱しく言われた。えっ？違うの？

「何の事だ……ともかく、私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「え？一夏が無自覚になんかやったとかじゃなくて？」

「何を言っているんだ？私はコイツは初対面だ」

「え、あ、その……なんだ、一夏、誤解だったようだ。すまん。今度なにかおごる。本当にすまん」

「え、ああ、別に気にしてない……じゃねえ！いきなり何しやがる！」
「ふん……」

さすがに意味無くぶん殴られたら切れるよね。でも無視して席に戻ったけど。どこまでもクール。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人すぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組とで合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩く音がした。

「一夏、こんがらかっているのは分かるけど、あとから原因究明だ。今は千冬さんに殴られないようにしよう」

「ああ、そうだな」

「おい織斑、清水。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「君が織斑くん？そして君が清水くん？初めまして――」

「あとからでね」

そんなのはあとでいい。

「移動しないと。女子が着替え始める」

「だからと言ってすぐに人の手を取る癖は直そうな」

「ああ、そうだった」

「それと、シャルルも美男子のようだし。もう情報漏れてるだろ。走るぞ、野次馬が集まる」

え？…え？と混乱しているがさすがIS乗り、間違えなく付いてくる。

「とりあえず男子はあいているアリーナで着替え。これから実習のたびだ。早めに慣れてくれ」

「うん」

さて、そろそろ接敵か……

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑くんと一緒！」

「あとでね！」

持ってきた一夏の写真を投げつける。一応それなりの枚数は確保している。このごろ通貨代わりになっているというが、恐ろしい世界である。ちなみに外れもあり子犬とかの写真もある。当たり1に対し外れは5の割合である。子犬の写真じゃなくて俺の写真だったら俺は殺されているところだ。と言うか子犬の写真で釣れるってちよろい。やっぱり女子だね。ちなみに、激レアで千冬さんのも入ってることがある。危険と楽しみは紙一重。

「そろそろ他の手段を考えてくれ！」

「これが一番早い！」

そうしてどんどん人が沸いてくるため弾も切れた。それなりにあるとは言え、オリジナルは一夏のアルバムとかから確保しても50枚程度しかない。それを印刷して増やしたが、そんな一気に使うわけにはいかない。弾は温存するべきだ。血より弾って言うし。

「今年は河原の花以外のをあげるね！」

ひどいね君。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

「そりゃ、男子が俺たち三人だけだからだ」

「…………？」

いやいや、まだ女と決まったわけじゃ……。

「普通に珍しいだろ？ISを操縦できる男は俺たちだけなんだから」

「あつ！ああ、うん。そうだね」

いやいや、軽く性同一障害なだけだろう、仕方ない仕方ない。確率的には十分ありえる。珍しいけど稀にあることだ。

「あと、この学園の女子は男と接点少ないからね。珍しい物見たさって感じ」

でも去年までは男子と一緒にするのも多いんだけどね。やっぱIS乗れる男、ってのが付加価値か。一夏はそれ+だけど。

「へえー、大変だね」

「これから君もさ」

アハハハと笑う。シャルルも一夏もあははと。

「じゃ、これからよろしく。俺は清水希。清い水に希望の希。希でど
うぞ」

「俺は織斑一夏。一番の夏だ。一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく。一夏、希。僕の事もシャルルって呼んで」

「あいさー」

「わかった、シャルル」

十一話 転校生との交流

さて、話している間に突破成功。

「よーし、到着」

この圧縮空気が抜ける音凄いいいよね。MSとかロボットが起動する瞬間のプシューって音が素晴らしいと思うのは俺だけ？いや、そんなはずはない。

「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ」

あ、ほんとだ。さっさと着替えないと。うーん、授業だしスーツは展開で着たほうがいいかな。戦闘なら少しでもエネルギー消費を抑えるべきだけど、授業だから問題ないだろうし。一夏は几帳面だから着替えるけど……ちなみに女子はいつも着込んでいるのがあるが、正直キツすぎるので俺はやめてる。……いや、待てよ。ここはちようどいい機会。

「わあっ!?!」

突然シャルルが声を出す。一夏の裸を見て、かな。もうほぼ確定でいいんじゃないかな。

「荷物でも忘れたのか？って、なんで着替えないんだ？早く着替えないと遅れるぞ」

「う、うんっ？着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……ね？」

うーん、助け舟出すべきだよな。俺はしようがなくISスーツを量子展開で着込んだ。そのあと肩を回して

「ん？背中へんかな」

そうやって肩の部分を軽く出す。

「一夏、ちよつと見てくれないか？」

「分かった」

くるくる顔を回して

「変なところは見た感じないぞ？」

「ただの気のせいか……ありがと」

そしてシャルルをチラツと見る。……おお、早い。もう着替え終わってる。一応言って置くけど正当な名目の下に覗きをしたかった

わけではない。多分。

「あれ？もう着替え終わったのか？じゃあ、早く行ったほうがいいぞ。希が案内してくれる」

「と言っても問題なさそうだけどね。ま、一応間に合いそうだから待つよ」

「ぼ、僕も……一夏はまだ着てないの？」

「引つかかって着づらいんだよ。分かるだろう？」

「そのネタ定番だな」

シャルルの顔はまっかつか♪きて、それより体格を見る。別に胸が女性らしく出ているわけじゃない。が、そんなのISスーツに手を加えれば問題は無い。もしくは彼女は伝説のAAAカップとか。とか思っていると自分も駆け出していた。

「そのスーツ着やすそうだな。どこのやつ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだ」

あれ？シャルル・デュノアだよね名前。

「父ががね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

「へえー道理で」

……あそこって確か経営が危なかったな。第二世代はラファールで大成功してるけど、第三世代はイギリス・ドイツ・イタリアに遅れを取ってたはず。超憶測を述べるなら、彼？がスパイ前提なら俺たちのデータを取って来い、ってところだろうか。うーん、正直ないな。こんな女の子です！なんて言ってるのをスパイで寄越すなんて無い。もつとまともに男っぽい教育をさせるはずだ。あと前に授業でやってたがある程度整形をしてもIS適正は変わらない。豊胸手術、またその逆を行った人間だってIS適正は変わらなかったといってた。……ある境界を越えると乗れなくなるらしいけど。体の体積の20%ぐらいだっけ。

ともかく、スパイは無いな。でもどうして男と偽らせたのか。俺たちと接点が出来て情報を盗みやすいとしても、こんなの下手したら一日ではれるだろう。

「いいところ……ね」

一応会話も全て聞いている。いいところって言葉に反応をしてる。複雑な表情だが、はて。大きい会社の社長なんだし、ドロドロした関係でもあるのかな。正直ラノベ風のさっぱりした感じが好きなんだけど。非実在少年保護法とかなんか出てたけど、昼ドラのがよっぽど悪影響だよな。

と、思考重ねてたらお互いに地雷を一発ずつ踏んでた。今時の地雷は空に飛び上がったたり遠距離から攻撃するらしいよ。踏むだけだとは考えない事だ。

「……ゴホン。シャルル君、物理の問題です」

「なんでいきなり君付け……？」

「いいから。高速下での運動における物体 α が受ける抵抗力は？」

「えっと、物体 α の速度に二乗」

「そういうことだ」

「今の誤魔化し方は賢さよりお笑いだな」

「ひどいな、相変わらず」

隣でシャルルが爆笑する。走りながら爆笑できる体力。うーん、やっぱ俺はまだまだ走りこみ足りないな。隣の会話を聞きながらとうとう到着して――

「遅い！」

くだらない事を考えない。考えると叩かれる。生贄は一夏だけで十分。あ、馬鹿が二名増えた。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
「はい！」

ちなみに、実弾をこの中で一番ぶっ放した事があるのは、間違いなく俺……いや、シャルルが分からんな。ラファールはレーザーより実弾が多く搭載されてるはず。乗り始めたのが俺よりずっと前なら、俺よりずっと撃ってるかもしれない。鈴とセシリアが理不尽に一夏を責めていると千冬さんからご指名をされたようだ。えーとかだるいーみたいなこと言ってるが……言ってるか？ともかく、渋々だった

が

「アイツにいいところを見せられるぞ?」

一気にやる気を出す。ここまで一気にやる気出すとかすごいね。一夏じゃ無かったら自分に好意をもたれてるって気付かれてもおかしくないレベル。……一夏が一般人並の感性があればとつくに誰かと付き合ってるか。そうだな。

「ところで先生。俺はどうして?」

「お前は火力投射が大きすぎる」

どっかに被害を及ぼさないようにかね? あんなにフル投射するとはあまり無いんだけど。展開する時間は煙幕とかで稼がないといけないし。初っ端ならいいけどそれ以降ある程度簡単に対策取れちゃうし。ロマンと使いやすさは反比例するよね。さて、相手は誰か。お互いに戦わせたら一夏バーストしてるし白熱しそうだ。

「対戦相手は――」

キイイイン……。いい音♪直後に間の抜けた声とドカーンとした音でかき消されたが。念のためISを展開して白盾(大)を皆の前に展開。二枚ほど。一応砂埃とかもカバーできたかな。一夏に人気取られっぱなしだけど、少しは活躍しないとね? ダイヤモンドの横に鼻くそ置けばダイヤモンドは光るって言うけど、鼻くそからみたらたまったものじゃない。せめて鉄ぐらいにはなりたいし。ま、ともかく「一夏、相変わらずだね」

山田先生の胸に手を置いてもみもみしてるラッキースケベ野郎が。山田先生はなんか良く分からなくて危なげな事を口走ってる。口走るだけならマシだけど、女子三人がどう出るか。どうせ武力行使だけ。親友を殺されてはたまらないので一夏の前に盾を移動。直後にレーザーが走るが、角度をつけておいたので斜めに反れる。

「希さん! 何をするんですか!」

「それは俺が言いたい」

どうせ一夏なら避けられたらうけどねえ。あいつは絶対NTかなにかだ。こっちのクラスの面子に飛び火しないように……本当に万が一だよ? あいつらだっちゃん代表候補生だし。むしろ俺が下

心で人気取りやつてるって感が強いな。あ、次は双天牙月を連結させた音。鈴がね。あの武器かつこいいよね。模造品は作ってもらったんだけどやっぱ模造品って感じ。本物は投擲してブーメラン出来るけど俺のはまだ出来ない。所属している会社の社員たちはロマンを体現する為に集められたエリート達（と書いて変態）なのですぐに作ってくれると思うけどな。もう一ヶ月は経ってるし。

ちなみに、アレを俺が落としてない理由は簡単。

ドンツドンツ！

山田先生が的確な射撃をしてくれた。うーん、やっぱ教師になる人は元代表候補生とかそんな感じなのかな？それなりに経験積んだ人だと思うけど。ちなみに五十一口径アサルトライフル『レッドバレット』。使いやすく世界中で採用されているけど、俺のには入ってない。似たのが自社製であるし、高価だけどウチのが性能はいいし。

ちなみに、落ち着いたように見えるけどすっごく驚いている。あの山田先生が、出来る女に見えるなんて！

その後代表候補生と言う事が千冬さんから伝わる。そんなでもって二対一で山田先生と戦えと命令をされる。安心しろ、今のお前たちならすぐ負ける、とか言われて二人はすっごいやる気。

「――デユノア。山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

そこから述べられるスラスラした言葉。それを聞きながら待っていると二人が仲違いしながら間抜けにも落とされるのが見えた。ISのプライベートチャンネルでアドバイスしたほうが良かったかな。せめて一夏が見てるぐらい言つとけば。

その後、専用機ごとにグループに別れ実習をやる事になる。ちなみに一夏とシャルルに9割寄ってきた。集まった六名の女子（のほほんさんや如月がいる）にひとまず

「堅実だね。それにしても予想より多いな」

この半分を期待した。如月が

「向こうは人気殺到だからね。あとさつきさつと展開したのかつこよかったよ。それに、あの調子だと織斑先生がなんかしそうだよね」

ですよねー。あとそんな笑顔向けられると罪悪感で死にそう。その後、先生のお言葉により班は勝手に決められたのでこっちにやつてきた堅実な女性たちはのほほんさんと如月だけで、他は残念そうになりながらも俺の前で失礼と思ったのか、それともさっきのが効いていたのかすぐに真顔になる。

「あー、正直ごめんとは思わない。運が悪かった、そう思ってもらいたい、が……中学時代の一夏ごぼれ話、興味は？」

「ある!!」

人間は基本興味あることにしか耳を貸さない。俺はどんな話でも耳を傾けるようにしてるけどね。わーわーそれなりに楽しくしながら横目でボーデヴィツヒちや、さんの班を見る。とても空気が重苦しいです。うーん、一番の外れはこういつちゃんだけどあそこだな。

「ええと、いいですかーみなさん」

山田先生が、先生をしてる!?!いつもの五倍ぐらいはしっかりしてる!?!これは明日は雪だな……冗談だって。さすがに教員を務めてるんだからいざと言うときは頼りになる人だと思ってたよ。うん、本当。多分。胸もね。ちなみに一夏が胸を凝視していたので足を踏まれる。俺は一夏に眼を向けたので胸見てたのは二秒ぐらいだよ？

「……前から思ってたけど」

「……清水君って一夏のこと」

「君たち。野球をしようよ!俺がバッターで二人が球ね」

「ごめんなさい」

さて、どうしようか。IS訓練機は持ってきたし。午前中は動かすところまでやってくださいね、か。やり方は各自でやれと言う事だ。

「じゃ。ISの装着、機動、歩行までやって交代でいい?名簿順で。各人それぞれ相手のことを見て少しずつこうした方が乗りやすいとかも見た方がいいと思うよ」

「じゃあ私ね」

一夏たちは自己紹介とかその他で非常に時間を食ってるが俺たちの班はそんなこと無い。そりやおしゃべりとかをしながらだが、とてもスムーズである。それにしても、ここは才女が集まる学園だよな？

いい加減学習するべきだ。スパーンという快音が女子たちを正気に戻す合図だった。で、二人目が乗ろうとしたときだ。

「ゴックピット、届かないね」

如月が困ったように言う。あつ、イケね。専用機だから忘れてた。「俺のミスだな」

一夏の班を見るとなんと同じミスをした一夏が女子をお姫様抱っこをしていた。おお、さておれも……やるかボケ。のほほんさんが

「私も後からお姫様抱っこ」

「それはねえ」

バツサリと俺が切り捨てる。

「私はいいよ♪」

うつふんという感じで如月が乗った。他の女子が少し笑った。俺も少し笑ってISを展開する。

「武装が豊富でよかったよ」

盾を展開し、台座を作る。

「次は注意してね」

「もちろん」

歩行の感覚のアドバイスなどをしながらやっていると

「ふん。やはり一番順調はお前の所か」

「もちろんです織斑先生。他の面子ほど騒がれたりしませんし、ましてやお姫様抱っこなんてしてませんし」

一瞬苦虫を潰したような顔になる。が

「そのまま順調に行え」

「了解です」

他の班、一夏の班に行くのを見てうちの班員を見る。

「どう？」

「問題ないかな」

「あいよ。どうせなら直進だけじゃなくてジグザグとかもいいかもね」

IS武器をまた展開。近接武器とかを取り出し、地面にブツ刺していく。

「これを交互に移動しながら触れないとかどう？タイマーもあるよ。一番最初の人ももう一度ね」

「そういうの、いいね」

他にもパワーの凄さを分かりやすくする為に金属ボールで二つでお手玉とかもやりながら理解を深めた。また、かなり慣れたら近接武器を振りまわすなどもやった。千冬さんはこちら辺はルーズだしっかり盾で囲いを作ってやったし。

こうしてこの班員たちと交流を深めました。丸。

「では解散！」

うちらはかなり余裕で終わったけど他はギリギリが多かったようである。

「あー……。あんなに重いとは……」

訓練機はIS専用のカートで運ぶ。動力無しな上にISは重いのでとてつもなく疲れる。俺？さすがに重い物女子に持たすのアレだよね。一人で運んだわけじゃないけどそれなりに頑張った。シャルルにはそんなことさせられない！と体育会系女子がやってた。差別ひどい。今に始まった事じゃないが。

「それより着替えに行こうぜ。二人とも」

それよりさっさと着替えて戻りたい。さて、シャルルは多分あとから来るとか言うと思うけど。

「え、ええつと……僕はちよつと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

うん、やっぱそう来るよね。

「ん？いや、別に待つてても平気だぞ？俺は——」

「そうじゃないよ、一夏。多分、シャルルは肌を見られるのを嫌がつてる。確かフランスにはそういった風習の地方があったはずだから。そうでしょ？」

当然嘘八百である。だが一夏は俺の言った事なら9割信じる奴だ。

「えっ？そんなの……あつ、うん！そうなんだよ!!」

「だからさ、着替えはこれから別々でした方がいいな」

「まあ希が言うならそうか。分かった」

「だから、これから下手に理由を作らなくてもいいよ」

「う、その……ごめん」

本当に申し訳なさそうである。うーん、この子の目的は何なんだ。この子がスパイやったら罪悪感で胃が死ぬのが先だろう。それとも、演技が上手いのか。

「じゃあ先行ってるよ、またね」

「うん！」

十二話 昼の昼食会

「……どういうことだ」
「ん？」

一夏が馬鹿やるスピードが中学に比べての比ではない。さすが女子だらけの学園、男のアルカディア。ところでアルカディアって理想郷だっけ？アヴァロンも理想郷だっけ？どっちもでいいか。

普通高校の屋上は色々理由があつて立ち入り禁止だがIS学園ではそんなこと無い。花壇がいっぱいあるここはお気に入りスポット。ぜひともベンチで昼寝して変人キャラを演じたいものだ。それにしちや人口密度がいつもは高すぎるけどね。いつもは、つてことで今は少ない。シャルル狙いで食堂を女子たちが突撃したが、シャルルのすつごく紳士的なお引取り願いで引き下がってくれた。そのまま屋上に来たが、早速修羅場。

「そ、それはそうだが……」

シャルルたちが同席する事の正当性を一夏がすつごく正しく主張しているが、乙女心は正当性なんぞ気に食わないのが世の常。箒には手づくり弁当が握られていた。キッチンで自分で作れるのでそこで作ってきたのだろう。プロ顔負けの場所の調理場を俺も一度だけ使った。

「はい一夏、希。アンタたちの分」

そう言つてタツパーを一夏に渡す。

「ピヤツハー！」

「落ち着け希。つて酢豚だ！」

つと、鈴の酢豚はともかく美味しい。本当は餃子の方が好きだけど。レシピを母さんに渡して作ってもらうぐらい好きである。

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言つてたでしょ？」

「コホンコホン。一夏さ……いえ、まず希さん。わたくしも今朝はたまたま眼が早くさめまして、これを用意してきました」

そうか、そうか。やっと自信がついたのか。そう、確かアレは何週間前だったかな。

「一夏さん、わたくし今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よければおひとつどうぞ」

そうやって一夏に差し出されたサンドイッチ。見た目は素晴らしい。が、見た目はだ。このお嬢様は貴族出身。さて、料理をされた事は……いや、多分正直に答えてくれない。うーん、一夏が被害を受けるだけけど、さて

「セシリア。この世界にはならわしがある」

「あら、どんなことでしょう？」

「偉大な料理人の弟子が師匠に言った。自信作の料理は一番最初誰に食べさせるべきか？」

師匠は答えて言った。自身なり

弟子は訳を尋ねると、まず自分で食べて実感してこそ自信作である、と。食べても無いのに自信作とはこれいかに。だそうだ」

もちろん嘘話だ。焼きたてジャパンでそんなこと言ってた人がいるが、正直昔から言われてそうな事である。あと微妙に漢文っぽいところがあつた。

「確かに……それでは」

食べた瞬間、セシリアの顔色が変わつた。一夏の命を助けられたようだ。周りの面子も察したようだ。一夏でさえも。

「す、少しお暇をいただきますわ」

そうやってサンドイッチの入ったバスケットを抱えて出て行った。そして俺の携帯にメールが鳴り響いた。

『放課後、私の部屋に来てください』
だよね。

「その、私に料理を教えたくないでしょうか？」

「箒や鈴には頼めないもんね。敵に塩を送るのは立派だけど、敵に強力な武器まで持たすのは愚作だし」

それもしようがない。彼女らは形勢が不利かどうか中々分かっていないのだから、自分の武器は密かにもっておきたいだろう。

「はい。その通りですわ……」

それにしてもこの部屋豪華だね。俺には似合わないわ。

「ひとまず、どうやって調理したのかな？ひとこと」

「本と同じように」

「それは嘘だ」

「本当ですわ！本と同じ色になるようにしつかり!!」

「テニスをしようぜ。俺がラケットでお前がボールだ」

「わ、わたくし何か怒らせるような事でも……?」

駄目だコイツ、早く何とかしないと。……しやあない、口で説明するより明日見せたほうが早いな。

「セシリア、明日朝六時にキッチンに來い」

「料理を教えてくださいるのでか!?!さすが希さん、何でも出来る万能型ですわ」

「まあね。とは言っても一度やれば多分大丈夫。その後は独学でどうにかなるはずだ。あ、エプロン忘れないようにね」

「それでは、今日はよろしくお願います」

「あいよー。さて、味噌汁とかそんなのは面倒なので、とてもシンプルで俺の好きな料理を紹介します。母さんがよく作ってくれました……あ、スマン」

朝だからだろうか、ボケていたようだ。セシリアの両親は死んでるのに。

「いえ、もう昔の話ですわ。そこまで気になさらなくても」

「分かった。ではまず、料理の前に手を洗います」

水道で手を流して石鹸つけて手をこすり水で流す。乾いたタオルで手をぬぐう。

「次に、準備が整っているかどうかの確認」

豚肉、しょうゆ、しょうが、葱は好み、俺のは本当に細い奴を使

う。って言うかこれ葱なのか……？ ラーメンとかにかかってそう
なぐらい小さいアレだよ。そして油。肉を焼くときは植物油じゃな
い方がいいよ（何かの料理漫画より）。だがこれにセシリアは不安そ
う。

「あの、こんな簡単な物でよろしいのですか？」

「うん、セシリアにあることを知ってもらいたいだけだから」

「あることとは？」

「まあ、まって」

フライパンを熱する。ある程度あつたまつたら油を流して全体に。
そして煙が出てきた瞬間に肉を投入。二人分ね。そしてそこにすっ
ておいたしょうがを投入。すぐにしょうゆを投入。そして肉が半分
ぐらい焼けてきたらねぎを投入して、またちよいとしょうゆを投入。
下手に箸は動かさず、なるべく少ない回数でいためる。そしていい具
合に焼けていいにおいを出してきたら皿の上に二人分に分ける。

「はい、さめたら食べてみて」

この間に軽く洗い物。三十秒ほど待つて、セシリアは
「いただきますわ」

まだ慣れない箸で食べた。するとセシリアは

「あら、美味しいですわ」

失敗しない料理だしね。当然である。

「でしょ。ちなみに、この料理を初めて作った」

「なんですって!?!」

そんなばかなっ!?!といった感じで驚いている。

「そんでもって、自分ひとりで料理したのは初めてだよ」

「そ、そんな……つまり私は料理音痴のですか……これは大きいハ
ンデに……」

すっごい絶望してる。周りに伝播しないうちにさっさと立て直そ
う。

「じゃないよ。まず俺は五回ぐらいは料理実習で分担しながらやった
ことあるし。あと母さんの料理を何だかんだ見てたしね。料理につ
いて全く見てないよね、セシリアは多分」

「あ、そう言われてみれば確かに」

貴族のお嬢様なんだからやっぱりか。そりゃ勝手が分からないだろう。

「見てる見てないではやっぱり差は出てくる。そんなもって、セシリアは写真の色に忠実にしようとしたけど、そうじゃない。レシピどおりにやればいいんだよ」

「レシピ通りに、ですか？」

え、何で疑問系なの？普通レシピ通りにやるよね。よくよく考えればここがわけわからんよ。俺がIS乗れるよりわけわからん。貴族のお嬢様たちの世界だとそれが普通なの？すっげー恐ろしい世界だな。「そうだよ、何で疑問系なの？……ともかく、この通り適当な量の調味料を入れても美味しく作れるんだ。レシピどおりならもつと上手に出来るのはなおの事。まずはレシピ通りに作れるようになる事。そんなもって、この具材とこの具材はあうつてのを理解する事。その点ではセシリアは恐ろしく不利だ。鈴や箒は和食や和食に近い料理を作るし、食べてきた。米が主食だし。でもセシリアは全く違う。だからこつちの料理で何があうかが分からない。だから、少しずつでもそれらを理解していく事。例えば残りの材料でもご飯にしようかと葱をまいて醤油をかけるとすっごく美味しいし」

当然直径が大きい葱とかでは駄目だ。ラーメンとかにかかっている細い奴じゃないと駄目だけど。

「な、なるほど……」

「あと、さつきも言ったとおり見る事も重要。ここに週に二、三回通つて他の人を見ながら簡単な料理でも作れば、一夏に出すには問題ないのが作れるだろうね。あ、ネットのレシピも探すといいと思うよ。揚げ物や焼き物、旬の野菜やらを挟んだ美味しいサンドイッチの料理なんて掃いて捨てるほどあるだろうし。あ、もちろん自分で試食しないと駄目だよ？」

あ、そうだ忘れてた。他にも料理の内容を考えないといけない。一夏はいつも健康志向の料理だから、サンドイッチなら野菜とかもたくさん入ったサンドイッチがいいとか、夏なら食用が増進する食材を入

れるとか。相手のことをしつかり観察してそれで合う料理を作るといい。セシリアはしばらくはあの二人に料理の腕が劣るだろうし。ただ、自分だけ洋食で食べてきたのは不利であるけれど利点にもなる。今までに無い新鮮な食事を作ることもできるだろうし」

「全て何もかも納得しましたわ。さすが希さんです。何からなにまでどうもありがとうございます。いつか絶対にお礼をさせていただきます」

丁重に頭を下げられた。

「別にいいさ。出して問題ないと思ったのが出来たら俺にもくれればかまわん」

「え？それだけでよろしいのですか？」

「あのね、別にたいそうな事してないよ。早起きして料理して相手の現状と未来の方策を説明しただけ。仲のいい友達なら普通にやるでしょ？これぐらい」

ただ、それだけのことだ。ちょっと仲が良ければこれぐらいはしているだろう。

「た、たしかにそうかもしれないませんが……。未来の方策は正直的確すぎて恐ろしいですわ」

「別にいいよ。それに、美少女の手づくり弁当ですつごく価値が高いんだ」

少し頬を染めたセシリアがかわいかった。

「じゃあ一つ」

そのときだった。鈴が

「ちよつとー！一夏じゃないから試食させようっての!？」

凄い勢いで勘違いしてる。まあしゃあないよね。そんなもって、仲が悪いならなおさらだ。少しずつ歩み寄ってはいるけど。

「違うよ。義理がたいからだ」

サンドイッチの具材を見る。シンプルな構成で、薄めのカツ、ドレッシングのかかったレタス、チーズで構成されている。

「いただきます」

横目でセシリアとシャルル以外の三人が手を伸ばしてあっ、というような表情をした。だが心配は無い。パクパクたべると口の中に三つの具材の味が広がる。うん、どれも美味しい。俺はそこまで美味しさを表す言葉はもってないが、美味しいと心で思った。

「うん、俺が作るよりはずっともう上手だろうね。さすが女の子だ」

「ありがとうございますわ。では一夏さん、どうぞ」

「お、おう」

一夏がおおずと手を伸ばし、一つ掴んで口にくわえた。恐る恐るだったが、口にくわえた瞬間恐れは消えたようだ。パクパク食べてうまいうまいと言ってる。他の二人はえっと口を開いてた。

「どうぞ、皆さんも」

三人も手を伸ばして手に取って食べる。悔しそうに食べた後、鈴は「希、アンタの差し金ね」

「ただでさえ一夏は胃をいためてるのに殺人料理なんてプレゼントはいやだしね。こっちもご同伴させてもらえるし。それに、フェアじゃないでしょ？第一、俺が言わなくても誰かが教えてたさ」

「ですが、希さんほどの確なアドバイスをしてくれる人はまずいないと思います」

すつごく評価されてるね。でも正直欠点が大きすぎたから分かりやすかっただけなんだけど。

「ありがと。それよりさ、一夏の調子は……まあ、俺と同じようなもんか。シャルルはどうなんだ？こっちにきて」

「そうそう、問題があるなら俺たちに聞いてくれ。分からない事があつたらIS以外は教えられる」

「アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ、覚える事が。お前らは入学前から予習してるから分かるだけだろ」

俺も中学を途中でやめて軍隊生活をしていたが、その最中でもしっかり予習はしてた。普通なら将来の為何を勉強すればいいか悩ますだろう。でも俺にはもうその心配が無かったから集中しやすかった。これをひたすらやればいいので吹っ切れたのだ。

「ええまあ、適正審査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますわね」

そりゃ、追いつけないわ。なかなかには。

「ありがとう。一夏、希。二人ともやさしいね」

「い、いや、まあ、これからルームメイトになるんだし……」

につこり微笑まれた。つく！一瞬ときめいてしまった。一夏もしゃべり方からすると似たような感じか。すぐに話題を逸らす。

「さっきの話だけど、その点鈴はすごいな。一年間で専用機を獲得できるほどになったんだから」

「まあね、頑張ったのよ」

えっへんと少ししかない胸そらす。が、その言葉は予想通り。

「一夏に会いたくて？」

にやりと尋ねた瞬間

「あんたにも会いたかったのよ」

「ブツ」

少し慌てふためいて、その瞬間を鈴に笑われた。くそっ！

「からかいがいのあつた鈴はどこに行った!？」

「あんたの思い出の中よ」

しかし少し頬を染めていた。さて、俺が一夏に会いたい云々か俺に對してのセリフどちらか。

「言うようになったな」

「まあね。色々あつたし。それで、部屋割りってどうなったの？」

「俺とシャルルが同じ部屋。一夏は千冬さんの部屋」

女子三人がげっ、というような表情をした。そりゃそうだ。地上最強の人物がいる部屋で一緒の生活をする。アタックする機会がすさまじく減るだろう。

「まっ、なるようになるだろうさ」

隣を見ると一夏は箒に弁当をおねだりしてた。そしてもらって開けるとすさまじい内容。なんというか、すごい。栄養をしっかりと考えてある。これはすごいと一夏は驚いていた。鈴もセシリアも悔しそう。セシリアは特に。ま、頑張ればそれなりに追いつけるだろう。箒

がツンデレ返ししてるのを見ながら

「セシリア、調子は？」

「それなりに練習してますが、あの域にはまだ……」

「ま、まだまだ練習したてなんだ。伸びしろは大きいはず。俺や一夏の I S の成長が早いように」

「はい！」

「わ、私はダイエット中なのだ！だから、一品減らしたのだ。文句があるか？」

一夏の中に唐揚げがあつて箸の中に無い事を追求したら必死に言い訳をした。本当にどうしてこいつは

「文句は無いが……別に太ってないだろ」

「一夏、お前……どうしてそんなにも地雷源でタップダンスをしたがるんだ？」

それは禁句だ。えつと言うような顔をした瞬間、女子陣から非難の嵐に打たれていた。しかもどうせ英国出身のセシリアが仏がどうか考えて、英国なのに仏のセシリアはいかにとか考えて怒鳴られている。

「あのね、男が女に対して口に出しちゃいけない話題の三つ、ダイエットとお肌と胸だ。分かったら復唱」

「ダイエットとお肌と胸、分かった」

「喧嘩売ってるの？」

鈴は俺に対して言ったのではない。一夏が鈴と箸の胸を交互に見て言ったからだ。だからどうして地雷源でムーンウォークしたがるんだ……。直線状の地雷を全部踏んでいくの意味な。

「希さんは、一夏さんより大分紳士度は高いようですね」

「ヒーロー度は低いけどな。デリカシーで一夏以上に低いのは、正直やばい。というか許されない」

超絶モテ男だから笑い話だが、一般人なら通報されてもおかしくない。

その後、一夏が無駄に修羅場を広げてシャルルが一人天使でおかずを交換しあいつことというなの腕披露をし、またジロジロ一夏が体を見

て罵倒された。そして男同士であるシャルルを見て男同士ついでいいよなど思つてなとか言つたら、駄目よ！駄目だぞ！駄目ですわ！希(さん)となんて！とか言われてISフル装備で展開しようと思つちやつた。こいつらはまだ微妙に疑っているらしい。教育をする必要がありそうだ。

「希、ちよつと付き合え」

「はい」

その日の夜、千冬さんが俺の部屋に訪れた。シャルルは驚いた目で見ている。

「こ、こんばんは、織斑先生」

「別に構わん。希、来い」

テクテク付いていくとそこは千冬さんの部屋。ドアを開けると一夏がいる。

「千冬姉え、どうして希を？」

「まあな、その、なんだ。十五分ほど外にいてくれないか？」

「分かった」

訝しげな目で見る一夏を傍目に千冬さんの部屋に。うん、整っている。

「座れ」

よっこいしよと椅子に腰を下ろす。千冬さんとご対面……ではなく、千冬さんはビールと三ツ矢サイダーを持ってきた。あとおつまみ。

「その、何だ。奢ろう」

あれれー、何かしたかなおれ。むしろしたのは千冬さんで、なおかつシャルル絡みかなー、えー、まじでー。嘘だと言ってよバーニイ。「ありがたくもらいます」

乾杯とペットボトルと缶ビールを鳴らす。ぷはあつと飲んだ後、

「……まあ詳しい事は聞きませんが。楽しけりやいいですし」

「お前は世渡り上手になる。私が保証しよう」

すまなそうな顔で保障されてもね。

「へいへい、それより、一夏の奴このごろ磨きがかかっていますね。どうして地雷を踏みたがるんでしょう？」

さっさとこっちの話に切り替えた方が良い。負い目に感じてもらうのもアレだし。千冬さんのお墨付き出し問題ないと思う。

「……本当に、悪かったと思う」

あれ、もつとすまなそうな顔になった。

「傍目から見れば楽しいんで問題ないですよ。人の心に鈍感だけど、だからこそ裏表無く行動しているんですから」

「そうか。それで、どれが優勢だと思う？」

「へー、正直、今は三強ですね。中学時代の女子は政府の介入で交友関係バツサリされちゃいましたし。本当に親しいのを除いて。で、今は鈴、箒、セシリアがアタックをかけていますから。あの三人のスペックに周りも難しいかと警戒気味。しばらく膠着じゃないですかね？でも鈴にや悪いけど箒が優勢かって直感で感じました」

「ふむ、そうか」

いつも一夏と接している俺と違ってこの人はいつも接しているわけではない。夜会話で聞き出そうにも一夏フィルターで役に立たなくなるし。

「まっ、その気になればハーレム出来るとも思いますけど。一夏の立場ならいけるでしょ？世界で二人の男性IS操縦者。各国一人ずつ奥さん作って子供出来るのも頑張ればwin-winの関係になるかもしれないですし」

可能性だけだね。頑張ればいけるんじゃないかな？

「そうか……色々すまないな」

「別に。最後に言っておきますけど、負い目に感じる必要は無いです。俺を人体実験に使う話があったはずですが、その話は小さくなってきました。千冬さんのおかげかは知らないけど、千冬さんが俺に色々してくれてることも知ってる。だから、構いませんよ」

「……分かった。何度も言うが、本当に困ったら来い」

さっすが頼りになる。これじゃあ出会いが無

「無駄な事を考えるな」
「へい」

十三話 転校生の秘密

「じゃ、これからよろしく」

「うん。よろしく、希」

食後の日本茶を飲みながらゆったりと挨拶をした。さて、ここで君女？というべきか。それともしばらく様子を見てみるか。うーん、ま、どんなときでもISは持つてるようにしよう。この機体はオモチャオモチャ言つてるけど、そんなことは思つてない。全くではないけど。これには多くの人が関わつてるとても大切な物だ。そんな無用心をさらすのはいけない。

「紅茶とずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「紅茶はカフェインが多め。ガンの予防になるとか言われてるね。他にも色々あるけど。緑茶はテアニンとかの物質で心を落ち着けやすい。一日を終わらすんなら落ち着いて終わらせたい」

「へえ、色々知ってるんだね、希は。色々アドバイスもしているみたいだし」

「アドバイスするのはとってもいい事に思えるけど、楽な事だ。相手の現状を見て相手にこうしたら言いというだけ。どんなことでも言うは安く、行なうは難し」

「でも、立派だと思うよ。しっかりと考えて思つてるんでしょ？」

ニコツと笑われる。つく、笑顔を見せてくる女性陣が非常に少ないから体性が無い。鈴は結構笑うけどあれは違う。ほんわかなるタイプ。見ていて和む。それもしても、これでシャルルが男だったら一日引きこもろうかな。

「ありがと。さて、それよりこれから共同生活になるわけだ。色々ルール作っておくべきだと思うけれど、どう？」

「賛成だよ。でもどんなの？」

「まずシャワーの順番か。シャルルが先でいいよ。俺の機体が機体だし、整備項目が結構あるんだ」

人の数倍以上の武装を持つてるのでそれなりに整備に手間がかかる。とは言え基本的な所だけなのでそこまでのスキルは必要ない。

武装が多いから手間がかかるだけ。

「え、でも汗をかいたらすぐ浴びたい日もあるよね？」

「それはお互いに言える」

「でも僕は汗をかかない方だから」

「俺もだよ。ま、固定するのはあまりよろしくないな。お互いの状況によって柔軟につて所か。ともかく、俺の武装はとにかく多いから。基本はシャルルが先でいい」

「……分かった。ありがとう」

うん、よくこんな自然に笑うもんだ。楽しくはあるけれど完璧に落ち着ける場所は今の俺にはそうはない。あー、癒されるわ。と言ってもスパイかもしれないのでそこまで落ち着くわけじゃない。

まー、千冬さんが見過ごしてるから問題ない人だろうけど。

「そういうえば希は一夏たちと放課後I Sの特訓をしているつて聞いたけど、そうなの？」

「うん。模擬戦もやったりする。1位が鈴で2位がセシリア。3位俺で4位箒。ビリが一夏かな。搭乗時間がまだ少ないから仕方ない。さらに言えば武装が武装だししかたない」

剣だけとかマゾゲーレベルである。実戦なら後ろから刺されても文句言えないレベル。

「僕も加わっていいかな？」

「歓迎だろうね。もし、シャルルが女なら、歓迎されなかつただろうけど」

「あ、あはは、そ、そう」

笑いは少し引きつっていた。

シャルルが引越してきて五日後。土曜日なので午前中は理論学習で午後は自由時間。アリーナ全面開放なのでみんながこぞつてやってくるけど。そんな中一夏は

「やっぱ理論的な先生が二人もついていると違うな」

うんうんうなずいていた。他の三人からの視線が厳しい物になる。

「射撃武器の特性とかは教えたけど、やっぱり射撃が上手いのがいると違うな」

俺自身もシャルルに色々教えてもらっている。いつもの三人がぶつくさ言ってるが無視。

「シャルルの攻撃をくぐるのは難しいな。やっぱり最終的には慣れしかないか」

「お前のワンオフアビリティーは火力最強だけど、接近戦しかないのが最悪だな」

燃費悪い、接近戦しかない、装甲薄目と玄人仕様を真正面から突き進む機体である。というか玄人使用と言うより失敗作ではなからうか。

「希のは遠距離でも火力高いだろ」

「それにしても、よくあんなに多くの銃を扱えるね」

「何となくね。シャルルもラピッドスイッチがすごいね。あとその機体の四枚羽がすごい、ほしい」

「嬉しいけど、あげるのは無理だね」

あははと笑いあう男たち三人。このごろ女子三人が男同士でつるむので荒みまくってる。そろそろカバー考えるべきか。でも夜は結構話してるしな。

シャルルの機体は結構な改造がされている。全体的に言えば防御を削って機動力・加速力を増加させ、武装を豊富にしているといった感じだ。収納領域が二十ぐらいあるらしいが、戦車の火力にしてせいぜい二台分いくか怪しい。一夏はまだ良く知らないので数十台百台と考えるとそうだが。戦車の主砲は120mm主流だけど、ISのは最大口径で60mmあるかといったぐらいだ。正直120mm主砲を直撃したら、一瞬で全てのエネルギーを刈り取られるだろう。というか搭乗者死亡。当てるのは不可能だろうけど。

そんなときだ。ザワザワ……賭博するわけではないが、そんな雰囲気になる。見るとドイツの第三世代に乗ったボーデヴィツヒさん……ボーデヴィツヒがやってきた。

「あ、訓練参加する?」

努めて明るく振舞う。それでいながら武装を展開する準備をする。どう考えても、とち狂ってお友達になりに来たわけじゃないだろう。

「おい」

無視されました。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「ボーデヴィツヒ、ドイツじゃ知らないけど、日本では戦うときにデュエルしろよ、と言う。そうじゃないとまず受けない」

からかい目的で気を逸らそうとしただけなんだ。そうなんだ。

「なに？ならば話が早い。私とデュエルをしろ」

直後にアリーナ全体が静まった。皆がISとかで盗み聞いていたのだろう。正直、俺はいたたまれなくなつた。

「希、笑えばいいのか？どうかにかしてくれ」

今更嘘だとはいえない。というかこの子嘘を知らないのだろうか。なんでそんなすぐ信じる？どうしようかと悩んだとき、どうやらかまわずしゃべることにしたらしい。

「貴様がいなければ教官が大会三連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を、貴様の存在を認めない」

なるほど、一夏が誘拐されたときか。一度だけ聞いたな、あとニュースだけど。なるほどね、千冬さんにほれ込んでるわけか。だが「それは理不尽だ」

「何だと？」

「あの時一夏は力がなかった。大人なら悪い、そういえるかもしれない。だけどあの時は力が無い子どもだったんだ。責めるのは間違っている。第一、そのことが無ければお前は千冬さんに会えなかった。違うか？」

一瞬ひるんだようだがすぐにキツと俺を睨みながら

「確かに子どもは力が無い。そのことが無ければ私は教官と会えなかった。だが、それでもこいつがいなければ教官は三連覇出来たのだ。だから、貴様の存在を認めない」

「また今度な」

「ふん。ならば、戦わざるを――」

「やめてよね、千冬さんは怒ると怖いんだ」

先に銃を展開した。ぺちやくちゃしゃべってる間に展開するぐらいは出来る。

「邪魔をするなら、お前から行くか？」

「戦うのは興味あるけど、今は密集してるから。やめてほしいな。もっとすいてるアリーナでやる？」

「やめとけよ、希。そいつと戦わなくても」

「相手が退くなら退くさ。でもさ、今日はやめた方がいいよ。こんなところでドンパチやったら、教師が抑えにかかる。なに、これから三年間同じ場所で過ごすんだ。機会はいくらでもあるだろう？」

「……ふん、今日は引こう」

そう言つてアリーナゲートへ帰っていった。うーん、怖そうな子だけど、意外と聞き分けはいいようだ。デュエルしろという嘘も信じたし。意外と純心なのか？

「希はすごいね、おさめちやった」

シャルルが感心したような目で見てきた。

「というより、あのボーデヴィツヒって子、意外と純心で素直なのかもね。あんな嘘にも引つかかるし、聞き分けもある。ただ、千冬さんのことを大好きなだけで。まるで真っ直ぐで何も知らない子どもだ」

その背中を俺たちは見送った。その足取りはともしつかりしたものだ。

明日は休みだ。なので、ちょうどいい時期だと思った。女だろ？と切り出してそれで大まかな推察を立てる。今は切り出し方を悩んでいる最中だ。

「希、緑茶飲む？」

シャルルは紅茶飲む？とかコーヒー飲む？とかは聞いてこない。五日間同棲生活をしてる。俺がコーヒーも紅茶も飲めない子供舌だとは知ってる。それで軽くからかわれたし。あつ、セシリアの紅茶は

いける。あれは何か世界が違う。

「うん、あ、でも今日は俺が淹れるよ。ちよつとね」

「何か美味しい淹れ方でも調べたの？」

「さあつてね」

水は値段高めの天然水。ただし、いつもと味はあまり変わらないように緑茶を。沸騰しない温度を見極める必要がある。そんなことを考えてるとのんびりとした声が。

「希、漫画って他にもおすすめある？」

家から持ってきたものや給料で買った漫画や小説が本棚に大量に積まれている。最初はQEDをおすすめし、魔人探偵もすすめた。武装連金その他色々あり、けっこうはまったようで夜ギリギリまで読んだりする事も少なくない。夜更かしはしないけど。この子健康的。

「そうだなー、言い忘れてたけど森羅博物館つてのがQEDの外伝的な立場。短編が多めだけどその分リズムカルに読めるよ」

言い忘れてた。意外と俺は物忘れが激しい事もある。三秒ぐらい前まで持ってたものを無くすとかもたまにやるぐらいには。

「ありがと。それにしても、本当にたくさんあるよね」

「昔からの趣味だし。シャルルは？」

「僕も本を読んだりするのは好きだけど、漫画はフランスにはあまりなかったから新鮮かな」

全く、ここまでふつうにおしゃべり出来るのに。肌見せたりしたらすぐテンパるのは演技か何かか。

「はい、お茶」

「ありがとうね」

テーブルに行儀よく正座で座るシャルル。面接官は相手と会話して数分でどんな人間か当てられるようだけど。さて、

「あつ、飲む前に良いか？」

「どうしたの？」

「シャルルって、女だろ」

一瞬シャルルは茫然とした後、いきなり慌て出して

「そつ、そんなわけないじゃないか！ほら、胸もぺったんこだし！それ

にちゃんど男として入って来てるし！希、何かの冗談だよね!？」

色々言い訳の言葉を並べるが、最後には悲痛そうな顔になった。その顔があまりにも痛々しいのですぐに

「まあまあ、少し落ち着けて。別にどうこう言う趣味はない。俺の持論だが、人には人に話せない事の一つや二つある。そんなでもって、話してもらえないにはその人からの信頼が必要だと思う。だから、別に通報する気もない」

シャルルは困惑しているような、でもありがたがっているような表情を浮かべた。

「ほら、取り乱しただろ？俺のせいだけど。お茶を飲んで落ち着いてくれ。ただ、女って確認しておきたかっただけ」

「……いつから気付いてたの?」

「二目見た瞬間。千冬さんも気付いているだろうな、一夏と同棲出来ればこのぐらいの事で文句は言わないだろうが」

前言った通り、安心材料の一つ。千冬さんがシャルルの偽装入学を許してる、つまりまず良い人間だと思ってる。なんだかんで生徒が被害及ぶなら一夏との同棲生活を投げ出してでもどうにかするだろうし。例え俺でも。だから深刻ではない。

「そう、優しいんだね。希は」

はにかみながら、小さな声で言った。

「そうじゃないよ。この学園の奴なら皆理由は尋ねたりするかもだけど、通報しようって奴はいない。皆がすることをやるのは優しいとは言わない。そうじゃなくて、誰もが投げ出しそうな所でどうにかするのが優しいんだ。一夏がそうだったように」

慰めの言葉を並べるのは誰だって出来る。その先に行ける人が優しいんだと、俺は思う。その手前が俺を表すのに最適な言葉の『良い人』で、優しい人の先が『善い人』って所だろうか。

「それでも、優しいよ。僕が落ち着けるようにお茶を用意してくれたり、初日の時も一夏の視線を逸らしてくれたんだよね？着替えの事も。シャワーを先にどうぞって言ったのも」

「それは紳士の嗜みだ。一夏じゃあるまいし。レディファーストぐら

いするさ。だから気にしないで今まで通りでいい。……というか、アレで気付かれないと思つてたの?」

軽口を混ぜて返す。

「もう、ひどいなあ……ありがとね、希」

その笑顔が女か?と尋ねる前に戻つてきたようで、問題ないなと思つた。と思つたら

「ねえ、ちよつと待つてて」

お茶を飲み干した後立ち上がつてシャワールームに着替えを持つて行つた。シャワーの音などがきこえてしばらく経つと

「お待たせ」

髪はしばつていないで、水で濡れている。バレたからもういいと思つたのか、胸を締め付ける特別製の何かをつけていないのか、貧乳と思つてごめんさい。大きいね、いつもと同じジャージなのに。すごく雰囲気が違う。こりや、下手したらこれからはシャワーの音を意識しちゃうかもな。からかいで

「貧乳じゃなかったんだね」

シャルルはちよつと顔を赤くしながら

「希のえつち……」

グツ、これは正直心に来る。ダメージがでかい。地面からシャルルに視線を戻すとクスツと笑つたようだった。でも表情を真顔にして「ねえ、さつき言つたよね。信頼が無ければ話してもらえないって」
「言つた」

「僕は、希の事を信頼してる。軽口を混ぜて気をまぎらわせたりしてくれる希のことを、信頼してる。だから、話すよ」

「……茶、まだいるか?」

「ありがと」

テーブルで正面から向き合う。でもね、すつごく俺は優しくないよ、シャルル。一番最初にこの話を切り出して、反応は二つだと思つた。今まで通りか、話を切り出してくるか。今までで考えたのはスパイ・ハニートラップ・男を快く思わない連中の暗殺者とかそんなところだ。でも、千冬さんが通している以上無理やり命令されているとか

と推測しているけど。それを、シャルルの良心が傷むような言い方を
して反応を起こさせた。だから、優しいとは言えないんだ。すごく申
し訳ない気持ちになった。さつき自分を良い人って言ったけど、良い
人に見える悪い人だな、こりゃ。

「えつとね、男のふりをしてたのは、実家の方からそうしろって言われ
て……」

「自社の広告塔。男と接触しやすいだろうから男のデータを取ってこ
い、だろ。デュノア社は経営危機だったはずだ。第二世代は大勝利だ
けど、その分第三世代で後れを取ってるから。いいにくいだろうから
言わせてもらった」

「……すごいね、そんなに分かるなんて。なら、僕の身の上話だけでい
いかな。僕はね、愛人の子なんだ」

ツ、ある程度予想はしてた。社長の公然の実子がそんな男だと偽っ
てやって来れるわけがない。となると、最初からいない人間。そん
で持ってシャルルはデュノア社社長を父と言ってた。嘘をついていな
い前提でなら、ある程度の予想は立ててた。だけど、聞くととなると重
みが違うな。

「まさか、それも予想してた?」

「悪い、してた」

よくある昼ドラ展開?の一つみたいなものとして。可能性の一つ
として考えていた。

「悪くないよ。それにしても、本当に頭が回るんだね。……それでね、
引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父
の部下がやってきたの。それで色々検査をする過程でIS適応が高
いことが分かって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイ
ロットをやることになってね」

「話したくないなら、いいんだぞ?」

表情が乾いたようになっていくのを見て、声をかける。見ていて気
分が悪くなりそうだった。だけどシャルルは首を振った。

「父に会ったのは二回くらいでね。会話は数回くらいだと思う。普段
は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの

ときはひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

へー、ふーん、なるほどねー。……

「それで、何かどうかするつもりはあるか？」

「えっ？」

「どうもこうもない。その気になればシャルルはデュノア社は性別を偽らせてIS学園に入学させる奴だってばらしてもいい。IS学園にいる間は国家からいかなる干渉も受け付けない。自分を神か何かと思つてふんぞり返つてる親に少しは思い知らせてやれる」

「の、希？」

「もちろんアフターケアは俺が出来る限りする。シャルルは優秀だからウチの会社でもやっていける。シャルルが望むなら、力を貸そう。どうする？」

「……いや、いや。今はこの学園生活を楽しまたいかな。それより、希つて怒るんだね。いつも冷静沈着なのに」

「俺だって人間だ。つて言うか、小学生時代は一夏みたいな直情的な性格だった。中学になって上がるにつれて冷静になっていっただけで」

「アニメとかに影響されてね！俺は悪い人かもしれないが、悪い人でも怒る権利はある。」

「とにかく、僕の身の上話はこれでおしまい」

なるほど、ただいくつか気になった事がある。

「なあ、突然だけど、日本語つてどれくらいで覚えた？」

「本当に突然だね。確か、二年ぐらい前からかな」

「最初は女言葉だった？」

「最初から僕だったね。今考えるとおかしいな」

「体の手術を受けた事は？」

「検査だけだと思っけど」

「ありがと。そうか……」

「どうしたの？希」

いくつかの気になる点。一瞬糞親だと思ったが、色々おかしい点があったからだ。もしどうでもいいなら部下を迎えに来させないし、手術をしてもう少し男らしく見せる方法もあるだろう。ある程度の手術は問題ないのだから。二年前から日本語を教えるってことは、IS学園へもぐりこませる予定だった？いや、当時はIS開発は切羽詰まってる。急いで送り込まないでいいし。……でも、話を総合すると……いや、まさかね。

ただ、僕って教え込まされたのは疑問に思おうよシャルル。あー、そうか。それだけ精神的に危険だったのか。母親が死んで、母が好きになった父親だと思っただらひどい親に見えて、一人孤立。そりゃ精神状態はキツイわな。

「いや、大丈夫。それより、辛い身の上話をありがとう。どうする？一夏にも事情を話した方がいいんじゃないか？」

「ううん、これは僕たちだけの秘密」

指を唇にあてる動作はともかわいらしくて、似合っていた。顔の表情は変化してないだろうけど、赤くなるのを抑えるのはさすがに無理だ。赤くなっていないだろうか、分かんない。つと、そうだ。言い忘れてた。

「ともかく、俺はシャルルと一緒にいて楽しいし癒されるし。ここにいればいいよ」

そう言うと、シャルルの瞳は一瞬潤んだようだった。気のせい、かもしれないが。

「ありがとう、本当に。……あつ、最後に、僕の名前は、お母さんがくれた本当の名前はシャルロットって言うんだ。二人きりの時は、シャルロットって呼んでね」

微笑みとともに向けられ、多分赤面したんじゃないかなと思った。どうにか、気が向いたらなって返すのがやっとだった。

十三・五話 小話

金曜日。

『有名人のAさんが不倫をしていた件について。夫のBさんは『憎くて仕方がない』とコメントしています』

学園のテレビでそうした放送が流れた。うーん、家族でこういったニュースが流れると気まずいけど、この俺と一夏とシャルル（はどうだろう）以外全員女子の場所で流れるのも気まずいな。そう思ってる隣の女子が

「ねえねえ、三人とも、不倫についてどう思う？どっちが悪いと思う？」

「やっぱり三人とも女が悪いって思う？」

意地悪な質問だな。ちなみに、俺の前に一夏、その隣に箒と鈴、鈴の隣にセシリア。こっちの左にシャルルで右に今質問してきた子。

一夏は

「不倫する方が悪い。人を裏切るなんて、不誠実だ」

こいつ不誠実なんだぜ。他のヒロインズもそれに賛成してた。

「Aは女の風上に置けん」

「嫌な事件もありますわね」

「本当に、全く」

鈴は不倫がかは知らないけど、両親が離婚してるのでなんとも嫌そうに言った。

「やっぱり普通はそうか」

「えっ？皆そう思ってるの？」

『ん？』

皆が一斉に俺とシャルルを見た。

「え？あんたたちは違うの？」

「あー、違うな、俺は」

「僕もかな」

「なら、誰が悪いと思うのですか？」

「「浮気された方」」

「おつ、シャルルもそうなのか。奇遇だな」

「希もそうなんだ、奇遇だね」

自分の意見が異端だと確信してたから。とはいえ、シャルルが同じ意見かは知らないけど。

「どうしてなんだ？不倫する方が悪いだろ？」

「人を裏切るのは悪い事だ」

他の皆もうんうん頷いていく。

「確かにそうだけどさ。結婚の利点を挙げるけど、まず第一に好きな人と一緒に人生を過ごしていける点。と言うか、ほぼこれに集約される。けれどさ、いつまでも気持ちと同じとは限らないだろ？もし相手を嫌いになったら利点じゃなくて最悪な点になる」

「確かにそうだけど、どうして不倫したのが悪い方になるわけ？」

「簡単。相手の気持ちが変わることがある。なら、相手が自分を好きでいてくれるように努力するべきだろ？本当に相手のことが好きなら、手放したくないと思うなら、他の女や男なんて目もくれないぐらい自分に惚れさせればいいんだから。相手が自分無しじゃ生きれないぐらいに惚れさせれば不倫なんて起きない」

「あつ、僕も同じだよ」

おつ、シャルルも同じ意見だった。さらにシャルルが付け加えて

「例えば、昔は優しくかった人が、結婚して凄く暴力振るったりしたら、不倫されるのも仕方ないよね？だから、相手の傍で居続けたいと思うなら努力するべきだと僕は思う」

「あつ、でもそんな相手を選んだ本人も少しは悪いとは思うぞ。将来性とか見て選んでないという点では。結婚したらそれで安心するよ
うな奴と結婚するなって事」

そう言うのと、周りはフムフム頷いた。

「二人とも、すごい考えてるな」

一夏がなるほどといったように。

「さすが頭脳コンビね」

鈴が流石と言うように。

「私も努力しなければいけませんわね」

決意を固めて。

「相手を魅了し続ける、か」

こっちも。

「ということで、努力は惜しんじや駄目だよ？三人とも」

そして、怒鳴られました。

「お邪魔するわね」

「人口密度高いね。よっす」

ベッドの上でぐーたら漫画を読んでも鈴がやってきた。ちなみに、もう片方のベッドにはシャルルが、椅子二つには箒とセシリアが座っている。それぞれが一応の返事をする。あつ、一夏が来る前と頻度はあまり変わっちゃいない。一夏を通さない交流もあるって。一番頻度が高いのは鈴ね。

「椅子無いわね。あんたのベッド座っていい？」

「いいよ〜」

そう言つて漫画の一冊を抜き出してから俺の隣に座りこむ。そしてしばらくすると、

「うう……不覚」

箒が少し目を赤くしていた。ガンスリの最終巻を見ている。意外と乙女なのでこれを勧めた。

「どう？面白かった？」

「……悲しい物語だが、良かった。また読み直すことにする」

そう言つて第一巻を取り出し、椅子に座りだした。それを見てセシリアが

「それは箒さんとしてはどれぐらいお勧めですか？」

「夜更かしして授業に集中できなく、織斑先生に怒られようとも悔いはない」

「すぐ勧めますわね。後から読んでみます」

「セシリアが読んでるのは何だ？」

「ARRIAです。またイタリア旅行に行つてみたいですね。この物語、いつも忙しかった幼少時代にこそ欲しかったですわね。心が落ち

着いてきます」

「あー、分かるわ。それ落ち着くわね」

「僕も読んだけど、すっごく落ち着くね。昔を思い出すよ」

「となると、ぜひ読みたいな。読み返すのは明日にしよう」

そう言つてARIAの一卷を取ろうとする。つでもそれは毘だ。

「あー、ちやう。その隣のAQUAが最初。それ一卷、二巻のあとARIAだ」

「少しややこしいな。分かった」

そう言つて、五分ぐらいパラパラと漫画をめくる音が流れる。そしてたらシャルルがんーつ、と伸びをした。

「疲れたー。でもついつい読んじやうね」

「読みやすいからね。小説は二ページで一分とか二分かかるけど、漫画はその四分の一以下ぐらいで済むし。ペースが速い」

「そうだね。それにしても、ジョジョって面白いね。でもまだまだ四十巻ぐらいあるから、長く楽しめるよ」

「でも密度を薄くしたような漫画は嫌だな。文章が少ないから、その分テンポ良く進めない」と

「だね」

そしてまたペラペラめくつてると、今度は鈴がダンツととび跳ねた。

「どうした?」

「ドラム缶で悪かったわね!」

題名を見るとネウロ。ああ、そのネタ笑えるよね。と言うかどんなネタもかなり笑えるんだけど。ドラム缶ネタはかなり笑えた。

知らない人向けに言うと、助手がメジャーを出してドラム缶の3サイズ? を測つて、上から○○、○○、○○、喜べお前の仲間だと主人公の女に言うのだ。このように主人公女のスタイルを皮肉つた。

「落ち着け、漫画に切れてどうする」

「そ、そうね」

そして五分ぐらいすると、扉が開いた。

「遊びに来たぞ」

それぞれ声をかける。一夏がきよろきよろ見渡して

「何と言うか、みんな希に染まってきたな」

「二」「それはない（ですわ・わよ・よ）」

「お前たち酷いな」

気分落ち込んだじゃうよ。あつ、アニメは一緒に見ない。俺が見る深夜アニメはあまり女子と見るものではない。日常系のものならまだしもだけど。一夏とだってあまりにひどいのは見てないし。シャルルにいたっては中身女（99%）なのでいけないときに見るようにしてるが、それがほとんどない。困った。

「全員そろってるし、漫画じゃなくて何かするか」

俺達全員がそろうのは確率的に一週間に二回ぐらいだ。一夏は千冬さんの部屋に移った後もこつちにはほぼ毎日来てる。ヒロインズも他に負けじと攻めてくるが、それでも合計六人となると合うのは二回ぐらいが限度。

「人生ゲームとかか？」

「大富豪とかもな」

「それより希、将棋をしよう。今度は負けないぞ」

「私もチェスで勝負ですわ」

この二人と将棋やチェスで何度か勝負してる。二人共に対して勝率七割って所。天下の代表候補生や天才の妹相手には良い勝率。ただ、この二人はやはり脳筋な所があるのでそこが狙い目。

「まとめてかかってこい」

「調子に乗るのも今のうちだ」

「今日は倒します」

こつちやって煽ると冷静さが失われたりする。

「大富豪はこつちの四人か。シャルル強いんだよな」

手札の使い方がうまい。

「そんなことないよ」

勝率としてはこつちが勝ってるけどね。俺は意外と運がいい方だ。こんなときばかり運が良くてもいざというとき悲しいだけだが。一夏が机の引き出しをあけてトランプを持ってきた。

「じゃ、俺が切るぞ」

こうして、俺の日常は過ぎていく。ヒロインズとの関係はこんな感じである。

十四話 希とラウラ

「それじゃ、ご飯とってくるけど何が良い？」

シャルル改めシャルロットが、真剣な話をするためシャワーを浴びて着替えてきたけど、よくよく考えると食事はまだだった。その事を思い出して今更コルセットだかサポーターだか付けるのもあれだと思ひ、取ってこようと提案した。

「希と同じのいいよ」

今日は和食なんだけどね。

「じゃ、気をつけて」

「うん」

そう言つて外に出ると、疲れがどつと出たような気がした。扉にゆっくりともたれかかつてため息をつく。三十秒ほどで復活して、いつものように背筋を伸ばして歩き出す。身長165cmを伸ばして見せたいわけではない。

てくてく歩いて行くと、妖怪の後ろ姿があらわれた。

「出たな！妖怪！」

「希、この状況どうにかならないか？」

ボケに突っ込みを入れるでなく、この状況をどうにかしてくれと言つてきた。何を言ってるか分からねーと思うが、コイツくるつて。後ろに振り返つてこつち向くと、箒とセシリアに挟まれた一夏のすがたが！鈴じゃ駄目だしね、押し付けるのは。鈴のことは不憫で仕方ない。おお、鈴よ！無いとは情けない！ちなみに本人の前でこれと思つたら吹っ飛ばされてる。

「あのね、天下の美少女二人に挟まれてどうにかしてくれ？お前、世界の男が泣いて土下座して頼み込んでくるレベルだぞ。俺だつて土下座して二人に頼み込みたいぐらいだぜ。お前馬鹿か？」

「さすがは希さん、よく分かっていますわね」

さすがですわみたいなのエツヘンとした表情でセシリアが。

「だが、お前が土下座して頼み込みみたいと思つてるのは嘘だろう？」

胡散臭げな表情を向けてくる箒。

「いやいや、本当だよ？」

あははと片手あげて笑いながら。この瞬間に下手にどもつたり謙遜するのではなく、むしろ押し笑って笑い飛ばすのが上策。そうすると、「あ、コイツ興味無いな」みたいに思われやすい。あ、頼み込むってのは嘘だけど二人に挟まれたらヒヤッホーぐらいにはなると思う。

ちなみに二人はえっへんと胸逸らして一夏に余計に当たるとも密着されてるとちよつと苦しいのかな。助け船をだすつもりはないけど。あ、言いたいことがあるんだ、この状況。

「でもね、俺の大嫌いなのは天下の往来をふさぐことだ。邪魔なんだよね。どいてくれない？」

「あつ、ああ、すまん」

一夏を連行したまま横にそれる三人。

「お前、本当に横並び嫌いだよな」

「うん。歩道とかで自転車を二台並走とか、廊下をふさぐ三人組とか大嫌い。二人はいいんだけどね」

抜かれる幅があればいい。中途半端に中央で二人ぶらぶらとかはダメ。

「意外と細かいんだよな、お前」

「それで、そのままカニ歩きで行くの？」

「いえいえ、そんなことないですわ。箒さん、どうぞお先に」

「いやいや、セシリアこそ先に行くといい」

一応名前呼び合うぐらいには仲良くなってる。が、一夏がらみはライバルだから仕方ない。恋は戦争らしいから。

冷めると元も子もないと判断したので、一夏たちに別れを告げて食器を二つ持ってシャルロットのところに戻る。両手は塞がってるので

「俺だ」

ガチャツと音がしてドアが開いた。

「お帰りなさい」

日常生活で笑顔だもんな。すつごく癒されるわ。

「ただいま」

そう言つてドアの中に入りテーブルに食器を置く。シャルロットを見ると顔が微妙に赤かった。

「どうした？まだ気分が落ち着いてないか？」

「ぜんぜん！全く関係ない事だから！ね!？」

いきなり慌てふためいた。さすがの俺でもわからんぞ。今のどこに慌てる要素が……？まあいつか。

「そういや、シャルルって箸使えないんだよな？」

「うん、練習してるんだけどね。……」

あれ、ちよつと不満顔。どうしたんだ？まさかシャルロットって言わなかった事？無いよね、多分。いきなりシャルロットって言うのは、何とつかアレだよ、アレ。気恥ずかしい？じゃなくて、皆の前の方に言い間違えるかもしれないし。

「良かった。ナイフとフォークで食べれるよな？和食」

シャルロットは何か言おうとしていたようだが、口を閉じて

「希は準備がいいんだね……箸ならあーんとか……」

「察知能力も高いぞ。いつも無駄に不注意でラブコメしてる一夏とは違う。一夏とシャルロットが同棲してたら間違いなくシャワー中に乱入してるな」

小声で何か言つたような気がする。

「そ、そんなにひどいの？……ひどいよね」

散々な言われ方だが、一夏はそうだ。絶対にそうする奴である。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

中学生時代は言つたり言わなかったりだけど、軍隊生活が始まってから矯正されたので毎回言うようにしてる。そりゃ、作ってもらってるんだから言うべきだよ。中学生時代の時も忘れる時があつただけで、言うべき派だとは思つた。でも、ささやかで大事なことほど忘れやすい。

「今日もおいしいなあ」

「うん、そうだね」

あははと乾いた笑いを漏らしていた。俺は何かミスをしただろうか？……そんなはずはない。

ピピピ、ピピピ。音が鳴り響いた。俺の目覚まし時計の音。時間は六時。同居人を起こさないように素早く止める。健康的な食生活、運動、睡眠、健全な人間関係が為せる業で、素早く目を覚ませた。体を伸ばし、隣のベットを見る。シャルロットがまだ眠っている。なんとというか、女と判明して翌日だけど、いきなり見方が変わった……のだろうか。まあいつか。シャワー室に行き、運動用の服に着替える。シャワー室を出ると

「ん……おはよ」

「あ、起こしたか？」

「ううん、大丈夫。それより、今日も？いつもどんなことしてるの？」同居しだしてから毎日早起きはしてた。いつも、ということは起きてないと思っても起きていたということか。やっぱり代表候補正、気配とかも敏感か。

「体力は全ての基礎って言うし。シャワーもあるから六時半ぐらいまで走って、その後に箒とかを見つけたら剣の訓練に付き合ってもらおう」

「へえ、やっぱり努力してるんだね」

いや、そんなすごいやみたいな表情で見られても。今までで言えば君のがよっぽど努力していると思うけど？俺が頑張ってるのはここ数カ月だけだよ？

「ここは才女ばかり集められた学園だし。男代表の片割れとしては情けない姿は見せられないんだ。一夏も一緒にやってるよ」

「……僕もこれから付き合ってるよ？」

「俺が追いつけなくなりそうだけど、自分の問題だろ？いいよ」

なるほど、今まで微妙に後ろめたいところがあったけど、それがバレたから遠慮しなくなってるのか。やっぱり一夏にも知らせた方がいいんじゃないだろうか。そうすればもつと落ち着くと思うけど。

「じゃあ、ちょっと待ってて」

着替えを取り出してシャワー室に引っ込む。そこから服が落ちたり擦れる音が……いかん、微妙に意識するな。ISの新しいコンボでも考えよう、うん。

しばらくすると、いつもと変わらぬ姿となつて出てきた。そこでふと疑問に思つたことを

「ねえ、胸きつくくない?」

「きついと言えばきついけど、しょうがないかな。特製コルセットでこうしてるんだ」

「へえ」

あの大きさがここまで圧縮されるとは。感慨深く見ると、シャルロットは腕を胸に当て

「希のエッチ」

「男がエッチじゃなかったら人類が減ぶさ」

「もう…希!」

顔を真っ赤にしたシャルロットかわいい。和むわー。

「そ、それは本当ですよ!」

「う、ウソついてないでしょうね!」

教室に一夏とシャルロットと姿を現すと、馬鹿みたいに噂に引つかかった二人を発見した。鈴、前にそれっぽいことほのめかしたよね? まあいつか。人間は自分の信じたい事しか信じないって言うし。俺も大体そんな感じだし。

「本当だってば!この噂、学園中で」

噂と言う物はあるときは一国を滅ぼすらしい。場合によつては女子だけの学園一つファイバー状態にさせるなど簡単だろう。

「俺がどうしたって?」

「「きゃああっ!」」

一夏は声をかけたら悲鳴を上げられて困っている。

「一夏がどうしたって?」

「えっと、その、そうだったっけ？」

「そうだったかしら？」

ここまで下手なシラの切り方は無いわ。適当に一夏が今度の大会で戦うときにどれぐらい進むか、みたいな話に持っていけばいいの。なんで才女ばかりなのにこう言った時は頭が働かないんだろうか。

「あつ、そういういえば昨日、希ひどいだろ」

「えっ、何が？」

いつも一夏に対してそれなりにひどいことをしている覚えはあるが、昨日は無い。

「俺が箒とセシリアに挟まれて助けを求めたのに。俺だったら土下座して頼み込みたい、とか言ってたさ」

「世界中の男なら羨ましがると思うけど？シャルルもだろ？」

見るとニツコリ笑ってた。周りの女子（鈴・セシリアも）だけでなく一夏もひるんだ。俺も。ボー・デヴィツヒを見ると周りを警戒して腰に手を回していた。多分そこにナイフでもあるのだろうか。この学園って、ほんと無法地帯。

「一夏、なんだって？」

「俺が箒とセシリアに挟まれて助けを求めたのに。俺だったら土下座して頼み込みたい、とか言っていました」

さつきと殆ど変わらない返答。

「誰が？」

「の、希です」

「へえ、希は女の子に土下座して挟まれたいの？」

正直、怖い。一瞬どもりそうになるがここは平静でいかないと。

「それは誤解だよ。そこで下手に引くよりあえて押した方がアハハの笑い話になると思ってさ。そんなことより男同士で楽しくISバトルのが楽しいよ」

「そう。じゃあ今日もいっぱい戦おうね」

良かった、いつもの笑顔に戻った。周り全員胸をなでおろしていた。いや、それにしてもシャルロットまさか……あ、ちなみに鈴はな

でおろす胸があるのかどうかは――

「希。野球をしない？あたしがバッターであんたが的よ」

「すいませんでした」

だがしかし、それは野球じゃない。

「つてもうこんな時間!?!じゃあまたね」

さっさと離れていくのを見て、恋する乙女って大変だなと思った。

「ん？一夏、どうした？」

トイレに行つて来た一夏が悩んだような顔を出してやってきた。

「いやさ、さつき千冬姉とラウラが言い争ってたんだ」

「どんな風にな？つて、時間が無いか。あとで」

「ああ、また」

格闘訓練に関する色々を学んで一時間が過ぎる。……実際には五十分で休憩は十分。高校ならどこもそんなんでしょ。

「で？」

「ラウラはこの学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではないとか、ここの生徒はISをファクションと勘違いしてるとか。千冬姉にもう一度ドイツでのご指導とか言ってた」

「そんなことを……」

シャルロットは腕を組みながら、悩んだように。

「うーん、いい加減いつまでもこのままじゃ駄目だけど、どうしようかね」

いい案が正直ない。少しずつ掛け合うしかないのか。

「よし、これで自由パック装着完了」

前の日曜日に企業に行ったときに持ち帰った物。企業では何度も使ったけど、この学園では初披露になる。ちなみに一夏とシャルロットは用事があるようでいない。

「さて、お披露目と行くこうか」

ちなみに、自由パックとは。青色塗装の羽を八本付け、外見は某MSの羽そっくり。というか内部機構も似たような感じで、羽の移動による慣性制御、第一段階ではそれぞれからブースター機能を使い高速機動が可能。第二段階以降はまたいつか。武装は肩に粒子加速砲二門、腰にレールカノン二門。製作者に尋ねたら作ったのは趣味と言われた。ワイヤーブレードの基本武装は外し、プラズマサーベルだけ。さつきから派手に音がしている。多分、鈴とセシリアがガチ勝負でもしてるんだろうけど。となると後からくる一夏やシャルロットに相手してもらおうか。ピットを出て確認すると――

「おい、マジかよ」

あのボーデヴィツヒが二人と相手にしていた。形勢はあの二人が不利な状況だった。二対一なのに。結構なダメージを負って、肉体にダメージが入っていきそうだった。ピットが二基ほど落ちてたり、衝撃砲が片方消えていたり。なのに、ボーデヴィツヒは装甲もあまりはがれておらず、軽症だった。羽を広げ、最大加速。白式には微妙に劣る物の、今までの俺の機体より遥かに速い。装甲も結構外してるし。

「貴様、何のようだ？」

「希!?!」

「希さん!?!」

「二人とも大丈夫か？」

様子を近くで見るとそれなりに怪我をしているようだが、問題はなさそうだった。二人は

「問題ない(ですわ)!!」

「黙って出て行け怪我人。ここは俺の顔を立ててくれ。今まで色々あったよな?」

多分、一夏を馬鹿にでもされたのかね?それでも俺の貸しはかなりのもの。素直に二人は退場していった。苦々しげな表情をし、ボーデヴィツヒを睨みながらだったけど。立ち塞がるのは俺一人。

「ほう、貴様が相手か」

「ああ、ちっちゃいお子様をお仕置きして説教するだけだし。俺一人で十分さ」

「ふんっ、その大口すぐに叩けなくしてやる！」

大口径レールカノンが火を噴いた。大口だけに大口径つてのは置いとく。が、機動戦特化のパッケージを装着したこの機体に、そんなのにあたりはしない。

「これでもどうだい？」

移動しながらの空中固定ミサイルの射出。わずらわしそうに噂のA I Cで全て止めた。が

「突撃！」

「馬鹿め！」

弱めのイグニッションブーストを発動。同時にミサイルを起爆。中身は煙幕弾でいきなり見えなくなる。

「小癩な！」

減速して横移動。声を出したところにマシンガンで射撃しながら接近。敵影が見えた瞬間に右に移動をするが、直前に左に一つ物を投げ捨てる。さらにもう一つスカートの下あたりに指向性爆薬を複数展開。

「これでもくらえ！」

さつき投げた物がしゃべって音が鳴る。ぶっちゃけただの録音機械。だが、相手はしつかり引つかかったようだ。音がした方向を振り向き、

「間抜け」

音を出すなんて間抜けめと言いたいのだろう。さつき自分でしゃべってたくせに。後ろからプラズマブレードの蹴りを放つ。ここまですぐに引つかかるとは。油断しすぎじゃないかな？確かにこのごろ模擬戦は負け越しが多い。皆小技になれてきたし。でも、そこまで弱くは無いよ？

「つく、小癩な手を」

首を後ろに向け舌打ちしながら言ってきた。あの状況からなんと反応して見せた。多少装甲はえぐったけど、A I Cで止めたのだ。正直驚きだ。だが、残念だなあ。

「だがこれで」

ちなみに、テスト兵器とは色々と共通事項がある。総じて、脆い。俺はスカートの下にある、指向性爆薬を全部着火した。実戦投入してきたとは言え試作品、それでいてデリケートな兵装だ。そんなでもって、ISは基本一対一を前提と考えてる為、後ろに重要な物を回す。後ろを取られるのは珍しいし。よって

パンツ！

「な!?A I Cが!？」

「それ」

さらに加速。一気に間合いに入って相手を後ろから掴む。そして腕のプラズマサーベルを展開し、背中にぶちこんだ。

「ガッ!？」

そしてすぐに蹴り飛ばす。見ると相手はすさまじい形相。美人が怒ると怖い怖い。でも可愛い系だけどねボーデヴィツヒは。いや、その中間？

「貴様！よくもここまで侮辱してくれたな!!」

「おお怖い。俺に妹がいてそのパンツを盗んだらこんな顔をしようだ」

「ッ」

もはや声にならないのか、雄たけびをあげて突っ込んできた。さてと、トーナメントは出場してくるだろうけど、もう搦め手は効かないな。トーナメント困ったわ。初回に限っては無敵に近いんだけどな、俺。

ともあれ、今日はもう違う。A I Cが使えない第三世代ISでは、基礎スペックは全てにおいて俺の機体の性能を下回ってるだろう。機動性とかはこっちが強いから特に。迷わず後ろに逃げた。

「逃げるのか!？」

「自分を軍人とかISをファクションとか思ってる連中とかと違うと思うならそんな事言うのは駄目だろ？軍なら自分の有利な土俵で、相手の不利な土俵で戦う方法を教わるはずだ。徹底的に勝ちを取るべきだ。試合じゃなくて殺し合いを学んでるんだから。俺はISを飽きない面白いオモチャとも思うけど、数千人以上を殺せる兵器として

かり思ってる。だから勝つ戦をする」

ちなみに、これだけペラペラしゃべる余裕があるということ。ボーデヴィツヒはさつきから二人相手に疲労している部分もある。レールカノンだつて残弾が少ないだろうし、後はクルクル飛び回って勝ちだ。

「まっ、俺のほうが遥かに実力は負けてるけど甘く見るのはよした方がいいな。昔から敵を軽んじた軍は負けるのが決まりだ」

「黙れ黙れ!! 貴様に私の何が分かる!？」

が、闇雲に撃っているうちにレールカノンが切れたようだ。俺は武装を普通のマシンガンから変え、弾幕重視の連射と火力重視の大口徑マシンガンに変える。さらに肩に浮遊砲台を浮かべた。そんで持つて封じてた自由パックの四門を敵に向ける。

「何も俺たちに話そうとしないお前の事は知らないよ。分かりたくないとは言わないけどね。でも、今日の戦いはしまいだ」

「くそおっ!!」

弾が切れたら突っ込むしかない。いつも機動力万歳の一夏の当てている俺だ。合計七門の砲撃は凄まじく、ボーデヴィツヒはエネルギー切れでふらふら落ちていく。急降下をし、手を捕まえる。

「貴様! 何をする!？」

「エネルギー切れてるから、念のため」

ピットに連れて行き、俺はISを解除する。向こうも解除をし、俺に近づいてくる。が、殴りかかってくる事は無い。掴みかかる場所は無いのでつかむことも無い。が

「よくも! また勝負をしろ!!」

「まあまあ、少し話を聞け」

「聞けるか!!」

「あのね、確かに途中乱戦してきたのが暴れたらムシが悪いかもだけど、軍人はいつも冷静沈着で現状を把握しなければならぬ。お前は負けた、油断して。確かにせこい面もあるとは思うけど、正規の軍人に一般人が正攻法で挑むなんて自殺行為だ。戦術的にもああいった方法しかなかった。俺は悪くない。だから、まず落ち着く事だ」

そういうと、深呼吸をして落ち着きだした。だがまだ表情は険しい。

「ともかくだ、私と勝負をしろ」

「まず話をさせてね。あのさ、どうして皆と仲良くしようとしないの？」

「あんなISをファッションと思ってるような連中、付き合えるわけが無い」

「確かにISをファッションみたいにしてるのもいるかもしれない。一夏も兵器とははつきり自覚してないかもしれない。でもね、ここは戦場も経験した事無い人間の集まりなんだ。それは仕方ない。人の価値観はそれぞれだ」

「価値観はそれぞれだろう。そして、私の価値観は付き合うべき相手というのは互いを高めあう相手であるべきだ。だからあんな連中と一緒にいられるか。朱が交われば赤くなると言うではないか」

「それは俺も賛成だ。俺は弱いから、周りに影響されやすい。だから、俺はこの学園にいる人間と仲良くしたいんだ」

「ならあんな奴らと手を切るべきだ。あんな連中とつるんで強くなれはしない」

なるほど、この子は強さが全てなのか。

「強さは欲しい。でも、それが全てじゃない。あんな連中って言う人たちは、いい人ばかりだ」

「何を言っている？いい人だと？弱いのに」

「一度ゆっくり考えてくれ。特に一夏に対して。千冬さんに迷惑かけたのかもしれないけど、その事を忘れて。ボーデヴィツヒ……いや、ラウラ。いつまでもそれじゃ、多分駄目だから。人は一人じゃ生きるのは難しい。もちろん、強さだけでも。これでも、それなりに心配してるんだからな」

あんなに騙されやすい人間だ。こんな美少女騙しに来る奴わんさかいるだろう。

「おい、待てー！」

もう言う事は無い。何を言ってるか分からないけど、何をしたかつ

「たんだ俺？つと、そうだ。」

「次の勝負はトーナメントでね。また会おう」

「おいっ!？」

「そうやってピットを後にして……訓練を続けようと思ってたのに。ここからまた戻るのは雰囲気的にアレなので、他のビットに移動して参加した。その後、何食わぬ顔で一夏とシャルロットと訓練をした。が、次の日に噂や鈴やセシリアの話から漏れ、無茶するなどと説教されました。一夏は二人が痛めつけられ怒ってました。」

P・S 鈴とセシリアに怪我は無く、機体も組み合わせれば問題ないレベルでした

十五話 一夏とラウラ

朝、俺は一夏とシャルロットと食堂に赴いた。今日は何か気配が違
うと思ったら、いきなり女子が来襲してきた。

「落ち着け、どうどう」

「ヒヒーン……って違うわ!」

ノリいいね、本当に。この学園の女子たち。

「これ見て!」

内容は実戦に近いように二人組みで!ということだ。あー、これは
修羅場か。一夏の周りは望まずとも修羅場になる。望んで修羅場
なる奴は畜生だろうけど。

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デュノア君!」

俺に対してはないようである。トイストーリー2で売られていく
オモチャの前に悲しみで性格がゆがんだ鋤夫の気持ちがよく分かる。
さてと、二人はどうするのか。

「実践的な模擬戦のため二人組で参加か、どうする?」

「希!組もうぜ(よ)!」

さつと二人は顔を見合わせた。

「一夏、ここはまだ親睦を深めていない僕と希が組むべきだと思っ
た」

「いやいや、俺の機体は特化だから万能タイプの希と組むべきなんだ」

「それに、僕達同棲してるから!僕達はチームプレイを磨きやすいん
だ!」

同棲って言い方はやめようね?おかしいよ。周りの女子たち一気
に視線が移ってきたんだけど。囁き声も聞こえだしたよ。

「このごろ希という時間が少ない俺に回すべきだと思う」

「特化とバランスならお前た」

その瞬間思い出した。この先面倒ごとになるかなと思ってたため息
してる場合じゃない。シャルロットとは俺が組まないといけないん
だ。この子、男装女子だ。

「悪い、他の女子に遠慮する面で俺はシャルルと組むわ」

「そんな!？」

絶望した一夏の声が響く。男三人（実質俺がどうでもいい扱いなので二人）からあぶれて一人になった。女子たちの恰好の獲物だ。傍から見るとうらやましいと思うだろうけど、一日間近で見れば間違いと気付く。三日で同情し始める。

「やった!」

嬉しそう+やった顔のシャルロット。でもね、これすごい被害広がったよ？

「清水君を二人が取り合ってる……?」

「しかも同棲?」

「まさか……」

「不穏な事言ってる人たち、サッカーをしようよ。俺が選手で君たちがボールだ。友達だね!」

すつと静かになった。が、すぐに沸き出す。なぜか？

「なら織斑君!」

「私と!」

「待ちなさい!私と組みなさいよ!一夏っ!」

「いや、近接特化で二人がかりが強いだろう。ここは私とだ」

「いえ、ここはセシリア・オルコットが」

段々とカオスになっていく中、シャルロットとここを後にした。一夏の悲鳴を後にして。助けてとか聞こえるけど、あー、まあ、どんまい。君の生まれの不幸を呪うがいい。誰も恨む相手はいないけど。

「お前を恨む!」

一夏の叫び声は必死だった。必死な時は心を読んでくるんだけどな。

「今朝は悪い。ちよつと頭がぼけてた」

「何が?」

夜、色々終わり二人きりになったときにシャルロットに謝った。

「真つ先に俺がシャルルと組むって言うべきだった。二人での訓練が多いと困るだろ?」

「うん。……ありがとう。やっぱり、希って優しいね」

「前も言ったろ?百人のうち百人がすることは当然だ。百人のうち一人が勇気を持ってやれるのがやさしいだ。事情を知ってれば誰だつてこうする」

「前から思ってたけど、希ってすごい理想主義だよな」

苦勞するよ、みたいな視線を向けてきた。まあ、自分でも理想主義だとは思ってるけどさ。その理想を実行してるやつがすぐ傍にいないから。理想ってのは誰かに語られると夢見てしまうものもある。語られるんじゃないかって体现してる奴がいるから、どんどん理想に染まってきたやうだよ。

「でも現実はそのなりに見てるつもりだけどね。さて、となると明日もまた練習を増やさないと。俺と一夏とシャルルで優勝に行けば男が三人だ。男が終わってないって見せつけられる」

そういうとシャルロットはむつとした。え?なんで。

「ねえ、前から思ってたけど、僕は女の子だよ?」

「うん。知ってる」

「あまりにも自然に男扱いしてるから。僕ってそんなに女っぽくない?」

自信なさげに言うシャルロット。え、こういう話苦手なんだけど。どうすればいいの?カードを十枚ぐらい用意して。もちろん変態発言とか無しのカードね。カードを選ぶ時間も欲しい。

「体で?性格で?」

「両方」

体でに反応したのか顔が赤い。かわいい。ふむ。

「シャルルが体で女っぽくないなら、女性の99.9%以上は女っぽくないな。性格も同じく」

「あつ、ありがとう……。でもそれは言い過ぎじゃないかな?」

むしろ過小評価だと思うけどね。99.999999%ぐらいだろうか。もう二桁増やした方がいいかも。

「口調が僕っ子だし、普段から男扱いにしておけばバレることは少ないだろう?」

「なら、女の子っぽい口調にすればいいのかな?」

「今更治すのはむずかしいんじゃないか?」

人の口調を直すのは難しい。普段の癖を直すのが難しいの同様。

「希は変えられるの?」

「あたしは簡単に変えられるわよ。声は気持ち悪いかもしれないけど、許さない」

「つぶ」

そういうとシャルルは噴き出した。

「どうしました?シャルルさん。ハンカチが必要なら貸しますわ」

「あははははは!……声が全く似てないけど……よく自然に変えられるね」

少し涙目になったシャルロットがすごいねみみたいな顔を。

「変声ネクタイが欲しいな。ともかく、その言い方からすると難しいのか?」

「う、うん。希と二人の時は普通に話せるように頑張るけど……」

あまりその理由について考えないようにしよう。色々と。精神衛生上困ってくる。

「今までどおりでも問題ないよ。これ以上女の子っぽくなられたら俺が困る」

「どうして?」

それを尋ねるのはひどいよね。女神様容赦ない。なぜかシャルロットと呼ぶのが気恥ずかしい。心の中では思えるんだけど。

「ま、まあそれはともかく。今までどおりで問題なし、うん、それで。さあ先に着替えてき」

「何度も言ってるでしょ。二人で一緒に着替えればいいって。そうした方が速いでしょ?それに、男同士の着替えで外に出てたら疑われちゃうし」

なんと、俺たちは二人で着替えているのである。うん、今でもびっくりしてる。着替える準備をして装備を確認。服を脱ぎだしてき

ばき着替えていく。後ろでシャルルが着替えてると意識しない為だ。無心をひたすら貫くべきだ。頭を空っぽに……。

「よし、終わった。振り向いていい?」

「ねえ、前から思ってたけど。一度も振り向かないよね。そんなに興味ない?」

しよんぼりしたような声……いや、その理屈はおかしい。あのAAがぴったりすぎる。

「えっと、シャルルは見られたらいやだと思って無心で着替えたんだけど……と言うか、振り向かなかったって知ってるってことは、逆を返すとずっと――」

「外に出てって!」

「はいすいません!!」

さっと駆け出した。それにしても、シャルロット何でもしつかりこなすんだけど、なんでとどこどころぬけてるのかなあ。いちいちドキドキするから困るんだけど。

「ごめん、入っていいよ」

申し訳なさそうにシャルロットが言う。傍から見ると俺に過失は無いしね、多分。それにしても全く、さて。

「別にいいさ。さて、明日に備えて。おやすみ」

「うん、おやすみ」

夜、寝静まった後にシャルロットはすつと起き、希に近づいた。

「もう、女の子と一緒に着替えてるのに、チラツとも向かないなんて。本当は、女っぽくないと思ってるのかな……女言葉を使えば少しは意識するのかな……。私、とか」

そう言っって少し身を乗り出して希の顔を見る。いつも険しい目をしているが寝ている時はかなり穏やかになっていて、年は二歳ぐらい若く見えた。

「そりゃ、一夏のほうが美形って言ってるけど、希だっっていいところはいっぱいあるし……じゃなくて!」

『うん、いいよ』

初めて言われた言葉。母親が死んでから居場所がなく、毎日色が無かった。皆と過ごすうちに段々と色が戻ってきていた。そして一気に鮮やかになったのは彼が秘密を見つけてからだ。

(どうして希は、僕の心をこんなに温かくしてくれるんだろう)

いつも堂々と大木のごとく構え、時には柳のようにかわし、それでいて春のような温かさを持っていて、それでいて海のように底が知れない。ただ、優しいとは分かる。自分では否定しているけれども、優しくはないが無い。

「ねえ、希。どうして優しいの?」

もちろん返事はない。返事をされたら飛び上がる。だが、昼間の疲れで希はぐっすり眠ってる。

「ぐっすり……そうだ」

身を乗り出して、そつと額にキスをした。

「また明日、ね」

六月も最終、とうとう始まったISトーナメント。機体が破損していた鈴、セシリア、ラウラも無事であり、全員参加してくる。モニターを見ると各国の偉い人々がたくさんいる。だが、もつと気になるのがある。

「一夏、誰と組んだ?」

「秘密だ」

多分、誰とも組んでいない。こいつはそういうやつだ。何で頭はいのに馬鹿なのか。

「まあいいや。で、三年はスカウト、二年は一年間の成果、一年はとくはないけど上位にチエックだっけ?」

「うん、そうだよ」

俺には関係ない話だ。もう所属は決まってるし。でも、企業の人たちのためにも、全世界の男の為にも勝たないと。ちなみに、超絶ブラクナ話だと、俺の成績こそ悪かった場合実験動物の可能性もあった。

それを提案した人にどうこう俺は言うつもりは無い……って事は

無いけど、十分理解できる。見知らぬガキ一人を生贄に捧げれば男がISに乗れるようになるかもしれない。これは魅力的だ。俺だって政府の高官とかの立場なら絶対に考える。実行する気は流石にないと思いたいけど。とは言え、される方としてはたまったものではない。

千冬さんがどうにかしてくれたのだろうかその話は小さくなってたけど。それにこのごろ順調に成績出してるのも効いてる。今回でその話にとどめを刺すつもりだ。優勝を飾ってね。

「まっ、勝たなきゃ意味ない。抽選はどうだっけな」

「もうすぐ決まるだろ?」

なんと、トーナメントシステムが不具合で手づくりでやっている。たいそうな事だ。

「俺たちはAブロック第一回一組目、一夏はBだといいな」

「男にも意地があるって見せないとな」

その通り。

「それにしても最初かあ。手の内を晒すことになるからいやだなあ」

「俺は手がいっぱいあるから晒しても問題ないけどね。第一、最初から相手を倒して景気よく行こうか」

「前向きだね、希は」

「前向きのほうが気分がいいから。後ろ向きより前向いてこうよ。さ、トーナメント表が出た」

俺たちの場所は知ってる。よって全力で一夏を探して――

「あんな、優柔不断だからこうなっただよ」

「もしかして一夏って、お馬鹿?」

「ウソだろ……おい……」

Aブロック、俺・シャルロット、鈴・セシリア（一夏に断られた為優勝を防ぐ為に同盟）。Bブロック、箒・のほほんさん、一夏・ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「決勝で会えるか不安だね。初戦負けは勘弁してくれ」

一夏にブラックな話が行くかも……無いな。千冬さんを敵に回すとは自由に何発もぶつ放せる核ミサイル搭載ステルス戦闘機を敵に

回すのと同じだ。首脳が全部殺されてく。

「どうすればいいんだ、どうすれば……」

はあ、ラウラとトーナメントで戦おう、とか言っちゃったし。入れ知恵ぐらいするか。

「しようがない。ラウラと組む直前、こう言え」

「よりによつて貴様とはな……」

「ガタガタ文句言うな。それでだ、千冬姉の件についてだけど」

「……なんだ？」

とても不愉快そうな表情をラウラが向けた。

「確かに俺がいたから千冬姉は二連勝できなかった。俺がいなければ、俺が強ければ千冬姉は確かに優勝できたんだ」

「やつと認めたか。貴様は教官の傍ににいるのにふさわしく――」

そのことばに一夏は強くかぶせた。

「なくはない。俺は強くなる。もう千冬姉の手をかけさせない、誰だって守れるくらい、俺は強くなる。お前にふさわしくないなんて言わせないほどに。千冬姉の弟だって言えるように」

「口だけは達者だな」

「だから、このトーナメントで見せてやる。それとも仲間割れを起こして初戦敗退をして、国に迷惑でもかけたいか？」

「貴様が邪魔しなければ問題ない」

「だから、簡単な取り決めだ」

「なんだ？」

「それぞれ一対一に持ち込んで、先に落とせなかった方が試合後、相手に何かごめんなさいを言うだ。そんでもってジュースを一本奢る。故意にお互いを攻撃したら負け。これでやる気も出るだろ？」

「ふん、ジュースはどうでもいいが、前者は気に入った。貴様には一生分謝ってもらおう」

「お前こそ、油断して足元救われるなよ？」

それで会話を切り上げ、ピットから出て行った。

初日、全ての試合が終わった後で。

「つく！なぜだ?!なぜ私が負けた!？」

希がいたら坊やだからさとか言っているだろう。ラウラは女だが。

「希の言うとおお……ハッ!？」

「希だと？奴の入れ知恵か!!」

キツとラウラがきつく攻め寄り、一夏が頭をポリポリかきながら

「機体性能での相性は俺とラウラのは最悪だけど、敵をどちらが早く落とせるかなら機動力・攻撃力特化の白式に分があるって言われたんだ」

実際にはそこまでに持ち込むまでの会話方法も伝授されたのだが、それは言っただけとはいけないと言われている。わざと希の言うとおりと言いかけるのもわざとである。少々棒読みになったがラウラは気付いていなかった。

「また奴か！また奴にハメられた！」

とても悔しそうに叫んだ。こうしてみると年相応だった。

「ああ、この前の戦いか。希に負けたんだよな」

「途中参加してきて、卑怯な手段を使ったのが悪い！油断しなければ負けなかった!!」

「油断したから負けたんだろ。負けは負けだ」

何も言い返せなくなったようで、ギギと唇をかんだ。一夏は希が言ってきた通りけっこう子供っぽいと感じた。

「ともかく、何か謝ってもらおうぞ。そんなもってジュースを奢ってもらうぜ」

「つく、仕方がない。最大の屈辱だが……いきなり平手打ちをしたのは悪かった。すまない」

「いいよ。俺も頑固になつて悪かった」

「何を言ってるんだ？お前は謝る必要がないだろう？」

何言っているんだコイツ？みたいな目でラウラが一夏を見た。

「別に、必要は無いけどしたいからただだけだ。ほら、ポカリを買ってきてくれ」

「つく！」

テクテク歩いて行き、缶ジュースを一本買った。

「次は負けんぞ」

「俺もそのつもりだ。……ほら、残りはあるか？」

「なぜだ？それは貴様のだ」

一夏は思った。とても硬い、それでいて律儀な性格をしているなと。

「ラウラもそれなりに疲れただろ？明日に備えて飲んでけよ。俺に負けたくないならさ」

「……フンツ」

サツと受け取り、飲みだしたのを見て一夏は去っていった。

「希！お前は相変わらずすごいな！」

お前すげえ！みたいなキラキラした目で見られた。こいつは全く。

「ということは、ラウラとそれなりに上手くいったのか？」

一夏の超絶モテスキルならどうにかなると思ったけど。

「分からんけど、それなりに関係は改善できたと思う。それにお前が言ってた通り意外に純粹で真面目な性格だった」

「だろ？関係が良くなればとつてもかわいい妹みたいになると思うんだけど……シャルル？睨む必要性が無いよね？」

「うんうん、妹だから手を出さないしね。……ともかく、一回戦突破おめでどう」

「ちよつと怖いよ？目がね？」

「というか、突破しないとやばいんだよ。専用機持ち同士でタッグ組んでるんだから。外に向けての面子を立てるなら、負けていいのは一夏たちと鈴たちのペアだけだって。もちろん、負けるつもりは無いけどな」

「俺だって負けるつもりは無い」

「僕たちのペアが最強だって証明してみせる！」

「すごいきんでるねシャルル。」

「じゃ、明日に備えて寝るか。一夏も報告だけだよな？」

「ああ、じやあまたな」

十六話 決勝戦

「ふふふ、やっぱり来たわね、希！シャルル！」

「優勝して権利を手に入れるのは私たちですわ！」

「あー、はいはい。希に権利は渡さないとか思ってたんならフル火力で叩き落すからね？」

二人がサツと目を逸らした。いつまで俺のホモ疑惑あるの？一夏のほうがよっぽどホモホモしいじゃん。まあセシリアは仕方ないとして、鈴にまでそう思われるのはショックだぞ？長い付き合いじゃん。

「シャルル、俺ってそんなにホモっぽい？」

自信無くすよ？クラスで良く分からない変人けど出来る奴↓ホモにジョブチェンジって落差激しい。

「えっと、いいにくいけど……訓練中、競泳水着みたいな他の女の子に視線を全く向けないし、男同士でつるんでばかりだし。その上付き合いが長いとなつたら、ちよつと……」

シャルロット随分遠慮なく言うね。俺の心のライフはもう0よ。すぐ復活するからいいけど。

「と言うわけで、セシリア、ジロジロ見ていい？」

鈴は見てもねえ、確かに笑ったりすると和んで可愛いんだけど。

あー、前みたい鈴の頭撫でたいなー。

「それは……とても困りますわ。とても信頼も信用もしているのですわ。その……恥ずかしいですわ」

頬を染めて照れるように。それでいて微妙にまんざらでもない感じかな？お嬢様らしい。んー、ま、好意的な反応かな。そりゃ嫌われる理由が無いからね。他の人にも協力してるけど仕方ない面もあるし。料理の件がかなり効いてるかな。

「私が入らないのはそんなに殺して欲しいってわけ？いいわ、殺してあげるわ」

野球をしようとかの比喻表現でなく、直接的に言ってきた。あー、怒ってる鈴もいいね。猫がシャーッ！ってやっても和む感じ。いた

だけないのは兵器を着ながらだと恐怖が先行すること。隣を見るとシャルロットも視線が険しい。

「シャルル、それ疑惑を助長させてない？」

「知らないっ！」

ふいっとされた。俺は悪くないはずだ。さて、でも漫才も終わり。カウントダウンが始まる。会場の歓声は張り詰めた物に。試合開始まで五秒。四、三、二、一、——開始。

「死になさいっ!!」

戦もって特攻してくる鈴。もちろん予測済み。ちなみに、俺のバツクパックは企業からの要望で幻想機動である。機動特化のもいいんだけど、やっぱ第三世代とかを押し出したのなら特徴的な何かを付与する方が分かりやすいしね。相手のタイミングに合わせて幻想機動を発動。真下に移動して

「ここですわ!!」

セシリアから五発の一斉射撃。至近距離だとかなりばれない幻想機動でも、他の視点からだとはバレバレになる。よって、射撃してくるのは予測済みなので機体全てのブーストでさらに逃げる。

「もらったわ!」

鈴が追撃をしてくるが、こっちも二人いる。

「そうはさせない!」

ショットガンが鈴を襲った。……って、マジか! 被弾覚悟で俺に! 「死になさい!」

さつき煽りすぎた! が、それだけ単調な攻撃。補助ブーストを機動、上半身のブースターを逆噴射しながら、下半身はそのまま噴射。横から見ると高速で後ろ回転をしながら足のプラズマブレードで斬りつけるように見えただろう。相手の武器の方が攻撃力は高いが、こっちは身を引きながらダメージを軽減し、装甲も向こうより厚い。それでいて向こうの加速が威力を増加させ、プラズマサーベルでも向こうより少し多めにダメージを与えた。同時に最も展開が早い五発装填されているハンドカノンを二丁、補助機能を使って展開。口径45mm。

「吹っ飛ばせ！」

二丁で乱射。同時に反動制御を切り、反動で後ろに飛ぶ。鈴は合計十発を回避して見せた。そこでさらに突撃を加えてきた。拳銃を投げ、弾き飛ばされて――

「吹き飛ばせ!!」

体の前面の爆発装甲四箇所点火。今までトーナメントで一度も使っていない、それでいてそれなりに火力の高い攻撃を――

「読んでるわよ！」

それなりにかすったものの、回避をされた。でも、これで終わりにじゃない。

「こっちもな！」

幻想機動を同時に機動させていた。鈴の横っ腹をプラズマサーベルが直撃した。

「ツチー！」

さつきからの落ち着かない行動に、シャルルと戦闘を行っているセシリアが

「鈴さん！落ち着いてください！さつきのことと怒るのも当然ですが、冷静に！」

「……そうね、落ち着いたわ。冷静に切り裂いて――」

フエイント。会話しながらの衝撃砲。油断をしていて、二発の直撃をくらい、二発かすった。こいつもやるな！

「あんたに三年間付き合っただけなら騙し撃ちくらい覚えるわ！ここからが本番よ！」

「望むところ!!」

結果として、勝負は俺たちの勝ちに終わった。終わりはあつけなかった。正直、彼女らのメンツもあるので使いたくなかったが俺は自分で許せる範囲で勝ちを取りに行く人間だ。将棋してたら無言がマナーだけど、わざと口に出して違う手に引っ掛けるぐらいには。もしくは指で駒を指して視線誘導するぐらいにはずるい。と言うわけで

「優勝したらどつちが一夏と付き合うの？」

固まった。二人が固まった。

「げ、撃墜数は私が多いわよね？」

「サ、サポートあつてのものですわ。イギリス貴族で高貴なる私が！この私が!!ふさわしいですわ！」

「ちよつと待ちなさいよ、料理が上手で幼馴染のこの私が!……いえ、待ちなさい。希の罨よ。二人で同時にして、一夏に選んでもらえばいいわ」

「つく、それでいいでしょう。目の前の試合に……え？」

「ちよ……」

武装の貸し出しを事前にシャルルにしてたんだ。小型ミサイルボックス、合計四十八発。肩アーマーの砲台二門。そして俺は大型ミサイル二十四発。砲門六。二人から見たら俺たちは隣で普通に会話を見ているのかもしれない。でも、幻想機動でそう見えていただけ。しっかり見ていたなら分かったかもしれない。でも、会話にとっても集中していた。恋する乙女は戦争沙汰より恋愛沙汰のがよっぽど重要である。ともあれ、なかなか展開する時間が無かった中、俺たちの最大火力を投射する準備が整った。

「ここまでいい試合すれば国もそこまで言っ来ないはず、うん。」

「ファイエルツ!!」

「希(さん)の馬鹿ああああ!!」

空に綺麗な花が咲いた。会話の内容を知ってる人にとってはきたねえ(俺が)花火だぜとか言ったかもしれないけど。とくに俺のクラスメイトが聞いてたら言いそうさ。

決勝戦。IS一年の最強を決めるトーナメント。

筈、のほほんさんペアは一夏・ラウラペアに敗退。よって、決勝に立っているのは俺、シャルル・一夏・ラウラの四人。一年生では女子が98%近くを占めているのに男三人が残っているので、観客席の男たちは大盛り上がりである。実際には一人は女だけだね!ちなみに、日本人の高官方は大体ご満悦な顔である。男が三人出場していて、う

ち二人が日本人。しかもあの千冬さんの弟もいるので将来有望。準決勝でも日本人4人出場だったし、仮想敵国の中国を倒したしね。日本人の比率は学園で半分と高いけど、外国人勢は日本の生徒よりさらに選りすぐったエリートだから。日本人は半分学園に入れるけど、外国は半分を十カ国以上で分け合うからね。と、話がそれた。

「よっ、ラウラ。トーナメントで戦うって約束、果たしに来たぜ」

「今度こそ、貴様を地に落としてみせる」

ちなみに、一夏とラウラは一夏二回、ラウラ二回謝る事になったらしい。さて、今回はどっちが謝るのか、それとも謝る機会はないのか。さて。

「何はともあれ、男三人が決勝に出れて良かった」

「だな」

「そ、そうだね。アハハ」

後ろめたいのか目を下に向けながら笑っている。乾いた笑いね。さて、プライベートチャンネルを開いて

『シャルル、どうする?』

『作戦通りでいいと思う。一対一に持ち込むふりをして交互にタイミングよく攻撃』

『それはいいんだけど、一夏が何かたくらんでそうな気がする』

『……分かった。希を信じる。じゃあ事前通り、僕が一夏で希はボーデヴィツヒさんを』

『分かった。勝とうな』

『もちろん』

「さて、ラウラ。貴様が挑むのはペテン師だ。騙されないようにすることだ」

「貴様の装甲が数箇所爆発装甲になってることか? プラズマサーベルに見えるが実際には何か違うという事か? 肩の砲門が前と違うという事か? 貴様の背中の機動パッケージが前と姿が違う事か?」

やっぱり、一瞬の隙を突いてなら騙せるけど、さすが正規の軍人。良く見てる。隙をつけなければ騙せれないようだ。ちなみに、前回幻想機動で大きくお披露目したので、今回は自由機動パッケージを第二

段階で使ってる。

「やっぱり油断はしてくれないか」

「一応、負けたからな」

ふむ、結構丸くなってるな。一夏が頑張ったのか。さすがである。そろそろ一夏のため某外野手のコピペを作るべきか悩むな。ガッツポーズだけでフラグが立つとか適当にツラツラ並べればいい。何より恐ろしいのが、適当に作ったいくつかが実際の話でありえること。「希、そろそろ」

いらぬ事考えてたのに気付いたのか、声をかけてきた。

「ああ」

試合開始まで五、四、三、二、一、——試合開始。

「ふん！」

いきなり距離を詰めてくるラウラ。A I Cで止めれば一気にダメージを与えられるからね。致命傷にはならないけど。なぜかと言えば、所々に爆発装甲を入れてるから。止めた瞬間に反撃すれば致命的なものをもろう前に逃げる事が出来る。A I Cにとって恐らく最悪の相性の武器だ。と言うか接近戦機体には最悪の武器しかも、撃つたら補充できるようにそれなりに入れてはいる。でも下手に攻撃されたら逆にこつちもダメージでかいから前面四枚、後方二枚だけ。装填速度も一枚一秒ぐらいかかる。でも、幅広い選択肢はバランスタイプの強みだ。これセシリアとか遠距離には全く意味無いんだよね。

「負けちゃいけないー」

右手にアサルトライフルを展開。そして、今回は出し惜しみせず肩と腰の砲門を開く。俺は相手とつかず離れずの距離を保ち、レールガンやアサルトライフルで攻撃しA I Cを使わせるか回避させるかし、その瞬間を粒子加速砲で撃ちぬくという戦法。ラウラも俺が爆発装甲があるからか、下手に詰めず中距離でレールカノンを撃ち、ワイヤーブレードを使い攻撃する戦法。つまり数十mの距離で戦いあっている。ときたまシャルルから援護射撃があるが雀の涙だ。一夏は生長している。とても速く。それでいて、近接武器しかない物の一瞬あれば決着をつけられるというプレッシャーがある。

ただ、こつちから援護はしている。援護するフリしてラウラに攻撃もする。余裕あるわけじゃないが、俺は元々多人数戦闘のが得意である。FPSと同等に扱うわけにはいかないけど、FPSで32人対戦の部屋で1位、2位を取る事も結構普通だった。周りの位置を瞬間的に判断して弱いところに突っ込むとか。そうしたのが得意で、何度かISで集団模擬戦もしたけどISでも集団戦が強いのは変わらなかった。

勝負は均衡……こつちが押していた。ラウラに対して俺はどうしても一押しが出来ないが、一夏とシャルルはやはりシャルルが優勢だ。そこに俺の援護射撃も入るから。ここは堅実に耐えるしかない。チャンスが来るまで……。

「膠着状態ね」

「ボーデヴィッツヒさんも、AICがあるとは言え爆発装甲全てを止められはしませんし、破片はなおのこと」

「が、砲門の数では希は勝ってるが腕の差か。ほぼ互角……ほんの少し希の方が悪いか」

「でもシャルルさんが一夏さんを押しています。この勝負、全体的には希さんの方が優勢……希さんがトリツキーな事をしてないのを考えると、勝ち目は希さん側のほうがかなり優勢でしょうか」

「でも、トリツキーなのは反面大きな弱点にもなるわよ。あいつ、一度痛い目合わされたんでしょ？引つかかるか分からないわ」

「どつちにしろ、勝負は分からないということだな」

そう結論がまとまった時だ。勝負が動いた。

「なっ」

俺の入れ知恵、一夏とラウラで勝負をするという内容。お互いの獲物に手を出さない。なのに、俺たち四人が比較的に近いその瞬間、狙い済ました瞬間加速が俺にめがけてやってきた。

「ーんてな」

俺は予測していた。一夏なら最後のこの試合、勝利のためにラウラ

と組むだろうと。そして、ラウラも負けるつもりは無いからある程度案に乗るだろうと。一番考えられるのは、今までどおり一対一をするふりして、一瞬の隙を一夏が突いて落とす戦法。だから警戒を解いていなかったから十分にかわすことが出来た。

「今だ！」

「喰らえ！」

「なっ!？」

一夏に一瞬目を逸らしたただけだった。だが、完璧にタイミングを計ってラウラが瞬時加速をした。爆発装甲を即座に起爆。が、構わずラウラは突貫した。決して小さくないダメージを無視して「止まれ」

A I Cを起動させた。回避失敗。だが焦らずに多少の被弾を覚悟して爆発装甲を展開。その最中にも嫌がらせ程度に砲撃。

「とどめ！」

が、後ろから一夏が突撃してきた。I Sの中で最も攻撃力の高い武器を持って。

「僕を忘れないでね」

俺の本当に隣1mぐらいの距離でシャルルが盾で阻むがラウラのレールカノンは俺でなく、シャルルの後ろを狙う。二基あるワイヤーブレードを直線状に射出し、妨害をしておいた。二発防いだだけで、シャルロットにも何発か被弾。致命的なものになる前に爆発装甲を展開。そしてラウラに攻撃。

「くらえ！」

砲弾を破碎弾に変更。一夏を盾を失いながらもいなしたシャルルの援護射撃も加わって集中が途切れたようでラウラはA I Cを解除した。同時に手に直径30cmほどのチャクラム八本を指の間に展開。同時に投擲。

「当たるかそんなもの」

ラウラはA I Cで全て止め

「当たらないでいいんだよ！」

同時に起爆。中身が空洞なので威力は弱いが嫌がらせには十分。

もう一度展開し、投擲する。二度目に引つかかるほどアホの子ではないので横にずれて回避をすると同時にワイヤーブレードとレールカノンを射出。

「ラウラ後ろだ！」

一夏の叫び声と共にラウラが後ろを振り向くと、スピードを0にし、少しづつ戻りだそうとするチャクラムの姿が見えた。一瞬驚いたようにしたが俺のほうにまたもや攻撃を仕掛ける。もう一度八本チャクラムを投げる。今までのチャクラムは全て誘導性ではない。ただ前に行つて後ろに戻つてくるだけの超絶簡単な機構。でも

「もう一度だ!!」

次は横に逸れるように投げる。ラウラは見極め、動かずに俺のほうに向かうが

「ワイヤーだ?!?小癩な！」

右と左二つの間にワイヤーを通してあった。それを四組投げた。一回目が起爆、二回目がリターン、三回目でワイヤーと連続の仕掛けだ。とても細かい物だが、引つかかれば先に付いているチャクラムは遠心力で加速するのでラウラに接近する。仕方なくA I Cを発動した瞬間に

「ハッ！」

「なにっ!?!」

スラスターの第二機能。スラスター各羽での瞬時加速。第一段階でも使えるが、これは一本一本が独立して行える瞬時加速。白式に劣る物の、普段の機体より遙かに速い突貫。A I Cをとつさに使えなかったラウラは俺と機体を接触させた。

「ふん、馬鹿めが。A I Cで——」

「ところでこいつをどう思う?」

ノリがいい人間ならすぐく大きいです、と言つてくれるだろう。俺が出したのは全長1mはある電磁パイルバンカー。火薬で加速するちやちいものと比べちやいけくない。ラウラの胴体にガシツとつけ

「止めれるなら止めてみな」

「くそおおおお!!」

勝った、と思った。一夏はシャルルと戦っていてエネルギーが少なく、もうワンオフアビリティは使えないのだから。でも、一夏は違った。瞬時加速で、刀を俺に直撃させ吹っ飛ばした。結構多いダメージをくらった。

「希！大丈夫!？」

「問題ない！それより……」

一夏とラウラを見ると

「なぜ私を助けた!?! 貴様はもうエネルギーが無いだろう!?!」

「ここで俺より強いお前が負けたら負け確定みたいなもんだ。俺が全力で殴る。ラウラ、お前がとどめを刺すんだ」

「……最善だな」

二人の気配が変わった。一夏を前面に押し出しながらラウラがその後ろで構える。さっき俺たちが二人のコンビに勝てたのは、こつちのがコンビが良かったから。でも、向こうはしっかり組んできた。

『コンビを組んできたな』

『でも、僕たちのチームワークだって』

そうだ、俺たちは二人で残ってコンビを磨いた。出会って一ヶ月も経ってない。それでも、いいコンビネーションを磨けた自信がある。俺が前に立ち、シャルルが後ろに。その体勢で俺が瞬時加速をした。そして交錯は一瞬だった。俺と一夏が瞬間加速を行い一瞬で距離を詰める。

「はあああつ!!」

俺はパイルバンカーを真っ直ぐ突き出した。そして

ガンッ!!

ただのパイルバンカーでなく、射出するパイルバンカー?である。が、見切られていた。パイルバンカーは斜めに逸れた。後から聞いた話だと、突撃し合うのに剣とかに持ち替えていなかったのが怪しかったかららしい。

一夏の体勢は崩れている。持ちかえる暇も無いので、鉄塊となったパイルバンカーの抜け殻を投げた。一夏は回避し、ただの物理の刀となった物を振り下ろす。が、加速性こそ負けても機動力は俺のほうが

分があつた。背中に八本の羽があり、関節補助ブースターもある。一夏の左手側を近接距離での小型瞬時加速連発で円移動し、左足のプラズマサーベルを叩きつけようとするが刀で防がれる。

「ふんっ」

同時にラウラのA I Cが俺を止めた。俺は左の加速砲とレールガンとワイヤーブレードは一夏に、右側はラウラに攻撃……出来ない。今度は俺の砲門まで全部きっちり止めてきた。すごい精度だ。

「とどめー」

一夏は俺と相打ち覚悟か、防御を省みず刀を振り下ろしてきたが

……

「シャルル!？」

この試合……いや、今までで初めての瞬時加速で一夏に突撃し、パイルバンカーをセットした。俺はラウラに向けてあつた右手のことに感謝した。男のロマンを体現した一発屋。

「ロケットパンチ!!」

「ッ!？」

ラウラは言葉になっていなかった。右手左手はプラズマサーベルでなく、ロケットパンチに付け替えてあつた。ラウラの胴体を直撃し、A I Cが解ける。その隙にワイヤーブレードできっちり両手を確保した。傍から見ると俺が警察にお世話になる感じ。ラウラの顔が必死な物になるのが助長してるかも。後方では一夏がパイルバンカーの衝撃でギャフンとなっていた。あれ痛いんだよな。俺は――

「この距離なら外さないさ」

正直、ロケパンじゃなかったらやられてた。シャルロットが瞬時加速を使えなかった場合でも。

「おおおおお!!」

手に召喚した拳銃と合わせて六門の一斉射撃。腕はまだ戻ってきかないからただの素手なので人間サイズの拳銃を。たった1秒の砲撃で残りのシールドの半分以上を削った。だが、異変が起きた。

十七話 シャルロットとラウラ

「あああああ!!」

すぐさまバックダツシュをし、比較的アレの付近にいる一夏・シャルル前に立ち塞がる。

「またイベントが起きたよ!!」

IS学園は波乱万丈だね!どうしてこうも楽しませて……くれそうにはないな。一人犠牲になつてるし。

「そんなこと言ってるひ……なんだよあれ」

「えっ」

ラウラのISが変形……ISの装甲を粘土を作り直しているような感覚だ。ISは基本肌を露出させるが、あれは全て包み込んでいた。咄嗟にドイツの高官たちをみる。顔が青ざめていた。確信犯?恐ろしい状態のIS、と言うか泥人形の製作途中。だが、まだ形は整っていない。今すぐ砲撃するか?……いや、ラウラに対して危険がある。えっ?変身途中で攻撃することのためらわないのか?……正義のヒーローでも出来る悪役でもないし。

「お前たち、下がってろ」

ジョークもほどほどにしないと。

「希!体を張るのは俺だ!」

「ひどいよ希!一緒に戦った仲間でしょ!」

二人が自分こそと前に出てくる。全く、頼もしい二人だ。

「アレは、ヤバイ。見ただけで分かるだろ?一夏は張る体力も無いし、シャルルは俺より武装が貧弱だ。その点俺のは防御武装もまだ少し残ってる。お前たちが距離をとったら俺も距離をとる」

二人は渋々黒い機体から離れていく……が、ラウラのISの変形……変態を終えると俺はヤバイと本当に思った。武器が、今ではエクスカリバーすら上回る知名度を持った武器。

「雪片か」

千冬さんが世界を仕留めた武器。中身は知らないが、形は同じだった。知名度では最強を誇る武器だ。黒いISはモノアイを俺に向け

た。すぐに空中に盾を展開するが俺は安心するつもりは無い。後ろに飛び跳ねた後、黒盾の物理シールドが吹き飛んだ。実体に対する防御機能は白盾より強いのに。が、そのまま動かない。凄まじく集中力を削る数秒の後、後ろから声がした。

「ふざけやがって！叩ききってやる!!」

いきなり突っ込もうとした一夏の顔を叩いた。……どうやら、武器とかに反応するようだ。一夏がもう少し接近してたらやばかったのかな。

「落ち着け！……千冬さんの技が真似られてキレるのは分かる。でも、少し待て」

落ち着いて少しずつ距離をとり、様子を見る。……問題なさそう。それでも注意を逸らさないようにしながら一夏と話を続ける。

「……分かった。でも、それだけじゃない。あんな、わけわかんねえ力に振り回されているラウラも気にいらねえ。せつかく、結構仲良くなれたと思って、いい所もあるって思ったのに。何だよ……。どっちも一発ぶつたたいやらないと気がすまねえよ。こんなの……。これから、もつと仲良くなっていけるって思ったんだよ……」

かなりの落胆だ。そりゃ、いきなりは平手打ちだったけど、それに和解出来てきて、最終的には少しだけコンビを組んで戦ったんだ。一夏は基本的に人を憎めない奴だ。だから、余計に気に入らなくなっただらう。

「でも、IS無しでISに挑んでいいのは千冬さんだけだ。えっと……」

生身でISに挑むのはロマン溢れるけど、ロマンと危険（無謀さ実用無さ）は比例する。人型ロボットだってISコアが無ければ役に立ちはない、今は。

『非常事態発令！トーナメント中止！状況をレベルDと認定、鎮圧の為教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返し！』

「はあ、さっさとやらないといけないな。本当は危険なこととして欲しくないけどさ……」

「お前は俺の兄貴か何か。全く」

頭をポリポリかきながら、照れくさそうに、バツが悪そうに。

「似たようなもんだって。それにしても、相変わらず真っ直ぐに馬鹿だな」

「そうだよ。ほら、騒動も治まるんだし。下がろう？僕たちがやる必要は無いんだ」

シャルロットが一夏に提案する。現状把握がしつかりしてるシャルロットの意見は完璧に正しい。

不審者が現れた。警察が周りに現れた。どうする？次のコマンドで戦うを選ぶ奴はよっぼどの馬鹿だろう。不審者と一対一でご対面なら生き残る為に仕方ないかもしれない。逃げてる最中に後ろから殴られるのが一番危ないし。でも、周りに不審者、アレをどうにか出来る人たちはたくさんいる。逃げるのが懸命だ。

でも、うなずくような奴じゃない。

「違うぜシャルル。全然違う。俺がやらなきゃいけないんじゃないやなくて、俺がやりたいんだ。他の誰かどうだとか知るか。ここで引いたらもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

「だよな。そんな馬鹿で楽しいから俺はこうやって来たんだ。さて、コア・バイパスを移す練習を何度かやつといてよかった。さすが最新世代」

「さっすが。頼む」

「けどな。約束だ。負けるな。一度ばあちゃんの葬式をやった事があるが、葬式は二度とやりたくないからな」

これから先、一度も葬式をしないなんてことは無いが。昔の人はいったものだ、君について二つのことを知っている。一つ、生まれたこと、二つ、いずれ死ぬと言う事って。

「不吉な事言うなよ……まっ、もちろん。ここまで啖呵を切つて飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

「負けたら女子制服で通ってくれ。そうすれば俺はハーレムだ」

「うっ……って、シャルルも男だろ？」

うわっ、ヤバイ。少し動揺していたようだ。シャルロットも見ると

あわあわしていた。

「シャ、シャルルは見た目は女みたいだからな！シャルルも女装すればいい」

「僕まで巻き込まれてる!?!」

「あはは。……さて」

軽口を叩きながら一夏の白式に接続。……でも問題があるんだよな。

「忘れてた。白式のモードを一極限定で頼む。……それでも、やるんだよな、お前は」

「……ああ」

正直、今すぐ叩いて無理やり引きずっていかうかと思った。この世界に100%の事は無い。ここで一夏を信じて送り出すのが正しいのか、無理をさせずに引きかえさせるのがいいのか。……俺にはわからない。普通は退かせるべきなんだ。でも、俺はエネルギーを送った。見るととてもスッキリしている……初めてISを動かした時の顔をしていた。

「あの、一体感か？」

「ああ、今なら何でも出来そうだ」

俺には一度も来たことが無い一体感。ISとは意識がある。でも、どこまで行っても俺には一体感を味わえた事は無い。外につけた装甲、みたいな感覚でしか。資質の問題だろうか。それとも、気持ちだろうか。

「……終了。こっちはもう無い」

大和が粒子となって消え、ブレスレットの状態となった。ふわっと、衝撃を吸収して着地する。

「武器と右腕か……頼むぞ」

「もちろん」

構える……前に言っておこう。

「なあ、正直悩んだんだ。ここでお前が死ぬかもしれないのに送り出すのが正しいのか、殴って引きかえさせるのがいいのか。正直、意見は割れると思う。でも……お前を信じる事にした。都合のいい言葉

だよな、俺には害が無いから信じようと信じまいと同じだろうに。でも、信じると言えば罪悪感が薄れるんだ」

そう、信じるとは都合のいい言葉だ。相手が死地に飛び出そうとしても、相手を信じると言えば美化されやすいものだ。でも一夏は首を振って、笑ってこつちを向いた。

「そういうところが、いいところだよ。お前の。俺も同じ状況なら悩む。でも、お前の意思を尊重すると思う。お前の事を信頼してるから。信じて頼ってるんだよ。お前が俺を頼ってくれるように。お前なら大丈夫だって送り出すよ。絶対に大丈夫だって」

ああ、全く、こいつは本当に、どこまでも馬鹿で、誰よりも最高の奴だよ。俺がどこまで行っても追いつけない、俺の理想。本心でこう言うんだから。俺も笑って言った。

「……明日の朝食は和食を食べよう。馬鹿みたいに皆でしゃべりながら。今日は聴取で長引きそうだ。問題を増やす奴もいるし」

ピシッと指を一夏にさした。悪い悪いと苦笑いしながら、
「ごめんな。明日、和食を食べよう」

勝って来いとは言わなかった。それでいいと思った。勝って来るのは最低条件なのだから。……ちがうな、傷無しで勝って来るのが最低条件か。なんともまあ、ハードな条件。それでも、コイツならやってくれると思わせてくれる。

「じゃあ行くぜ、偽者野郎」

やろうじゃないぜとかいつもなら言っただろうな。そう思いながら、世界がコマ送りになる。

コマ送りに見えた。だが本当は一瞬だった。直後にはラウラを抱えた一夏が立っていた。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏の人気があるのもうなずけるよ。ここまでイケメンだね。

「やあ、気分はどうだい？」

千冬さんと入れ替わりで病室に足を踏み入れた。さつきまで聴取とか受けまくって、気付けば食堂が終わる時間ギリギリだけど、もう

いいやって思った。当事者だから色々質問されまくりだろうし。あの二人に任せる。後から部屋にあるカロリーメイトでも食べればいい。

「……今まですまなかった」

痛いであろう体を曲げてまで謝ってくれた。

「別にいいさ。飲みたい物は？」

「いや……いいい」

ぼーっとしたような彼女は、今までよりずっと近づきやすい雰囲気だった。ランクチェンジで例えると、堅物の軍人からクラスのマスコット？んー、何か違うな。

「……一夏に惚れたな」

「なっ、なぜ分かった!?!」

貴様エスパーかつ?!?みたいな顔で見られてもね。

「人の心を見通すのは得意でね」

実際には一夏に大きく関われば9割以上が惚れるというだけである。そろそろ研究機関に送り込んでモチビームの研究をするべきじゃないかと悩む。俺も恩恵に……いや、いや。ただでさえちよつと色々よね。ちよつとなのにいろいろっておかしいだろうけど。

「それで、俺が今まで言った意味分かったか？」

俺自身何言ってるかサツパリになってるけど。

「……ああ。力、だけでは駄目なのだな」

あ、それだそれ。多分そんな感じ。

「人によるけどさ、誰かを守りたいと思う方が力が強く出せる時がある。他にも色々あるけど、誰かを関わりあうのはいい事だ。そりゃ、悪い奴と関わるのは悪い。究極的に言えば強盗とか人殺しと仲良くなっただけじゃないということ。だけど、ここにいる人間はいい人ばかりだ。多分、色々学べるはずさ。俺たちはまだ15しか生きてないんだ。

俺も、お前から何か学べていけたらいいと思ってるよ。お互いが教え合って、一緒に磨けえればいいなってね。お前から学べる事は良い事がたくさんありそうだ。もちろん、こつちからも色々教えるよ」

「ああ、そうだな。……今まで色々と忠告をしてくれた。感謝する」
「その言い方も変えるべきだね。感謝する、じゃなくて、ありがとう、だ。そうした方が異性受けもいいぞ?」
「……ありがとう」

少し、不器用ながらもしつかりと笑ってる表情は、とても穏やかであった。うん、ほほえましい気分になる。

「じゃ。一夏の倍率は高いぞ。気をつけろ」

そう言っつて部屋を立ち去った。

「ただいま」

「おかえりなさい。……やっぱり少し恥ずかしいな」

あいかわらず分からない。

「どこが?……それで、食堂はどうだった?」

「えつと……聞きたい?」

「二人が質問攻めじゃないの?」

シャルルは目を逸らしながら

「えつと……一夏と付き合うのは希なのかとかどうか」

「腐つてやがる。遅すぎたんだ……。まあいいや。他に?」

「一夏が『買い物に付き合うことだろ?』つて言っつて箒に殴られてたよ。そして鈴が『希が言っつてたのそういう意味か!』とか」

「平常運転だな。問題ない」

鈴に対して少し注意するだけだ。うーつとかしている鈴は見ていてハラハラするけど和みもするから。

「あつ、それと、とうとう大浴場が使えるようになっただつて」

「ほー」

シャルロットが来る前俺と一夏は二人だった。

でも何となく予想はしていた。女子に聞いた話によると、どうやら風呂が使えるのは女子の意見の大きさによるらしい。俺の気が少なかったが、美少年シャルル（女でシャルロットだけどね）が来た事で大浴場使用可能派が増えていったらしいから。学園もそれで許可

を出したのだろう。ちなみに、俺はそこまで困ってなかった。企業に出かけるたびに風呂を借りればよかったし。

「シャルルが問題か。どうする?」

「僕はお風呂苦手ってことに……無理かな?」

「一夏は多分――」

ちやうどあらわれた。どうする?」

「おーい!希!シャルル!一緒に風呂入ろうぜ!!大浴場だぞ!!」

「こう言ってくる。風呂の楽しさを分からせてやるとか」

「う、うん……先に行つて?一夏を説得して先に行つてもらうから」

「大丈夫か?」

「大丈夫、大丈夫。また後でね」

ふん、まあいいか。着替えを用意して俺は先に行く事にした。

「あ、来ましたね。それじゃあどうぞ!一番風呂ですよ!」

「あつ、今日は多分シャルルが来ないので。ちよつと色々あるらしくて……」

「そ、そうですか……後は織斑くんだけですか?」

「はい。それでは」

テキパキと脱いでタオルを一枚持つてさっさと行く。そして、貸切の風呂!素晴らしいね!泳ぎたくなる!……が、その前に。人が沢山いる浴場ならもういやとなるが、体を洗ったりするのを一夏は気にする。それに、そこら辺は俺も賛成なので頭と体を先に洗い湯船に浸かる。

「ふー。……自分以外誰もいない風呂つてのも不気味だな」

ちなみに、シャルルを優先させなかった理由はシンプル。どうしても一夏をとどめる理由が無かったから、時間別に入るようにしようぜ!と言っても難しかっただろうし。宗教云々も風呂の場では一夏の名の下に平等になる奴だし。着替えのときは通用するけど、風呂は譲らない人間だ、一夏は。奴は風呂奉行だ。鍋奉行に鍋について文句を言っても封殺されるのと同じぐらいに無駄だ。

そうやって一分ほどノンビリしていると脱衣所に気配がした。五

分ほどで説得したか、早いと言うべきか、遅いと言うべきか。

そしてドアが開いた。

「うー、一人じゃ不気味だったところだ。シャルルは何て言ってた？」
だが答えはない。そしてヒトヒトとこっちに足音が近づいて……
おかしい。一夏と一緒に風呂に入ったのは修学旅行ぐらいなもんだ
が、その時だって先に体を洗ってたし、銭湯の話で何度か言ってた。
風呂に入る前に体を洗うと。これは

「ダッシュ!!」

すぐに風呂の湯から逃げ出そうとする。が、遅かった。湯船で頭が
ゆだつてやがる、遅すぎたんだ。

「だ、駄目だよ？湯船で急激に動いちゃ？」

「そういう問題じゃないッ……それで、シャルルさん？どうしてここ
に」

と言いたいが、一夏のような人として終わってる奴じゃない。そ
りゃ、気付いてはいる。自惚れじゃなければ。でも、向き合うのは怖
い。本当の気持ちと向き合うのは怖い。臆病者なんだよ、俺は。俺一
人だって俺の人生の責任を背負うのが難しいのに、他の人の人生の責
任を負ってくのはどうしても腰が引けてしまう。

「その、今日はありがと」

「どこがでしょう？」

後ろから抱きつかれているので、正直さつきと脱出したい。今日は
ありがと、これが耳元で囁かれるように呟かれる。これはいけない。
色々いけない。ラブコメで良く水着に抱きつかれたり服の上から押
し倒したりしてるのがいるが、これには間が無い。何も無い。タオル
装備し欲しい。だがそれすらない。強いて言うなら皮膚のみ間にあ
る。二人の間を隔てるのはこの皮膚だけ、死ぬ。世界の男からは死ね
と言われるけど!!

「その、あの時……目の前に出てきてくれて」

「それが最善だったし」

後ろから抱きつかれてて良かった。自分で表情がどうなってるの
か分からない。取り繕えてる自信は無い。当たり前だ。この状況で

演技が出来る男がいるならそいつは絶対に信用しない。もしくは口リコンか熟女趣味。

「むう、いつもそう。たまには、素直に受け取ってよ」

本当に、耳元で囁くのやめてね欲しいな。やばいからさ。俺だって男なんだけど。本当にやばいよ。いつぞやの無人機の時ですら逃げようとか思わず、楽しい！とか思えたのに。今は逃げたい半分このまま幸せ享受したいとかもうどうすりゃいいんだよ！

「分かった。どういたしまして。それで、どうして一夏を説得したの？」

「とても卑怯だと思ったけれど……30分、とても大切なことがあるから、お風呂に入るのを待って欲しいって言ったんだ」

「なるほど……それで、いつまでもこうしてるの？そしてどうしてやって来たの？シャルルは」

どうしてやって来たの？これふぎけた質問に入るだろうか。

「そつ、それだよーどうしてシャルルって呼ぶの？それがいけないんだよ。希は僕が女の子って知ってて、二人きりの時はシャルロットって呼んでっていったのに」

「私、と言うなら考える」

必死で逃げてみよう。不誠実だけど、今は整理できてない。今はそうするしかない――

「ぼ、わ、私って、そんなに魅力が無いのかな……」

「ごめんなさい。すごく魅力的だと思う、シャルロットは」

「……ありがとうね」

耳元でそつと囁かれる声。頭の中に溶けてきて、まるで麻薬か洗脳か。この子がハニトラだったら世界中の誰でも逆らえないのではないだろうか？それより、この状況どうやって収拾をつければいいんだ？……どうするよ俺。一夏、俺に力を与えてく……アレだと被害が増えるだけか。加速度的にね！

「って、そうじゃなくて、じゃなく、そうじゃないの……前に言ったよね、学園に残るって話」

「それで、どうするつもりかな」

「ほ、私はここにいようと思う。私は、まだここだっと思える居場所を見つけられてないから。でも……希は、居場所になつてくれるの？」
不安そうな、縋り付くような、聞く人がどうにかしなきゃって思わせる声。それと同時に、背中から直に鼓動が伝わってくる。ドクンドクンと、自分の心臓の動きも高鳴って、何も考えられないと同時に心地よくなってくる。

「もちろん。……そして、一夏も、他の皆もなつてくれる」
「……卑怯だよ」

もつとぎゅつと抱きつかれる。首に腕を回された。心臓が、本当にドクンとなつて、温かさや、温もりに包まれてるような。

でもやばい、後三分この状況が続くとのぼせるかもしれない。もしくは死ぬ。

「ごめん……。でも、事実だと思う。誰だつてシャルロットの力に、居場所になつてくれる」

「……ありがとう。でも、希の居場所つて見つかつてるの？」
さらに強めに心臓がはねた。ただでさえ限界なのに。

「……どうしてそんなことを？」

「だって、希も両親と離れ離れになつたんでしょ？なら……」

「大丈夫。会おうと思えば会えるし、生き別れたわけじゃない。企業と交渉して、政府にかけあつてもらつて、両親は同居していて安全も確保されてる。夏にでも会いに行くさ。……そりゃ、少しだけ居場所が消えた、つて思いもあるけど。ここは楽しい人が沢山いるから。居場所になつてる」

嘘は言っていない。たぶん。

「……私も居場所の一人？」

「もちろんさ。なんたつて、俺の同居人だろ？」

「……うん、ありがとう。本当に……希に会えてよかった」

肌が触れ合うのが、とても温かくて、でも優しくて、気持ちがとても落ち着いていった。心臓はこんなにも動いているのと反対に。

それからちよくちよく、血液型から始まつて、お互いの誕生日とか趣味、本当に仲良くなれないと知らないような事を教えあつたり、最

近の事について会話をしながら、十五分ほどしたら外に出た。不思議な事に、何度聞いても分からない事もあるけど、シャルロットから教えてもらった事は全て覚えていた。あ、もちろん着替えは別々だった。俺があとで。

「じゃあ、戻ろう」

「うん」

顔はとても赤かった。俺も多分、そうなんだと思う。

外に出た時ちようど一夏と遭遇した。

「いったいどうしたんだ？二人とも」

「……すまん。またな」

「ちよつとね。何も言わないのに信じてくれて、ありがとう」

「助け合いが重要だから、別にいい。じゃ、またな」

その後、良く覚えていなかったがぐっすり眠れる事が出来た。

朝、とてもスッキリした目覚めと共に起きた後、いつものように……でも、少し温かい様な、どきどきするような感覚を伴いながら着替えなどを終わらせた。何とも気分がいい。

「じゃ、先に行くね」

そうやって出て行くこうとしたシャルロットを止めた。昔から、周りの情報を無意識に統合して判断してるのか知らないけど、極端に集中している時にこういった事がたまにあった。

「性別をばらすのか？」

「……たまに、希は心を覗けるのかなって思うよ」

自分でもそう思う。何と言うか、ピンツ！と来る時がある。戦闘中も集中すると出来るんだけどね。棚に置いてある石にチラツと目を向けた。昔なら、お守りに願ったりするだけだっただろう。でも、自分で動かないとな。しつかり、自分でやらないと。

「何となく、かな。決意を固めてた感じだから。……ゴメン、一日だけ待って欲しい」

「……分かった。希を信じるから」

「みなさん、お、おはようございます……」

昨日の後始末で疲れたのか、とてもフラフラしてる。一夏がくだらないことを考えていたようでグチグチ言われている。

「昨日は面倒な事がありました。今日も張り切って……行きましよう」

アカン、寝かした方がいいよ。この人。だが、その中にズカズカ突き進んでいく少女が居た。

「その前に、言っておきたいことがある」

見ると綺麗な銀髪つこらウラである。

「今まですまなかった」

ペコリと頭を下げた。そして

「一夏、希。来てくれ」

とくに悪い感じはしないので背筋を伸ばして近寄る。そしてラウラは

ズギユウウウン!!

なんと!一夏の唇を奪った!俺たちに出来ない(r y

「お、お前を私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「……え?」

「日本では気に入った相手を嫁にするというのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

呆然としている一夏をそのままにして、こっちに振り返る。そして俺に抱き付いて

「お前は私の姉だ!何度も忠告し、私の身を案じてくれる心遣い。それでいて、上からでなく一緒の立場で進もうと言ってくれた事。優しさで厳しさを兼ね備え、少し先で微笑んでいてくれる。まさに姉だ!」

な、何を言っているのか分からねーと思うが俺も何を言われているのか分からなかった。断じてちやちなもんじゃ……混乱してる。だが、ここは!

「つくつくつく、そうではない。俺のことを兄と呼ぶんだ!日本でこっついつつとき兄と呼ぶ!」

「な、なるほど。兄よ。これから頼む」

「いや、兄上、と俺の顔を見上げるように頼む」

「兄上、これから頼む」

「最後はおにいちゃん、これからよろしくお願いします、だ」

「お、お兄ちゃん？これからよろしくお願いします」

素晴らしい、これはすんばらしい。新世界の扉が開けそうだ！俺は新世界の神となる！！

「ヒヤッフウ！！俺の事はおにいちゃん！そうだ！ラウラよ妹よ！一夏のバカを落とす手伝いをしてやろう！お兄ちゃんは何でもでき」

「希、少し、落ち着こうか」

すつごい笑顔だった。見た者を全て虜にするような、美しくて……怖い笑顔。

「ヒツ」

恐怖の塊が居た。クラスの皆も、山田先生も、いつの間にか隣のクラスから沸いてきていた鈴も、セシリアも、箒も、一夏も、ラウラでさえも、そして何より俺が、恐怖した。

「ねえ、昨日のこと、覚えてるよね……なんでかな？」

傍から見ると、ただ昨日のことに対して疑問を投げかけているだけだ。やってって言ったこと何でやってないの？を気軽に聞くような。でも、ヤクザがナイフを取り出して脅してるよりよっぽど恐怖だった。

「あは、あはははは」

「とつても昨日かつこよかったよ？僕の前にISがあんなことになって、すかさず間に入った時とか。そのときの二人の会話とかずるいとも思ったよ？夜にも色々お話したよね？」

あれー、俺一夏の前にも立ち塞がったよーな（現実逃避）。

「でも、でもね。小さな女の子にそんな事言わすのはね……？悪いと思うな」

「で、ですよねー」

同年代です、なんて無粋な事を言ったらどうなるだろうか。昨日の比喩で死ぬとかだけど、比喩じゃなくて死ぬかもしれない。

「どうすればいいと思うの？希は」

「ここで選択肢を間違えたら、しぬっ!!」

「ぐっ、ごめんなさい」

てへつと言うように謝った。後から思うともう少しマシな謝り方があったのだろうけど、あの時は恐怖で思考が錯乱してたんだ。

「うんそれ無理」

シャキンとISが展開された。ラピッド・スイッチはいらないらしい。昨日一夏に対して使った盾殺しはアーマーと一緒に展開されているのだから。最強火力の武器は、もうあるのだ。

「は、ははは」

そうか、いつも一夏はこのハードスケジュールをこなしてたのか。恐怖はシャルロットが圧倒的だが。一夏を見るとご愁傷様というのか、両手を合わせて気の毒そうにしてた。

「最後のガラスを」

ぶち破って飛び出した。ドアアアアアアンツ！という音の後に衝撃波が上を通り過ぎる。

ISって怖い、本当にそう思った。

P・S 一夏もひどい目にあってました。ざまあみろ

十八話 真相

「ひ、ひどい目にあった……」

午前中にガミガミ千冬さんにしごかれた後、心と体を癒す為に食堂に向かった。ちょうどそこで

「む、兄か」

お兄ちゃんとか兄上でなく、兄と呼ぶようにさせた。いや、ちよつと皆の視線が痛くてね？ギャグっぽくなく、真面目に言つてたら通報されてただろうけど。視線が痛いだけならまだしも、シャルロットから実弾とかが来るとね？さすがにね？

「ああ、今朝はお疲れ。それで、今からご飯だけど食べる？一夏も来ると思うよ」

「分かった」

二人で食堂に行き、それぞれがそれぞれの食べ物を貰う。ラウラが右の席についた。そこで早速気になった事を尋ねてみた。

「ラウラ、いったい一夏のどこに惚れたんだい？」

「む、それは、そのだな……言われたのだ」

モジモジしながら言う姿はもはや乙女のそれ。昨日までお前を殺すが似合う軍人だったのに。相変わらず一夏ってすげー。

「なんて？」

「守ってやると、な」

そういつて頬を染めるラウラ。可愛いけど、何が起きたんだ本当に。一夏の周りじゃわりと日常だけどね。さらに色々が一夏のここがいいだの色々教えてくれる。

「だから、私は一夏を嫁にすると誓ったのだ」

そんな力説されてもね、かわいいからいいけど。

「なるほど。でもライバルは多い。だがしかし、嫁にする、と言ったから嫁になってくれるわけではない。一夏は確かにラウラを好いているだろうけど、異性としてではない！」

「な、なんだと!? そんな……」

ガツクリと膝を付くラウラ。

「だがしかし！それは今の話だ。将来的なビジョンは違ってくる！それ即ち積極的な攻撃あるのみ」

「そ、そうなのか！」

「ああ、ひたすら防御をしたところで勝てるのは援軍が来る場合のみだ。だが、積極的に攻めれば違ってくる。そこで――」

「もう、希の馬鹿。……希お兄ちゃん……いや、駄目だよこれは！」

少しプンスカしながらもシャルルはご機嫌そうだった。それも全て昨日のことのおかげである。

（少しは意識してくれたのかな？それにしても、一日だけ正体をばらすのを待って欲しいってどうしてなんだろう）

そう思いながら食堂に向かう。千冬に実行犯だったためきつめのお叱りを受けており、食堂には遅れていく羽目になった。そうして食堂に向かうと、鈴とセシリアと遭遇した。先に説教が終わっていたからである。

「あら、シャルルさん。お疲れさまでした」

「今朝は大変だったわね」

「いや、ちよつとね。アハハハハ」

乾いた笑いを漏らす。だがそれを気にせず鈴は近づいて

「ねえ、ちよつと失礼な話になるんだけど……まさか、希の事好き？」

「なっ、何を言ってるのかな鈴は！そりや友達としては好きだけど！同姓なんだから！違うに決まってるって!!」

だが次にはセシリアが追撃をかけてきた。

「ですが、今朝のあの反応は少し疑ってしまいますわ」

「そ、それはね、同居人の僕が希の非常識を治さないといけないなと思っただよ。うん。同級生の女の子にお兄ちゃんとか呼ばせるなんて非常識だよ！」

「確かに非常識だけど。それにしちや、ねえ。あの反応は」

「異性に対してみたい……」

「違っただって！希は異性として見てないってば！」

顔を真っ赤にしながら否定するがますます説得力が下がっている

ように感じられた。

「……まあ、どつちにしろ希の事よろしくね。あいつ、何でも出来るよ
うで、意外と忘れやすかったり、抜けてたりすんのよ」

「私も希さんにはお世話になってますから、よろしくお願いしますわ」
「も、もうー」

そう会話しながら食堂に近づくと、希を見つけた。その隣にはラウ
ラもいる。二人は昨日まであんまり険悪そうだったのに（ラウラから
希にたいして）今はとても仲良く食事をしていた。

「昨日の今日で仲良くなってるわね……それにしてもアイツ、朝よく
も……」

「この前のリベンジを試してみせますわ」

二人は決意を固めたように拳を握った。

「たった一週間でそこまで差は詰めれないんじゃない……」

全くもって聞いていなかった。三人はそれぞれの食事を取ってき
た後に二人の会話が聞き取れるぐらいの距離に座る。

「一夏の馬鹿はあそこまで言ってもラウラは何か勘違いしてるんじゃないか？とか思っている可能性がある。だから、攻めるなら直接的に
だ」

「な、なるほど」

三人が顔を近づけて

「あそこまでして誤解するとか、正直頭が腐ってるんじゃない？」

「もしくは心でしょうか？」

「体の方が腐ってるんじゃない？」

ひどい言われようだがあながち間違いではない。あそこまでされ
て好意に気付かないなんて火炙りにされても文句は言えない。

「阿呆みたいに間接的なアプローチかけてる三人を出し抜きたいなら
そこしかない」

ガタツと二人が席を立つがシャルロットがまあまあとたしなめる。
ゆっくりと腰を落ち着けた。

「確かにそれは積み重ねとして有効だ。告白されるなら親切にされた
り、料理が上手だったり、掃除が得意だったりというのをアピールし

ておくとそりや受け入れてもらいやすい。料理も家事も気配りも何も出来ない人が告白しても駄目ってことだ。でも、正直一夏は心意気というか精神重視な奴だし。これから攻めてもどうなるか分からん状況だ。他の三人に遅れを取っちゃ駄目だぞ」

「なるほど。出来る奴というのを見せつけ、それでいて堂々とすればいいのだな」

「その通り。負けるな」

腰を落ち着けていたがまた飛び出した。シャルロットはたしなめる暇が無かった。

「待ちなさい（つてください）!!」

「うおっ、ビックリするな。どうした?」

「あんたは中立じゃないの!?!」

鈴がくっつかかるが希は手をひらひらさせながら、

「ウソ。一昨日ぐらいまでは鈴60%、箒、セシリア各20%ぐらいだったけど、今はラウラ50%、鈴25%、残りぐらい。まあね、鈴が苦勞してたの見てきたしね。あれを見てると応援しないとって」「なら私を応援するべきじゃない?」

直前に鈴が苦勞してきたのを見てきたと宣言しているのだ。それに対してラウラは昨日今日である。

「ラウラはね、妹なんだ」

キリツと決め顔で言うが、全く持ってかっこいいことは言っていない。ただの変態だ。周りの女子からの視線が厳しいものになる。ここに来て急激に評価が下がっている希である。

「そ、そうだよね。妹なんだから仲良くするのは仕方ないよね。あははは」

シャルロットからもである。評価が下がるだけですみそうに無いところが違うが。

「ねえ、ちょっと怖いよ?……一緒に食べようぜ」

ちなみに、その日一日シャルル×希の話がおおいに溢れた。

「それで、どうして一日待つて欲しかったの?」

夜、一夏が遊びに来て帰った後、俺たちだけとなった。特製コルセットは着用しておらず、外見は100%女の子である。男装しても女に十分見えるけどね！

「うーん、正直、とても博打なんだけど……ひとまず言っておく、ごめん」

「え？いきなりどうしたの？」

俺の突然の謝罪にキョトンとするシャルロット。

「あのね。シャルロットがこっちにやって来た理由、どうしても不自然だと思つててさ、昨日までやっぱり少し疑つてた」

「それは……しようがないよ……」

すごく辛そうな顔をする。が、もちろんもう疑つてはいない。

「今は問題ないけどね。で、その理由だけでもまずシャルロットは整形手術とかをして男に全く似せてない。さらに、髪の毛だつて切つてない。昨日言ってくれたけど、髪は長いのが好きなんだよね？」

「う、うん」

少し恥ずかしそうに頬を染めた。俺もかな。風呂場でだし。

「普通スパイさせるなら髪を短くさせるはず。影響が無いレベルで整形もするはずだ。さらに二年前から日本語を習つてたつて事は最初からこっちに来る予定だつたつて可能性もある。僕つて言わせただけは分からないな。当時はISに乗れる男が現れるなんて思つてなかつただろうし。それと、もし本当にデュノア社長にとってシャルロットがどうでもいいのなら、そのまま見捨てたはずだと思う。だつてごたごた相続問題が起きてくるし。本妻とも仲悪くなるはずだ。これらの不都合な点を、昨日までシャルロットがウソとかをついてたつて疑つてたんだ。でも、違つて思つた。だから話す。博打になるかもしれない。でも、乗つてみる？俺の提案に」

ここまで言えば脳筋ではない彼女には分かつただろう。考え込んだような顔をしている。

「もちろんアフターケアもする。いくら立場が悪くなつても学園のルールで外から一切手を出させないし、装備が送られてこないならうちの会社から出させてみせる。全力で俺も助ける。でも一切強制は

出来ない。俺が責任を取りたくないって思ってるのも、確かにあると思う。でも、これは他人がどうこう口を出せはしないから」

「……そこまで希が言ってくれるなら、賭けれる。僕……ううん、私は」

「穴だらけだよ？ けっこう」

実際に、穴はかなりある。それでも、このシャルロットの親父さんがそうそう悪い人であるだろうか。こんな立派なシャルロットを育てた母親が好きになったのがそんな人間だろうか。

「でも希はいつだってどうにかしてきた。短い間だけど色んな人の相談に乗ってたし、昨日だってトーナメントを優勝した。私のことだった親身になってくれた。だから、信じる」

……はー、何でこう信じてくれるんだろう。自分は強い人間じゃない。誰かに支えてもらわないと立てない人だ。自分で正しいと思っても、周りが正しくないと言えば正しくないと思ってしまう人間だ。一夏とかと違って。

でも、ここまで信用されたんだ。だから、

「分かった。じゃあ」

「経営状態は苦しいか」

「はい、やはり第三世代に乗り遅れたのが痛手でした」

「そうか、下がっていいぞ」

フランス時刻にして約十四時。ちょうどデユノア社長は悩んでいた。

「苦しいか……」

ちょうどその時、携帯電話が鳴り響いた。見ると

(シャルロットからだ)

連絡用として登録はしておいたものの、一度としてかかってきたことのない相手。緊張をしながら出た。

『やあ、こんにちは』

「シャルル・デユノアだ」

シャルロットの声で無い事に心が跳ねたが声には出さなかった。

『へえ、あんたがこの女の父親か。偽名が同じって事を考えると予想が当たってそうだ』

聞こえてきたのは日本語。それに対して、シャルル・デュノアも日本語で返した。一応日本がISの本場となったので、ある程度ISに関わる人間はしゃべれるし、彼自身も優秀な事が理由だ。

「なつ、なんだね君は？」

『へえ、日本語知ってるのか。ならこのままでいいな。このシャルロットって女の同居人でね。こんな極上の女がいるとは。今まで気付かなかったぜ』

「一体何のつもりだ？」

『いやね？さつき問い詰めたら流されてきたって聞いたんだけどな。父親から愛情も受けず。でもその慌て振りからすると違うのか』

それに対して迂闊に答える事は出来なかった。

『うち、黙ったままか。まあいいや、ちようど脅迫したところだな。お前の事をばらされたくなかったら俺の女になれって。ま、コイツもう死んでるような人生だし？別に構わねえだろ？』

「それでどうして電話をかけてきたんだ？」

そう言いながらすぐに部下を呼び出させようとする。

『つと、変な気を起こすなよ。誰か呼び出して学園に通報しようってなら、それなりにひどい目に合わすぜ？』

「そうしたら貴様が捕まるだけだ」

『でも、コイツがどう言うかな』

「お、おいお——」

『社長！……バレてしまいました。すみません』

「……いや、それよりそいつを口封じするのは無理か？」

『正直、難しいです……。でもいいんです。そうしないと会社がつぶれるんでしょ？なら、いいです。もう死んだような人生だから』

乾いたような、でもところどころつつかえていて、抑揚の無い声。

『通報とかはしなくていいです。ではま——』

「いい！正体がばれてもいいからそいつを殴り飛ばせ!!」

『じゃ、社長？』

「お前だって女だ。もつと体を大事にしろ！事実がバラされても最悪私の首が飛ぶぐらいだ！」

『で、でもそれじゃあ！』

「いいんだ。……何もしてやれなかったな」

『じゃ、じゃ——』

『つと、おいおい……他にも娘がいたぶられる様を父親に実況しようとする悪どいセリフとかも用意したのに……せっかく一日潰してひたすら会話を練ったのに。一時間考えた分すら使っていないんだけど』
「……え？」

突然の事に口がポカンと開いた。

『名演技でしょ？俺顔さえよければハリウッドだって行けるかもって自画自賛！……さて、シャルロット。後はどうぞ』

『ご、ごめんなさい、社長……騙して』

声に抑揚が無いのはウソをつくのが苦手だったから、そう気付いたのは既に遅かった。

『すまない……今更父親面は出来なかった。13年間もほつたらかしていて。家の問題もあって、お前に優しくすると本妻とかの家が会社の出資者でさらにこじれることになるから、冷たくするしかなかった。だから、優秀なIS操縦者にし、学園に送り込ませた。途中から他のIS操縦者を送り込む話も出たが、男がISに乗れるというニュースとともにお前を男装させて送り込ませた。お前の方が年齢と容姿で男装で押し通せると主張した。口調も元々僕で言わせてたからな』

「そ、そうだったの……」

今までの話を盗み聞きしたところ、デユノア社の会社の経営状態は悪く、社長がひきずり下ろされそうという話。しかも、国防を一国二十程度だったりで担っているISである。利権は大きく、社長やIS操縦者は誘拐監禁暗殺などをけっこうな数行われる。だから、社長である自分から身を離させ、自分と関係ないようにした。それでいてIS学園に3年間送り込ませれば第二形態移行も高確率で行えるだろ

うし、そうすれば利用価値が出て、自分がもし殺されても悪いようには扱われずに済むと考えたらしい。

男装させたのは無理やりねじ込むため。さらに娘の事をどうでもいいように扱ってひらすた自分と離れたほうがいいと考えたから。そしてちょうど最後である。

『本当に今まで悪かった、すまない。……だが、そちらではもう問題がないようだ。いい友達が出来たようだ』

「社長……」

『多分、会う事は難しいだろうが、お前の人生に幸福があることを願う。お前の母のことは今でも愛してる。アイツと愛しあつた証だ。だから、気にせずによればいい』

「社……お父さん……最初からそう言ってくれば良かったのに!! 何で、何で今まで……」

『さつき言つたとおりだ。今更父親面など出来ない。明日に響く。もう寝ろ』

「……今度会いに行くよ。お母さんの話、聞かせてあげる」

『おい、シャルロット。何を言つて……』

「仲直りしよう。まだ15歳だから、やり直せるよ」

『だから、私と近づくと危険に——』

「関係ないよ! 危険は振り払ってみせる。だから、ね。もう一度やり直そう? 絶対に、出来るから。だって、僕はまだ15歳だよ? お父さんの半分も生きてないんだよ?」

『……そういつた、優しいところはアイツそっくりだ、本当に。……話すのは、少しだけだぞ』

「うん! お父さん! またね」

そう言つてシャルロットは電話を切つた。それにしても、15年間理由があつたとはいえ冷たく扱つてきた父親を許すとは、女神か天使か。シャルロットの優しさは。底が知れない。

ちなみに、どうして僕って教え込ませたのかは語られていない。あれ? どうして? まあ細かい事は気にしないでおこう。

さて、どうやって声をかければいい? 俺はどうすればいい?……勇

気を出すか。どうやって出すの？教えてバーニイ。

「あの、おめでどう？シャルロット。居場所は作ることができる」

「……うん、希のおかげだよ。希のお陰で居場所が出来たんだ」

振り向いたシャルロットの目尻には涙がたまっていた。今にも溢れ出しそうだった。少し、嗚咽も混じっていた。

「ハンカチ、いる？」

「ううん……でも、少しだけいいかな？」

そう言うのと返事も待たず、俺に抱き付いてきた。そしてくぐもった声で泣き出した。俺は両手をオロオロさせた後、右手で頭を撫で、左手を腰に回した。

何分、何十分したのか分からないけど、そのまま眠ってしまったようだ。しかも困った。

「剥がれない……」

すっかり抱きつかれていた。正直、とつても柔らかかごほん。昨日に比べれば弾力はごほん。しょうがなく、そのままベッドに倒れこんだ。こつちも正直眠いし。まっ、こんな日もあっていいだろう。

「ん……昨日は……そうだ」

「お目覚め？お姫様」

そうやって呼びかけると、シャルロットは一瞬固まった。ギギギとゆっくり俺のほうを向いた。

「いやあ、抱きつかれててね？はがせなかった。ごめんね、アハハハ」

「あ……あ……」

「うん、それじゃ起きて欲しいな、なんて」

そう言うのとシャルロットはがばつと跳ね起き……ようとしたら、もつと強く抱きしめてきた。

「もう少し、このままじゃ駄目かな？」

「あー、うん。いいよ」

そう言うのと、顔を見上げて笑ってきた。涙の跡が少しついていた。そして顔をうずめてくるとさらに連続攻撃で

「駄目……少しじゃなくて、ずっとこうしていたくなっちゃう」

どうして俺をここまで殺しにかかるの？死んじやうよ？オーバーキルだよ？レベル10村人に魔王の一撃必殺レベル。オーバーキルしてきるよ。

「そつ、それは。光栄だなあ、なんて」

「……迷惑？」

「そんなわけない！……こつちもあつたかいな」

それより、生理現象をどうにかしないと。少し腰を引かせてるが……死ぬ！

「もつと、抱きしめて欲しい」

だからどうして殺しに来る!?まじで精神的に死ぬ！一年分どころか十年分ぐらいの動揺をここ数十秒で叩き込まれた感じ!!昨日も大体そんな感じね!!

「こ、こつち？」

腕を少し強めに回す。気付いた時には下の方も接近。

「足も……きやつ！かたく」

「ちよつとトイレ行つて来る!!!」

そう叫んで飛び出した。でもドアの隙間から、安心したような、困つたような、嬉しいような、色々な思いが混ざつた笑顔を浮かべているのが見えた。でも、憂いは無くなって、心の底からのような。それが、とてつもなく心地よかつた。

その後、とくに会話もせず一緒に食堂に行き、そこで別れた。多分、本当のことを言いに行くのだろう。教室でしゃべりながら山田先生を待っている

「み、みなさん、おはようございます……」

休養が必要だねこの人。千冬さんに言つところかな。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生と言いますか、すでに紹介は済んでいると言いますか、ええと……もういいです！入ってきてください!!どうして二日続けてなんですか!?!」

とうとう逆ギレ。昨日今日だし仕方ないよね。

「失礼します」

「えっ？」

隣で一夏が声を上げた。そして教室が一瞬ざわつく。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願ひします」

「よろしく。シャルロット。今までと同じように、ね」

最前列で真つ先に、俺は言った。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということではああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

「おかしいと思った！美少年でなくて美少女だったわけね」

むしろ何で気付かない。

「つて、清水君、同室だから知らないって事は――」

知らないってことにして欲しいな。俺が実は一夏並に超絶鈍感だったってことにしよう。俺の演技力ならどうにかいける！

「いや、ちよつと待ってくれ。……昨日二人大浴場使つてなかったか」

コイツ黙れよ。

「全く一夏くんは変なこと言うな。全く。地面とキスしたいならそう言ってくれればいいのに。今ならマグマ風呂もおまけしてあげるのに！」

「あ、ああすまん」

でももう遅い。女子たちの目が変わった。

午前中、質問攻めをひたすら笑顔でかわした。シャルロットはどうだったか知らない。

十九話 日常

七月初頭、トーナメントから月日はそれなりに流れた。あの決勝戦は無効試合になるかと思われたが、決着は付いていたようなものなのでいつもどおりIS学園は平和にやれてますアピールをするためか、表彰式が行われた。ただ、前は男二人だったのに男と女で表彰に出たのはどうかと思うが。

人間関係は前に比べて変化はあった。シャルロットは昼食どころか朝食まで作ってくれる。しかもそれが美味しい。フランス料理を出してくる事もあるけど、正統派日本料理でメキメキ実力を上げてる。でも六時から一緒にいる程度トレーニングをし、その後食事の準備は大変か？と聞いても「自分がしたいからしてるんだよ」と言われては胸中は複雑である。夜もよくやって来る。と言うか毎日と言っていい。ちなみに同居人はいない。千冬さんが一夏に対して一生懸命自分の必要性を説いているらしい。要約すると駄々こねている。時間の問題らしいが。

ラウラはかなり親密である。二人の時はお兄ちゃんと呼ぶように、と言ったら本当に呼ばれた。純粹すぎて可愛い。一生懸命入れ知恵をして一夏に攻撃を仕掛けさせている。物理的ではない。精神的にだ。他のメンツと同じにするな。

他のメンツは今までどおりといったところだが、ラウラに肩入れをしているのですこし刺々しい。が、それなりに良好ではある。そんなある日の日常。授業も全て終わって帰りのHRのとき。

「これから四月に行った体力テストの結果を返す。名簿順に取りに来い」

さすが才女いえども女子、キャーキャー騒いだりしながら取っている。全て返し終わった後、起立、礼として解散になった。すぐに隣の
一夏に

「で、一夏はどうだ？」

「あー、残念だ。あと4点でAだ」

「おし、何とか勝った。Aに3点ぐらい余裕がある。こっちが7点勝

ちか」

当然だ。前も言ったが俺は中学時代部活を真面目にやっていた。一夏は千冬さんに迷惑かけないためバイトなどをこつそりやり、勉強も頑張っていた。俺と対照的に。

そして中三の2月の半ば、俺はすぐに今の企業に所属してそこで軍隊張りの生活を行っていた。1ヶ月半ほど。しかも様々なコーチの人が付きながら。走り方って真面目に学ぶだけでポイント1上げれるんだなとか思った。俺自身にあった呼吸のタイミングとかも機械で計ってくれもした。あそこで過ごせば誰でも一ヶ月で八ポイントは余裕で上げれる。

それから真面目にトレーニングをしている。一夏が一緒にトレーニングをしだしたのはセシリアに喧嘩を吹っかけられた時。そこから一緒に訓練しているわけだ。4月の終わりに体力テストをやったが、たった数週間でそれなりに体力を戻した。さすがに運動適正は俺よりかなり高い。千冬さんの弟って感じだ。今やったらどうだろうか、筋力自体はこっちの方が勝ってると思うが。総合じゃポイントと同じぐらいか。

あ、運動能力が高いだけで殴り合いしたらまず負けるね。

「平均8ぐらいか。高いな」

持久力とか少し低いけど、握力とか筋力関係は高い。

「握力平均51いってるのは1年じゃ少ない……まずいないだろうな」

男と女の筋力差は依然としてある。長座体前屈以外は男の5〜7のポイントが女子の10点満点になるぐらいなのだから。

「希はやっぱりすごいね」

シャルロットが褒めてくれるが、負けてたら困る。俺は持久走が苦手なのでそこは負けてたりするけど。ちなみに、長座は相対的に弱い。この学園には体が柔らかい女子が多いから。これでも格闘の時に必要だからストレッチ一生懸命してるんだけどなあ。それ以外の記録でなら俺と一夏がツートップだ。専用機持ちのエリートでも、どうしても男と女の差は出てくる。それでも

「シャルロットと生身で勝負したら勝てると思えないけどな」

それどころかセシリア・鈴・ラウラ・箒、誰にでも勝てる気がしない。でもこれから成長期だし、三年間でどうにか倒せるレベルにまで到達したいところだ。彼女たちはエリートで強いけど、世界選手権に出れるレベルとかそこまでのレベルではない。不意を突けば軍人相手を倒せるぐらい（ラウラ除く）だから三年間あれば倒せるようになるはずだ、多分。

あ、とくに、シャルロットには負けたくない。理由は聞くな。聞くなよ。

「そんなこと無いと思うけど……」

あるとおもうんだけどなあ。

「それより、箒って握力どのくらいだ？ やっぱ40ぐらいあるのか？ もしかして40後半か？」

「お前は私を何だと思ってるんだ？」

無然と言うが、中学女子剣道優勝で、真剣で素振りをしている彼女だ。握力は俺たちに次いで3番目にまず来ると思うがどうだ。それが技術で補っているのか。

「違うの？」

結果の紙を差し出して（一部に手をかざしている）

「……40ぐらいだ」

「やっぱお前たちってすごいな。皆高得点だ」

一夏が感心したように言う。専用機持ちと箒は最低ポイント大体8ぐらいで全員Aを軽がる突破している……と思ったらシャルロットは違った。理由は簡単だ。性別が男で結果が届いてるから平均6ぐらいって所だ。女子換算で平均9ちよい下ぐらいか。

「当たり前じゃない。国から任されてるエリートよ？ 一応」

いつの間にか会話に参加していた鈴がさも当然に告げる。このちみっこさでこれだけやれば凄いよ。確か女子は平均157cmだったか。7cmほど低いのに。

「あ、でも身長と体重……さすがにジョークです、はいすいません」

「一夏、笑えるジョークと笑えないジョークの区別ぐらいつけとけ。」

まあその二つぐらい大体分かるけど」

「しゃべったらその頭を熟れたザクロの様ににしてあげますわ」

恐ろしい事言わないで欲しいな。あと俺が直接的な暴力表現は止めようって言ったけど、むしろ恐怖が増すだけだな、こりゃ。

「ふむ、こうしてみるとやはり男と女の筋力差は出てくるな。軍でひたすら鍛えていたが、持久力と長座以外けっこう離されている」

「半分ぐらい10点だろ。偉い偉い、さすが妹だ」

10が4つ、9が4つ。体は一番ちっこいが一番頑張っている。当然といえる。もしくはこれが試験管ベイビーの強さか。さすが疑似コーディネーターか。頭をよしよしするとラウラは胸を張った。

「もちろんだ。それで、どうして体重などが大体分かるのだ？」

「簡単だよ。ネットで身長に対する平均体重を調べだして、平均体重から1〜2kg引けばいい」

「へー、どうして減らすんだ？」

「一般女子に比べ筋力自体ははるかに高いのが多いけど、スタイルいいのばっかだし」

「……殴っていいか微妙ね」

褒めたんだよ？

「お前とラウラさらに数百gかな」

「今日の訓練私としましよ。叩き落して地面を這いずりまわらせてやるわ」

ちよつとふざけすぎちゃった、というかつい言っちゃった。とても強い殺気が。他三人に比べて胸は小さい分引こうねって思っただけだけど、そこまで察知するか。ちなみに胸の質量なんて知らないよ？「まあまあ……となると、身体能力はラウラ・箒・シャルロット・鈴・セシリアの順か」

「シャルロットは長座が得意なのか？」

ラウラ以上である。俺は知ってるよ？シャワーおわった後とかにストレッチやってたし。俺といっしょに。目に毒だったけどね。

「体は柔らかいほうなんだ。それにしても、希の握力がやけに高いのは柔道をやってたからかな？」

「多分ね。一番握力を使うスポーツだろうし。座りながら握力グリッパらずと握ってれば鍛えやすかったからよくやってたし」

暇つぶしに最適だった。ネットでまとめを見ながら握り続けられこれぐらいは行けるはず。

「でも、あんた身長低いわよね」

うっ！……ずっと気にしてたんだが。言われると微妙に傷つく。さっきの仕返しだろうが、いつもからかっているのは俺なのでごちゃごちや言うのはみっともない。というかしてはいけない。

「まあね。やつと165cmってところか。成長期にかけたいけどなあ。一夏、3cmくれよ。そうすれば殆ど同じになるから」

「嫌だよ。やれないのが前提だけど、やれたとしても身長は嫌だ」

だよね、俺もだけど。鈴はため息をつきながら

「つて言うか、あんた一年前から身長変わらないでしょ。背高いなとか思ったけど、早熟なだけだったみたいね。これ以上は諦めなさい」
ぐっ、と来るな。そして微妙にドヤ顔やめる。んー、鈴が胸で馬鹿にされるとこんな気分だろうな。だから鈴に対して怒っちゃ駄目だ。いつもの胸でからかわれてるのを仕返し？してきてるだけだし。

ただし、とつても違う点がある。とつても違うところがある。声を大にしていったらやばいことだけど。胸は小さくてもステータスになると俺は思ってるってことだ。身長は小さかったらデメリットしかねえって事だ。あ、背が高い女子が好きというわけじゃない。

「日本人平均身長172cmらしいが、マイナス7cmか。一夏と7cmも違うし……」

隣で立つと低く見えるのは実はちょっとコンプレックスだ。

「でも体重は一夏にけっこう近いじゃない。負けちやいるけど」
「筋力はあるとき間違いない勝ってたからな。今はどうだか」

一夏はかなりガツシリしてきたが。俺よりもう上だろうか。
「希、大丈夫だよ。絶対に背は伸びるよ」

健気に励ましてくれるシャルロットまじ女神。でも俺は諦めてるんだよね。遺伝の関係もあるし。

「ありがとう。健康的に生活して、最善を尽くすよ。で、セシリアは

……特に秀でてるのが無いな。やっぱ狙撃とかの訓練を重視してたのか？」

「はい、それと一応オルコット家当主なので色々面倒な事もあります。さらに訓練自体このごろ怠りがちですし……」

ライバル多いからね。料理とかの腕を必死に磨いているのを、俺は知ってる。貴族のお嬢様だった分他で取り返さないといけないか。ただ、そっちに集中されすぎて国に送還ってなっても困るな。まっ、そこら辺はしっかりしてるから問題ないだろうけど。

「それにしても、鈴はすっげえ伸びたな。前から良かったけど」

一夏が感心したように頷く。中学二年生の終わり、その時から運動能力は高かったがここまで伸びるか。感心しているとあははと乾いた笑みを見せた。

「教官がね……厳しかったのよ」

「……でも、それで今のお前があるんだから」

「もちろん。感謝してるわ。でも当時はきつかったわ。滝に飛び込めって言うのは冗談かと思っただわよ。飛び込んだけど」

「お前、将来は気とか使えそうだな」

科学的に証明できないだけであるかもしれないらしいので、マスターしたらぜひとも教えてもらいたいものだ。かめはめ波を撃てたら鈴様って呼ぶ。一生敬ってみせる。

「それより……やはり悔しいな」

箒が眉をひそめて言う。一夏が

「何が？」

と聞くが、まあ多分

「男女の差だ。毎日鍛錬をしているが、希の足元に及んでいない」

こういった話だよな。足元ぐらいには及んできると思うけど？そりゃ筋力では強いけどシヤトルランとかは負けてる。一夏も俺も女子に負けてたまるかと思っただけで、100回目にして箒に圧倒的に差を広げられ、微妙に悔しかったのを覚えている。持久力は努力がかなり物を言う。さすがに積み重ねがある箒は強い。

「それが昔の男尊女卑の世界の原因だな。こんだけ身体能力に違いが

出るなら、力が主な原始社会は男尊女卑が蔓延するわけだ。まっ、今は女がISで力持つてるから逆だけど。それより、箒は二つも錘を――」

つけてるのに凄いなと言おうとした。

「ねえ、希。いい加減怒るよ?」

スツと温度が下がった。綺麗な笑顔だけど、のっぺりした声。溢れ出る威圧感、そして殺気。周りが俺をキツと睨んだ。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

「これからは注意してね」

人間関係が変わった事があった。俺たちの中の共通事項。それは、シャルロットを怒らせてはいけないということ。

怒らせるのはいつも俺が原因だが。

「お兄ちゃんよ。添い寝をしてくれ」

「わああっ!?!」

驚いて後ろを振り向いた。夜、シャルロットが帰った後、ドアが叩かれ誰かと思っただけに見たら裸のラウラが立っていた。ガバツと後ろを振り向いた速度はISでターンした並。ともかく、な、何を言っているかわからねーとおもうが――

「どうしたのだ?」

「よし、ラウラ。まずは服を着よう。最悪でも下着を着よう」

「無い」

すっげえ堂々としてるよ。見ちゃいけないから見てないけど。俺よりよっぽど男らしいわ。ラウラを教育した奴出てこいなう。ぶっ潰してやんよ。

「じゃあ俺のシャツ渡すからそれでも着て」

「なぜだ?なぜ寝るのに服を着ねばならない。襲撃に備えねば」

あら天然勘違いっ子可愛い。養いたい。

「いや、着るんだよ。女の子は無闇に素肌を見せちゃ駄目だ。一夏だけにしなさい。それが淑女の嗜みだ」

「むう、私は軍人だが、お兄ちゃんがそう言うなら」

傍から見ると銀髪の同年齢の美少女にお兄ちゃんと呼ばせてる変態な訳だな。さらに裸Tシャツを要求する高等プレイ。このプレイに何万金を出す人間がいるだろうか。ちなみに、実際にやると心臓に悪いとは伝えよう。だつてさつさと帰ってもらわないと、シャルロットが来たら殺されるから。警察が来たらつかまる。鈴とかが来たら学園生活が終わる。千冬さんが来たら全部終わる。これらが無ければ楽しめるはずだ。変態？いや正常だよ？

「それで、どうして添い寝してもらいにきたんだ？」

誰かがよくないことを吹き込んだのか。

「私の嫁が言ったのだ。家族と一緒に寝るのは温かい気持ちになれる」と

明日覚えてろ一夏ぶつ飛ばしてやる。え？他人にしたような事を自分にされて怒っちゃダメ？鈴には怒っちゃいなかったの？知るかヴァーカ。一夏だからいいんだよ！一夏は俺の特別なんだ。

「確かにそうだけど、裸は駄目だ。まさか、下着とか全く持っていないか？」

「そうだ」

裸Tシャツであまり無い胸張られても俺が変態かロリコンか犯罪者にしか見えないんだけど。どっちも一般人視点だとロクでもないって所が危ないな。好意的に解釈するポイントがどこにもない。でも俺自身はロリコンっぽい感じがしてるんだけどね。ってどうでもいい。早くどうにかしないとまずい。とにかくまずい。シャルロットに見られたら命が束になっても足りるかどうか。

「……しようがない。今日の添い寝は駄目だ」

「どうしてなのだ!? 今日一日でもいい、家族の温もりを知りたいのだ！」

「だから、むやみやたらに裸で男と寝ちゃいけません」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだ。裸で寝て問題ない。第一、今は裸ではないではないか」

いや、その理屈はおかしい。……おかしい？いや、騙されるな。お

かしいに決まってる。裸じゃないとしても裸よりなお悪いだろう。裸の方が健全だ。あれ？健全？

「ひとまず最低限パジャマを着てからね。今度の休み、一夏と買いに行つて好みのものを選んでもらおう。嫌とは言わないはずだ」

「さすがお兄ちゃんだ！だがそれとこれとは別だ。一緒に寝てくれ」
「だから!!」

「ラウラ、どこに行つたんだろう」

シャルロットはルームメイトのラウラを探す為ジャージ姿で徘徊していた。

「しようがないか……コアネットワーク、起動」

潜伏モードにしてなかったのか、位置はすぐに発見した。

(希の部屋？一夏について相談かな)

近いところを探索してたので、1分ほどで到着した。行儀良くノックをして

「希、ラウラが――」

「だから！明日寝よう。裸Tシャツじゃ俺の命が危ないんだって！」

「どうして危ないのだ？妹と一緒に寝て命が危険になる事などあるわけがない」

「あるんだよ！いまにもシャルロットがやつて来る予感が――」

ダンツ、心地よい音と共に扉が開いた。希にとっては恐怖の音であるが。

「や、やあシャルロット、こんばんわ。奇遇だね」

いつもよりぎこちない笑顔を見せる。

「うん、とつても奇遇だね」

いつもより綺麗な笑顔を見せる。

「じゃあおやすみ、また明日」

そう言つて希は何事も無いかのように布団の中にもぐりこんだ。秘儀、知らない見てない普通だよのフリ。

「じゃあ私も寝よう」

ラウラがナチュラルに希の布団にもぐりこんだ。天然ツ子の萌え

と同時に恐ろしさも味わうことになる希。

「ラウラ！俺が死ぬ！……あ、ラウラって柔らかいな。身体能力最強で、鍛えていてもやっぱり女の子——ハッ!」

「希、外に出てきて欲しいな。ベッドを壊したくはないし」

「さすがと希は外に出てきた。顔面蒼白である。」

「あ、あの、シャルロットさん」

「なーに？」

「右ですか？」

「NO、NO、NO」

無駄に流暢に答えるシャルロット。日本語だけでなく、英語もいけるらしい。さすがである。

「左ですか？」

「NO、NO、NO」

綺麗な笑顔だった。希にとって

「やっぱり両方ですよねー」

「YES♪」

死刑宣告同然だが。

その日、悲鳴が響いた。ラウラはシャルロットに対して従順になりだしていた。

IS学園は今日も平和である。

二十話 平穏な日々

「そつ、それで、今日の話って何かな？」

夜、既に日は落ちていて普通なら人も静まり返っている時、二人は学園の屋上にいた。シャルロットは希に呼び出され屋上に来ていた。「えつと……改めて言うのと恥ずかしいけど……その、まあ、俺たちずつと傍から見るとそういつた関係だったと思うけど。ずつと、言えなかつたから」

その言葉に顔が嬉しきで溢れ涙で溺れそうになるシャルロット。

「俺は、シャルロット・デュノアの事が好きです。結婚を前提に付き合つて欲しい」

ずつと待つていた言葉。心の底から言つてほしかつた言葉、あの時からずつと、それが今。

「絶対に、幸せにする」

絶対なんて言わない希が、絶対と言つた。涙が溢れ出した。

「よつ、喜んで！」

満面の笑顔でシャルロットは答えた。涙が頬を伝わつた。希が涙を拭つてから、ふたりの影が徐々に重なつて――

「……あ、れ？」

「一夏！お前のせいでひどい目にあつたぞ！」

朝初っ端から罵声を浴びせるなんて俺にしては珍しい。……一夏に対しては結構あつたかな。

「えつと、悲鳴が響き渡つたのは知ってるけど、どうして俺のせいなんだ？」

「ラウラをけしかけて俺に添い寝させようとしただろ！」

そう言うとならウラが辛そうな顔をした。

「なつ……そんなに私の事が嫌いなのか、兄は」

「違うよ大好きだよ！でもね！色々面倒事があるんだよ！というわけだ、一夏」

「いやどういいうわけだよ……それで、何だ?」

「ラウラのパジャマとかの買いだしに付き合っつけてやってくれ。俺も付いていきたいんだが、企業に出向かないといけないんだ。ラウラは馴染み始めて日が浅いし、よく懐いてるお前に任せたいんだ」

もちろん嘘だ。もし理由がなかったらラウラと一緒に行くとか言いかねない。

「なんというか、ラウラに対してすごく世話焼いてるな」

「妹だからな。義妹だからな。大事だから二回言った。だから頑張るさ」

こんなにかわいいのをほっておけはしない。

「お前そんな奴だっけ……いや、そういう奴だな」

どういいう奴だお前の認識。本当にどんな奴だよ。同級生を兄呼ばわりさせるシスコン野郎の認識って。こら、シスコンじゃなくて変態とか言わない。

「ともかくいいんだよな?」

「ラウラがいいんなら付き合うよ。そうだ、ラウラって水着選んだっけ?俺も水着を買い出そうと思うんだけど一緒に行かないか?」

ラッキー。さりげなく切り出そうと思っただけど、あの一夏が珍しく気を回した。正直かなり驚き。少しは俺から学んだのだろうか。

「い、いいのか!?パジャマも水着も選んでくれるのか!」

「まあ、それくらいなら……今度の日曜日でいいか?」

「うむ……さすが兄だ!兄は何でも出来る!!」

「あははは、もちろんさ」

そうしていると、やけに慌てたシャルロットがやって来た。ラウラがビクツと震えた。ちよつと精神衛生教育上に悪影響か。今度からラウラのいない時にするようにしてもらわないと。

「おはよ、シャルロット。珍しく遅いね」

昨日怒らせてしまったので朝食は作ってくれていない。ま、向こうにも予定があるから毎日とは行かない。それでも昼食はほぼ一週間のうち六日は用意してくれるし、朝食も同様ぐらいだ。

「希のせいだからね。二度寝しちゃったのは」

「怒ったのはシャルロットさんでは……はい、すみません」

だが、それとは違うような。視線を合わすとなんと向こうが避けた。しつこく合わそうとすると頬を染められた。えっと、えっと？

「えっと……どうした？」

「の、希がいけないんだよ！」

「えっ？えっ？」

分からないでいるとラウラが

「ふむ……寝言でのぞ——」

「ラウラ、いい子だから静かにしようね」

スツとひんやりとした、有無を言わせない雰囲気 flowed.

「了解した」

さっと黙った。でも、いやまさかね。寝言とか。

「ともかく！そういうことだから！」

「うん。早く食べないと死ぬよ？」

そう言うのとパクパク食べた。早いけれども品がある。さすがである。

「シャルロットはごまかすのが苦手みたいだな」

「演技出来ない人間だろうね。人が良すぎるんだ。ウソをついてたら罪悪感を感じるし、申し訳なく思う」

男と隠してた時もそれっぽい話題を振ると明らかにぎこちなくなっただ。

「ずっと思ってたけど、お前たち皆シャルロットが男だと思ってたの？」

あんなの私は女ですって看板を掲げて歩くようなもんだと思うけど。

「ずっと思ってた」

「私もだ」

「無論」

俺が異常なのか？確かに思考は他より軽く狂ってるけど、そこまで狂ってるわけじゃないだろう。一般人よりちよつと違うっただけで。一夏が俺を見ながら

「その点、希は真逆だな。俺なんて希が嘘ついても分からない。まあ長い付き合いだし、明らかにおかしいのとか、何となくで分かるけど外見は全く平常だし」

「嘘をつくときのコツは三つ。嘘に真実を混ぜる事。時系列を把握する事。嘘を嘘と思わないで本当と思う事。罪悪感が感じにくくなるから。罪悪感顔に出る」

それに対して箒がため息をつきながら

「とてもためにならん」

あまり否定できないな。将来的には役に立つだろうと思うけど。大和撫子を真つ直ぐ突き進んでいる箒はさすが……おい、ちよつと待て。ツンデレが何言ってるんだ？いつも下手な嘘ついてボロボロになってるのに。

「ラウラ、こうしたことは真似しちゃ駄目だぞ」

俺が言うのもあれだけど。

「分かった」

素直でよろしい可愛いらしい。そう思ったちようどその時、キーン
コーンカーンコーンと予鈴が鳴った。

「よし、間に合った。さてと」

席を立つが

「希!?!僕をおいてくの!?!」

逃げ出せなくなるから止めてほしい。その目。

「ラスボスの前に仲間を差し出すわけじゃあるまいし、大げさな」

歩き出そうとしたら皆が口々に

「……意外と間違いないじゃないのがな」

「ラスボスより強そうだ」

「ラスボスなど教官なら一蹴りだろう」

あながち間違いじゃないなそう言えば。ちなみに言うだけ言って
三人は遁走した。他人より自分である。

「ごちそうさま。って早く行かないとー!」

「なら気をつけてしっかりつかまって」

ISを部分展開。脚部のみ。シャルロットをお姫様抱っこする。

そのまま抱えると下から覗けちゃうしね？配慮しないと。見せたくないし。

「キヤッ！希!?どうして?」

「どうやら遅れたのは俺が原因らしいしね。しっかりつかまって」

脚部補助ブースターを開放。ISの武器装甲などが無い分PICを自由に使いやすいので補助ブースターだけでも軽く飛べる。目的の三階付近に到着した後、索敵開始。――千冬さんか。幻想機動をつけといてよかった。背中の部分に幻想機動を展開。発動をし、その瞬間にもぐりこむ。切れるまでに千冬さんの視界から消えた。

「ふう……危なかった」

「び、びっくりしちやった。……お姫様抱っこなんて初めてで」

「えっ?そうだっけ?」

「そうだよ」

どうやら、機嫌は治ってくれたようで、スツキリした笑顔を見せてくれた。……それにしても、まず間違いない気付いてるだろうな、あれぐらいは。千冬さんは全方位にレーダーを張ってる。

「さっ、さっさと行こう」

「うんっ!」

「ほお、ぐ苦勞な事だ」

「なっ……」

見ると鬼がいた。いや、そんなまさか。叱りに来るとは予想外だ。……そうか、一夏と同居が出来なくなりそうで荒んでるのか。しかも俺のせい?で。隣を見るとシャルロットも青ざめている。

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる学的権力の影響を受けない」

それお題目だけだね。実際には受けるけど。そりや当然だ。金の出資者は日本だし。やって来てる生徒たちは国のバックアップを受けてるし。受けないほうがおかしい。しかも三年過ぎればどうしても学園から離れざるを得ないのだからどうやってても国の影響は受ける。

「はい、ですが、シャルロットを勝手にお姫様抱っこしたのは俺です。

シャルロットは何もせず、俺から被害を受けただけです」

「なっ、希っ!？」

「連帯責任と言うかも知れませんが、さすがIS。たったの数秒の事です。彼女でも反応は出来ませんでした。なれないお姫様抱っこにとまどっていたのでしよう」

おどけて手を広げて。大丈夫、この人には貸しがある。それに俺は正しい、俺は正しい……。心から信じて顔に出せ。俺は間違っていない、そう心から。

「ほお、つまりどういうことだ？」

「俺が全部悪いでしょう」

断言するように言い切る。

「いえ！私も振りほどこうと思えば出来たので私も悪いです！」

「ならんな。となると、清水」

ダンツ、ダンツと二発叩かれた。痛みは強烈だが、引きはそこまでしない、良い加減のアタック。相変わらず絶好調か。

「清水は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室で生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい、これから気をつけます」

痛みが見栄を張って平静を装った。痛みには、柔道で慣れてる。頭をよく打ってたという意味じゃない。決して。

SHRが終わった直後、シャルロットはすぐに近づいてきた。

「希、さつきはありがとう」

「事実だろ？使わないでも間にあったかもしれないのに使ったのは俺だ」

「……食後、急激に走るのは健康に悪いよね。前、僕がそう言ったけど、配慮してくれたの？」

「さあ。でもま、いつも食事を作ってくれてるんだ。たまには恩返しぐらいしないと男が廃るさ」

恩にはきっちり返すのが俺の主義だ。向こうがしたいからそうしてくれただとしても。

「……僕も、放課後掃除を手伝うよ。絶対だからね」

決意を固めた瞳で言ってきた。

「分かった分かった」

絶対に譲らない、そんな気配がにじんでいた。それからは今日も一日普通に授業を受け放課後。ISでバトルできないとか思いながら掃除に突入である。ちなみに、普通の学校と違いIS教育に少しでも時間を回す為専属業者に頼んでいる。よく自分の学び舎は自分で掃除するべきだとか教師とかが言うけど、教師専用のトイレ（洋式便座）とかは自分で掃除しろって話だよ。教師は生徒たちよりやることあるんだろうけど。上に立つ人が態度を示すべきだ。っと、話が逸れた。

「うーん、教室の掃除なんて久しぶりだな」

「そっか、いつも部屋で全力で規則破ってたけど、見つかったのは初めてなんだよね」

全部カウントしてたらヤバイことになるってレベルじゃないぐらいには。

「意外とね。まあ、そこまで悪くは無いな」

「どうして？」

「なんだかんだで自分の使ってる場所は自分で掃除すべき、って感覚もあるし。そりゃ時間が切羽詰ってるなら馬鹿ーめんどくせー、なんて思うけど、余裕はあるから。余裕はあるときはこうしたこともいいなって」

ただし、周りが掃除してないのに自分だけやてると虚しくなるけどね。それぐらいなら一人でやった方がマシだ。

「希って、真面目だよ」

だらしない姿見せれないからね。打算で動くのも多いし、心の底から相手のことを想って動けるわけじゃない。悪い人間じゃないけれど善い人間でもなくて、良い人間だ。真面目だとも思う。自分で言うのもあれだけだよ。

「シャルロットほどじゃないけど。毎日部屋をこまめに掃除してたし」

俺はある程度まとまったらするタイプだ。

「昔からの習慣だよ。ん、んん〜！」

「ここら、筋力はこつちの方が圧倒的に上なんだから。机運びは任せろって」

シャルロットは筋力関係は少し低めだ。

「大丈夫。私だって専用機持ちだから。ほら……きやつ」

一瞬ぐらついたシャルロットの後ろに手を回してをカバーする。やはり軽いので当たってきても問題は無い。が、シャルロットの反応の方が困る。顔を赤くしながら

「あ、ありがとう。でも、一人で全部は大変でしょ？」

「そこまでじゃないって。よいしょつと……フルアーマー机とか言ってたけど、フルアーマーするのはアニメの終盤だけでいいよ」

岸里さんが教科書類を全部机にしまってるが、それを命名フルアーマー机と言ってた。鎧アーマーとは外にするものなのに鎧が内側にあるとはいかに。

「ちよつと上手いね。でもまだまだかな」

相変わらず辛口と言うか、シャルロットこのごろ的中率上げてきてるな。一夏や鈴ぐらいしか読んで来ないのに。千冬さんは別として考える。

「だよね。このごろラウラもアニメとか見だしてるんだよ。面白いのも理由らしいけど、戦闘の参考になるって。とくに希に対しての」

「まあね、からめ手とかはアニメ小説を参考にしたのも多いし」

「ラウラは特に騙されやすいしね」

うんうん、純粹なのはいいが将来変な男に……一夏は変な男といえるだろうか否かが問題だ。人によつちや駄目人間と言うかもしれないが、否定できないかもしれない。でも聖人だと思おうよ俺は。考えないで動くことも多いけど、打算で動かない奴は。何よりも、憧れる。

「終わった。クーラーをきかせてくれてたのは幸いだ。無かったらきつかった」

「だね」

そこから沈黙が続いた。温かいような、寂しいような。

(な、何か話題は……とにかく話題を見つけないきゃ)

「……突然なんだけどき、シャルロット」

「ひゃいっ!?!」

考え事の最中に声をかけられると驚いたりする事はあるものだ。

「うおっ!?!こっちが驚いた……でき、シャルロット」

「な、なあに?」

真剣な目で見つめられ、思わずたじろいだ。

(じゅ、重要な話だよね……どうなのかな。まさか、今朝のは場面が違う正夢!?)

「シャルロットが男から女になったのは、やっぱり嘘をつきたくなかったから?居場所を作るのに」

真剣だけでも、ベクトルが違って少し残念だった。

「……うん。自分の居場所になってくれるかもしれない場所で、嘘の自分ではいられないから。だから私は、僕じゃなくて私になったの」
「でも、今でも先生の前以外僕だよな」

「他に、希と二人きりの時は私だよ」

すっ、とシャルロットは攻撃に移る。しかし、希は表情は全く変わってないように見えた。

「……やっぱり?」

「うん」

(希はどう思ってるのかな。見かけは全く動じてないし、脈はないのかな……)

ずっと気になっていた事だ。確かに風呂で抱きついた時は顔を赤くしていたようだが、さすがにあそこまでやれば自分以外でも顔を赤くするはずだ。そうでないのなら攻略絶望(ホモやロリコンなど e t c)と言う事になる。もしそうだとしたら他の女子たちも悲惨である可能性がある。ホモ場合の相手は高確率で一夏になるのだから。

「だって、前と変わらず男としか見てないみたいだし……」

「そんなわけないだろ。女としてみてるって」

「えっ？本当!？」

そう言うと、希は一瞬口を開き、眉を一瞬動かした。さりげないが、これはしまった、の表情だと気がついた。何がしまったのかは分からなかったが。

「ああ、シャルロットが男に見える奴は脳外科に行った方がいいな。男装してるならまだしもだけどさ」

カラスが微妙に鳴いた気がした。

(な、なんか違う……)

「この学園の女子はかわいいのばつかだしな。最初から男じゃないって思ったよ。男装しても分かるかわいさってね」

あははと笑いながら言う希が、本当のことを言っているのかわからなかった。

(希はかわいいかわいってよく言うけど、本当にそう思ってるのかな)

「希、白猫ってどう思う?」

「かわいいな」

「ウサギは?」

「かわいいな」

「ラウラは?」

「とつてもかわいいな」

「私は?」

「かわいいな」

「……全部同じ表情だよ」

専用機持ちの一般人とは隔絶した世界を生きているシャルロットとは言え、思春期の女の子だ。自分だけにかわいいといって欲しい、そういうった思いも確かにあるのだ。

それが、このごろ特に強まっていた。彼の友達である鈴やセシリアや箒、のほほんさんや如月などに結構かわいいとかいうが、それすらにも一瞬嫉妬をしている。そんな自身が嫌だとも感じるようになっていた。

希は誰に対しても優しい、それに惹かれる面もあるが、それを自分

だけに向けて欲しいといった矛盾する気持ちがあった。

「意識的に動かさないようにしてるからね。それにしても、前に二人きりの時はシャルロットって呼んでとか言ったけど、皆シャルロットになったな」

「ばらしちゃったから仕方ないよね。……そ、そうだ！なら愛称をつけてよ！のほほんさんみたいに」

「分かった。シャルルー」

彼女はいつもおりむーやしみずーと言ってる。

「怒るよ？」

こうやってきつと返してくる頭の回転力はどうなっているのだろうかと考えてしまう。緊張すれば回転率は落ちるはずだがすぐに返してくる。

(緊張してないのかな……二人きりでも)

「ごめんなさい笑いを全力で取りたかっただけです」

「怒るよ？」

(も、もう！いつもこうやってからかって！)

頬を軽く膨らませて怒らすシャルロットに希はかなり緊張してるがおくびにも出さない。昨日一昨日と壮絶体験(彼からして)が彼をまた一歩先の地点へ進ませていた。

「で、そうだな……サンプルにシャル、でどう？」

「シャル……うん！いいよ！やったよ勝ったよ！」

「何に対して？……じゃあ、俺にもつけてくれ」

「のぞみー」

「分かってるー」

あはははと二人は笑いあって

「希は希でいいよ。希は、私の希望になってくれた。希望の希き、シャルとのぞみ、三文字だね。これ以上短く出来ないから」

「ああ、その通り」

「もしか、のぞみんとかのぞみくんとか、のっちゃん？」

「のぞみで頼む」

それが落ち着くと付け加えた。シャルロットは少しの沈黙の後、

「ねえ、シャルって言って」

「シャル」

「もつと心を込めて」

「シャル」

眼をやさしそうに緩め、語りかけるように言った。

(何でそんなに簡単に変えられるの!?)

「……ありがとうね」

「別にいいさ。……さて、アリーナ行こうか。まだ開いてるかな」

「ちよつとだけだと思う、動かせるのは」

「その分エネルギー配分考えないでいいから派手に動かせるな。……」

あ、そうだ。忘れてた。頼みがあったんだ。付き合ってくれ」

「えっ!？」

そう言うとき希は久しぶりに表情を大きく動かした。口をぱくぱくさせて

「あっ! いやちがつ! ラウラにだ!!」

「馬に蹴られて死んじやえ!」

「……ごめんなさい」

本当に彼は余裕がなかったのだ。言葉を忘れるぐらいには。

「とつ、ともかく! 今度一緒にお出かけね。指切りしようよ」

「はいはい」

小指を出して、触れ合った場所が赤みを帯びたような気がした。そして彼女がこう言った。

「指きりげんまん嘘ついたらクラスタ爆弾のーますっ♪指切った♪」

心底怖いと彼は思った。

二十一話 ショッピングモール

夕食の時間、食堂で。

(もうっ！一夏と同レベルだよアレは！)

先ほどのことをまだ微妙に怒っていた。高い場所から落ちた分痛くなる現象である。似たような効果としてはジャイアン映画効果(普段駄目な分映画との落差で褒められる)がある。しっかりと指切りして約束はしたが。

「どこか空いてるかな…あ、あれは」

見ると箒、セシリア、鈴の三人が必死に一つのテーブルを眺めていた。顔見知りばかり揃ってるので、張りつめた空気がありながらもそこに決めた。

「ここ、いい?」

「ああ、構わん」

「同じですわ」

「同じく」

シャルロットをちらりとも見ずに返事をした。三人の視線の方向を見ると、一夏とラウラが話しあっていた。

「やっぱり、希の全面サポートは恐ろしいわ」

「ISでも意外とサポートの方が上手いですわね。一対一より厄介ですわ」

「相手の気持ちになって考えれるからだろう」

「うん、本当にすごいんだ。希は」

そう言うと、鈴はガバツと思いついたように叫んだ。先ほどまでと打って変わった雰囲気である。それは剣呑な雰囲気ではなく、良い獲物を見つけたとか、年頃の女の子の表情であった。

「それでその希よ!シャルロット、二人で一ヶ月以上同棲してたんでしょ。何かあった?こよう、何か!」

「年頃の男女が性別を隠して二人きりで同棲生活、とても気になるな」「いつぐらいからバレていたのですか?」

「ってというかアイツ二人きりだとどうなるの?すつごく気になるんだ

けど。私の時は別に何も無いけど」

「わっ、そんな一気に言われても……」

そう言うのと三人はそれぞれで謝りながら微妙に楽しそうに

「では、いつぐらいにバレたのですか？」

「えっとね。バレてたのは最初からだっただけだけど、五日後の土曜日の午後だね。緑茶を用意して突然に言ってきたんだ。女だよな？って」

「それで、どうしたの？」

鈴がかなりワクワクしながら尋ねる。それに対してシャルロットは目を軽く瞑りながら

『別にどうこう言う趣味はない。俺の持論だが、人には人に話せない事の一つや二つある。そんなもって、話してもらえるにはその人からの信頼が必要だと思う』って」

「えっと……なぜ一字一句同じ感じですか？」

「希の事は何でも知ってるよ。鈴よりね」

こんな事を言っても仕方が無いと彼女は思ったが、どうしても自身こそがと彼女は示したかった。

「ちよっと。私と敵対する必要はないわよね？味方になれるはずよ」

鈴は軽く身を引いた。恐怖を覚えたのだ。他二人の視線がシャルロットを仲間にしようにするのと警戒の目を滲ませた。

「そ、そうだった、つい……で、その後ね、コルセットをとった姿で事情を説明したんだ。でも全部予測済みだったみたいで、驚かれはしなかったよ」

自分の出自とかも予測してたみたいと付け加えた。それに三人は

「あいかわらずアイツの思考力は何なのだ？」

いつもツンデレしているからこそその意見である。

「アイツは本の知識とか、周りの環境を見渡して直感的に判断するのよ。論理的積み重ねでもあるけど同時に直感頼り。相変わらずキレるわね」

「うん……その後ね、この状況になった原因の人に対して怒りも見せてくれたんだ。そしてここにいればいいよ、って言ってくれたんだ。

嬉しかったなあ」

「つく！アイツも言うわね！やっぱり一夏の次ぐくらいにいい男だけあるわ」

「えっ？鈴さんはそうした目で見ていますか？」

まあ驚き！みたいに口を手に当てて驚いた。鈴は違うわよと前置きをして

「見てないわ。多分だけど。でも、何だかんだで一番世話になってるのは私だろうし。しゃくけどね」

しかし、それに対してシャルロットが張りあうように

「僕、だよ。僕が一番世話をしてもらったんだ。居場所も作ってくれた。色がなかった世界がある世界になったんだ。すっごく、感謝してる」

「希……シャルロットに一体何したのよ……それで、脈はありそうなの？」

水を飲んでいたがシャルロットはむせた。

「ゲホッ！ゲホッ！……な、なんのことかなー」

「一夏じゃあるまいし。気づいてるわよ。って言うか、ここまで言うっておいてシラを切れるはず無いじゃない」

「正直、前は同性愛者かと思ってしまいました……」

「当然気付いている。分かりやすいな」

「……分かりやすいかな？」

「……とても」

むしろここまで言ってもバレてないと思うのはどうだろうか。所々抜けているシャルロットらしいといえはらしかった。彼女はため息をついた。だが気持ちを持ち直す。バレているなら開き直ったほうがいい。彼女らは一夏を狙っているので敵対はしていない。むしろ仲間になれるのだ。

「僕も分からないんだ。二人きりの時は私とかにしたり、愛称で呼んでとか言っただけ……。まさか、希も一夏並に鈍感ってことは無いよね？中学校の時どうだった？」

鈴は水を飲みながら唸らせ、目を宙に泳がせながら軽く口を開いて

「正直、彼女は作ってないわね。一夏が人気を全部取ってたし。中三は知らないけど。でも、昔からアイツは赤面とかもしなかったし。そりゃ恋愛感情もあるにはあるんですけど、正直まだ楽しく遊んだ方が楽しくていい、って思ってたそうだし。……あ、でも恋愛感覚に關してちよつと知ってるわ」

「教えて!!」

ガバツと身を乗り出す。鈴は傍から見たら自分たちもこうなのだろうか、そう思いながら

「えつと、一人を好きになつたらその人とずつと歩めたらいい。楽しく、幸せに、飽きないですつといわれたらいいな。とかだっけ。他にも前に不倫のニュースもやってたじゃない?あの発言もこの言葉にピッタリでしょ。一人をずつと好きでいたいってことだと思うけど」
「じゃあ、まさかもういるのかな……脈はないのかな……」

一気にテンションが下がるシャルロット。今朝の夢が夢だけに落差が大きかった。三人は大慌てで慰めようとする。

「希にはいないって!一夏とかからも彼女が出来たとか伝わってないし!」

「それに高校生になって出来たとしても、ここは全寮制の学校だ。すぐに広まるに決まってる」

「そのとおりですわ。ですから……あつ」

いけないことに気付いたようにセシリアは口を当てた。あつ、という発言は時に大変だ!とか言うよりよっぽど重くのしかかる時がある。この時はまさにそれだった。

「どうしたのよ?」

「えつと……低い確率ですが、希さんのこと全く知らない点があるのです。その、一週間ごとに企業に出向いているようですが……確か師匠と呼んでた人が美人だったかと」

と言うよりIS乗りは驚異的確率で美人だけである。スポーツ雑誌の売り上げでISの売り上げ(選手)は全世界で大盛況である。刷れば刷るだけ売り切れる。

「確率的に低いわね。でもその一日だけ、希の行動が全く分からない

のね。確かに……」

「まさか……その時に逢引きをしてるのでは」

「堅物に見えて意外と、とはあるものだ」

三人はだんだんと調子をあげ始めた。女子三人集まれば姦しいとやらである。才女も何も関係は無かった。

「I Sの訓練中でも希って女子を全く見ないものね」

「ああ、同性愛者かと思ったこともある」

「ですが、恋人がいるなら納得ですわ。特にあんな美人さんが恋人なら同年代の女子には目を向けないでしょうし」

うんうん、と三人が頷いたが、直後に気付いた。慰めるつもりだったがいつの間にか追い打ちをかけていた。しかも徹底的に追撃して復帰する機会すら奪っている。何を言ってるか分からねーと思うがいつの間にか進んでたと三人はにたようなことを思った。希に次第に感化されているのに気づいて危ないと思ったが今は目の前の方がよっぽど危ない。

シャルロットの笑顔がカラカラである。そして目が虚ろになっている。霊感がある人間なら頭から抜けていく魂が見えてもおかしくないレベルであった。

「そ、そうだよね……僕なんかじゃ釣り合わないよね……よくよく考えたら、希に対して特に何かしてあげれた訳じゃないし。助けられたのは僕だけで、希を助けた事なんてないもんね。しょうがないよね。希は何でも出来て、誰でも助けられるけど。僕はだれだって救ったことないし。こんなの駄目だよね、あはは、あはははは」

壊れた人形を見ているようだった。三人はすぐさま

「(どうすればいいのだ!?)」

「(セシリアが余計な事思いつくからでしょうが!どうにかしなさい!)」

「(他人になすりつけないでください!会話に乗ったのは皆さん同じですわ!)」

「(しょうがないわ、最終手段よ。希を呼び出せば解決よ!)」

鈴の希に対しての信頼は高い。どんな時でも希を頼ればどうにか

なってきたからだ。困った時には考える前に希にレツツゴーが信条である。一夏も大体同様である。さすがに大事な事を最初から頼りにしに行きはしないが。

「(それだ！(ですわ！)」

周りを見渡すと噂をすれば何とやら、ちようどやってきたのが見えた。

「希！こっち来て!!」

「ん？どうした……ってシャル!?大丈夫か!?一体だれがこんなことをしたんだ!?!」

「あんたよ」

「お前だ」

「あなたですわ」

三人が同時に発言した。責任転嫁もいい所である。

「な、なんてことだ、俺がそんな……ってんなわけあるか！お前らだろうが！……どうした、この三人に何か言われたのか？」

シャルロットは少し目に輝きを取り戻して

「ねえ、希って恋人いるの？」

涙眼十目遣い十庇護欲をそそる声で言われたので、うっと言葉を詰まらせたが

「いないよ、彼女いない歴〓年齢だ。一夏がいるから全部出会は取られてるよ。一夏の周りにいるとアホみたいに美女や美少女に出会うのにな」

「本当？」

「こういっただので嘘はつかんって。それより一緒にご飯食べていいか？一緒に食べてくれるのはシャルぐらいしかいないんだ」

「……うんっ、もちろん！」

三人はいつもと同じように笑ったシャルロットを見て安心して息をついた。だが希は三人を軽く睨みつけ、

「おいお前ら、シャルを無暗に悲しませたら、怒るぞ？」

「二はいい、気をつけます」

「よろしい。じゃ、食事とってくるわ」

希を見送った後、四人は顔を見合わせた。

「ねえ、今のって……」

「シャルを悲しませたら、怒るぞ？ですって！」

「まさかこれは……」

「長い付き合いだけど、あんなセリフは中々聞かないわ」

四人は一齐に手のひらをパシンと合わせた。三人は結果オーライですごく安心した。

「こちら、ブラボー、聞こえるか」

「すぐ下にいるんだから聞こえるよ。それにしても、企業に行くんじゃないかったの？」

意外にも冷淡だった。乗ってくれるかと思っただのに。

「今日は休みにしてもらった。それに、妹のデートを見て後から話の種にするのが兄貴の務めだ」

「……帰っていい？」

すごく冷たい目を向けてきた。正直背筋が凍るかと思った。エターナルフォース以下略。

「ごめんなさい。で……何でそんな不満そうなの？」

「……何でもない」

それはおかしい。あ、ちなみにシャルの服装は似合う半袖のホワイト・ブラウス。その下はスカートと同じライトグレーのタンクトップで、ふわりとしたティアードスカート。正直、すごくかわいい。もし鈴とかがこうした可愛い恰好してきたのなら、かわいいねと言えるんだけど、何というか、言えない。何というか気恥ずかしい感じがする。しかもとても。

「ねえ、せっかくこうやって付き合ってるんだから、お願い聞いてくれる？」

「内容によるけど、何？」

「手を繋いでくれないかな？」

……正直、キツイ。色々な意味できつい。嬉しいとは思うけど、どうすればいい？一夏ならいいよ、とか言って終了だが、俺はそんなト

ンチンカンではない。こういった時は一夏並の鈍感さがうらやましいわ。

「……分かった」

すつ、とこちらから伸ばし手をとる。何というか、とても柔らかく、吸いつかれそうである。というか魅力で吸い付いてしまう。離れたくないと思ってしまう魔性の手だ。恐ろしい。もう、何というか、恐ろしいと言えない。魅力の魔法でも使えるのかシャルは。

「じゃ、行こうか」

手を引つ張つて動こうとしたら、二人があらわれた。

「何やってんの？お二人さん？」

どうせストーリーカーだが。相変わらずいい根性してる。こいつらの根性を見習いたいわ。真面目に。

「ギクツ！」

そう声に出すと二人が慌てるが

「奇遇ね」

「珍しい事もあるものですわ」

いやその理屈はおかしい。そんな目を逸らしながら言っても……。どんな嘘でも相手の眼を見るのは基本だぞ？いつも真面目な生徒が先生の眼に合わせてしつかりはつきり言えば大体どんな嘘でも通るから。態度で示す事から始めよう。

「ま、居るとは思ったけどね。一夏をストーリーカーしに来たんだろ？邪魔して悪かった」

「断定しないでよ！言い方も悪いわ！一夏が他の女に手を出さないように見に来たのよ！」

それこそストーリーカーではなからうか。男女逆なら犯罪だな。いや、この状況でも犯罪か？男女逆だと痴漢とかは全くでないよね。女が男に痴漢とか。意外と理不尽であるか？うーむ、難しい。喜びそうなのもいっぱいいるだろうけど。下世話な話をすればイケメン、美女だったら問題ないってじっちゃんと言ってた（言っていない）。冤罪は完璧理不尽だが。

「はいはい、でもラウラの邪魔しないでね？ま、そりやお前たち二人を

痛めつけたのは怒ってるけど、ちゃんと謝らせるから」

「このごろ思うんですが、本当に兄みたいにしてますよね。ホームシックですか？聞く限り妹はいないはずだったと思うのですが……」
純粹に心配する目だが、むしろそれが俺の心を傷つけてるよ？

「純粹な子が少なくてね。ラウラは疑いを知らなくて可愛い。恋人とかにはほとんど考えられないけどね。ひとまず、乱入するならせめて午後ぐらいからにしてくれ。あまりに一夏がひどいなら許すけど」

「分かったわ。……その、邪魔してごめんね」

鈴がとても申し訳なきそうに謝った。まさか、勘違いしてるのか？
「二人とも引き続きデートをしていてください。邪魔をすいませんでした」

ですよね。そうした勘違いするよね。

「勘違いのようだが、ラウラを見守りに来たんだ」

「110番したほうがよさそうね。親友だからこそ通報しないといけないって思うのよ」

目が結構マジなんだけどどうしよう。すでに携帯を手に行っているのが余計に怖い。

「このごろ子供の誘拐事件が多いらしいですわ」

こつちも意外とマジだ。本気と冗談の比率が半々ぐらいと見るが、高いと見るべきかどうか。仮にも友達を通報する気が半分もあるってのは大きいと思うべきか？

「お前ら喧嘩売ってるなら買うぞ？全火力で」

「わっ、わっ、落ち着いて希！」

腕に抱きついてくるシャル。正直、これを狙ってやってない（と思う）のだから恐ろしい。だが生を経験した俺には確かにダメージは食らうがどうとでも……思いだしちゃうだろうが！

「だたのジョークだって。ひとまず、共同戦線だな」

「分かったわ」

「では行きましょう」

こうして奇妙なパーティーが結成された。

結構嫉妬の視線が飛んできたよ？男女両方ね。男からは美少女三人侍らせてると、女性からはこの子達の可愛さからかな？内容を知ればどうなるか知らないけど。

駅前のショッピングモールの二階。よく中学の頃に俺、一夏、鈴、弾で繰り出していた。懐かしさが心をよぎった。そして今、

「そっかラウラ！攻めるんだ！機体の色の黒のビキニを！ロリビキニも需要はある！」

大人のグラマスな女性こそ似合うという一般的共通感覚の逆を突いて攻めるロリビキニ。これは効果的になるはずだ。

「ねえ、さっきのは半分冗談だったんだけど、全部本気にしていい？」

完璧に目がマジだった。セシリアも同様である。

「これもジョークです。はい」

通報されてはたまらん。ちよつと本心は込めてあるけど、大きさに言いたくなる時もあるよね。隣のシャルを見る。ちよつと……ちよつと？けつこう目が怖い。さつきからちよつと気分が落ち込んでいて、それが追い打ちをかけたのだろうか。それより……もういいかな。

「……ラウラは問題ないな。もうコンプリートだし。後はお前らに任せるわ」

「え？どういこと？」

「一夏が馬鹿やったらしばいてくれ。ところでシャル」

「なに？」

怖い目つきを直して首をかしげる。そんな仕草がいちいちもう！

「確か、水着って買ってなかったよな？」

「うん、そうだけど……」

次の言葉を繰り出すのに、結構勇気を使った。ここまで勇気を出すのは久しぶりだ。無人機相手に突っ込む時よりためらった。

「日ごろお世話になってるからさ。水着、買うよ。そりゃ、シャルも給料はたくさんもらってるだろうけどさ。自分で買って、つてのもどうかと思うし。どう？」

そう言うとシャルはパアツと笑顔を見せてくれた。今まで見た中でも、屈指で華やかな笑顔。どの笑顔も可愛いけどね。怒ってる時は美しいと言うべきだけど。

「うん、嬉しいよーそれと……良かったら、希が選んで欲しいな。水着」

ハードル高いねそれ。……仕方ないよね。第一、それを嬉しがってる自分がいるんだし。

隣の鈴とセシリアを見た。

「頑張つてきなさいよ。私は、いつでもアンタの味方よ」

「しっかりエスコートをしてくださいね」

二人に笑顔で見送られた。

拳を握っていたのには二人は気付かなかった。彼女たちは意識していなかったのだろうが、鈍感男に大変な思いをしている傍ら、普通に男女の仲をやっている二人に無意識で嫉妬したのだろうか。

二十二話 ショッピングの続き

「これとかどうかな?」

何というか、シャルも女の子なんだって良く分かった。どこにでもいる、家の事で傷ついて、友達と楽しくおしゃべりして、ちよつとした事で照れたり慌てたりする、そんな普通の子なんだって。いつも戦闘の時、一瞬で状況判断をして最適な武器を高速切り替えラピッドスイッチしているも、水着を一瞬で選ぶことはできないようだ。女性のみ試着OKで、試着したらクリーニングするらしい。それで、今五着目である。

「黒はシャルって感じじゃないな。多分、白か黄、オレンジあたりかな。やっぱり」

そこで全部いいと思う、とか返すのはどうかと思うので一生懸命考えてそれぞれの感想を伝える。五着それぞれ違う感想を出すのは難しい。あ、正直言うとなんかいいね!もしくはとてもいいね!だけだね。黒も大人っぽくてOKだけど。それにしても全く、小論文とか書けと言われたらどんなものでも四百字なら十五分以下で書き切れる自信があるのに。正直、緊張感があつてなかなか難しい。ざつ、と水着を見て

「これとかどうかな?」

オレンジの水着で、セパレートとワンピースの中間みたいな水着だ。直感に近い。でもラファールから連想だと思う。

「うん、ちよつと待ってね」

水着なので比較的簡単に着替えれる。しかもシャルは着替えるのが早い。よって

「ど、どうかな……」

口をぽかんとあけてしまった。俺グツジョブと思った。それ以上にシャルグツジョブ。この世界は俺を待っていた。今世界は輝いている。

「あ、ああ、似合ってる。すつごく可愛いと思う。それでいいと思う」
気の利いた言葉はどこか飛んでいった。それしか言えない、と言うかそれだけ言えればいいんだと思うぐらいだ。

「そ、そうかな……じゃ、お願い」

「う、うん」

その後、水着を買うために移動しようとしたら

「そのあなた……ってあなたよー」

「ん？俺？」

振り向くと女性客が目についた。正直、超絶微妙に平均より可愛い方なんだろうけど、IS学園ではもっといっぱいいるしね。学校で一番の美少女レベルの人がゴロゴロいるんだから。ISは絶対顔面偏差値が高い奴をIS適正高くしている。実は前世が男な魂をISコアに入れてるのではないか？俺と一夏は女の魂という間違った仕様なだけで。前世がホモな魂を入れてるわけじゃないと信じたい。あー、でもそうとなるシャルには乗って欲しくないなー。つと逸れた。

「そうよ。その水着、片づけておいて」

ああ、なるほど。そういうことか。さて、

「じゃあ頑張つてね。シャル、行こうか」

「何言ってるの!?!あなたに言ってるのよ。全く、これだから男は。第一、あなた見るからに品が無いし」

一夏に比べたらね。平均はあるはずだ。多分ね。俺は信じているけど。自分が信じたところで他人の判断には関係ないが。とは言え、コイツに品が劣つてるとは微塵も思わないが。

「はいはい、勝手にどうぞ」

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場が分かってないみたいね。そりゃ、あなたみたいな学がなくて駄目人間そうなの――」

「取り消してください」

スツといつの間にかシャルが移動していた。正直、怖いです。このごろ勝手に命名したけど、シャルファイルド、周りの空気の雰囲気が一瞬で変わる。ただし、鈍い奴は気付かない。目の前の奴とか。

「な、何を言うの？あなた？」

あつ、微妙に気付いてた。

「希は品もあるし、学もあります。駄目人間なんかでもない。私だっ

て助けてくれた。誰よりも優しい人です。あなたみたいなのはどう
こう言われたくないです。希の事を全く知らないあなたに」

シャルって怒ると怖いんだよね。美人だから更に。しかも笑顔で
有無を言わさない。……ただ、あまり笑顔じゃなかった。知り合いか
どうかで笑顔かどうか変わるのか？真剣な顔で怒ってた。

「つち、自分の男ぐらい躡っておきなさいよ」

そうやって捨て台詞を掃いて逃げて行った。三流以下にありがち
なセリフである。一流の捨て台詞？今日はこれぐらいにしておこう
とか？このごろ使い古されてるよねそれ。

「ごめん、シャル。変なことに巻き込んで」

「別にいいよ。自分が我慢できなかつたんだから」

さつきとは違って、また笑っていた。

「それと、怒ってくれてうれしかった。ありがとう」

素直に伝えると、シャルは顔を赤くさせた。

「ほ、本当の事だから」

こつちも赤くなつたのかな、顔。

そうして気まずげに沈黙を保ちながら、移動している最中。精々数
十秒だったけどね。思わぬ人に出くわした。

「あつ、こんにちは千冬さん。山田先生」

「希か」

「清水くんですか」

と言ったと同時の事だ。試着室が開いた。

「え？」

「えっ？」

「ええっ？」

「えええっ？」

一夏が飛び出てきた。中には……ラウラがいた。

「ひとまず殴るわ」

「えっ、何それひでぶっ!？」

「何をしている、バカ者が……」

軽くしておいたから安心しろ。……直後に、山田先生の悲鳴がこだ

ました。

「え？ラウラを試着室に連れ込んだんじゃないの？知ってたけどね」

どうせハプニングだろう。でもこれは一夏が悪い（断定）。どこからどう見ても一夏が悪い（決定）。例えば天や月が許しても俺は決して許さない。

「なら何で殴った!」

だから一夏が悪いと。それと、俺じゃなくて警官とか警備員に見つかった場合は牢屋って事を考えると素晴らしくマシな方だと思うけどな。

「それでも殴らないといけなかったからだ。それでラウラ。選んでもらえた?」

「恥ずかしいのだが、選んでもらえたぞ」

顔を赤くしながら軽く笑顔で。うんかわいい。いい子である。

「うん、よしよし」

頭をよしよしとなでてあげた。ただ、いつもと違いシャルは険しい目つきをしていない。

ちなみに、どうして二人で試着室にいたのか？ラウラが説明してくれた。あの二人がISを潜伏モードにしていたのだ。ISはそれぞれ登録しておくとか細かい位置が分かるけど、無かったら大雑把な位置ぐらいしか分からない。学園を出てからISコアの気配が二つ消えて、それと軽く気配があつたので尾行されると気付き、とっさにこの中に……いやいやいや、何だそれ。攻めすぎだろう。

「それで、お二人さんは水着を選びに来たんですか?」

「そうです」

やっぱりね。けっこうな偶然だけど。さて、それより

「もうグダグダしてるしき。二人とも出てきたら?」

擬音を付けるならギクツだろう。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

出てくるタイミングを計れるって状況がもうアレだよ。一夏が何してたんだ？と聞いたら非難轟々された。理不尽には勝てないものである。無理を通せば道理が引つ込むとか何とか。さて、どうしようか。千冬さんは一夏と辛うじて二人暮らししてるし、あまりサービスしないでもいいか。臨海学校終わったら元に戻るって予定らしいけど。千冬さんもそこで折れたらしい。全く、これだからブラコンは。「希、あまり余計なことを考えるなよ?」

「すいません」

相変わらずである。さて、ともかくどうすればいいこの状況。ラウラを二人つきりにさせるべきか？千冬さんと一夏？大穴で山田先生と一夏……ねえわ。鈴とセシリアをラウラとセット?……どうするべきか。そうだな

「ラウラ、ちよつと」

「ん、なんだ?」

テクテクと寄ってくる。耳にこつそりと

「一夏と比較的近い位置にいる鈴とセシリア、仲直りしておくんだ。訓練に怪我は付き物だけど、わざとは良くない。それと、いい人たちだから。学べる所は学んで来い」

「むうっ……兄がそう言うなら」

その後、一夏に向かって少し真剣な顔をして

「ラウラと鈴とセシリアで仲直りしてほしいんだ。一夏、仲介してくれるか?」

「希がした方がいいんじゃないか?」

当然の判断だな。

「いつまでも兄頼りつてのもどうかと思うし。だから、頼む。何なら千冬さんの水着を選んだあとでもいいぞ?」

「お前、全く……」

山田先生はどうするべきか?

「山田先生は千冬さんを選んで欲しいんですか?」

「清水君!」

軽くジョーク（半分本気だけどね）を混ぜた。これであの集団で行動するか？千冬さんもあいつらの邪魔をするつもりはないだろう。水着を選んだら別れると思うが。ま、あとは自分たちでどうぞってところか。ここままでだな、お膳立ては。

「じゃ、行こうか」

「……希はすごいね」

繋いでる手をぎゅっと握って、

「一体どうしたの？いきなり」

「あの一瞬でもっともらしい理由を並べて一夏を皆と一緒にさせて。それでいてラウラと鈴とセシリアの仲直りもさせようとするし。誰も損をしないようにしているから。皆の事を気にかけていて、凄いなと思う」

「実際には人任せだよ。誇れるのは、あの中心にいる一夏だ」

皆が一夏といたがっているのだ。一夏を中心に、皆が幸せになれる。俺も一夏といて楽しいと思える。幸せかは微妙だが。みんな押し付けるだけがいいのだから、正直すごいも何も無い。心配りがあるか、どうかだ。むしろ、そんな自分を嫌になる面もある。全部肝心なところはいつも一夏に投げてきた。そんな自分は立派とは言えない。

「もう、いつも自分は大了なこと無いって思ってた。……希は、すごいよ。私は、そう思ってるから。いつだって」

「……うん、期待に添えるように頑張るよ」

それは、本心からだった。変わらないとな

追記 ラウラたちは仲直りしました。

千冬さんは黒水着。一夏が選んだ

ラウラのパジャマも無事選んだようです

最終的な勝率ラウラ6、鈴2、セシリア2 という感じだったらしい。話を一夏から客観的に聞く限り

「ねえ、この後に予定はある？」

「ううん、無いよ」

シヨップینگモール以外のレストランで食事を終えた後、外で軽く風に当たりながらどうしようかと頭を悩ませていた。本日の目的である水着選びも終わった。だがまだ午後がある。

「どうせなら、色々回らない?」

「希がいいなら、そうしたいな」

となると、決まりか。良かった良かった。

「分かった。……けどその前に、ちよつとお花摘みに行つて来る」

「もう、男の子なんだから普通に言えばいいのに」

「ただのジョークだよ」

「どうすればいい」

誰もいないトイレで鏡に向かってつぶやいた。あ、鏡に毎日お前は誰だつて言うと言うと狂うらしいね。……無駄な事考えて紛らわしたいよ。とつても紛らわしたい、けどそれは不誠実だ。

「本当に……」

もちろんシャルの事だ。一夏のような脳内お花畑じゃないんだから、自惚れじゃなければ、予想は多分当たつてる。それでいて、こうして一緒に午後行動しよ、とか期待を持たせて、最後に裏切れるわけが無い。それなら最初から拒絶する姿勢を見せるべきなんだ。

イヤだと思つてるわけじゃない。当たり前だ。理想的な女性を浮かべたら?と言つたら九割ぐらいシャルの要素入るはずだ。

容姿端麗、学力優秀、家事万能。

いつも笑っていて華やかだけど、怒る時は怖い。

誰にだつて気配りを見せるけど、自分にだけしか見せない面もある。

男を立てるけど強かで、追従するだけじゃなくて自分を持つてる。

シャルのいい所を言えと言われたら皆が十秒以下で複数答えられるだろうけど、欠点は?と聞かれたら五分考えて出てくるだろうか。俺は無理だった。七分後に自分で溜め込みすぎつてのが出ただけ。盲

目言うな。

文句をつける馬鹿はいないだろう。精々貧乳好きかどうか、黒髪がどうかで意見が別れるだけだ。もしくは一部のMな人たちがもつとSっぽい子をつてだけだ。かなりシャル怖いけどね。でも……中途半端な気持ちで答えてはいけないと思う。今まで彼女出来たことないし良く分らんけど。

ともかく、俺の気持ちも大体分かってる。無関心な相手には無関心だろう。自分を嫌う相手を嫌うようになるなら、その逆も然り。そうした受け身の想いでも確かにあるとは思うけど、一緒にいて一夏たちと違う、楽しいとかとは違う思い。幸せだとか、温かくなる気持ちは、シャルなのだ。

「ちゃんと、言わないとな」

頬をバシンと叩いた。気合を入れなおさないと。顔の表情が緩んできてる。シャルが凄いと思ってくれる自分でいないと、駄目だしっぴかりするんだ。

「希、どう思ってるんだろう……」

シャルロットは悩んでいた。今日のラウラを見守る、そうした話は実は口実ではないかと推理した。もしそうだとしたら脈が無い、と言う事はないはずと。だが

(この服、可愛いとかって言ってくれなかったな)

いつも仲がいい女子には平然と言っている。だが、その言葉をシャルロットにまだ出していいない。

(まさか、弁当とかのお礼気分なのかな)

貸しを作ったらきつちり返す人間だ、希は。だからそうなのではないかと。

(良く考えたら、希の内面、あまり知らないな。義理堅くて、優しくして、理想主義だけど現実も見ている。自分に自信を持つてるように見えるのに、結構卑下したり……)

これだけ知っていても良く知らないと言えるかは別として。こち

らでもひたすら思考をめぐらせていた。だがそこに

「やあ、お嬢さん一人？」

「俺たちと遊ばない？」

チャラチャラとした二人組みが沸いてきていた。当然である。街中に一人金髪美少女がいれば馬鹿は沸く。

「すいません、今、人を待っているのです」

当たり前障りの無い返し文句。しかし二人はめげない負けず嫌い。

「えー？いいじゃん、いいじゃん、遊びに行こうよ」

「外に車を駐めてるからさ。どこかパーツと遊びに行こうよ！フランス車のいいところいっぱい教えてあげるから！」

シャルロットにそれは自爆フラグ満載である。

「日本の公道で燃費の悪いフランス車ですか。ふうん」

二人組がたじろいだ。

(やんなっちゃうなあ……)

正直、シャルロットにとってこの二人はどうでも良かった。考えるとかそういうことすらする必要が無い。希が帰ってくるまでドキドキしながら待つ方がよっぽど重要だった。それでも二人は、作り笑顔でも脈ありと見たのか、手を伸ばそうとするが

「ギャンッ!?!」

同時にドゴツとした音が聞こえた。ハイキックが横腹に直撃していた。蹴りを食らわせた本人は全く罪悪感が無さそうだった。むしろ清々とした表情をしていた。

「全く、頭脳派とか言われてるけど、馬鹿か俺。シャルを残してたらこうなるわな」

(やっぱり希はすごい！王子様みたい！)

自分の方が蹴りが上手なのは棚に上げていた。いつでも乙女の思考回路は準備万端に都合がいい。

「相棒に何するんだ！」

一人が吹っ飛ばされた一人を抱え起こす。だが希は

「俺の彼女に何するんだ？殺されたいのか？」

事態は厄介事にシフトしつつあるが、シャルロットはそんなことお

構い無しだった。正直二人はシャツトアウトされていた。元々されてたが完璧に無視である。

(彼女!?! やった彼女!! 連れとか友達とかじゃなくて彼女だやった!)

考えるだけでなく、既に表情に嬉しさはあふれ出ていた。が、希は気付いていない。

「お前やるのか?」

吹っ飛ばされなかった男が希に近寄る。希は片手でシャルロットを下げ、対峙した。

(さりげなく僕を後ろに! やっぱりこうした気遣いがいいよね!)

「お前、けっこうチビだな」

「うっせ、気にしてるんだ」

希165cmに対し、男は185cm近くはあった。男は希とシャルロットを交互に見て、

「カーノジョ、何でこんなのと付き合ってるんだ? こんないかにも平凡みたいなのと。カーノジョならもつと上等な男を捕まえられるんじゃないか?」

「平凡上等だつづうの。御託はいい」

だが男はニヤニヤと言葉を続けた。

「こんなどこにでもいそうなボンクラとカーノジョが付き合ってるなんて。弱みでも握られてる? 弱みに付け込まれてるとか?」

そう言った瞬間、希の表情が変わった。表情なんて全く変わらないう、全く持つて動じないような希が、確かに怯えを見せた。それだけの事が今の会話にあったのだ。

「おい、本当かよ。冗談だったのに……俺、もしかして王子様?」

調子のいい表情でニヤニヤとした。希の豹変振りにシャルロットは二人組を意識に入れた。敵意を抱いて。二人に対して

「そんな事無い! 希は僕の居場所を作ってくれたし、助けてくれた! それ以上言うなら、僕があなたを倒す」

「おい、冗談はやめてくれよ」

それに対し、顔色が悪い希が平坦な声で、とてもものっぺりした、シャルロットが切れている時に近い声で

「そうだよ、シャル。シャルがこんなのに触れたら汚れがうつるだろう？」

「おい、お」

男が声をかけてきたが、希が上から被せた。

「いい加減にしろ。次の言葉を出したらぶん殴る。黙って立ち去るか、殴りかかって来い」

「上等」

男は殴りかかってきたが、希は腕を掴み、捻った。

「いででででっ!?!」

さらに、背中側から膝打ちを食らわせ、怯んだ瞬間にとどめとばかりに蹴り飛ばした。そしていつの間にか復活した相方が後ろから飛び掛ろうとしていた。

「のぞ」

が、振り向いたかと思うと顔面に拳を直撃させた。見えないはずの位置に。

「引っ込んでろ……ごめん、シャル。変な事巻き込んで」

「いや、元はと言えば僕が……」

「おい、テメエ!」

突き飛ばされた男が突っかかってくるが、

「次は、容赦しない」

その言葉で引っ込んだ。

「ねえ、希……大丈夫? さつきすごく体調悪そうだったけど」

「別に。ただ、食後に動いて調子が悪いってだけ」

いつものようになっていた。ひるんだあの顔は全く面に出てきていない。だが、何かが違うっていた。

「ほら、この先にゲームセンターがあるんだ。射撃って得意だろ? やらない?」

「……うん、得意だよ。希よりね」

「言うな。絶対勝ってやる!」

無理に元気に見せようとしている、そんな感じがしていた。本当に

些細な差、何もかも前と変わってないように見えていても。ただひとつ、とても大きく違っていた。

手を繋いでいなかったことが

夕方五時ごろ。二人はモノレールに乗ってIS学園に戻ろうとしていた。人は少ない。

「シャル、楽しかった？」

「うん。とつても。……希こそ、私といて楽しかった？」

「もちろんだつて」

「なら良かった」

そうやって二人は黙った。だがシャルロットは（どうして、手を繋いでくれなかったのかな）

あの男に絡まれてから、希は手を繋ごうとしなかった。どこことなく、距離が離れてしまったような気がした。

（今度見つけたらあの二人蜂の巣……じゃない、僕が悪いんだ。どうしたんだろ、嫌われる事しちゃったのかな）

だが、その原因は分からない。男が発言した時、弱みに付け込んだな、そう言っていた。その直後に表情が変わっていた。

（皆に相談してみようかな……）

「なあ、シャル」

「なつ、なに？」

一瞬声が上ずるが、元に戻る。

「その服……いや、何でもない」

（あれ、もしかして？）

「今の続きつてなに？」

「ごめん、言えないな。あははは」

そうやって、希は誤魔化しながら駅につき、そこで世間話をしながら寮で別れた。

(成功、だよな?)
シャルロットはそう思っていた。

主人公スペックとその他

二十二話時点

清水希（しみずのぞみ）

身長165cm 体重60kg 高校一年開始の四月で、体力測定は平均で8より上ぐらい、A判定。ただし、様々なトレーナーから適切なトレーニングを受けている

学力は優秀と言えるが、偏差値は54ぐらい。叩き上げればもっと伸びる。叩いた分だけある程度まで上がる人間

多趣味。ただし芸人・アイドルなどはあまり知らない、アニメなどの方がずっと詳しい

自分自身を表して「善人では無いけれど悪人でもなくて、良い人と思ってる」

自身の戦闘スキルはそれなりに頑張れば代表候補生中堅ぐらいになれるレベル。男女の肉体差もあるが。ISにのれる理由を最大限発揮した場合はさらに上を行く。戦闘は強いがスポーツなどのルールがあるものは大幅弱体化

戦闘方法 大火力による圧倒＋高速切り替えによる戦闘＋小手先騙しの武器を使う戦法＋先読みスキル（ISに乗れる理由の一部）。それ＋作中最高性能の機体の強さ

交友関係

一夏と鈴とは中学時代からの友達。中学時代話す知り合いは多くても家に招く招かれるの関係は少数。誰とでも仲良くなれるけど親しくなれないの典型。親しい相手はかなり気にかける

高校でも似た関係だが、男子の稀少さ＋活躍があるので全員よく話す友達レベルになっている。

箒・セシリアなどはかなり仲が良い

相手の表情や周りの状況を見て総合的に判断するのが得意。勘が良い

希のそれぞれの評価

一夏

中学生の頃からの親友。女運は良いのか悪いのか。けど聖人。地獄にだって連れて行くときは一夏。落ちるのは女難の最後に一夏だけと思っただけはいるが。女難以外は目指したい理想

鈴

中学生の頃からの親友。ただし、最初は違う。現在では異性とは殆ど認識していない。しっかりしてないと少し保護者意識がある。可愛い

千冬

いざとなったらこの人に。頼れる姉御。でも意外と普通の人。大人の中の大人。女の中の女。武士の中の武士。最強の最強
箒

剣術を習いたいなら彼女へ。料理だって教えてくれる。ツンデレ度が高いけど、どうにかなる。何となく一夏に一番近い？胸にメロン詰めてるのに凄いね

セシリア

その金髪ロール一番不思議。英国金髪ロール貴族が見れるなんてビックリ！誇りは高いけど実力もある、知識もある。勉強と狙撃はこの人へ。一番最初の頃の男性を見下している原因は……？でもやっぱりロール気になる

ラウラ

妹

シャルロット

秘密

希への評価

一夏

中学生の頃からの親友。困った時は希へ相談。女子が怒ったら希へ相談。すごいっ、なんでも解決！でも体だって張るときは張るし、漢気も見せる。誰にも優しくしても深入りはしない。でも困ってる時は助ける。尊敬している相手

鈴

中学の頃からの親友。最初はイジメの問題をやったりする善い奴

で、次第に親友。最終的には、べ、別にお兄ちゃんとか思っていないだからね！困った時はいつでも希へ！信頼の強さなら一夏と同等

千冬

善人ではないが間違いなく良い奴で、抜け目も無い。一夏が迷惑か
けていても、それを楽しみながらさばく普通と違った感性。不思議さ
を感じさせていても、実は一般人と似ているような……。まあ、良い
奴

箒

最初は一夏の友達程度、しかしその抜け目のない観察眼、空気を察
する能力、口数が多い時もあれば少ない時もあり、下品な発言を普段
しないがいざとなったら普通にする（メロン）。それでいて困ってい
たりする時は助けてくれるし、助言もくれる。だが肩入れはしすぎな
いで公平に。自分の立場を理解してしつかり努力しているし、腕も悪
くない。掴み所は無いけど間違いなく良い奴。一夏の親友だけある。
困った時は希に相談しよう

セシリア

無礼な発言を連発するかと思えばしつかり謝罪もする丁寧さ。誇
りもあるけど自制心もある。本当に困った時にも分かりやすく、しつ
かりと将来を見据えて解決策を教えてください（料理）、理論だけじゃ
なくて体も動かして男の強さを見せ付ける（大会一位）。一夏の事も
助言はくれるけどやっぱり公平なスタンスで。これが日本版紳士、武
士？ただ、金髪ロールをチラチラ見てるのが気になりますわ……。悩
んだ時は相談しましょう

ラウラ

兄、お兄ちゃん、兄上

シャルロット

秘密

二十三話 海

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中で女子が声を上げる。けど、正直それより気になつていた事があつた。

「久しぶりだな、希と隣つてのは」

「ああ、中三以来だな」

親友の希はいつも隣に来ようとしなが、今日は違つていた。俺と席を隣にと頼んできた。別に断る理由も無かつたから希が窓で俺が通路側に座つていた。ただ、後ろからの女子陣の視線が厳しい……と言うか、不安そうであつた。俺にもそうした視線を向けてほしい。

「希さん、一体どうしてですか」

通路を挟んで向こう側のセシリアが怒りとかそうしたのでなく、純粹な疑問で希に質問をしていた。

「兄よ。どうしたのだ？嫁の隣に座るとは珍しい」

セシリアの隣のラウラも心配していた。

「本当にそうだ。昨日変な物でも食べたのか？」

後ろの箒ですら純粹に心配していた。俺もたまには氣遣つてくれ。まあそれは置いといて、それより気になるのが

「希……どうしてなの？」

希の真後ろのシャルロットだった。落ち込んでいるような、怒っているような。その周囲も重苦しい雰囲気になつている。

「ごめん、ちよつと色々あつて」

ちよつとなのに色々とはおかしい。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ。それと清水、体調不良なら申し出ろ」

千冬姉も心配をしていた。すさまじい統率力を持つ千冬姉の言葉で全員が席に着いた。だが、俺は希の隣だ。立たなくても質問は出来る。

「なあ、本当にどうしたんだ？お前、落ち込んでるんだろ？」

「そんなわけ無いだろ。いつもどおり元気いっぱいアンパンマンだ」

いや、それはおかしい。いつものようにバレにくい嘘でなく、バレバレな嘘だ。何というか、これ希？そんな風に思ってしまう。いや、付き合いが長くないと分からないレベルの変化だけでも、それでもかなり落ち込んでいるような感じである。

「まあ、それならいいさ。どうしてもなら、頼ってくれ。いつも俺はお前に頼りっぱなしだから」

「……ああ」

見ていて不安になった。

「おかしい」

「おかしいですわ」

箒、セシリアはつぶやいた。昨日シャルロットが箒、セシリア、鈴、ラウラの四人を集めて言っていたのだ。

『希がね！昨日ラウラの尾行が終わった後、一緒に遊ばない？って言うってくれてね！』

その言葉から始まった体験談もといのろけ話。いい所あるじゃない希とか思ったのは五分まで。十分に飽きが出て二十分で気分がだれた。そして

『食事が終わった後希がトイレに行ってる時声をかけられてね。手を伸ばしてきた時、希が駆けつけて倒してくれてそのときになんて言っただと思う!?!』

『友達に手を出すな、じゃないの?』

ぐだーとしながら鈴が適当に答えた。

『それがね！俺の彼女に手を出すな、だって！彼女だよ彼女!!』

自分たちは上手く行ってないと言うのに（と言うかこの場でシャルロット以外全員ライバルかつ対象が超絶鈍感）ひたすら着実に進んでいるシャルロットの自慢話に正直軽く殺気を覚えていた。

『おお、さすが兄!』

ラウラを除いて。

『その後に二人をパパッと倒してかつこよかった!……でもね、その

時の男に言われたんだ。これが本題なんだけど』

本題にまで入るのにかかった時間は三十分ほどである。やつとかと三人は思った。ラウラは兄のかっこいい話を聞けて満足だった。

『男がね、弱みでも握られてる？弱みに付け込まれてる？って言った時に希の顔が、おびえたんだ。表情が一気に変わったんだ。そして、その後も態度が変でよそよそしくなったと言うか、避けられてるような……ねえ、分かる？』

期待は薄い。シャルロット以外全員脳筋派である。成績は優秀だが。思考が脳筋なのだ。

『正直、分からないわ』

『ですがシャルロットさんを嫌う理由は無いですわね』

『どうしてそんな奴の言葉で傷つくのだ？他人の言葉に耳を貸す兄ではあるまい』

『他人の言葉で傷つくのは凶星ぐらいだろう。だが、弱みに付け込んだ、これが凶星になるのか？希に対して？』

『弱みに付け込まれたことある？あんたたち』

『馬鹿を言わないでください』

『私の兄を侮辱するな』

『一夏が一緒にいる人間だ。私から判断してもだ。無いだろう』

『知ってるわよ。一番長い付き合いよ。私も精々酔豚を奢れとか言われたぐらいよ。ただのからかい、と言うかそうした後はいい情報だったりするためになることしてくれたし。っていうか、あれは私が負い目を感じないようにしてくれただけだろうし』

『となると、どういうことでしょう？』

『その前の言葉で凶星を付かれ、数秒耐えた後表情に出てきた、と言うのはどうだ？』

『シャルロット、直前のセリフを思い出せるか？』

『えっとね、チビとか平凡な奴、とか言われてたけど……』

『まあ、確かに背は低いと言わざるを得ないけどね。……伸び代はどうかしらね』

『ですが、平凡はないですわ』

『半年ほど前まで普通の中学生が、この環境に適応しているのだから』

『異常に思っていたのだ。戸惑ってもいいはずなのに学園への適応も早かったしな。思考回路がおかしいとはすぐ気付いたが』

『つて言うかそんなので傷つくわけないわよね。希が』

『ですわ』

『当然だ』

『だな』

『えつと、結論として?』

『『『分らない』』』』

キリツと決めたが役には立っていないかった。

『三人集まれば文殊の知恵だから、四人五人ならと思ったけど……ありがとうね、集まってもらって』

『いや、力になれなかった』

『お二人の仲が進むのが希さんへの恩返し、と思ったのですが』

『兄には世話になってるからな』

『もちろん私もね……じゃあ次は私たちから質問だけど、昨日それぞれ箒以外アクセサリー買ってもらったのよ』

『何だと!?!』

『全部同じわけではなくて――』

と言う状況だ。そして次の日、いつも女子陣に気を回して一夏の隣はとろうとしないが、違っていた。

(一体何があつたのだ……)

(軽く見てましたが、結構危ないのでは……)

二人は精々食あたりを隠しているレベルと思っていたが、もつと危なそうだと今更ながらに思った。

ちなみに、一夏は理不尽な暴力などには全くさらされていなかった。

「いかん、何かあるって言ってるのと同じだろ」

部屋の中でバスの中を思い出した。思考が全く回ってなかった。思考停止はいけない、俺の数少ない誇れる武器だ。

「落ち着け……落ち着け」

いつも通り、今からいつも通りになれば問題を解決した風に装う事は出来る。心の問題だったとか、考えたら推理に結論が出たとか。大丈夫、誤魔化せる。大丈夫だ。

「よし」

幸いに特別に一人部屋だった。落ち着く時間は十分にあつた。替えの下着や水着、タオルをリュックに入れて更衣室に向かった。そこで行くわした。一夏と箒に。シャルに会おうより助かった。だが

「そのウサミミ何なの？」

「えっと……東さんだと思う」

こいつが何を言ってるのかさっぱり分からないけど、ひとまず。

「保健室はすぐそこだ。気をつけてな」

熱でやられるのが早すぎだな、もしくは何かまずい物でも食ったのか？

「熱にやられてねえよ！……ちよつと待ってろ」

箒は待たずに行つたけど、一夏はえつちらほつちら。そして抜けた。ちよつとセシリアが来てスカートを覗いている最中……上空を見上げた。何か、来る。目の前にドーンとにんじんが突き刺さつた。そして

「あつはつはつは！引つかかったね、いっくん！」

——これが、篠ノ之束、世界を変えた稀代の天才。アメリカ大統領を知らない人でも、彼女を知らない人はいない。今ある最先端の科学技術基盤は彼女が構築した物が半数と言われている、その気になれば一人で人類の科学技術を1年で10年進めれる災害。直感的に分かった。彼女がああ天才だと。

「篠ノ之、束さん、ですか」

「やつほー、そうだよ。へー……君がいっくん以外でISに乗れる子か」

俺を見る目は、こう、実験動物を見る目？人を人として見ていないような……。

「どうして乗れるか分かります？」

「ナノサイズまで分解していいのなら多分ね」

多分、機体だけじゃなくて俺も含むよねそれ。

「遠慮します」

「と、ともかくお久しぶりです、束さん」

でもあまりもう興味は無い。いつもならハイテンションだったかもしれないが、でもさっさと後にした。

うーん、久しぶりだな。中学一年以来って所か。

「あつ、清水君だ！」

「あら、意外といい体つき」

「男代表でやって来てるからな。そんなひよろひよろは沽券に関わる。お前たちもいい体つきじゃん」

さつと言り返す。このタイミングが重要。そうすれば

「それセクハラだよ。それにしても、元気になったね」

元気になったねと返してくるはずだから。これ合わせて

「もちろん。問題が片付いてね。心の問題が。もう問題ない」

嘘だ、全く持つて解決していない。深刻化するばかり。それでも取り繕っておかないといけない。先延ばしにしなければならないと分かっている。

「清水くん、あとでビーチバレーしよ。織斑君も誘って」

「時間あればね」

砂浜に一步踏み出す。やはり、熱い。そこへちようど一夏と遭遇した。

「出遅れた。それで、予定あるか？」

「別に、気ままに行こうかって気分。泳ぎはするけどね」

「負けないぞ」

「一応、元水泳部だぞ？」

小学校時代は元水泳部である。水泳部で普通って訳ではないが遅

すぎるといわけでもなく、10人いたら7番目ぐらいの速さ。何でも大体こなすけど、水泳は苦手だ。企業にいたときにそれなりに訓練したけど、ほどほど上達はしたと思う。

「あつ、そうか……いや、お前水泳苦手だっただろ」

「バレちった。お前も学校の授業だけだろ？今なら追いつかれるはずだ」

家が忙しかった一夏は友達とプールとかは少なかったし。俺も少なかったけど。中学時代負けてはいたが企業で特訓したから互角でいけるはず。こいつはしばらく泳いでないし。

「じゃ、勝負だな」

気分を紛らわそうと勝負をしようとしたとき、そこへ

「い、ち、かゝゝゝ！」

鈴が一夏へダイレクトアタックツ！そしてすぐに肩車の体勢に。

「相変わらずいい運動神経だな」

「あんたも、いい体つきね。筋力は一夏より上じゃない？」

「中学校の部活の差はでかいな」

「あつ!?!何をしますの!?!」

セシリアがブルーのビキニでやって来た。腰のパレオがいいね。サンオイルを所持していた。見れば一発でどんな作戦か分かる。ひとまず

「口実のためにサンオイルじゃなくてもさ。日焼け止めでもいいだろ、持ってるから」

俺は使わないけど誰かに貸せるように。シャルと買い物に行ったときに買う事にした。いつの間にかバッグに入ってて幸運だった。気付かない間に入れといたんだろう。

「え、あ、はい。ありがとうございます」

「ん、どういうこと?……まあいいわ、ともかく、今は監視員と監視塔ごっこしてるの。また後ね」

「セシリア、鈴は海では戦力ダウンしちゃ――」

いらぬ事をいう癖は治したいなって思ってる。

「ぶっ飛ばすわよ……あ、元に戻ったの?」

「良かったですわ、結構心配してたんです」

「ああ、ごめんごめん。整理付いてね。それじゃ、泳いでくるわ。俺のバッグに入ってるから勝手にどうぞ」

「ありがとうございますわ」

「ちなみに、数人分あるからな、鈴」

「えっ？」

後ろで女子がわんさか集まるのを見ながら、さあ海に。

「やつほー、しみずー」

「のほほんさん、何で着ぐるみ？いや、すごい助かるけどね」

視線を逸らす意味でね。

「私がい、私だからー」

「あら意外と男らしい」

体つきはかなり女らしいけどね。

「褒めてる？」

「立派だよ」

「ありがとー、なでてー」

「はいはい」

小動物ってこんな感じだろうな。見てて和み、撫でて温かくて。傷ついた心を少しは癒してくれる。いくら撫でて愛でて抱きしめても、目の前の現実を解決出来ない所も残念なことと同じだ。小動物を撫でてれば問題が片つく世界が欲しい。そうすれば世界から戦争は消えるはず。

「じゃあねー」

手を振って別れた。和むわー。さて海を見渡すと……

「馬鹿か、鈴」

ISを展開。人命救助だからごちやごちや言われないはず。二人の所まで移動して、物理防御の黒盾ですくい上げる。

「一夏！鈴の状態は!？」

「大丈夫そうだ。そこまで水も吸い込んでない」

よかったよかった。

「全く、鈴。落ち着けつての」

「日焼け止め作戦に気がそがれてたのよ」

屈辱だわとでもいいたげに。

「へいへい」

精々数十秒で浜に到着した。同時に解除。

「体調は問題ないか？」

「無いけど……ちよつと休んでくるわ。それと、良ければいいけど、希、来てくれる？」

良ければ、つて事は多分来ても来なくてもいい、と言うか自分勝手なことだからバカンス最中に迷惑かけたくないという事。それでいて、一夏がらみ。

「へいへい、一夏、他の女子と遊んで来い」

「分かった。頼むぞ」

「OK」

一夏を見送りながら、別館に移動する。そして深刻そうかつ恥ずかしげに頬を染めて

「ねえ、一夏相手に意識させるつてどうすればいい？」

水着でモジモジしながらつても格別。

「難しいね。お前はまあ、その、アレだし。なおかつ小学校からさつきみたいにしてるんだろ。体を当てるつてのは秘儀でもあるが、効果は薄れやすい。一年ぶりつてのは少し効果を増大させてるけど。真正面から抱きつく、つてのはどうだ？」

「それ恥ずかしい」

顔を赤くする鈴可愛い。

「じゃあ、セシリアをパクろう。背中を日焼け止め塗つてとか言えばいいんだよ」

「でも、やっぱり恥ずかしいし……」

「あのな、たいして長くも生きてないけど思ってる事がある。何かを変えられることのできる人間がいるとすれば、その人はきつと大事な物を捨てる事が出来る人だ。超絶鈍感をも凌ぐ必要に迫られたのなら、羞恥心すら捨て去る事ができる人の事だ。何も捨てる事が出来ない人には何も変えることはできないだろう」

「あのね、アレと状況が全く違うし、色々だね。そのセリフに対して侮辱よそれ」

「ですよね、ガチシリアスなセリフをここまでアホみたいなセリフにするのはね。」

「まあ冗談で。羞恥心が無いとね、男から見たらね話にならない。ともかく、そうだな……一夏に触れられると、温かいの、体も心も。みたいな事を言いながら行けばいいよ」

「よくそんなセリフ簡単に思いつけるわね」

「むしろなんで思いつかない。アンタ天才じゃない！みたいな顔しないで。」

「複数の作品を混合して効果的そうなのを言うだけ。実際、試すとなれば難しいよな。銃口の先しか弾は飛ばないから、銃口を見れば弾はよければよいか。口では簡単だけど実際にやるとなるとかなり難しいだろうし「えっ、簡単じゃない」俺の知ってる鈴はどこ行った。他にも作戦はあるけど?」

「ちなみに、俺も一応は出来る。訓練で何度かやった。でもアレはねえ。あまりしたくはない。」

「教えて!」

「いい食いつきである。自信満々に胸を張って腕を伸ばして」

「一夏お兄ちゃんと言って来るんだ」

「ねえ、希お兄ちゃん。真面目にお話して欲しいな」

「萌えより恐怖を感じるお兄ちゃんはこれが初めてだ。頭に名前をつけるおをつける高等テクのお兄ちゃん呼びなのに。希にいとくでも恐怖を感じてたと思う。」

「へい、冗談。タオルを借りて一夏の頭を拭いてあげるとか。一夏がパラソルとかで休んだ瞬間もたれかかりに行くとか。そろそろ中学の時の話とかより、現在や未来についての話題を増やすべきだな。過去のアドバンテージもそろそろ捨てるべきだ。あと他に、今のうち夕食を隣で食べたいとか言っとけ。先んずれば即ち人を制し、後るれば即ち人の制する所となる。中国人ならこれぐらい覚えとけよ」

「全く、相変わらず恐ろしい奴ね」

「当人とは違うんだよ。当人は目の前のことでいっばいになるけど、傍観者は違う。視点が違う。ああ、そうだ。他にも昼助けてくれたお札にアーンしてやるとか言えばいいだろう。温泉上がりに卓球勝負で賭けしましよとか言えれば遊ぶ約束ついでにデートも行けるんじゃないか？常に二手三手四手先を考えろ。目の前の小さな勝利より、後の大きな勝利を取りに行け」

本当に、どこまでも口だけは立派だ。俺は。自分の問題を解決できてもいないのに。どうして鈴にこんな事を言えるのか。当人は目の前の事でいっばいってのはまさにその通りだ。前言ったけか、アドバイスってのは楽な物だつて。自分で動くわけじゃないから。

「本当に頼りになるわ。希は。ラウラじゃなくて私の味方をしない？そうすれば勝てると思うんだけど」

「ラウラは助言はしてるんだけどな。やっぱり兄に頼りきりより、自立させた方がいいかと悩んでてな。と言うか、何度も言うがかなり肩入れしてる。他の奴にも言うかもしれないからな、さっさと攻めて来い。つて言うか、俺の力を頼りにばつかしてるような奴が争奪戦で勝てはしないぞ」

とは言えそんな事思ってる奴ではない。鈴は。ちゃんと自分を持ってる。

「分かってるわよ。冗談。ただ、他の子に肩入れしすぎるのは止めてよ。でも、本当にありがとうね。じゃ！」

体力は復活したようで、砂浜に駆けて行った。全く、ラウラじゃないが、妹みみたいな気分である。

さて、そろそろこつちも楽しむか。気分を余計に紛らわしたくなつた。

二十四話 嵐の前触れ

砂浜に向かおうとすると目の前に突然ラウラが現れた。走って来ながらね。そして付け加えるなら顔を真っ赤にしながら。更に付け加えるとロリ黒ビキニ装着ですつごく可愛らしく。浜辺にいたら男が一分で五人ぐらい釣れるぐらいの可愛さね。つまりラウラはロリにて最強。

「ラウ」

「兄よ！この姿はどうだ!?かわいいか!?かわいいと言われたのだ!!」

すごい取り乱しながら現れた。当然答えは決まってる。

「うん可愛いよ。よしよし」

頭を撫でてやると少しは落ち着いたようだ。それでもまだまだ興奮しているようで、足をモジモジさせながら腕をぎゅっとして

「よ、よし……」

「ひとまず、今からいけるか?お前の祖国は電撃戦で勝利を多く収めた。最終的には負けたけどね。ともかく、それでも電撃戦が有効だったのは事実。だから、ひたすら攻めるんだ」

「む、むりだあ……恥ずかしい」

アレ何この可愛いのか?顔真っ赤にしてヒヤッフウ!俺の目にくるいは無かった!

「はいはい、じゃあ別館で少し落ち着いてきなさい。それでも無理そうなら攻めなくていいから。今日一日は確かに大きなポイントになるけど、勝負が完璧に決まるわけじゃない。電撃戦も重要だけど、長期にわたって作戦を練った方が有効でもある。可愛いと言われる事に少しずつ慣れていこう。体勢を整え、戦力を整えるんだ」

「わ、分かった、兄よ。さすが兄は説明が上手い。助かった。兄も楽しんできてくれ」

「はいはい」

ラウラに対しては軍事用語を混ぜるとかなり伝わりやすい。まあぶつちやけ、焦って可愛い姿を見せ付けるのが有効だろうけど。今は無理そうだ。裸で人の寝込みにやって来るのに、何とか基準はど

うなってるんだらうか。今度尋ねてみるか。さて、まだ一度も泳いでない。またもや歩いていくと……そろそろ足の裏が熱いんだけど。冷ませれない。

「おーい、希ー！ラウラが抜けて困ってるんだ」

見るとセシリアと一夏のほほんさんたち相手に勝負をしていた……のほほんさんは勝負をしているのか？突っ立ってるだけじゃないのか？まるで置物。

「へいへい。よろしく、二人。やるからにはあまり負けたくないな」

「あまりをつけないほうがよろしいですわ。その方が殿方らしいですわよ？」

ですよね、知ってる。でも付けるのが俺。俺にとってスポーツは勝ち負けよりもどれくらい楽しめるかの方が重要。負けても楽しめたならそれでいい。だからと言って、試合で負けて泣く人を馬鹿にしているわけじゃない。それだけ熱中できる物があるってのは、すごく羨ましいと同時に尊敬できる。

「さ、行くよ」

パンと打たれるボールを

「へい」

受け止め一夏に渡して

「さっ」

上にパンツとしてセシリアが

「とどめっー」

スパイク上手いね。さすがスナイパー狙った所に一直線。ですが一夏の視線は敵よりセシリアに釘付けですな。俺？こんな時は救いの女神なんだよ、のほほんさんが。男のケツの穴追っかけるよりいいよね。第一、セシリアの凶器は後ろからはあまり見えない。横にチラチラ跳ねてくるのが攻撃力高いんだけどね。尻自体も攻撃力高いけどね、何でこう攻撃力高いのが多いのか。

「どうしたのですか、一夏さん？」

「なっ、なんでもないぞ！なんでもない」

多分、昼間のバスでの俺はこんな感じだったんだらうな。何も無い

訳無い感じ。何も無いわけじゃないですと書いたのぼりを背負って歩き回ってるような。ツンデレがツンデレしてるぐらいに分かりやすかっただろう。

「変な一夏さんですわ」

「ま、まあ、夏だからな。熱も入ろうつてもものだ」

「サマーとサーマルをかけたいいのですわね」

あいかわらずくだらないギャグを……俺も考えたのがね。人のこ
と言えない。

「あ、そういえばセシリア、日焼け止めどうなった」

「そつ、それはその」

一夏も顔を赤くした。あれ？やばいこれ。地雷踏んだと分かったら落ち着いて対処しよう。無闇に足を上げるんじゃなくて、落ち着いて行こう。地雷は踏んでも足を上げなければ爆発しないらしい。最近のは知らないけど。

「希、駄目だよ！」

「わっ!?シャルツ!?!」

後ろから気配もなく現れないで……そして、シャルか。会いたいと同時に会いたくない相手。

「そ、そんなに驚かれてもこっちが驚いちゃうよ」

水着が、正直直視できない。いい意味でも、悪い意味でも、本当に悪い意味でも。

「ねえ、何でのほほんさんを向いてるの?」

俺の避難場所だからに決まってる。視線の避難場所ね。周りの女子は露出高い上に美人ばっかだし。スタイルいいのばっかだし。のほほんさんならその点ブレてないから安心。このごろ一夏を見て俺ホモ説が伸びだしてるからのほほんさんに向けないと。

「いろいろあつてね。さー、泳ぎに行こー」

「ちよつと希……何も、無いの?」

若干顔を赤くして、モジモジしながら言われると困る。今は、この事が負い目になってくるのだから。でも、面に出してはいけない……だからといって、単純に褒めていいのか?駄目だ、全く訳が分からない

くなってきた。考えがまとまらない。何をしたい？何をすべき？あいつらはいつもこんな風に考えがまとまらなかったのか？でも、気が付くと

「可愛いよ、とつても」

ついつい口を滑らせてしまった。これは、駄目だ。シャルは顔を染めながらも、にっこりと笑ってくれた。

「あ、ありがとう……その、一緒に遊ばない？」

「あ、うん……遊ぼう。やっぱり泳ぎ？」

「うん、そうしようかな」

そう言つて、自然と手を差し出して来る。それを、流されるように自然に手にとつてしまった。このままじゃ駄目だろ、俺。いつまで流されてるんだ。流されていいときもあるけど、これは違うだろ。

「じゃあ、行く」

「あ、ああ」

その笑顔は照りつける夏の太陽にも負けないうらい輝いていた。

「疲れたね」

「水の中はやっぱり疲れるな……と、一夏たちも終わったところか」

シャルと一緒に泳いだりしながら午前の時間を潰した。疲れたところで陸に上がると、一夏たちが続けてたビーチバレーも終わっていたところだ。

「お、お前たちもか？」

「ああ、一夏も来るか？」

「分かった。午後どうするつもりだ？」

「食後はあまり動きたくないから、午後は海岸を散歩しようかなって思ってる」

「私もだよ」

「へえ、じゃあ俺も希たちと――」

「はいはいはい、馬鹿言わないでね」

そう言いながら俺とシャルに目配せをした。……空気読んできます、頑張つてね！みたいな目されてもね。正直困るんだよね。

「鈴、大丈夫なのか？」

「もちろんよ、二人がすぐに助けしてくれたし。それで、あんた希と一緒に部屋なの？」

「いや、織斑先生の部屋だ」

周り一面凍りついた。シャルは除く。シャルには関係ない話題だ。

「俺の部屋にでも来るか？皆で遊べるだろ。夜はトランプだな」

「それいいな！さすが希！」

「だ、だよ。鬼の寝床に入らなくてもいいし」

「誰が鬼だ、誰が」

「織斑先生は鬼じゃないって。それ以上の……ジョークです」

一瞬厳しい眼を向けられたのでジョークと答えた。一夏に選んでもらった黒の水着を着ている。正直、とても似合っていて大人らしいと思うが、今の精神ではそこまで気にはならない。動いて跳ねてれば別かもしれないけど。それに午前中に大体慣れた。だってさ、シャル抱きついて来るんだもん。途中から感覚が世界を超越した気がする。あの時ならISで世界を狙えた。この世のすべてを理解できた気がする。気がするだけだけどね!!

「相変わらず綺麗ですね」

ひとまず心の底から思った事を伝えとく。

「その棒読みの声をどうにかしてから言うんだな、女を褒める時は」

ありや、そんなに棒読み？心の底から思ってるんだけどな。でもシャルに眼をやるとジト眼で見っていた。

「どうした？」

「私の時はすぐ言ってくれなかったのに……」

シャルはいつも攻撃力高いね。必死に話題を逸らす為に

「えっと、ごめん？それと一夏、鼻の下伸ばしてる」

「なっ!?!の、希？何を言ってるんだよ」

「冗談だっつうの。下手に慌てるよ疑惑が振りまかれてくぞ、常に堂々としてろ。織斑先生の貴重な自由時間のようだし、さっさと昼食にでも行こう」

「ふん、相変わらずの察しの良さだな」

まあね、これはかなり得意だ。何となくでだけど。でもシャルは軽くジツとこちらを見ていた。

「では、また後で」

「集合時間には遅れるなよ」

「はい」

他にもぞろぞろ生徒が戻ってくるのが見えた。だが、箒は見かけなかったな。無駄に大きい胸見せ付ければ一夏に対して攻撃に――

「希、他の女の子のことを考えるのは無粋じゃないかな?」

「ごめんなさい」

相変わらず、手は繋がれたままだった。

更衣室の前では別れたけどね。

楽しい時間は過ぎるものだ。早くね。午後七時半、おなががすく時間帯に大広間三つを繋げた大宴会場で、夕食をとっていた。

「うん、うまい! 昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

お前相変わらず飯ばっかだな。そんなにグルメ目指すのなら、学園で和食ばっかじゃなくて他のも食えばいいのに。

「IS学園って羽振りがいいよね」

「国営だしな。美味しいもの食べれりやあまり文句は言わないけど」

日本の国防を担うエリートを育てる機関だし。野郎ばっかなら文句が来るかもだが、所属してるのは美少女ばっかだし。男女差別甚だしい。

「そうよねー。やっぱり美味しいわ」

「私もどうも苦手で……」

ちなみに、シャル・俺・鈴・一夏・セシリアの順で並んでる。正面にはのほほんさんや如月がいる。

「あー、うまい。しかもこのわさび、本わさじじゃないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃねえぞ」

「本わさじ?」

日本語はぺらぺらでもその文化や食事まで良く知ってる外国人生

徒は少ない。シャルもその一人。日本語を日本人と同様レベルで高めるのは各国の才女でもかなり難しいからだ。英語とかと全く違うしね。どうしても文化面は大雑把になる。俺たちだつて中学時代英語はよく勉強はしてたけど、文化面とかは全く教えられなかったのと同じ。イギリスフランスドイツとかそこら辺の文化の違いが分からないとの同じだ。料理出されてどこの国の？つてやられてもわからないでしょ？

「今は普通の店屋だと練りわさびつてのを使うんだ。ワサビダイコンやセイヨウダイコンとかだっけな。着色したり味付けたり色々して本わさびに似せた物。でも、本わさびは山奥とかの清流で育てた植物の地下茎を擦って使うんだ。擦るのも鉄とかで擦るのもあるけど、最高級は鮫の皮膚を使う。確か、同重量なら十倍以上の値段差があったはず」

「希は本当に博識だね。じゃあ、これが本当のわさびなんだ」

博識ってほどではない。テレビを見てたりすれば一度ぐらい見かけるだろう。わさびは毎年一回ぐらい料理番組で見る食材だし。

「だね。山奥で取れる高級食材と新鮮な海産物とが食べれるって贅沢だよな。あ、でも技術も進歩してて練りわさびでも美味しいのが多いらしいな」

「そうなんだ。はむ」

……なぜわさびの山を食った？……そうだ、良く考えたら美味しいとかいっただけで味について何も言っていない！滅茶苦茶辛い事とか!!

「シャル！大丈夫か？ほら、水」

水を差し出ししながら背中をさする。ごほごほしながらも水を流し込んだ。

「だ、大丈夫……かな」

次は水でなく、冷えた緑茶を手渡す。一気に飲んだ後、

「ふ、風味があつていいね。お、おいしい……」

「涙眼で言われてもね。大丈夫？」

「この健気さには参るよ。」

「うん。ありがとう。こうやっていつもさりげなく助けてくれて、嬉

しいよ。本当に」

涙目になりながら、ニコツと笑ってくれた。……助けられて、か。助けちゃいない。むしろ追い討ちをかけたんだ。

「希？どうしたの」

「あ、なんでもない。昔を思い出しただけさ。わさびの本当の食べ方は刺身と一緒に食べるんだ。ただ、醤油とわさびを混ぜると醤油とわさびを作ってくれた人に対して無礼になるらしい」

「それは漫画だろ」

一夏がつつこんでくる。知ってたか。漫画で獲得した知識で覚えてたのはとことん記憶に残るよね。

「そういうこと。だから醤油を半分、その上にわさびをのせて食べるんだ」

「わ、分かった。落ち着いたら、試してみる」

だよ。今は余裕無さそうだし。

「もう、シャルロットったら。すっかり学んでおきなさいよ。そうしないと後に響いてくるでしょ？日本食材について知ってるのと知らないのじゃ」

「だ、だよ」

「料理研究部に入るんだっけ？」

「うん。自分だけじゃ限界が来るから」

「日本食の基本を学ぶか……学生にはきついよな」

そう言うとシャルと鈴は顔を合わせて

「まあ、ちよつと難しいわよね」

「かな」

刺身とかその他は学生で学べるだろうか。難しい。

「あつ、そうだ。一夏……その、昼間はありがと。希もありがとね」
「別にいいって」

「むしろミスしたかなって思ったぐらいだ」

あのまま二人泳がせた方が鈴的には良かったかな？ っいつい飛び出したけど失敗したと後から思った。でも鈴は微笑んで否定する。

「馬鹿ね。すごく嬉しかったわよ。と言うわけで、一夏、口開けなさ

い。刺身、食べさせてあげる」

「えっ、いいのか？」

「鈴さん、ずるいですわ！」

「私には頭脳が付いているのよ！負けはしないわ！」

ドヤ顔で胸を張った。胸張ってないセシリアのが高いが。この世の中は不公平。

「抗議しますわ！希さん！」

飛び火させないで欲しいな、あまり。

「分かった分かった。お前たち、あまり頼りすぎるなよ？今日は特別だけど」

ひたすら別のことで気を紛らわせたい。

「でも助けてくれるくせに。……はい、一夏、あーん」

「あーん……美味しい美味しい」

「良かったな、一夏」

鈴もここまで攻めるようになったとは。だが、予想外ツ！

「ほら、希。あんたも開けなさい」

「えっ？」

「そこまで意外に思わなくても……シャルロット、ちよつとごめんね」

「いいよ、中学生からの親友だもんね」

「じゃあその拳は……？はい、あーんしなさい」

全く、これだから。こいつらは。

「あーん……美味しい美味しい。でも、セシリアには助言するぞ」

「分かってるわよ」

良く分かっている事で。ま、長い付き合いだし。

「おい、一夏。せつかくの料理だ、鮮度が落ちたらもつたない。セシリアに食べさせてあげろよ。日本の文化を知ってもらうのにいい機会だろ」

「確かに刺身は日本の文化だな。セシリアがいいのなら」

「も、もちろんですわ！料理が痛んではシェフに申し訳ありませんものね！」

それに対して鈴が鳩が豆鉄砲食らったような表情をした。

「……えっと、そりや手助けするとは思ったけど、食べさせてあげた後、直後に？」

「それが嫌なら自分で俺を上回れ。っつーか昼間どれぐらい助言したかと……」

「そりやそうよね……ともかく、卓球する約束はつけたわ！」

「だからそれ俺の案……まあいいや」

一夏に対して攻勢を強めた二人を横目に見ながら食事を再開する、が。

「ねえねえ、希……あーん」

「あ、ありがとう。あーん……美味しいです」

「良かった。じゃあ、今度は僕にお願い」

無理です、とか言わせてくれないな。相変わらず。シャルは相手が否定できない空間を作れる力を持っている。そして、それに流されたがっている自分。

「了解。あーん」

「あーん……自分で食べるより、美味しく感じるよ」

その言葉を聞いてセシリアが真似をしてみたのが聞こえた。その後、千冬さんが登場し、静かにしろと触れを出した。が、シャルは「静かにするなら問題ないよ！」と言って何回か食べさせあっこをした。正直、周りの視線がちよつとアレでした。

二十五話 夜の密会。そして

「見てても楽しいね」
「だな」

一夏と鈴が卓球勝負をしていた。20点先取で19対19、負けたら駅前パフェ奢りという勝負。鈴にとっては勝っても負けてもよしやあという状況だが、負けず嫌いなので全力で勝ちに行ってる。一夏も全力で勝ちに行ってる。セシリアは悔しがってるが、次は私ですわ!とか言ってるきそうだ。アイデアってのはすぐにパクれるものだからね。技術とは違う。

「兄よ、私も卓球をやってみたいのだが」
「分かった、じゃあ練習してみようか。こうやって持って――」

パンパンと打ち合う。筋がいい様で少しずつ、確かに成長している。女子たちの声や、卓球の球の打ち合う音、それらが部屋を賑やかにしていた。

賑やかだけでも静かに、穏やかに、夜は過ぎて行った。

30分ぐらい遊んだ後、部屋に帰ってくる途中で。

「いい湯だったな」
「星も綺麗だったし」

光源こそあるものの、周り殆ど海+森という自然環境。けっこうな星空だった。

「希は昔から星が好きだよな」

「ああ。何というか、手で掴めば捕らえれそうなんだけど、届かない理想みたいな感じがして。単純に綺麗つてのも大きいけどさ」

それを言うと一瞬一夏は笑った。

「相変わらずだよな。じゃあ、後からお前の部屋に行くわ。その前に千冬姉にマッサージしないか提案してくる」

「あいよ。となると二十分後ぐらいだな」

あの人がマッサージを抜かすことはしないだろう。浴衣を着て風

呂上りの余韻……は消えていた。ゆっくり歩いて行って部屋を開けると

「お帰り」

「お帰りなさい」

「お帰（ry）」

「お（ry）」

10人ぐらいいるだろうか。正直、いっぱいいっぱいである。二人部屋を特別一人で使ってるのに。ただ、専用機持ちはない。9割ぐらいはけっこう会話する知り合い、というレベルの相手だ。あとはのほほんさんと弥生である。

「織斑君っていつごろ？」

「それなりに後だと思うよ。千冬さんにマッサージしてくるだって」

「じゃあゲームしようよ。ほらー、ツイスターゲーム」

「遠慮しとく。周り全員美少女ってのはとても魅力的だけどね」

「ははは、じゃあ大富豪行く？」

「俺の勝率に腰を抜かすなよ」

「ちよつと卑猥だよ？」

「それひどくない？さすがにさ」

あははと笑いながら進んでいく。これこそ日常だと思いながら。そして途中でボタンツとドアが開いて

「の、希さん！いい、一夏さんが織斑先生の部屋で!!」

「ただのマッサージだ耳年増。ここで待ってりや来る」

そう言う顔が真っ赤になると、一夏も来た。れながらしばらくすると、一夏も来た。

「あ、セシリアいたいた。じゃあマッサージ」

「……いつものアレでしたか、うすうす気付いてましたわ。おほほ」

「ん、どうした？ほら、うつぶせに」

ちよつどその時にまたもや扉が開いた。

「遅くなってごめんね、希」

「やつほー、遊びに来たわよ」

「兄よ。遊びに来たぞ。日本では学校で修学旅行に行ったならば、消

灯前はゲームをし、消灯後は夜通し好きな人間を告白しあうと聞いた。嫁について存分に語ろう」

間違っではないけれど、ラウラに知識植えつける奴は誰だ？ O H A N A S H I をしておきたい。いい部分もあるけど、悪い部分も教えている。

「あのね、この学校じゃ好きな人の話題は一番つまらない話題。みんな対象が一人だし」

「ぼ、僕は違……じゃなくて！」

そう言うのとセシリアをからかった女子がわんさか集まりだした。ご愁傷様。俺には来ても無駄と皆知ってるので来ない。

「一夏、セシリアの後にラウラと鈴は……行けなさそうだな。明日にでもやってくれるか？ 訓練いつも付き合ってもらってるだろ？」

「確かに。二人とも、明日マッサージしようか」

「えっ、いいの!?! じゃあお願い! 希、ありがとう」

「さすが兄だ! 嫁よ、頼む」

さりげなく言えばいいのに。全く。お返しに私もやってあげるといえば二倍お得なのに。コイツらは。……ああ、そっか。考えがまとまらないよな、このごろ体験していて身に染みてるけど。

「あ、シャルロットもどうだ? いつも世話に——」

「はいはい、シャルロットは希がマッサージするだって」

「そしてシャルロットは兄をマッサージするから問題ない」

だからお前らその眼を止める。

「そうか、なら問題ない……え、無いか? ……まあいいか。セシリア、始めるぞ」

「お、お願いしますわ」

そして始まったマッサージ。他の女子たちが私にもマッサージをと言ってきたが、正直キヤパシテイ的に限界である。第一、あまり接点が無いのでは適当な理由が思いつかない。一番最初、入学式直後の時に乗り遅れた時点で諦めてもらうしかなかったのだ。いけてのほんさんや弥生か。ひとまず、マッサージについては解決だが……声聞いててむずがゆいな。平気な顔を出来ているだろうか。

「よっしや、また一番！」

「僕がまた二番かあ」

「ふむ、二人は切るべきカードが見えているのか。さすがだ。二人とも1位の率が3割越えとは」

ちなみに、カードを全部綺麗に並べるのは素人である。右から順に強いカードとか並べて、一番右を切ったらそれ以上のカードは無いと宣言しているような物だから。

「希！コンピュータゲームじゃ勝てないけど、これで勝たせてもらおうわ！」

「俺より勝率上げてから言えや」

ちゃんと二位とかは取ってくるけど、俺には大体負けてる。自分で言うのもあれだけど、運は良い方だと思ってる。思ってるだけ。そう思った方がいい気分だしね。

「へいへい、頑張ってる。……それにしても、のほほんさん強いね」

「しみずーも」

大富豪をしながら将棋を練り広げてる。これが中々強い。のほほんさんはおちやらけてのろまに見えるけど、俺よりずっと成績は優秀で（クラスの8割以上は俺より圧倒的に優秀だけど。残りはスポーツ特待で勉強も出来る人で、俺よりそこそこ優秀）出来る人だ。

「あつ、希ってチエスできる？」

「出来るよ。他にも幾つかのボードゲーム出来るけど、オセロは苦手だな」

途中から面倒になって勘で打ち出すから。あの黒白は苦手だ。見ている本当にダンダン打ちたくなくなって来る。こう、一気にひっくり返せそうになると考えずにダーンって。

「後から一緒にやろうよ」

わいわいガヤガヤ、男子二人で後は女子だけど、それでも賑やかにやっていた。だがそのとき、現れた。ボタンというドアが開く音とともに。まあね、ドアじゃなかったら窓ぐらいしか入ってこれないし、その時はバリントツ！だ。

「ふむ、仲良くやってるな」

「千冬ねじゃなくて織斑先生？」

一夏の声に表情はあまり変わらない。こりや

「織斑せ……千冬さん？」

出席簿は無い。こりやオフか。その他色々な声が響く。だが手を振って

「別に構わん。ひとまず、一夏、もう一度風呂にでも行って来い。それと嵐、オルコット、ボーデヴィツヒ、希は部屋に來い。デュノアは來たければこい。ああ、そうだ。希、お前は篠ノ之を呼んでこい」
「了解しました」

えつと、通夜か何かだろうか。四人は千冬さんの前に座り込んで沈黙したまま固まっていた。シャルも萎縮はしているが、それだけである。

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

いつもの馬鹿騒ぎⅡIS大乱闘である、多分。

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

筥がビクツと震えた。ライオンの前の子犬と違ってこんな感じ。

「俺が適当に配りますね。冷蔵庫、開けて大丈夫ですか？」

「ああ、お前たちのも入ってる」

清涼飲料水を六人分取り出した。三ツ矢サイダーは俺のものだ。文句は言わせない。言ってくるならそれは戦争と同意義だ。全火力で相手をしよう。

「ほら、ラムネは筥、オレンジはシャル、スポドリは鈴、コーヒーはラウラ、紅茶はセシリア。これが一番公平だと思いがいいか？」

皆が大丈夫と返事したのを俺は三ツ矢サイダーを飲んだ。皆が飲んだのを確認して

「はい、千冬さん。これ」

「相変わらず気が利くな」

「一夏に散々付き合っただけね。気が利かなきゃ殺されます」

世間では気が利かない奴は迷惑な奴とか協調が無い奴だろうが、俺にとつちや敵と認識される。このごろはそこまでじゃないけどね。この学園の女子は自制心が強いのが多い。この場にいる連中を除く。まあね、それだけ一夏の事を好いてるって事だろうし、問題かかって思う一方いいなっても思う。本当に、一夏の事をそれだけ思ってるってことだから。

「本当に、迷惑をかけるな」

千冬さんはビールをいい音出しながら開け、ゴクリと飲んだ。全員が啞然としているが、俺は別に。三ツ矢サイダーを飲みながら

「千冬さん、これ一人一本で？」

「文句を言うな。全く、食事関係だと食欲だな」

今回はお菓子千円分は持ってきた。え？三百円まで？何それ美味しいの？

「楽しみです。はい、おつまみ。持ってきたんですよ。スルメで良かったですよ」

「ああ」

一袋渡すと上機嫌に受け取った。月百万以上給料をもらってるので痛くは無い。というかこの人もっともらってもよさそうなんだけど。この四倍ぐらいは。

「全く、おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

「硬いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ？」

「というわけ。千冬さんだって人間で、料理も出来――」

「それ以上は言うなよ？」

「ただのジョークです」

何かを誤魔化した時の魔法の言葉！ただのジョークです。これを使えば大丈夫。使いすぎには注意ね。それがどうしたも同様。

「希つて、織斑先生と仲いいんだね」

「まあね。一夏つて男友達少ないんだよね。俺もだけど」

「あー、そうね。よくよく考えたらあんた私たち以外と遊んでるのはあまり見なかったわ」

その通り。だから親密度が高い相手はしっかりサポートするようにしている。ちなみに、中学のとき良く遊んだ男子だと一夏、弾ぐらいか。それ以外は精々話をする知り合いって所か。

「というわけで結構親密だったから。で、一夏の最大のサポーターをやつてたからそりや親しくなるわ」

一番最初は軽く恐怖したけどね。目の前に世界最強がいるんだから。ISはそりやあ好きで試合をテレビとかで見まくった。この人間なのか？と疑問に思った。でも、一夏を育てた姉だ。そんな酷い人じゃないと思つたので結構友好的に関係が始まった。そして、普通の人なんだなと実感した。

「というわけだ。さて、前座はこれくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールを俺は手渡した。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

四人が顔を見合わせた。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですの」

「わたしは、腐れ縁なだけだし」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしただけです」

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「一言わなくていいです！」

アホじゃないかこの子達。それにしても、脅威の美少女率。あ、一人は少女じゃないけどね。さて、そろそろ素直になった奴じゃないと助言しないとも言つてふるいわけるか。二年までおままごとする

つもりは俺には無いし。俺も、明日までにはどうにかしないとな。さて、ともかくジョークでも言つとこう。何かやつておかないと暗黒面に行く一方だ。

「俺はやさしいところ、とかです」

手をぎゅつと握つて（へその下あたり）顔をうつむかせながら。

「お前は何を言っているんだ？」

そんな怪訝な目で見るの止めてよ。周りの皆も厳しい。

「へいへい、ジョークです。いや、優しい奴だとは思ってますがね。楽しい奴ですよ」

「僕もやさしいと思うな。誰にでも、だけど」

仕方ないよね、一夏はそういう奴だし。……なぜ俺を見ながら？

「で、ラウラは？ここでしつかり言わないと。勝負は逃がしちやいない」

そう言うのと覚悟を決めたように

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

「ちよつと千冬さん」

そこまで断定しなくてもいいでしょう。あいつは、強いと思う。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

つよいかねえと千冬さんがつぶやいた。

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

「気配りも男子限定で出来るし、一緒にいれば楽しい事がいっぱい起きる。いざつて時は超絶イケメンだし。正直、アレ以上の有料物件はまず無いな」

「というわけだ。あれと付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

四人がパツと見つめた。

「く、くれるんですか」

「やるかバカ。正直、希が女だったらくれてやっても良かったが」

おお、結構高評価。評価を下げる事をしてないし当然か？

「飛び火させるのは勘弁してくださいよ」

「それだけ評価しているという事だ。光栄に思え」

そりや光栄には思うけどね。三人の眼が厳しい。ラウラはキラキラした眼で見えてくるけど。

「気配りだつて出来て、ほぼ万能に何でもこなす。それでいてデュノアに色々してやってるようだし、他の女子にも一夏に対してアドバイスをしている。一夏だつてお前には助けられている。それでいて熱いところもある奴だ。このごろ以前より訓練に身が入ってるのは分かるぞ？どうしてかとは言わないが。無闇に一夏に暴力は振るったりしていいようだし。本当に、性別が逆だったらお前がもう付き合ってるんじゃないか？」

結構羞恥プレイ？

「まあそりや俺が女なら一夏を狙いますね。当たり前ですけど。俺の理想みたいな奴ですし。さっき言ったとおり女に対しての気配り以外は文句の付け所がないですし」

鈍感と言うか鈍感を超越した何か。でも、だからこそ聖人なんだよな。

「というわけだ。男に走らせたくないなら、しっかりと自分を磨けよ。バカども。奪う気持ちでな」

三本目のビールを手渡した。これで終わりかと思つたが

「ああ、そうだ。デュノア、希のどこをいいと思つた？」

「すいません急用が出来ましたっ！」

ダッシュして扉に向かう。だがこの場に敵は多い。

「逃がさないぞ」

無駄に強い握力で俺の袖を握つた。

「ここで終わらせませすわ」

足を掴まれた。

「あたし、あんたのこと親友つて思つてるの」

立ち塞がりながら拳を握り締めてまで言うか？

「兄よ。勝負は逃がしてはいけない」

さっきのセリフそのままかい。

「お前ら覚えてろよ……」

シャルは顔を赤くして、アワアワしながら

「えっと、やさしくて、頼りになつて、でもちよつと抜けていて。志は高くて努力しているけど、すっかり現実を見ていて。そんなところとかかな。でももつと別の理由で、理屈じゃないところで」

「うおおおおお」

筋力関係は勝っている！火事場の馬鹿力で女子を振り切り、外に飛び出た。

「ふん、ヘタレが。逃げおつて」

希が逃げた後、千冬はふんと鼻を鳴らした。

「それにしても、あいつにも出会いが来たのか。それでデユノア、希の奴と同棲していたようだが、どうだった？」

「織斑先生、酔っ払ってませんか？」

「酔っ払ってなどいない」

酔っ払いは皆そう言う。殺人犯が俺はやってないと言うのと同じぐらいに。五人はそう思った。

「えっと……言わなきゃ駄目ですか？」

『駄目』

他全員に否定されてしまった。

「途中まで聞いたんですが、いい所で中断されてしまつて」

「希が男女二人きりだとなるのか、結構興味あるのよ」

「えっと……あ、そうだった。織斑先生、希は織斑先生が私に女だつて気付いてるつて言つてましたけど、本当ですか？」

「さあな」

棒読みだった。しかも眼を逸らしていた。深く突っ込んではいけないと彼女らは理解した。

「そ、そうですか……一ヶ月ぐらい生活してましたけど、とくに何もありませんでした。残念ながら……」

「無駄に心配りが上手いから、何も起きなかったのだろうか？」

「えっと、はい。着替えを忘れて外に出ようと思つたら、扉から希が出て行くのが見えたり。転びそうになつたらちようど肩の部分二箇所

を触れて助けてくれたり。和食を持ってきてくれたと思ったら、箸
じやなくてフォークやスプーンも用意してたり。お互いに着替え
合ってるときもこつちを一度も向かないし。シャンプー取って欲し
いとかも無くて。僕の下着を間違えて見たりとかも……とにかくど
こも隙が無くて……。あつ！わざとやった訳じゃないよ!?ただ、本当
に何も無かったなって思ってた」

「何というか、一夏の真逆だな」

「察しが良すぎるのよ、アイツ。頭で判断する前に次の結果を反射で
理解してるみたい」

「アレは正直引きますわ。ISでの訓練の時もたまたまに恐ろしい動きで
回避しますし」

「言わなくても理解してくれるぞ、兄は」

四人が頷いた。

「アレは判断してるのか、勘なのか。良く分からんな」

千冬もであった。続けてシャルロットは

「あつ！でも一回だけ。男だつてばらす直前の日に、ある事があつて
泣いちやったんですけど……そのとき、抱きしめてくれたんです。抱
きしめるだけじゃなくて、腰に腕を回して頭も撫でてくれて！その
後、ベッドに寝かせてくれて！あの時、すっごく温かくて、いまでも
覚えてる。もう一度、抱きしめて欲しいなあ……」

夢見心地に思いを馳せるシャルロット。

「つくー！私も一夏とー！」

「希もやるわね……一夏がそうしてくれたらなあ」

「ずるいですわシャルロットさん！私もいつか、一夏さんと」

「さすが兄だ！嫁にいつか抱きしめてもらおう」

「ふむ、意外とやるな。希の奴」

女子たちの会話は千冬の前であったが意外に弾み、それなりに時間
を潰した。

二十六話 決別

「皆帰ったなあ」

夜も十時半を過ぎた。もう夜遅くの消灯間際なので、皆が帰っていった。先ほどまで賑やかだった分、今は静けさが際立っている。

「結局、何も進まなかったな」

もちろん、シャルに關することだ。このままずるずる引き延ばしてはいけないと思うと同時に、引き伸ばしたいとおもう自分がいる。でも、駄目だ。ラウラに勝負は決める時は決めないといけないと言っておいて、延ばしは出来ない。

「ああ、弱いな」

つぶやいたと同時に、扉がノックされた。控えめな、けれど響くノック。

「どうぞ」

何となく、予想はついてる。でも、それが一層重くのしかかる。

「こんばんは」

顔を覗かせたのはシャルだった。予想通りかつ、会いたいと同時に会いたくない相手。正直、今の状況はきつい。

「今日は、たのしかった？」

少し着慣れないのだろうか、少し崩れてはいたけれども浴衣姿が似合っていた。

「もちろん。周りいっぱい美少女の水着姿でね。至福だね」

「……私は、綺麗だった？」

「……もちろん」

そう答えると、少し頬を染めて微笑んでくれた。

「良かった」

この子はとてもいい子だ。前も言ったとおり容姿端麗、学力優秀、家事万能。文武両道とかそこら辺の言葉をいくつ並べても足りないぐらいに立派だ。鼻目かもしれないけど、あの一夏ハーレムの四人よりまた一歩抜けていると思ってる。数千万、数億人に一人の逸材だ。

それに対して俺は？頭も、体力も精々中の上、良くて上の下。才能を値にしたらこんなもんだ。努力してるから上の上近くにいるが、それもいつまで続くか。頭のキレこそそこらには負けない自信があるが、精々千人で一番かな？ってレベルだ。しかも、不安定で。多くはアニメや小説とかの知識から取捨選択で判断した物で、独創でない物も多い。

俺なんて、正直中ぐらいの才能……適正があれば、誰だって到達できる。

体力テストで平均8出すのも、軍隊生活をやれば大体の人がいける。おまけにトレーナーも付いてるし。同年代を見渡せば学年に全部10をとれるような奴もけっこういる。どんなスポーツもめっちゃくちや上手いような奴が。

学力だつてやらされれば伸びる。頭の発想やキレも育てれば伸びる。偏差値70とかの化け物には全く及ばない。

俺が一般的な高校生活をしてたら、発想がそれなりにあるそれ以外平均の人間だろう。まさに2〜3クラスに一人はいる人間だ。一つ二つの特技ぐらい、大体の人が持っている。裁縫なりピアノなりなんの特技の一つや二つを。

そんなのが、そんな人間が、シャルロットにつりあうのだろうか？

いや、こんなのは言い訳だ。俺はそんなに能力とかを求める人間じゃない。能力で多少釣り合わないとか考える事もあるけど、そこまですべてに悩む人間じゃない。そんな事で好きとかどうとかかなるとは思わないから。本当は、もつと別の理由が。能力とかじゃなくて、もつと重要な気持ちの問題が。目を逸らしたい別の理由があったんだ。

「……もう、どれぐらい経つのかな。最初に出会ってから」

「二ヶ月とちよつとぐらい、か。意外と短いな。同居してた時間の方が長い」

短いように思ったけど、一ヶ月近くも過ごしていたのだ。懐かしいと思うには早い、ちよつと前のこと。

「だね。でも、いつか同居してた時間の方が短くなるんだよね」

「三年もあるからな」

軽く沈黙した。何を言っているのか、分からない。こんな事になるのは、シャルロットだけだ。いいや、一応一夏や鈴とはあったけど、この種の沈黙じゃなかった。

「ねえ、座っていい？」

「……いいよ」

「お邪魔します」

テーブルの正面にゆつくりと腰を下ろした。そして数秒後、決心を固めたように

「希って、あまり恋愛って興味ないの？」

かなり深く来た。

「あつ、うん。ISがあるから、楽しみたいってのが本音かな。興味ないって言ったら嘘になるけど」

半分嘘で半分本音。そう言うと、シャルはいつも伸ばしてる背筋をさらに伸ばしながら、眼をしっかりと俺に向けて

「へー……学園内で、気になる子っているの？……ううん、卑怯だね。そうじゃなくて、なら、私はどう？鈴やセシリアやラウラや箒より。希の知ってる、どんな女の子たちよりも」

その瞳は、すっと、威圧してるわけでもないけれども、確かな重さを感じさせた。

「……正直に言うと、まあ、シャルの気持ちは自惚れじゃなければ、気付いてる。でも、ごめん」

そう、でも、駄目なんだ。

シャルはあの日、俺が女か？って尋ねた時より悲痛そうな顔をした。全てが終わったような、そんな。

「えっ……そ、そうだよね……僕じゃ……」

「違うんだ。俺が、俺じゃ釣り合わないんだ。俺なんて、せいぜいそこらにいる人間だ。でもシャルは――」

違う、本当は。能力とかじゃなくて。

「私は、希が誰かに劣ってるなんて考えた事もない。希は誰よりも賢くて、頼りになって、優しいよ」

真つ直ぐな目で、俺の目を射抜いた。だから、俺も真つ直ぐシャルロットの目を見た。そうしないといけないから。だから、本音を話す。とつても後ろめたかった事。俺が能力とかよりずっと大事だと思ってる、気持ちの問題を。

「違うんだ。優しくない。優しいなら、シャルをもっとどうにかしてやれたんだ。シャルが親だつて、本当の意味での友達だつて誰もいなかった出会ったばかりのころ、あの時から。あの時、俺が正体をバラしたならシャルに居場所はない、そうシャルは思っていたと思う。だから、シャルが俺をそう思うようになったのは、たまたまなんだ。俺じゃなくても良かった、なんなら一夏に任せればよかった。そして、その事に俺は気付いてたと思う」

「――希、怒るよ」

真剣な目だった。それでいて、拳を握っていた。ぎゅつと、力強く。今まで見た事無いほどに怒っている。それでも続けないといけない。今更、止まって引き伸ばせない。

今晚、ここで、決着を。

「事実だ。俺は、多分下心があつて、シャルが俺に好意を抱けばいいか思いながら、あんな言葉を投げかけたんだ。前に不良に言われて、考えないようにしていた事を考え出したんだ。相手の弱みに付け込んで、あの状況はまさにそうだったんだ。能力とかじゃなくて、心の問題だ」

ぬるま湯にはずっと浸つてたくなる。それと同じ、考えないようにしていた。目を背けていたんだ。シャルの弱みに付け込んだことをずっと無視してきたんだ。能力とかじゃなくて。

「俺はどんなときだって、自分の言葉を計算して、相手にとって自分を良く思われるようにしている、しちやうんだ。良い人間じゃない、優しくも無い、頼りになるけどそれは卑劣で卑怯なだけだ。だから、俺の事は無かった事にした方がいい。」

多分、そうだったんだ。あの状況でああした言葉を投げかければ、自分に好意をもたれると思いがらやっただ。だから

「ねえ、僕は希の邪魔になつてるの？それなら、言つてね。希の邪魔を

したいんじゃないなくて、役に立ちたいから。僕を助けてくれた希だからこそ、役に立って側にいたいのが、誰よりも希の傍で。これは、僕の本当の気持ちだから」

「邪魔だなんて思えない。むしろ、いないと周りをキョロキョロして探すぐらいだ。でも、だからこそ言う。」

俺なんかより、一夏の方がよっぽど優れてる。俺は平均的な人間だけど、一夏は違う。すっごく鈍感だけど、それは下心が無いからだし、誰かを守りたいっていう強い目的意識もある。俺より今こそ弱いけど、才能では足元に及ぶかどうか。それでいて努力は怠らない。朝もまじめに訓練してるところか、俺より頑張ってるぐらいだ。馬鹿なこと考えてるのも多いけど、正直、一夏はすごい奴だ」

こうやって話してる間、シャルは少し震えていた。だんだん、大きくなってる気もする。俺も、かもしれない。

「あのヒロインズ相手だって、シャル……シャルロットなら勝てるはずだ。だから」

俺はごくりと唾を飲み込んで。今までで、どんな時よりも勇気を出して、終わらせる言葉を投げかける。

「シャルロット、ごめん」

相手の目から背ける事は出来ない。自分は善い人間じゃないけど、良い人間ですらなくなってしまうってたけど……いや、違うか。善い人間どころか良い人間ですらなかったけれど。それでも、この話は真っ直ぐ伝えないといけない。最低限のケジメだ。

パシんツと、音が響いた。

「希の、馬鹿」

手を振りぬいたシャルロットの姿が見えた。目には涙が溜まっていた。ああ、嫌われたんだな。でも、これがシャルロットのためになるはずなんだ。

ドアが勢い良く開いて壁に当たった。閉まる音はしなくて、走り去る音が聞こえた。

「頬、痛いな」

今更に、頬に痛みを感じた。今まで色々いたかったことはある、柔

道とかやってたし軍隊訓練でも痛かったし。でも、それらよりずっと痛い。痛みのせいなのかな、両目から涙が流れていた。ここまで泣いたのは、いつ以来だろうか。そのままふらふら歩いて、布団にぼたりと倒れこんだ。

「希の、馬鹿っ！」

シャルロットは廊下をかけて、自分の部屋に飛び込んだ。中には既にラウラが居た。

「ふむ、遅かったな、シャルロ……どうしたんだ!？」

ラウラが慌てふためいた。シャルロットが大泣きして飛び込んできたのだから当然だ。

「ひぐつ、な、なんでもない……」

「いったい誰が泣かしたんだ!?!今すぐ襲撃だ!!」

武装を取り出そうと荷物を取りに行くが、シャルロットは

「だからっ!!何でもないってば!!」

「……分かった。だが」

ラウラはシャルロットに近寄って背伸びをし、シャルロットを抱きしめた。

「頭を撫でられると落ち着くだろう? 兄が少しだけしてくれた。だから、こうするといい」

「……ありがとうね、ラウラ」

その日、IS学園が卒業してまもなく、結婚式が行われた。一夏と、シャルロットのだ。

「希、ありがとうね。アドバイスしてくれて」

「別に良いさ」

他の四人の視線が痛かった。が、諦めてもらおう。精々奴らには償わないとな。

「希、ありがとう。おかげで最高の嫁さんが出来た」

「おいおい、まだだろ？一夏」

「ああ、だな。じゃあ、また後で」

一夏は先に行った。が、シャルロットは残っていた。

「ずっと昔の事……覚えてる？一年生の、合宿」

「……もちろん」

「あの時は、希の馬鹿って思ってた。今でも、思ってる。でも、私は今幸せ。だから、ありがとう。……でもね、希とこうなっただて、幸せだったと思う。それだけは、言っておくよ」

そう言つて一夏の後を追っていった。他の四人に向き直る。

「ラウラ、ごめんな」

「私の力不足だった、そういうことだ」

「ですが、気に食わないことがあります」

「お前、一年生のあの時、一体何をしたんだ？」

「正直、心臓が口から飛び出るかと思ったわ」

「……俺が、シャルロットを傷つけたんだ。それだけだ」

「はあっ!!……夢か……」

どうやら夢だったようだ。……正夢になるかもしれないが。

「気分悪いな、畜生」

いつもより遅めに動き出した。変な寝方をしたせいで、体の所々が痛かった。

「了解した。——全員注目!」

ハッ!?俺は何をしてた……ああ、覚えてる。何か束さんがやってきて色々騒動起こして。新型機体凄かったし、セシリアがボロクソにされててちよつと可哀想だった。箒と一夏には普通だったのに。日本人もどうでもいい、か。好きな人意外どうでもいいわけか。とは言え俺とは普通に会話したし。俺もある程度は興味あるのか?一応IS乗れるし。

俺は人一倍あるISの武器などをひたすら消化するため武器などの資料を読み込んでるところだった。ちなみに、誰かと会話をした覚えは殆どない。でも周りの状態ぐらいいは把握している。ただ、シャルロットだけは視線すら合わせていないと思う。というか、会わないように周りの状態を把握していたのか。気持ちの問題はよく覚えていない。ただ、出来事を覚えてるだけ。まるで機械。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館にもどれ。連絡があるまで各自室内待機する事。以上だ！」

周りがざわざわするが、これはさて、どういう事態だ。

「とつとに戻れ！以後、許可無く室外に出た者は我々で身柄を拘束する！いいな!!」

全員が慌てて戻る。さて俺も――

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、清水、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、^{フアン}鳳――それと、篠ノ之も来い」

やけに気合の入った返事が続いた。筈のである。

人のこと言えないが、大丈夫だろうか。

「では、現状を説明する」

宴会用の大座敷で専用機持ちと教師陣が集められた。大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

ふむ……色々あつて頭もボケてたが、一気に覚醒した。さつき呼ばれた時点で覚醒してなかったのは結構やばいと思ってる。周りを見ると、やはりそれなりに訓練されてるのか、一夏以外険しい顔つきだ。一夏はまあしようがない。でも鈴がこうなるとはね。……いや、違う。シャルロットは別のことで……俺のことだろうけど、そっちに悩ませてそうだった。自惚れ、だろうか。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通
過する事が分かった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達
により、我々がこの事態に対処する事になった。教員は学園の訓練機
を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機
持ちを担当してもらう」

ああ、なるほど。くっつきなくさい。ここから五十分後二キロ先？
持ってきた訓練機と専用機全員で包囲して撃ち落とすや戦力差1対
10超えるだろ。二乗して1対100。ランチエスター法則をあて
はめればこっちは損害0だ。そんでもって、ISが暴走？国の要が？

ISは今まで暴走なんてした事無い。IS自体がある程度意識を
持つてる（らしい）し、国の要をハック出来たりはしない。核兵器同
様に外部から独立されてる。IS開発関係者の出生などは全て厳格
に調べられてる。怪しい奴はISに触れる事すら出来はしない。だ
からと言ってこのタイミングで史上初のISの暴走が行われるか？

……一人だけ、出来るのに心当たりがある。さつきまでちようどい
た、史上最悪の天才が。ISの開発者がね。自分の関係者しか興味無
いらしい災害が。最初から爆弾を仕込むなんて、簡単じゃないか？

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」
多分、デモストレーションか？箒の。もしくはそれ以外で理由が？
千冬さんが出っ張れば戦闘に一分かからんはずなのに。脅されてる
のか？音速？巡航速度マッハ2？ISは通常でも時速800kmを
超えてる。包囲して撃ち落とすぐらいならいけるはずなのに。一度速
度の域をマッハ以下にまで落とせば十機で包囲すれば余裕のはずな
のに。

しょうがない、専用機持ちで突っ込めてのは確定のようだ。それに
しても、周りは異常に気付かないのか？仮にもプロがたくさんいるは
ずなのに。まさか、最悪東博士の精神兵器？それは邪推しすぎか。何
より、俺がかかってない理由が分からないし。となると、裏の事情で
もあるのか？IS学園に勤めれるような熟練IS乗りしか知らされ
てないような。

「ひとまず、詳細なスペックデータをください。それがないと話にな

らない」

最低限それが必要だ。戦わないといけないようだから。

「分かった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ」

なら暴走させるな……無理か。それは。運が悪かった、そうとしか言えない。たまたま近くにいた、それだけだろう。

「けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解」

データを受けとつて周りに転送。ざつと解説する。

「広域殲滅の特殊射撃型。俺より砲門が厄介で、オールレンジ攻撃可能だが、ブルーティアーズのように多角からの砲撃はしないらしい。ただ、攻撃と機動特化だから、恐らく防衛は白式以下と考えて良い。とは言え盾とかそれに類する物があれば話は別だけど。スペックはこの中でも最強に近い。特殊武装は厄介。接近戦しようとしても格闘性能が未知数」

「偵察は行えないのですか？」

チラツと千冬さんに視線を向ける。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度はマツハ2に近い。アプローチは一回が限界だろう」

「それと、注意すべき事もある。暴走、だ。ISのコアが軽くぶつ壊れて、出力が二倍、三倍って事態もありえる。さらに軍用IS。正直、いくらでもヤバイこと思いついてくる」

本当に、ヤバイ。死にはしない、とは思うが。絶対防衛があるし。

色々考えてる俺を、周りが怪訝……恐れ？ではないだろうけど、何か変な物を見る眼で見た。

「お前ら、どうした？」

「……希さんは、本当に半年前まで中学生でしたの？」

「当たり前だ。普通のな」

「希、可笑しいわよ。たったの一ヶ月、しかも基礎訓練だけでしょ、受けてたの。それで、誰よりも速く正確に理解して、問題を挙げて。前から頭がキレると思ってたけど、どう考えても。非常事態なのよ？」

今。なのはどうしてよ」

「お前が一年でここまで変わった方が驚きだ」

「兄よ、どうしてだ。軍人ではないのだろうか？一般人だったのだろうか？」

「本当に、知らない」

もしかしたら、ゲーム感覚なのかもしれない。自暴自棄、とは思わないが。非常事態になるほどこうなんだ。あの無人機が乱入してきた時も、真っ先に反応してた。あの時の感覚は今でも覚えてる。楽しいと思つて戦つた。ゲーム感覚で殺し合いを楽しんでる……いや、心のどこかで殺し合いだと思つてないから、ゲーム感覚なんだ。

「アプローチは一回が限度らしい。ひとまず、白式のエネルギー消費を抑える為高速機体が一人吊り下げ行動。その後ろを専用機持ちが縦深陣形で突撃。各個撃破にならないように、離れすぎず距離は1kmずつで。もしくは、半包围陣形で同時タイミングで攻撃。」

白式が特攻した場合の敵の反応は二つ。無視か、戦闘だ。戦闘になつたら即座に他のメンバーも参加。速度が落ちたのなら逃げられる事はまずない。無視されたら、後続メンバーが攻撃。突破されたら後は野となれ山となれ、としか」

「って俺がやるのかよ!?!」

「別にやれとは言わない。絶対防御があるとは言え、下手したら命に関わるだろうし。でも、お前はこんな時にやる奴なんだよな」

「……当たり前だ」

先ほどまでと違う意思を固めた表情になつた。しつかり自分の命を覚悟して言う言葉。さすが一夏だ。

「そこでっ！呼ばれて飛び出てパパパーン!!その作戦、ちよつと待ったなんだよ〜!」

「出たな元凶」

悪態を付きたくなつた。今は気分がとても悪い。人生で一番最悪だろうか。

「何か呟いたかな、清水くん」

「別に。どうぞ」

くるりんと飛び降りてきた。不思議……悪夢の国のアリスは。

「ちーちゃん、ちーちゃん。清水くんの作戦より、もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング!」

「……出て行け」

不愉快そうな千冬さんの声。いつもより、断然に。この人は、束博士がしたと思っているのか? だからさらに不機嫌とか。一夏がちよつと情報を漏らしたが、二人は親友らしい。今、二人の関係を見て、間違いなく親友だと言える。

「聞いて聞いて!ここは断然!紅椿の出番なんだよつ!」

「なに?」

「紅椿のスペックデータ見てみて!パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ!」

デモストレーションか?……普通に大会でやってもいいはずだけどな。そもそもデモストレーションじゃない?……全部憶測にすぎないか。もしくは疑心暗鬼か。

「俺のはインストールしてあるんで、いつでもいけます。どうぞ。ま、数がいるに越した事は無いですね」

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ!これでスピードはばっちり!」

おい、マジか。さすがだな。

「展開装甲?もう実用化してたんですか、さすが開発者ですね」
「おやおや、君は知ってるんだね?」

いつの間にか福音でなく紅椿のスペックデータが画面に映っていた。んー、別に秘密にしろって言われてるわけじゃないからいいか。どこの国も構想をしてないとかじゃなくて、着々開発しているからだろうな。秘密にしないでいい理由は。

「俺の機体は第二世代を第三世代、しかもそれぞれの使用者に合った様々な形態に引き上げるのをコンセプトにしてると同時に、後付武装の豊富さと適時特殊武装の第三・五世代を目指してる。そして、展開装甲による第四世代ISの開発も同時に開発してる。展開装甲はちよつと難航気味だけど、まだ試験的にやつと実用レベルって所」

周りのメンツを見るとポカンとしてた。まあね、日本が一步リードしてるって話だし。IS保有数が一番多いし、発祥国。あとロボット大国だからある程度当然。

「付け加えるなら、第四・五世代も狙っていて、展開装甲による万能機と同時に特殊パックと後付武装による特化仕様も狙ってる」

さっき言ったこの中で福音は最強に近いと言言葉。正直に言うと、この中で一番スペックが高いのは俺の大和だと思ってる。

ラファール以上の機動性と収納領域

打鉄以上の防御力と安定性

相手に合わせた特化仕様も狙える機能

企業のバックによる豊富な武装、それによる戦術

それでいてバランスの良さの安定性

これらを組み合わせた大和は最も使いやすく、強い。拡張パック無し
の素の機体性能は抜群に優れてる。

それに対して東博士は

「へー、結構頑張るんだね。もうちょっと本気出しちゃおうかな。ちなみに、白式の雪片式型に使用されてます。試しに私が突っ込んだ」

何でもないかのように言った。さすが。

「ほー、道理で」

やけに阿呆みみたいな性能だと思ってた。周りはえつとか言ってる。性能自体は大和のが上だけど、白式は第一形態からワンオフアビリティ使ってるし。

「でも今の所最弱第四世代ですね。火力高いので成長すれば最強って所でしょうが」

「ちーちゃんレベルになれば世界最強だよ。それで、うまくいったので紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしています。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ」

「麻雀でもしてきてください。……と、全身がですか。凄いですね、現行最強機体ですか」

世界に対してお披露目したくなる性能だな、普通の企業とかなら。

でも、どうしてだ？この人は関係者以外どうでもいいスタンスなのに、どうして世界から注目されたがる？……何か理由があるのでしょうか思えないけど。第一、467個しかISコアが無いのにどこからともなく一個持つてきた？467個は限界生産量じゃなくて、放出量だっただけか？実際にはもつと作れるってことで。何を考えても想像の域を出さないな。

「となると、攻撃・防御・機動に切り替え可能タイプですか？それを目指してるって博士が言っていましたけど」

「うん、そうだよ。君のところの博士って少しはやるようだね」

「束博士がいなければ世界で有名になってたのはあの人らしいです」

ISは作れないようだけど。

「へー……はにや？あれ？何でみんなお通夜みたいな顔してるの？誰か死んだ？変なの」

まっ、分からんでもない。多額の労力・資金・頭脳をつぎ込んでやっと第三世代初期に到達したばかりだが（ウチは除く）、束博士は一人で第四世代を正式使用にこぎつけている。これが、IS開発者か。アニメや漫画にありふれた表現だけど、まさに天才にして天災。

「束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ」

「さっきの言い方から思いましたが、やっぱり手を抜いてるんで？」

「暇つぶしでナノサイズのIS模型を作るぐらいにはね」

となると、やる気出せば二世代、三世代ぐらい抜けるのか。一人で世界制服余裕だな、こりゃ。そもそもISコア何て世の中に出さなきゃ世界征服出来てただろうし。そんな事に興味無いだらうけど。

二十七話 悪夢の国の福音

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすぐらいは夕食前だよー」

「朝飯より一日前ですか、時代を先駆けてますね」
「適当な軽口であわせる。」

「最速の女だからね！きみ、結構頭回るね。IS乗れるだけじゃないんだね」

「それが取り柄ですし」

「それにしてもアレだね。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

「束博士が自作自演をしたアレですね」

その瞬間、空気が凍った。正直、気が立っていて頭で色々考えたり自制する気分じゃない。イライラしているとこういった気分もあるよね。考えずに口からどんどん言いたくなるアレ。世に言う八つ当たりだろうか。

ちなみに驚くようなことじゃない。ずっと前から、ネットでこのような推測の話はあつたし、何となく、確信した。

「ついでに言えば白騎士が千冬さんですよ」

千冬さんを見ると眼を逸らした。これでもう100%ってところか。

「へー、しみずくん……いや、のぞみくんはどうしてそう思ったのかな？」

顔は笑ってるけど、目は笑ってない……？いや、笑ってるのか？ただ、先ほどまでの俺に向けられる視線と何か変わった気がした。実験動物からランクアップ程度？

「まず弾道ミサイルがハックされる、これはおかしい。各自でコンピュータが独立されてるはずなのにどうしてハックされる？束博士なら出来ますよね？小型の無人機忍ばせてハックするぐらい。ISの模型をナノサイズ分子サイズで作れるなら。当時でも」

そう、とつても分かりやすい理由。何かをするには技術が必要だ。

核ミサイルとかをハックするなど、出来ると考えられたのはこの人だけなのだ。そりゃ他にもいるのかもしれないけど、この人以外ISを作れるような人がいるとは思えない。

「ISを作ったのは束さんですし、それぐらい出来るはずだ。なおかつ、テスターが必要なら小さいところからの親友である千冬さんを選ぶと考えやすい。だから白騎士さんは千冬さんだ。体格もほぼ似ていたし。そして長く付き合ってたから他の人よりISを熟知していた。ISの戦闘力は搭乗時間に比例するとかよう言いますよね」

実際には当然違うけど。乗ってれば強くなるのは練習した時間が多い分強いのも同じぐらいに当然だ。

「へー、どうしてそんなことする必要があるのかな？」

「初期はIS冷遇されてましたよね。でも各国のミサイルを叩き落して、さらに戦闘機も叩き落せば力を見せ付けられる。そんでもってミサイル、いくらISが超高速で動けるとしても、日本列島全てを覆うのは不可能。当時でもせいぜいマツハ2なんだから。ミサイルを全て一箇所付近に落とそうとしたのも自演っぽい。アレらは全て、束博士がISを世界に知らしめる為に行った大規模なデモストレーション。現在ある情報が本当ならこれが真実で、もし何か隠蔽してるなら違った結果が見えるでしょう。あなたが興味ある人以外無関心なのに何でそんなことするか疑問ですけど……なーんてねっ！俺の口からでまかせの大妄想でしたー。てへぺろっ」

「だよー」

あははははと二人で笑いあった。十秒ほど笑いあった後

「じゃあ作戦立てましょうよ！IS開発者がいればちよちよいのちよいですねー」

「もちろんだよのぞみくん！」

「紅椿の調整はどれぐらいですか？」

「たったの七分なんだ！」

「あらお早い。ですがお高いんでしょう？」

「何とおまけでタダなのです！」

テンションがぶっ壊れたように作戦が計画されていった。他の人

は一切口を挟まなかった。

「希、高速戦闘ってどうやるんだ？」

「ハイパーセンサー使えばもうOK。それぐらい知っておけば問題ない」

「ぞつくばらんだなおい」

「普通のISと変わらんって。一瞬世界が遅くなるだけで、その後は同じ」

あつ、ちなみに。作戦は決まった。俺の追加ブースターがまだあるよ！とかノリで言ったら、じゃあもう一人プツシュだ！とか東博士が言っ

「ぼ、僕も作戦に参加だね」

シャルロットに決まった。第二世代ラファールには適合するものの、他の第三世代は無理だった為だ。まあ、大和の装備とかは第二世代を第三世代に引きあげるように特殊パックとかを作ったから第二世代にはほぼ全部適合する。もちろん、普通のブースターもそうした共通設計になってる。

よって音速戦闘が可能な俺、一夏、シャルロット、箒の四人で突撃となった。なぜか他の専用機持ちは待機になっていた。いつの間にか言いくるめられていたようだ。というか、なぜシャルロットを出したんだ？……さつき散々まずい事言っちゃったしなー、何かたくらんでくるのかなー。

「よろしくな、シャルロット」

シャル、とはもう呼べない。シャルロットは一瞬眼を逸らしたけど、いつものような笑顔に戻った……ように見えた。

「よろしく、ね」

「さて、一夏。注意は二つ、ブースターの燃料消費、相対速度の変化による射撃武器の攻撃力。これだけ覚えとけ」

「分かった。シンプルで分かりやすい」

これぐらいでちょうどいい。一夏に対しては。

「ちよつと、私も入れなさいよ」

「このセシリアオルコットが教えて差し上げますわ！」

「軍人である私も教えよう」

頼もしい仲間もいるし、大丈夫だろう。

「ねえ、希」

「なんだ？鈴」

作業をしながら鈴がぎこちなく聞いてきた。

「えつと、気のせいかもしれないけど……昨日何かあったの？」

ドクンツと心臓が跳ねた。それを表情に出しはしない。それで何気ない風に

「へー、どうして？」

理由を尋ねる。

「シャルロットがすごく落ち込んでるから。それで、何かあったの？」

「……別に。何もなかったよ」

勿論嘘だ。でも、これは俺の意地。かつこ悪い所を見せたくないし、心配させたくない俺の見栄。いつも俺は鈴の前では立派にやれた。一夏のことと相談に乗ってた。だから、そのまま返した。

「……アタシはアンタの味方って事は覚えておいてね。いつでもよ」

他の作業に移った鈴と入れ替わりで、次にラウラがやってきた。

「兄よ。その、昨日シャルロットが泣いていたのだが……心当たりはないだろうか？」

入れ替わりで聞いてくるね。さっきまでの俺はとても話しかけにくい雰囲気だったってのものもあるかもしれないけど。そうだな、ラウラにならないか。ラウラには見栄を張ってもな。

「俺が悪かった。駄目だったんだ。それだけだ。シャルロットを頼むな」

「兄よ……兄は私を助けてくれた。色々教えてくれた。私も二人を助けたいのだ」

見上げながら、その目には不安が宿っていた。

「ありがとな。でも、大丈夫。これは俺たちの問題だから。俺がどう

にかしなないといけない。本当に、ありがとう。その気持ちが嬉しいよ。ただ、シャルロットを気にかけてやってくれ」

頭を撫でて、次に作業に移るように促した。不安そうな目のまま、次に作業に移って行った。あの、この中で最も軍にかかわってる（軍に所属してるし）ラウラが、非常事態なのにここまで心配してくれている。嬉しいけど、申し訳ないな。それにしても、この変化は喜ぶべきだろうな。あの時のラウラに比べて、ずっと柔らかく、女の子っぽくなっている。

ラウラは成長している。鈴だって。

小学生の時、高校生を見て大人だなと誰もが思うだろう。でも、高校生になって思ってみると、変わってないなと思う。

今、まさにそうだ。

俺は、変わっただろうか。昔から、悪い人じゃないのだろうか。

時刻は十一時半。七月の空は晴れ渡っていた。一夏と箒が呼んでISを展開する。俺とシャルロットは無言で展開した。

直後に

「なあ、シャルロット。危なくなったら退避しろ」

「怒られたいのかな？」

怒ったような眼を向けてくる。

「怒られてもいいから。分かったな？」

「無理だよ」

えへへと、微笑をした。そして真剣な眼をして

「希の方こそ、危なくなったら逃げてね。僕の方がISの経験は長いし、訓練も多く受けてるから」

「イヤだね。ともあれどっちも逃げたくないようなので、叩き落とすしかないな」

「そうだね……ねえ、昨日のことなんだけど」

「さっきの事の方が重要じゃない？」

もちろん、東博士が自演云々というお話。でも首を振って

「その事は驚いたけど、あまり興味は無いよ。昨日の方が僕にとって
はよっぽど重要。ねえ、希は――」

「希、シャルロット。体調は大丈夫か。私たちは問題ない」

会話は箒に中断された。……箒の浮かれ具合が気になった。

「箒、注意しろよ」

「何を言うのだ？希」

「どうやら、本気で言ってるらしい。……ま、こいつも普通の女子中
学生？だったのだ。これぐらいの方が緊張感が消えていいかもしれ
ない。ちやうどそのとき、通信が入った。」

『全員、聞こえるか』

千冬さんの声。正直、司令官するより前線で指揮官するタイプだろ
うに。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける。そし
て、リーダーを清水に任命する。他三名は清水の判断で動け』

『えっ？シャルロットの方が経験は長いですよ？』

『そのデュノアを生かすにはお前が指揮をした方が良さだろう。腕が
上のデュノアが力を振るやすい』

「やっぱり？だね。他の理由としては多分、

『それと、お前が一番リーダー向きだ。目的は二つだ。福音の撃破と、
全員の生還だ』

「こういうことだ。俺が一番適役だ。」

「了解しました。全力を尽くします。全員、大丈夫か？」

それぞれ問題ないの返答が来た。そしてその後、プライベートチャ
ンネルが入った。

『どうも篠ノ之は浮かれているな』

「分かっています。いざという時はサポートをします」

『……最後に、お前自身も注意しろ』

「やっぱり？自分でも、危ないと思ってます」

他三人のリーダーとなった。他人の命もかかっている。だから遊び
感覚、ゲーム感覚は一気に縮小したが、無くなったわけじゃない。そ
れでも、一番リーダーがマシなのは俺なのだろうか。

表情を見るところ、次は一夏にプライベートチャンネルを使ったようだった。そして

『状況開始!』

同時に、俺たちは上昇した。

「アレだな」

ハイパーセンサーで確認。

「一夏!接触まで10秒!」

「了解!」

一夏と箒の後ろに俺、シャルロットと続いている。そのまま最大加速。一夏と箒は最大加速で、切った——と思っただけか数mの精度で避けた。なんつう、ふざけた機体だ。俺の機動特化パッケージの背中の八枚羽は慣性制御などその他複数の機能を持って姿勢制御に用いている。でも、こいつは頭部についてる一対の羽がそうになっているようだ。正直、機動性能は大和と同等、より下。防御力はこっちのが上か。間接の補助ブースターと背中の機動パッケージを用いればあれぐらい出来る、俺の師匠はやってた。俺にはまだまだ無理な機動だけど。正直、師匠クラスよりそこそこ下……世界クラス下位の相手と見たほうがいいのかもれない。

「一撃必殺は失敗した!一夏、なるべく体力を温存。箒は近接戦闘、シャルロットは中距離、俺は遠距離射撃。箒、エネルギー残量に気をつける、お前の機体が一番やばい。一夏は独自判断で攻撃に移れ。ただし、箒のエネルギーが100切ったらお前がメインだ。誰か一人でも負傷したら即撤退。そのときは一番エネルギーが多いであろう俺が殿を務める」

「了解!」

同時に全員が行動に移る。箒が果敢に近接戦闘をし、中距離からシャルロットが弾幕を浴びせる。遠距離から俺が六つの砲門で攻撃を行う。でも油断は出来ない。向こうは多数同時攻撃の武装があるらしい。そして、気付いた。羽の一部が、開いた。

「箒逃げろ！」

さつと、凄まじい機動力で回避した。だが少し被弾したようだ。その被弾したエネルギー弾は突き刺さった後、はじけた。……さすがアメリカとイスラエル。馬鹿みてえな兵器作りやがって！悪夢みたいだ！

「箒！近接戦闘一人でいけるか!？」

「難しいかもしれない！」

どうする？この状況……基本に立ち返るか。戦力の逐次投入は愚策。

「一夏！予定変更だ。お前も接近戦に入れ。誰かのエネルギーが尽きたら尽きた人間だけ撤退。二人切れたら相手の状況にあわせ判断！」
「分かった！」

一夏が刀を構えて突撃する。二人が追いつがる傍ら、シャルロットがショットガン二丁で弾幕を張り、俺が遠距離で阻害する。いくら軍用暴走ISでも、エネルギーが尽きるのが先だろうか。

「一夏！私が動きを止める!!」

箒から腕部装甲が開き、エネルギー刃が攻撃に合わせ自動で射出される。

「いまだ！」

「いけつ！」

俺とシャルロットの攻撃が炸裂した。その瞬間、大きな隙が出来る。苦し紛れに三十六の砲門を射撃するが、遅い。そこへ一夏が飛び込んで……海面へ全速力で向かった。瞬時加速と零落白夜で光弾をかき消した。……いや、なんでだ!？」

「さっきまで漁船なんて無かった!?!なんでだ!？」

レーダーで探索もしてた。そもそもって周りの海域は封鎖しているし、先生たちが見つけているはず。まさか、あの束博士か！上から漁船を見えなくするぐらい出来るだろう。小型の無人機とか普通にありそうだし。あの人なら！

そして、全く馬鹿だな一夏は！そこがいい所でもあるんだが、ここでは完璧なミスだ！

でも、まだ一夏のエネルギーは十分余裕がある。それでも、どうだ？もう一度隙は作れるのか？

「馬鹿者！犯罪者などをかばって……。そんなやつらは——！」

「箒!!」

「ッ!?!」

「箒、そんな……そんなさびしい事——」

だが言い切る事は出来なかった。

「黙れ馬鹿一夏！そこがお前のいいところってのも分かるさ！でもな、今地球の裏で人が死んでもお前は何も思っていないだろ!?!今の違いは目の前にいたか居なかったかだ！」

無茶苦茶言ってるのかもしれない。地球の裏の人は助けられないけど、目の前の踏み切りで人が倒れてたら助けに行く人が殆どだろう。でも、そのときに自分も、他の奴も危険に陥る事を考える必要もある。「目の前に居たから助けたかったんだ!!」

そのときだ、箒の動きが止まった。多分、一夏が言おうとした事が原因だ。好きな人からの心底残念そうな言葉、来るものがあるだろう。何となく分かる。そこに一夏が飛びつき……失敗だ。作戦はいくらエネルギーがあっても、あれを多数直撃したらエネルギーの量なんてあるのも無いのも些細な差でしかない。

「一夏!?!」

近くに居たシャルロットがカバーに入ったが、一夏は大きなダメージを受けていた。そして、箒も精神的に立ち直るのは難しいだろう。否定の言葉の上に自分のミスで一夏が怪我……駄目だな。福音も、攻撃を止めようとしてない。即座に通信を入れながら接近する。そして、会話よりずっと早く情報を伝えられるプライベートチャンネルを開く。

『シャルロット、二人を護衛しながら撤退しろ』

それが一番上策だ。

『何言ってるの!?!僕も残るよ!』

『だから！そしたら二人が立ちいなくなる』

方法はいくつもある。

まず第一に二人だけ逃がす方法。ただ、一夏は怪我だし箒は危険な状態。もし俺たち二人で抑えてても隙を見て逃げ出されたら危険な可能性がある。

次に二人をとどめて福音を二人で倒しにかかる。でも、お荷物背負ってアレは倒せない。

次に四人で撤退する作戦。お荷物背負って逃げるのは難しい。

だから、一人が残って一人が引率がいい。もし取り逃したとしても、一人が護衛についてるから十分時間は稼げる。それに、ある程度離れた後なら援護に来れる可能性も十分ある。戦力の分散は愚策だけど、負傷者がいるからには仕方ない。

だから、これしかない。

『第一、最初に言っておいたはずだ。殿は俺だって』

念のためだけと宣言しておいて良かった。でもシャルロットは諦めれないように

『なら希も！希も一緒に逃げようよ!!』

駄目だ、シャルロットも錯乱気味か。俺が原因かもしれないってのは嬉しいけど、俺にその資格はない。

『最高の下策って分かってるだろ?』

四人とも共倒れ。それよりさっさと退避して二人を連れてつてくれた方がいい。

『じゃあ、僕が残るから。希が!』

『俺が一番エネルギーが多い。行け』

『……いつだって、そうだ。僕は、僕は希を助けられない。だからなのか……気を付けてね』

小さな眩きで、俺には聞こえなかった。でも、すごい落ち込みっぷりだった。ちようど、シャルロットの前に割り込み、大型の盾を展開した。その隙に三人が撤退をした。それを見送った後、全神経を福音に集中させる。

「よろしく頼むわ」

「La♪」

いい返事だ。全砲門をこちらに向けてくる。さっきに比べれば劣

る物の派手な撃ち合いが始まった。威力に勝るこっちの砲門と、数に勝る福音の砲門。箒の紅椿に迫る……いや、慣れがある分、紅椿以上の機動性を保ちながら砲撃を回避し、向こうもこちらの攻撃を回避する。いつしか、時を忘れていた。五分か、七分か。どちらも決定打にかけながらも思った。

生きていると実感できる感触、楽しいと思える感触。小さな手ごたえは柔道の試合の時から。勝負は勝っても負けても楽しめればいいが信条だけど、これは違う。負けたら終わりかもしれない殺し合い。その高揚感がすさまじく集中力を上げていた。いつもの俺よりさらにもう一步、二歩も進んだ挙動。それでも、いやそれだからこそ感じてしまった。

これは負けるな。

こちらの攻撃はかすり含めてせいぜい五発程度。それに比べ、向こうは四倍近く当ててる。しかも、少しずつ増えてる。それに、エネルギーも残り五分の一切りそう。まあ、今回は負け戦だ。しょうがない。今から教師部隊に連絡でも入れようか。それとももうシャルロットが呼んでくれたか。さつき応援呼んでくれて言い忘れてたけど。全く、判断が遅かったなあ。楽しくて忘れてた。

ともかく、煙幕の準備を整える。ばら撒いて一気に撤退。三人も十分に距離を取っただろう。追撃されても包囲している教師部隊と十分連携が取れるぐらいの位置まで。教師部隊は先に包囲に行ってたからプライベートチャンネル設定しなくて使えなかったけど、近距離通信ですでに出来てるはずだ。ISがダメージを受けてても時速600kmは出していたし。だから、もう十分。

「またな」

砲門を量子展開で仕舞う。少しでも軽い方が逃げるのにはいい。そして、撤退のタイミングは逃してはいけない。引き際を誤るのは駄目だ。グレネードと空中発射ミサイルを展開。大量にばら撒いて、空に雲が出来たかのようだ。そして

「Laa」

隣で音が聞こえた。……マジかよ、このタイミングで、瞬時加速か

よ。それでも、俺の体は正確に反応してた。体の足を福音に向け、蹴りを放つ。でも……駄目か、スラストがやられてる。大量の砲門が俺を向いて――

「のぞみいいいい!!」

シャルロットが、飛び込んできた。ゆっくり、コマ送りで見えた。こんなにコマ送りなら福音だつて簡単に倒せるのに……。俺には二十秒ぐらい見えたが、現実では二秒程度だった。それでも、致命的だった。吹き飛ばされてきたシャルロットを受け止め、エネルギー防御が強い白盾を三枚同時展開。

「シャル!何で!?!」

ああ、ミスだ。俺のミスか。多分、二人のうちどつちかが回復して任せてきたんだ。多分、箒が回復したんだろう。そしてステルスで隙をうかがつてたらちようど俺が危なくなつたから……シャルは焦点を合わせないままに、

「ねえ、希の役に立った?……希はね、僕をいつも助けてくれた。でも、希を助けた事は無かつた。だから、僕じゃ駄目だったの?」

そういうことか、さつきのは。違う、違うんだよ。

「落ち着いて。今シャルは怪我をしてるから、静かに」

でも、聞こえていないようだった。ISの防御は貫通する事も結構ある。とくにアレは粘着榴弾とかと同じタイプ。普通よりIS操縦者にダメージが届きやすい設計思想なのだろうか。撃たれた位置――顎の下――によつては脳が揺れることもあるかもしれない。

そして、朦朧としたまま眩かれる次の言葉に俺は何も言えなくなつた。

「僕は、希の事が好き。誰よりも、この世界の誰よりも。だから役に立ちたかつた。下心があるは駄目なのかな?誰かに可愛いと思われたいと思われる事も、いい人だつて思われたいって事も、悪い事なのかな?僕が希に可愛いと思われたいのも、役に立ちたいって気持ちも、一緒にいたい気持ちも。駄目なのかな……」

そしてシャルは気絶した。同時に、二枚目の盾がぐくぐく。

シャルに対してはひどいが、一番安全な海に落として、残りの武装

全てで福音を落とすつもりだった。例え相打ちになっても。それしか、シャルが助かる道が無いから。

今までで一番の覚悟を決めた

けど、覚悟とは裏腹に福音はいきなり俺と逆方向に去っていった。

二十八話 敗退と再挑戦

午後四時前、旅館の一室でシャルロットは横たわっていた。近くには一夏も横たわっていた。一夏に比べ、シャルロットは怪我が少ないが、それでも少なからずあった。体を熱波で幾つか火傷のような症状がついてた。箒が一夏の傍にいる隣で、希はシャルロットの手を握り締めていた。希は帰った後、戦闘データを千冬に提出し、シャルロットの傍に付いていた。そして四時になった時、音声が鳴った。希からであった。そうすると希はシャルロットの手を離し、立ち上がった。同時にドアが乱暴に開き鈴が現れた。

「あー、あー、わかりやすいわねえ……希は何してんのよ？」

「別に、散歩行ってくる」

「へー、どこまで？……正直に言いなさいよ」

近くまで迫り、顔を見上げ真剣な眼差しで希を見つめる。ただ、希は意に介してなさそうに見えた。

「別に、太平洋のそこまで。ISのエネルギーも回復したし」

「そう言うと箒が立ち上がった。」

「希!?まさか、行くつもりなのか？」

「……ああそうだよ!」

突然だった。一気に豹変をした。いつもの穏やかさは無かった。皮肉っぽさも無かった。顔を怒りにゆがませていた。

「あの木偶の棒を叩き折りに行かなきゃ、シャルに顔向けできねえよ。俺が間違えてたんだ。それをシャルが代わりに受けたんだ。だから、叩き落とす」

「希、記録を見させてもらったけど、あんたは間違えてないわ。あの状況で一番最適な指示を出したじゃない。悪いといえば、浮かれていた箒と、優しくて馬鹿な一夏でしょ。一夏が決めてれば勝ってたのよ」

「周りを観察してなかったリーダーが悪いだろ。一夏にだって集中するように言えばよかった。俺が全てとは絶対に言わないし、言えないけど、ミスした原因は確かに俺にもあったんだ」

「でも、四人でも無理だったのに戦いに行くの？」

「禁止兵器が幾つかある。そんなもって、良く分かった。ゲーム感覚でやってた気分があるんだって。死なないだろうとか、どうにかなるとか思ってたって。でも、今回は本気だ。最高の装備で、最高のコンデイションで、最大限作戦を練って、叩き落として来るんだよ。シヤルに眼を合わせて会うには叩き落としに行くしかないんだよ」

「場所はどこにいるか分かるの？」

「千冬さんは顔が広い。ちよっとお話して、位置を聞いてくる。光学迷彩は壊してあったはずだから、ラウラにも頼んでみて衛星で発見してもらおうしかないな」

「ちようど良かった兄よ。ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。衛星による目視でな」

「ありがとう、立派な妹を持ったよ」

希はラウラの頭を撫で、そのまま部屋を出る。格納庫に向かい、たくさんの兵器から迷わずに目的の物だけ選びとる。今朝、眼を全部通しておいたおかげだ。その途中で、彼女らはやってきた。

「ねえ、希。私たちも散歩に行くつもりなんだけど。あんたと散歩するなんて久しぶりね」

「しっかりエスコートしてくださいね」

「兄よ、家族と出かけるのはハイキングと言うのか」

「リベンジだッ！」

「……………」

海上二百メートル。そこで福音は胎児のような格好でうずくまっていた。不意に福音が顔を上げる。次の瞬間、顔面にレーザーが直撃した。

「続いて狙撃しますわー！」

いつもと違い、ビットの代わりにブースターを接続し、いつものラィフルより威力の強いスターダスト・シューターで狙撃を続けた。

〈情報通り……接近まで10秒……3、2、1、0〉

セシリアが急上昇で回避。それに追いつがる福音。だが

「終わりだ」

上空からステルスモードを解除したシュヴァルツァ・レーゲンが急降下。そして、AICの発動。二門の大口径レールカノン、ブリッツと大型ビームライフル。さらに、もう一機、ステルスモードを解除した希の大和からの砲撃の雨が襲った。一瞬でエネルギーが三分の一ほど削られる。が、致命的になる前に砲撃をばらまきAICを解除させた。そして上空にいる敵から距離を取り、逃げるために急降下を行

い
「逃がすか！」

海面から飛び出した甲龍から、いつもと違う四門の砲口から熱拡散衝撃砲が炸裂する。多大な弾幕にそれなりにダメージを受け、上昇してかわそうとしたら

「とどめだ！」

その後ろにいた現宙域最高速度を誇る紅椿が襲いかかった。胴体に直撃を一太刀、直撃を受け衝撃で吹き飛んだ。

「全員、それぞれ独自判断で戦闘続行。行くぞ！」

『了解！』

箒を除く全員が砲撃に移った。体勢が乱れていた福音は続けざまに砲撃を食らった。それでも負けじと全砲門を開き、濃密な弾幕を放った。それに対して

「グングニール！」

希が四発のミサイルを放った。エネルギー弾を何発か食らいながらも、そのミサイルは決して壊れなかった。福音は回避しようとするが、並ではない挙動で決して引き離さない。そして

ドガンッ！

爆煙が福音を覆った。

「ISのエネルギーを推進剤にし、正面にバリアがある禁止兵器の特殊弾頭だ。美味しいか？」

返事はまたもや弾幕だった。希は複雑な軌道を描き、回避しながら接近する。仲間の援護のおかげもあった。そして距離100mまで詰めた時に大型ミサイルを四発展開し、発射。それらは直接向かうのではなく、大きな弧を描きながら接近する。いくらISとはいえ、ミ

サイルには速度で勝つのは難しい。周囲から援護されるように接近して

爆音が響いた。

半径75mほどの球が出来た。四発は液体火薬を満載し、空中に分布した後に電気信管で着火を行った。威力は装甲があれば少ないが、無い場所は絶対防御が発動するため大きなダメージを受けることになる。さらに火薬を広範囲に分布するため酸素も燃焼し、ブースターに少なくない影響を受ける。事実、さつきよりも体勢が乱れた福音にとどめとばかりに一斉射撃が行われ、希と箒が接近する。福音は今度は逃げるでなく、一気に攻めてきたが

「落ちろ」

希は大型の剣を振り下ろした。箒も一本の刀を両手で振り下ろした。両手で受け止めようとするが、希の足のプラズマサーベルが羽に直撃し、箒の爪先からエネルギー刃が反対の羽をえぐった。両手も大きく装甲が吹き飛んで福音は海中に没した。

「全員、状況終了。仕留める時はあつさりしたのもんだな。まっ、現代戦は初手で全部決まるって聞けけどな」

「希の久しぶりの本気モードは違うわね。これで、シャルロットとしっかり会えるわね」

「こうもあつさり……正直、まだ何かありそうだな」

「それはフラグと言うのだそうだな」

「一夏、やったぞ」

箒の言葉がフラグだったわけではないだろうが、事実としてそれは目の前に現れた。海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ。ラウラが慌てたように

「!? まずい！ 第二形態移行（セカンドシフト）だ！」

それに対して希は、目を大きく見開いて拳を握った。そして口を震わせながら

「何でだよ……シャルは今眠ってるんぞ!? お前のせいだな! もしくは篠ノ之束のせいだな!!」

「なぜそこで姉さんが!?!」

「八つ当たりかもしれないねえけどな！俺は目の前でお前にシャルをやられたんだ！俺が弱かったせいもあるけどな！！でもお前が起き上がってくるのはいらつくんだよ！！」

そう言うなり、装甲の大部分と砲を量子化した。あるのは脚部プラズマブレードと手に持った二振りの刀。

「システム認証、殺人翼（キラークィング）発動！」

そして、背中の機動パッケージが形態変化……量子展開で追加装備を取り付けた。先ほどまでよりさらに一段階大きくなったような。

「大和、不純な動機で悪いけどな、力を貸してくれよ！」

その瞬間、大和が光ったように彼女らは見えた。希は目を丸くして（これが……一夏の言ってた一体感か？）

今までより強く、刀を握り締め突撃した。福音からはちぎれたはずの羽の部分からエネルギーの羽が生えた。それにも構わず一直線に突き進んだ。

「よせー兄よーそれは――」

その羽が希を包んで撃墜――などしなかった。

「えっ」

鈴が思わず声を出した。希はいつの間にか背後に回って

「死ね」

一撃、それも不可解な速度の一撃。強烈な一撃で福音は数十mも吹き飛んだ。最大脅威目標を希に定めたようで、胸部から、背部から生えた小型の羽も希を狙った。大量の弾幕が張られるが全て無駄だった。希は福音から数mと離れない位置をひたすら追いつがっていた。

「援護射撃は無理か!？」

「無理ですわ、あの挙動では。分かってるでしょう!？」

「希はなにをしているのだ!?!あんな距離では倒されるぞ!」

「いえ、違うわ……最も近い位置にいれば羽に包まれそうになっても数m動くだけでいい。下手に10mぐらいまで離れると福音の加速性能と攻撃範囲に一瞬で包まれるけど、あの位置なら数m動けば羽から回避できるわ。トップスピードは勝ってる様だけど、圧倒的じゃないわ。それより不可解なのは、あの速度と機動性」

福音が逃げ切れない速度を叩き出している希の大和。良く見ると羽が何度も光っている。それを見てラウラは何かに気付いた。

「まさか……そんな馬鹿みたいなことを!？」

「何か分かりましたの?」

「兄は……火薬を推進剤に使ってる!多分、液体火薬だ!!それを背中
の羽に充填させ、爆発させた推進力で移動してる!しかも瞬時加速と
併用して弾幕を避けたりしている!早いだろうな、だがあんな挙動い
つまで持つか!殺人翼とはよく言ったものだ、アレは自分を殺す翼だ
!!」

他全員は顔を青ざめた。火薬をブースター代わりにしている、しか
も瞬時加速の最中にも使っている。普通、瞬時加速で下手に横移動を
すれば骨折する可能性もある、それなのに瞬時加速の最中に瞬時加
速、体への負担は普通では耐えることは出来ないだろう。

「ある意味では合理的だ。兄の機体はスロットが多い。それに液体火
薬を推進剤に詰め込めばエネルギーの節約にもなるだろう。だが、ア
レを入れたんだ、兄は!相討ちに覚悟でアレを倒そうとしていた!皆
で帰らないと意味が無いはずなのに!さらに許せないのは、私たちが
一緒に戦うと知っても入れたままだった!兄の馬鹿者!作った企
業もどうかしているあんなもの!!」

「待て、つまりあの刀……あの刀も光ってる。つまりアレも棟の部分
に液体火薬を仕込んでるのか?」

ふざけた機体であった。だが、それでも互角の戦いを演じていた。
あの化け物みたいだった福音がもう一回り化け物になったような機
体と同等まで追いつがっているのだ。

「付いていけないわ、今の状況じゃ」

「樂觀してもいけない。兄がやられた場合に備えるべきだ」

「説得しようにも、あんなに怒っている希は説得は不可能よ。あんな
挙動じゃ残り数十秒の挙動だろうから、それまでに包囲陣形で。希が
大きく引き離されたら援護射撃。無理はしないで。希が限界になっ
たら一斉射撃後にアタシと等で近接戦闘。ラウラは隙があったら接
近してA I Cで動きを止めて。希のダメージがあまりに大きいなら

誰かが護衛して撤退。残りで福音を相手よ。希ならそう指示するわ」
「了解だ」

「了解ですわ」

「分かった」

それぞれ全員が四方を囲みに移動をした。

ああ、痛いな畜生。腕に持った刀も痛い。刀を火薬で加速とか馬鹿か。使ってる俺もだが。機体も火薬で加速、馬鹿かこの機構。使ってる俺もやはり馬鹿。あつ、今骨にヒビ入った。もうさらに一箇所もか。まだ二十秒なのに十カ所近くにヒビが出来た。

さつきまでの俺じゃ使えきれない武装。でも、大和と感じた一体感が出来ると思わせた。自由機動パックを第二形態から最終形態に移行させ、使った。師匠だつて、三回しか見せてくれなかった上に三十秒だつて使ってなかった。三十秒あれば負けるのにお釣りがきたけど。つーか十秒で余裕だった。

初めてにしてこれだけ扱えれば上出来だろう。でも

足りない、まだ足りない

こいつを叩き落すにもまだたりない。それに、ここで止まっちゃ駄目だろう。東博士が黒幕かもしれない。他にいるのかもしれない。福音は犠牲者かもしれない。なら、そうなら！東博士やいるなら他の黒幕の顔面ひっぱたけるぐらいの力は必要だ。それにしても滑稽だけれどな、大和に言っちゃ何だが、自由に起爆可能な自爆装置積まれたような機体でしか顔面を叩けそうにも無いなんて。この機体のコアの開発者は東博士なんだ。あるんだか分からない遠隔操作装置だか何だかの解除をしないと始まりもしない。

でも、ひとまず先にこいつを倒さないと。そうしないと、俺は進めない。この先には。

「落ちろよ蚊トンボー!!」

刀を火薬で加速させ、腹部にたたきつけた。吹き飛んだ福音を、弾幕をかわしながら接近し、プラズマブレードを蹴りこむ。プラズマブレードは吹き飛びはあまりしないものの、着実にダメージを与えてい

る。包み込もうとする羽を、こちらの羽の火薬を八枚連続点火し、円を描くような機動で後ろに回りこみ羽根を叩ききる。切った分のエネルギーは消費されているはずなのに、なお有り余るそのエネルギー。正直、もう1400ぐらいは消費させたはずだ。IS二機分ちよつとぐらいには消費させている。全く、化け物か。確かに腕とかの装甲の厚い部分でガードされたりしているにしてもさ。

「うおおお!!」

次は下から斬りかかる。死角になる位置に回りこんで、攻撃——おい、マジか。

目の前に見えたのは脚部から生えたエネルギーの羽……刃。しかも足の裏から生えてきた。それが刀を防いだ。一瞬だけ。でも、それはIS戦闘では死活問題だった。

「LaLaLa……♪」

たたきつけた刀は衝撃を吸収され、今までとは違い数m吹き飛んだだけだった。そして、一番悪い位置状況。羽が包み込もうとするが、引くんじやない。この状況でむしろまっすぐ、突っ込む。

「う」

そだろと言おうと思った時には、吹き飛んでいた。

「希がやられたわ!」

頭部……額から大型レーザーが直撃し、速度が仇となって吹き飛んだ。

「骨にヒビが十カ所ほど。ただ、内臓に大きなダメージは無し。無理がたたったのと緊張が切れて気絶したみたいですね。ISの生命維持なら問題ないですね」

希の情報を大和から取得したセシリアが伝えた。

「では救助をせずに戦闘を続ける。兄がここまでしてくれたのだから落とさねばならない」

「本当に大丈夫なのか?……お前たちの判断を信じる。行くぞ!」

四人が一斉に攻撃を開始した。遠距離からビーム刃、熱拡散衝撃砲、レールカノン、大型BTレーザーが福音を狙う。相変わらずの機

動力で回避されるが、先ほどの戦闘でのダメージのためか、眼で何とか追えるレベルであった。

「これなら……!」

箒が刃を振り続けながら言った時、福音が視界から消えた。

「なっ」

のではなく、目の前に現れていた。だが長年の修行の成果か、的確に剣を打ち込んだ。そのまま接近戦にもつれ込む。

「またか!」

「でも、希さんの時に比べ戦闘力は落ちているようですわ」

「希があそこまでやればね。どうする?」

「やはり包囲がいいだろう。兄の状況も問題なさそうだ。ISの機能も生きているから、流れ弾が多少あっても問題は無い」

そして箒が優勢になりだし、

「とどめっ!」

雨月を打ち込もうとして――エネルギーが尽きた。

「またっ!」

その一瞬、福音が右腕をのばし、喉を締め上げてきた。

二十九話 福音の波紋と傷跡

「ここは……？」

目が覚めてみると、森の中だった。隣を見ると小川が流れていて、海に続いていた。

「アレか、精神空間って奴か？」

周りを見渡す。森の匂い、川の音、潮の香りがかすかに。正直、最高だ。でも

「何だ、思い出せ」

……そうだ、もたついている暇は無い。ふと、後ろに気配を感じた。振り向くと、大きな岩の上に小さな少女が居た。

「あ、起きた？」

優しく問いかけるような声。

「おかげでね」

適当に返す。

「何もしてないと思うよ？」

「だよね」

そして、しばらく間が開いた。十秒もしないうちに、にこやかに笑いながら女の子は

「ねえ、今楽しい？」

「昨日まではね。今は最悪。でも、進む為には乗り越えないと」

正直に答えた。

「そう、良かった」

「何が？」

「さあ」

そう言うと、少女はクスツと笑った。そして後ろからひよっこりと、別の少女が顔を覗かせた。少女と言うより、幼女だ。

「ってアレ？二人？多分君、女神的な何かだと思ったんだけど。一人だけだよ普通」

「あなたがISを乗れる原因なのです♪」

指でVを作る少女は和やかだった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

ヒーローが参上した。

「「「一夏(さん)!!」」」

「おう、待たせたな」

白馬の王子様並の登場だが、箒は怪我を心配した。一夏が大丈夫だと返し、

「誕生日、おめでとうな」

「あつ……」

リボンを渡した。戦闘中にも関わらず他のメンツは齒軋りをした。

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行って——希はどうした？」

「希は落ちたわ。アレがセカンドシフトをしてから、7割ぐらいは希が削ったと思う。気絶中って所ね。傷は軽いわ。でも、骨にヒビは覚悟ね。さつさと落として助けに行きましょう」

「そうか。じゃあ、さつさと落とさないとな！」

五人が、福音に向けて攻撃を開始した。

「ん……あれ……そうだっ！希は!?!」

シャルロットはガバツと跳ね起きた。周りを見渡すと

「ふん……あいつらめ」

近くで千冬が壁にもたれながら立っていた。

「織斑先生！希は!?!」

「大丈夫だ。リベンジに行ってる」

「そうだ……ISダメージ問題なし……行ってきます！」

「怪我人だろう？」

「そ、そうですが……軽い火傷とかだけですから」

首筋あたりなどに軽い火傷の跡が残っていた。

「ふむ……だが規則として行かせるわけにはいかないんだ。だから」
「だから？」

「今から昼寝をする。知らん」

「……ありがとうございます!!」

「これで、とどめっ!!」

一夏の新型はエネルギーを馬鹿食いする機体だったが、紅椿のワンオフアビリティー・絢爛舞踏によりエネルギーを回復させ、五人は福音を追い詰め、一夏がとどめの一撃を食らわせようとしていた。だが「LALALA!!」

羽が、細分化した。それによつて一夏は弾き飛ばされた。よく見ると、形が希の大和に似ていた。そして、機構も。背中の羽からISエネルギーを噴射して機動力を得ている。

「一夏っ!?まだ持つのか福音は!?!」

「いくらなんでもおかしいぞ!?!」

「ラスボスつて三回変身を残してるらしいわよ、希が言うには!」

「不吉なこと言わないでください!」

吹き飛ばされた一夏に向かって福音が瞬時加速を行った。その間に箒がたちふさがった。

「そう何度も――」

エネルギーの羽が直接弾き飛ばした。そのまま目もくれず一夏に向かい、喉元を締め上げた。

「くそっ!!」

「!!」「一夏(さん)っ!!!」

「あつ……呼んでるわね」

何となくだけど、分かった。今、危ないな。

「ねえ、力がほしいの?」

「そりゃあね、あれば便利だろう」

能力だって、金だって、人脈だって、あればあればで困らない。むしろ、あれば役に立つものが多い。力だってそうだ。あつて困らない物なんて、この世界には殆ど無い。ありすぎたら世の中あまり簡単で

つまらないように見えるらしいが。その気持ちもわからないでもない。戦国ゲームで最強キャラ百人作って天下統一は当然できることだから、つまらなくなる。絶対勝てる相手と戦っても当然としか思わないからだ。

でも、つまらなく見えてもいいから、今は欲しい。力が。

「どうしてほしいの？」

「うーん、今まではさ、自分が理不尽なことに巻き込まれてもどうにかできるようにしたかった。でも、違う。今は、誰よりも護りたい人がいる。そのためには、何でも欲しい。タダでも、代償があつても、力が欲しいんだ。もちろん、一夏たち仲間も守ればいいけど、俺は凄いい人間じゃない。一般人に毛が生えた程度だから、多くは守れない。でも、一人、たった一人護れる位の力は、誰だつてあるはずなんだ。普通の人も、大切な人を一人は護れるぐらいには世界は優しいはずだ」

そう、俺はたしかに出来る人間だと思う。でも、鈴とかのラインには及ばない。でも、ただ誰かを倒すために準備をして、いい装備を整えて、対策をとればセシリアだつて倒せたように。

例えあいつらにかなわないようなそこそこの一般人でも、強い想いを胸に宿して努力すれば、大切な人の一人ぐらいは護れるはずなんだ。例え英雄とかの器じゃなくても。一人は守れるはずなんだ。

「……でも、借りることになっちゃうな、君から。自分の力じゃないのかな？」

全く、強いのか弱いのか。

「違うのです、君たちから、です！」

「その通りです。では力を上げましょう。ただし、あなたはまだ慣れていませんので少し力を貸す程度です。そして、タダより高いものはありません。いい言葉です」

「私もあげるのだ！」

「ありがとう……二人？とも。行ってくるよ」

「行ってらっしゃい」

「一夏を離せ!!」

箒が殴りにかかるが、羽によって刃は防がれた。

「今ですわ!」

狙撃が襲うが、数十cm移動して避ける。その間も一夏はとらえられていた。

「くそっ!」

そして、羽が大きく振りかぶられた時、海面から飛び出てくる物体が一夏以外からは見えた。

「吹っ飛べ!!」

懲りずに火薬推進を使って音速で近づく。福音も驚いたようで、羽で防御しようとするが少し、遅かった。音速に近い速度で突っ込まれたため反応が遅れた。最初から一夏を盾にするべきだったが、もう遅い。

「だあ!」

機体の速度と重量だけでなく、刀も火薬で加速させ、福音に当てる。

福音は一夏を離し、数十m吹き飛んだ。

「つち!バックしてダメージを抑えたか」

『希(さん)っ!!』

「おっす」

(それにしても、さっきまで九カ所ぐらいにヒビが入ってたのに。全部回復してるか。エネルギー自体も、自然回復よりずっと多い。全く、助けられてばっかだな)

「よし!箒、何となくわかってる。三十秒で仕度しな!それまでは一人で抑えてやるから!」

「分かった!」

希は両手の刀を抜く。それだけではない。今度はプラズマブレイドも収納し、足には同じ刀を装着した。足着用の為、少し形は違っていたが。

(さっきまでののが一体感なら、今のは一体感とは違う。今は俺がISだ!みたいな感覚だ。何もかも分かる、そんな気がする。さてと)

刀を福音に向けて

「リベンジってほど恰好よくはねえけどな！」

羽を光らせながら突撃し、切り結んだ。先ほどよりさらにきつい戦闘。急激なGが体を襲うが、先ほどより痛みは無く、ヒビも入りはしない。体が急激なGでダメージを全く受けていない。ただ、羽が至近距離の格闘に対応したため、先ほどと違い近距離でも福音は防戦一方にはならない。羽でガードされ、羽で攻撃され。負けじと刀を打ち込み、羽を逸らす。

(いつもより、感覚が鋭い。次に攻撃がくる場所が直感でわかる！)

相手の攻撃を100%防ぎながらも手数では圧倒できていなかった。優勢ではあったが、押し込めるほどではなかった。ただ、同時に何かとんでもないことが起きているような、何かが進んでいるような感覚もした。希は、それでもその感覚を振り切って刀を振り続けた。そして、福音へ当たった数が五になった時、

「終わったぞー！」

「っしやあー！」

急激に後方にバック、同時に刀を投げた。しかも、火薬で加速して四本。面食らったようでダダツと二本被弾をした。

「攻撃だ！」

『了解！』

一斉に砲撃が行われた。機動力がずいぶんと落ちていた福音は、数々の被弾を受けた。それでも最後とばかりに瞬時加速を希に行った。

「当たるか――」

そこで、致命的なミスが起きた。バキツとの音とともに、羽が欠損した。火薬で推進している反動、その負荷が限界を超え、付け根の部分が吹き飛んだ。酷使されすぎた結果であった。

「くっ！」

(やばい……けど問題ない。皆散開してるから、むしろ動きを止めてチャンスだ。その中から一夏が突撃してきて終わりってところか) と思う前に、福音は吹き飛んだ。

「えっ？」

「僕を忘れないでほしいな！」

「シャル!!」

ステスルモードですっと機を窺ってたシャルがパイルバンカーで福音を上に乗せ飛ばす。希はすかさず武器を取り出した。

「ダブルショット！」

二つの大型グレネードを取り出し、射撃。爆風で動きが乱れた福音が上に吹き飛んだ。そこへ一夏が

「とどめ!!」

零落白夜の刃を突き当てた。その瞬間、福音の動きは停止。零落白夜を停止して数秒後、装甲は消え去った。スーツだけのIS操縦者が海へと落ちていくが、ちょうど希のところに落ちてくる。希は残りのエネルギーを使い、相対速度を合わせながらゆっくり受け止めた。

「終わったね」

「シャ……シャルロット、来てくれて嬉しいけどさ。せつかく倒した後、仇を取ったぞ、そう言おうと思ってたのに」

希は顔を背けて小さくつぶやいた。

「でも、希を助けて良かったな。それとね……さつきはシャルって言ってくれたよね？また、そう言っただけでいいな」

少し照れくさそうに、でも今朝などとは違い明るい声でシャルロットは言った。

「……ああもう！分かったよ。本当にありがとう、シャル」

「……うんっ！」

その笑顔を見た瞬間、緊張が切れたのか。希のISも落下していった。

「希?!」

目が覚めてみると、おぼろげに白い天井が見えた。フラフラしているが、一分ぐらいたると目が合わさりだした。体が重い感じがする。時計を見ると、十二時ぐらいになっていた。反対方向を見ると、シャルがいた。

「シャル」

良く見ると、俺の手を握りながら俺にもたれかかっていた。そりや重い気もするか。何で気付かなかったのか不思議だ。さて、この状況のままにするべきか、でももたれながら眠るのって体に悪いし。起こすべきか、どうか。

「希？」

ありや、起こしちやったのか。

「起こしちやった？」

「ううん、大丈夫。それより、希は？気絶して、……六時間以上寝てたんだよ？」

時計を見ながらシャルが言った。その顔は不安そうだけでも、致命的ではない。となると、後遺症は特になし。わかってたけどね。それでも不安そうだったのは、一夏でも寝てたのが三時間半ぐらいだったのによりずっと寝てたから。寝てたというか、気絶？

「それにさっきの戦闘データを確認したら、骨に九カ所ぐらいヒビがあつたから。治ってるようだけどね」

「女神さまに会ってきてね」

「どういうこと？」

「ISの守護神みたいなの？まあいつか。それより、飯逃しちやったな」

「二人分、取つてもらってる。ちよつとだけわがまま言つて」

「ありがとう」

「いいよ、したいからしたんだよ」

「……他の皆は？」

「えつとね。織斑先生から説教を受けた後に僕と一緒に希を見てたけど。容態が完璧に落ち着いてからは皆帰つたよ。とくに一夏と箒が申し訳なさそうでいたけど、鈴が『希なら私たちがいつも通りしてるほうがいいわよ。私たちに出来ることはもうないし。それに、邪魔しちや悪いし』って。一時間ぐらい前かな」

全く、鈴め。微妙に気をきかせやがって。一夏たちが申し訳なさそうなのは、最初の時があつたからか。

ちなみに、鈴の言うことはあつてる。容態は完全に落ち着いてい

て、寝てるも同然の状態なのに六人に囲まれてもね、申し訳ない。俺なら勝手に帰ってる。俺のミスで寝込んでる状態にさせたなら別だけど。

「そうか。あいつらに怪我は？」

「皆無事だよ。一夏もね」

「そうか」

そう言っつて、沈黙が続いた。十秒ほどだろうか。俺もシャルも口を開き、目をきよろきよろさせて

「ん？ やつと起きたか」

「わっ!？」

「あー、邪魔するつもりはなかったがな。最低限連絡をとな」

「どういうことでしょう?」

とは言うものの、軍紀違反してるしね。仕方ないか。

「まず独自行動により重大な違反を犯した。帰ったら反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

ちようどいいや、それなら。

「ありがたいですね。織村先生のメニューとは。……強くなりたかったところですよ」

「ふむ……それとだ、説教を他のメンツにしておいた。デユノアは清水の看病のため説教をしていなかったの、明日二人で来い」

「了解です」

「あ、そうだ。トレーニングはお前はしばらく禁止だ」

「どういうことですか?」

今までの二倍ぐらいはしようと思っただけだ。

「戦闘データを見たぞ。馬鹿者。狂った兵器を使いおつて」

「叩き落としたかったんですよ。ともかく」

俺にとつてどんなものでも勝負は楽しめればよかった。そりゃ、負けたら悔しいし勝ったら嬉しい。でも楽しめるかどうかが重要だった。撤退するとき、一体一で福音と戦ってた時も楽しんでた。

でも、あの時は勝ったら嬉しいじゃなくて勝たなきゃダメだったんだ。心の底からあの時は思った。

「身体検査は簡易でやったが、ヒビはないものの全身微妙に危ないそう
うだ。三日間安静にしろとのことだ」

「はあ、しゃーないですね」

その後から頑張らないと。そして、千冬さんは少し楽しそうな目を
しながら

「ただし、日常的に動く分には問題ない。軽く走るぐらいでも問題は
ない。短距離走などは念のためやめておけだそうだが。あー、そのだ
な、それとだ。修学旅行の最中、夜は枕投げをするそうだが物を壊す
か教師に見つから無ければ処罰はされないそうだ」

「は、はあ」

この人まさか。

「では、気をつけろよ。……ああ、そうだ。希、言い忘れてた。今日は
曇がない。星が空一面に広がってる」

そう言っただけの視界から姿を消した。横顔が微妙に良い事した気
分、つてなってるのがウザいです。この人やっぱり一夏の姉だよ。良
いことしたと思ってるんだらうけど、正直どうすりやいいの？俺達関
係複雑なんだよ……いや、そんなじゃだめだ。しっかり、ちゃんと
言わないと。いけないしね、ダラダラ関係を伸ばすのは。それに、
シャルが期待した目で見てるし。

「……シャル、星、見に行かないか？町よりずっと星が見えるだろうか
ら」

「うんー！」

「星、綺麗だね」

シャルが星空を見上げながら言った。場所は浜辺、波が目の前でザ
ブンザブンしてる位置。地面に座りながらの状況。

さて、どうすればいい？こういうときのお約束は君のほうが綺麗だ
よ、という奴だ。事実、一夏に対してはそう言うように言った。当事
者じゃなければどうとでもいえる。

さて、謝罪しよう。一夏のヒロインズたち、いつも馬鹿だな、もっ

と計画的に攻めろと言ってたけど、すいません考えがまとまりません。ここまでで一秒。

「シャルのほうが綺麗だ。……本当に」

考えがまとまる前に勝手に口に出してた。な、何を言ってるか（ry

「あ、ありがとう……」

頬をととも赤く染めて、俯くように呟いた。星空に照らされたシャルの横顔はとても綺麗で……続かねえ！どうすればいいの!?俺が切り出すのがいいのシャルが切り出すのがいいの? ISの戦闘は一秒ですさまじく考えて手を出せるのに、こっちは何秒あっても一手も打ち出せないよ!助けてよ!!カード百枚くれ!ハズレ抜きのカードをね!でもあのCMこのごろ見ない気がする、いやどうでもいい。

「……希って、こんな星空をみたことある?」

でも、その思考もシャルの真剣そうな声で落ち着きだした。

「えっと、数回だけ、親戚とキャンプに行った時。ここに来ると分かって楽しみにしてたのは、星空も一つある」

昨日はドタバタして見れなかったけど。

「私は、13歳までいつも見てたよ。前に言ったよね?田舎で暮らしてて、毎晩星空をお母さんと眺めてたんだ。あの時は、確かに幸せだった。それ以来、IS学園に来るまではずっとイヤだった、とかを乗り越して何も感じなかったんだ」

俺は黙って聞き続けた。

「それをね、希が変えてくれたんだ。希はたまたま相部屋になっただけって言った。でもね、他の誰かが私と相部屋になるより、希がなってくれた方がずっと幸せだと思ってる。良く分からないけど、希が相部屋になってくれることより良くなったとは思わないよ。例えば、一夏が相部屋だったとしても、その結果一夏を好きになってたとしても、希の事を好き以上にはなっていない。……何て言ったらいいのか良く分からないけど、希が良かった。他の誰かじゃなくて、希が良かったんだよ?」

「でも、それでもシャルを守れなくて……」

シャルの首を見る。少しだけど、火傷の跡が残っていた。あの時ほど俺自身をぶっ飛ばしたくなかった事は未だに無い。

「こう言うのは嫌だけど、一夏だって筈を守れなかった。希があんなに、俺より一夏の方がいい、そう言ってたのに。私たちはまだ子供だから仕方ないと思う。重要なのはこれからだよ。そうでしょ?」
「でも、弱かったんだ」

あの時、もつと違う方法があったかもしれない。今更こんな事を思うのは愚かだつて知ってる。思わないよりは愚かじゃない、次に繋げるように心に刻むのが大事だつてのも重要だつて分かる。過去を反省する事と思い出すだけは違う、実行に移すかどうかも違う。

でも、シャルは続けて

「弱くない。希はかっこいいし、誰より頼れて優しいよ。さつきだつて、福音を一番追いつめてたのは希だつたでしょ?希はいつも誰より堂々と、飄々としてるけど、実は臆病だよね。」

自分は下心があつて駄目な人間だと思つてても、誰より人を助けて。下心が無い人間なんて、ほとんどいないと思う。私はさつき言つてたと思うけど、希に少しでも可愛く、優しく、頼れる女の子だつて思われたい。そのために努力してるし、行動してる。悪い事かな?」
「ひ、一人の為に何かしようとするのは、いい事だろうけど、でも俺はあの時シャルだけじゃなくて皆にも好かれようとやっただと思う。数撃ちや当たる、みたいに」

俺だつて男だ。いい人と恋人になりたいとか思いながら、やっただんだと思う。

「その時から、希は私の事を少し好きだったなんて、嬉しいな。気にかけてくれたつてことだよね?」

「結果論だろ?」

「それでも、幸せなんだよ?私は」

いつの間にか立ち上がった。俺もつられて立ち上がった。目の前で向き合う。夜空に月が浮かび、星空が俺たちを照らしていた。そして、シャルはにっこりと微笑んでくれた。見てる自分すら微笑みたくなるような、そして心が安らいでいくような微笑み。

「だからね、希の事が好きだよ。どこがとはあまり言えないかもしれないけど、これから先、この世界の誰よりも、私……ううん、僕は、ずっと希のことが好きです」

……良く分かった。俺の心も。ずっと知ってたけど知らない振りしてた。けど、見て見ぬふりはもうできない。わざわざ、使い慣れない私って言葉を使ってまで女だと意識させようとしてきたことに始まって、色々してきてくれた事を見てみぬ振りしてきて。俺って、どこまで馬鹿で不誠実だったんだ。色々な物語の鈍い主人公は気付いていないから仕方ないとしても、俺は気付いてて無視するなんて。え、何だって？みたいな事を言うのよりよっぽど卑劣で、不誠実だ。「あー、今更だけど、先に言わせちゃったなあ。……あの不良たちに言われる前はさ、合宿の最中にはどうにかしないととか思ってたんだけどな。先にさ」

シャルの眼をしつかり見つめる。

「今まで色々……一か月とちよつとだけ。それでも色々あった、気がする。それで思った。確かに俺からそうなったってわけじゃないかもしれない。シャルに想われての、受身の想いなのかもしれない。それでも、あまり確信できることがない俺でも、しつかり確信してる。

俺はシャル……シャルロットの事が――」

ドーン!!砲撃の音が聞こえた。思ったらシャルを抱えて伏せていた。

「……被害は無さそうだな。師匠助かった」

師匠が爆発したらすぐ倒れこめと訓練受けさせられたおかげだ。ただ、無意識でやるようになったのは酷いと思うけど。今気づいたけど、これは鈴の衝撃砲だ。シャルもそのことに気づいてるようで、深刻そうな顔はしていない。ただ、

「あ、ありがとう……」

押し倒した結果、シャルにのしかかっていた。頭を打たないように腕をまわして、頬が赤く染まっただけ、ちよつとはだけた服が色っぽい。けどいかに！

でも顔を赤らめて、少し、ほんの少し服が乱れてるのに興奮してし

まあって。起こそうとする意思とは裏腹に少し顔を近づけてしまった。それに対してシャルは

「希が、いいなら」

俺は深呼吸したあとに、

「俺はシャ――」

ドーン。良く聞いた音。ラウラのグレネード。もう一度根性を出して仕切り直そうとする。

「俺――」

ドーン。

シャルは笑っていた。俺は立ち上がったあと、シャルの手を握ってゆっくり起こした。

「ちよつと、待っててね？」

あいつらにここまで殺意を覚えたのは初めてだ、そうとだけ言っておく。

そして、ここまでシャルに恐怖を覚えたのも。まだ福音に突っ込めって言われた方がマシだ。千冬さんを倒しにいけと言われる方が生存率が高そう。

翌朝。朝食を終えてI Sの撤収作業に当たる。ちなみに、箒は砲撃してないようだったが大岡裁き？されていた。一夏もである。全員シャルにボロクソにされてシャルを怒らせてはいけないと再確認してた。というカラウラは部屋の隅で縮こまっついていてね、シャル見ただけで。同室だよ？

ちなみに、昨日はシャルが全員を叩きのめし、正座させて説教させた後、千冬さんが来たと同時に逃げてあのメンバーになすりつけられていた。シャルはおとがめなし、見つかってないから。ただし、密告しようものなら酷い目に会うだろうから、誰もばらしていないのだから。

「台無しになっちゃったね」

あははと笑うシャルが印象的だった。俺はどんなコマンドもでき

なかった。

冷めた食事を少ししやべりながら取り、お休みをしたあと別れて眠った。

そして今……。

「すまん……誰か、飲み物持ってないか……？」

「……ツバでも飲んでいろ」妹

「知りませんわ」セシリア

「マグマでも欲しいの？」シャル

他全員が怖がつてるからね？ちなみに俺は通路側でシャルが窓側。

右の二列の通路側に一夏で箒が隣。

「何を見ているか！」

箒にすがりつく子犬の目で見た後、一夏は俺を見てきた。俺は笑顔で

「硫酸でも飲んでろゴミ」

「俺が何かしたか!?うー……しんど……」

そしてそれから十秒後ぐらい。

『一夏!』

三人が一斉に一夏を呼び掛けた。全く、最初から攻めないといけないんだよ。だがもつと気になる人がいた。目の前に見知らぬ……いや、昨日の操縦者か。

「ねえ、清水希くんっているかしら？」

「俺です」

立ち上がって向き合った。わずかに香るなんかのコロンの香りがする。おしやれ全開のカジュアルスーツに開いた胸元。そこにサングラスを預けた、恐ろしい人である。こんな事本当にする人がいるだなんて、本当にあったアニメの話。都市伝説かと。

「君がそうなんだ。へえ」

「昨日はどうも?こつちがお世話したと言えは？」

「多分、そうね」

「希、誰だこの人？」

「名前は知らない。ただ――」

俺のセリフは華麗な名乗りで途切れた。

「私はナターシャ・ファイルス。銀シルバリオ・ゴスベルの福音の操縦者よ」

「えっと、お悔やみ申し上げますとか、どう言えばいいのか……福音は残念でした」

「しようがないわ。暴走しちゃったんだから」

推測で言ったんだけど、この返答だとISコアは凍結か。あんな暴走した後じゃ仕方ない。壊すって選択肢はありえない。世界で467個しかない物、しかも芸術品とかじゃない国家の軍事力に直結する物を壊すなんてありえない。多分、数年以内にはまた再使用されるだろう。

「では、気を付けてください」

何に対して気をつければいいのか知らないけど、何と言えばいいのか知らないので適当に返した。そうしたら頬にいきなり唇が触れた。えっ

「ちゅっ……これはお礼。ありがとう、騎士さん」

「えっと、どうも？」

やったーとかより困惑の方が多い。そしてどんどんある感情が増えてくる。

「じゃあ、またね。バイ」

「さよならー」

手を軽く振って、湧き上がる感情から逃げる為にのほほんさんの所へ。

「さーて、のほほんさん。席をかわってくれる約束だったよねー？」

「それはないなー」

ですよね。ゆっくり後ろを振り向いた。ざわついてた車内はとっても静かだった。通路には一人、シャルが立ってるだけで。ラウラはビクビクしている。頭に腕を抱えていた。セシリアも箒も一夏も。

「希、僕と同じ席でしょ？学園まで長いからね」

あー、とつてもいいお顔。昨日ほどじゃなくて助かったと言うべきだろうか。どう言えばいいのだろうか。

「えっと、昨日の今日で疲れてたんです。反応できなかつたんです」

事実である。あの後一睡も出来なかったわけじゃないけど、睡眠はあまり取れてない。

「へー、そうなんだー」

最終奥義を使う事にした。

「お、俺は無実だっ!!」

バツと両手を開いた。ですが女神は無情である。

「今から話し合って決めようね」

極上の笑顔が嬉しくもあり、恐ろしくもある。周りの目を見ると、ご愁傷様とか、何と言うか。地獄へ行つてらっしゃい、みたいなの？

「ほら、早く」

近づいてきて、手を握られた。とても力強かった。

天国と地獄を味わった。隣で腕に胸を当てて密着されてはいたけど、固め技。動かせないうえに、ニコニコと笑ってきて、怖かった。暴力行為は昨日のことに配慮してくれてか、固め技以外無かったけど、胃がすこぶる悪かった。

シャルの隣にしながら、恐怖を味わいながらも日常に戻ってきたと思っただ。

非日常を求めて俺はISを動かした。でも、非日常がメインになったらそれが日常だ。銃を抱えて走り回る自衛隊とかは傍から見れば非日常でも、入隊すればいずれ日常になる。ISをぶんまわしてすつごく楽しいとは思う、非日常だと思っただ。でも、それでも日常になっていた。日常ばかりは少し退屈だと思っただ。ま、アイツらのおかげで退屈はあまりしなかつただけど。

でも、再確認した。

日常がメインなんだ。非日常はどこまでもスパイスだつて。それに、メインをしつかり堪能すれば問題はない。これからもアイツらとしつかりと日常を堪能しよう、そう思っただ

三十話 ストーキング

IS学園に帰宅した日の次の日の夜。シャルロットの部屋にいつものメンバーが集まっていた。

『本当にすみませんでした!』

シャルロットに対して箒、セシリア、鈴、ラウラが平謝りしてた。「本当にそうだよ!少しはお淑やかになろうよみんな!!」

いつもなら笑顔で許すシャルロットが、許していなかった。よつぽどの事態である。それもそうだ。せっかくこれで恋人同士!ゴールイン!いや、始まりだね!!になると思っていたら、一気にグダグダにされ、次の日は見知らぬに美女に頬のキスをされていたのだ。シャルロットはあらぶっていた。かつて無いほどあらぶっていた。

「だ、だがしかし、私が怒られるのは――」

「何か言った?箒」

完全に巻き込まれただけの箒だが一刀両断された。さーつと顔が青ざめて、

「え、あ、はい、すみません」

すぐに下がった。逆らえる気がしないとはまさにこの事。

「みんながすぐ暴力を出したりするから一夏も逃げちゃうんだよ。もっとお淑やかに行こうよ。そうすれば捕まえられるよ」

「シャルロットだって完璧に捕まえたわけじゃ――」

「鈴、すつごく怒るよ」

「はい!本当にごめんなさい」

土下座した。ちよつとぶつくさ文句を言いたくなっただけである。軽口叩く癖が希から伝播していた。いけないと思っただけでも言ってしまう癖が。

「今のは鈴さんが完璧に悪いですわ。私たちがしつかりしていれば、シャルロットさんは希さんと恋人同士になってたでしょうに」

「そつ、そう見えるかな!?!」

「コレだつ!他の四人は全員そう思った。」

「ああ、間違いない!兄の妹である私とシャルロットのルームメイト

の私が断言する！兄とシャルロット以上にお似合いなカップルはいない!!」

「本当にそうだ。とてもうらやましいと思うぞ！」

ラウラと箒が一気におだて出す。意外とシャルロットもちよろかった。それに、怒るキャラがそう長く続く人間ではない。

第一、チエックメイトだったのだ。横槍で盤を吹っ飛ばされはしたが、詰んでいた状態なのだ。もう一度盤を組み直してチエックメイトをかける、かけてもらう雰囲気を出せばいいだけである。その事がプラスに働いていた。独走状態なのだからまだ寛大であった。もしライバルがここで決める！というときにこれをしていたら彼女らはかなり危なかったかもしれない。命がである。

「そ、そうかなあ。うん、そうだよね。そうだといいな。絶対にふさわしくなってみせるよ！」

「その心意気ですわ！」

「全身全霊で協力するわ！希には世話になってるし、親友だしね」

協力も何も、何もしてなかったら決まっていたと、四人は密かに思ったが無視した。そんなことを言い出したらまた怒るだけである。

「じゃ、じゃあどんなことすればいいと思う？」

「ふむ、ここは私の出番だ」

ラウラが一步前に出た。その事に周りがえつというような顔をした。

「えつと、こう言うのはなんだけど、ラウラが一番苦手じゃないの？」

生まれてからずっと軍事ばかりしか教えられてなかったラウラは、普段も不思議っ子をやっている。だから無理なのではと思うのも当然だ。

「ふんっ！確かに出会ったばかりの私ならそうだ。だが！私の兄がアドバイスしてくれているのだ。その内容を伝えれば良い」

「それで！どんな方法があるの？」

シャルロットの食いつきは良い。

「それはだな、兄が言うには――」

「希!ご飯作ってきたよ」

「ありがとう。天気もいいし、屋上行くか。木陰なら涼しいだろうし」
「二人は屋上か?じゃあまた後で」

希とシャルロットが階段を上がっていくのを、追跡している者たちが居た。

「こういうのって、ワクワクするわよね。知ってる奴とくればなおさら」

「意外と楽しいですわね」

「軍隊訓練を思い出す。教官を見つけ出すのに比べれば……」

「否定はしない」

四人ともノリノリで追跡していった。十五歳の女子たちにかかれば大体テンションは上げることが出来る。

「おーい、みんなはいらないのか?食事」

そんな言葉すら聞こえてないように。二人が階段を上っていくのを、四人がテクテク付いてく。他の生徒からは奇異の目で見られているが、興味津津なので全く気にしていない、と言うか気付いていない。二人は適当なベンチに座った。

「どうする?距離が遠い」

「私にお任せください!」

ブルーティアイーズを二機射出し、近くにまで大回りで移動させる。カメラとマイクを起動し、鈴が既に取り出していた立体投影ディスプレイに接続。位置は二人の頭上後ろといった辺りと正面から目立たない位置の二箇所だった。

『今日のは自信作なんだ』

『料理部でメキメキ腕を上げてるようだしね』

『うん、将来役に立つから』

要約 一緒に過ごすから毎日作ってあげる!である。大体そんな感じである。一夏ならああそうだが、察しのいい希はしっかり気づいた。よって

『あつ、うん』

一瞬どもる。

『ほら、開けて』

希が言われるままに弁当を開けて、閉じた。

『どうしたの?』

『いやいや、えっ』

もう一度ふたを開けて、観念した。ご飯の上にはハートのマークが鮭ふりかけ（手づくり）で描かれていた。

「兄から教えてもらった、必殺！ハート弁当だ！」

効果、相手は死ぬ。下手したら作った本人も。色々な意味で。

「希、自分で教えた事をそのまま返されてどう思ってるのかしらね」

「見ていて、正直笑いが来てしまうのだが」

「わ、わたくしもちよつと。希さんの引きつり笑顔が」

いつもいい様に踊らされてるので少し笑いそうになっている三人。だがちよつと真面目な顔になって

「ねえ、これって一夏に対して効果あるの?」

「あの鈍感さだと無駄か?」

「少しはあると思いますけど。料理できるといふ面も押し出せますし。希さんぐらいに察しがよければ効果覲面でしょう」

「だが、ここままであざといと希に対しては問題ではないか?」

だが付き合いが長い鈴がそれを否定する。

「別に問題ないわよ。こういった正攻法が一番効くはず。希は思慮深いけど、正義が悪をやつつけるのが大好きな王道大好き人間だし。いつもあの読んできると一夏を殴りたくなるラノベ読んてるから。むしろこれぐらい押し押せの方がいいと思う。そういつたのに憧れてそのなのを会話から微妙に出てたし。でも、一夏に対しては正直……」

話している最中にどんどん話は進んでいた。

『はい、あーん』

『あーん』

シャルロットにはい、あーんをしてもらっていた希。ハートマークの弁当にあーん、傍から見たらバカップル以外何者でもない。

「前の私はこう見えたのだろうか?」

「傍から見ると、何というかアレね」

「胸焼けがすると言いますか。でもこれが世に言うリア充爆発しろ、
と言う言葉でしょうか」

「めでたいことだ、シャルロットの機嫌が治まるのなら」

「つていうか、セシリアって段々庶民の感覚が分かってきたようね」

「希さんを見習って色々な視野を作っていますわ」

「ラウラだけは何か違っていた。」

「ねえ、これって結構勉強になるわね」

「だが、私たち全員ライバルだ。同じ分成長しても同じだ」

「いや、兄が言ってた。お前たちが成長すると一夏の負担が減ると。
だから成長しろと言ってた」

「なるほど……それと、同じように見てはいますが、得られる物は違っ
て来ますわ。ここできかにデータを取れるかがいい女の違いですわ」

「そうね、負けないわ」

「私こそ」

「無論私もだ」

こうして、二人は実験台？にされようとしていた。

『僕にもお願い出来るかな』

『イエス、ママ』

いざまじめな会議みたいな状況になると、スムーズに進む彼女らで
あった。自分が一夏に好意を抱いてると言うのを隠してきた（頭隠
して尻隠さずでも）のに。きっぱり頭で分けて考えているためであろ
う。

「今日のはどうだった？効果あったかな」

「希さん、顔が赤くなってましたわ。大成功です」

「良かった！やった!!」

「けど気を抜いちゃ駄目よ。王手はしてるけど、ここはIS学園。
次々に攻めないといけないわ」

「そこで私は思い出した。秘策、その二。次の作戦は――」

『希、気持ちいいかな?』

『とつても』

希は自室でマッサージを受けていた。ちなみに、やっと戻ってきた一夏が「俺がやるうか」と言ったのをヒロインズがたたき出している。「相手の疲労をほぐすマッサージ作戦だ」

「マッサージは受けるのもいいですが、自分から出来たらいいですよ。思い出してしまうますわね……またしてもらいたいですわ」

「家に疲れて帰ってきたとき、風呂上がりに親切にマッサージとかいわね」

「……実家でマッサージ技術を学ぶか。確かあったはずだ」

「だが、シャルロットはどうやって学んだのだ?」

「前に私が一夏さんにマッサージをしてもらっていた時に見ていましたから。それでやれるのでしょう。もしくは、既に学んでいたか」

シャルロットは恐ろしい子である。

「相変わらず要領がいいな。本当に一夏の方に参戦して来なくて良かった」

「全くね。正直、勝つのは難しいだろうし」

「シャルロットは何でも出来る。私も髪を溶かしてもらってるし、それがまた心地よい」

「才色兼備を備えていて、家事万能、胸も大きいですが大きすぎるわけでは無いです。それでいて、その、私たちと違って暴力も振るいませんし」

「正直、シャルロットの弱点はどこだ?」

皆が悩んだように頭を悩ませた。

「……怒ると怖い、でしょうか」

セシリアが一生懸命ひねって出した答え。

「でも、希ってあれを楽しんでるフシが……。しかもそれだけ普段穏やかかってことでしょうか?」

鈴が悩ましげに。

「えつと……日本とフランスとは距離が離れているな」

箒の答え。

「それは私たちより一歩リードしてるっていいたいのか？」

「今は一緒の目的のはずです」

「落ち着きなさい。ふうふう……落ち着いたわ、よし。一見そういつた意見かもしれないけど、箒の言う事は最もよ。ご実家の付き合いとか色々出てくるだろうし。でも、希や一夏がそんなの問題にするととは思えないけど」

「む、確かにそうか……」

「ラウラさんは何か思いつきませんか？同部屋ですし」

「……一つ、思いついた」

「何でしょう？」

「兄が言ってた。完璧すぎる女は持てない、と」

「セシリア良かったわね。料理が下手で」

「ずっと前の話ですわ！鈴さんこそ、胸が小さくて」

「そ、そ、そんな事無いわ。これだってここ一ヶ月で1cm増えたのよ！！」

「誤差だろう？そんなもの」

箒がぼつさり切り捨てた。学年最大の戦力を保持している人間だからこそ鈴には効いた。

「あ、あんたたちが異常なのよ！それに、箒こそ一番危ないじゃない！刀を取り出して！」

「何を!？」

いきりだした三人をラウラがたしなめた。

「みんな、落ち着け。ここで争ってどうする。争いは何も生まないと兄のお爺さまが言ってたと言ってた」

「む、確かに……悪かったわ」

「その、こちらこそ言い過ぎましたわ」

「私も、すまない」

「それとじっちゃんが言ってたって嘘よ。じっちゃんが言ってたって言うのは自分自身で言ってる事だから」

〇〇ってじっちゃんが言ってたと言うと説得力が増すから希はた

まに使う。中学時代はそれなりに多用していたので鈴は知ってた。「そ、そうなのか……それと、考えたのだが……僕と言っているが、これはどうなのだ?」

「それはそれで個性じゃない?僕っ子って需要があるらしいわ。ラノベ読んでいるからこっちも問題ないでしょ。僕っ子萌えーとかあいつなら言うわ」

鈴は付き合いが長いのでけっこう毒されている。

「確かに希さんはそちらにも精通してそうです……」

「ああ、確かに。ここ一番というときに私、とかになったらそれが萌えるという奴ではないか?」

「箒にしちや上出来じゃない」

「舐めてるのか、鈴」

「まあまあ……となると」

「シャルロットに欠点が無いということを決まりだな」

「悔しいけど、そうね」

「私もそう思いますわ」

「女として悔しいが、そうだな……いや!そうではない!シャルロットの欠点に関してではない!話し合ってたのは!」

「「あっ」」

『ねえ、今度は僕にしてくれないかな』

『そ、それは色々と、勘弁してください』

『しようがないな。でも、いつかして欲しいな』

中と外の温度差が広がった。

「空しいな」

箒がしみじみと言った。

「戦いとはそういうものだ、兄のお爺……じっちゃんが言ってたと言ってた」

「昔からある言葉よねそれ」

「ねえ、どうだったかな、どうだったかな!」

かなりハイテンションである。マツサージが終わったあと、ヒロイ

ンズを集めて言った言葉である。顔がワクワクしてて笑顔で、ああこりや希も勝てないわと思った。

「勘弁してくださいと言ってますでしたが、好意的な事だと思いますわ」

「一夏でも無ければ、同年代の女子に触れるのは恥ずかしいはずだ」

「だからちよつと遠慮してるのよ。効いてるわ、とても」

「兄を攻略する時は近い！」

すでにしてるも同然だが。

「そ、そうかな、うん。頑張るよ！それで、次はどんなのがいいかな？」

「そこでだ、秘策その三、次の作戦は――」

『こんな早起きでもいいのか？六時でも』

『うん、希と早く会えて嬉しいな』

『あ、ありがとう。俺も、その、嬉しい。……えっと、髪を溶かし方はこうでいいのか？』

『そう、そんな風。気持ちいなあ』

『髪を溶かしてもらおう大作戦だ！』

『ノリが良くなってますわね』

『当然だ。兄とシャルロットが仲良くなる、素晴らしい事だ』

ああ、こりや希が可愛がるのも無理は無いと三人は思った。何せ自分たちでも可愛がりたくなつたから。この純粹さを。

「相手がお礼に何かしようか、と言ってきた時に、簡単なお返しだが、ドキドキさせる技。希は一体どうしてこんなに思いつくの？彼女はいないかったはずだろう？」

「漫画とか小説とか読みまくってるのよ。ネット小説も読んでるか。しかも手に入ったISを使えば短縮できるし。沢山読んでも印象に残るのは効果的なものだから、質も高い。私たちも希の部屋にちよくちよくお邪魔して小説読ませてもらってるでしょ……やるよ」と忘れるけど。それと、ハーレム物間違つて見ちやうと無性に一夏を殴りたくなるけど」

専ら彼女らが読むのはそれ以外だ。ハーレム物を見ると一夏を無性に殴りたくなるからである。

「私ももつと本を読むか。文武両道の為だぞ」

「今更取り繕っても遅すぎますわ。さて、今日は本屋で買い物をする予定が」

「セシリアも似たようなものだ」

彼女たちは結構多忙である。鈴は別だったが、箒やセシリア、ラウラは引越したくさんだったり貴族の関係だったり軍事訓練だったりとで、知能レベルは高いが本などを読む暇はあまり無かった。このごろは希と一夏の部屋に入り浸ってはいるが、知識だけでは実戦では役に立たないを地で行っている。とはいえ、このごろは希の助言無しでもまともになってきてはいるが。

今更ながら言い訳がましく言ったのは会議の集中力が切れてきて、分けて考えれなくなってきたからである。虚しさが増してきたとも。

『そういうえば、ラウラは？やっぱり自主訓練？』

『うん、私たちと違うメニューをこなしてる。射撃訓練場で銃撃訓練とかも』

この学校には教師（軍人）などのために射撃訓練場もある。

『うーん、ラウラに合わせるか。もつと、強くないと』

『気張りすぎだよ。そんなに福音に負けたのが悔しかった？』

『いや……守れなかったから。その、シャルを』

『う、嬉しいけど……無理して体を壊したら、僕は辛いよ？』

『分かった、少しずつ上げてく』

少し目線を逸らしていた。

『栄養のある食事もしっかり作るからね！』

『期待してる』

「これで付き合っていないだと……？恋人になるとはどんなに難しいのか!？」

箒が戦慄した。

「普段の希さんと、全く違いますわ。こう、雰囲気気張っていないと言いますか、穏やかな」

「っていうかこれ、告白してないだけで付き合ってるのと同じじゃない?」

「それにしても……兄はシャルロットの事を本当に親しげにシャルと
言うな」

「それだ！一夏と二人きりの時は愛称で呼んでもらえばいい！ほう
……む？」

「えっへん！箒の生まれの不幸を呪ってなさい！私の愛称はリ……あ
れ？」

「ここは私の勝ちですわ！愛称はセツシーですわ！……あれ、何か違
いますわ……」

「私はラウラン……いや、ラウ？」

四人が馬鹿みたいに落ち込んだ。

『希が良かったらだけど、これから毎日してくれると嬉しいな』

『もちろん、毎日朝食作ってくれてるし。俺も、その、嬉しいし』

「ねえ！僕の今日の髪綺麗かな？希が整えてくれてね！」

「あー、うん。綺麗綺麗」

「すごく綺麗ですわ」

「すごく綺麗だぞ！私も兄にしてもらいたいものだ」

少し棒読みになりだしてきてた。ラウラはいつも通り元気だった。

「あれ？みんな元気ない？」

「そのだな、正直……二人があんなことしている間に四人ライバル
で集まって、鈍感相手に対策を練りながら見せ付けられてると、落ち
込む。かなり」

「見せ付けてる!?やった!!」

シャルロットの調子はうなぎのぼりで気付いていなかった。恋は
盲目とは言うものだ。

「次は？ラウラ、次は何かないかな！」

ラウラは一生懸命考えた。二人の為になると思い、ああそうだと思
い出した。

「他には、そうだな……あの方法を試してみよう」

『夕方の散歩もいいな』

『夕方が綺麗だね』

『夕方散歩作戦だ!』

「ラウラは元気だな。それに比べ……」

「仕方ないわよ」

「惨めな気持ちになってきますわ……」

IS学園は広い。木もたくさん植えられている上に、近くが浜辺なので公園には絶好の位置だった。

『でも良かった? 訓練とか』

『シャルからの誘いを受けないわけにはね。それに、時間はとってる。それにしても、海に落ちてく夕日はいいな。内陸に住んでたから』

『僕も。でも、こうして学園から見てみるのは初めてだね』

『何でこうしなかったんだろ』

『でも、これからあと二年と半分あるよ? 僕たちはまだ一ヶ月とちよつとぐらいしか会ってないのに』

『まだまだ先が長いな』

『だからいいでしょ? もつと思い出を作っていける』

『いい雰囲気だ。兄は凄い』

「これを落ち込んできたというのだろうか」

「落ちても日は昇るわ」

「また沈みますが」

三人はため息をついた。そのときだった。

「みんなここで何してるんだ?」

その言葉に四人はそれぞれ悲鳴を上げた。

「どっ、どうしてここに!?!」

「皆が希とシャルロットについてくのが見えたから、何かと思っってきたんだ」

そしてそれに希とシャルロットが気付いた。

「おっ、お前たちどうして!?!……いや、待てよ、まさか……シャル?」

察しが良すぎる希はあつと気付いた。

「あ、あはは、何の事かなー」

「……はー、まあいいけどね。むしろ、俺が悪いって言うべきかな。ごめんな、シャル。でもな、その四人、覗き見はそこまで感心しないぞ。俺もやってるから仕方ないけど」

「えっと、ごめんね?」

「失礼でしたが、どうしても気になりました……」

「分かった分かった。で、シャルに入れ知恵したのは誰?」

「私だ」

「へー、ラウラがこうしたことを発案できるようになったとは。嬉しい限……あれ?これまさか全部俺が教えたやつ?」

ラウラは胸を張って答えた。

「無論」

そう言うと希はため息をついた。

「お前たちな……その情熱をもう少し一夏に向けるよ?な?」

『はい、すみません』

「まっ、ひとまず今日は夕日見ていこう、皆で。たまにはこういうのもいいだろ。綺麗だし」

希が手招きをした。

「そうだ。ほら、皆」

一夏が四人の前を走っていた。それをみて釣られて走り出した。

三十一話 重圧

IS学園、そのアリーナで。

「せいっ！」

「やあっ！」

希とシャルロットが戦いをしている。福音事件以来なぜかシャルロットと勝負をしようとしなかったが、ここになって勝負を挑んだというのが流れだ。それを他の仲間たちが見ていた。

「あつ、そつちじゃないぞー！」

「接近戦を挑むのだ！」

一夏たちは口に出して応援していたが、鈴・セシリア・ラウラはじつと見つめていた。そしてぽつりと鈴が

「これは、駄目ね」

「残念ですが、同意ですわ」

「だな」

「どうしてだ？希は強い。まだ行けるかもしれないぞ。前より一段強くなっている」

箒の強気の見解に対して、鈴は首を振って

「希の強さってのは、相手の弱点を突く戦法よ。私なら距離をとりながら火力で潰す。ラウラに対しても、一夏に対しても。セシリアには速度と防御を両立させて、狙撃を狂わせるグレネード系統で攻撃しながら接近戦。豊富な武装と機体性能の高さの戦法。これにプラスして特殊武器や意識を意外性のある引つ掛け攻撃とか。でもね、シャルロットは希のことをよく理解してるし、頭の回転も早いから、引つ掛け攻撃も事前で気付くし、技術も高いから対処できるわ。」

希が遠距離火力でゴリ押ししても機動力が落ちた大和にラファールは十分追いつけるからシャルロットは接近戦にできる。だからと言って接近戦に持ち込もうとしたら弾幕と速度でなかなか追いつけない。私たちは特化だけど、希とシャルロットはバランスタイプなのよ。だから、希のどんな技術もシャルロットには勝てないから。唯一勝てる引つ掛けとか意外性のある攻撃もネタが切れたり、対処が早い

シャルロットに潰される。だから、勝てないのよ。確かに技術は上がってるし、押し込んでいるけど……焦ってるわね。いつもより安定してないわ」

事実、五分後に希は一発逆転を狙った特攻をパイルバンカーでカウンターされ、撃墜された。

「希、大丈夫？」

シャルロットが着陸した希に近づいた。希は起き上がって首を振り、

「大丈夫？」

「絶対防御があるし。はあ、ダメか……またか……」

「そ、そんなに落ち込むことないって！強くなったよ、一か月前に比べて。まだまだ夏休みにも入ってないぐらいだから。三年生ぐらいには僕たちを抜かしてると思うよ」

一生懸命に希を励ますが、希は空を見つめながら

「……三年生、か……えっと、4月から1……2……3……3回か。1ヶ月で1回か」

「何の事？」

「くだらないこと。さて、もつと強くならないとな、もつと……」

希は夜遅くまでトレーニングを続けた。

1ヶ月に1回と言うのが鈴の無人機、ラウラのVTS、福音事件とはシャルロットは気付けなかった。

数日後。

「セーのっ！」

テスト結果を全員で出し合った。どんな学園でもある学期終わりの風物詩、テストである。それも通常科目のテストである。

「あー、セシリアがやっぱ強いか」

「英国貴族として当然ですわ！」

貴族ってすごい、改めてそう思った。っていうか未だにイギリスっ

て貴族いるんだよな。名誉職みたいなものらしいけど。

「希は意外と悪いな」

箒がはて、と言うように言った。

「頭の回転が成績に結び付くとは限らないの。それにしても、やっぱ全員高いな」

俺と一夏がビリッ穴つて所か。他の女子たちもぱつと聞いたところ全員上だ。当然と言えば当然。下手したら倍率万倍以上の試験をくぐり抜けてやってきた猛者ばかり。スポーツ推薦生徒以外は全員偏差値60台後半行ってるし。つつーか、70台もたくさん。俺もそろそろIS授業付いていけない場所が多い。通常授業はマシだけど。ISの授業が多めに割り振られてるから。当然だけどね。それでも微妙な進学校ぐらいのレベルは普通にあるらしい。

「それにしても、セシリア。ありがとな、英語」

「いつもお世話になってますから。ただ、理解力が高い希さんにしては意外でしたが」

俺は英語が苦手だ。よって本場の英語を知っているセシリアに教えてもらった。中学一年から英語の塾をやってたけど、それでも学年300人中180とかそんなだった。理解力がそのまま成績に結び付くとは限らない。セシリアいなければ死んだかもしれない。教え方がしっかりしてたので赤点はかなり余裕で回避。クラス順では余裕で後ろだけどね。

「それより、俺にしちゃ箒に負ける方が意外だなあ。いつも剣振ってる姿しか知らないし」

「文武両道でなくてはならないからな」

大和撫子を正面から突き進んでるな、相変わらず。それと、腐っても？東博士の妹か。

「ラウラもそこまでじゃないな」

「通常授業はあまり重視してない」

軍隊関連重視って事か。小さい頃からそれ一本だけだっただろうし。物理計算は得意そうだが。砲弾を飛ばすのに必要そうだし。

「の、希。分からない所があるなら教えてあげるよ。僕の部屋で一緒

に！」

「えつと、嬉しいけどね。……うーん」

シャルの前ではそうした姿をさらしたくない。でも今更過ぎるし……。

「その、シャルロット。私も同じ部屋にいるのを心にとどめてくれ」

ラウラが抑え目に言った。ラウラにとってシャルは頼りになるけど逆らえない姉みたいな存在だろう。さて、意地張りたいけどどうするべきか。そんな心を見透かしたようにシャルが

「勉強が苦手だからって、みつともないなんて思わないよ？だって僕たちはずっと前からISについて教わってるから、ISに勉強時間を取られないですむけど。希たちはISに時間を割かないといけないでしょ？それに、希の役に立ちたいんだ」

「じゃあ、見てもらおうかな」

相変わらず押しが強いな、シャル。

「シャルロット、俺も一緒に――」

「はいはい、あんたは私たちが全員で見えてあげるから」

「そうですね、邪魔してはいけませんし」

「でも、お前たちISとか何となくで分かれとか言うし、こっちの通常授業もそうなりそうなの……」

理論派な教え役を探しているのだろうか。

「あのね、通常授業ぐらいいは普通に教えられるわよ」

「じゃあ頼むわ。……あつ、そうだ。鈴、前卓球で俺が負けてただろ？今日の午後休みだし行かないか？」

そう言うのと、鈴は柵からぼたもちみたいな顔をした。

「あつ、そうだった！福音のゴタゴタで忘れてたわ。ラッキー！！じゃあ駅前の噴水で2時に待ち合わせね！」

「分かった。じゃあまたあとで」

一夏は先に去って行った。一夏は多分そんなにカフェ行きたかったのかか思ってるんだろうなあ。そして睨みあう女子勢。鈴は素知らぬ顔をしているが。

「ずるいですわー！」

「先んずれば即ち人を制し、遅るれば即ち人の制する所となる、偉人の言葉よ！覚えておきなさい！」

こいつらに教えたくないのは将を射んと欲すればまず馬を射よ、に決定だけどね。だからと言って馬ばかり射ってくる根性無しは勝負で落ちるだけだろうけど。

「どうせ希さんに教わっただけなのでしょう？」

「でも私が一夏とデートする事には変わりはないわ！じゃあまたね！希も本当にありがとね」

そう言つて鈴も去つて行つた。そして残りの三人に睨まれる。

「私も何かありませんの!?!」

「兄よ、私に力を授けてくれ!」

「希、少し怒るぞ?」

「落ち着け、目が血走つてる。ひとまず、お互いに足を引つ張るのは止めるべきなんだ。ここは皆の経験値を高める為に、鈴を尾行するしかない!」

「希つて、本当にいい性格してるよね」

ジトツとした目でみてるシャル、こんなシャルも可愛い。怒つたときの笑顔もいいんだけどね。釣り橋効果ではないと信じたい。

「そんな褒めるなよ、シャル」

あははと笑いながら返すが

「褒めてないよ?」

余計ジトツと見られた。

「ですよねー。あつ、俺はパスね。訓練しないと」

まだまだ足りない。もつと、もつと強くならないと。あんな思いは、二度と。そう言うトラウラが目を細めた。

「兄よ、このごろ訓練を詰め込みすぎではないか?」

「今まで手を抜いてきてただけだよ。確かに最近は身を引き締めてたけど。手を抜いたというか、余裕があつたと言うべきか。問題ない。シャル、この三人の引率を頼めるか?」

「私たちを子ども扱いするな」

箒が無然と言う。危険な兵器を痴情のもつれの果てに使い出

すのはガキとあまり変わらんど。まあ、さすがに街中でISを展開する奴らじゃないと信じたいが。

「子供みたいなもんだろ？じゃ、気をつけてな」

「……うん、分かった」

そう言つて四人は鈴達を尾行する算段を整え始めた。俺は食事を取りに食堂へ真つ直ぐ進んだ。

「ふーっ、二人きりつてのも久しぶりだな」

「そっ、そうね」

二人は屋外の日陰のテーブルに座っていた。それを見てシャルロットら四人は影からこそそこを見ていた。ちなみに、鈴はとつくに尾行に気付いているが、問題なく上機嫌である。理由として、一夏が服をちゃんと褒めたから。希が一夏に『綺麗な物は素直に綺麗だと思えばいいし、可愛いと思えば可愛いと思えばいい、人として当然。だから女子と出かけたり待ち合わせする事になって、似合つてたら褒めること。漠然とした理由だけじゃなくてどこがもつけると良し』と言われているため。

「つくーいちやつきおつてー！」

「いい気になってるのも今のうちですわ、鈴さん。どうせ後から落とされるだけですわ」

その言葉にうんうんと二人も頷いた。

「えつと、顔を出しすぎだよ？二人とも」

「尾行がばれるぞ」

ここまで残念な美少女集団もそうはないだろう。女性に無礼したら逮捕みたいな法律がまかり通つていても普通ならナンパ男が餌に群れるハトの如くアタックしてくるはずだが、この状況ではためらっているようだった。デートをしているカップル（のように見える）二人を遠くから覗き見してる三人+たしなめてる一人。いくら絶世の美女パーティーでも関わりたくはあまりない。

「ともかくだ。兄とシャルロットの時と方針は同じだ。ここでいつま

でたつても足の引つ張り合いでは、先に進まん」

「希に言われたの?」

「無論。それと、交代で毎週出かけるという提案もあった。……む?」

二人の会話の内容を聞くと話の内容が変わっていた。

「なあ……このごろ、希って疲労がたまつてないか?」

普通、男女二人で他の男などの話を出すとあまり良く思われないだろうが、鈴にとつても一夏と同レベルで大切な相手なので不機嫌になど全くならなかつた。

「それね、あたしも思つたけど、訓練を増やしてるだけでしょ? シャルロットに負けたからよね。理由は分かつてるし、その志も立派だと思うわ。ほつといつて問題ないでしょ。どこまでも突き進むあんたじゃないのよ。どこかで危ないなら希は止まるわよ。それに、私たちも頼つてくれるわよ」

鈴から見た評価である。希は暴走し続ける人間ではない。どこかで危ないなら止まる人間だ。そして、どうしようもなくなつたら助けを求める人間だと信じてる。

「だよな。危なかつたらちゃんど頼つてくれるよな」

「その時支えてやればいいのよ。いつも助けて貰つてる分をね」

二人は立ち上がつてショッピンキングモール目指して行つた。だがそれを追尾せずにその場で四人は話しこむ。

「下手に妨害しても駄目だろう」

「上手でも駄目だよ?」

シャルロットがたしなめた。政治だろうと恋愛だろうと足の引つ張り合いは見るに堪えないものである。

「となると、追尾はどうする? データ取りのみか?」

箒が前のストーキングのようにするのかと提案した。だが

「いえ、正直……希さんの方が気になりますわ」

「確かにこのごろやつれていふと言ふべきか。重心もしつかりしていない」

「あれ? 皆意外と希の事見てるんだね」

シャルロットが驚いたように言う。

「当然（ですわ）だ」

「色々頼りになる。そして頼りになりっぱなしだ。こちらもしっかり気にかけるのは当然だ」

「私も同じですわ」

「兄の体調を知るのは妹の役目だ」

「……分かった。じゃあ、今日はすぐに戻って希を尾行してみよう。確かに、ここ数日体調が悪そうだから」

三人はしっかりと頷いた。

「とどめー」

午後三時を過ぎた頃、モニタールームから大和を駆る希の姿を見ていた。

「ふむ、いつも通りだな」

福音の事件が過ぎてから結構経っており、訓練も何度もしている。数日前シャルロットに倒されてからも訓練自体は、同じように感じるが

「ねえ……休憩する気配が無いよ？」

次の打鉄を駆っている女子生徒に声をかけ、そのまま試合開始……かと思えば、もう一人に声をかけ二対一の戦闘を始める。この瞬間明らかに変わった。2対1でのトレーニングは滅多にしない。

「二対一は精神を削りますのに」

「やはり福音の後、キレが増しているな」

一段階上になった、間違いなくそう言える。射撃技術から機体制御技術まで。全てワンランク分上がったと言える。そのような状態ではあるがあの時、福音を追い詰めた時には遠く及ばない。

「顔つきも険しいね」

被弾をするたびに苦々しく眉をひそめたりするが、十分後に何とか二人相手に辛勝した。そしてピットに戻るかと思えば、次は三人に声をかけた。

「エネルギーが切れるぞ？」

ラウラが疑問を呈すが、どうして必要ないか分かった。直後、背中に自由パックを展開。以前、福音の時に見せた火薬推進モデル。自由パックは幻影機動と違い、スロットで展開可能である。

「とっ、とめなきや!!」

シャルロットが飛び出そうとするが、他の三人が押さえつけた。

「はっ、離してよ！アレを使ったら骨折するかもしれないんだよ!」

「落ち着け」

箒がたしなめると同時に、四人は動き出した。希は全力で使うわけではないが、要所要所で使いながら的確に回避する。三人は様々な火器を使うが、被弾は一つもしない。一瞬の隙を見て希が一人に襲い掛かる。同時に火薬推進を使つてない刀を振りぬくが、女子生徒はギリギリかわした。さすがにあの威力は強すぎると判断したのだろう。パイルバンカー以上の威力を叩きだせる代物のため、体にダメージが入る可能性が大きい。

「扱いがああの時に比べあまいな」

「姿勢制御も問題がありますわ。正直言つて、性能の50%も引き出せていないでしょう」

ラウラとセシリアから酷評を貰った。三分後、希は一人を倒したもののそこで敗退。エネルギーが完璧についたためか、ピットに戻った。四人が物陰に隠れながら見ていると、希は空中投影ディスプレイに先ほどの戦闘データ出し、分析していた。その後、筋トレを二十分した後、十分ほどI.Sをいじくり回したり補給をし、訓練を再開した。そんな事をしながらピットの閉まる時刻が来た。休憩している時間は、自分の戦闘データを眺めている時以外無かった。

「よっす、どうだった?」

夕食の時刻、帰ってきた一夏たちにニヤニヤと笑いながら声をかけた希。ただ、四人は厳しく希を見ていた。

「どうした?」

彼女たちは、ピットがつかえなくなつた後、休憩をするでもなく屋

外でランニングをしていた。それからシャワーを浴びてここに来ていた。休んでいる時間は殆ど無いと言ってよかった。軍人生活に比べればマシなのかもしれないが、いきなり訓練を増やすのは明らかに体に悪い。

「いや、何でもない」

箒が言うが、それぞれ微妙に顔を悩ませていた。

「それより飯にしようぜ」

10時ごろ、ベッドに寝転びながらIS雑誌を見ていた希は声を上げた。

「あつ、もうこんな時間か。すまん、今日は寝るわ」

希は9時ごろまで様々な訓練をしていた。シャワー直後にはストレッチなどもしている。その状況を見て、その場に集まっていたメンバーは語りかける。

「ねえ、希。動きすぎだよな？」

「卑怯だが尾行させてもらった。あれはいくらなんでも無茶だ」

「私も聞いたわ。あんたはまだ十五歳よ？成長期なのに無茶すぎよ。っていうか、私たちを頼りなさいよ」

「体の使いすぎはむしろ悪いぞ」

一夏や鈴も話にいつの間にか参加していたので、希に注意を呼びかけた。

「だから、元々余裕があつたっていったら？」

「だからと言って、あれは無茶ですわ」

「雑誌などもIS関連だ。確かに福音の時は――」

「いい加減にしてくれ！俺は大丈夫だって言ってるだろ！……本当に、このペースはギリギリだけど問題ない。明日は丸一日あるけど、別にずっと訓練するわけじゃない。限界を超えるわけじゃないんだ。限界ギリギリじゃないと強くなれないだろ？」

「ねえ、希……僕、悲しいよ」

シャルロットが伏し目がちに言い、希は視線を逸らした。

「俺だつてだよ、あの時……あの時は運が良かった。でも、運が悪かつ

たら死んでもおかしくなかったんだ。

1カ月に1回だ。トラブルの回数は。次もあるかもしれない。三年生まで待てない。だからさ、もつと――」

「いい加減にしろー!」

次に怒鳴ったのは一夏だった。皆が驚いたように一夏を見る。

「何でも出来ると思ってるのか? 希。そんな皆に心配させてまで強くなりたいのか!?!」

そんな一夏に対して、希は立ち上がって叫んだ。

「俺は一番足手まといだろ! この中で!! お前たちは凄いや! 一夏は千冬さんの弟だし、箒は東博士の妹で! セシリアは射撃が上手いしBT兵器の稼働率が上がってきてる、鈴はあの機動を一年間でこなせるようになってる! ラウラはAICだけじゃなくて軍隊の技術がある! シヤルだって総合技術ならラウラより上かもしれない! それに皆代表候補生だ!! あの時確かに俺は誰より動いたさ! だけど次は!?! 次もあるのか!?! 強くならなきゃ足手まといだ! 俺は一般家庭で生まれたそれなりに賢い一般人だよ! お前たち以上に努力しないでどうしてお前たちと一緒に戦えるんだ!?! あの時の感覚、福音を倒せたあの瞬間! あれをいつでも使えるぐらいにならないと!」

重圧、まわりが出来る人間ばかりだからこそその重圧。このごろ訓練で搦め手に対する対策が随分取られ、勝率が下がっていた事も追い討ちをかけていた。そしてとどめのシヤルロットに対する敗退。希は叫んだ後、すぐに

「……す、すまん。屋上行って来る」

だつと駆けようとしたが、シヤルロットがその手を掴んだ。

「シヤル、その手を――」

「ねえ、希。僕たちはね、誰一人希を足手まといと思つた事は無いよ?」

「そうだとも。確かに剣の扱いは自信があるが、遠距離、中距離については良く教えてくれただろう?」

「私も、格闘戦について教えてくれましたわ」

「あたしは先読み技術とかかな。まっ、出会ったところから世話になつ

てるわ。……あの時のこと、本当にありがとうね。だから、頼りにしてくれないと、悲しいわよ」

「私は搦め手について対策を教えてくれている」

「俺だって、お前がいてくれて助かってるぞ？色々教えてもらってる。確かに俺は千冬姉の弟だし、箒は束さんの妹だし、セリシアは狙撃が上手いし鈴は安定して戦う。ラウラは軍人だから強いしシャルロットも総合的に強い。代表候補生でもある。けどな、大事なのはその人自体だろ？完璧な人間なんていない。千冬姉だって強いけど、頭は実際には動かす人じゃないし、家庭じゃぐうたらだし。お前はこの中で一番賢い。みんな助けられてる。だからさ」

「でも、でもさ。守れなきや、守れないと駄目なんだ……。シャルに火傷させちやつて」

希はシャルの喉の右側を見た。それでも、シャルロットが希の前に立った。

「僕はね、希が辛そうにしている姿は見たくない。それに、守られるだけは嫌だ。希も守れるような強さが欲しい。皆が、そう思ってる。一人だけじゃないよ。足手まといにもならない。希が一般家庭の生まれだろうとも、希自身が凄いつて皆思ってる。前も言ったよね、希はいつも胸を張って立派にしてるけど、内心は卑屈になってるつて。でもね、そんなことない。希は立派だって、僕が胸を張って言える。だからね、大丈夫」

ぎゅつとシャルロットが希を抱きしめた。

「希の居場所はここだよ。希は絶対強くなってくる。血縁だとか今の地位だとか気にしないで大丈夫。僕は信じてるから。皆も。希が自分を足手まといだと思わないようになるまで。だって、希は僕を簡単に救ってくれたでしょ？だから、大丈夫」

「……はー、まだ何か納得できないけど、分かった。自由パックとかも使うけど、それでも休憩時間とかをとってしっかり休むようにする。次の日に疲れをあまり残さないようにする。俺は、ちよつと冷静じゃなかった。ごめん。でも、今日は疲れた。ちよつと無理か、限界ギリギリじゃなくて超えてみたいだ。先に眠る。お休み」

そう言うと、シャルロットをギュツと強く抱きしめた後、ベッドに倒れこんだ。

「つて、あれえええ!？」

「つく、妬ましい。だがおめでとうと言うべきか」

「また明日ですわ、一夏さん、シャルロットさん」

「希のことよろしくね」

「兄を頼む」

「あー、俺も寝る」

「み、みんなー!？」

ぞろぞろ四人が退出し、一夏が声を出すシャルロットを無視して電気を消し、ティツシユで耳栓をしてベッドにもぐりこんだ。

「……嬉しいけどね……もういいや」

希に腕を回す。心臓はいつもより速く動いてたのに、心は飛び跳ねているのに、それでもいつもより穏やかに眠りについた。

次の日、誰よりも早く四人は起き出し、部屋の前に陣取った。四人が交代で眠ったりししながら見張り続け、七時ごろ。

「……よく眠れた。……あれえええ!？」

「お、おはよう、希……僕もよく眠れたよ。希が枕になってくると、すっごく眠りやすいな」

「そっ、その、光栄です。でも、腕を離していい?」

「……もうちよつとだけ、いいかな」

三十二話 希と鈴の微妙な関係

朝、時刻六時半。朝六時から起きてシャルの髪を溶かし、グラウンドを走り回ってる。死線を越えてからというもの、体全体の能力がアップしている。人体って不思議！だからと言って、訓練とかでもう手抜きをするつもりは無いが。

「アンタら朝から本当に元気よね。特に希」

「何だかんだでお前も元気だよな」

このごろ、早朝訓練参加者が賑やかになってる。夏休みに入るまだまだ前、そう、終業式の一週間ぐらい。湿度が高いこの時期も元気に走っていた。

「朝からは来るものがありますわ」

完璧超人に見えるセシリアもつらいようだ。俺もそつちに視線を向けないようにつらい。

「むう……私と一夏だけ……いや、希もシャルロットもいたが」

「ひどいね」

箒はご機嫌斜め。臨海学校が終わってから彼女ら全員訓練に参加するようになっていた。皆がやりだしたら次々加わらないといけなから大変である。最初は箒と別々でトレーニングしてたが（とは言え早朝訓練の半分は一緒だったけど。ランニングも一緒に走るようになった）、箒が俺たちと参加しだすとゾロゾロ集まった。乙女の努力は大変だ。箒が参加しだしたのは、周りに危機感を持ったからだろう。

話を変えるけど、世界各国から軍は無くならない。なぜか？他の国が攻撃してくるかもしれないから。だから他の国の軍事費が上がったらこつちも上げるのが普通だし、下げたらこつちも同様に下げる。でも上がり続けたら、最後には破滅だ。そうしないように世界各国が足並み揃えて軍縮するわけだ。

彼女たちもどんどんどんどん気付いたら既に泥沼！みたいにならないように気を使っている。一夏も四六時中女子といるのは辛からうし。

一夏が毎日弁当爆撃されるのも可哀想なので、毎日一人交代で弁当を作ってる。これを七月弁当協定と言う。締結は臨海学校から帰ってきて一週間後だっけな。ラウラ以外もろ被りをしたから。ちなみに、今日はラウラが当番だ。

「ラウラって弁当作れるのかな」

シャルが心配そうにしている。

「大丈夫、俺が教えといた」

軍人っ子にありがちな事を想定しておいたので問題なし。

他の奴らに負けたくない！と言ってきたので断れる訳無かった。断る必要はどこにも無かった。当然だよな！

蛇を焼けるぞ！と笑顔で言ってきたので頭をよしよし撫でてから料理本を読み込ませ、可愛いウサギのエプロンを着せてクッキングしたから。いやあ、可愛いな。とか思い返しているとジト目で見られた。シャルにだ。

「ラ、ラウラは可愛いから仕方ないし」

そう言うとき余計ジトツとした眼で睨んできた。当然だよな、こんな発言すれば。

「もう……あつ、じゃあ僕は弁当を作ってくるね」

「いつもありがとな」

「おいしく食べてくれて僕も嬉しいよ。じゃあ、また後で」

それを見送った後、鈴を振り向く。

「相変わらず、ラウラには甘いわね」

鈴もジト目だった。

「手間のかかる子ほど可愛いって言うだろう?」

「全く、希は」

「ハイハイ」

朝食時。それぞれ食器を取って食堂に集まった。

「ハイ」

「はい、箸ね」

「ありがとな。これ、水な」

「ありがとね」

鈴と隣の席に座る。俺の目の前に一夏の隣に箒とセシリア。シャルはまだいない。ちなみに、鈴はいつも一夏の隣に座るわけでない。一夏の隣が空席でもそれなりの頻度で俺の隣にも来る。

「よっす」

「おう。早朝ランニングは疲れるな」

「まあな。ほれ、お手拭」

「ありがと。はい、醤油」

何と朝から豪勢に刺身もある。俺の金をかけるべき所は食費だ。問題ない。

「あつ、マグロもらつていい?」

「ああ、いいぞ。そのかわりその肉くれ」

「いいわよ。はい、交換ね」

箸で鈴の肉を貰う。鈴は醤油にマグロを浸して食べた。

「やっぱ刺身はいいわね」

「和食の極みの一つだな」

そして水を一気に飲み干す。このごろ朝が辛いから水を多く摂取しないと。今まで以上に訓練に打ち込んでるからきつい。もう一杯欲しいなと思つてるとすぐに水が注がれた。

「はい、おかわりね」

「ありがとな。それで、一夏。今日はどこのアリーナが開いてるっけ?」

「第三だつたと思うぞ。近接戦闘だっけ?」

「ああ、それ頼む。箒も頼むわ」

「無論だ。二刀流を学びたいのだな?」

「一刀流の使いやすいとか威力が強いつてのがあるけど、俺の装備なら片手で使つても一刀流と同程度の威力が出せるからな。このごろやっと機体制御になれてきたから剣に手が出せる」

前までは慌てすぎてた。だからまず機体制御を覚える事にした。使い方間違えると危ないしね。

普通は片手で持った剣で両手で持った剣を防ぐ事は不可能だ。片手で振り下ろした剣は両手で受け止めることは結構簡単だ。ただし、俺のあの武装は違う。火薬で推進するから威力は両手で剣を振り回すのと同程度、もしくはそれ以上の威力が出る。さらに機体の推進を最大限に活かせばパイルバンカーを連射してると同じぐらいの威力も出せる。箒の二刀流とは勝手は違うにしても学べる点は多い。「分かった。それと、ずっと前から気になってたのだが……二人は本当に仲がいいな」

「えっ、誰が」

俺と鈴が首をかしげる。箒はため息をついて

「お前たちだ。先ほどのように作業を分担したりしながらしつかり連携を取っている「あつ、ご飯付いてるわよ」「ああ、すまん」それもだ。普通取った米粒を食べないと思うのだが」

んー、よくよく考えるとそうだな。

「ねえ、希ーご飯粒つけてー!」

隣でシャルが無茶な事を言う。

「みつともないから嫌だ。ほら、鈴。スカート乱れてるぞ」

「朝から運動したからだるいのよ。まあ、確かに仲が良くないとは言えないけど、それがどうかしたの?」

仲が悪い事が問題になるのは当然だけど、仲がいいのは問題になるとは思えない。でもセシリアが

「あまりに男女とかを気にしていないような気がしますわ」

「やめてよ、気になってくるでしょ?」

舌の置く位置みんなどうしてる!?!気にしちや駄目だよね!そういうこと。

「気になるから止めてくれ。さあ、早く食べよう。織斑先生が待ってる」

「うりゃあ!」

力をため、バスケットボールを一気に投げ飛ばす。そのときには既

に鈴が走ってパスを上手く取り、敵のガード一人を抜きさってそのままゴール。

「ナイス！」

「あんたもね」

体育は1組、2組合同だ。敵側の一夏は

「まだだ！」

「だよね」

個人技では一夏には及ばないが、突っ込んでくる一夏をサイドにずらしてそこをもう一人が突撃などの戦法で封じたりする。もしくは裏から鈴がこっさりやってきて奪い去るとか。俺のポジションは専ら自陣の防衛。ちよつと前衛に出るセンターって所。俺は一夏のようにバスケ部員でもないのに足元を走りながらボールくぐらせたりは出来ないの、ひたすら邪魔をしてまわりに比べて高い身長を活かしてゴール下を守るって戦法だ。相手の邪魔をするのはボールを運ぶのに比べ技術は低くてすむから。それに、

「リバウンド！」

ボールをゲットし、そのままためて一気に投射。ハンドボール投げは学年どころか全校一位だ。僅かのためで一気に持つていける。そしてそれを鈴が受け取って敵のガードにはばまれながらもシュートした。投げた時に入ると思った。

「ナイスユー」

ぱちぱち拍手をする。駆け寄ってきた鈴とパチンと手を合わせる。俺はバランス型だけど、正直言って役割別に分担して特化した方が強いチームが出来ると信じてる。軍隊がそれを証明してる。それぞれの特化を合わせる方が普通は強いって。鈴は小回りが利いてボール扱いも上手いのでアタッカーだ。こうした役割分担に文句を言わずやってくれるのでありがたい。

「さっすが、やるわね」

「お前らみたいにボールをくぐらせれないんでね」

鈴ももちろんボールを足元くぐらせたり出来る。でも、それはそれ、これはこれ。役割を分担して最善を尽くせば大体勝てる。役割論

理最強。ポケモンやったことないけど。

俺の特技は相手の位置を把握してのパスカットやパスの邪魔。長距離から近距離までの正確なパス。そして強い相手をゴール付近でマーキング。まさに

「一夏、やらせはせんぞー!」

「相変わらず厄介だな!」

ガンガン攻めてきてシュートを決めようとするこいつを相手にするこつ。

「ただでさえ厄介なのに、鈴と組まれると本当に厄介だな!」

「まあね!」

鈴と一夏が組んでも厄介だけどな!一夏がボールを持って、シュートしようとする。それを立ちかはばかって手を上に伸ばす。それでも一夏は撃った。入ると思った。が、

「あれ!?入ると思ったのに!」

一夏が叫んだ。惜しくも外れた。

まあ、バスケ部じゃなかったししかたないよね。上手いけど。

「やっぱ楽しみだよな。昼は」

食事と言う物は素晴らしい。本当に素晴らしい。今日は更に素晴らしい。なぜかって?

「兄よ、あーん」

Fantastic! Elegant!!今なら英語で100点取れそう!錯覚だけどね!!シャルと鈴の冷たい視線も気にならない!義理の妹がお弁当を作ってきてくれてアーンさせてくれる。一夏より先ね!

「美味しいよ」

「うむ、私が作ったからな!」

ああ、和むわ。

「俺、今感動してる……ラウラがこんなに大きくなって」

「まだ出会って二ヶ月でしょ!」

シャルがピシツと言ってきた。

「……まあ、真面目に話をするとそうなるのか。でも、ラウラは変わったな。本当に、普通の十五歳になってきた」

皆と笑いあつて、好きな人のために料理を作り、運動するのが好きな。……銃をブツパしてるけどね。けど、そうなんだな。

「言い忘れていたが、少し違うのだ」

ラウラが忘れてた、というような表情をした。

「えっ？ 違うのか？」

一夏も驚いたようだ。俺も驚いた。

「確かに体は十五歳なのだが、試験管では六歳の体まで育てられた」

ああ、なるほど。確かに0歳で試験管から出して軍人達が哺乳瓶でミルクを与えてあやしたりする姿はアホの極みだ。六歳ぐらいまで育てて教育した方がいいだろう。とは言え、急速な成長は体に悪影響だと思うが。試験管の中なら羊水とかより育ちやすくなるのか？

「試験管の中で一年間と、外に出てから九年だな」

ああ、なるほど。一年かければそれなりに負担も減る……のか？
んー、ISが出てきて以来凄まじい速度で科学が進歩してるしな。でもIS登場は10年前でピツタリ同じ時期だけど。ISの登場時期から科学が発展してる、のか。……束博士？ さすがに憶測か。

「だから実際には十歳なのだ」

へー、なるほどね。道理で純粹なわけだ。……おい、ちよつと待て。

あの時、あの日、俺は、ラウラに何をした。六月の終わりごろ。ラウラが添い寝をしてくれと言ってきた日。

あの日、俺はラウラに裸Tシャツをさせて、そう、外見十五歳？ 中身十歳のちぐはぐ幼女に裸Tシャツをさせて、本当の妹じゃないのにおにいちゃん呼ばわりさせて、ベッドに一緒にもぐりこんだだと……ッ！?

あの時、あの時がまさに俺の絶頂期だったの——
「いってええー！」

かつ!!と思つたら両足に鋭い痛みが走った。慌てて両方を見るとシヤルと鈴が笑顔で足を踏み抜いていた。

「ねえ、今はご飯だからね？」

「そうよ、希」

「え、あ、はい。すいません」

凄まじい圧力だった。ラウラにアーンされてる一夏を見てぶん殴りたくなかった。

「ねー、その漫画とってー」

「あいよ」

夜、全ての訓練を終えてほっと一息俺たちの部屋でそれぞれがくつろいでいた。とくに鈴なんか俺のベッドを占領してぐてーっとなってる。全く、一夏がいるのにそんなだらしない姿見せるなや。そんな事をしてるとベッドに座っていたシャルが

「本当に二人は仲がいいね」

ちよつとじーつと睨みながら？言ってきた。やーだなー、鈴とはそういう関係じゃないよ。昔はちよつとね。

「長い付き合いだからよ。もう三年も前なのよね」

「だなあ」

「それでも、本当に仲がよいと思いますわ」

んー、やっぱそう見えるのかな。否定する要素が無いし。仲良くやれてると思ってる。

だが、次の日事は起こった。

「おはよう……どうした？」

「別に！何でも無いわよー！」

いつも俺に対してはそれなりに平和的な鈴がつつつけどんだった。あれー、俺何かしたっけ？髪の毛を逆立てる方法教えて欲しいなー。どうやってるのソレ？一夏が俺に耳打ちして

「鈴の事、胸が小さいとか言ったり着替え中に覗いたりとかしたのか？」

そのまま弁当を作り去っていった鈴を見送りながら、一夏にコブ

ラツイストをかけたつ昨日の事を振り返る。昨日は漫画を読み終わった後、適当な時間になったからそのまま皆で解散した。それまで平和的だったのになぜだ?となると、それより以前の事が何かしら伝わった?んー、聞いた方が早いけど、あの状態の鈴はどうして?と言っても答えてはくれないし。それならこんな事にはなっていない。当然である。

「ちよっ!ギブギブツ!ギブアップ!!」

「へい。それで、何か心当たりは?」

「希が知らないなら俺が知ってるわけないな」

そんな自信満々で言われても。こいつは本当に役に立たない時は役に立たない。

「おい、言い過ぎじゃないか?」

心読めるならもう少し役に立ってくれよ。

「となると、他の奴らから聞くしかないか」

本人に聞いて駄目なら周りからだ。基本の戦術である。

「えっ?鈴さんが怒ってるですって?一夏さん!また変な事を!!」

「何?鈴が怒ってるだと?一夏!貴様、また何かしたのか!!」

「鈴が怒ったの?全くもう、一夏ったら。少しは女心を分かって上げようね。その……希みたいに、ね」

「何だ……すっげえ納得いかねえ……」

「当然の結果だろ」

横で一夏がうめいてた。とは言え、ちゃんと解決に付き合おうって心意気はやっぱりありがたい。こういったところはやつぱモテる所だよな。ここでじゃあさいならする奴じゃないから。ここでさいならするような奴なら俺はあの時、鈴を怒らせた時助けはしなかっただろう。

誰かを怒らせるには相手の凶星をつくとかその人にとって大切な相手かどうかが重要だ。どうでもいい他人にお前はバカ!とか言われても傷つくわけ無い。何百人に言われたらどうだか知らんけど。でも、信頼度が高い相手に見損なつたぞみたいなきことを言われると当

然傷つく。好きな相手に、つまり一夏に俺たち一生友達だよな！とか言われたら彼女らは立ち直れないだろう。表面上は明るくあ、当たり前じゃない！とか言いながらも裏では泣く、絶対に。その後始末は多分俺がすることになるが、仕方ない。割り切れる。

だから俺たちレベルで関係を結んでる相手の暴言じゃないと鈴は傷つかない。そして、俺は鈴に一線を越える暴言を吐いたことは無いと信じたい。基本的に友達の間ではその本人の前で悪口を言うのが俺の主義。先生の悪口は友達の間で言うのが主義。で、鈴が怒りそうなキーワード、貧乳を一夏との間で使った事は無い。というか使う状況ってヤバ過ぎる。本人の前で軽口で使いそうだったのはあるけど、いつも一線は守ってる。

よって俺は詰んだ。何が原因か分からなくなった。自慢の頭脳も情報がなければ役に立たない。極論すれば世界一の料理人を連れてきても材料が無ければ料理を作れないのと一緒にだ。ただ、シャルが最後に希望を与えてくれた。

「そう言えば昨日、ラウラと話した後には不機嫌になってたような」

らしい。ラウラ自身は機嫌の変化は無かったそうだ。そこでだ。授業も全て終わり、特訓も終わり夜もそこそこの時間。シャルとラウラの部屋に転がり込んでいた。

「なあ、ラウラ。昨日鈴と何話したか覚えてるか？」

「昨日？む、そうだな……あの日の事だ。福音に挑んだ日のこと」

「あー、アレね。……忘れられないな」

あの日は絶対に忘れない。忘れちゃいけない。あの時の想いをしたくないから、今さらに努力してる。ISを使って楽しみたいだとかの理由じゃなく、あの時みたいになりたくないから今、努力してる。「で、どんな事を？」

「その、だな……あの時、兄はシャルロットを傷つけたと言っただろう？俺たちの問題だとも」

「ああ、言ったな」

あの時は誰にも相談できない問題だ。俺が解決しないといけない事だったんだ。出来たかどうかは別として。

「でもどうしてそんな話になった？」

あの日の事はあまりぶり返したくない事だろうけど。俺は今でも毎日思い出すが。

「むう……そうだ。鈴が言ってた。『いつも希に相談してもらってるけど、頼りすぎちゃダメよ。アレでも中学校の時負担になってたから。……私が言うのもどうかと思うけど』と言ってきたから私も兄の相談に乗ってるぞ。シャルとの事もだと言った」

「まー、確かに相談に乗ってもらってるけど」

シャルと同室のラウラはちよくちよく相談に乗ってもらってる。シャルの好きそうな物とかそうした奴。いやね？その、プレゼントとかする必要もあるかもしれないし？

「それで福音の日の事を話したら、そのときに不機嫌になったと思うぞ」

「そうか。うん、ありがとな」

収穫、全く分からん。こうなったらしかない、最終兵器DOGGEZAでも使うか。女の武器が涙なら男はDOGGEZAだ。DOGGEZAならなんだってやれる。これを覆す最終奥義はHRAKIRIかSEPPUKUしかないので困る。

「なあ、希」

「何？」

今DOGGEZAの型をどれにするか迷ってる最中なんだけど。

「あの日って鈴もお前の事気にかけてたよな？」

「ああ、そうだな」

「それだよ！それ！」

「つまり、どういうことだっばよ？」

何が何だか分からん。でも一夏は笑って言った。

「大丈夫！さあ、鈴に会いに行くぞ！」

「えっ、ちよっ、まっ」

手を引っ張られて「あっ、希いたの？ってすぐ行っちゃうの!？」出て行った。

「何よ？屋上になんて呼び出して」

怒りながらも鈴は屋上に来てくれた。七月も中盤を過ぎてる。日差しは無いけれども、ジメジメとした感覚が俺たちを襲ってる。

「鈴、まあ気持ちちは分かるぞ」

そしてしゃべってるのは俺じゃなくて一夏である。

「一体何が分かるっての？」

「そりゃ、出会って一ヶ月程度してない相手のが自分より信頼されてたらいじけるよな」

一夏がそう言うのと、鈴は顔を真っ赤にした。つて、えっ？

「なっ、何が私が希に信頼されてないよ!!」

……ああ、なるほど。そういうことか。あーあ、悪い事しちゃったなあ。

「べっ、別にラウラにはシャルロットの事を話したのに、アタシに対しては何も言わなかったのが悔しかったとかそういうのじゃないわよ!!」

鈴はちよつと涙ぐんでいた。俺は黙って近づいて頭を撫でた。

「なっ、何するのよ!」

「ごめんな。別にラウラの方を信頼してたってわけじゃないんだ。ただな、見栄を張りたかっただけだ。鈴にはな」

「……バカ」

しばらく撫でた後、手を離れた。そして海のほうを見ながら話した。

「あのさ、俺はずっと立派だっただろ？一夏の事もぱぱと解決してさ。それなのに、シャルに対してみっともない事をした自分を見せたくないかったんだ」

そう、単純な理由。でも鈴は納得して無いようで、ゴシゴシ涙をぬぐいながら

「ラウラに対しても同じじゃないの?」

……んー、まあいっつか。ばらしちゃっても。

「あのさ、俺、鈴の事が好きだったんだ。異性として」

そう言うのと空気が固まった。と思ったらガタンとどっかで音が大き

きく響いた。ラウラの大丈夫か!?!と言う声も階段あたりから。目の前にいる一夏が訳の分からない顔をして、鈴は顔を真っ赤にして「えっ!そっ、その!?!そりや嬉しいけど!?!すっごく嬉しいけど!?!アタシには一夏がいるし!?!アンタもシャルロットがいるでしょ!?!だから、その!!」

その慌てふためっぷりが可愛くて、面白くて俺は笑った。

「落ち着け。だっただって言っただろ?今は違うよ。あの時さ、好きだったんだよ。まあね、そりや料理も出来て良く笑って、元気で可愛くて。でもさ、あるバカがいたからな。無理だって分かった。それでも、付き合えないと分かってもみつともない姿を見せたくなかった。その名残かな?そんな所」

淡い恋心みたいなものだった。

「あー、なるほど。お前って鈴が中国行ったとき悲しんでたよな」

「うっせ。まあ、中学二年も終わりの頃には恋愛感情は吹き飛んでたけど、それでも、みつともない姿は見せたくなかった。そういう事」
「……全く、意地っ張りなんだから。希はいつでも」

鈴は顔を紅潮させながらも笑っていた。

「男は意地を通してナンボだよ」

「それで、今はどういう風に乗ってるの?」

よし、ここでギャグを決めよう!明日に引き摺らないように。

「妹だよ!すっごく可愛い妹だよ!!お兄ちゃんと呼んで欲しいね!!そう、こう、手を胸あたりでぎゅっとしながら」

直後、俺の死を復帰したあの時から明確になった直感が叫んだ。横にドバツと転がり込む。俺がいた空間を何かが通り抜けていった。飛んできた方角をみる。ラウラが視界の隅にいた。すっごく怖がっていた。そして視界のど真ん中に、ラファールを装備したシャルが。「希、ラウラだけで妹はいっぱいだと思うよ?あとね、鈴が好きだったってことは別にかまわないよ?これは言っておくね」

あれー、まさかさっきのラウラの大丈夫か発言は一緒にいたシャルに対してですか。そりやね、良く考えたらあの状況で屋上に出てきたからシャル付いてくるよね。

「あ、あのですね。ちよつとは鈴の事を妹と思つてますが。今はギヤグつぽくいつてこの場を和ませて明日に引き摺らないようにしたかっただけなんです。はい」

「へー、そうなんだ」

シャルは一步ずつ近づいてきた。俺は仕方なく、こう言うんだ。

「おつ、俺は無実だ!」

「うん、今回はそれ絶対無理」

俺の悲鳴が木霊した。

「うー、酷い目に合った」

散々追い回された後にシャルと仲良く千冬さんと説教を受けた。しかもその後「見境が無さ過ぎるよ」「人類皆兄弟じゃなくて姉妹って言いたいのか?」「妹萌えが過ぎるよ」とかネチネチ文句を言ってきた。そんなところも可愛かったけどね。でも、睡眠不足は仕方なかった。昨日の疲れの為、七時に起きる羽目になったがどうにか問題無さそう。食堂の途中でばったりと鈴に出会った。

「おつす。昨日のは冗談だ」

でも、鈴はふるふる震えてたかと思うと、すつと俺に距離を詰めて俺のネクタイをきゅつと縛った。

「ネ、ネクタイが曲がつてるわよ!希おにい!」

顔を真っ赤にふるふるさせながらやる鈴が可愛くて、面白くて、すつごく笑った。

すぐに蹴りを入れられた。しかもそれ以降は普通に希。

俺はあの時みたいに命を賭けた戦いが好きな人間だ。シャルが傷ついてしまったけど、あのときの感覚は、感情は否定できない。でも、こうした日常もあるからこそあの時も輝く。

この時間を守るように、力をつけないとな。

三十三話 夏休みの始まり

八月、IS学園は夏休みに入る。そう、子供たちにとって最も楽しみであると同時に最もつまらない終業式が今日終わった。そう終業式が終わったのだ、この退屈な終業式が終わったと同時に楽しい夏休みが始まる――

と思っても俺はそこまでじゃないけどね！そりや中学校の時は楽しかったけど、今は面白い奴が多いので学校も楽しい。特にISでバトルが。あー、でも企業に出向けば一日中ISぶん回せるだろうからそっちも楽しいなー。今年の夏はいかな、やる事がたくさんすぎる。ISぶん回して強くないと。あー、ISだけでも駄目か。勉強も出来るようになってないと。

さて、それより問題はシャルに関しての事。

「それじゃ、やっぱり一度帰るわけだな」

まだ人がたくさんいる教室の中で最後の確認を取った。既に一週間ぐらい前から計画していたらしい。

「うん、お父さんと一度話し合っってこようと思う」

シャルは一度帰国することになった。とは言え一週間以内には絶対帰ってくるらしい。今日出発して、早ければ四日程度で帰ってくる予定だそうだ。

「それじゃ、気をつけてな。もし何か危ない事があったらISで知らせてくれ。すぐ駆けつけるから」

「もう、心配しすぎだよ。でも、ありがとね」

シャルは事件に巻き込まれる要素が多すぎ。不安でしようがない。普段はしっかりしてるけど、たまに油断したりするし。あと何よりかわい。

「それじゃ、またね」

雑談したりしながらいつの間にか外に出ていた。手を小さく振って、去ってゆくシャルを俺も手を振ってお別れをした。その影が見えなくなると同時に背後で心配がした。

「あら、希さん。お見送りですか？」

「まあね。セシリアも帰るのか」

「はい、家の職務や代表候補生としての報告、ブルー・ティアーズの再調整など。そして……両親の墓参りも」

「そうか、そういうやセシリアの両親は死んだのか。全く、一夏の両親は蒸発、鈴は離婚、箒は離れ離れ、シャルは今から話し合い（母死亡）、ラウラは両親いるの？状態。まともな親子関係してるの？いな。俺は中学までは普通だったと確信してるけどね。」

「ともかく、デリケートな部分は皆隠している。セシリアも両親の事は特に話してこなかった。既に死んでいるとしか。」

「シャルの事は一夏ですら知らない、と思う。友達の間で隠し事は無しね！なんて事を俺は思わない。それぞれ秘密にしたい事がある。だからそれでいいと思う。秘密があるやつとは友達になれないなんて言うやつ絶対信用しない。」

「ともかく、セシリアは表情を硬いものに変えた。いつもとは全く違う顔に。」

「少し、時間がありますわね。時間を頂いてよろしくて？」

「もちろんだとも、レディー」

「少し、空気が変わった気がした。それも、重い方向に。」

「私の両親は幼い頃……と言っても数年前にですが死んでしまいました」

「レディーに立ち話させるのもどうかと思ったが、ベンチが置いてないのでIS学園の前で立ち話の格好となった。俺は壁にもたれかかりながらだがセシリアは由緒正しいお嬢様なのでそんな事はしていない。立派な姿勢だけでも、少しうつむいたままポツリポツリ話してゆく。」

「そして両親についてですが……私の母はとても立派なお方でした。わがオルコット家を切り盛りし、たくさんのお金を会社を経営して受け継いだ家を更に発展させた私の理想とする人です」

「普通、人と話し合いするときは適度に相槌を打つのがいい。そうし

た方が話を聞いてくれてる感が出るからだ。ただ、ここはずっと黙って聞く。もたれかかって聞くのは、いつも通りの自然さを少しは出すため。あまりに真剣だと向こうも困るだろうから。

とは言え、俺を見てはいないようだけど。

「ただ、父は違いました。名家に入り婿をした引け目なのか、父はいつも母の顔色ばかりをうかがう人でした。さらにISが発表されてから父の態度は益々弱いものになりました。母はどこかそれが鬱陶しそうでした」

それつきりセシリアは黙った。そして以前の態度に納得がいった。セシリアが話そうとしないので、こちらから切り出した。

「なるほど、セシリアの一番最初のあの態度に納得がいった」

「そ、その事は忘れてください！」

男・女を嫌いになるぱつと思いつく理由として男・女どっちかに酷い目に合わされたとかそんなところだ。こっぴどく振られた男・女はそれぞれ恐怖症になる。男を見下したセシリアの態度はセシリアの最も身近にいた男、つまり父親がみつともなく見えてたから。それが、立派な男(?)の代表、一夏によって吹き飛んだ。

更に付け加えれば、普通に恋する乙女になったから家の重荷とかを少しおろしたくなつたのだろうか?だから高飛車なところも改善された、とかだろうか。まあそつちはいいや。

「なるほどね……父親はどういった男だったのか、つてことか?」

「……はい。私から見ても希さんは尊敬する人です。今までたくさんのお話を解決してくれましたし、解決したのを見てきましたわ。福音の時の勇姿も覚えています。だから、尊敬する男性である希さんから見て父はどんな人間でしょうか?」

一夏には聞かないの?なんてことは言わない。たぶん、励ましはするだろうけど解決は出来ないと思ってるだろうから。

ふーん、まずそうだな。

「やっぱり断片だからなんとも。一夏だって傍目から見たら女にだらしない優男だしさ。俺だって断片的に伝えられたらいつもニヤニヤして胡散臭い事考えてる人だし」

客観的にみることは大切だ。とても。

「そんな事ありま……せんわ」

もつと強く否定してほしかったな。矛盾する心である。

「さて、ジョークは置いといて。ぱつと思いついたパターン一つ目。お父さんは本当にダメ人間だった。そしてお母さんは実際にはダメ男が好きだったパターン。二つ目、位の低い物を置いて自分を高くしようとしたパターン……は無いかな。それだけ立派な女性なら比較なんかしないか。最後に三つ目、実際には父親は立派な人だったパターン、これ超大穴」

「立派？いつも母の顔をうかがっていたお父様がですか？」

疑わしげに俺に尋ねる。そりや当然だよな。

「つまり撒餌って事。だらしないフリをして他の企業の連中や自社のお母さんを快く思わない連中にこいつはねらい目だとか思わせる方法とか。そしてやってきた相手をお母さんに知らせてるとか。ただ、確率は低いよ？」

「そう、ですか」

ちよつと納得していないような。だろうね、俺もそうだったらいいなって思っただけだし。幾らなんでも情報が断片的過ぎる。推理物の主人公たちを連れてきても分からないとしか言えないと思う。実地検分しようにも、俺はこれでも世界で二人のIS操縦者。シャルの里帰りに同行しようにも国&企業から駄目だと言われたので本当にしようがなく諦めたのだ。セシリアも同じくだろう。

ただ、これだけは言える。

「父親が立派だったかどうかはセシリアがどうかには関係はしない。俺は、お前の狙撃技術が凄いと思う。テストで一位を取る努力と才能を兼ね備えてるお前の事を尊敬してる。優雅に振舞う白鳥は水面で努力してるのを知ってる。だから、悩みすぎるなよ。まっ、父の書齋とかをもう少しさばくって何か判明したらもうけものぐらいいにでも思っとけ」

精々これだけの事しか言えない。論点のすり替えみたいなものだけど、心からの励ましでもある。だから、これでいい。

でもセシリアは不思議なものを見るような眼で

「……たまに思うのですが、本当に希さんは同年齢なのでしょうか？十歳は年上に思えますわ」

「そんなに老けてるように思える？で、実際にはアニメや小説やらの受け売りだよ。その中で、俺がそうだと思ったのを伝えてるだけ。それじゃ、気をつけてな」

「……ありがとうございます。良い夏をお過ごしください」

そう言つて、ロールスロイスが迎えに来て去っていった。

さて、何をしようか。今残ってるのは俺・一夏・鈴・ラウラ・箒か。もしくは適当にアリーナで練習してる生徒と多対一の練習でもしようか。んー、やっぱりラウラにみっちりしごいてもらうかな。もっと強くならないと。

「ラウラ、いるか？」

「む、兄か。開いてるぞ」

「あいよー。夏休みに入ったな。ラウラは国に帰る予定は無いのか？」

部屋に入ると制服姿で椅子に座っており、ISの資料を読み通していた。ISの資料は絶対に見せようとしな。そりやそうだ。俺だつてシャルにも一夏にも見せたことないし。一夏もシャルも俺に見せたりしない。信用してないわけじゃない。ただ、企業の人たちへの礼儀つてやつだ。

ラウラは見てた資料を閉じて俺に顔を向けた。

「今の所は無い。新たに予定が入る事も無いだろうが」

一番忙しくなると思つたけどな。可愛い妹だけど正規の軍人だし。

「今日の午後空いてるか？ワイヤーの扱いをレベルアップさせときたくて」

ワイヤーは使い方ではすさまじい武器になる。ワイヤー（だけじゃないけど）を上手に使い鈴とセシリアをまとめて相手にしていたのだから。後から戦闘データを見て実感した。小説漫画アニメでもワイヤーはとにかく活躍する。実際の戦争だつてトランプにも多く使う。

人類の歴史にだって最古参から登場するメンバーだ。それだけ汎用性がある。

相手に当ててガツシリと掴めば、引き寄せて殴る事も出来るし射撃の時に精度を乱すことも出来る。もっと上手になっておくべきだ。

「分かった」

「段々と良くなってきてはいるぞ」

「ありがとな」

昼食を食べ終わってからずっと戦い続け、いつの間にか時間は五時になってた。エネルギーが尽きたらエネルギー回復プラグにぶっ刺してその間にラウラから反省点を貰った。

「ただ、あのような使い方もあるのだな。野外戦での参考になる」
「アレね」

地表すれすれで戦ってる時、ラウラが突撃してきた瞬間に急上昇とともに地面にワイヤーを打ち込む。そこに引っ掛けてというわけだ。とは言え、ドーム内部では壁に刺そうとしてもシールドに阻まれて無理なだけで。実戦専用（超低空地上戦）と言うわけだ。あまりしたくはないと思うけど、同時にしたいと思ってしまう。あの時の高揚感。……いかんいかん。また誰かが傷つく。

「だがまだまだ甘い所がある。だがそれだけでもっと強くなれるという事だ。分かったな、ルーキー」

体は小さいのに、頑張ってるラウラを見ると励みになった。もっと頑張らないとな。

「了解です、軍曹」

ちようど目の前に一夏たちが現れた。別のアリーナでやってたのだろう。手を上げてよっすよっすと挨拶する。

「調子は？」

「ボロクソにされた……」

一夏がうげえとした表情で。

「一番最初は優勢だったけどとかだろ？まあ、あんな燃費悪い機体

使つてりやなあ。俺と真逆だもんな」

俺の機体は前言ったとおりラファールの機動性と収納領域、打鉄の安定性と防御性を兼ね備えてる。安定性だけなら鈴の機体すら凌ぐ。燃費は重量が多くてちよつと悪いが、誤差レベルだ。しかも最近改善もされてきてる。大和は現状、第三世代最強機体と言つて過言じゃない。というかそうだ。俺が代表候補生たちに渡り合えてる理由の一つでもある。

「せめて燃費がもう少しよければなあ」

「零落白夜を当てる瞬間だけに使うとかその他試してみても、どうしても限界はあるしね」

鈴が続けて言った。

「雪羅も一発放てば大きくエネルギー削る事になるから仕方ないな」

箒も頷く。全く、なぜまた玄人使用に一步足を踏み入れるのか。やったね一夏くん！遠距離武器が増えるよ！↓単発でしかぶつ放せない大口径砲というひどさ。あまりにも酷い。俺の機体がそんなだったら苦情を開発部門に叩き付ける。

「はー、どうしてこんな進化しちゃったんだ……」

「坊やだからさ」

「いや関係ないだろ？」

坊やだからさつて使いどころありそうでないような微妙な言葉だよね。

「まーまー。諦めろつて。住めば都つて言うだろ？俺は実戦じゃ使いたくは無いな」

「酷いぞ」

一夏はため息をついた。

「んー」

シャワーを浴び終わつて着替え終わり、ストレッチが終わつた。時刻は十時。後は適当に時間を使つてくつろぐだけだ。

「ストレッチ終わったか。マッサージはいらぬのか？」

「ああ、大丈夫。……始まったな、夏休み」

「だな。色々あったな」

「だなあ」

四月（以前にもあるが）にはセシリアと騒動、五月に鈴が転校してきて無人機ヒヤッハー、六月にシャルとラウラが転校してきて一夏をバシンとかその他色々。最後には機体が暴走してた。そして七月、思い出したくないと同時に忘れてはいけなくて、そして最も高揚したあの福音事件。

「……幾らなんでも色々ありすぎだな」

素直に思ったが。幾らなんでも詰め込みすぎだろ、イベント。三年分消費した気分だぞ。……実際には命巻き込まれるイベントなんて三年どころか一生でも一回ぐらいのはずだけど。

「……意外とあったな」

一夏も領いた。問題はこれから起こる可能性があるわけだ。色々。まだ四カ月だ。このペースでまだ起こるようなら卒業までに二十回以上はイベントが起きてるかもしれない。いくらなんでも多すぎだ。日常に利かせるスパイスにしては。

「まっ、これから何かあったとしてもどうにか解決できるだろ？また皆の力でさ」

「……まあ、そうだろうな」

別に一夏を巻き込むことはそこまでは深刻に考えない。痴情のもつれ以外には地獄に行かず死にもせずだろうし。第一、一夏だって俺を巻き込むことはあまり躊躇わないだろう。さすがに突っ込んだら100%死ぬよ！みたいなイベントは俺もあいつも躊躇うだろうが。

でも、他の皆はあまり巻き込みたくない。男の意地って奴だ。俺達二人が下から数えた方が早いぐらいの腕なのは知ってるけど、それでもあまりあいつらに危険な目は会わせたくない。あまり、だけど。ただ、シャルには絶対かな。

「もつと、強くないとな」

一夏も承知してる事を静かにつぶやいた。

「勿論だ」

追記 シャワーを浴びたらしいラウラが可愛いパジャマ（一夏たちが選んだ。シヨツピングモールの時）に濡れた髪を拭いてくれとやってきて、さらに鈴と箒が乱入。初日から千冬さんのお世話一歩手前でした。だから大小イベント多すぎじゃ

三十四話 それぞれの決着

「久しぶりですわね、お父様の書齋は」

セシリアは全ての予定をこなした後、亡き父の書齋にいた。日本への出立は残り半日までとなっていた。

「……ISを使うのは最終手段にしましょう。あるかは分かりませんが」

ISのセンサー類は凄まじい効果を発揮する。希などはちよくちよく使ってるが、部屋の内部は大体丸分かりには出来る。ただ、どの機能も無許可で使うと厳罰の為、最終手段とする事に彼女は決めた。

ひとまず戸棚に向かった。経済専門誌、企業の雑誌、経済学の本などに偏っていたかと思えば相手の気分がよくなる会話術、人の心理学、などもあった。かと思えば娯楽小説もあった。そして端にまで眼を移すと

「あら、アルバムがあつたなんて」

親が死んでからは彼女はがむしやらだった。十二歳で親を亡くし、家を守るためにひたすら頑張っていた。家の整理は専らチエルシーに任せてたためこの事には気づいていなかった。

「懐かしいですわね」

ペラペラとページをめくる。自分が赤ん坊のころの写真があつた。自分の記憶にある限りはあの二人が笑ってる姿は少なかったから意外であつた。段々と自分が成長してきて五歳ぐらいまでの写真が載っていた。両親や自分も、結構な頻度で笑ってる姿が写っていた。

二冊目に入った。

「十年ほど前……」

過ぎ去ってみると短い時間。自分も段々と大きくなってゆく。ただ、前の一冊に比べ笑ってる写真が少ない気がした。……それも、かなり。そして、最後ちようどぐらいで写真は無くなっていた。セシリアの姿は十二歳で。

「……あるかどうか分からないものを探すなんて」

部屋をくるくるまわり、物をどかしたり、引き出しにあったコインをどこにあてはめるべきかなど一瞬考え恥ずかしがる。更には一生懸命小説や漫画の知識を動員してありそうな事を片っ端から行うが全て無駄だった。

「傍から見たら変人ですわね」

どっと父の椅子に座り、机に突っ伏した。直後にいけないと思い背筋を伸ばす。そして机の上に置いておいたコインを元の引き出しの内部にしまった。その時、

「……今の」

感触に違和感があった。引き出しの底を適当にトントンと叩く。

(これは、ビンゴでしょうか)

引き出しの物を全て取り出して(と言っても少ないが)引き出しを引っ張りだす。隅に、引っ掛けるような跡があった。

「コインで、こうして」

コインで引っ掛け、開く。すると中から一冊の日記が出てきた。

「何て初歩的な……」

あまりにも初歩的で気付いていなかった。だが結果オーライとばかりに日記帳を開いた。

『○月▼日

私はとうとう婿入りをした。妻となった人は、立派で、強く、私と対極の相手であった。(中略)だが、私には憧れるしか出来ない』

「……はぁ」

自分のお父様は立派ではない方だったのかと落胆?した。しかしここで投げ出すのもどうかと思って、セシリアはそのまま読み進めた。

『○月○日

妻の手腕は本当に素晴らしい。今日も企業の買収を成功した。ただ、少し強引に思えた。私が気弱だからだろうか?相手の苦々しげな顔がまだ残っている。敵が増えなければいいが』

『○月■日

妻にずっと前から気になっていた事をとうとう尋ねた。妻につて

は当たり前前で、私にはとても分からない事。「なぜそのような強いられるのか」「言うまでもありません。私には守るべき家があり、誇りがあり、私に付いてくる人たちが大勢いる。そのために胸を張り、強く生きるのです」このとき、親の定めた結婚をうとましく思っていた心が、消え出した』

▼月■日

意外な一面を見れた。料理を部下にふるまうと士気が上がる時、いた妻は手料理をごちそうした。救急車は何か必要無かった。何でも出来ると思つた妻だったが、出来ない事もあるものだ。意外な一面が見れて良かった。それと同時に、段々と思いが募る』

▼月○日

運が悪かった。たまたまひつたくりが妻のバツクを奪おうとしてきた。咄嗟だった。飛び出て相手にしがみつき、引き倒した。警察がやってきて事なきを得た。この後、妻から「あなたも出来ないわけではないのですね。助けてくれて、ありがとう」と少しだけだが微笑んでくれた。ああ、段々とこの人を守りたいと思うようになってきている。だが、私は臆病で、日蔭者だ』

(あれ、何か流れが変わってきたようですわ)

▼月▼日

この前強引に買収した企業と関係が良かった企業の人間らしき者がやって来た。「あんな傲慢な女、疲れているでしょう?」「私たちが手を組みませんか?」「いつも一歩後ろで控えてるあなたを見ると不憫です。さあ」あまりの怒りにぶんなぐりたくなつたが、必死に抑えた。彼らの言ってる事が本当かは分からない。ただ、これだけはいえる。妻は傲慢なのではなく、誇りが高いのだ。似ているようで、とても違う』

●月●日

必死に考えた。別に妻を裏切ろうと言う気持ちではない。もっといい方法はないかと。そんなことを考えていたら、また訪問客が来た。次は違う企業の人間だった。ただ、前の連中と同じような事を言ってきた。そして閃いた。これは、使えるのではないか?私は日陰

者だ。だが、それでも出来る事はあるのではないだろうか？力を出して一步踏み出せば』

(お父……様?)

『●月△日

私は盗聴器を用意した。そして相手の誘いに乗ったフリをした。元々相手の話につき合うのは得意だ。自分から話すタイプではない。そのまま酒を飲み、いい調子にしてこちらの企業の悪い部分をでっちあげ、相手の企業の悪い部分を話させた。相手は私の思惑に気付いているかもしれない。ただ、やらないよりマシだ。

その後、妻にこの盗聴器を渡した。すると驚いた顔になって「出来るではありませんか。結構、いい男だったのですね」だったのではない。今なりつつある、のだろうか。妻を守るためだ。だから、もっと勉強をしなくてはならない。私は日陰者だ。だが、妻の光の影なら本望だ』

その時、パラリと水が落ちた。セシリアは慌てて眼を手でぬぐった。

「あら、おかしいですね」

だが、なかなか止まりはしなかった。三分ほどでやっと止まり、涙ぐみながらもまだある日記を読み進めた。

『●月■日

その後、私は撒餌となった。妻の経営する会社は大きくなり、オルコット家の権威も増してきた。だが妬む者は比例して増える。だが私は影だ。派手にしすぎると効果が薄れる。私は相手に深入りしすぎはせず、ただ周りからゆっくり削いでいけるような情報を集めた。正面からかかれれば私の妻に敵う人間はいない。だから、私は補助に徹した。妻もそれを快く思ってくれている。何となくだが、妻と一緒にいる時間も増え、二人きりの時は笑うことが増えてきた、気がする』

『●月△日

私が陰になってから一年。とうとう、私と妻の間に娘が生まれた。名前はセシリア。綺麗な名前だ。妻と似ていて美しく、強く、誇り高い女性に育つ事を祈る。そして、その努力をしよう』

『●月□日』

娘も六歳になった。客人達を招いた誕生日パーティーの後にセシリアは聞いてきた。「何でお父様はお母様にいつも怒られてるの?」そしてそれを妻が聞いていた。妻はセシリアをまた今度と寝かしつけた。そして寝た後私に「セシリアの前ではしつかりしてもいいでしょう」と言ってきた。まだ、駄目なのだ。六歳頃の子供といえども情報は漏れていく。私が影に徹し始めた時から、外では私たちは演技をしてきた。だらしない夫と出来る妻を。娘にだつてそれを伝えるのはまだ早い。年の割には聡明だと言えるが、だが駄目だ。まだ、駄目なのだ。会社も、ここで一気に決めないといけない時期だ』

『□月△日』

六歳、あの時からセシリアが私を見る眼が厳しくなつてきているのを自覚していた。段々と、家族でいる時間も少なくなつていくのを感じていたから。そして笑う時間も少なくなつてきたから。妻も「しつかりしてください」「セシリアが男子をなんとも思っていないそうです」と言うようになってきた。私自身もセシリアからの眼が辛くなつてきた。影に徹していても。娘ももう十二歳になる。会社もしつかり安定した。

私は妻に聞いた「私は、あの時から変わっただろうか。人に強く言えない、胸も張れない、そんな駄目だつた自分から変わっただろうか。私はお前に変えられた。お前みたいに立派になりたかつた。日陰者の私でも、胸を張れるように立派な人間になれたのだろうか」「もちろんですわ。私の愛する、立派な夫ですわ。例え周りの人々が何と言おうとも、あなたは立派な夫です。だから、次はあの子の立派な父親になつてください」私は、久しぶりに。泣いた。

妻は既に寝ている。セシリアには明日からある外国への用事を終わらせてから話そう。妻とそう決めた。簡単に話せる事ではないだろうから。明日からの用事を終わらせれば、そうすれば』

日記を全て読み終わった。今までのページにたくさんの水滴の跡をつけながら。

「お、父様……お父様ああああ!!」

涙をぬぐつてもぬぐつても溢れてきた。今まで父親をだらしなく
と思っていた後悔と、自分の見る眼の無さに対する怒りや悲しみ。そ
れらが渦巻いて、ひたすら涙が溢れてきた。

「お嬢様!?!お嬢様!?!」

コンコンとドアを叩く音が響いた。

「開いてる」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのはシャルロット・デュノアだった。そし
てソファに座っているのはシャルル・デュノア。デュノア社の社長で
ある。

「……ま、まあ、椅子に腰掛けたらどうだ」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて」

二人は正面に向かい合って座って、それきり黙った。一分ほどひた
すら黙っていた。口を開こうとしては閉じて視線をくるくるしたか
と思えばお互いに合わせて、かと思えば逸らす。そして先にデュノア
が口を開いた。

「その、何だ。学園生活は上手く行ってるか?」

「はい、楽しかったり、色々です」

それきりまた三十秒ほど黙った。が、次はシャルロットから

「お、お父さんは元気にしてた?」

「ま、まあな。健康は崩れていない」

また黙った。十五秒ほど。そしてデュノアが

「その、元気そうで何よりだった。……それで、聞きたいことがあつて
来たのだろうか?」

「その、通りです」

デュノアは立ち上がり、壁際に移動して外を見た。シャルロットは
その観察眼で気付いた。

(お母さんの家の方角だ)

偶然かもしれないが、違うと思った。デュノアはその方角を見つめ

ながらぼつぼつ語りだした。

「大筋は、前に話した通りだ。そうだな、だから、出会いについて話そうか。」

私はいい所出の人間だ。幸い能力も恵まれていた。そして順調に育つていい企業に就職した。そして、一気に出世階段を駆け上った。その時に今の本妻と身の上の都合で結婚した。そしてある時に町に買いだしに来ていた女性……お前の母親出会った。そして一時間ほど話し合っただけで恋に落ちた。嬉しい事に向こうも同じようだった。ただ、本妻の事もあるから無理だと伝えた。残念だとも。

ただ、それから向こうから私に会いに来てくれた。そして、遂に一線を越えてしまって、私たちの関係が始まった。全く取らなかつた有給休暇を取って彼女の実家で一緒に過ごした事もある。何とかやっけて行けた。だが、私の出世が一気に跳ねすぎてしまった。東洋の諺の棚からぼた餅の如く、三十代で社長となった。一気に忙しくなり、一緒にいられる時間は減った。そして同時に妊娠も分かってしまった。社長も投げて本妻とも別れようとした。だが私には数万近くの部下がいた。そんな無闇に投げ出せなかつた。まあ、それならそんな関係になつていゝるなという話だが。

だが、アイツは……俺を笑つて押し出してくれた。『大丈夫、もし全てが大丈夫だと思つたら来てください。いつまでも待つてます。子供と一緒に。無茶はしないでね』と。それから第二代傑作機体、ラファールを生み出して優秀な部下も育つた。これで後任を任せれると思つた。だが、第三世代に乗り遅れたと実感したと同時に、アイツは死んでしまった。多分、怨んでるのだろうな。

と言う話だ。俺は、自分のことを滑稽だと思う。もし、あの時とはおろかな言葉とは思つていた。ただ、それに縋り付きたい気持ちを理解できてしまった。さあ、他に質問はあるか？」

「……じゃない」

シャルロットは俯きながらも小さく呟いた。

「いったいな――」

「滑稽なんかじゃない！お父さんは！！お父さんは立派だよ！一生懸命

会社を経営して、数万人の部下も助けようとしてお母さんの事もどうにかしようと思つて、努力して、実行しようとした！お母さんは死んでしまったけど、怨んでなんかいないよ！お母さん、言つてたよ！『あなたのパパは立派な人で、たくさんの人々の重荷を背負いながらも、私に会おうと頑張つてくれてる人』だつて！数万人もお母さんの事も投げ出そうとしなかった！だから……滑稽だなんていわないでよ……」

シャルロットは噁り泣きをしだした。デユノアはオロオロしながらも近づき、シャルロットの頭に触れた、かと思えば引き離して、また触れて、撫でた。そして肩に腕を回して。

「……ありがとう。ありがとう。……ああ、本当にお前はアイツに似ている。そっくりだ。いつの間にか、こんなに年月が過ぎていたのか。あのときから、もう、こんなに、経つたのか。シャルロット、泣くな」

「……お、お父さんも泣いてるよ」

三十五話 遠くても、近い

夏休み。宿題をやらないならかなり暇だろう。予定を立ててやる人でもそこまで忙しくはない。部活をやってるかどうか全てと言えるが。俺はそれなりに忙しい。企業から来る装備を色々使ったりレポート書いたりね。そこまで複雑のじゃないけどね。高一にそこまで複雑なのを求められてもって話。そして今、

「おっ、来た来た」

「随分でかいわね。また大火力でごり押ししてくるの?」

鈴がいやーな顔をしながら聞いてきた。一夏はまだ来ていない。ちよいと用事だとか。

ここで問題。昔の剣で斬り合う戦い時には現代の兵士に占める少年兵の割合より多かつたか?ちよつと抽象的な質問だけど。

答えは今より少ない。

ちよつと考えると当然だ。もし小学二年生とかの年齢の子供が重さ何kgもある刀を持って振り回してきても男子高生程度なら十分素手で勝てるだろう。それと同じ。子供は白兵戦じゃ役に立たない。そして、少年兵が出てきたのは、銃などの武器が登場したから。使用者同士の技術・体格・その他の戦闘力を飛躍的に縮める事が出来る兵器が登場したから。いや、一部じゃさらに技術の格差があるけど。でも、平均的な強さはずつと高まった。

俺の戦法もそれ。他のISよりいい武器を使って、火力を投射して腕の差を詰める。シンプルだからこそ効果的な方法。小細工はある程度対策も取られる。でも火力の差、技術の差はシンプルだからこそ詰めにくい。もちろんある程度は縛りプレイしてるけど。そうしな
いと武

器の扱い方とかを学べないし。

「んー、今回はちよつと違うかな。新しいバックパックがやって来た。とは言っても企業で何度も使ってるけど」

とうとう学園にまで送ってきてくれたようだ。終業式の前に最終調整が終わったから。そう言う鈴はもっといやーな顔をした。

「それで、どんな面倒なパックがやって来たわけ？」

「火薬推進兵器があったら？あれをメインに使う武装」

そう言うといやーな顔じゃなくてキツと睨んできた。裏切られた！みたいな顔。

「だから、無茶しすぎないでって言うてるでしょうが。いい加減ぶつ飛ばすわよ」

「腕をこきこきならさないで欲しいな。で、火薬推進兵器がメインだけど、機体を推進させるわけじゃない。体への負担はパック無しと同じ。少ないタイプ」

「へー、何よ？」

ちよつと興味が沸いたような眼で見ってくる鈴。まあ猫みたいで新しいのとかにもそれなりに興味を持つやつだし。というか新しいのに興味を持たない人は少数派だろう。どんなものだって見てみたいはずだ。親指でくいくい送られてきた箱を指して

「実戦で試せばいいだろ？一夏が来るまで遊んでようぜ」

「じゃあ始め」

希と鈴はそれなりの高度で、100mをまたいで対峙をしていた。いつも攻めるタイプの鈴は中々攻めようとしなない。二人はじつと動かないままだった。

「鈴、動かないのか？」

「……遠距離タイプのバックパックじゃないようね」

「へえ、どうして？」

「アンタならいやっほーとかいいながら、最初にぶっばしてくるでしょ？もしくは本当は遠距離でここぞというときまで隠すか……よし、覚悟は出来たわ。行くわよ！」

瞬時加速を行い、鈴は一気に距離を詰めた。弾幕を張られると厄介なため一瞬で近づいて接近戦が最も効果的だからだ。ただ、希は遠距離武器を取り出さなかった。取り出したのは槍。シンプルなタイプの槍だが、太さは直径10cm、長さ3mに迫る槍だ。槍、というよ

り尖らせた鉄棒と言った方が近い。とは言ってもISのサイズから見たらちようどいいぐらいではあるが。希はその槍を鈴に向け

「!?!」

前触れは無かった。槍を投げたわけでもなく、ただ真っ直ぐ射出された。鈴は咄嗟に横に回避した。瞬時加速が終わっていかなかったら直撃ルートだった。

「……なるほどね。火薬推進の刀だけじゃなくて、槍……他にもあるの?」

「やっぱ戦闘の時は頭働くんだな。大体そんな感じ」

(でも、それでもバックパックの効果とは関係は無いわ。自由パッケでも火薬推進武器は使えてた。となると、他の機能?)

「来いよ鈴!銃を捨ててかかって来い!」

くいくい手を動かしながら希が言い切った。

「持っていないわよ!第一あんたにだけは言われたくないわ!!」

一番銃器を使ってるのは希である。シャルロットよりも使っている。キレ気味に接近戦が始まった。希は刀を二本取り出し、鈴と打ち合う。希は火薬を使い高速かつ重い攻撃を繰り出せる。自分のライフを削りながらという仕様ではあるが。

(ひたすら耐えればいいわ。そして希の表情がにやけた瞬間が勝負!希が取った、そう思った瞬間一気に決めてやるわ!あのドヤ顔をぶん殴って鼻を明かしてやるわ!!)

勝負は拮抗していた。途中途中で刀を投げ捨て鈴に当ててくるが、全て弾ける。確かに早い

が、銃よりは断然に遅い上に的は大きい。一番最初にやられたなら不意打ちでくらうかもしれないが、一度見てしまえば回避するのはたやすい。手品の種も知ってしまえば簡単だと分かるのと同じ。

空を二人は自在に舞いながら戦う。エネルギーは同じ速度で削れて行く。

(中学の時からかなりデキるやつって思ってたけど、本当に出来るわね。でも、やっぱり何か惜しいわね)

「ハアッ!」

鈴の蹴りが希の腹部に直撃、吹き飛んだ。

「もらった！」

それに追いつき、防衛一辺へと追い込む。勝負の流れがここで変わった。同じ速度で削れていたエネルギーだが、希の消費速度が鈴より明らかに増えだした。

「やっぱ強いな、鈴！」

「五カ月ばかりの素人とは違うのよ！」

「だよな！」

ワイヤーを四本まとめて射出した。三本をかわして残りの一本を握り、鈴はそのまま引き寄せようとする。希がそれにのっかかり、一気に距離が縮まった。

「ハアツ！」

二人が同時に打ち込み、希の刀が上に弾け飛んだ。

「もらっ」

その時に気付いた。希の表情が、にやけている。

直後だった。火薬が爆ぜる音が聞こえ、鈴に衝撃が走った。一発二発でなく、五発近く。地面に叩き付けられ、さらに追撃が入り勝利判定が下った。

「何よ！あんなの！あんな大量に量子展開できるわけ!?そのパツク!!」

「前見せただろ？両手にぱつと量子展開する奴。あれを発展させて量子展開の範囲と速度を」

上昇させたんだ。ISから半径3m以内。展開速度はシャルと同じくらいだけど、同時に五つぐらいまで出来る」

タネはこうだ。わざと刀を弾きあげられたと同時に空中に槍を五本展開。展開できる位置ギリギリから。

「もちろん物体……固体と言うべきか。そういつたのがある所に量子展開とかは不可能」

「で、何が弱点なの？」

「一個とかなら問題ないけど、五つ同時展開しようとするエネルギー」

ギーが30ぐらいやっぱ削れる」

「相変わらずアンタの身を削る戦法どうかしたら？」

確かにそれは言える。幻影機動もこれもエネルギーを削り、自由パック・火薬推進型は自分の体を削る。相変わらずの仕様。一夏ほどではないけど。

「でもこれでいいんだよ。安定性は第三世代最強だから。その分こういったパックを増やして問題ない」

「はー、めちやくちやね。でもそれ、遠距離で役に立つ？」

「ははは、もちろん役に立たない。ミサイル一斉発射とかは出来るけど、そのたびエネルギー削るのもね」

大きい的一個出すより小さいの五つをバラバラで出したりするほうがよっぽど手間がかかるらしい。数十発入ってるミサイルポッドより体積はさつき五つ量子展開した方が少ないが、連結されてるかされてないかで手間がかかるとか。

エネルギー消費は

たくさん小さいの召喚（つながってない）>>>大きい召喚（つながってる）>>小さいの召喚だとか。

「相手に合わせて換装、確かに便利よね」

「とはいえ、俺の三つのパック全部近接型だけだな」

そう言うと鈴は確かにと

「確かにそうよね。遠距離パックは作ってるの？」

「ブルー・ティアーズと似たようなのを。複数あってティアーズそっくりとかガンバレル型でミサイルや機銃内蔵したのにするとか。バリアを張れるとか色々やってるようだけど」

「……アンタの企業本当にフリーダムよね」

「大資本って正義って事」

IS 関連企業で世界大手の一つ。その中でさらに博士が所属していて、資本力はアメリカの最大大手と同等、そして子供の頃からロボアニメに憧れ続けた研究者たちが日夜を問わず働いている。負ける要素が見当たらない。

「アンタが言ってたけど、やっぱり補給って大事よね。私ももつとい

ろいろ欲しいわ」

「スロット四つ程度なのにどうこう悩む？」

「気分よ、気分。っていうか四つだから悩むのよ」

とは言えこいつ普段全く使っていないような……たまに使うけど習熟度は俺より下ぐらいだ。苦手、なのだろうか。

「俺は悩むけどそこまでじゃないもんな。第一、お前たちはこの頃他の事で悩んでるから仕方ないか」

「アンタこそ他の事で悩んでるでしょうが」

「……やめようぜ、不毛だ」

そう言うのと呆れたように鈴は言う。

「始めるのはいつもアンタよ」

全くもって正論だった。

「おい、さっきの試合見てたぜ！」

「また奇妙なパックを持って来たのか。まあ、希らしいことだ」

シャルロットが出て行ってから三日目

「あー、なんか調子でないなあ」

体がだるいと言うべきか。夕食をいつものメンツ（シャルとセシリア除く）と食事をしてたらつい呟いてしまった。さっきの新装備のテストも最初以降はいつもに比べ負けが込むし。

「夏風邪かもしれないし、よく眠るべきじゃないか？」

一夏が気にかけてくれる。他の皆もそれぞれ同じように気にかけてくれる。だけど、何か違う。そういったのじゃない。何か足りてないような気がする。

「なあ、シャ——」

シャルと言いかけてしまって、口を閉じた。シャルは今はいないんだ。隣の鈴は

「全くもう、やっぱり風邪でボケ……じゃないわね。多分、それが原因よ」

「それって何が？」

今ので何か分かったのだろうか。鈴は得意げに胸張って

「シャルロットがないから調子が出てないだけよ。まったく、人騒がせなんだから」

あきれたと言わんばかりに鈴が言う。さすがに反論する。

「ちよつと待っ」

「なるほど、それだ」

「それだな」

「それだ」

え、皆納得するの？それで？納得できるレベルのお話なの？

「あんた自身思い当たってると思うけど」

「えー、そりゃな……くないかもしれない」

よくよく考えたらそうかもしれない。大体朝に目が覚めてからすぐにシャルと合流して一日の大半が一緒に。しかも朝ご飯と昼食を作ってくれてる（たまに無いけど）。でも夕食を作ってくれたりする事もあるから大体飯の三分の二はシャルが作ってくれてる。更に追加でこの頃は手作りお菓子を渡して訓練のあととかそう言ったときに食べれるようになってる。マッサージもよくしてくれるし。そんなシャルがいなくなったら体調が崩れて当然じゃないのか？

ちなみに前に三食作ってくれた時はさすがに大変じゃないか？と尋ねたら「えつとね、将来の予行演習だから。大丈夫！」と頬を染めながら返された。精神ライフを一番削っていくのは一夏ハーレムズじゃなくてシャルである。

「……よくよく考えたらそれ以外あり得ない感じがする。生活を任せてきつてる気が……」

「あーあー、おあついわねえ」

鈴が吐き捨てるように言った。他のメンツもさつきと打って変わって心配して損したみたいな顔をした。お前らひどくない？とか思ったけど俺も逆の立場だったら吐き捨てたくなるだろうなとか思った。

でも、このままじゃいけないなあ。少しは何かやってあげたいし。……俺も手作り料理やってみるか。コツコツ時間をかけていけばまあ、それなりに出来るようになるだろう。

「何思いついたんだ？」

「ん？ただ、シャルに俺が手作り料理をふるまってお返ししようかなって思ってた。あ、これ秘密な？」

そう言うど皆が感心したように頷いた。

「さすがだな、希は。だが、料理できるのか？」

「いや、普通の男子中学生してたから料理なんて調理実習以外した事無い。だけど、企業には現役料理人みたいな人もいたし。母さんの料理も結構見てたから。色々参考意見を聞きながらやるよ」

「相変わらず建設的ね。あつ、アタシにも出来るならアドバイスしてあげるわよ」

全く、一夏にこれぐらい素直になれば。でもその申し出はありがたい。

「ああ、中華料理の時には頼むかもしれない」

「勿論私もだ」

頼れる正統派武人っ子も協力してくれる。

「和食の時に頼むかも」

「私もだ、兄よ！軍隊料理なら任せろ！」

可愛い妹ラウラも協力してくれる。でもね、軍隊料理は作る予定ないんだ。

「ありがとう、遭難した時は頼むよ」

遭難時なんてこないけどね。無下に出来ないので笑顔で答えた。

「もちろん、俺もな」

「ああ、いざという時は頼むよ」

そして、一夏も協力してくれる。ああ、良い仲間に囲まれたな。これが平和だな……そう思ってた時期も俺にはありました。

「えっと、そうね。一夏。それでだけど、いつも料理作ってあげてるじゃない？たまには一夏が作りなさいよ」

「ん？いいぞ、腕が鈍ってないか心配だったし」

おっ、波乱の予感？他が出遅れた！みたいな顔をする。

「それだけじゃなくて、あたしもまだまだ上達したいから、アンタの料理一緒に見ていい？あたしが料理する時も見たいから」

「もちろん。歓迎だ」

他二人が出し抜かれたという表情をして俺に顔を向ける。いやね、俺こんな作戦教えてないよ。そして感じた。鈴は少しずつだけ、前に歩んでる。自分で考えて攻めてる。あー、そうだな、俺たちは高校生だもんな。

「教えてないよ。鈴の力さ」

そう言う二人はがっくりして考え込んだ。が、二人同時に

「そつ、そつだ！私も！私も一夏の料理が食べたい。料理するのも見たい」

「私もだ！」

「ん？いいぞ。三人作るのも五人作るのも同じだし」

あいつらも成長してるなあ。久しぶりに一夏の飯が食えるか。

「……アンタら……」

「何か文句でも」

「あるのか？」

三人の牽制を見て、あー、大変そうだなとか思った。今日も平和である。

そして11時頃

高校生にしてはまだ早い、けれど体を強くするためにもうすぐ睡眠しようとしたとき。携帯電話が鳴った。手に取るとシヤルからだつた。すぐさま取つて

「シヤル？元気か？どうなった？」

『うん、元気だよ。昨日電話しようと思ったけど、希の邪魔になりそうな時間だったから。希がちょうど寝そうで暇になった時だよね？今、どうしても声が聞きたくなつて』

凄く嬉しいことを言ってくれる。相変わらず。

「邪魔だなんて思わないよ。それで、お父さんと上手くいった？」

『うん、それで今日も話し合ったよ。それと、時間はある？』

「もちろん」

シャルとの会話を断るなんてしない。

『よかった。それじゃ、お父さんと代わるね。どうしても話がしたいって』

えっ、ちよ、不意打――

『ふむ、君が希か』

『はい、そうです。娘さんにはいつもお世話になってます』

『前と全く印象が違うように感じる。まあ、それはいい。ひとまず、お礼を言わせてもらおう。ありがとう』

『いえいえ、別に。シャルが明るくなってくれと自分も嬉しいので』

『そう、それだ。その事だ』

『どのことか。』

『二人は、付き合っつてはいないのだな?』

『これどうやって答えるのが正解なの? すっげえ難問。』

『えー、あー、はい。付き合っつていないというべきか、告白してもらって待たせているというか……』

『ああ、かしこまらないでもいい。別にどうこう言うつもりはないし、言う資格も権利もない。俺より君の方がシャルロットを分かっているはずだ』

『あー、そうですね』

『絶対に否定できないし、否定したくないことだ。』

『本当に君は正直だな。シャルロットに聞いたとおりだ。まあ、ともかくだ。その事についてはあまりどうこう言わん。ただしだ。シャルロットを弄んで捨てたり、悲しくさせるようなことがあれば……まあ、俺がそうさせてしまったが。ともかく、わかっつてるな?』

『安心してください。シャルは絶対悲しませんよ。もう、あんな気持ちちはこりこりです』

『安心したよ。ではシャルロットに代わる』

ふう、一息つける。

『どんな事を話してたの?』

『シャルの事。まあ、それはそれとして。これからの予定は?』

『えつとね、今日もお父さんと話して。明日から三日間実家の掃除と

か、墓参りとか。四日目で帰れると思う』

「分かった。それで、その……」

口に出すのがちよつと恥ずかしいというか。

『なに?』

「これからも毎日、この時間に電話してくれないかな?それだけじゃなくて、朝の7時ぐらいにも」

向こうとの時差は8時間。向こうでの夜の11時。たぶん、いいはず。そう言うときシャルはちよつと笑って

『さびしい?』

「……すごくね。シャルの手作りの料理を食べたい。髪の毛に触れない。一緒の場所に居たい」

勝手に口が動いた。俺の顔は真っ赤になってるだろう。

『……僕も、寂しいよ』

多分、シャルも。

「それじゃ、気を付けて。お休み」

『うん。お休み。あつ!希からかけてくれてもいいからね?それじゃ』

ああ、明日はしっかり起きれそうだ。とつても重要な事が増えたから。

「えつとな、俺もいるぞ?」

「うわっ!」

一夏と同じ部屋だということを忘れてた

三十六話 二人の帰還

「それじゃ、明日の朝ぐらいに帰ってくるんだな？」

『うん。待ち合わせ場所は夜に決めよ』

「分かった。じゃあ気を付けて」

『希もあまり無理しちゃうだめだからね』

「大丈夫。じゃ、お休み」

『行ってらっしゃい』

シャルは今から寝る時間なのに、俺は今から活動してく時間。そんなことを少し不思議に思いながらも俺は覚醒した頭でやるべき事を組み立ててく。まあ、殆どは訓練だけど。あー、そうだ。レポートの提出もしないといけないな。

服を着替えつつ、鏡を見て変なところがないか確かめる。ちなみに、寝癖はオシヤレと言うことにして気にしない。

「うし、行くか」

「あつ、希。お前は昨日言ってたレポートか？」

うだるような暑さの廊下を歩いていると一夏と遭遇した。にしててもこいつは涼しい顔してるな。まあ、なるべく節約するために普段は冷房使ってたし。耐性は強い。

「その通り。ちやつちやつと終わらせて訓練しないと」

「前みたいになるなよ」

「分かってる……ん？」

ちようど目の前に鈴が現れた。そして

「い、い、一夏!?!希!?!なんでアンタらここにいんのよ!部屋じゃないの!?!」

ふーん、この慌てぶり、何か考えてたな。一夏の事を。

「いや、レポートの提出忘れてたから」

「俺は違うレポート。キツチリ期限を守ってる。……それ、チケットか」

ギクツとなった鈴を置いといてそのチケットの場所を思い出す。あー、そういや有名な奴だったな。ウォーターワールド。

「鈴、俺たちの部屋で待ってる。ちよつとすぐにレポート提出してくるから」

「えっ、ちよつ!?!」

さっさと一夏を引き連れてレポートを提出し、部屋に戻ってきた。すると借りてきた猫のようにおとなしくして……なかった。テーブルの上に置いてあった本を凝視していた。鈴は現在読みたいけど、そりやちよつといけないうねみみたいな気持ちをしてると思う。遅くなって反応をして

「記念写真ってまだ続けてたの?」

「ん?まあな。でもここ数年は千冬がいなかったから。鈴が映ってるのは、俺たちと弾の四人で撮った奴。中二の時の、鈴が引越す直前くらいのやつ」

ちなみに、それから俺たち弾含め三人で何枚か撮ってる。だから鈴が映ってるのはそれが最後。

「なんとなくはね」

「俺はしっかり覚えてるけどな」

忘れない。淡い片思いも消えて見守るポジションをしてた時。それでも悲しかったあの時。

「しかし、よくわかんないわね。これって千冬さんがはじめてやつたんでしょ?」

「あー、それは確かに俺も思った。理由聞いてなかったな。こんなに千冬さんはこだわらないはずだけどな」

あの人なら人とのつながり、残したいと思った時は自分の心の中に留めるものだとか言いそうだけど。

「ちよつと言い過ぎじゃない?」

だから止めてくれませんか?心読むの。

「んー、このごろ分かりやすくなった気がするわよ。福音の後ぐらいから。ピンツ、て伝わるような」

「しょうがないから諦めるわ。それで、一夏は理由知ってるか?」

「たぶん、俺と二人だけじゃないのが重要なんだよ。過去にそばに誰がいたかちゃんと覚えておけて前に言ってた。ほれ、お茶。ちゃんと冷えてやつ」

「ありがと」

それにしても、他人のアルバムほど時間をつぶせる写真はあるだろうか、いやありはしない（反語）。

「見ていいか？」

「お前のも今度見せろよ」

「あつたらな」

そう言ってからページをめくる。あー、小さいころからイケメンだな。中学生ぐらいの千冬さんと、あと千冬小学校低学年ぐらいの一夏が映ってる。ちなみに、このころから千冬さんは何か凄い。こう、武人だ。それより気になったのが、両親が映ってないこと。両親と撮った写真がないのか、千冬さんが燃やしたもとい捨てたか。

「それは小学校一年のやつだな」

「あれ？これが一番最初なの？」

「ん、まあな。そういや、これより前はないなあ」

ああ、そっか。俺は整理を見てたからこれが最初だって知ってたから、これより前があると思っただのか。

「まあ、昔の事はいいだろ」

そう言っただけで写真を見ながら笑ったり、（主に一夏が）懐かしんで時間はつぶれてく。

そうしてしばらく経った。それでアルバムが終わった。

「それにしても、ほかの人のアルバムほど時間つぶせるものはないわね」

「同感だ」

「見られる方は恥ずかしいぞ、結構。お前らも今度見せろよ！」

「へいへい」

「わ、わかってるわよ！」

鈴は嬉しい半分恥ずかしい半分ってところか。まあ、想定通りアル

バムを見せ合う形に進んだ。この頃鈴が相談してこないから、ちよつとした手助け。と思つたけど、まさかこれ鈴が自分で事を運んだのか？成長したな。前ラウラに忠告したことを実践してるようで感心だけだね、でもやっぱり寂しいような。

「さて、それよりさ。いくら何でも夏休みを訓練だけでつぶすのもどうかと思うんだ。どっか行きたくないか？」

「うーん、そりや言われるとどっか行きたくなるなあ」

「そう言つて鈴に目配せする。」

「つたく、しょうがないわねえ。このあたしが融通利かせてあげるよ」「どうせ金取るんだろ？」

いつも鈴は金をとつてる。前に聞いた所、まあ色々あつたらしい。「あつたり前でしょ。あのねえ、遊び場を都合してもらつて金も払わないつてどんな凶々しさよ。まつたく」

表面上はかなりいつも通り。でも、かなり内心無理をしてるのだろう。と言うか今こいつ落ち込んだ。考え込みすぎだ。で、落ち込んだ表情を引つ込めると同時にチケツトを四枚出した。……四枚？

「どうして？」

「二枚はあんたに売りつけようと思つたのよ。別に、他に行こうと思つてるなら他の人に売るから気にしないでもいいわよ」

よし！今日はお前の味方だぜ！とは言え、あんな不特定多数がいる所にシャルと行きたくはあまりないなあ。一人でならまだいいけど。一応、色々と考えてるんだけど。

「すまん、二枚は遠慮しとくわ」

「いいつて言つたでしょ。別に」

「でっ、いつ行くんだ？」

「い、行くの？」

普通に考えたらおかしいつてレベルじゃない。チケツトを見せびらかして行くの？と聞いたら見せびらかした奴が行くのか？つて言い返す。お前行く気ないのかよつて突つ込みがはいる所。実際一夏に突つ込まれた。

「まっ、一夏を誘うなんてあたしたちくらいなもんよね。感謝しなさ

いよ」

実際には四人……五人。本命でこれだけいるし、不特定多数がさらにいる。俺こそ誘ってくれるのが殆どいない。別に構わんのだけど。「で、いくらだよ?」

「二千五百円」

「……高くないか?」

「やならいいのよ?別に、一夏以外にも買い手はいるし」

しつかり準備を整えるようになったんだな。自分で予約したに違いない。しかも俺のためにつても考えたと泣けてくる。

「分かった。それで、いつぐらいまで使えるんだ?」

「四日以内なら問題ないわよ」

「じゃあ、明日にでも行くか。金曜日だし、土日に比べれば人も少ないだろ。プールならそこまで準備いらナイよな?」

「分かったわ」

「そうだ、希は行くのか?」

さて、どう答えようか。鈴の邪魔をしないためにやめとくのが正解。と言うか、泳ぐのは好きだけど人ごみの中やるほどじゃないし。となると、断り方か。

「いや、俺は止めとく。明日シャルが帰ってくるから」

「なら、明後日にプールをずらしてもいいぞ」

なんてしつこい野郎なんだ。おとなしく美少女と二人きりで遊べるといふのに何で親友とは言え呼ぶのか。こいつは。んー、いい理由ないな。最初から昼に毎日企業の人に来るって言って置けばよかった。今更言ったら取ってつけた感が出るし。こりやドタキャン作戦で行くか。

「分かった。二枚買うよ。明後日な、途中で用事が入らなけりや行くよ」

「分かったわ。はい、二枚」

鈴も察したようで普通に売った。

「でも、どうして二枚なんだ?あ、そうか。シャルロットの……いや、

さつき断つてたし」

「別に。ただ欲しそうなやつがいたら三千円で売り飛ばすだけ」

「金に困ってないのに……」

「人脈づくりみたいなものだって」

五千円札を出して二枚買った。

そして、この事を俺はすさまじく後悔した。

次の日

——職員室——

「ふう、やっと一段落つききました……あれ、この書類……まずい、これはまずいですよ……」

IS学園の正面ゲート前。俺はもうすぐ来るはずのシャルを待つために日陰で待っていた。もうすぐである、一週間、凄まじく長かった。と、そんな時、遠くから車が見えた。あのロールス・ロイス、間違いない。セシリアだ。車が止まると同時に俺は近寄った。そして、セシリアは俺を見ると満面の笑みで俺に駆け寄ってきた。しかも俺の手を両手で取って

「希さん！どうもありがとうございます！希さんのおかげで分かりました。お父様は、お父様は立派なお人でした！」

「おめでとう。ただ、アドバイスしただけさ。それより、少し落ち着いて」

感謝されて嬉しいけど、そんな手を握りしめながら詰められてもちよっと嬉しいような恥ずかしいような。一夏もいるし悪い気がしてくるからね。

「そうですよ、お嬢様」

車のドアから出てきた人を見る。何と言うか、一言でいえばメイド。でも二言で言い表すことはできない。そう、メイドだ。

「それでは、お荷物の方は私どもがお部屋まで運んでおきますので。それでは、織斑様、お嬢様の事をよろしく願います」

……ファツ!?

「勘違いされているようですが、自分は清水希と言います」

「あつ、どうもお恥ずかしいです。確かに、想い人に迫るようではありませんでしたわね。少し勘違いを。確かにお名前が違うような気がしました」

さっきのアクションから俺の事を一夏と勘違いしたのか。いや、それよりも。

「いえ、別に構いません。それにしても……本当にメイドさんっているんですね。しかも、ミスカだとかバイトだとかそんなもんじゃなくて、本当のメイドさんが」

「はい、見習いを含めればもうすぐ十年になります」

凄まじく、感激した。

「すいません、握手を」

「はい。どうぞ」

握手をすると、ああ、確かに仕事人の手……いや、よくわからん。

「感激です」

「えっと、お嬢様。この人があの、お嬢様の悩み所か他のどんな人の悩みも一瞬で解消してゆく清水様ですか?」

「はい、そうですわ! 今回のお父様の事も、希さんのアドバイスです。確かに少し変なところもありますけど、頭脳明晰で、どんな悩みも解決してくれる頼れる男性ですわ」

あれ? 言い過ぎじゃない? お父さんの事効きすぎた? 21世紀の猫型ロボット並に頼りにされても困るよ? ひとまず、ちよつとメイドさんに引き気味なことをしすぎたのでここで体勢をたて直す。

「では、改めて自己紹介を。自分の名前は清水希。セシリアさんの学友の一人です。いつも世話かけられてますが、その分ISの狙撃訓練のコーチでお世話になってます。これからも良き友人として交友を続けたいと思います」

「そうでした。お初にお目にかかります。セシリア様にお仕えるメイドで、チエルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

今度は、向こうから手を差し出してきた。一瞬ギュツとつかみ手を放す。

「それでは、お荷物を」

そう言っただけで去っていかうとしたとき、背中に悪寒が走る。

「へえー、僕が帰ってきたのに。希は年上の綺麗なメイドさんといちやついてるんだ。へー」

いつの間にかバス停から現れたシャルが、平坦な声で。

「い、いやだなあ。社交辞令だよ。世話かけられてるし、お世話になってるし。セシリアには」

「じゃあ、その前は？遠くから見てたけど、メイドさんに感激しすぎだと思うんだ」

「そ、それは仕方ない。うん」

いつの間にかチエルシーさんは消えていた。セシリアは逃げるタイミングを失ってこの場にとどまってる。

「どうしてかな？どうして仕方ないのかな？」

あとは野となれ山となれだった。

「メイドってのはロマンあふれてるからね！」

そう言くと、時が止まった。緊迫したその場の空気。でも、最終的にシャルはため息をついて

「あんまり怒ってないよ。分かってたから。それでも……もう、バカ」

「ごめん。それより……お帰り」

「うん、ただいま」

にっこりと、いつもの見る人を安心させる笑みだった。

「じゃあ、荷物を持つよ」

「お願い」

大きなトランクを引き受ける。ちょうどセシリアもふうつと一息をついた。

自然とただいまと言えた。この場所で。そう、ここがシャルの帰ってくる場所なんだ。そう実感する。と、そこに。チエルシーさんが登場してきた。

「あれ、荷物を置きに行ったのでは？」

「はい、実は一つ確認しておくことを恥ずかしながら失念しております、戻ってまいりました」

「そ、そう。それで、確認とは？」

チエルシーさんはセシリアに耳打ちをする。セシリアは顔を真っ赤にした。そしてシャルと二人は普通に自己紹介をしあつた。

「では、これで」

荷物を運んで去って行つた。ちょうど入れ替わりで一夏がやってきた。しかも、いいタイミングでチエルシーさんも乱入してきた。夕イミング計つてたんだろ。メイドつてのは奥が深い。

三十七話 少しずつだけけど、成長する

「いや、チエルシーさんってセシリアが言ってたとおり、美人だったな」

お前よく言えるね。セシリア自身美人って言ってたけど。

四人で学園の食堂に隣接してるカフェに流されて入ってきた。

「確かに美人だったけどね」

美人は正直いくらでもいます。この学園のせいで感覚がくるってる。シャルがちよつと目を細めて

「僕は？」

「意地悪言うね。えっと、その、美人っていうか……可愛い？」

「あつ、ありがとう……」

顔を真っ赤にしてるところとかね！でもその一方、セシリアは不機嫌顔。周りから一夏に関してのひそひそ話が飛んでるのも追撃か？ さつき一夏とチエルシーさんは仲良く会話してたし。あ、俺も普通に混ざってたか。俺はいつも通りやったのでシャルから厳しい視線は飛んでこなかったけど。

ちなみに、先月流れてた一夏の年上好きの噂を思い返してるのだろうか。四人が噂好きの女子から仲良く聞いているの見てたし。

「はあ……」

「あのな？セシリア。どうしてそんな機嫌が悪いんだ？……も、もしかして、俺のせいか？」

「そうですわ」

「即答かよ……ん？」

見ると、山田先生がかけてきて一部が激しく揺れて……視線が凄まじく厳しい。目を逸らした。

「お、織斑くん！すいません！実は今日、白式の元々の開発室から研究員が来ることを書類の見落としで忘れてました！それを伝えようと思って。先月になった第二形態のデータを取りたいそうで……本当にごめんなさい！」

「いえ、そんな。誰だってミスぐらいしますし。今日は何も用事が無

いので」

「はい、どうもありがとうございます！ございます！じゃあ付いてきてください」
そして、席を立とうとしたとき。

「待ってください、一夏さん。今日は？」

あつ、やばい。そう思った時には遅かった。

「ん？ああ、明日希と鈴の三人でウォータープールに行くんだ」

「へえ、そうですか。ご一緒させてもらってもよろしいでしょうか？」

「ごめんな。そこチケットが無いと入れないんだ」

よし、その通りだ！と思った時だった。一夏は手をパンツと打って
「そうだ！希、さつき転売だとか人との繋がりだとかのため二枚
持ってるだろ？一枚はお前が使うけど」

そう言うなり、セシリアとシャルが立ち上がった。……どうして
シャルも？俺もつられて立ち上がった。

「希！どうして誘ってくれないの!？」

「希さん！どうか！」

「待て、落ち着こう。実はほかに誘う場所を……あつ」

「そつ！それなら仕方ないね!!」

すぐにシユタツと座り込んだ。嬉しそうに。やばい、ハードル上
がった。つていうか出来たらいいなて思ってたのがしなきゃダメに
なった。背水の陣だ

「ではわたくしに！」

い、命には代えられないからなあ。鈴ごめんと思いながら

「さ、三千――」

「待て」

「待つのだ」

現れた面子を見て、俺はなんでこんなのを買ってしまったんだ。素
直に最初から企業理由を作ればよかったと後悔した。そうすれば今
頃は鈴とコイツらで争いになってたはずなんだ。

えつ、さつきまで鈴を全面応援してた俺はどこ行っただって？命に
は代えられないんだな、それが。

「お、おお、良く来たな。ラウラ、箒」

「ああ、少し冷たいものが欲しくてな」

「ところで兄よ、そこに二枚あるのだな？」

「そ、そうだね」

一枚は俺のと言うことになってるはずだけど。

そう言いながらシャルの肩をたたいて、手をシュツシュツと振る。巻き込ませるわけにはいかない。でも、僕もここに残るつ、一人にはしておけないっていうような表情――戦争映画じゃないから！そんなべたなことしたら俺に死亡フラグ立つちゃうから素直に逃げて!?

「そ、それじゃあ何で決める？一人あふれちゃうなあ、あはは」

凄まじくやばい。こいつらは個人で戦争出来て、火種もある。

そこで問題だ！この足りないチケットでどうやってコイツラを鎮めるか？

3択 ひとつだけ選びなさい

答え①ハンサムの希、鎮めるアイデアがひらめく！

答え②仲間（一夏、鈴）が――現実逃避してる間にひらめいた！

チケットがあるからいけないんだ！こんなの全部燃やせば……俺も燃やしたチケットと同じ末路をたどるな。ひらめてない。

ならチケット二枚をこの場に落いて立ち去る……鎮める係が必要なんだって！

いっそもう俺とシャルが使うことにすれば……さつき違うって言っちゃったし！

どうする？大富豪の手札は多ければ有利ってわけじゃない。強くて切れるカードじゃないと駄目なんだ。役に立たない選択肢なんてあるだけ無駄みたいなものだ。枯れ木も山の賑わいだけど枯れ木ばかりじゃ山は崩れる。どうする……どうする？

そうだ！金はたんまりある、伝手をたどるなりなんなりしてウォーターランドチケットをゲットだ！一夏と鈴のラブラブデート？だから命に代えられないしラブラブでもないし！ISを使ってメール打ち、伝手を辿った。が、

「ここはもちろん」

「私たちらしく」

「手っ取り早い方法で」

「二決闘だ!!」

……一瞬呆然とした。こいつらが暴れださないって事に。いきなり争奪戦するかと思っただけど、そんなことしないようだ。ま、まあ確かに、普段通りならすぐく話が通じる相手だけだ。

「何だ？その心底驚いた顔は？」

「いつまでも兄に迷惑かけれないからな」

「私たちだって成長しますわ」

なるほどなあ、なるほど。なら問題ない。俺たちは立ち上がって適当なアリーナにまで向かった。

アリーナ内部、既に彼女らは全員ISを展開済みになっていた。

「じゃあ、後腐れないようにルールを説明する。三名の内、一番最初にエネルギーが0になった者が敗者。とまあ、とつてもシンプルなルールが一つだけ。何か質問は？追加したいルールは？」

全員がそれに首を振る。と同時に

(問題はラウラだな。この中で一番強い)

(ですが、私と箒さんが組めば勝てないわけではないですわね。最初こそ鈴さんと二対一でも負けたとは言え、今は癖もかなり知っていますし、組めば95%以上の確率で勝てますわ)

(だが、セシリアと同盟するなどより)

(もつと手早い方法としては)

二人は同時にラウラに秘密の通信回線を開いた。

『ラウラ！私と組むべきだ！』

『ラウラさん！私と組みましょう!!』

(ふむ、確かにそれが一番最適か。現状私が一番強い。私と同盟を組むのが最も最適。では私はどちらの味方をするべきか？……兄は言ってた。箒が今の所一夏に近い気がすると。となると、さらに接近

はさせれない)

『セシリア、取りに行くぞ』

『ありがとうございますわ』

(これで勝ちですわね!)

ラウラとセシリアがニヤツと箒を見た。その瞬間、箒はすべてを悟った。

(くっ!先を越された?今から戦闘ルールの変更……出来るか!先ほドルールの確認をしたのだ。私の誇りに反する!となると……仕方ない!)

『ラウラ、私と組めば和食料理を教えよう。知つての通り、私の和食の腕は私たちの中で一番だぞ?一番頼りになるシャルロットだつて和食は試行錯誤の最中だ。どうだ?品目は味噌飯、味噌汁の二品だ!』

『むむっ……乗った!』

『ではラウラさん!頑張りましょう!』

『いや、すまない。事情が変わった』

『なっ、何ですって!?!……なるほど』

(箒さんが交渉をした、それ以外考えられませんわ)

『お前ら何してる?……まあ、三人でバトロワだもんな。色々やってるのは分かるけど。そら、そろそろ上空に上がれ。場所もあまり余つてないんだから』

(どうします、どうします。落ち着きなさい……何か送り物では駄目、ラウラさんにはお金に余裕がありますし。次に何かあった時は協力することを約束する……?不確定要素が多くて乗ってはくれないでしょうし。スキルの伝授?淑女の作法?興味がありあるとは思いません……料理?まだ付け焼きの刃。教えられるほどのスキルは無い……このままでは……このままでは!)

『それじゃ、始めるぞ。3、2、1』

(私はこんな所では負けない!立派な両親の元に生まれた、誇り高きセシリア・オルコット!負けては、負けてはいられないのです!……そ、そうですね。淑女の作法、昔からお母様に教えてもらった振る舞い。これに賭けますわ!)

セシリアはラウラの眼を見て

『ラウラさん、淑女の作法に興味はありませんか?』

『無い。私は軍人だ』

予想通り、セシリアはそう思ってから。

『一夏さんは、落ち着いている人を好む傾向がありますわ。どうです?』

ゆつくりと手を差し伸べて、絶妙な角度で首を傾け

『私と、一緒に学びませんか?淑女、いえ、乙女の作法を』

につこりを微笑んだ。ラウラは微笑みに見惚れて口をポカンと開けた。箒も同様であった。

「0、試合開始!」

一瞬だが、確実に何かに圧倒された己を奮い立たせるように箒は自分に声をぶつける。

「い、行くぞラウラ!……ラウラ?」

「そ、その……うーん……」

「ラウラ!何なら焼き魚も」

「軍人としての立派な振る舞いも良いと思います。ですが、女性としての柔らかい仕草、落ち着いたたたずまい、それらを学ぶ機会は中々あるとは思えません。いつものラウラさんと違う一面を見せればあ
るいは」

「そ、そうか?」

「悪魔のささやきだ!だまされるな!!更に肉じやがも加えていい!」

「さあ、私の手をお取りください。武芸だけで無い、他の世界、他の視点もいいものですわ。優雅で、華やかに」

「そ、そうだな!箒!すまない!」

「そ、そんな……ま」

「お前ら本当にゲスいな」

「でも、気持ちは分かるよ。僕は。僕だって同じ状況ならこれぐらい
すると思う」

「シヤルならもつとゲスいこ」

「怒るよ?」

「ごめんなさい」

そしてラウラとセシリアは箒にライフルとグレネードを向ける。二体一と圧倒的不利な状況。それでも、箒は二振りの刀を構える。

「たとえ不利だとしても！私は引かない！」

「その心意気、買いましたわ！」

「遠慮はしないが！」

およそ六分後、箒は墜落した。この中で一番IS登場歴が短い割には頑張ったと言える。

「やりましたわ！」

「無論だ！」

「くっ！無念だ……」

箒は座り込みながら顔を俯けていた。対照的にラウラとセシリアは握手をして万歳した。

「まつ、どんまい」

自販機から買ったラムネ（缶）を投げて箒にパスをした。いつもの訓練時間に比べればとても短いけど、でも何かを賭けた試合ってのは精神力を削る。俺はあまり賭け試合は好きじゃない。

「ああ、ありがとう。希」

さらにシャルが三人分のタオルをそれぞれに渡す。相変わらずである。それぞれ感謝しながらタオルで体を拭いていく。正直ラウラ以外目に毒なので彼女らの反対側を向いて座り込んだ。

「勝つ日もあれば負ける日もあるさ。それと、セシリア。やっぱり変わったな」

「何がでしょう？」

「笑みがさらに柔らかくなった気がするぞ」

何と言うか、シャルに近づいた気がしたような。でも何か違うような。それに対してセシリアは

「多分、それは希さんのおかげです。父上が立派だったとかそうでは

なく、父上は私の事を立派に育てようとしてくれたのです。だから、立派に育とうとより思ったのですわ」

「なるほどな。頑張れ」

「はい」

落ち着いた笑みだった。そう、これこそ淑女？というべきなのだろうか。っと、忘れてた。

「そうだ、箒。忘れてた」

「何だ？」

平気そうな顔の箒。もう切り替えた、そんな顔をしてるけど実際には違うだろう。

「ほらよ」

ピシッと紙切れを一枚投げた。慌てて箒が取ると

「こつ、これは……ウオーターランドの!？」

「なっ!？」

先ほどメールをした所、用事が出来ていらなくなった人がいるらしい。二枚のうち一枚を購入した。

「この際だからさ。日ごろにお前らには世話になってるから。セシリアには狙撃、箒は剣術、ラウラには実戦の戦闘方法とか。三人とも金は要らん。奢りだ。せいぜい楽しんで来い」

「確かに希さんにレクチャャーをしてはいますが、お互い様です。先ほどチエルシーとそういつたではありませんか」

「私も料理を教えてくださいたい」

「私たちの方が受けているものが大きいぞ」

まあ大好きな相手についての恋愛相談してるわけだしね。比重は大きいか。

「まっ、そうかもしれないけど。それならお前たちが俺に返そうとしてくれればいいさ。これは親切の押し売りみたいなもんだから。いつか勝手に取り立てさせてもらうから。ほら、さっさと明日の準備をして来い」

それに、今の俺にとっては訓練……強くなるってのは大きな比重を占めている。だから、これでいい。三人はありがとうと礼を言っただけ

らロッカールームへ駆けて行った。それを見送ってから、シャルがはあつとため息をついて

「希は、本当に……」

「良い人に見えるでしょ?」

「ううん、良い人、だよ」

「善人ってわけじゃないんだよなあ」

善人ってわけじゃないんだよなあ。一夏みたいなの。でもシャルは笑って

「希はね、確かに一夏みたいに下心なく動ける善人・聖人じゃないかもしれない。でも、そうしたことには悩みながら、でも結局みんなを手助けしちゃう人間味あふれる所が希のいいところだから」

「……ありがとな。本当に。よし、訓練するか」

「うんっ」

そうだよなあ、うん。俺は悪い奴じゃないし、一夏と比較なんかしちゃいかん。

さて、そう一件落着と思ったら――

ダンッ!!

ロッカールームの扉が開いてきて制服姿の鈴が飛び込んできた。訓練するつもりじゃないってことだ。まあ扉をダンッて開けてきた時点でそりゃ訓練する気じゃないってのはねえ。

「希!!どういふことよ!!今日はあたしの味方なんでしょうが!!」

「すまんが命には代えられんのだな」

「アンタだつてわかつてるでしょうが!!アタシがあいつらとプール行くと不利つて!!不利つて!不利つて……」

おお、現実をちゃんと語った。でもだんだんとしぼんでいくと申し訳なさが出てくる。まあ、全部がとは言わないけど8割俺が悪いし。

「あーもう、俺の事情も分かつてくれ。その代わり今度何かボーナスチャンスやるから」

「……別にいいわよ。アンタにはもうあんまり迷惑かけれないから。アンタにはアンタのやることがある。それでしょ?」

そう言つて鈴はシャルをチラリと見た。ああ、こいつの成長ぶりに

涙が出てくる。

「鈴……本当に立派になって……俺は――」

嬉しいとか続けようとしたが、さらに踏み込んできて威圧してくる。

「でもね、それとこれとは別よ！鬱憤がたまってるの。ストレスが溜まってるとも言おうね。今から吹っ飛ばしてやるわ！そこで待ってなさい!!」

バタリと扉が閉じられた。一分二分もすれば着替えて出てくるだろう。

「はあ、全く。厄日だなあ」

「大変そうだけど、頑張ってるね！」

「はいはい」

まあ、そんな日もあるだろう。

P・S. 体が色々痛かったけど終わった直後にシャルのマッサージで癒されましたまる

鈴が余計怒った気がするけど

さらにP・S. 蘭の分もチケット取ってやればよかったと後から後悔した

三十八話 プライベートな質問

「と言うわけで今日は無理になった。遠慮せずに楽しんで来い」
『分かった。また今度どこか行こうぜ』

「あいよ。それより、四人全員美少女なんだから目を離すなよ。アホな男がわんさかくるからな」

『どうやって撃退すればいい?』

あいつら自身戦闘力が化け物だから実際には放つといってもいいんだけどね。

「そう言った場合はな、恥ずかしいかもしれないが俺のツレなのでとか言いながら腕を組め。それでいける」

『おい！水着だつてのを考えてくれ！あいつらも嫌がるだろうし』

こいつ殺されても文句言えないレベルで鈍感だな、いつも通り平常運転。

「嫌がらねえよ。何だかんだで親しくしてる。しょうがないとか言いながら許してくれるって。暴力沙汰にもならないし。第一、俺が保証してるんだ。俺が今まで嘘ついたことあったか?」

『どれだけ言えばいい?』

「冗談は多かつたかもしれないけど、嘘はないだろ?」

『……分かった。またな』

「あいよ」

携帯電話をしまう。すると後ろから

「ねえ、どうしてウオーターランドじゃないのかな?」

「あー、あんな不特定多数がいる所にはシャルを連れて行きたくないなど。その、他に人と接触しちゃうかもだし」

そう言ってから、あれ?すっげーやばいこと言ってる気がした。独占欲丸出し発言な気がする。付き合ってもないのに、あれれー。引かれたかなー、とか思いながら後ろを振り返ると、真逆だった。

「それなら仕方ないね！人が少ない所も良いと思うー!」

照れながらの笑顔。しかもそのまま部屋から慌てて去っていく。

ああ、今日も平和だ。

「おかえり」

「ただいま。はあー、今日は疲れた」

一夏が帰ってきて、座り込んだ。時刻は午後六時。内容を語ってくれた。

大まかな流れだと、まあそこそこ五人は仲良くやれてたらしい。ちよつかいかけてくる男も一夏が無事撃退していたし、牽制しあいながらも仲良くやれていた。ただ、十一時ぐらいの時にアナウンスが入ったようだ。水上ペアレースイベントが。

そこから決定的に亀裂が入ったらしい。優勝賞品が拍車をかけた。

四人が一斉に一夏と組もうとする。でもらちがあかない。ちなみにこの時点で一夏は俺に助けてくれと電話をかけてきたがシャルとゆったりしていたかったので無視。第一どうしようもない。

そこでセシリアが提案したらしい。

「私達四人で組んで、この券をお世話になってる希さんたちにプレゼントしましょう」

その場を収めるためだけの発言だろう。成長したと言える。だが鈴が

「あのね、さっき言ってたでしょ。希が自分で選ぶって。金もあるからあいつにまかときゃいいのよ。でも、二人ずつ組むってのは賛成ね」

目先の欲望にとらわれすぎたのか。一夏さえいなければこれに乗ったかもしれない。でもその場に一夏はいた。なし崩し的にセシリアもここまで来たら仕方ないと参加を決意。一夏はその間何もできなかった。

そして、レース。身体能力などが一般人よりはるかに上のIS学園の生徒のトップ集団だ。負けるはずない。妨害などもあったようだが四人が力を（最初は）合わせて瞬殺。オリンピックのメダリストた

ちにはさすがにてこずったようだが、なんせ四対二だ。一人ずつなら互角でも二倍の差があればさすがに違う。四人になったとき、凄まじいバトルが開幕。

本場の軍隊格闘を交えた本気プレイ。他の選手ももう参戦は無理と諦め、見守る大勢になっていた。で、結果は鈴・セシリアペアだったようだ。箒は得意の剣術が使えないし、コンビネーションも負けていた。で、鈴がGETしてきたようだ。

さて、となるとセシリアと取り合いになるかと思われたが、セシリアは「貸し一でいいのなら、お譲りしますわ」と下がったらしい。で、鈴は拍子抜けしたようだが、それ以降も遊んで帰ってきて今ここ。

「となると……セシリア、まさか」

「ん？どうしたんだ？」

「いや、それより――」

「やっほー!!」

ハイテンションで飛び込んできたのは鈴だった。テンション高くしてないとやっていけないのだろう、今からの事を。

「さつき手に入れた沖縄旅行のチケット！一緒に行かない!?色々誘ったんだけど、みんな用事があったりしていけないようなの。だから、あとアンタしか残ってないのよ！まあ、この五泊六日の沖縄旅行のチケットの代金は要らないわ！」

「ん？希は……そうだな、いらないうな。シャルロットがいるもんな」
こいつも言うようになったな。全く。となると、鈴がこの旅行で一気に詰め寄るか。もしくは、セシリアが引いた事を見ると、多分あいつはあいつでチケットを手に入れるのかもしれない。もしくは沖縄旅行を予定してたとかで参加してもいい。だって、代表候補正には金はいくらでも入ってくるし。家が貴族だし。貸し一つ作れるならそつちもアリだ。

「じゃあ……と言いたいけど、ちよつと遠慮しとく」

「なっ、どうしてよ!？」

ダンツと机を叩きつけて詰め寄る。それに引きながら

「いや、五泊六日だろ？そんな長い間訓練さぼっちゃ、お前たちに追

つけないだろ？皆を守れるようにさ、強くならないと。希も頑張ってるし」

あー、気持ちは分かる。今ここで引き離されたくはないし。

「だから、悪いな」

「はー、しょうがないわね」

理由が理由の為引き下がった鈴。でも残念そうだ。ちなみに、他の女と約束があったら血の雨が降ってるだろう。

「じゃあさ、一応聞いておくけど、希はこれいる？」

「俺もそんな長い間訓練さぼるつもりはない」

「でしょうね。はー、どうしようかしら、このチケット」

「いやどうしようもない」

「いちいち反語言わないでいいわよ。二人つてのがネックよね。家族とかなら弾とかに渡せばいいけど」

「二人組で行きたそうな奴いないからな」

「まっ、適当にダチに声かけとくのが適当だな」

「そうね、そうするわ。じゃ、食堂で」

それを見送った後、ラウラ、セシリア、箒の三人にこの事をメールを送っておく。セシリアから「無駄ない買い物をする前で助かりましたわ」と返事が来た。予想どおりって所か。

「さて、じゃあ先に食堂行ってる」

「俺はもう少し後で行くよ」

俺は先に部屋を出ていった。

「でき、のほほんさん。整備のコツとかってどんなの？」

「まずねー、ISの凶面を頭で描けるようにしてねー、そうすれば大丈夫だよー」

「その過程に至るまでの方法を知りたいのですが……」

夕食の時刻。ISの整備を行えるハイスペックなのほほんさんにコツを聞いていた。すると遅れてやってきた箒が

「相変わらず熱心だな。だが、いいのか？訓練もあるのだろうか？」

「俺は幅広くやるタイプだから。それと、発達の余地がある場所を上

げてくのが一番手っ取り早い」

とは言え、一週間に一回は整備を受けてる訳だけど。でも、やっぱり週末辺りは少しあれれ?という感覚がする。他の皆も一週間に一回は整備課に頼んでメンテナンスするらしい。箒は知らん。一夏もこいつらの機体は東博士お手製なので自己修復装置が強かったりするのかも。

「だが、幅広くやりすぎると器用貧乏になる。気を付けるべきだ」

「それには注意してる」

どれもこれももしかり熱意をもってやらないと。さて、

「それで、今日のプールはどうだった?あのメンツだとお前が一番頑張れそうだけど」

「どこを見て言ってる、どこを」

さっと両腕を肩に回した。いっけね。

「悪い悪い。で、どうだった?」

「……良く分からのんだ。確かに真剣も竹刀も一度も振りまわさなかったが」

プールだからね。持てないよね。

「が、ついつい絞め技を使ってしまった。その後その……胸が当たってたのに気づいて……打撃技を」

あれ、そこまで話さなくても。ちよつと気まづくなっちゃうよ。俺はあははと笑いながら

「そつ、そうか。まあ、ほどほどに頑張れや」

「無論だ」

そう言うと、箒は周りをきよろきよろ見渡した。まだ、ちよつと早めだから人は少ない。すると箒は身を乗り出して

「その、だな」

「なに?」

「すごく変な事を聞いていいだろうか?」

「俺は大体どんなことにも答えるよ」

すると箒はぐくつと唾を飲み込んだ後、

「その……男から見て、胸は大きい方がいいのか?」

「東大入試よりムズそうだからではさー」

席を立て離れようとした直後、後ろから肩を押さえられた。

「あら、私も興味がありますわ」

セシリアである。前門の虎、後門の狼。でも、えー、やめてほしい。でも仕方ない。この二人に囲まれてる以上どうしようもない。「えっと、ですね。あくまで俺の意見だよ？俺の。まず、そこまでこだわってるやつは実際にはいないと思うよ。一夏は別にそこまでじゃないだろうし」

「ですが、山田先生をいつも見ているではないですか」

「そりゃ仕方無いよ。動いてるものに反応するのは人として当然でしょ？自分の視界で、動いてるものにはついつい視線を集めるようになってるんだよ。だからつい向いちゃうだけだつて」

「ほう……つまり、私のこれは邪魔だと言いたいのか……」

軽く殺気があふれる。後ろからである。

「い、いやー。そんなわけじゃないですよ。そこには男の夢が詰まってるだよ！だから、大丈夫！一夏も小さいより大きい方がいいって！俺も！」

「ふむ、そうか……礼を言う」

「すみませんでした。このようなお話に付き合わせてしまって」

さつきは酷い目にあつた、そう思いながら部屋に戻る。一夏の能天気な表情は平常な時なら大丈夫つ、どうにかなるさ！つて気分してくれるが、女性関係の何かに巻き込まれた時は吹き飛ばすと思う。

で、部屋に着いた直後だ。隣から鈴とラウラが現れた。

「珍しいな」

この二人の組み合わせは珍しい。鈴はいつもセシリアとくっついてるし、ラウラはシャルカ箒だ。

「えっと、その、相談いい？頼めるのがアンタしかいないのよ」

「私からも頼む」

二人一緒にか、どんなだろう……いや、ちょっと待て。いやいやい

や、一瞬よぎったけど、それじゃないはず。それはさつきやったから。「一夏はちよつとあとから来るわ。だから、希の部屋でいい?」
「いいけど」

「ねえ……男から見ても、胸ってやつは大きい方がいいの?」

心の底からため息をつきたくなかった。面倒なことこの上ない。

「嫁を観察していると、箒やセシリアに視線が向いていたのだ」

二人の視線はうつむき気味だが。はーあ、ここまで助言しにくいことはない。っていうか助言?上を仰ぎ見てから、二人に向かつて

「まあ、それは人によるとしか。でも、視線が釘付けになってたのはただ人間は本能で動いてるものに視線を合わせちゃうからだって。お前たちも視界の一部が動いたら顔が向くだろ?だから視線が向くのは仕方ない」

「そ、そうなの……」

あれ?落ち込んだ?まあ、確かに落ち込むようなこと言ったかもしれないけど。

「でも、俺の見立てだと一夏は胸の大きさにこだわりはないって!大丈夫大丈夫。チャンスはいくらでもあるって!第一確かに若いころはいいかもしれないけど、将来を考えたら大きくなって垂れるだけだって!!お前たちぐらいでいいんだって!皆に希望を与えてるから小さいだけだつて!!」

「そつ、そうだな!兄よ!卑屈になってはいけないのだな」

「そうよ!セシリアとか箒とかなんて歳とりや垂れるのよ!」

「そうそう!……ちよつと飲み物買ってくる」

話題が話題なのでまた疲れて扉から出た。

「ほー、垂れるだけ、と」

「少し胸にグサツと来ましたわ」

「へー、僕は大きいかな?小さいかな」

……何が何だかわからなかった。今起きたことを理解出来ない、いや、したくない。必死で現実から目を背けたい俺の本能が、現実から目を逸らそうと――

三十九話 息抜き

『ツツコミだけじゃないデース！半分は優しきで出来てまーす！』

「あー、和むわー、あー」

女子に理不尽(？)な怒りをぶつけられてしばらく。今現在、今期話題沸騰中のゆるふわ日常系アニメを見ていた。あー、考えないですむアニメってのもいいもんだ。一クールごとに一本か二本あるのがいい。

「全く、私たちがみたいな美少女がいるのに、何でアニメみてんだか」

「怒ってこないからね。理不尽な暴力にもさらされないからね。癒されるからね」

「私たちじゃ不足っての？」

ずらっとこの室内にいる女子達を見渡す。いつもの一夏ハーレム＋シャルがいる。ちなみに、どうしてこのタイピングできんモザ見てるか？あてつけだよ！したくもなるよ。漫画も全巻買ってき俺の漫画棚におすすめ！って張り紙するぐらいにはあてつけてるよ！

「お前たちが癒し運んできてくれるなら考える」

「全く、よく思い出しなさいよ。私たちはちゃんと癒してあげてるじゃない」

コイツは記憶を創造する力でもあるのだろうか。そんな記憶は無いはずだ。

「お前はいつから記憶を創造する力を手に入れたの？面倒事を運んでくる記憶しかないよ。ラウラはすっごく癒してくれるけど」

「僕じゃ駄目なの？」

「あのね、いい意味でだけど、一番精神を削るのはシャルなんだけど」
面倒ごとは対処すればすむ。ただ、シャルだけはどうやって対処したらいいのか。いつも心臓をばくばく動かされっぱなしだ。シャルには。

「なら、どうしたら癒されるのかな？」

「何されても心臓が激しく動くよ」

一緒にいるだけでもそれなので。それに対してシャルは嬉しそうな顔をした。だから、こういうのが困るんだって！

「イチヤイチャしないの。まあ、確かにそこそこ迷惑かけてる気がするけどね」

「自覚があるなら注意してくれな」

「だよな」

おい、テメエだよ、だよなーとか言いながらうんうん頷いてアホ面さらしてるテメエだよ一夏！

「なあ、シャルロット」

「なあに？」

「いつも私は兄に迷惑をかけている。そこでだが、ISのコーチ以外にもなにか恩返しをしたいのだが、シャルロットならなにかいい方法を知っているだろうと思ってたのだが」

（肩たたきでもしてあげれば喜ぶだろうけど、希がもっとシスコンになっちゃうよね。うーん、でも僕じゃ残念だけど駄目みたいだから。たまには息抜きさせてあげないと。それに息抜きしたら）

「あのね、ラウラ」

続きを言おうとしたときだった。

「それ、いいですわね」

「乗ったわ」

「私もだ」

（あれ？もつと負担かけるだけにならないかな？これ。い、いや大丈夫。皆成長したし大丈夫！）

事態は膨れ上がって進みそうだった。

「疲れたー」

いつも通りハードな訓練を終えた夜、ばたんとベッドに倒れこんだ。一夏はどっか行ったようだった。今日の訓練を思い出しながら明日の予定を組み立てる。そんな気だるげながらも一息ついてると

き、ノックの音が響いた。この音はラウラだ。

「いいよー」

「お邪魔する」

見るといつもの格好、一夏に選んでもらったパジャマを着ていた。つて言うかこれ以外を見たことがない。普段どうしているのか、このパジャマがないときは前みたいに裸で徘徊するのだろうか？とか考えながら見つめると、ラウラがぎゅっと拳を握って

「その、兄よ。そのだな」

「一夏に関して……じゃなさそうだね。どうしたの？」

「兄は私に世話をかけてもらってると思ってるだろうが、私こそいつも兄に世話になりっぱなしだと思ってる。そこでだ、マツサージをたまにはしようと思つて来たのだ」

「ら、ラウラ……ラウラアツ!!」

涙腺が緩んだ。完璧に油断してた。大切な妹からのお返しご褒美。しかもちよつと恥ずかしげに、でも視線を合わせての！ヒヤツハア！「どつ、どうしたのだ!?!」

「いや、ただ感謝、圧倒的感謝してただけだよ……じゃあ、頼もうかな」「もちろんだ!」

見る人を明るくするような笑顔。その笑顔にさらに泣きそうになる。

「では兄よ、うつ伏せになってくれ」「ん」

ベッドの上で俯きになる。そして添えられる小さな手の感触。あー、シャルの手よりまたちよつと小さいな。あー、心地いいな。背中をせつせ押ししてくれたり、腕を揉んでくれたり。

「どうだ？」

「いいよー、あー、いいよー」

小さいけど非力なわけじゃなく、小さいながらの力強さ。ぎゅっぎゅっぎゅと擬音が聞こえそう。つていうか頭の中で勝手に付けてる。ひそかにISでカメラ機能を発動しようか悩むぐらいにはいい感覚。二十分ぐらいだろうか。至福の時が続いた。そして

「ふうつ、次は座つてくれるか？」

「もちろん」

次は椅子に移動する。すると今度は肩を揉んでくれたり叩いてくれたり。そして、思い出す昔の光景。……いや、中学校の時でもやってたけどね？母さんに肩もみとか。でも、それよりさらに前の小学生低学年ぐらいを思い出す。喜んでくれたな……あれよく覚えてないぞ？とか思いながらも、肩もみが昔から廃れない理由がわかった。これはいいものだ。この振動がじゃなくて、可愛い妹がやってくれるという点が！

「あつ、兄よ！どうしたのだ!?なぜ泣いているのだ!?痛かったのか!」
横から覗き込んできたラウラがうろたえた。

「えっ……あ、泣いてるのか」

気づかなかつた。泣いているのか、俺は。別に家族に妹はいなかったんだけどな。

「ちよつと、家族のことを思い出してね。俺もこうやって母さんとかにやってたなって」

「そういえば、兄の家族のことはまったく聞いていないが、どうしたのだ？」

そっか、そういやあまり話してないな。シャルにもあまり話してないし。

「どうだろ、連絡取つてないし。連絡は出来るようだけど」

「なぜだ？なぜ連絡を取らないのだ」

「……分かんないや」

「そうか。……どんな人たちだったのか？兄の両親は」

そう言われると、分からないな。

「一般的な家庭だったよ。一戸建てに両親と俺の核家族。でも、改めて言われるとどうだったっけな。口にすると難しいな。これでも結構真面目だったからさ。朝練のために早起きしてき、勝手にパンとか餅を食って出て行って。一夏たちと中学校でわいわいしながら部活やって。帰ってきたら三人でご飯食って。テレビを見ながら他愛もない話をして、ちよくちよく勉強はどうだとか聞いてきたりし

て……」

「兄よ……また」

また涙が流れたようだ。服で拭う。

「その後に風呂入ってね。学校で終わらせれなかった宿題を片付けて。父さんとFPSゲームして、柔道着を洗って干して。でも、今はどうなんだろうな……俺のせいだよなあ……」

ぎゅつと、後ろから抱きつかれた。

「兄よ、私は家族を知らない。兄しか家族はいない。だから良く分からないが、辛いのだと思う。兄がいなくなったら私は辛いから。そして、辛いときは泣いてもいいと思うのだ」

「……大丈夫。死別したわけじゃない。それより、ありがとな、ラウラ。こんな立派な妹がいてくれて幸せだよ」

「私も、立派な兄がいてくれ幸せだ」

ぎゅつとよりいっそう抱きしめてくれた。その小さな手に俺は自分のを重ねた。微かだけど、確かな温かさがここにあった。

「いい話ですわ」

「全く、意地っ張りなんだから」

「希も普通の面があるのだな」

扉から聞き耳立てながらうんうん頷いていた。が、不穏な気配がした。

「希……僕には家族のことあまり話してくれなかったのに……ラウラのほうがいいの？妹のほうがいいの？はたから聞いてると許されない関係みたいだよ？」

いい話で終わるはずなのにと三人は思った。

「か、家族は家族のことではしか分からないこともありますわ！」

「希は僕を家族として見てないの？」

「ちよつと気が早すぎるのではないか？」

「た、多分弱いところを見せたくないだけよ！前アタシにそんな感じのこと言ってたしー！」

「普通は僕にこそ吐くべきだよ、希は」

めんどくせー、三人はそう思った。希が絡んでいじけたときの面倒くさは圧倒的だ。一生懸命におだてたりしないと暗黒空間を作ったままになる。

「日本男児たる者そういうものだ。シャルロットはフランス生まれだから分かりにくいかもしれないが、日本ではそういった風に育つ。弱いところを見せず、立派であれど。だからシャルロットは希が倒れないように傍でじつと支えてやればいい。苦勞を分かち合うように、悲しみを和らげるように。日本で育った私がそう保障しよう」

「……分かった。傍で希を支えられるように頑張るよ」

やっと立ち直ったことに安堵する。

「さて、じゃあ戻りましょ。じゃあ明日は私ね」

その一言で解散となった。

「いやー、今日はすっげえ調子が良かった」

多分ラウラのおかげだろう。動きのキレが上がったというべきか、吹っ切れたというべきか。まあ負けたけどな。でも、いい動きになったといわれた。今日感覚を思い出しながらベッドで寝転んでいるとノックが響いた。これは、鈴か。

「あいよー」

「邪魔するわ」

鈴がすつと入ってくる。んー、何だろうな。ぼーつと見つめてると、鈴はそっぽ向きながら

「その、今日も疲れたでしょ？ マッサージしてあげるわ。今日は暇だし」

「んー、じゃあ頼む」

なるほど、なるほどな。発端は誰かな。多分、ラウラか。トップバッターだったし。となるとあと三人……いや、シャルは多分ないかな？

「ほら、さっさとうつ伏せになって」

「へーい」

シャルより小さいけど、ラウラよりちよつと大きい手。昨日のよう

な温かさではないけど、元気が出てくるような氣力をもらってる氣がする。

「それで、このごろ調子はどう?」

「今日はラウラのマッサージのおかげで絶好調」

「マッサージだけじゃないでしょ。……あ」

つい口に滑らせたようだな、こいつ。

「聞いてたか、迂闊」

ISを起動。音声を拾おうとすると、慌てて四人分の去っていく足音がした。

「シャルはなんだって?」

「僕は家族じゃないの?とか僕にこそ弱みを見せるべきだよとか言ってたわ。アンタのこととなると面倒なぐらいイジケるわね」

「みつともない姿見せたくないだけなんだけどなあ」

「家族を想って泣くのは悪いわけじゃないじゃない。アタシもしたわよ」

「そう、か」

「そうよ。それと、やっぱり氣付いてる?」

「二日連続じゃあねえ。発端はラウラ?」

「相変わらずいい勘してるわ。兄として気分はどう?」

「妹の成長を見るってのはいいもんだ」

「アタシは成長した?」

「したよ。すつごくな。一年たったら変わるもんだ。一年前の俺に今の光景を見せても絶対信じないだろうな」

「でしようね、男がIS乗れるだなんて。しかもアンタが」

「だな」

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。まあ、冒頭のこの出だし。どんなものでも移ろいゆくとかそんな意味だけど(多分)。まさにそうだな。人間三か月とか半年で細胞とか全部入れ替わるらしいし。

「これからも変わっていくのよ。多分、シャルロットは家族になるのよ?」

それには何も答えれなかった。

「何しようかな」

土曜日の午後。食後の運動にIS動かした後、このごろ無理をしたので今から休むことに決めた。午後四時ごろ。すると、今日は二人でやってきた。

「あら、奇遇ですわね」

「奇遇だな」

「だな」

多分違うのだろうけど合わせるのが礼儀なので合わせた。セシリアがわざとらしそうに

「そうですね、私、手作りのクッキーを作ったのですがどうでしょう？一緒にお茶をしませんか？」

「実は私も久しぶりに和菓子を作つてな、茶もある。一緒に食べないか」

珍しい組み合わせの三人で休憩所？みたいな場所に移動した。屋上に行くかと思つたけど暑いので諦めた。

「どうですか？」

「うん、クッキーをも美味しいし紅茶もうまい」

「私のはどうだ？」

「団子とかもうまいしお茶もうまい。いいねー」

適当に雑談をしながら時間が過ぎて行く。これこそ日常、そんな穏やかさだ。重い会話もなく、他愛ないことを話しながら外を眺め、時間が過ぎて行くのを感じる。授業でここが難しいとか、あの先生は厳しいとか。お前たち成長したなとか。そして、

「ありがとな。美味しかった。また呼んでくれ」

「はい、もちろんですわ」

「もちろんだとも」

さあ、解散となろうとしたけど、一つ思い出した。箒に聞いておくことを。

「なあ、箒。東博士を恨んでるのか？」

「突然なんだ」

「いいから」

「そうだな。よく分からん。昔はすごい姉だと思ってたし、今でも思ってる。でも、好きなのかは。気持ちが整理できてない。だが、恨んでいるのは間違いないと思う」
なるほど。

「一夏と離れることになったからか？」

慌てふためいて違うぞとか言いそうになったが、何かを察してくれたのか赤いながらも真面目な顔で

「そうだと思う。それに姉さんがISを開発しなければ、いや、それは違うな。ISを開発してくれてここにいる皆と出会えた。でも、開発しなければとつい思ってしまう」

「そうか、分かった。ありがとな。また今度呼んでくれ」

「じゃあ寝るわ」

「分かった」

十時半、高校生にしては早いけど。でも仕方ない。疲れてるし。ベッドに移動しようとしたところでノックの音が響いた。

「誰だー？」

「私たちだ。一夏、少し来てくれ」

そう言われると一夏は外に出ていった。入れ替わりで来たのはシャルだった。

「どう？少し息抜きできた？」

「お陰さまでね。穏やかなのもやっぱりいいもんだって実感した」
「なら、よかった。それなら」

シャルはベッドに腰掛けてる俺の背後にまわると、急に抱きついてきた。パジャマは制服より薄いからダイレクトで伝わってくる。

「シャ、シャル!?!ちよっ」

「いや、かな？」

「そうじゃないけど、すごくドキドキする」

「そのために皆に協力してもらったんだよ。ここ最近で心が落ち着いただろうから僕がドキドキさせても大丈夫でしょ？」

「全くもう、無茶苦茶な理屈だなあ。でも、いいな。このドキドキ感覚もいいもんだ」

「良かった」

せいぜい五分程度だったけど、とてもいい時間だった。

40話 誤解

今日は日曜日、企業の研究所（実験施設）に出向いて検査を受けていた。ちなみに俺には鼻づまりだとか目が痒いだとか肌が荒れてるだとかの微妙だけど悩ましい悩みはない。なぜか？

仮にも世界で二人しかいない男性IS登場者。鼻がつまればすぐに俺に調整された鼻薬がもらえるし、目が痒ければ目薬とかマッサージ。肌も同じ。一週間ごとの精密検査で筋肉の疲労度から何から何まで教えてくれる。一週間ごとに必ず受けないといけないってわけじゃないけどね。一ヶ月に一回受ければいいって博士には言われている。ちなみに栄養状況はかなり理想的と言われた。シャルのおかげだと思うとなんか、こう。嬉しいって言うか誇らしいと言うべきかこそばゆいような。まあいいや。

「博士、どうです？原因は分かりました？」

ひとまず聞くだけ聞いてみる。三週間ぶりに使うこの言葉。原因と言うのは、俺がISに乗れる理由の事だ。

「残念ながら」

博士、名前は一之瀬光（ヒカル）。身長170cmほどで少し痩せぎみ、顔は一夏ほどではないけどイケメン。運動能力皆無だけれども俺の知る限り東博士に次ぐ天才。師匠と幼なじみであり、師匠の機体を男にして整備総括してる。

普通ISの整備は女がやる。車とか作り終わったら試運転してどこが悪いか調べるものだ。ISも同じだけど、男には乗れないので仕上げは厳しい。最後の微調整だとかが難しいのだ。にも関わらずIS整備を任されるのだから技術力はすさまじい。そして大和重工のIS開発総責任者でもある。大和重工は各大企業が出資して作ったIS専門企業なのでその総責任者つてのはIS関係で一番能力が高い人つてこと。でもISだけでなくてその他の部門にも手を貸していて特許も若くして大量に取得している。とにかくすさまじいらしい。

「そうですか。検査ありがとうございます。師匠によりしく伝えて

おいてください」

「分かりました。それでは」

物腰の丁寧な人である。もっとフランクでもいいけれどなあ、こっちのが世話になりっぱなしなのに。でもこの人師匠に対してもこうなんだよなあ。敬語自然体って感じ。

「それで、どうして教えてあげないの？」

入れ替わりで入ってきた香苗が光に問いかける。

「原因っぽいものは掴めていますですが確証には至っていません。だからまだ教えることは出来ません」

「確証に至ったら教えるの？」

「悩んでいます。彼は教えても秘密にするとは思いますが、その影響による自身の能力を知らせたら精神的に不安定になるかもしれません」

「原因だけ教えて能力は隠したら？」

「多分、原因を教えたら能力にも気付きます。レポートを見る限り福音以降能力がさらに強くなっています」

「福音ってあれ極秘重要機密だったけれど、どうやって調べたの？」

「ISの深層データから汲み取りました。浅い場所は恐らくIS学園で消されたと思います。極秘のことでしたから証拠隠滅のために」

「相変わらずすごいわね。それで、しばらく教えないつもり？」

「まだ、ですね。ですがそう遠くはないかと」

「お、今日は早いな」

「まあな」

午後三時。いつもに比べて早めの帰宅。

「そうだ、弾と雑談してたけどISのゲームに新しく追加された希の機体つええって言ってたぞ。前学年トーナメントで見た通りの強さだってはしゃいでた」

「実際強いからな。お前のは無いよな？」

実際にゲームで使ってみただけ、弾幕を張るもいいし接近して斬り

かかってもいい。特殊武装も使えると言うマジチートな機体。

「束さん手製だし。データ公開もしてないし」

俺の機体はある程度発表してる。企業は作ったものを宣伝しないといけないし。

ちなみにフィギュアも売れてる。しかも近年稀に見る勢いで。取り付けれる武装は三十種類以上にも及び、可動域は二十箇所。安めのプラモデルから超合金まで。俺の顔をすっかり再現までする必要はなかったと思うけどね！一夏が搭乗者だったら女性人気も出ただろう。

さらに言うとCMの話まで出てきている。IS学園のイベントで勝ち続けている限り俺の人気は落ちないだろう。負け続けてたらどうなってたか恐ろしい。

「それで、訓練行くか？ 宿題も終わったし」

「いや、ちよつとシャルと出掛けてくる」

「あー、そうか。弾の気持ち分かるな」

「どんな気持ちだよ」

「出会いが無いなーって気持ち。爆発してろ」

「はっはー、死ね。氏ねじゃなくて死ね」

「そこまで言われること言ったか俺!」

俺じゃなくてあいつらに聞かれてたら殺されてたな。こいつ。

「まあ、とにかく行ってくる。その言葉間違えてもあいつらの前で言うなよ」

「分かった」

あいつら、この言葉で分かるぐらいには鈴たちと仲がいいとは思ってる、のか？

「はー、どこかに可愛くてナンパしたら乗ってくれる子はいねえのか」
弾は駅前をさすらってた。ひたすらに出会いを求めて。ちなみにさつき失敗したばかりである。そしてそんな都合のいい人はまずいない。

「一夏は女に囲まれまくってるんだろうな。しかも美少女たちに。」

さつきも皆と訓練きつくてとか。あー、ちつくしよー！ 希はいるのかどうか微妙だなー。いい奴だけど深く関わらないと良い所に気づかないし。でも深く関わらない奴だしなー。ってアレは」

視線の先に見つけた影。清水希その人。

「おしやべりでもするか。ってオイ？」

その隣に見つけた金髪の人影。

「ucci、あいつも爆発してればいい場所にいつちまったか。あれ、でもあの女性？」

ISのトーナメントで見た。希のパートナーで、世界で三番目の

「いやいやいや、ちよつと待て。え？」

だが男だ（弾から見ると）。口をぱくぱく動かして

「う、嘘だろ。嘘だと言ってよノーゾミイ！」

だがあの時の希のパートナーだ。男なのにここまで綺麗なやついるにかと思つたから彼は覚えていた。

「ど、どうするよ俺、どうする？」

「もしもし、弾か。どうした、まだなんかあるのか？」

『や、やばいんだ希が！』

「どうしたんだよ」

『さつきまで悩んでたけど伝えることにした。希が昼間、女装した男とデートしてたんだよ！』

「な、なんだってー!? そ、そんな馬鹿な！」

『本当なんだよ！ 俺の（テレビで見て）知ってるやつだったんだ！』

俺たちの知ってる希は死んだ！ 何故だ!?!』

一夏は考える。弾はこんなタチの悪いジョークを言うような奴ではない。最後にネタ発言をしているが精神を落ちつけようと必死になつてただけだろう。となると事実である可能性がある。でもまだ確実ではない。

「と、とにかく分かった。色々調べてみる」

『わ、分かった。じゃあな』

「どうしたのよ一夏、こんな時間に集まれだなんて」

時刻は午後十時、希を部屋に置いたまま声をかけておいたメンバー（箒、セシリア、鈴）と合流した。

「じつ、実はだな。俺の友人がある情報を持ってきたんだ」

「何よ？」

「のっ、希が女装した男とデートしてたらしいんだ!!」

そう言うのと彼女たちは首をかしげ

「ちよつと待て一夏。私はお前が何を言っているか理解できない。しかも全部だ」

首をかしげてはてな、という表情をする箒。

「ありのまま起こったことを話しますわ！ 希さんが女装した男性とデートをしていたと言ったと思ったならそのままのこと言ってますわ。何が何だか分かりませんわ。恐ろしいものの片鱗を味わいましたわ」

口に手を当てて目を見開いている。そして棒読み口調。

「お、俺も嘘だと思っただんだ！ でも弾がそうだって！」

「み、見間違いないじゃない？ 彼女欲しいのこじらせてそうなたちやつたのよ!!」

弾を良く知る鈴から本人が聞いたら涙しそうな意見が飛び出た。

「いや、弾が俺の知ってる奴だって断言したんだ」

痛い沈黙が流れた。その沈黙は今までで一番重いものだった。だが、その沈黙を打ち破る声が上がった。

「まだ、断言できないわ。まだよ。調査するのよ、アタシたちで」

「ラウラやシャルロットはいいのか？」

「あの二人を巻き込んだら余計騒ぎが大きくなるだけじゃない。下手したらシャルロットはISで暴れだすでしょ。ラウラに知らせたらシャルロットが何かに勘づくわよ。同室なんだし。問い詰められたらラウラは九割吐くわよ」

ラウラはシャルロットに逆らう事が出来ない。

「で、ですが事実だった場合はもうどうしようもないのでは」

その言葉に一夏が背筋を震わせた。同居人が同性愛者、しかも学園で一人しか同性はいなし、昔からの付き合い。

「おつ、俺はそれでも希の親友だぜ!!」

「声が震えてるわよ。でも、おかしいわね。だってアイツ、その、ア、アタシの事好きだったんでしょ。なのに」

「もしかしたら、それだからかもしれないわ」

セシリアに皆の視線が集まった。全員言葉に出さずともどういう事だ? と目が告げていた。

「初恋が無惨にも終わってしまい、希望が潰えたとき、そこにあったのは変わらぬ殿方同士の友情」

「な、もう止めよう。な?」

「とつ、とにかくこれから調査するのよ。絶対ばれちゃ駄目よ」

この場の誰も本人に聞こうぜとは言わなかった。本当の事を言うかも分からないし、何が起こるかわからないからであった。

次の日。

「よつす。今日はトレーニング来てなかったけどどうした?」

不思議な顔をしながら希が問いかけた。今日の訓練の参加者は希とシャルロットとラウラだけであった。

「たつ、たまたま寝坊しただけよ!」

「そ、その通りだ!」

「何もやましいことなんて何もありませんわ!」

「ふーん、そうか」

(一夏関連で企んでる? でもラウラを誘うはずだよな、ここまで揃ってるなら。ラウラを仲間外れにしたら俺がラウラに肩入れするぐらい理解してるだろうし。となると何だろうか)

「で、一夏もどうした?」

「今日は料理の練習してたんだ!」

「へー、楽しみにしてるよ」

一瞬、彼らがざわついた。確かにざわついた。

(こいつらで企むってことは俺関連? でもシャルも巻き込むと思うけど。んー、さっぱり分からん。まあ問題ないだろうしほつといいいい。そんなことよりシャルをどこに誘うかそろそろ決めないとヤバ

イ)

ちょうどその時に先生が登場した。

「ふー、今日も疲れたな、一夏」

「あつ、そ、そうだな」

こいつ何かおかしいなあ。んー、別に俺の誕生日が近づいてるわけじゃないし。一夏の誕生日が近いけどそれならこいつがそわそわするとは思えないし。適当にカマかけてみるか、んー、まあやっぱりいや。やっぱりまずシャルの事だ。

「そうだ、久しぶりにマツサージしようか？」

そう言うで一夏はブンブン首を振って

「だ、大丈夫だ！大丈夫だから！」

みるからに大丈夫じゃ無いんだよな。

「の、希からマツサージを仕掛けるだと」

「ま、まさかですわ」

「や、ヤバイんじゃないのこれ!？」

「ふうん。あ、そうだ。今度料理食ってくれよ」

「誰の？」

「俺のだよ」

俺以外ないだろ、会話的に。まあ作ること無いし聞き返したくなるのも分かるけどさ。

「ど、どうしてだよ」

「お前が良くてな」

都合がいい。料理スキルが一番高くて口も固い、あと同性。アドバイスももらえるし。

「えっ、ちよっ！」

「だ、駄目ですわ！駄目ですわ！」

「何、だと」

「嘘だつて言いなさいよノーゾミイ！」

「ん、何だ？」

ふと脳に響いた。ドアに近寄って一気に開く。ドンツと三人がなだれ込んできた。ふむ、では。

「言い訳はあるか。寛大だから百字までいいぞ。ただし平仮名でな」

「そつ、そうか！ ならば大丈夫だ」

「三人で百字な。出来なかった奴はおしおき」

三人が我先にとわめくが俺は通常一人、頑張って二人までしか同時に話を理解できない。あ、もともとコイツラの話聞く気はないけど。

「とういうわけなのだ」

「いや、聞いてないけど」

「喧嘩売ってんの？」

鈴がいきり立つ。

「それまんま打ち返すぞ。はい、廊下に正座」

三人はしぶしぶ並んだ。

「それで、どうしてだ？」

「その、希さんが……女装した殿方とデートをしていたとの目撃証言がありましたので」

「ハアツ!？」

俺の声が廊下に響いた。

「アンタがホモなのかもって思っちゃったの！ 確かめようとしたのよ!!」

「へい、どーどー。やっぱ中入れ」

わけわからん上にこれはやばい。チラチラ聞いているのがいる。ので部屋の中に入れて全部の話を聞くことにした。

後からとても後悔した。

41話 ある日の休日

「ふわあつ」

昨日、結局俺の誤解は解けた。弾に電話をかけて、シャルの写真を送って確認して、勘違いだったことが分かったと安心とともに変な空気が流れた。流れ解散になったが、その時に全員が全員俺の事信じてた、とか言うのがとってつけたようでイラツときた。ともかく、精神的に疲れたけども今日も訓練を真面目にやってさらに疲れてる最中だ。そして食堂に移動している最中。

何かおかしい。

帰省で人が少ないとはいえ、そこそこ人はいる。そして、その人たちの視線が俺に向いてる気がする。そして食堂に入ると同時、ざわめくが広がった。

(この感覚……なんだ?)

警戒するように進み、席に着く。と同時にのほほんさんがやって来た。

「おはよー」

「おはよう。えっと、何か今日、変な……」

「それはねー、しみずーが男の人が好きって噂が流れてるからだよー」
「フアツ!」

な、なんでだ!? 誤解は解け……クソガツ!! 選択肢をミスった!

昨日周りに聞かれたらまずいと思って部屋に入れたのが間違いだった。一番最初から部屋の中でしてたならまだしも、廊下で叫んだんだ。そして解決した部分の会話は他に聞かれてない。つまり、やばい。

「ご、誤解だつて。一夏たちに聞いてきてくれ。事の顛末全部分かるから」

「そうなのー」

フワフワしながら誘導されていった。既に昨日の四人は着席していたのでゾロゾロ人が流れていった。まあ、何とかなるだろ。俺は一夏みたいに雪だるま式に誤解を増やして大爆発させる阿呆ではない。

このまま収まれば問題な――

「おはよう、希」

「うわっ!？」

「ちよつと、そんなに驚かないでほしいの。私も驚いちゃう」

後ろからいきなり抱きついてきた。シャルが。でも、何かおかしい。何だこの感覚、別に怒って……怒ってる？ 薄氷の上に立たされてその下は地獄みたいな感覚。それにいつもそばに立っているけれど、抱きついてくることはしない。しかも真昼間ならぬ真朝から。つて言うか私なんて言わない。先生の前でしか私つて言わない。

「きよ、今日は食堂だよな？」

「うん。ちよつと準備が出来なかったの」

二人で席に付いていただきますをする。横をちらつと見ると、髪留めがかわいらしいものになってる事に気付いた。言おうと思っただけど、後からにしようと思ってさあ食べようとしたら

「はい、アーン」

「えつと、その。俺、何かしちゃった？」

考えられる可能性はほぼひとつ。昨日の噂が伝わったということ。でもその場合シャルは俺にISで襲ってくるか分かりやすいアクションをするはずだ。

「……違うんだよ。僕が駄目なんだよ」

そして立ち上がって走り去って……えつ、ちよつ、マツ!? 俺も立ち上がってひぎいてええ!? テーブルと椅子で足を挟んだ! 周りを見渡すと何してんのお前? みたいな視線が貫いた。あいつらももれなくダブリなく。

「さっさと追えよ!希!」

あ、一夏だけ口に出してきた。お前に言われると本当にムカつくから止めろ。

「速く行くのだ! しっかり追いかける!」

意外と少女趣味な箒も悪乗りしてきた。

「紳士たるものレディーに恥をかかすべきではありませんわ」

お前もかセシリア。

「ガッツ見せなさい、ガッツ！」

グツと腕を出してきた鈴。お前ら本当にそろいもそろって。

「分かった」

グツと親指を握って走り出す。食堂から出たとたん、ラウラと出会った。不思議な顔をしていたが

「兄よ、シャルロットが……ああ、なるほど。良く分からないが、兄なら大丈夫だ。なぜなら私のお兄ちゃんなのだからな！」

「ラウラマジ天使！」

両腕を腰に当て、胸を張ってそう言ってくれるラウラ。叫んだあと、シャルを追った。

背後の視線がさらに厳しくなったのはご愛敬。

「ふう、追いついた」

「……ゴメンね」

屋上で手すりにもたれかかって黄昏れていたシャル。朝から黄昏れなくてもいいのに。っていうか黄昏れるって言うのか？ 朝からでも。

「それで、どうしたの？ 私とか言ってる」

「……昨日の噂を聞いたよ。希がゲイだとかホモだとか」

「誤解です」

「うん。最初は頭に血が上って、怖くなって、僕の事嫌いになっちゃったのかなとか、色々考えたんだよ？ そしてどこかで無理をさせたのかなって思うと、ぐちゃぐちゃで。でもその後さらに聞いてたら、ゲイじゃなくて女装した男子と今日歩いているのを見た人がいるって聞いてね。おかしいなって思った。今日はずっと一緒だったのにつて」

黙って聞き続ける。

「そしてね、分かったの。それ、僕だって……ショックだよ！ 確かに僕僕言ってるけどね！ 女の子なのに女装した男と間違われるってどんななのさ！ ショックもショックだよ！ ……それで、女の子ら

しくしてみようと思つてまた私とか使つてみたけれど、どうだった？
女の子っぽかった？」

「いつもと同じ」

そう答えるとシャルはあとため息をついて、

「そ、そんなに男の子っぽかったのかな、いつも」

「違う違う。僕僕言つてても、あの最初に打ち明けてくれた時からいつも女の子だなんて思つてたよ。だから、大丈夫」

頭の上に手を乗せてなでる。すると一言、ありがとうと言つてくれた。五分ほどそうした後、

「さ、戻ろう。食事はきっちり食べないと。残したら失礼だ」

「……うん」

「あ、あとさ。そんなに気になるなら、女の子っぽいのを観察してみたら？」

「例えば？」

「んー、やっぱり、ラウラかな」

「なあ、シャルロット。なぜ私は連れ出されようとしているのだ？」

「ゴメン！ 僕を助けると思つて！ お願い！」

「まあ、シャルロットの頼みなら仕方ないが……何をすればいいのだ？」

「普段通りでいいよ。あつ、でもパジャマもこの際調達しないといけないね。他にも日用品をいくつか調達しておこうかな」

「分かった。では出発しよう」

そう言つてラウラは軍服に着替え……軍服？

「えつとラウラ、その軍服はなに？」

「うむ、これは正式には公用の服だが、いかんせん私には私服がない」
(そ、そんな馬鹿な!?) 　つてそうだった！ 思い返してみると私服を着てる姿を見た事がないよ!?! 私服すらないラウラに女の子力で負けてるって僕って何なの!?!)

私服すらないラウラ>>私服をけつこう持つてるシャルロット

なのに女の子力に負けていると思いきみ愕然とするが持ち直す。

「ラウラ、制服でいいよ。ちよつと物騒だからね。日本は平和だから」
「そう言われればそうだな。わかった、制服に着替えよう」

バスに揺られ、途中女子高生グループに褒められながら到着した。

「じゃあ行こうか」

「ん？ 案内図などは見ないでいいのか？」

「希とそこそこ来てるから覚えてる」

なるほどとラウラは頷きながら

「ふむ、ラブラブと言う奴か」

「べつ、べつにそんなんじゃ……」

「本当に？」

「えつと、まあ、ラブラブってほどじゃないけど……手を繋いだりはするよ……」

「うらやましい限りだ。私も嫁とそうしてみたいものだ」

「頑張つてね。それで、最初は服、途中でランチ。そのあとに生活雑貨とか小物を見に行くって方針でいいかな？」

「よくわからん。任せる」

（本当に興味無い……ってわけじゃないと思うけれど。本当に知らないだけで。あつ、そつか！ 希の言つてた通りラウラは本当に女の子力が高いのか！ 女子だとか女子力じゃなくて、本当に女の子なんだ！）

「そうだ、気になった事があつた。どうして兄を誘わなかったのだ？」

「呼ぼうと思つたけれどちよつと友達と用事があるみたいで。それに、女子二人つてのもたまにはいいかなって思い直して」

「なるほど、では行こう」

服屋に入ると、シャルロットがラウラに色々と解説をしたり、何か撮影会まですることになり、ラウラを着せ替え人形になったり、その最中にラウラの女の子力の圧倒的高さを確認したりしながら昼食の時間になった。

「つ、疲れた……おしやれというものがここまで大変だとは思わな

かったぞ」

「僕は楽しかったけど。それに、いい買い物出来たし。……そのまま着て来なかったのはお披露目は一夏にとっておきたかったとか?」

「なっ!? ち、違うー!」

それを見てかわいいなあとか思いながらラウラを観察し続けた。

「というわけでね、いきなりふたり辞めちやったのよ。辞めたっていうか、駆け落ちしたんだけどね。はは……」

あれれ、おかしいなあ、困ってる人に声かけたらアルバイトすることになりそう……とか思いながらも、別に何か用事がある訳ではない。ならいいかと思い、受けることにした。そしたら執事の服を着せられ、ラウラがメイド服を着せられ似合ってる点で精神ダメーじを受け、さらに執事服似合っているとわれさらに追撃で精神ダメーじを受けることとなった。

何せラウラが男装すれば『カッコイイ女の子』、自分が男装すれば『可愛い顔立ちの男の子』、理不尽である。

「よしよし、じゃあこのお店、@クルーズで一日お願いね。あつ、でも一日じゃなくてもいいわよ」

「悪かったな」

「わーってる、仕方ないとしか言えないし。まあ貸し一っつてのは当然だけどな」

「だからお勧めの店教えるって言っただろ?」

俺は弾と歩いていた。誤解が連鎖したため、それで迷惑かけた侘びとしてお勧めの店に行こうぜってことになった。

「それで、どんな店なの?」

「@クルーズって言ってな、メイド&執事喫茶だ」

「……あのさ、俺シャルロットがいてな」

「付き合っただねえんだろ。って言うかどうかどうして付き合っただねえのか不思議だけどな。いつでもOKじゃねえかよ?」

「色々事情があるんですー」

「まあとにかく、たまにはそういうのもいいだろ。あと店長の腕が良くてな、菓子自体が美味いってのもポイントだ。アレはいいもんだ」
「そっか、お前料理屋の息子だもんな、気にするか」

「店つてのは接客だけでも駄目、腕も良くなっちゃいけねえ。両方兼ね備えて一流店だ」

でもメイド&執事喫茶のアルバイトにそんな接客術あるのか？とか思うけど。一流の接客ってやっぱウェイター？みたいなのでアルバイトじゃ無理だと思っただけな。まあいつか。それに、ちよつと興味があるし、世に有名なメイド喫茶、実際には行った事無いんだよな。

「あ、そこだそこ」

「ん……なかなかいい雰囲気だな。結構にぎわってるなあ」
「いつもよりちよい……けっこう多めだな。まあいいだろ」

ドアを開けるとメイドの子がいらつしやいませしてきた。それで席に付く……あれ？ 聞き覚えのある声が響くけれど……あれれー、おかしいな。ちよい、オイ。でももう戻れない。見慣れた銀髪の女の子が

「注文を受けてやる……って兄ではないか!？」

「や、やあ奇遇だね」

「オイ、希。銀髪美少女の妹がいるなんて知らなかったぞ。オイ」
「当然だけど本当の妹じゃないよ。兄って呼ばせている同級生だ」

小声で説明する。

「うらやましね」

ですよね。

「と、とにかく、兄よ。注文は何かいい？何でも受け付けるぞ。それに普段お世話になってる。なんなら私のバイト代から差し引いてもいい」

俺、すげえいい妹をもったよ。

「お前の妹くれ」

「しね……ラウラ、今日のバイト代は一生懸命考えて使いなさい。お

前のオシヤレに使ってもいいし、一夏にプレゼントしてもいい。本国でもらってる金とはまた別の価値……ってわけじゃないけど、まあとにかく記念みたいなもんだ。よく考えて使うべきだ」

「うむ、それでこそ兄だ！ お兄ちゃんだ！ では改めて注文を言ってくれ」

満面の笑顔でメイド服でお兄ちゃん、正直言ってもうこれだけでお腹いっぱいです。

「じゃあ」

二人分の注文をした後、ラウラは機嫌よく向かって行った。直後に「お兄さん、妹さんを僕にください」

「いえ、ここは僕に」

「いやいや、俺に」

と軽く騒ぎになって店員さんたちがくるまで一悶着あった。その後は嫉妬の視線が突き刺さるが、正直心地よいぐらいだった。最高の妹を持った誇りだ。

「正直お前今気持ち悪い」

聞こえないふりをした。

「ご注文ありがとうございます。旦那様、それで、どうしてここにおられるのですか？ なぜ、メイド喫茶におられるのですか？ お菓子を食べるだけならここでもなくても良いと思われませんが、よりによってメイド喫茶であるここを選んだ理由をお答えしてくれると僕とっても嬉しいなつて」

未来から目を必死にそむけてた。でも、未来は絶対にやってくる。そして今、それが来ていた。シャルロットが今、目の前にいる。

「えっと、そのだな。えーっと」

隣の奴のせいですって言えばいいのに、なぜか言い淀んでしまう。何かミスツたらそれで終わりそうな、そんな感覚。周りに目を泳がせると何となくこの席から逃げようとしているように見える。

「それで、希、どうしてなのかな？」

「じつ、実はこの隣の奴がここに連れてくるまで秘密にしております」

て。昨日の騒ぎの原因で、その詫びにらしい」

「ふーん……なら、まあいいかな」

「そうか、昨日の。誤解してすまん。俺は希のダチの五反田弾です。初めまして、よろしく」

「あつ、どうも。僕は希の……友達？ のシャルロット・デユノアです。初めまして、よろしく」

「お、僕って似合ってるな」

「俺よりよっぽど様になってるな」

あつ、それ地雷……って言葉について反応しちゃった。今朝男っぽいのが原因で悩んだのに追い打ちかけちゃったよ、やべえ。

「ありがとうございます。では、お楽しみください」

あ、あれ……大丈夫……？ セーフか。と思ったら店の奥で何か声が聞こえてきた。と思つたら

「水が残り少しのようでしたので、お持ちしました」

メイド服のシャルロットがいた。そして水は明らかに足りている。

「どうでしょうか？ この服」

お水を抱えたまま、くるつと一回転し、スカートがふわつと浮かぶ。視線が釘付けになって、返答が遅れた。

「あつ、えつと、似合ってる。俺としては執事服より、こつちの方がずっと似合ってる」

「ありがとうございます、ご主人様。ではごゆるりと」

去り際にしてやったみたいな顔をしてきた。でも、耳たぶも首筋も赤かった。

「あのよ、お前うらやましね」

「今はその言葉が気持ちいい」

「本当にうらやましね」

周りからもそのような視線が突き刺さつて来た。視線を感じながらケーキを食べる。すると外から何か声が聞こえてきた。声が聞こえてきた方、つまり窓の方を見ると……ドアの外から三人の男が雪崩れ込もうとしているのが見えた。

直後に走った。もったいないと思いつながらケーキが乗ってる皿を

握って。

ドアまで走れば約十歩。落ち着け、この席はドア側にある席の一番離れた隅っこ。こちらからは窓で雪崩れ込もうとしているのが見えたけど、向こうからは俺に気付いてはいない。

一步、二歩、三歩。この時点で敵が三人雪崩れ込んできた。「全員」から続く言葉を叫ぼうとする。

四歩目、ケーキが乗った皿を一番体格のいい男に投げる。ケーキは落ちてしまった。

五歩、更に加速。敵が足音に気付いたのかこちらを振り向く。が、一番体格がいい男……リーダー格っぽい奴の顔面に直撃。

六歩七歩、他二人と視線があう。八歩九歩、銃を手に取ろうとしてミスって敵は殴りの態勢に入る。

十歩。最高速度で敵の一人の顔面、特に顎あたりを殴る。すでにISを使って武装とかは確認済み。最初はショットガン持ちを吹っ飛ばして、次に皿が直撃して混乱してるリーダー格っぽい奴のハンドガンをひったくり……考える。最も手っ取り早いのはこれをぶっ放してこいつらの腕を撃ちぬく事。有罪になるかは分からないけど、ニュースになってもほめたたえられるだろうとは思う。9割の人は俺を擁護してくれるだろう。でも、そういうのは関係ない。この店にはシャルロット達がいる。爆弾を腹に巻いているのは確認済み。……いや、大丈夫。ISを使えばいい。最終手段がある。思い直してハンドガンを暴発の恐れがあるのでトイレに続く通路に投げ捨て、サブマシンガンを構えようとした男を足をひっかけ、胸を押し転ばせた。リーダー格に対しては腕をつかみ、ひねりつつ背後に回ってから首を絞める。リーダーは爆弾を巻いてる。一番注意しないとイケない。絞めつつサブマシンガンの男に勢いよく倒れこむ。ショットガンの奴はまだ起きあがれていない。サブマシンガンの奴もこの状況で使役は不可。警官が突っ込んでくるのが横から見えた。

「もう、馬鹿！」

「兄よ、無謀だ！」

事情聴取に行ったあと、君が噂の I S に乗れる男か！ と歓迎され、この一件でさらに歓迎され、事情聴取と言う名の歓迎会みたいな事された後にマスコミに取材を受けて祭り上げられたあと二人に怒られた。散々である。

「ごめんごめん、二人の休日だったから面倒事にならないように」

事情聴取の時二人とも着いてこようとしたので終わったら連絡すると伝え、今合流している。

「僕たちの方が争い事は得意なんだよ？」

「だからと言って任せたくないって。ラウラの方が女の子っぽいからってラウラだけを着せ替え人形にして満足？」

「うっ……」

「そう言う事。まあ、心配掛けたのは謝る。今回はどうにか出来そうだからしただけ。もし無理だったら協力してもらおうことにするよ」

「無論だ」

「もちろんだよ」

ああ、ほほえましい日々だ。

「あ、ラウラ。今日はどんなことをしてきた？」

「そうだな、まず最初に――」

一日が更けていく。

「そうだった、思い出した。ちょっと聞いてこないと」

ラウラに今日の俺の制圧時の評価を聞き忘れてた。電話より対面のが分かりやすいだろう。コンコンつとノックをする。

「はい、どうぞ〜」

その日、俺は白猫と黒猫を目撃した事を一生忘れない。そして白猫が胡坐の上でごろにゃーんしてくれた事は死んでも忘れないだろう。

「どうしたのだ？」

「少し泊めてくれ」

その日、箒は家から逃げ出した黒猫を保護した（二時間ほど）。

42話 閑話

「せいっー!」

現在筈は一夏と組んで希、シャルロットペアと戦っていた。二人の連携と相性はいつものメンバーの中で最も手堅い。息の合いやすさなら希と一夏がこれを少し上回ってるか? というレベルだが、遠中近距離全て(そこそこ)こなせる希とはいえ、相方が刀一本の脳筋機体もとい玄人機体ではどうしても厳しいものがある。

希とシャルロットのペアの戦術は『相手に合わせて』である。総合力が高い二機だから出来る戦法で、二人で接近戦もいいし遠距離でちまちまもできる。こまめに前衛後衛に切り替えてもいい。これがたまたまなく面倒な組み合わせである。セシリアは遠距離だけだし、ラウラのA I Cが一番効果を発揮するのは近距離。鈴の衝撃砲は中距離向きで、基本武装は近距離だか近中距離機体。筈は機体性能の高さでほぼ全部こなせると言えないこともないが、筈自身が近距離戦闘人間だ。いつものメンバーで総合力が高い二人が組むと本当に厄介なのだ。セシリアと鈴が組んだりする場合は、セシリア後衛、鈴前衛と戦法が固定化してきて対策が取られやすい。

ちなみに今は希が前衛をしつつ、シャルロットが後衛をしている。普段この二人のコンビを相手にする場合は引き打ち上等だが、新装備のテストのために希は前衛をしていた。

「つくー! これまた面倒な!」

「意外と難しいんだぞ!」

バックパック、阿修羅。自由自在に動く四本のサブアームと、取っつけた顔のような武装が二つ。希の頭を守るように配置されていて、顔の舌部分は鞭のようになっている。近距離手数戦に特化したタイプだ。I Sのサポートがあるとはいえ、四本の腕が増え、顔が二つ? 追加されているので扱いは難しい面がある。

「これでっー！」

箒の上からの振り下ろし二本を顔（のような武装）からの鞭二本で迎撃。さらに足蹴

りからの小型ビームサーベルをサブアームで弾く。そしてすぐさま自分の腕の突きとサイドアームの同時攻撃。上体を逸らして回避するが、

「しまった!？」

ワイヤーをやつとのタイミングでひっかける。

ちなみに希はこれを使うのに神経を削っている。別に痛みがどうかではない。相手に対する痛覚という面でみればアサルトライフルやらショットガンのがよっぽど痛みが上だ（それでも絶対防御によりかろく小突かれるレベルである）。だが以前に箒と戦った時、絶好の機会でワイヤーを乱射。その時にミスったからめ方をしていまい、胸を強調したりするあられもない姿にしまった事がある。すぐに立ち直って解除してごめんなさいすればよかったのに、彼はついつい注目してしまい、箒に「ば、馬鹿者！ どこを見ている！」と涙目で言われた直後にチームを組んでいたシャルロットに追い回され、箒と同じチームだった一夏が「今のうちにほどくぞー！」

後は惨劇だった。希がシャルロットに追い回されてる最中に一夏はワイヤーをほどうとし、必然のようにラッキースケベを起こしたら怒ったセシリア、ラウラ、そして特に鈴（自分には出来ないからだろう）が乱入。そこからさらに運が悪く周りの訓練機も巻き込んだ大乱闘に発展。教師が出てきて全員でごめんなさいする羽目に陥った。さらに言えば希は土下座して箒にごめんなさいした上に高級菓子を奢ることになった。さらにアフターサービスで一夏に対する助言を与えたため十分に許された。今でもそのことはタブーだが。

「ほらー！ 一気に行くぞー！」

箒は確かに強かったが、勝負は時の運でもある。今まで一撃離脱戦法を繰り返していたが捕まったことにより接近戦に突入。手数に押され箒は接近戦で初めて希に敗北した。

「つくー！ ふがないい！」

「仕方ないって。箒は確かに強いけど、今まで腕が六本の敵とは戦った事ないだろ？」

顔も二つつけてあるし。箒の機体は至近距離だと射撃武器が無い。刀を振ったりしないし攻撃が発動しないからだ。鈴とかラウラは斬りあいしてる最中でも衝撃砲やらワイヤーやらに注意しないといけないけど（と言うかラウラはAICを）、箒に対してなら各所に仕込まれた小型ビームサーベルに注意するだけでいい。それでも砲撃を混ぜた接近戦で勝てたことは無かったけど。

「それでもふがないと言うのだ。自分の長所で負けるとは」

でもなあ、あのパックは接近戦殺しのためのバックパックなんだけど。ここの所次々とバックパックがロールアウトされてるので色々と使っている所だ。研究所でもかなり盛んになってきていて、AIC、衝撃砲、ビットなどのパックも到着している。特にビットのパックは俺が大好きな機体を模しており、天帝パックと呼ばれてる。

「でも希、さっきのバックパック機動性とかが悪いね」

シャルロットが欠点を指摘してくる。まあねと頷きながら

「サイドアームとか意外と重い上にブースターを追加してるわけじゃ

ないし。銃とかも一応使えるけど、それぐらいならバックパック外して装甲とか武装ガン積みした方がいいしねえ」

サイドアームは蛇型のアームに六本の指を付けたもので、剣とかを振り回すのなら自在に動いて翻弄しやすいけど銃を撃つのにには関節が多すぎて向いていないタイプだ。せっかくの豊富な武装も俺の両手にしか展開出来ないようなもんだし。体にくつつけるタイプの爆発装甲とか射出ワイヤーとかはいけるけど。

「次のテストはなんだ？」

一夏がポカリを持って聞いてくる。

「あー、つぎは天帝パックだな」

「どうして英語じゃないんだ？」

「まだ微妙に揉めてるようで。名前かぶりまでさせたら訴えられるかもって開発者の人たちが言ってた」

「お前、フルブでもその機体使ってたよな」

「当然」

フウツツハツハハハ!! などの高笑いや、正義と信じ、分からぬと(ry)から続く数々の名言を生み出した破滅主義者。そして最終話とその前の話だけでの圧倒的存在感。種死の時の救いとはなんだのセリフもまじカツコイイ。例えば人と人が粒子を通じて対話出来るような世界でも、彼は真っ直ぐ滅びの道へ突き進みそうな所がマジカツコイイ。

あ、もし敵として会ったなら、お前の事はどうでもいいから素直に殺される！それが世界のためだ！ って思うね。一緒に巻き込まれて死ぬ趣味はない。ブレないところがいいんであってね。

「フルブって何？」

シャルが当然の疑問を持つ。フルブと言うのはガンナムエクストリームバーサスフルブーストと呼ばれるゲームの略称だ。ちなみに家庭用しかやった事はない。アーケードはなんか敷居が高そう。良くわからないけど一回戦うのに100円かかる(らしい)のも中学生には厳しいものに思えた。今? 金なら一日中アーケードやれるけど?

「日本で最も有名なロボアニメ、ガンナムの対戦ゲーム。結構面白いよ」

「へえー」

ちなみに、この操作方法でISのゲームを作ろうとしたらしいが、ISは基本的に飛んでるので違う操作方法になった。シャルは自身の情報端末を操作して

「へえー、面白そうだね」

「うちにあるし、今度来るか?」

少し緊張しながら言うと、ぱあつと笑顔になって

「うん! 行く!」

「へえー、じゃあ俺も……ジョークジョーク」

無言で睨み付けると両手を上げた。こいつだって少しは空気が読める。

「にしても、しばらくさわってないなあ、ゲーム」

「お前意外と戦闘狂だもんな。このごろISばっかだよな」

「以外とは思わないが」

一夏の俺に対しての発言に箒が追い打ちをかける。

「の、希は体を動かすことが好きなだけだよ！」

シャルがかばってくれ……かばってるのだろうか。

「自覚はある。何だかんだで命がけの時も楽しんでたし」

死ぬ寸前になったら馬鹿な事するんじゃないやなかったって後悔するのかもしれないけど。今まで命がかかってた場面はそこそこあったけど、どれも確かな高揚感があった。

「と、ともかく！希は優しいからいいの！」

何がいいのかよくわからないけどまあいいや。

「よし、じゃあ次の奴テストするか」

アリーナで慣らしていたセシリアに通信をかける。

「おーい、行けるか？」

「ええ、行けますわ」

「うし」

ISを展開。バックパックを天帝バック——11基のドラグーンもといビットを搭載したバック——に切り替える。小型ビームライフルと四発の小型ミサイルを搭載したビットが8、大型ビームライフルと8発の小型ミサイルを内蔵したビットが3。セシリアのよりビット自体の性能は上……だけどBT機能はついていない。と言うより、BT機能を削除したからこそセシリアのビットより性能は上と言える。BT兵器はもう作れてるけど、ビットに内蔵できるほど小型

化はできていない。小型ミサイルとかはBT機能を付けるまでのありあわせらしい。と言うかテストか。

「うし、行くぞ」

「慣らしはしなくていいのですか？」

「向こうで散々練習した。もっとも好きなパックの一つ」

「思う存分戦えますわね」

「ああ、楽しくなりそうだ」

結果は俺の勝ちだった。それも僅差ではなく、10回やったら8、9回勝ちそうならい。

「箒さんの気持ちが変わりますわ……」

何せIS学園で4か月……その前の期間も含めてブルーティアーズを7カ月操作してるのに、一カ月ばかりの俺に負けたからだろう。性能自体はこっちのが上とは言え。第三世代初期（しかも力を発揮しきれていない）と第四世代に片足突っ込めそうな機体（誰にでも扱いやすい機体）の差が出たと言える。

「うーん、すっげえ馴染む」

さっきのサイドアームもそうだったけど、ビットの操作もすごく上達した。明らかに違いと分かったのは福音の前と後ろだ。福音の前時もビットのみとかサイドアームのみで操作テストをしたことがある。それに比べ性能も上がってるのは分かる。でもそれを抜きにして自分のそれらを扱う力が強まっているのが分かる。

「ビットやサイドアームなどの人間にはない物を扱うのは難しいのですが……希さんはそうしたのが得意なようですね」

「うん……」

でも、何か良くない気がする。……なんでだろうな、強くなってるのに。自分が何かに片足を踏み出してるような……。このごろよく思うようになってきた。

「ほら、セシリア。まあさっきのは仕方ないって」

「ありがとうございます」

一夏からセシリアにスポドリ差しの差し入れ。ちなみに、さっきの戦いの勝ち要因として。

まずビットの性能差。俺のとセシリアのは小型のビットのビームの威力は同じ。ミサイルはこっちのが優位。しかも戻ってこれば補給できる。そして速度も機動性も飛んでいられる時間もこっちのが優位。大型ビットは言わずもがな有利。そして人工知能などのサポートのおかげで止まらずに射撃が可能。直接操作するビットを二、三個にしてそれ以外を機械に任せする方法だ。セシリアは善戦したと間違いなく言える。でも『モビルスーツの性能の差が決定的（ry）』と言った人もNTとは言え初心者が乗ったばかりのガンナムに敗走してたし、現実でも一世代の戦闘機の差はかなりの溝がある。

向こうのビットの二倍以上あり、足を止めずに撃て、得意の狙撃も半分封じられた状況は相性が悪すぎた。こっちは100%とは言えないでもビットの性能を60%〜70%は引き出していた。逆に、こう言ってはなんだがセシリアはBT兵器を使えていない。全体の性能の10%〜20%使えているかどうかなのだ。しようがなかったのだ。

狙撃をしようとしたらビームどころかミサイルまでも飛んでくるし、ビットで同時多数を迎撃しようにも足が止まる。足が止まったらこっちの攻撃が当たる。と言うかビットの性能が負けている。なら接近戦しようとしたら武装の面で論外だし（セシリアはナイフしか持っていない）逃げようとするれば動いて射撃する羽目になるのでビット

の命中率が格段に落ちる。なら多数のビットを抱えている俺の機体にレーザーを乱射させて燃料切れを狙えるかと言えば、それを防ぐための小型ミサイルだ。レーザーに比べ威力が弱いけれど誘導するし、弾を補充する事も出来る。

一番最初、セシリアと決闘した時。あれをさらに酷くしたような試合だった。俺一人からの重火力でなく、全方位からの火力投射。

「正直、今まで見た中で最も卑劣なバックパックだと思ったぞ」
「そう思う」

こうした武器がロボット物のラスボスあたりに搭載されてる理由が良くわかった。相手に絶望感を与えるのに最適なのだ。その性能が。あその他の理由としてお約束の面があるだろうけど。さらに言えば見栄えもあるのかな。

「さて、ほかにもあるけど……さすがに疲れたな。休憩するか」

同時に空中投影型ディスプレイを展開。さっきまで使ってた武装の感想を書いていく。うちの博士がマジ有能なのでレポート提出とかはほんとに少ない。反応速度がついてこれるかとかそうした感覚を伝えればいいと言ってくれてる。

「適当に見えて意外とマメだよな、ほんと」

「きつちりやるべき事やつとくから意外な場所で適当にやれるんだよ」

全部適当だったただのダメ人間だろうが。やるべき事をやりつつ他の場所を適当にするから変人と呼ばれるのだ。

「はあー、希の武装見てると本国との距離の問題が意外とあるって思うね。僕も色々試したいなあ」

「希さんは週一以上のペースで調整を施してますものね。武装も次々と更新されてますし……。私もこのごろ二丁拳銃なども考えていますが、まずBT兵器を出来るようにしないといけませんし」

「私のもだな。機体性能は凄いなと思うが、武装がずっと同じだ。姉さんは極めろと言いたいのだろうか」

「楽しいけれどさすがに多すぎて困ってる。っていうかお前ら俺の事言えないだろ。お前らも戦うことを楽しんでるじゃん」

当然と言えば当然か。国家代表を担おうとする（かもしれない）奴らが戦闘嫌いの訳ない。いくら絶対防衛があるとはいえ実弾やらを雨あられのように降らしているのだ。結構怖いと思う。好きと思わなければ上達しないと思う。

「狙い撃つ瞬間、とても高揚しますわ」

なるほどねえ。

「この子、ラファールリヴァイヴがね、空を飛ぶのが好き……。そんな風を感じるんだ。そして、僕自身もパイルバンカー当てる瞬間がとてもね」

ニコツて微笑みながら言われても……。前半だけならいい感じなのに。後半で前半部分が台無し……。いや、そこもいい！

「私もそうだな。昔は違ったが、今はこうした武の道もいいものだと思う」

「俺はスポーツの感覚だな。楽しいと思うぞ」

美少女に囲まれて年中いちやついてりや楽しいだろうよ、クソが。嘘です、俺が一夏の立場なら胃潰瘍で倒れます。まあとにかく、このように戦闘を楽しむ心もとい向上心溢れる人が多い。国家代表の集まりなんてこんなもんだ。

「とまあ確かに自分でも戦闘狂って思うけど、お前たちも似たようなもんだから。な？」

いやーな視線を向けられた。うっは、ご褒美……Mじゃ無かったわ俺。ちなみにシヤルもちよつとジト目つてのがねえ。

「それで、いつ行ってもいいの？」

「あー……明日とか、どうかな？」

「あ、明日!! ……うん、大丈夫！」

こうして日程が決まった。

43話 家庭

「……………」

彼女は家の前に立っていた。心臓をばくばく鼓動させながら表札を見つめる。

『清水』と書いてあった。

（大丈夫、大丈夫。準備は完璧っ！ まだ朝の10時、昼ご飯の食材も買ってきてる、夕ご飯の食材は持ってきてない。でも、それは後から一緒に買いに行くための布石！ 着替えも念のために準備してるし。その、下着も。何があってもいける！）

シミュレーションは完璧だった。完璧も完璧。いつものIS学園の状況とも違う。シミュレーションでは邪魔者は誰も入って来ない。と言うか実家に入ってくる邪魔者はどんなのがいるのだという話だ。

30秒ほどで玄関が開いた。

「いらっしやい。どうぞ」

あまり見かけない私服姿。長ズボンに半袖の気楽な、いかにも希らしい恰好であった。

「お、お邪魔します」

木造ではない、今時流行りのブロックっぽい素材が周りに埋め込まれた家の二階建て。車などが置いてある場所には何も無かった。玄関から居間に移動し、ソファアームに座った。

「はい、麦茶」

「ありがとう。……部屋、結構綺麗だね」

「昨日から掃除したし。それに、俺の部屋の家具以外の荷物は全部持ってってるから」

希は昨日家に来るかトシャルロットに聞いたあと、夕方ぐらいに実家に帰っている。掃除できる時間は短かった。

だが彼の両親が引越すときに色々と持って行ったので物が少なくなっている。だから掃除機などを使うだけで綺麗に片付けることができた。

「えっと、それで朝ごはんはどうしたの？」

「昨日買って置いたおにぎりで済ませた」

「もう、体にあまりよくないよ？」

「一回ぐらい大丈夫だって。それよりその袋……ああ、ありがとう。お願いする」

「うん、任せて！」

中身も見ずに推察した希。わりかしいつも通りである。

「夕飯は？ その前に帰る？」

「夕飯も、食べていきたいかな……なんて」

「あー、うん。大丈夫。でも夜には帰る予定だけど」

（相変わらず隙を見せないなあ、希は）

大方予想通りだったのでそこまで落胆はしなかった。

（でも大丈夫、焦らないで地道に行けば大丈夫……でも早いほうがやっぱりいいなって）

一夏と違う点、そう、ライバルがいないのだ。そして詰みもない。そう、これは詰めるまでずっと続けられる詰め将棋と一緒なのだ。

「えっと、まだお昼ご飯まで余裕があるね。前言ってたゲームをしてみたいなって」

「うし、じゃあ上来て。俺の部屋にあるから」

(の、希の部屋!?! 少し探索してみたいなあ)

少しだけ危ない思考であるが彼女は全く気にしなかった。

「よしー!」

「あー、負けちゃったー」

当然だ。いくら代表候補生とかでハイスペックとはいえ、今まで殆どゲームをしたことがない人間に負けるなどありえない。事実コスト1000のガンイージャーをアシスト機体無しで使ってコスト2500の衝動に勝った……そろそろ危ないかなー、開始30分でこれか。シャルは今までろくにゲームしたことないのに。つて言うか衝動は上級者向け機体
なんだけどなあ。

「希って強いね」

「20人いたら1番目ぐらいにはね」

やりこんでる人には到底じゃないけど勝てない。上級者とか相手しててどうなってんだよ!?! と思うことがしばしばある。

「やっぱり強い人は強いのか?」

「やっぱ現実世界と同様才能もあるけど、数十人の中で一番のレベルを目指すなら努力だけでいける。強い人は何か違う。壁を感じる」

「どこの世界でも上は凄いね」

と言いつつ30分経過。アシストをフルで使ってやつと一回死ん

だら一回殺すぐらいの互角の戦いになった。さらに30分するとこつちが1回落ちたら向こうの体力が半分というぐらい。さらに30分でほぼ互角になった。

「さすがに慣れるよー!」

そしてソード衝動に突きをくらい倒された。

「あー、負けた……つと、こんな時間か」

「あつ、ほんとだ! 12時過ぎてる! 今すぐ作るね。……あ、そうだ。希の昨日のパックに全く似てなかったけど、違う機体なの?」

「うん、違う。こつちの機体はコスト1000で一番使いやすい機体で、昨日言ってたのとは違う」

「なるほど、後からまたやろうね」

「うん、分かった。じゃあ何してればいい?」

基本全部シャルが作ってしまう。手伝おうとしても「僕の場所なの!」と言って拒否される。

「適当にしているよ。久しぶりの家なんですよ? 色々しておきたいことあると思うけど」

「あー、うん。そうする」

ひとまずキッチンに移動して、使っているものの説明をしようとして、全部使っているんだっと思った思いなおした。大雑把な位置を教えた後、それぞれの部屋を回った。なつかしさを思わせる小物がいくつか残ってたけど、多くは消えていた。随分昔のように思うけど、実際には5ヶ月ぐらい前の事だ。でも、これも随分昔の事の範疇に入るのだろうか。もうすぐ半年が過ぎようとしている。あの日から。

もう、なのか? まだ、なのか? そんなのは判断できないけど、今の日々には満足している。だからそれでいいのかなって思った。

でも、見つけた。俺の部屋に戻りふと気付いた。昔懐かしい漫画を読みながら、これもIS学園に持っていかないとか思っていたら俺のアルバム写真が映った。家の中を見回ってきててもアルバムとかは全部なかった。でも俺の部屋の物だけは何一つ無くなってなかったから、このアルバムも残ってたのだろう。ペラペラとめくろうとする。だがその時、

「希、出来たよ」

下から声が聞こえた。いつの間にか一時間ほどは経っていた。漫画読んでときの時間の速さって異常に思わない？ どう考えてもおかしい。あと二倍はあつていいはずんだけど。体感的には。

「分かったー」

せつかく来てもらったんだ。アルバムを持って下に降りていった。テーブルの上を見ると、今日は和洋折衷のようでご飯、ポトフ、豚の生姜焼き、サラダだった。俺が基本色々食いたいスタンスなのでそれに合わせてくれる。そして、それでいて栄養バランスもとれていると本当に圧倒的感謝。

「ありがとう」

「どういたしまして」

いつも通りの言葉、言葉のキャッチボール。でもその当たり前が重要なんだって思う。ちゃんと感謝して、その言葉にどういたしましてを言い返してくれる。日常ってのは積み重ねだから。

「それで、それは何？」

「これ？ アルバム。一冊だけ俺の部屋にあったから。どうせ来てもらったんだし、どうせならって持ってきた」

「本当!? 嬉しいな、ありがとうね」

「食事が終わったら一緒に見よう」

「うん、じゃあいただきます」

「いただきます」

30分ほどで彼らは食事を終えた。希は皿洗いまでさせるつもりは無かったが皿洗いもやると言い張ったので二人で皿洗いになった。そのときに恒例の精神攻撃（新婚さんみたいだね）を撃たれてそれをいなすなど、日常を謳歌していた。そして全てが終わった後、

「うわあ、可愛いね」

「そうか？ こんなもんだろ」

「ううん」

ペラペラとアルバムをめくりつつ、時々シャルロットが声をあげる。

（懐かしいな。にしても、シャルに対して家族についての事は声かけにくいし）

母は死別、父とは和解したようだがそれでも進んで話すような事じゃない。だが希から何か感じ取ったのか、

「あのね、僕もアルバムはあるんだよ？ 12歳ぐらいまでのしかないけど。あつ、もちろんフランスの実家に置いてあるんだ」

「それは、ぜひ見てみたいな」

素直な感想を呟いた。シャルロットは少し笑って

「嬉しいな。今度持ってこれるなら持ってこようかな」

「いや、いい。将来、いつか行くから。その時に見せて欲しい」

「そ、それは嬉しいな。僕の生まれた場所を、見て欲しいし」

微妙に沈黙が続いた後、またアルバムをめくる音が静かに響きだした。そして最後の写真まで見終わった。

「すごく満足出来たよ」

「そうか、なら良かった」

希は天井を見上げた。その眼は力なく揺れていた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、うん」

その言葉もシャルロットに一閃された。

「嘘。もしかして……家族の事？」

「……良く分かったね」

「希のね、心が叫んだような気がしたんだ」

「そう、か」

「家族について何を悩んでるの？ 弱みを見せたくないとか言っちゃ駄目だよ？」

先回りされると、希ははーっとため息をついて、

「長いこと会ってないのが寂しい……ってのは確かに少しあると思う。でもそうじゃないんだ。箒が前言った。姉さんを恨んでると思うって言った。それがなければ今頃一夏とか思ってただろうな。どっちにしろ無理だろうけど」

「何気なく酷い事言ってるね」

シャルロットが苦笑した。希はそれをはっと笑い飛ばしながら

「多分事実。まあともかく……俺がISに乗れさえしなければ、こんな事にはならなかった。俺は非日常を望んだし、その結果の今にも満足してる。これ以上の満足はないってぐらいに。でも父さんや母さんはどうだったかなんて分からなかった。昔からの友人とゆったりやったり、会社で働いたり。そんな日常を望んでたかもしれない」

彼はISに乗った次の日にはバラバラになったのだ。ろくに話さえせずに別れたのだ。

「多分、良いことだと思ってくれてると思う。でも、それでもなんか不安だなんて。会えるけど会うことが不安で……」

それからしばらく沈黙が続いた。だが突然にシャルロットが立ち上がった。

「なら会いに行こうよ！ 明日にでも!!」

「えっ!?!」

「希だけじゃない。僕も付いてく。ううん、僕だけじゃない。皆も誘って！ 希はこんなにいっぱい立派な友達が出来て、皆が希に助けられてきたこと！ 希がすごく立派だって事！ そうすれば良い事だって言ってくれるよ！ 何なら僕が希に救われた事を言ってみる!! そうすれば希のご両親だって良くやった、頑張ったって褒めてくれるよ！ だから!!」

シャルロットは手を伸ばした。

「……っはあ、滅茶苦茶な理論。でも、いいな、それ」

そして希は握り返した。

その日はそのまま帰ることになった。そして学園でこの事を皆に伝えると全員が参加すると言ってくれた。電話で政府を通じて連絡を取り、面会できる事となった。

44話 希の家族

「希と会うのは久しぶりね」

「ああ、だな」

噂をすれば何とやら、二人の男女が会話していると、かなり広いマンションのチャイムが鳴った。

「今開けるわ」

女性が扉を開くと、しばらく見てはいない……だが見慣れた顔の間、希がいた。

「えっと、ただいま？ 久しぶり」

「久しぶり。……お客さんがいっぱいいるわね、中に入って」

お邪魔しますだの何だの言いながらぞろぞろ引き連れて合計7人。元々いた希の両親を含めて実に9人の大所帯になった。

「お久しぶりです」

「お久しぶり」

「あら、一夏くんに鈴ちゃん。鈴ちゃんは本当に久しぶり」

居間で全員が座れるわけもなく、希と一夏は立つことになった。そして希がゴホンと喉をならしたあと、

「えっと、母さん、父さん、紹介したい人がいます」

「おおっ!? 皆さん美人だから期待だな」

「本当にそうね!」

「この銀髪の子が!」

「子が!?!」

期待値爆上げである。半年会っていない息子が可愛い恋人を連れてきたのだから――

「俺の妹だ!!」

「よ、よろしくお願いする! 兄の妹、ラウラ・ボーデヴィツヒだ!!」

場が固まった。希の両親は口をあんぐりあけた後、

「あ、ありのまま起こった事を話す。半年会ってない息子が恋人をつれてきたと思ったたら銀髪美少女の妹を連れてきた。何を言ってるかわからないと思うが本当にマジ分かん。ちよつと待て。え?」

さり気なさを全く感じさせずにネタを口走る父親。一堂はあつ、希のアニメ好きの原因はこの人なのかなと感じた。

「苦労しすぎたの？ たまには休んだほうがいいのよ？」

「ちつがーう！ 義理の妹みたいなものだ！ 文句なしにめちやくちや可愛いからいいだろうが!？」

文句なしに滅茶苦茶可愛ければ義理の妹にしているという訳ではない。当然のことだが。

そこからは滅茶苦茶だった。シャルロットが怒って希がすいませんをし、全員の自己紹介が始まって終わり、大体の場を察した希の父が、一夏君は相変わらずもてるねえと冷やかした瞬間、鈴、セシリア、ラウラに伝播。混乱したところで希が鎮めた。

「さて、それよりみなさんは昼食は食べたかしら？」

全員が首を振る。そうするにつこり微笑んで

「じゃあ昼食にしましょうか。材料が足りないから買ってこないと」

「いえー！ 俺が買ってきます。ついでに作りますよ。希と積もる話もあるでしょうし。シャルロットは残るよな？」

「えっ？」

ならばと箒、鈴、セシリア、ラウラが続いた。それぞれ健闘を祈るなどグッドラックなどと言い残して。残ったのは希とシャルロット、そして希の両親だけだ。皆が出て行ったあと、希の母親が何ともなさげに切り出した。

「それで、学校はどう？」

「あー、順調。成績は学内だと最悪レベルだけど、モチベーションがあるから勉強もしてるし。IS自体もとても楽しいから充実してる。まあ、頭に関しては自分の限界を感じるけどね」

「友人関係は？」

「いいよ。全員良い奴ばかり。一夏は相変わらず自分で種をまいては収穫せずにそのままにして俺が後片付け……じゃなくて整備をする羽目になってるけど。」

箒は入って初日に会った。一番最初から一夏に対して分かりやすく、声をかけて友人関係になった。一夏のファースト幼馴染だと。

剣道がめっちゃ強くてさ。今でも剣術指南をしてもらってる。

セシリアも初日。英国貴族として誇り持ってる。一番最初は女尊男卑、イギリス最強と絵に書いたようなお嬢様でさ。決闘になつて一夏は惜しい所で負けてたな。俺は勝ったけど。で、その性格つてのは重荷を背負い続けた仮面でさ。一夏に負けた後は年相応の乙女だし。苦手な英語を教えてくれる。狙撃とかの射撃全般も教えてくれる。

鈴は相変わらず。入学一か月後ぐらいにやってきて。今でも馬鹿やったりする。飯も食わせてもらえるし。近、中距離の立ち回りを教えてくれる」

「そう……じゃあさっきの銀髪の子……ラウラちゃんは？」

かなり真剣に尋ねる。妹と紹介されたのだ、それは当然気になる。「一番最初お堅い真面目……軍人だったけど、一夏がまたやらかしてね。その前にいろいろアドバイスしてたから、その後慕われてこなくなった。満足してるよ？ 可愛いし。そして込み入った話になると……試験管ベイビーって奴で親がない。結構面倒見てるけど、こつちも軍隊関連の事で教えてもらってるからおあいこかな」

さすがにこの話には驚いたようで、二人が難しい顔をした。

「なるほど。じゃあ最後に……あなたは、どうなの？」

シャルロットに視線が集まった。希が話そうとしたが、睨まれて口を閉じた。シャルロットはオロオロしながら、でも覚悟を決めて

「わ、私は、その……えっと……希さんに色々と救われて、その……友人以上、恋人未満と言うのでしょうか……毎日ご飯を作ったりすり、ご飯を食べさせあつたりする関係です」

顔を真っ赤にして俯きながら語った。それに希が顔を赤くしながら立ち上がった

「色々しゃべりすぎー」

「黙りなさい希」

静かに母親が言い切った。

「はい、すみません」

すぐ座った。また視線がシャルロットに集まる。

「恋人、じゃないの？」

「はっ、はいい！ 告白したけどまだ返してくれてないです！」

「何もそこまで?!」

「希、詳しく話せ」

最初以外あまり語らなかつた父親がしゃべった。

「えつと……一夏が馬鹿やらかして中断してしまいました……」

「言い訳するな」

一刀両断だつた。母親がため息をついた。

「あのね、希。あんたはいい子に育ててくれたと思う。わがままもあまり言わないし、お金もあまりかからない。家事の手伝いは良くするし、勉強もほどほど頑張ってる。部活もよ。

友人関係はいい人としか付き合っていないようだし、アニメとか見ながらだけどい倫理観を持つてると思うわ。困ってる人はなるべく助けつつも深入りしすぎない。近所の人にも良く挨拶してた。かなりいい子だと確信してる。でもね、育て方を間違えたのを今認めるわ……なんでこんなかわいい子に告白されて返事してないの!? 馬鹿なの! 何様のつもり!? 一夏君とは違うのよ!? 一夏君と長い事一緒にいるからって勘違いしてるの!?!」

「はい、本当にすいません」

さらに頭が低くなる。

「しかも毎日ご飯を作ってもらってるなんて! しかも食べさせあうなんて! 今時恋人でもそんなの無いわよ!?! はー、もう」

「本当にすいません」

さらにうなだれる希を見て、シャルロットはクスツと笑った。希はうなだれたまま

「どうした?」

「ううん……希にもこんな面があつたんだって思つて。いつも希はかつこいと思う。ISを使つてるときや、皆を必死になだめたり相談したり。身を挺して皆の前で立ち塞がってくれたこともあつたし、そのときはすごく凛々しかったよ。いつも飄々としてて、誰にもへりくだつてなかつたのに。でもこんな頭が上がらない面もあるんだなつて。こんな面が見れるつて、嬉しいなつて」

「……さつさと告白しないの？ 希」

母親の呟きに希は呼吸を乱した。そして真剣な眼で

「ブツ!? こ、こっちはこっちで色々あんの！ はい、やめやめ。……さて、そろそろこっちから聞く。最近の生活はどう？ ……前に比べて不便になった？」

齒に衣着せぬ直球勝負。今回希が来た本題。それに対して父親が平然と

「ああ、そうだな。以前のように友人ともそう簡単には会えないし、外に出て黒服が警護に来る。ちよくちよく来る政府の要人と会うのも面倒だ。見知らぬ親族も増えたし、宗教どころか政治活動の勧誘電話が来るしな」

希の父親が落ち着いて言う。希はその顔をじつくり見つめた。その言葉にシャルロットは反応した。勢い良く立ち上がって

「希は僕を救ってくれました！ さつきの皆も希に助けられています!! 希は大切な人です!! 希がいなかったら誰かが死んでたかもしれないんです!! だから――」

「落ち着きなさい。不便にはなったが、まあ仕事にも行かないでいいし。金もかなりもらえてる。黒服もいっぱいいるが将来的には少なくなっていくよだし、友人と会える回数も増えてる。要人もこのごろ来てない。見知らぬ親族は増えたが、以前からの親戚とは良好な関係だ。勧誘電話も知れ渡ったのかあまり来てはいない。それに、お前の活躍は良く見てる。みっともない姿をさらしてるようだったら叱るつもりだったが……まあ、良くやっているとと思うぞ。何だかんだで息子が活躍してるのを見れば親は嬉しいもんだ。俺たちの事は気にするな。上手い事やってるようだからその調子で励め。こっちもこっちで上手い事やるさ。」

とは言え、誰かが死んでたかもしれない、か。前のタッグトーナメントの決勝戦を見ていた。間違いなく危険な方のトラブルだったな。あれ以外にもあったのかもしれない。ちらほら噂には聞いてるからな。でもな、希、お前なら上手くやっていけるはずだ。そうした風に育てたつもりだ」

「……うん、アニメとかのお陰で色々助かったのもあるよ。これからも頑張るさ」

その場の空気が弛緩した。ただシャルロットは顔を真っ赤にした。早とちりして勝手に自爆してしまったので顔を上げれなかった。(そ、そんなー!? こ、これじゃあ受けが悪い!? ご両親に会うのは相手を値踏みする重要なイベントだって書いてあったし! こ、このままじゃ駄目!? ど、どうしよう!?)

さらに自問自答で負のスパイラルに入りそうになるシャルロット。そこへ希の母親が

「それで、孫にはいつぐらいに会えるのかしら?」

「ブフウツ!」

二人が一斉にむせた。ゴホツゴホツと鳴らした後、

「まだ俺たち15だっての!」

「じゃあ3年後? 楽しみにしてるわ」

「あつ、えつと、僕はそれもいいとか、何なら今すぐにも」

彼女の闇は深い。とは言え希は給料を大量にもらってるし、シャルロット自身も同様に財産を考えれば充分余裕だが。

「シャルウ!? 流石に世間体とか他にも色々!!」

そこからは二人が弄くられつつ雑談の模様になった。そこには確かな緩さと温かさがあった。

三十分もすると買い物組が帰宅した。そして料理のお披露目会が始まった。セシリアもラウラもほかに負けじと腕を伸ばしていたので、奇蹟のカーニバルの開幕にはならなかった。ちよつとまだ経験値の足りなさを感じさせつつも、ちゃんとした料理の調理と食事が始まる……前に席の並びでまたいざこざがあったがじゃんけんで決着をつけていた。食事は騒がしすぎずも賑やかに進み、父親と母親がそれぞれに希に対しての心象を聞いてまわった。そして買ってきていたトランプで対戦したり、まさに年頃の少年少女として過ごした。そのま

ま時は流れて夕方になった。

「それじゃ、また」

「今度はいつ帰ってくる予定？」

「んー、冬休みかな。それと、今度からはちよくちよく電話をかけるよ」

「そうか。まあ、さっき言ったとおりだ。根を詰めすぎず、適當すぎず。いい所でやっておけ」

「分かってる。じゃ、また」

別れの言葉を口に出し、そのままとなりそうだったが、母親が

「シャルロットちゃん」

「は、はい。何でしょう？」

「希を頼むわね。普段は全体的にバランスが取れてるけど、いざ夢中になるとその反動で周りの事が眼に入らなくなるから。その時はあなたが支えてあげてね」

「はっ、はい！ もちろんです!!」

「そしてラウラちゃん」

「何だろうか？」

母親は歩いて近づくと、ぎゅっと抱きしめた。

「なっ!!? なっ!!?」

「あなたは、希の妹なのよね？ 娘と思うことにするわ。そしていつか本当に、心のそこからそう思えるようになったら、それは嬉しいと思うわ。あなたも希を励ましてあげて。そうすれば頑張るだろうか」

「わっ、分かった。……その、母上よ」

「ふふ、早速ね。お母さんよ」

「お、お母さん？」

「そう、じゃあ行ってらっしゃい」

「行ってきます」

そうして希たちは帰っていった。

「それでは、いつものように会議を始めます」

帰ってきた日の夜、シャルロットはいつものごとく………というほどではないが、たまに集めてこうしたことをする。

「えっと、今日は皆どうだったと思う？」

「まー、昔から顔を知ってた私からしたら予想通り過ぎるわ。希も馬鹿ね。そんな事で不安になってたなんて。二人ともとっても出来た人よ？ 何でこういつたときに私に頼らないのかしら………希のばーか！」

「何かずれてるぞ、鈴。まあともかくいい事だな」

「私たちにはもう作れない光景ですから……。あ、箒さんは違いましたね、申し訳ありません」

「私も違うぞ。その、お母さんと呼べる相手が出来たのだ」

何だかんだで友人の親と会うのはテンションが不安定になるものだ。

「って違うよ!? 確かにそうしたものも重要だけど!! 僕の希の両親に対する受けはどう!? 皆から見えて!!」

そう言うと、全員がはあーつと溜息をついた。

「あのだな、アレで好意的ではないなんてこと無いだろう」

「かなり好意的だったと思いますけど。何せ最後に息子を宜しくお願います発言をしていたのですから」

「あそこまで嬉しそうなおばさん初めて見たわよ」

「私もそう思ったぞ」

「だ、だよね。良かったー、勘違いじゃないよね」

ふー、と溜息をつくシャルロット。それに対して

「はー、いいわよね。家族から援護がもらえてるなんて」

「私たちは織斑先生から弟は渡さん宣言なのに」

「しかもよりによって教官からだ」

「理不尽というレベルではないぞ。どうなっているのだ。ブラコンにもほどがありすぎる」

「確かにね。このままブラコンをこじらせてたら行き遅れちゃうよね」

このごろシャルロットには希の一言余分に何かを言う癖がついてきている。朱が交えば赤くなる。希もシャルロットの癖がついてたりする。

「ほー、誰がブラコンだ？　そしてデュノア、流石の私も少し本気になったぞ」

5人の悲鳴が響き渡った。いつの間にかドアが開いており、そこからズカズカと入ってきた。そう、織斑千冬その人だった。

「うるさいぞ、静かにせんか」

「えつとですね、ブラコンとは私の友人の――」

「もういい。それより、希はどうなった？」

一瞬しーんとなった。そして気付いたようにシャルロットが

「えつと、希の心配をしているんですか？」

「……まあ、そんな所だ。アイツには一夏が世話になってるからな」

そして床に座り込んだ。良く見たら片手にビールの缶がある。

「それに、私自身も借りがある。希の親御さんにも少しな。さらに言えば、教師として生徒の精神状態を良好に保つのは義務みたいなものだ。まあ、ろくに協力してやれなかったが」

ぶはあとさらに飲み干した。トロンとした表情で天井を見上げ、

「奴はほかつといっても大体どうにかする。自分に力が足りなければ他の奴に助けを求めるし、足りていない奴がいれば助けて輪を広げる。今回のようにな。たまに自棄になるときがあるが。とにかく、中々借りを返す事が出来ない。大人として少々悔しいな」

誰も口を挟めなかった。千冬は続けて全員を見渡し、

「だからまあ、お前たちがほどほど支えてやってくれ。アイツがお前たちを支えてるように、な」

「二」「当然（だ・ですわ・よ・です・です）」「二」

「ふつ……さあ、今日はもう遅い。解散しろ。そしてやはり気に食わん、一発殴る」

シャルロットの悲鳴が響いた。そうして千冬は解散を命じた。同時に、外で走り去っていく足音を二人分聞いた。

シャルロットの部屋に用事があり向かおうとした最中、ちょうど聞こえた会話。

「一夏」

「何だ？」

「俺さ、この学園に来て本当に良かったと思ってる。何もかも」「俺もだっつーの」

45話 一夏の成長

「あーもう!!」

最初っから俺が叫んでるのは理由がある。先日、勇気を出してシャルを花火デートに誘った。泊りがけでどっか行こうかとか色々考えたけど、考えすぎて頭がふつとーしそうだよおになったの諦めて花火デートで埋め合わせにしてもらった。そんなもって無事では無いけど行ってきました。浴衣姿も新鮮でもとも良く、さすがにこっちもそれは予想してたので普段着でなくそれに合わせたのを着て行った。

そんで気分上場で子供の頃に例の石を拾った神社に行ったらやけに胸のでかい巫女がいると思ったら箒だった。何言ってるか(ry)。いや、篠ノ之神社ってことは知ってたけど帰ってるとは思わなんだ。事前に聞いておけば……まっ、それでもここにしただろうけど。正直そこまで問題にならないし。

まあここまではいい。実家の手伝いとか普通にあるよね。新鮮な姿でもとも似合ってた。いつもなら似合ってるなと軽口を叩いたとこだけの場合が場合なのでそんなことせず安全祈願のお守りを二つ買って……恋愛祈願じゃないだっ？俺たちにはいらねえ(キリッ)。そう思ってた時期がありました。

でも一夏がやってきた。やっぱりお守りが必要だった。ダース単位で必要だ。なし崩しでダブルデートになるかと思っただが案外一夏が気を利かせてまたなと言ってきた。やっぱりお守りはいらなかった。屋台をくるくる回って楽しんだ。弓矢でシャルが無双して、射的でも無双して、お化け屋敷であまり怖がってないのに抱きついてきて、金魚すくいでもまた無双して(持って帰ったのは三匹だけ)。日本の夏を楽しんでくれてすごく良かった。

と思ったら一夏に同行者が増えていた。蘭である。上機嫌の蘭と不機嫌の箒。そして上機嫌の蘭がいきなり

「なんでこんな状況になるまで教えてくれなかったんですか!? ってすいません! お邪魔しました!」

とか言われた。ちなみにこんな状況ってのは一夏の周りの女性関

係だ。当然だけど。

で、ともかくまた別れたらあの女子組に合流。尋問されて一夏と箒を売って

「ほどほどにしておけよ」

と言っておいた。奴らを売り飛ばしてしまつて、心の中で悪いな、だが謝らないとだけ思った。でもあいつら暴れないかなと気にかかつて微妙に集中出来なかつた。ふあつく。

何はともあれそろそろ花火の打ち上げが始まる時間。今日こそはと思い、神社裏の林に向かう。石を拾つたポイントで、隠れた名所。背の高い針葉樹が集まつてできた林の裏に一角だけが天窓を開けたように開いている。昔から俺は探索心が高く、それが役立ったのだ。そして手を引つ張つて林を抜けた時、

『あつ』

一夏と箒に鉢合わせ。俺と箒はどうにかこの状況から立て直せないか、まだ一分あるならどうにか思つていたら

「あーっ、いい場所ねこー！ ……あつ」

「私もそう思いますわ！ ……あつ」

「なるほど、ここはいい。おっ、兄ではない……か……？」

もうどうにでもなくれ。やけになつて屋台を買い漁り、食いまくつて青春を過ぎましたまる

追記すると一夏が普通に楽しそうに食い、俺と箒は互いに気まずげに、鈴たちは俺とシャルに気まずげにしてたまる

ついでに言えばやっぱり恋愛祈願のお守りを買つとくべきだと思ひましたダース単位で。

「ありえんやろ」

振り返つたらあまりの事態のひどさに関西弁が出てきた。一夏め、そろそろ滅殺を考えるべきか？

とまあそんな事を考えていたら一夏に久しぶりに家で遊ぼうぜと誘われた。ストレスを発散するためにゲームで滅殺することを心に

決めた。訓練を適当な所で繰り上げてシャルと朝食を食べた後にさりげなく出発。たまには男だけつてのもいいもんだと思ってるね。

と言うわけで学園からバスにのって出発。九時半ぐらいには一夏の家に到着した。

「よつす、ここは久しぶりだな」

「お、来たな。でも悪い。今からちよつと買い物行ってくる」

「んー、お前も久しぶりの家だろ？ まだやることあるなら俺が代わりに行って来るぞ」

一夏は少し悩んだようだが

「分かった、ありがとな」

「おけー、何を買ってこればいい？」

欲しいものをISでメモし、出発。そんでもって近場なのですぐに帰宅。家の鍵が空いてたので勝手に入る。どうせ俺のために開けていたんだろうし。入ったらちゃんと閉める。

「買ってきたぞ」

「お帰り、レシートは置いていてくれ」

「端金だ。今度なんか奢ってくれればそれでいい」

「分かった。さて、整理終わったー」

居間でソファーにもたれてくつろぐ。離れたところに一夏がお茶を持ってきて座る。

「それで、何するよ？」

出来ればゲームで滅殺したいのだけれど。味の薄い麦茶を飲みながら問いかける。俺とは対照的に一夏は深刻そうに

「ゲームでもするかといいたいけど、実は相談があるんだ」

「鈴たちのことか？」

「お察しの通りでございます」

まあ、それ以外に悩む所ないもんな、こいつには。女泣かしの二つ名は伊達じゃない。

「すごく失礼なこと考えてないか？」

「いつもの気のせいだ。それで何が悩みなんだ？」

「実は、その……このごろ距離感と言うか、気持ちをどうしたらいいか

なって。ほら、俺たちは男同士だけどあいつらは女で。仲良くしてきたいけどあいつらだつて彼氏とか出来て、離れ離れになつてくと思
う」

真面目に滅殺した方がいいやもしれぬ。もしくは彼女らに滅殺さ
れるやもしれぬ。

「それで？」

「それってさ、いい事だよな？ 大切な人が出来て、そいつと楽しく
やっていく。あいつらにはいいことだと思っただけ……その、何と
なく嫌だなつて思つたんだ」

俺は今、感動の波に飲み込まれそうだった。

「へ、へえ……どんな風？」

「何ていうか、確かにいつも色々変な事に巻き込まれたりするけど、で
もそれもこのごろ心地よくなつてさ。こうやっていつまでもやって
いきたいなとか。他の誰でもない俺が……あーもう、良く分からん
!!」

微妙なところすな。でもこのまま行けば彼女らの未来も明るい
と考えるでござ候。いかん、テンションが上がりすぎて変になつてま
すぞ。

「ふーん、そういうのは時間が解決してくれるのを祈るしかない……
と言いたいけど、内蔵出血大サービスだ」

「内蔵は止めろ。で？」

「まず全く持って近づかないようにする。断ち切るわけだ。当然だけ
どお勧めしない。そこであえて逆を行く!! あいつらともつと親し
くなればいい」

「つまりどういうことだつてばよ？」

誰もいないからこそできる爆弾発言をぶち込む。

「あいつらと恋人になりたいとか考えないのか？ 前も鈴について聞
いたよな？」

「……分かんねえ。確かにこうやって過ごしていけたらいいと思うけ
ど、でも恋人になるだとか結婚するだとか……どうしたらいいんだよ
……」

「俺だって知るかよグレカス、と言いたいところだが今回は内蔵出血大サービスと言ったからな、もうちょいつけてやる。とつても簡単だ」

一夏は期待の眼差しで俺を見る。

「素直になれ。好きなら好き、口に出すのは難しいけどな。俺がその例だ。この地球上で実に九割以上の人間が結婚して子供を育ててく。お前もいつか奥さんができるだろう。千冬さんと結婚するわけにはいかんのだからさ。そして、その時にはあいつらの誰かの可能性が高い」

いかん、ちよつとしゃべりすぎか？

「あいつらは俺のことそう思っていないっての」

「だからカスなのです。前言った通り悪く思ってるわけ無いっての。ともかく、そうした可能性もあるんだ。これから先まだ二年と半年は一緒に過ごす事になる。もしかしたらさらにあるかもしれない。だから、素直になるときには素直になれ。辛い時は辛いと言えればいいし、楽しい時は素直に笑う。心の底で思ったことを、恥ずかしがらずってのは無理だから……少しでも伝えてみる。

鈴に抱きつかれたなら男と女だから恥ずかしいって言え。

ラウラに布団に潜り込まれたなら女の子がそんなことしちやダメだとか。

箒には昔と違って女性らしくなったとか。

セシリアには気品があつて大人の女性らしいとか。

そうすれば上手くいくさ、あいつらとも。本音を見せる、これに勝るコミュニケーション手段はこの世界にはない」

「そう……かな」

こいつも段々と変わってきてる、いい兆候だ。さて、最後は軽く冗談で締めればいい。

「なせばなる、なさねばならぬ、何事も。なしてもならぬのなら後は野となれ山となれ」

「すつげえぶん投げたなオイ!! ……ありがとな、気が楽になったよ」
「別にいいさ、相談を受けるだけならただだからな」

「時間は使うだろ？」

「別にいいさ」

ちょうど終わった時、インターホンが鳴った。一夏が向かうのを視界の端に収めつつ、麦茶を飲み干した。先ほどより少しぬるい。

「おーい、希！ セシリアが来たぞ！」

お茶吹きかけたぞクソが。

46話 一夏の家

あの後、俺退出した方がいいかなと思ってセシリアと密談しようとしたらインターホンがまた鳴った。そんなもって、ああ、これ流れ読めたと感じた。鈴もラウラも箒も登場してきたのもう後は野となれだったので仲間はずれも可哀想と思い、シャルを呼んだ。入ってきたらジト眼でにらまれました。こっそり抜け出したのが少々お気に召さなかったようだ。ただし、ジト眼で睨んでくるのはシャル的にはあまり怒ってない部類に入る。一番分かりやすい表現だと「もう、ばか」と言ったところか。

一番怖いのが笑顔である。そのあたりからISで襲ってくる可能性が出てくる。

「しかし、来るなら来るで誰か一人くらい事前に連絡くれよ」

それぞれが今朝暇になっただとか言い訳しまくるが嘘である。あと鈴、はしたない言葉をしゃべってはいけません。

そこそこ早い昼飯時、ざる蕎麦をすすりつつ（ネギたっぷりノリたっぷりわさび少々天カスもあったから買ってきた、金が無尽蔵に見えるってのはいいね）、こいつらを観察する。相変わらずおしやれ度が高い。おしやれ度最低は間違いなく俺。次点で一夏。その次におしやれをまだ一生懸命勉強中のラウラ（それでも天使だけど、何着ても天使だけど）。後は全員同じぐらいのおしやれ度か。でもぶっちゃけこいつら何着ても似合うけどな。

ラウラが驚かせたかったのだとしゃべってうはっ、天使と思いました。あっいつもか。

「ところでこれからどうする？　こんなにいるならどっか行くか？」

女子勢が眼を合わせる。そんなのいかんわな。わざわざ一夏がいるこのタイミングを狙ってきたのだし。シャルは正直どっちでもよさげだったけど、他のメンツに合わせてる。

「じゃあ茶を入れるか」

「あいよ」

すつと立ってから、あっと思いなおしたけど今更すぎて諦めた。い

かん、一夏の自宅つてのがあっていつもの癖が出てしまった。俺パーベキキューがあるなら一生懸命焼くタイプです。大人しく他の女子に譲るべきだった。女子たちから視線を逸らしつつ、次のお片づけイベントは注意しようと思いなおす。いや、皿洗い誰か頼めるかと振っっちゃうか。

「誰か皿洗いやってくれるか？」

素早い反応をした鈴と箒。家庭力の差が出たな。一夏は客人だからとか止めさせようとしたけど俺がなあなあして問題なし。

熱茶(緑茶)をすすりながら血を流す自体にはさすまいと努力する。一夏の家にあるゲームはいかん。ちなみになんであるかって？ 千冬さんが誕生日だとかクリスマスの時に買ってあげたものだ。何で知ってるか？ 俺が相談を受けたからさ。俺の家で最も楽しそうだったゲームを教えたらそれを買ってた。金には余裕があっただろうし。一夏も遠慮してたけど嬉しそうだった。

ともかく、この家のゲームは四人までしか出来ない。この場にいるのは七人。俺とシャルを省いても一人省く事になる。ので却下。どうするかと思ったら鈴が色々用意してくれてくれたようだ。隙の無いゲームの布陣を見るとこれで一日中遊び倒すつもりだったなと思っただ。ついでに言えばその後ムフフも狙ってただろうけど。罰ゲームとかを組み込むとかね。フツ、所詮程度が知れる。

さらに言うツイスターを見たときは二人じゃどうしようもないだろうと思った。

「おー、そーいや鈴はこういうの好きだったな」

「そりやそうよ。勝てるもん」

「俺には負けるだろ」

ボードゲームは大体俺が強い。と言うかゲーム全般強い。何だかんだで一般的な中学生をやってきたのだ。ゲームの経験なら負けはしない。たとえやった事ないゲームでもこれまでの経験から比較的飲み込みも早いし。この超人ども相手でもそうそう遅れをとるつもりはない。

「うっさいわね、アンタは所々反則なのよ。人の考えでも読んでる

のって時があるし」
「それはテメエラもだろうが。とにかく、全員でやれそうなのでいくか」

大富豪。ただの大富豪ではつまらないと思い、ありとあらゆる特殊ルールを採用。ジョーカー以外全てに特殊効果を付与、いちいち特殊ルールを定めた紙を覗き込む必要があったが大盛り上がり。一応考えてこれなんだ。七人だと一人頭七、八枚なのでカード差がもろに出てくる。だからそれぞれ強みを持たせたようと考えてこれなのだ。

「俺のターン、5スキップ!」

「俺のターンがあ!?!」

「さらに9リバー!」

「お前酷すぎだろ!」

「9を二枚、カード復活よ! みんなパスね。7がこれで二枚、七渡しで二枚パス! 上がりよ!」

「そんなに押し付けるな!」

次、人生ゲーム。一夏があまりにも不幸。俺は財産はそこそただけど子沢山だった。いつも通りシャルから飛んで来る精神攻撃をいなす。ちなみにセシリアがぶつちぎりの大富豪だった。コレクションもたくさん。何? リアルでも金持ちならゲームでも金持ちになれるの? こいつ金運A+あるだろ。

「ひ、ひどすぎる」

「まっ、元気出しなさい。本当の人生だったらその……アタシも支えてあげるから」

「聞き捨てならんぞ」

「私が最強の大富豪でしてよ! イギリス貴族として当然ですわ!」
「僕、子供はもつと多いほうがいいなあ」

次、バルバロッサ。俺は初めて見るゲーム。シャルが本気で作った馬をお土産にされた。俺は良く当ててる一方で外されまくると言う状

況を経験。一生懸命作ってるのに……鈴と一夏に相変わらずド下手だと言われた。中学の技術工作は得意だったけど、彫像とかの芸術は苦手だったからなあ。クラスでよく晒された記憶がある。ちなみにラウラが（ry。

「希、それは何？」

「猫のつもりだったんだけどな……」

「普通に四本脚にすりゃいいでしょうが。何で招き猫に近い形なのよ」

「反則ギリギリ狙いのつもりだった」

「その結果がこれだろう……にしても、こうしたことは苦手だったのだな」

「ところでラウラ、それは？ ピラミッド？」

「竪穴式住居だ」

そしていつの間にか午後四時。

「なんだ、賑やかだと思っただらお前たちか……ん？ 希か」

「こんにちは、千冬さん。ちなみに最初に俺がいて後からこいつらが来ました」

一応自分自身を擁護しとく。空気読めないわけじゃないと。

「千冬姉、おかえり」

「ああ、ただいま」

すぐさま駆け寄りカバンとかを受け取る様は相変わらず執事のようにうだ。文化祭はこいつにタキシード着せて執事喫茶で決定だな。あ、いかん。下手したら俺に飛び火する。却下だばっかもくん。

さて、それより千冬さんがどうでるか。女子たちに気遣って出ていくかも？ こいつらを追い出すなんてことはまずしないはず。千冬さんはどうしようもないブラコンだけど弟に手を出そうとする変態痴女ではないのだ。

待てよ、姉弟で結婚できる国があるなら移住を勧めるのも手か……？

「希、私に何か言いたいことはあるか？」

「ありません」

「この世に言い残したことは？」

痛む頭を手で押さえつつ、千冬さんが出て行ったのを横目で見た。その際に女子は泊まるなど宣言をなされて。つまりお泊まりじゃなければいいんですね分かります。あつ、睨まないでください。

その後、不機嫌な女子たちがゼリーをねだる。今日はコーヒーズリー。数は六つなので俺がシャルとわけっこして周りが砂糖吐きたそうな表情をした。そして夜までいるならと料理を作ることになった。

ふむ、ちようどいいか。箒、鈴、ラウラ、セシリア。あと一人なら加われるだろう。女子たちが張り切って私が作ると言ってるなか、「ちようどいい、俺もやっとなりで合格を出せたから参加しよう」

その瞬間、波紋が走った。吸血鬼を退治するためのアレではない。そして、走ったのはシャルロットまでもが含まれる。女子五人が一斉に集まり、

(の、希さんが参戦!？ 料理下手はありえないにしても一体どんな料理が……)

(そういえばあたし、あいつが料理を作ってるの見たことないわ。家庭科で調理実習はやったけど同じ班じゃなかったし。聞いたことはあるけど、それはセシリアの時のだし。シャルロット、何か知ってる?)

(正直に言う一回も食べたことないし、作ってるのを見た事もないよ)

(これまた何とも想像しづらい。皆は腕前をどう考える？ 私は何だかんだで良さげだと思おうが)

(意外と普通なんじゃない?)

(いやいや、兄だぞ。多分料理も上手いはずだ)

(ですわね、私も上手だと思いますわ。いつもたくさんの種類の料理を食べてますし、知識がある分有利では?)

(……僕より上手だったらどうしよう)

(さすがにそれはないんじゃない？ 前に希が言ってたわ。料理の腕は総合だと今の所、悔しい事に一夏が一番で次にシャルロットと私、そして箒。続いてセシリア、ラウラだって。セシリアも上達したんだし、同じぐらいじゃない？)

(まあ……そんな所ですわね)

「いきなりなんだお前ら。最初の頃のセシリアみたいにはならんから安心しろ」

「その事はお忘れくださいと何度もおっしゃったはずですよ！ それで、何を作るのですか？」

「んー……ハンバーグかな。寝かす時間はないけどまあいいだろう。じゃあ買い物行こうぜ」

さつさと出かける希を横に、一堂は顔を見合わせた。

「待つだけってのは新鮮だなあ。結構腹減るのな」

「そうだね、僕も待つのは無かったから新鮮だよ」

いつも作り手側の二人が感想を言う。キッチンから仲良さげな声と微妙に不安になったりする音が聞こえるが、十分許容範囲だ。さらに言えば嗅覚的にも不安が無い。前回希の家で食べてもいるし、その点でも安心だ。

「アンタ、結構手馴れてるじゃない。どうしたのよ？」

「パワーレベリング」

「パワーレベリング？ どういう意味なのだ？」

「簡単に言うと、自分で技術を上げるんじゃないやなくて周りに引き上げてもらう方法。詳しくは後から話すよ。ラウラ、醤油が多いよ。鈴はジャガイモが小さい。それと荒削りで余分が多いといいお嫁さんになれんぞ」

「むっ、本当だ。助かる」

「うっ、うっさいわね！ ベっ、別に一夏の嫁になりたいわけじゃないし！」

「希さん、このハッシュドビーフをどう思われます？」

「見た目は完璧じゃないけど……いい匂いだと思うよ。ちなみにアドバイスは出来ん、作ったことないし」

「でも、良かったです」

そんなこんなで一夏は時間の良さと悪さを感じることなく、シャルロットと希についてのことだったり学園の事だったりISについてだったりの雑談をし、時間が緩やかに流れた。そしてテーブルに五人の料理が並ぶ。

「えっと……希、お前料理得意だっけ？」

「どうだろ、最近始めたばかりだし。まあ、同じ時間練習した中なら平均よりはけっこう上手い方だと思うけど」

皆に配られたのはまずご飯。そしてそれにセシリアのハツシユドビーフ。かけるかは個人の自由のため分割である。鈴の肉じゃが。ラウラのから揚げ、箒のカレイの煮付け、希のハンバーグ。どれもこれも危険地帯はない。どれも大丈夫なものばかりが一夏の心を安らげた。

「じゃ、皆で食べるか」

「コップと飲み物は準備したぞ」

「こうやってお互いに作った料理を食べると言うのは、不思議な気分だな。しかし、悪くない」

「これがな、楽しい、嬉しいって気分だ」

「……そうか。いいものだ」

「さ、食べよう。席について」

全員が席に着いた所で一夏がいただきますと言う。それに全員が続く。そして全員が最初にハンバーグに手を付けた。そして身体が固まる。だが心は動いた。

「（（う、美味しい!!））」

「ま、負けた……この僕が……いつも料理してるこの僕が……。そ、そんな……まさか……」

「ちよっと、どういうことよ!?! いつの間にこんなに上手く作れるようになったのよ!?!」

「そ、そんな……まさか……」

「まさかここまでとは、予想していなかった」

「美味しいぞ!!」

「ちよつと落ち着けよ」

あまりにももの状況に希がたじろいだ。

「普段何してたのよ!？」

「あー、企業の方でな。社員食堂で主婦の皆さんにアドバイスをもらったんだ。さらに企業に頼んで食堂で修業した。実験ハンバーグ一個三十円で焼き加減を極めたり。その後感想をもらったりした。あと企業のコネと俺の人気&知名度で有名料理店のハンバーグのレシピとかも。とにかく、それで自分にできる最高に近いハンバーグを練り上げて、ISにインプット。主婦の皆様からももらった細かいポイントも完璧にサポートしてくれる料理レシピ。後はサポートを使いつつ、ハンバーグを作ってそれを覚えるだけ。サポートなしで大丈夫までに。まだハンバーグしか作れないけど」

全員が絶句した。

「うーん、確かに美味しく出来るけど、やっぱり他の人の食べる方が好きだな。うん、気持ちがかもつてる気がする」

「じゃないわよ! 反則よ! 反則!」

「全力投球しすぎではないでしょうか……」

「負けてられない……もつと! もつと本気で!」

「兄は本当にすごいのだな」

「私も精進せねば」

「驚いたぜ、希。すげーな!」

こうしてにぎやかに夜は更けていった。